

υ π η ρ χ ε ω 【完】

【トラロック・ファミリア】

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中層と呼ばれる二階層域を攻略中の『ベル・クラネル』一行は突如として現れた謎の存在と対峙する事になってしまった。

様々な冒険を経てきた彼らにとって未知の事態はいつだって驚かせてくれる。

壁から生まれ落ちた『それ』は——かつて迷宮都市オラリオに破滅を齎した災厄であった。

目次

07	武人の交渉	349
<i>iurisdicatio</i>		
06	ダンジョンに育児費用を稼ぎに	317
妊婦が向かうのは間違っているだろうか		
<i>ortus</i>		
05	英雄再誕	211
04	崩落	138
03	福音	81
02	魂の平静	41
01	アステル	1
<i>silentium</i>		
08	正義の使徒	380
09	鮮血のアリーゼ	416
10	贖罪	450
11	魔王の旋律	515
<i>ambitio</i>		
12	慈母揺籃	590
13	妖精女王の撃墜	682
14	暴喰と夜の女神	734
15	継承	774
16	懺悔	825
<i>superesse</i>		
17	女神の黄金	880
18	剣乙女の惨華	965

1
9
劍
姫
と
氷
姫

1033

s i l e n t i u m

01 アステル

冒険者となり、様々な出会いと戦いを経て第二級冒険者^{レベル4}となった白髪^{はくはつ}の少年『ベル・クラネル』はギルドが課した『強制任務^{ミッシェン}』を受けてダンジョン探索に向かう事になった。拒否権が無い任務とはいえ「ファミリア」にとつては絶対に不可能と思わせるようなものではなく、彼らはやる気に満ち溢れていた。

ベルが加入している「ヘステイア・ファミリア」の団員は彼を含めてサポーターの小人族^{バルウム}『リリルカ・アーデ』、鍛冶師^{スミス}の『ヴェルフ・クロツゾ』、剣士の『ヤマト・命^{みこと}』、妖術師の『サンジヨウノ・春姫^{はるひめ}』の五人からなる。

一番の実力者が団長のベルである。

様々な困難に見舞われたが彼以外は意外と「経験値^{エクセリア}」が溜まらず、レベルは2^ツ以下。これから向かう中層では足を引っ張る可能性がある。

「リリは魔法が使えて戦闘も出来ますけど……。春姫さんはモンスターを倒していかな」と駄目だと思えます」

「……すみません」

狐人^{ルナール}の少女春姫が金色の体毛に覆われた獣耳を力なく伏せて謝る。

彼女の魔法は仲間の力を底上げするものだが、それしかできない。

『力^{アビリティ}』が低くて上層域のモンスターすらまともに倒せないし、なにより臆病である。

これまでも何度か挑戦しているものの戦果は芳しくなかった。

戦闘に特化しているのはヴェルフと命^{みこと}の二人。リリルカも戦えないわけではないが

サポートらしく仲間のサポートが精々だ。

パーティーの中で群を抜いているのがベルだった。ほぼ彼一人だけでいいんじゃないか、と言わしめるほど強い冒険者になっていた。なつてしまった、が正しいかもしれない。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

数週間後、ベル達の特訓による増強と他の「ファミリア」からの協力者を募り、ダンジョン探索に赴く頃、誰も訪れない階層で異変が生じた。

『異端児^{ゼノス}』と呼ばれる人類と意思疎通のできる存在とベル達の邂逅から日が浅いとはいえ、ダンジョンは新たな異常事態^{イレギュラー}を産み落とす。

これはダンジョンの意志なのか、それとも全く予定外の出来事なのか。

神すらも予想しえない『何か』が起きた事だけは確かである。

それは唐突に壁面を破った。だが、自動修復速度が高いところだったためか、突き出した脚を残して亀裂が塞がる。

薄暗い空間で分かりにくいのが這い出ようともがく存在が居る事だけは確かだ。

再度、足掻いて壁を壊すもののやはり修復速度に負けてしまう。

(……思いのほか力が出ない。……何とも間拔けな恰好であろうか)

それは意志を持つて思考した。

壁に本体が埋まつたまま身動きが取れない事に嘆く。

唐突の覚醒によつて慌てたものの時間と共に冷静さを取り戻す。そして、少しずつ理解する。

死したはずの存在が生きている事に。いや、それは本当に正しいのかと疑問を抱く。

(……単なる気絶、なわけではない。胸の痛みは軽微……。おそらく壁の中に居る。……脚だけ外に出ている。ふむ、空間があるのは確かだ。……それがどの階層なのか、というのが問題なのだが……)

自分の記憶が確かなら二〇階層より下の筈だ。それより上である場合は常識外の出来事が起きたことを意味する。ただでさえ信じられないが――

それと――今まで苦しかった胸の痛みが軽微なのは完治したから。または抑制された、か。

まさかな、とそれは思う。

(仮死状態が妥当か。……ならば病状が悪化してきてもおかしくない。……だが、やは

り妙だ。身体から力を抜けば苦しかった状態が今はとても楽なものになっている。
……身動きが取れない事を除けば何の問題も無いくらいに)

岩肌に擦られる地肌は痛い。痛覚の有無など、当たり前のことを確認していく。

胸への圧迫こそあれ修復による苦しみは止まっていた。おそらく身体に備わる『耐久力』が勝っているからだと思われる。

もし、深層域であれば圧死していてもおかしくない。——試したことが無いから正しいかは不明だが。

(……予想外に辛いものだな。おまけに……、身体にあまり力が入らない)

足だけ動かせても意味が無い。

それは自らの能力を確かめる為に休み休み考察しながら身じろぎした。

培った『スキル』が健在であること。基礎的な「ステイタス」はおそらく壊滅的。

——一番の問題は自身の肉体の状況だ。

どういうわけか体温が低い気がする。極端に低いというわけではないけれど、どうなっているのかが分からない。

——知りたくない気持ちが強いのかもしれない。



今以上に押し潰される事が無いと分かったうえで一旦、休息した。

空腹を感じるところから何も食べなくていい状態ではない事を知る。

岩肌を強引に削り、痛みに耐えつつ通路を広げる。——以前であればそれほど時間のかからない作業が今では一時間以上も費やされた。

相当な弱体化が起きたとみて間違いない。

(……あの小娘共に【エクセリア経験値】を奪われたか。……ならば、その結果をどうしようとは思わぬ。……きつと、それが最適解だ)

自身を取り巻く空間を広げ、塞がる前になんとか這い出ると視界いっぱいになり光りが溢れた。

それは眩しさに耐えかねて目を瞑る。そして——それが災いしたのか、急に力が抜けてしまい、浮遊感と共に壁から滑り落ちてしまった。

起き抜けの重労働だ。それと覚醒して間もない。

自由落下に任せるまま。それからあちこちぶつかる痛み。

だが、それでもそれはそれほど苦痛を感じなかった。

肉体が意外と強固なお陰だ。それでも不快感までは消せない。

(……なんと無様。『才禍の怪物』と言われた私がダンジョン内で転がっている)

縋りたくとも身体が思うように動いてくれない。

呆れつつも数分後にはどこかの平地で止まったようだ。

身体のあちこちが痛い。その痛みで生きている事を自覚する。

——ああ、私は死に損なつたのだな。

それはそう思つた。しかし、納得はまだ出来なかつた。

本当の意味で死に損なつたのか、それとも何らかの方法で生き延びてしまつたのか。あるいはどちらでもない何か——

痛む身体に鞭打つて閉じていた目蓋を開ける。

周りの匂いから水が近くにある事は分かつていた。凡^{おおよ}その見当で現在地は二〇階層以下で間違いない。

想定よりも深くは落ちなかつたようだ。それから漸^{ようや}くそれは自分の手を見た。

鱗がびっしりと張り付いた青白い腕が見える。とても自分のものではない。次いで、足も——

衣服らしいものは身に着けておらず、全裸のままダンジョン内に佇^{たたず}んでいる現状を理解するのに時間はかからなかつた。

「……………」

自分の身に起こつたことを即座に理解し、受け入れられる冒険者は多くない。いや、居ないと断言できるほど。

だが、それでも目の前の事実が変えられない事をそれはすぐに理解した。

そうか、と小さく呟く。

(……代償としては真つ当な部類なのか。それともダンジョンの気紛れなのか) かつて人間ヒューマンであったそれは現在、モンスターと化していることを理解し自覚し呆れ果てた。

乾いた嗤わらい声を漏らした後、不意に腹が鳴った。

喫緊の問題ではないとしても腹が空くのは生物的で納得できる。食べ物は見つからないが水はたくさんある。

当面は現状の理解から。周りに冒険者の姿も無い。

(……モンスターといっても何のモンスターだ？ 鱗から察するに『ヴァイヴル竜女』か『ドラゴニユート竜人』のどちらだろうか。……額に宝石は無し。尻尾在り)

完全にモンスターだな、と嘆息する。

元々の肉体が変質したのか、全く新しい肉体として復活したのか。

『スキル』があるようだから変質を選びたいが感覚的というか勘からは新造されたものと見るのが正解のような気がする。

一度肉体が減び、新たなモンスターに魂が宿った。そう考えれば自然と納得できる。

己の手を見るとモンスター特有の攻撃的に伸びた爪が見える。それは足も同様だ。

(これでは靴も履けないな)

目指すは地上——と言いたるところだが、まずは一八階層。安全階層セーフティポイントと呼ばれる『迷宮の楽園』アンダーリゾートへ。

それと身体の調子の確認だ。

以前の肉体ならば理解しやすいが、どう考えても異質である。それなのに魔法を使用することが出来た。

まさかと思いつつ「ステイタス」も引き継がれているのであれば自分はまさに危険なモンスターそのものだ。

（果たしてそんなことがあり得るのか。……声、発声に問題はない。……多少、喉の調子が悪いくらいだ。……後はどの程度『能力値』アビリティがあるのか、か……）

『力』を見るなら手っ取り早くモンスターと戦えばいい。しかし、そのモンスターが近くに居ない。

あるのは豊富なダンジョンくらいだ。

それと——

戦友ともいうべき存在もどこかで生まれ直している可能性がある。希望的観測にすぎないかもしれないが、あり得ないと言い切れない。

特にもう片方の存在の最期を見ていないので未練次第では騒動の発端となってしまう。だが、なったからとて止める気はそれには無い。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

モンスターと戦わず、壁などを殴りながらダンジョンを移動する事になった一匹のモンスター。

ここに冒険者が居れば希少^{レア}モンスターを発見したとして襲い掛かってくるところだ。当然、迎え撃つ気であるけれど。

普段と違った進行にそれは驚く。大きな驚きではなかったが——未知の感覚という意味では小さくないものであった。

（『魔力』も充分。生前の「ステイタス」と遜色が無いらしい。こんな階層で私の様なモンスターと出くわす冒険者が居たら間違ひなく運が悪い。……いや、逆か……）

怪物だの化け物と呼ばれていた存在が本物になっただけだ。

どういう意図があつて蘇ることが出来たのか、それは未だに分からない。

分かる事は前に進める、というだけ。何らかの意志が流れ込んできたわけではない。

「……全く、ダンジョンというものはいつの時代も我々を驚かせてくれる」

それから上層階を目指しながら探索を始めた。

普段であればモンスターの猛攻があるものだが今のところ何の障害も発生していない。

全く居ないわけではなく、見かける全てが大人しい。まるで——敵だと認識されてい

ないかのようだ。

ダンジョン内に現れるモンスターは確かに冒険者に襲いかかる習性がある。だからといって仲間意識があるわけではない。

種族が違えば互いに襲い合い、知恵を付けたモンスターは魔石を喰らって『強化種』に至る。下層に居るモンスターならば、より顕著であると言える。

「……何にしても」

(情報を集めねば)

迷宮都市オラリオが自分の死後にどうなったのか。冒険者の質やどれだけの時間が経過したのか。

生き残っている『闇派閥』^{イヴイルス}についても同様だ。彼らがどうなろうと知った事ではない

が今も存在し、オラリオを苦しめているとしても今の自分には関係ない。

彼ら闇派閥に後れを取るようであれば失望が増すだけ。

——もし、今も抗う気持ちを絶やさない冒険者が居るならば——

仮に居たとしてもだからどうしたというのだ、とそれは思う。

既に敗退した過去の遺物、亡霊にすぎない自分が今更——

(ならばもう一度立ち塞がるか? ……勝者に道を譲ったのだ。もう少し様子を見よ

う、か……。何だか……。過去の柵しがらみに縋りつく弱者になった気分だ)

そうだ。自分は負けて敗者となった。

『才禍の怪物』がただの負け犬だ。実に滑稽で、実に愉快ではないか。それは歩きながら思う。

未知の発見は実に素晴らしい、と。



上層を目指しながら歩き続けているが、その歩みはともゆつくりしていた。急ぐ理由が無いのとモンスターとなった自分の様子を把握したり考察する事に時間を割いていたので。

興味が無いわけではなかった。それゆえにその速度を緩める結果となった。

途中、身体を洗ったりしながら髪の毛を確認する。

生前に近い灰色の長いもの。角と翼は無く、いったいどんなモンスターとなったのか記憶を探るが出てこない。それだけレアモンスターということか、と。

「観察すれば大抵のことが出来る、と豪語していたが……。さすがにモンスターの真似事は一筋縄ではいかんな」

口から炎を吐けるわけでもなく、針を飛ばす事も出来ず。

思えば人より強い以外は他の冒険者と大差が無いのではないか、と思い始めた。

このダンジョンの中にあって初めて分かる無力感とでもいうのか。

(本當の化け物なら私など歯牙にもかけぬ。……それでも立ち向かわなければならぬのが世知辛い冒険者稼業というもの)

ため息とも嘆息ともつかぬ息を吐きつつ歩き続けた。

途中で出くわすモンスターの種類から階層を特定し、冒険者の死体や新手の気配などを探る。

ずっと全裸でいるので服が欲しくなった。贅沢は言わないがせめて外套の一つでも、と。

いざ探すととなると中々見つからない。見えるのは大瀑布と細かな迷路。それと周りを照らす鉱物類。

『水の迷都』を抜けて『グレート・フォール』に入り、もうすぐ『大樹の迷宮』へと差し掛かる。

『下層』から『中層』へ。

煩わしい戦闘をせずに踏破するのは初めてではないかと思っていたが完全に無し、とはいかないようだと思ひ知る。

上に進むごとにモンスターが目立つ。おそらく冒険者が近くに居る。

ダンジョンの深層域を攻略する冒険者は非常に限られてくる。浅ければ浅いほど人が多くなるのは必然と言えた。

その知識にある一般的な冒険者も『大樹の迷宮』辺りが一つの分岐点となっていた。

（……音から察するに『巨 大 蜂』との戦闘か。この辺りは昆虫型が多いから数で押し
れ……）

と、つい考察しそうになり、思考を止める。

今の自分には関係ない、と思つたが別に考える事に無意味さは感じなくていい事に気
づく。

無意味だとか無駄だとか今の自分にそれらがどれだけ当てはまるというのか。
敗者となつた自分はただ見守るのみ。後進に道を譲つたのではないのか、と。

「行きます！ 『フアイアボルト』！」

上層の戦闘の最中さなかに聞こえた魔法詠唱。

思考の海に埋没しそうになつたそれは音魔法詠唱を拾い、顔を見上げて探してしまつた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

ギルドから通達された『強制任務ミッシヨン』の遂行に多くの仲間達の助力を得て中層攻略を始
めた。

レベル4フォーになつてから訪れる未知の領域。当然、危険も増えてくる。

何度か訪れている一八階層の『宿場街リヴイラ』を拠点とし、覚悟を決めて下層を目指して降
りてきた。

上層から薄暗い無機質な空間だつたものから様相が変わり、煌びやかな鉱石と初見モ

ンスター、そして現在植物に覆われた空間に入っていた。

ベル・クラネルにとつて初見でも既に多くの冒険者に攻略されていてギルドでもある程度の情報が伝わっている。

気を付けるべきことを学んでから彼らはここまでやってきた。だが、実際の戦闘は想像以上に苛烈であつた。

「次から次へと蜂がやってきやがる」

愚痴を言うのは赤髪の鍛冶師ヴェルフ。

小人族バルウムのリリルカは戦闘の邪魔にならない位置で指示出しに務めている。

「タケミカツチ・ファミリア」からカシマ・桜花とヒタチ・千草。

「ミアハ・ファミリア」からカサンドラ・イリオンとダフネ・ラウロス。

「ヘルメス・ファミリア」からアマゾネスのアイシャ・ベルカ。

以上の『派閥連合』をもつて進軍中である。

これだけのメンバーを揃えても攻略がすんなりと進まない。それだけ迫りくるモンスターの猛攻が激しいからだ。加えて二〇層トランプ以下から罨トランプも出てくるという。

油断していると毒にかかり、撤退を余儀なくされる。

ベル達の目的は中層域の開拓のほかに素材採取がある。だが、モンスターとの戦闘に手間取っていて遅々として進まない。

目の前に目的の物があるのに手が出せない、といった状況が続く。

「鉱物はまだマシですが、モンスターのドロップアイテムは難しいですね。やたらと強いです」

「……あと硬い」

十分に準備してきたはずなのに対応が追いつかない。だが、モンスターは倒せている。階層主ほどの厄介さは無いとしても数を捌くのに手間取り過ぎていた。

特にレベルの低い者は焦りと疲労を感じてくる。

ベル達のパーティにはレベル^{ワン}が二人居る。彼女達を守りながら戦う事になってるので手間というか負担が時間を追うごとにのしかかってくる。

——そのレベル^{ワン}の冒険者であるリルカと春姫は当然、足手まといになる事を覚悟している。

「やはり元凶を叩くしかない。【白兔の脚】^{ラビットフット}！ 畜力はまだ!?」

ダフネの怒声が響く。

多くの巨^{デッドリー・ホーネット}大蜂を生み出し続けるモンスター型の要塞『ブラッディーハイヴ』が戦闘

激化の大元であった。

姿は黒紫色の松毬型^{まつかさ}。七Mもの大きさの蜂の巣であり希少種^{レアモンスター}でもある。

動かない罨^{トラップ}型のモンスターだが取り巻きの蜂が邪魔で攻略しにくく、粘度の高い液

を飛ばして冒険者の脚を潰す。

既に攻撃態勢に入っているベルの——彼の『スキル』である【英雄願望】アルゴノットによつて——右腕が発光し、小さな鐘の音が鳴っていた。

次の攻撃に対し畜力チャージの時間が長いほど威力が高まる。だが、レベルに応じた限界時間が存在し、現行では最長四分まで。

たった一分だとしても迫りくるモンスターの猛攻に比べれると長すぎるほどのデメリットだ。

高速戦闘は上級冒険者にとって既に必須の技術となっている。僅か一分、一秒と侮る事はもうできない。

(……二〇秒分。……それでもやはりモンスターの攻撃が早くて激しい)

「行きます！ 【ファイアボルト】！」

フレンジーヘルム
蜂の巣に照準を合わせ、少年の右腕から大炎雷ほとほとが迸る。

通常の魔法は長い詠唱文が必要だがベルは詠唱を必要としない即効魔法である。

魔法名を意志を持って叫ぶだけで発動できる。その威力も【ステイタス】と共に大きくなってきた。

更には威力を落とした速射もある程度出来るようになっていたか。



蜂の巢の進路上に居た多くの巨^{デッドリー・ホーネット}大蜂を巻き込み、見事に一撃でブラッディーハイヴを破壊した。

法撃を免れた蜂達は仲間達が殲滅していく。

厄介なモンスターが居なくなれば一息付けるほどの余裕が生まれる。しかし、中層より下はいつでも休息が出来るほど甘くない、と多くの冒険者が言っている。

「苦労様です」

「坊やの魔法の威力はどんどん上がっているじゃないか」

労^{ねぎら}われたり褒められたり、ベルは対応に苦慮しつつモンスターから零れ落ちた魔石やドロップアイテムを回収するリリルカ達の様子を眺める。

戦闘一辺倒なベル達にとってサポーターは既に無くてはならない存在だ。適切な指しも出してくれるリリルカに深く感謝する。

「ギルドの依頼にある素材はまだ足りない？」

「……ええ。全然足りません。一匹二匹の討伐に時間がかかりすぎてますからね。この辺りは外装の硬いモンスターが多いですし」

なので、と言いつつ一八階層と往復しながら数日かける必要があると提言する。

元より一日で全部終わるとは誰も思っていない。

遠征とは腰を据えて攻略するものである。それが探索系大手と言われる「ロキ・ファ

ミリア」であつても同じこと。

(僕にとつて初めての遠征……。今回はなし崩しのものではなく自分達の意志で潜っている)

ここまで来るのに期間的には早い方だと言われているし、実際そうなのだろうとベルも思う。

通常の冒険者がレベル4に至るには数年を要する。僅か数か月で一氣に「ランクアップ」する者など前代未聞とまで言われる。

これは才能なのか、特殊な『スキル』のお陰なのか分からないけれど運がいい事だけは理解した。それに甘えず実力を付けなければ大勢の冒険者を侮辱する事にする。

ベルと同じように恵まれた能力スキルがあるわけではなく、実力で勝ち取っている。彼らの方が余程英雄に相応しいと思えるほどだ。

——だが、自分もここまで来た。後に引けない。

(……ん?)

ベルの感覚に引つかかる違和感が生じた。それは即座に悪寒となつて全身を駆け巡る。

思わず立ち上がり、皆に警戒するように言おうとした——その時、アイシャの顔色が悪い方に変化するのに気が付く。

レベルの低い春姫達は気づいていないようだ。

「……………おいおいおい。なんかヤベーのが下に……………」

アイシャの声が震えている所からベルも自分が感じているモノが気のせいではないと確信する。

下方に危険な存在が居る。それはじつとして居るが明らかにそこから視線を感じる。声を潜めたベルは仲間達に警戒するように通達する。場合によれば荷物を捨てる事になる事も。

カサンドラとダフネは首を傾げていた。危機意識において彼女達もそれなりの修羅場をくぐっているので分からない筈がない。だが——分からなかったようだ。

(レベル3以下は感じないのか。ヴェルフも首を傾げているし)

とにかく、と言いおいて上層への逃走経路の確認を静かに行^{おこな}わせる。逃げ切れるかは未知数だが戦闘は避けた方がいい気がした。

彼らが散らばる素材アイテムを放置し、即座の撤退を決め込む頃、下方の存在はゆっくりと動き始めた。

意識した為か、気配だけで何となく分かってしまう。特にベルは他人の視線に対してとても敏感であった。



逃走を選んでも事態が解決するわけではない。

ベルは仲間達を引き連れて一八階層を目指しながら思った。このまま逃げても敵は
いずれ追い付いてくる。例え自分達が目的ではないとしても『宿場街』^{リヴィエラ}に被害をもたら
すのは間違いない。

上級冒険者が危険だと感じる相手だ。並みの敵ではない。

(迎え撃つにしても……。広い場所がいいのか。……。そうじゃない。勝てるかどうかわ
からない相手に挑むのは危険だ)

勇気を出して突貫しても玉砕しては意味がない。これが自分一人であれば構わない。

仲間達が居る現状では——可能な限り——無謀な戦闘を避けるのが正しい道筋であ
る。だが——

ベルは迷った。

逃げてでも挑んでも犠牲が出てしまうおそれに。

悪い結果しかないのであれば——どの道、大勢の者達や仲間を犠牲にするような選択
は選べない。仮に抗うにしても仲間達に無謀な戦闘を強いる事になる。

(……。なんて考えていそうだね、この坊やは。……。だが、確かに戦闘に入るのは得策じゃ
ない。逃げつつ考えなきや生き残れない)

(……。もし、相手が意思疎通のできる存在であれば……。つて考えるのは甘いよね)

「……坊や。……冒険者に必要なことは何だい？」

警戒しながらアイシヤが尋ねて来た。

生き残る事、と言いそうだが違うと思つた。

集団で行動する冒険者の仕事は『情報を持ち帰る』事だ。それも出来れば生きて帰るのが望ましい。

犠牲を少なくするのは当たり前だが避けられない犠牲というのはどうしても出てしまう。

ベルの手の届かない危機などだ。

「……上に行きましよう」

ダフネは文句を言おうとしたが事情を察したりリルカはため息を付きつつ団長の意見を尊重する事にした。

脂汗を流しつつ真剣な深紅の瞳で訴えかける少年の決意を無駄にしてはいけない。

結論が出た以上、無駄な議論は命取り、と言いながら歩を進める。

少しは賢いところもあるのだな。

そんな声がベルの耳に届いた。

それだけで今まで以上の悪寒が走り、思わず駆け出す。だがすぐにアイシヤが彼の身体を掴んで止める。

一気に殺意の様なものが膨らんだのは彼女アイシヤも感じた。だが、取り乱しては相手の思うつぼ。

(……今のはなんだ？ 誰かが喋ったのか？ リリ達は気づいていないような感じだけど……)

「……少し脅かし過ぎたかな」

「!？」

今度はすぐ近くから声が聞こえた。

ベルは反射的に女神から貰った黒いナイフを敵意の元凶に振るった。しかし——
斬撃は途中で止まる。モンスターの指に挟まれる形となっているのが見えた。

唐突な停止に思わずベルの体勢が崩れるほど。

「……ふん。だが、反応が早く対処も……まあまあといったところか」

落ちていた口調で述べるのは全く未知の存在。

全身が青白く、肌の多くが鱗状のものに覆われた——いわばモンスターそのもの。

「も、モンスターが喋った!？」

最初に気付いたアイシヤが言った。次いで最後尾に居るベルが相對している存在に
リリルカ達の視線が集まる。

つい先刻まで最後尾を守っていた少年の背後には誰も居ない筈だった。それがつい

今しがた気配を生んだ。

等級の低い冒険者達が次々と悲鳴に似た喘ぎを漏らす。

「……………こいつは……………噂の竜女かい？」

「額に宝石がありません。……………が、亜種か強化種という可能性も……………」

彼のナイフを指で挟んだままリル力達を眺めるモンスターは特に行動を示さなかった。先ほどまでの殺気も既に霧散している。

ベルは武器を引つ込めようとしているが万力で挟まれているかの如くビクともしない事に驚いていた。

レベル4の『力』^{アベリテイ}を持ってしても相対距離を離せない。

(僕たちの言葉^{共用語}を喋った、ということとは異端児^{ゼノス}の可能性が……………)

今回連れて来た仲間達には異端児^{ゼノス}の事は知られているし、ベルとの関係性も同様である。——カサンドラとダフネは今一度の説明が必要かもしれないが、今回に限って言えば無視した方がいいと判断した。

ベル以外の者達も武器を構えて警戒するがアイシャが武器を仕舞え、と命令する。迂闊に戦闘になれば全滅するのはどちらなのか、と。

「お前達の目から見ても竜女^{ウイザル}に見えるのか？ 誰か鏡を見せてくれないか？ それとも

……………一度全滅させてから荷物を漁った方がモンスターらしくいいか？」

女性型のモンスターが静かに告げる。

表情としては無表情。怒りは無く、ベルの目から見ても何を考えているのか読み取るのが難しいほど。

(……こいつらの中に見知った顔は無いな。……会話するだけ徒労だったか。……こいつの持っているナイフは……それなりの業物のようだが……私に対して有効打があるわけでもなさそうだ)

冷静に分析するモンスターをよそにリルカは生き残る確率を上げる為、素直な冒険者を演出する事にし、仲間達にもそれを強要させる。

文句は受け付けないと小声で言い切った。

「は、はい。鏡でございます」

「……うむ」

恭しく提示された手鏡を受け取り、角度を変えながら見える範囲を確認していく。

——そして、モンスターは漸く自分の姿に確信を得る。

記憶にあるモンスターの中で竜女に姿が一番近いと思った。だが、かのモンスターの特徴である額にある筈の宝石が無いのが疑問だ。

別種か近親種であるようだ、と判断する。

(頭に角や背中に翼でもあれば竜人だが……。えらく中途半端なモンスターとなって

しまった。まあ、そういうこともあるか、と納得しておこうか)

指で挟んでいたベルのナイフを放してからリルルカに鏡を返す。

女性型モンスター

自分分の現在の状況は色々不可解であるが理解した。後は顔見知りを探し出し、世間の情報を聞き出すだけだ。そうモンスターは判断する。

今更改めて迷宮都市オラリオを滅ぼそうとかは考えていないが、あまりにも体たらくのままであればこのまま進撃する事も想定に入れておこうと思った。

どのみち一度失った命だ。改めて使っても構わないだろう、と。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

謎の女性型モンスターは自分の姿に落胆したのか、酷く落ち込んでいるようにベル達の間から見えた。

しばし物思いに耽った彼女は顔を上げてベル達を見据える。その眼差しはレベル3以上であっても心胆寒しんたんからしめるだけの迫力が込められた。

「……冒険者ならばモンスターを前にした時、武器を構えるものだ」

そう言いつつも彼らは何処か慣れた様子であることに違和感を覚える。

モンスターに、ではなく人と同じ言葉を話す、という点において――

今の自分と似た境遇の存在に出会わなければかなり取り乱している所だ。それが無いということは何らかの事情を知っている事になる。

(……私がここに居るということはあいつも現れる可能性がある。……絶対かどうかは分からないが……)

「……いい、いえ。僕達はあなたのような喋るモンスターと会った事があるので……」

(……私の記憶ではそのような情報は無いな)

疑問に思いつつ目の前に居る白髪はくはつの少年に顔を向ける。

パーティの中では一番の強者のようだが頼りない外見のせいで色々と損をしている気がする」と評価した。

それと彼の深紅ベルの瞳ルベライトにしばし見入った。

何処かで見たとような気がするし、他人の空似でもあるような——非常にぼんやりしたものを感じた。

ベル達と相対しているモンスターは非常に落ち着いており、受け答えは少ないが淀みなく対応している。

彼の知る中では一番の知患者のように感じた。それと——かなり強いのは間違いない、と。

「……単刀直入に聞きます。あなたは……異端児ゼノスなんですか？」

「?」知らない言葉だ。……私のような喋るモンスターの事を指すのか?」

首を傾げるモンスターにベルは素直に説明を始めた。

戦闘に発展しない限りにおいて情報は宝ではあるが生存率を高めるならば彼は躊躇いなく放り捨てられる。

リリルカ達も教え過ぎではないかと心配するものの、半ば諦めていた。どのみち、团长が決断したのだ。それを尊重するのが団員の務めである。

(……知らぬ間に世間では色々な事が起きていたようだな。おちおち死んでいられないではないか。……全く次代の若者は何をしでかすか分かったものではないな)

ある程度聞き終えた彼女は軽く嘆息する。

それから自分が異端児とやらの仲間ではないが枠組みに入る事を認める。否定する材料が無いのも理由の一つだ。

ついでに、とばかりにサポーターに向けて外套を所望した。理由は単純明快——素っ裸のままベル達と対峙していたからだ。

ここでリリルカは頭脳を働かせた。何か言いかけた仲間の口を即座に塞ぎながら。

「で、では、謝礼としてこの辺りの素材採集を手伝ってはもらえませんか？ リリ達は遠征で色々とお金を稼がなければならぬ身の上なのです」

「……遠征。……ギルドの『強制任務』の途中だったか」

(……何故、ギルドの事を？ このモンスター、相当にヤバイ気がします)

リリルカの知る異端児達の殆どは地上の事に疎い。

仮に知っていても冒険者から聞き出したものが精々だ。

だが——目の前に居る竜女グレイヴルモドキは言葉尻からも相当な知性を携えている。それに出し抜ける気が全くしない。

(深層攻略にしては人数が少ないと思っていたが……。数ある任務の一つを遂行中だったのか。……貴重な情報料としてそれなりに対価も必要だな)

無理に制圧する事も出来るが意欲が湧かない。

既に自分は敗者である、と認めているからかもしれない。

それに——生前の自分を知る者が居ないと確認できた。もし、一人でも居ればもっと簡単に物事が進んでいた。

「ど、どうでしょうか？」

「……私の目的は地上にある。それでも構わないのであれば引き受けよう。別にお前達と共にしようとは思わないが……」

モンスターの地上進出、という事を聞いたベル達は——カサンドラとダフネを除く——一斉に緊張した。

つい先日、そのことでオラリオ中を混乱させたばかりだ。もう一度同じ事が起きるのは避けたい、と。

(でも、ウィーネと違って一人で出る場合はどうなんだろう？ そのまま通した方がい

（何やら疑心暗鬼になつてゐるな。モンスターを前にしてゐるからか。それとも……似たような目に既に遭つてゐるから？ ……良い結果ではない事は確かかなようだ）

戦闘の意欲を見せてゐるのは二人ほど。それ以外は混乱の極致といつたところだとモンスターは判断した。

戦う気のない者を甚振る趣味は無いが失望次第では撃滅も辞さない。それは今も昔も変わらない。

先ほどの少年の一撃は——それなりに評価してよい気がした。

気配を消していたとはいへ、しっかりと迷わずにナイフを振るつた。あの一撃はそれなりに価値がある。

「……何を採つてくればいい？」

「……え？ あつ、はい。少々お待ちを」

リリルカの素早い対応が従順な僕しもべのようでヴェルフは呆れたが、他は彼女なりの処世術だと気づき拳に力を籠める。

今の自分達に目の前のモンスターを打倒する力がどうやら無いらしい、と「ヘステイア・ファミリア」の頭脳担当が判断してしまった。それがとても悔しかった。

彼女リリルカの行動を侮辱できるのは同郷の団員くらいだ。

資料を受け取りつつモンスターは告げた。

現れるモンスターはお前たちを襲う。決して油断するな、と。

「……まで来る間、襲われなかったのな。おそらく仲間だと思われているか……、私を認識できていない。死にたくなければ抗え冒険者」

「……言われなくても」

「は、い」

「御意」

そう言いおいてモンスターは一瞬で姿をかき消した——かの如く移動し、壁などを素手で破壊していく。

彼女の攻撃速度が目で追えない。

「ファミア」の中で一番高いと思われる『敏捷』を持つベルの目でも辛うじて、という具合だった。

(……ど、どういう肉体構造をしているんですか!)

リリルカは思わず内心で怒鳴り散らした。しかし、それは彼女だけではなかった。

アイシャも命も千草も口を大きく開けて驚いた。

既に再出現を始めた巨デッドリー・ホーネット大蜂がなすすすも無く粉碎されている。明らかに女性モンスターの速度が圧倒的で巨デッドリー・ホーネット大蜂が動くより前に叩き落されているとしか言いようがない。

既に表舞台から去ったはずの存在だ。今更改めて試練を与えようという気分にはなれない。いくつかの確認をしてみたいという気持ちはあくまで個人的な我儘だ。

殺伐とした時間を過ごした後での復活――

どんな意図があつてこの世に生まれ堕ちたのか、それを一番知りたいのはモンスター
の彼女自身だ。

外套をまとい、上を目指そうとしたがベル達は下に行く予定がある。

「行けばよい。私は勝手に上を目指す」

「……そうしたいのは山々だが……、ここであなたを見逃すのは冒険者として無視できない
ないんでね」

と、アイシヤは言う。

正論だがリルルカからすれば無視した方が得策だと思つた。

ベルは――彼女が何を求めているのか知りたいと思つた。このまま一人で帰すと良
くない事が起きるかもしれないし、その原因になりたくもなかったけれど無視はできな
い。

「……かといつてあなたの実力から察するに私達じゃあ到底敵わない。戦うだけ無駄死
にするのは分かつてる」

「……賢明な判断だ。だが……いや、そうだな……。強制任務の目的から外れてしま

な

仮に戦闘になった場合、多くの犠牲が出るだけで旨味が無い。

戦いとは互いが全力を出せる立ち位置舞台が必要だ。だからこそ——派手で大仰な一芝居を打つ手間を呑んだ。

それと彼らと共に下層を目指すわけにはいかない。

理由は単純に冒険者の為にならないからだ。

(……モンスター^の事を殆ど知らないけれど、ここまで賢い奴はあり得るのか?)
アイシャとダフネは同じことに疑問を抱く。

通常のモンスターとは隔絶した何かを感じる。いくら強化種でもここまで開きを感じるのは深層域のモンスターでもない限りあり得ない筈だ、と。

ベルも黙って相手の言葉を聞いていたが今まで出会ったどの異端児達ゼノスとも違う。

例えるならば——いや、そうとしか考えられない。

彼女は元々冒険者だった。

それも第一級に引けを取らない最強格と呼べるほどの実力者。

何らかの事情でモンスターとして生まれる事になってしまった。そう考えると納得できる。

話しぶりからもそれが窺える。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

戦う事も逃がす事も共に地上を目指す事も難しい。特に今の「ヘスティア・ファミリア」は。

最適解が全く浮かばない。であれば彼女が勝手に行動するのがいいのか、となつてしまふ。

単独行動なら責任問題をベル達が受ける謂れいわれはない。罪悪感がのしかかってくるだけだ。

（僕らが彼女を行かせたことで悲劇が生まれたら……。そう考えると怖いけれど、それだと一向に前に進めなくなる）

「……うん。僕らは強制任務ミッションを優先しよう。弱小「ファミリア」に出来る事なんて……。そんなに多くない」

ベルの決定にヴェルフは口を尖らせたが団長が決めたことだから、と異見を述べるのをやめた。

リリルカはほっと一安心した。

残りの団員達はそれぞれ言いがあつたようだが無駄な犠牲を生むのは得策ではないと判断し、ベルの意見に賛成する。

（向上心が無いわけではないようだな。……実力の分からないモンスターであれば大勢

で困めば何とかなる、と短絡的な事になるかと思っていたが……)

モンスターはベルの言葉に嘆息しながら微笑した。

目の前に脅威がありながら無謀な選択をしなかった。それもまた冒険者にとって大切な選択である。

もし、当時の自分であれば力業で抑え込む。それくらい実力に自信を持っていた。

「地上人が騒ぐのは……、おさらく避けられない。……だが、お前達の勇氣ある選択にこちらも敬意を示そう。……可能な限り、私は戦闘を行おこなわない。ただし、私を失望させる相手には容赦しない」

「……はい。すみません」

モンスターに頭を下げるベル。

相手がモンスターなのに、と素直な姿勢を見せる彼に少し驚いた。

彼の冒険は自分が思っているよりも多彩なようだ、と。それは聞かずともわかる冒険者特有の勘のようなもの。

(……本当に。髪が白いからか、それとも素直さからか……。つい妹の顔がちらつく)

彼女の才能ごと吸い取った自分にとって唯一敵わない存在があるとすれば妹だけだ。そうモンスターは苦笑を滲ませる。

妹は才能に恵まれなかったが素直で突拍子もない事でいつも驚かせてくれる。

白い髪の毛というのは別に珍しくもないのだが、どうしてだが——気になってしまった。

——それに彼の深紅の瞳ルベライト。見ているだけで心が安らぐ、と思つた次の瞬間には思い出したくない妹の夫とかいう害虫男の顔がちらつく。

彼女とて取捨選択したい気持ちがあり、素直に喜べない事情があつた。

本音では『あの子妹の子の事だけ考えたい』だ。

それとまだ名前を教えてもらつていない事も思い出してしまった。確か自分に連なるものを付けた、という感じだつた。

分かるのは外見的特徴と性別だけ。今から会いに行くとしても——モンスターとなつてしまったので——

これ以上悶々と思考しても不毛であると気付き、現実に戻ることにした。

「ここで別れよう。地上で会えるかは分からないが……。しばらく私はオラリオに滞在するつもりだ。今後の事も考えなければならぬからな。……。なにせ我が身がモンスターだ。どう暮らしていけばいいのやら」

ついつい口が滑つてしまった。気が付いた時は遅かつたが仕方がない、と小さく呟くにとどめる。

リリルカに馳走になった、と告げて地上に向けて歩き出す。

「あ、あのー！」

ベルは思わず相手の外套を掴んでしまった。

まず自分の名前を言った。次いで相手の名前を尋ねた。

この出会いも何かの縁、とか言いながら。

(……ベル、クラネル……。クラネル？ 何処かで聞いた気がするが……。思い出せないところを見ると大した姓でもないだろう。……ベルという名は良い響きだ。……私の妹が付けそうな名前だ。……いや、私でも付けそうな名だ)

「……相手の名前を聞いてどうする？ モンスターの種族名で充分だろう」

「異端児ゼノスのみんなもそれぞれ名前を持っていたので、つい……」

「下らない理由のようだ」と理解したがモンスターは少しかだけ思索する。

「そのまま名乗れば騒ぎになるのは必至。妙な偽名だと彼らが余計に勘繰られる恐れがある。」

かといつてすぐに思いつくものはなし。妹の名前は論外だ。

「アステル……と名乗っておこう。吹聴したところで無意味だがな」

「ありがとうございます」

「……ベル・クラネル。冒険者ならば上を目指せ。……いつまでも下で燻くすぶっている事は許さん」

モンスターアステルは他の冒険者達にも睨みを利かせたがそれぞれ三者三様の表情になった。

深く追求気も無かったので、それだけ言いおいて彼らと別れた。派閥連合

追撃するのは自由だが、おそらく簡単に蹴散らされるのがオチだとアイシヤが判断し、団長ベルも同意した。

そして、ベル達は当初の目的通り下層を目指す事にした。

02 魂の平静

モンスターとして生まれ落ち、上層を目指すアステル^星。

咄嗟に思いついた名ではあるが自分とのかかわりが深いものよりマシだと思おう事にした。

人間であつた名残は灰色の長い髪の毛くらい。先ほどの手鏡で目の色を見るのを忘れていた。

生前であれば左右の色違い^{ヘテロクロミア}。今となつてはいつでもいいかと。

仮として分かっている事は自らの種族が竜女^{ヴァイヴル}。いくつか差異はあるものの一番近いという事で納得しておく。

生気のない青白い肌。冷たい体温が自分でも気持ち悪いと思う程度。

そんな自分が今、裸足でゆつくりとダンジョン内を歩いている。不思議と足裏が痛い、ということはない。開放感があつて寧ろ気分がいいくらいだ。

(竜女^{ヴァイヴル}は変身するんだつたな。私も例にもれず変身するのか？ 理性は失いたくないな)

道中、考える事はやはり白髪^{はくはつ}の少年『ベル・クラネル』という冒険者。

深紅ルベライトの瞳に強い光りを宿していた。———そう思い込もうとしている自分が居る。

雑念の原因である妹メーテリアが生んだ子とは一度しか会った事が無いのに。

会った、というか見かけたが正しいか。

既に髪の毛が生えており、白い髪だというのは知っている。

赤い瞳以外は妹に似ているとも———

(……あれからどれくらいの日日を経つただろうか。いつまでも赤子ではあるまい)

迷宮都市オラリオを襲撃した日であれば彼は既に七歳になっている筈だ。さすがに冒険者として育っているわけではない。

だが———それから更に月日が経つていたら。

子供の成長を楽しみにしていないわけではない。まして妹の子であれば尚更だ。その妹は既に他界し、残された子は忌々しい糞爺ゼウスの下。ロクな教育を受けているわけがない。

今すぐに引き取りに向かうべき、と思つたところで冷静になる。

悪に堕ちた自分に彼と会う資格があるのか。まして今はモンスターに変わり果てた。

♪ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫

何にしても情報を得なければ始まらない。アステルは無様に生き返つた自分を呪いつつ上を目指す。

モンスターの襲撃が無いだけで道中は楽だった。それと——仲間だと思われていたのではなく、彼我の実力差に恐れられて近づかないだけだった。

敵意のようなものをぶつけているが勝てないと本能で理解している。そんな雰囲気を感じた。

一部のモンスターは——多少——賢く狡猾である。それゆえに恐れも知る。決して無謀な存在ばかりではない。

(珍しい光景だ)と。……地上人が「ヘラ・ファミリア」を見るようなものか)

当時、隆盛を誇っていた最強の「ファミリア」は良くも悪くも畏怖される存在であった。

主神ヘラは人間的におかしい女神であったが今となっては何もかもが懐かしい。

亡くしてから気付く思い出というのはモンスターの身の上となったアステルにとって切り捨てたくても出来ない——割り切れない。

それが悪いとは言わない。

都合のいい美談だけは残したいと思うのは誰しもが抱いている事だ。

(……どの道、私はあの子を英雄にするような教育しか出来ない。自分達で成し遂げられない偉業を次代に押し付けるのは悪だ、な……)

かつて自分に立ちはだかった彼女達は正義を標榜した。それはきつと抑止力だった

に違いない。

どんな言い訳を重ねても結果が伴わなければ無意味だ。

そんなことを考えていると一八階層『迷宮の楽園』アンダーリゾートに到着した。

天井全体を覆う水晶が空間内を明るく照らす。これは地上の時間に合わせて明暗が変わる仕組みになっている。

この階層はモンスターが生まれない安全階層セーフティポイントの一つだ。

他の階層からモンスターが侵入する事があるので全く居ないわけではない。

(……地面の穴が塞がっているし、被害も回復している。……短期間でここまでになるわけはないな)

緑豊かな世界。

かつてそれを自分達は焼け野原にした。その光景をつい先日のように思い出す。

ダンジョンには自動修復機能が備わっている。だが、それでも大規模な破壊をもたらした後というのは相当な時間がかかるものだ。特にこの地に根付いた『宿場街』リヅイラとか。

完膚なきまで破壊しつくされたはずなのに何事も無かったかのように元通りになっている。

辺りの様子を眺めながら今日はここで一泊するか、と思い適当な場所を探す。

元より急ぐ理由は無い。



人気ひとけの多い場所を避け、法外な料金を払えない、または払う気のない冒険者が良く利用する広場を散策する。

一部の冒険者。パーティが野営する為に利用する場所がいくつもあり、運が良ければ彼らに会える。

地上の柵しがらみを嫌う者。後ろ暗い者達が『宿場街』にある『ならず者達の街』で生活する。アステルは小人族バルウムの少女リルカ・アーデに殆どの資源を渡してしまったので資金源が僅かしかない。その関係で宿を取ることが出来ない。

もし、充分な資金があっても泊まれるかどうかは未知数だ。

(急がないのであればもう少し一緒に居れば良かったか。……今更か)

深くため息をついてから森の奥底の一角に入り込んだ。

地上への抜け道を闇派閥イヴィルスとの関係から知ることが出来たが利用する気は無い。——それは一つの手段として残しておく。

適当な場所に腰を下ろしたものの今の自分には尻尾がある。仰向けで眠るには難しい。

枕にそこら辺の石を使うと思うと気が滅入る。

深層攻略時は雑魚寝が当たり前だった。それもまた今更なことだった。

「……………」

人目を避けて一人早めの休息をとる。覚醒してまだ少ししか経っていない事を思い出しつつ。

モンスターの身体はまだ少し休息を求めている。

それから深い眠りにつく。

感覚としてそれほど疲れていたわけではない筈なのに意識はあつという間に闇に閉ざされた。しかし、そんな状況下にあつても異変を感じればすぐに覚醒するのは長年にわたって染みついた冒険者の習慣である。

次に目覚めた時、周りが酷く薄暗い。

夜間か、これから夜になるか——

ダンジョン内では長い睡眠をとるのが難しい。完全な熟睡はほぼあり得ないほどに。

(…………遠くで騒ぎが起きたか。近くに気配はない。…………なら、もう少し…………)

浅い覚醒を繰り返し、必要充分と思えるころには周りが明るくなっていた。

街の喧騒を無視していたので何が起きたのかは分からないが、宿場街リヅイラはいつも騒がしいところだった。

一人で行動する事になった為か、話し相手が居ないというのは些か寂しい。白髪はくはつの少年ベル・クラネル達の相手をし過ぎたせいか、とため息を零す。

元より胡散臭い邪神と取り留めのない話しばかりしてきたことも原因か、と。
 アステルは掛布団代わりにした外套をまとい、寝ぼけ眼のまま水浴びが出来る水場に移動する。

ここには豊富な水源があり、多くの冒険者が旅の垢あかを落としていく。——当然、覗きに注意しなければならぬけれど。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

下着の替えも無く全裸のまま経過せるモンスターの身体というのは便利そうで気恥ずかしい。

誰も見ていないから平気であるが年嵩としかさの冒険者には会いたくない。

——年嵩でなければいいのか、と言われると——

(……誰でもいいわけではないが……。あの者ベル・クラネルならば)

妹の子と重なる人物であれば平気かもしれない。それは『家族』としての気持ちだろ
 うか、と。

単に似ているだけで招くのは節操無しと揶揄されるところだが、どういわけが彼ならば許してしまいそうな気持がある。

それだけ愛情に飢えているのかもしれない。

最愛の妹を失った反動ともいえるものが——

冷たい水に身体を沈ませる。芯まで凍える事は無いが体感的には心地よかった。
 ヒューマン
 人間に比べて体温が低い気がしたが悪寒などは無く、問題なく水浴びが出来た。
 鱗は丈夫で抜け落ちが無く、髪の毛くらいしか洗うところが無いのかと思う
 ほど。

(……あの糞爺ゼウスが育てたのならば……、覗きくらい容易いかも……)

念のために気配を探っている。近くに居るのは自分以外のモンスターくらい。

神は元々ダンジョンに潜ってはいけない決まりだが邪神はその規則を守らない。

ゼウスもある意味では邪神同然だが、と。

冷たい水に裸身を晒し、長い髪の毛を洗う。

もし——誰かが——勇氣ある冒険者が覗きに成功したならば世にも美しき化粧物の姿を拝めたことだろう。

「……しまった。外套以外で身体を洗うものが無い」

自然乾燥に任せるしかないか、と少しがっかりする。

自身が習得している魔法は熱ではない。少年の魔法は水気を取るのに適さない。

つついベル・クラネルを引き合いに出してしまう。——余程自分は彼を気に入ってしまったのか、と疑問を抱く。

(……妹を思い出せるだけだ。あの子自身に何かがあるわけじゃない)

雑念を振り払い水場から上がる。

全身から滴り落ちる水が歩くたびに飛沫する。

近くにある大樹に腰かけて水気が無くなるのでぼーっとしていると何者かが駆け出してくるのが分かった。それも複数。

気配から大急ぎで移動しているような緊迫した空気が読み取れる。

彼女が持つ資質に関係しているのか、そのような気配にとっても敏感であった。

(……私の『スキル』が負荷となつてこないところを見るとモンスターの身体が上手く作用しているのか？ そんなことがあり得ると？)

強大な『スキル』には強大なデメリットが存在する。相方であった男もその類たぐいだ。

高みに登る英雄は五体満足な『スキル』を得ない傾向にあると言われる。そして、それはおそらく真しん——そして、真まことであろうと予測する。

「……そろそろ移動した方がいいか」

つい口に出して喋ってしまった。

独り身でいると何かと独り言が多くなる。それはダンジョン探索において非常にままずい。

軽くため息をついてから無言のまま辺りの気配を探る。

下方より多くの冒険者がやってきてケガ人の治療に当たっているらしい。切羽詰

まった怒声からそう推察する。

現在位置は『宿場街』^{リヅイラ}からそう離れていない。意識を集中すれば音くらいは拾える。場の混乱に乗じて一七階層への入り口に向かおうとした時、聞き覚えのある声を拾った。

もう先日になるが白髪^{はくはつ}の少年ベル・クラネルのものだ。他にもリルカといった少女の声もある。

もう戻ってきたのか、と驚きつつ遠目から観察できる位置を探す。

急ぐ旅でもないし、気になった男子の様子を見るだけだ。

(……辛うじて姿が見えるだけで声は音しか聞こえんな)

モンスターの特性として聴覚が優れているかと思ったが当てが外れた。

彼が無事なら後は知った事ではない。長居する気もない。しかし、どうしてか気になっってしまう。

妹の子と被らなければ、こうまで未練を募らせたりしない。アステルはしばらく唸り続けた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

謎のモンスターアステルと別れて探索を続けていたベル達は下層域において別のモンスターと交戦した。

魔石を喰らい強化種となったそれは仲間達を窮地に陥れた。

様々な出会いと戦いが続いたが現況を打破する事に成功し、一八階層に戻ってきた。まずは仲間達の手当をするために。

軽く死にかけたものの「ヘスティア・ファミリア」と『派閥連合』を組んでいる者達に欠員は無く、無事に帰ってこられて一安心した。

「……ケガ人こそ出ましたが死人が出なかったのは不幸中の幸い……」

極東から来た少女ヤマト・命みことは生きている事に深く感謝した。

元々階層の開拓と素材採集が目的の『強制任務』ミツシヨウだった。異常事態は想定していない。イレギュラー

ダンジョンに潜る上で絶対に安全とは言い切れないが今回は誰もが死を覚悟した。道中で出会った別の「ファミリア」の死体も確認した。

生き残る事がどれだけ大変か、ベルは学んだ。

「探索一日目にしてもう死にかけるなんて……。運、というか効率が悪すぎます」

「……そうだね」

愚痴を言う小人族バルウムのリルカ・アーデ。

折角手に入れた素材のいくつかを捨てる事になったのでサポータとしては面白くなかった。勿論、仲間達が全員無事に一八階層に戻れたことは嬉しかったけれど。

このままでは多額の罰金をギルドに払う事になってしまう。

無事だから良かった、とはならない。そこが問題である。

「階層主並みのレアモンスターに襲われるとはな」

(……こんなことならあ アステルとかいうモンスター の方を雇えば良かった……。後の祭りですが……)

弱みでもなんでも出まかせを言いまくって、と。

未知の実力者を頼るのは後々悪い結果しか生まない。リリルカも頭では分かっている。

生き残る確率を上げる為ならば彼女は何でも捨てられる。

ベルに救われた恩を返すまでは簡単には死ねない、と強く決意するほどに。

「……で、俺達はここで休憩するとして。ケガ人も多い。装備も心許ない」

鍛冶師で赤い髪の間人 ヒューマン ヴェルフ・クロツゾが愚痴のように言った。

彼はあまりに大変な目に遭ったので機嫌が悪い。目の前に多くの素材があるのに手に入れられなかった事も原因の一つだ。

「ケガ人にはここで休んでもらって、僕らは今後の事を考えよう。再度下層を目指すのは無理そうだし」

「……無難な結論に俺は安心した。で、野営か？ 金も無いし」

「そうですねー。野営しかありませんね。 リッツイイラ この物価はぼったくりレベルですから」
ベルはまず高額だと分かっている怪我の人の治療の為に彼らを リッツイイラ 宿場街に運んだ。

多少の借金生活は慣れっこだ、と言わんばかりに。あと、これは人命救助による出費だと自分達に言い聞かせて――

(このまま帰つても罰金。潜るにしても荷物が……。冒険つて今更だけど大変だな……)

モンスターを倒してレベルを上げ、有名になるのが英雄だと思つていた。もちろん、今はそれが短絡的な事は分かっている。

実際には地味な仕事の積み重ね。一つずつ依頼をこなしていく仕事こそが冒険者のあるべき姿。

今日は死者が出てしまったが多くの冒険者を助けることが出来た。

(全員を助けられなかったけれど、今の僕にはこれが限界……。だけど、本当にそうなのかって思う)

大手「ファミリア」を引き合いに出すのは相応しくないけれど、彼らなら、と思わずにはいられない。

きつとそれは傲慢な考えだ。ベルは力の及ばない自身の無力さに情けなさを感じる。

またいつかのように――

お前の隣りに立つ資格なんてありはしねえ。

自身が上級冒険者と釣り合わないことくらい駆け出しだった頃のベルにも分かつて

いた。単なる憧れしかない子供——今もだが。

それから努力を積み重ねて今に至る。——少し、いや、かなりハイペースなのは自分でも驚いているけれど。

半年も経たずにレベル4だ。それでもまだ意中の相手には届かない。遙か高見の存在に手が届きそうで届かない。

（届いたら終わりか？ 相手は既にレベル6^{シックス}。更なる上を目指す冒険者だ。……僕は彼女と同じように追いつくだけじゃなくて追い越したい？ 追い越したら……、僕の目的は……、目標は？）

「ベル様、ベル様。そちらは行き止まりですよー」

思考の海に沈みそうになっていたところをリルルカの声で我に返る。すると目の前には木で出来た壁があった。

慌てて引き返し、軽く深呼吸する。

この街は修復速度を上げる為、簡単な素材で作られている。豊富な木材を用いて各々自由に建物を作り上げていた。そして——度々壊され、何度か壊滅している。壊滅されてもすぐに復活する。

ここは多くの冒険者にとっての憩いの場でもある。何をおいても維持が優先されるところだ。ただし、命が一番大切なので危なくなったら住人はすぐに逃げる。

と、リリルカは現場を確認しながらベルに尋ねた。

出会ってまだ間もないし、案外近くに居るかもしれない。だが、居たとしても会う理由がない。

こちらが困っているのを助けてくれ、というわけにもいかない。

「どうだろう？ もし、ここにまだ居たらどうするの？」

「もちろん、交渉して助けてもらいましょう。こちらは地上進出の為の便宜です」

「……商魂たくましいな、リリスケは」

ヴェルフは呆れながら感心した。

相手がモンスターでもしつかりと交渉する。それは生き残る為なら何でもする事と同義であり、ダンジョン探索において中々できる事ではない。

もし、異端児ゼノスという存在が居なければ決してできない。

「ならば自分のスキルで探索してみますか？ 既知の相手モンスターならば……」

命のスキル『八咫黒鳥』ヤタノクロガラスは遭遇経験のあるモンスターを探知し、不意打ちなどを回避するのに重宝する。

物は試しとリリルカは使用を許可した。

人差し指と中指を立ててスキルを使用する。すると少し離れたところに反応があった。

索敵範囲はそれほど広いわけではなく、レアモンスターなどを探索する場合、重宝する。

このスキルのデメリットは遭遇経験があるモンスターを全て探知してしまう。数が多い階層では特定が難しくなる。尚且つ識別能力が無い。

命の感覚では脳内に浮かべた黒一色の階層上に赤い点として知覚するらしい。

「……森の方に一つだけのものが……。多分ですが、野営の観点からそこで間違いないかと。……他は複数の点が固まって動いているので」

「……まだ居たんだ」

「我々がそれだけ戻ってくるのが早かったとも言えます。実質、半日しか経ってませんから」

資源回収で見せた動きから考えれば半日もあれば地上に近いところまで行っていてもおかしくない。

リリル力達の印象からもそれほど急いでいるようでもなかった。

「どうします？ 助力を願いますか？」

「……モンスターの足止めをする、という観点であればその選択もありでしょう。しかし、ケガ人が居る中で何をお願いできますか？ また資源を採ってこい、というのは強引すぎます」

仮にそれを言いつけたら確実に機嫌を損ねる。

何様だ、と自分達なら言う自信がある程に。

もし、ベルのようにお人好しであれば可能性がある。——問題があるとすれば相手の情報をリリルカ達が持つていないということ。

迂闊な交渉を持ちかけて酷い目に遭うのは勘弁願いたいところだった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

「ヘスティア・ファミリア」が議論を交わしている間、他派閥の「ファミリア」から来た冒険者達も黙って彼らの様子を見ていたわけではなかった。

「タケミカツチ・ファミリア」だけは団員の一人ヒタチ・千草がモンスターリヴィラの攻撃で怪我を負い、その見舞いの為にこの場には居ない。

「ヘルメス・ファミリア」から出向したアイシャ・ベルカは宿場街リヴィラに向かっていった。

残っているのは「ミアハ・ファミリア」から来たダフネ・ラウロスとカサンドラ・イリオンの二人だけ。

元々二人は「アポロン・ファミリア」の団員だったがベル達との戦いに負けて「ファミリア」が解散する事態になってしまい、今の「ファミリア」に改宗コンバージョンすることになった。

その事について特に恨みは無く、ベル達と共に探索する事に思うところはない。

「このまま帰るのは負けた気がする」

イレギュラー
異常事態との遭遇は仕方がないとしても集めた素材を放置するのはやはりもったいなかった。

激戦を理由にしてもギルドはおそらく取り合わない。彼らは粛々と任務不履行を言い渡してくる。

拾いに戻るにしても疲労が溜まっている。

今回の探索は初の下層域攻略だ。まだ十分な経験を積んでいない。

「荷物も殆ど撒き散らしちゃったし。ここで買うにしても……。お金、殆ど無い……」
「そうです！　今のリリル達はとっても貧乏なんです！」

リリルカは知識を総動員して事態打開の策——案を練る。

犠牲は仕方がないとしても借金の積み増しは痛い。次の活動資金の当てがなければダフネ達の助力を求めにくい。

それぞれの「ファミリア」は懇意にしている相手だがいつまでも甘えていられるわけではない。

「先ほどのドルムル様やルヴィス様にも協力していただきましょう。元はと言えば彼らに原因があります」

無茶苦茶な理論を展開するリリルカ。それだけ彼女が追い詰められていると察した。ダメもとで頼む、という案も確かに有効かもしれない。相手の機嫌を損ねてしまうの

「……ウチの頭脳担当は容赦ねーな」

何の成果もあげられずおめおめと引き下がる事になるのは不本意だが、とヴェルフは唸りつつも納得せざるを得ない事を認める。

折角手に入れた貴重な鉱石類の殆どを置いてきてしまったし、後から来る冒険者に持ち逃げされるのも面白くない。

かといって今から取りに行くだけの余裕が自分達には無い。

回復薬や携帯食も無し、無補給で中層と下層の踏破は自殺行為と言える。

(……十中八九アステル様は不満を示すでしょう。舌先三寸で言いくるめられるほど甘い相手ではない、というのはリリにも分かります。……ですが、異端児^{ゼノス}関連で弱みに付け込むくらいは……)

と、リルカが脂汗、または冷や汗を流しながら覚悟を決めていると命ともに外套をまとった存在がやってくるのが見えた。

自分達のところに来てください、とでも言ったのか。そんな簡単な言葉で来るとはリルカも思っていなかったのが驚いた。

いやにあつさりと来たことに。

頼んだのはリルカだが、もう少し時間がかかると思っていた。

宿場街^{リヴィラ}の住民に見つからずに事を進めたいので現場には約束を守れる人材しか集め

と、アステルは眉根を寄せながら言った。

話しが違うと思われたようで交渉役のリリルカは焦る。すぐに弁明を繰り出そうとするも上手く言葉が出せない。

「……そういうわけか、口から一つでも出まかせを言おうものな即座に殺される、気がした。……それに似たことがあっただけだ。それとこいつらは途中で拾ったケガ人たちだ」
 ヴェルフが端的に述べるとアステルはそうか、と静かに言った。

仲間の補足に思わず、助かったとリリルカは胸の内を叫ぶ。

確かに『派閥連合』にやむを得ない事情で加わることになり、人数が大幅に増えた。——しかし、多くは戦線離脱組だ。このまま再突入するのは無謀でしかない。

口裏合わせの為に連れて来られた他の「ファミリア」の代表であるドワーフのドルムルとエルフのルヴィスは見知らぬ存在アステルを見て訝しむ。——どう見ても人間ヒューマンや亜人デミ・ヒューマンの類なぐいではない。

おそらく「ヘステイア・ファミリア」の秘密の一つなのだろう、とため息をつきつつ納得する。

「……他言無用ばかりでもう約束するのも面倒になってきたぞ」

「騒ぎにならなければいい。俺達だつて困っている」

「……それで。私の弱みに付け込み、何らかの交渉を持ちたいと……、思っているのだな

？」

玲瓏たる声色で告げるアステル。それだけでリリルカはおろか周りに居る全ての冒險者の全身に悪寒が走った。

彼女にとつては少しだけ殺気を込めたつもりが思いのほか強く出てしまったらしい。レベル3以上が雁首を揃えている環境なのになった一人に畏怖している。

「え、ええ、まあ、早い話しがそういうことになりますねー。……アステル様には不本意なことかもしれませんが……」

偽名らしいので遠慮なく言うリリルカ。少しだけ自棄やけになつてしまった。

身体の震えを誤魔化す為に揉み手をしている。これは決して媚び諂へつらっているわけではない。そうしないと小便をチビリそうだからだ。

アステルは決して甘い存在ではない。素材採集の時の動きを見ていなければもう少しなめた口調で喋っていたかもしれない。

(べべ、ベル様、ベル様。これ以上はリリの口がうまく回る気がいたしません。お願いします)

と、思いつつベルの背後に移動し、彼を前の方に押し出す。

【ヘステイア・ファミリア】で特に何の役にも立てていない狐人ルナールの春姫はただただ余計なことを言うな、という指示を守り続けていた。

戦いになったとしても真つ先に潰されるのがオチだ、と強く言われているので。後、何も喋るな、とも。

(も、もう僕の出番?! リリも皆も何故か身体を震わせている……)

「……その少年に何を言わせる気だ?」

冷徹な一言がベルの背後に居るリリルカに突き刺さる。だが、それに応えられるほどの余裕がない彼女は無言を貫く。

周りに居るほとんどが限界である、という雰囲気なのでベルは軽く呼吸を整えて覚悟を決める。

「アステルさんの實力を見込んでお願いがあります」

(……そういえば、この少年もそうだが……)

「下層域に置いてきてしまった僕達の荷物やドルムルさんたちの仲間の遺体の回収をお願いできませんでしょうか?」

ぶしっけなお願いだと自覚しながらベルは真つ直ぐに相手の顔を見据えながら言った。

他の仲間達ならば底冷えのする彼女の迫力に負けてしまうところを彼は平然と対応した。

丁度この時、アステルが思索していた為に殺気を免れていただけかもしれない。

運がいいのは冒険者にとって時には有効に働く。

「……回収任務を私にやれとは随分と偉そうじゃないか。己の無力を棚に上げてどの口が言う」

「……だ、ダメもとに決まっています！」

ベルの後ろに隠れながらリルカが言った。

一方的な歎願は傲慢である。弱みに付け込む気満々でのものだから怒るのは当たり前だ。

それでも万が一ということがある。それに礼をしないとはいっていない。

（姑息な小人族バルウムの作業なのだ。……ほぼ奴しか喋っていない。高みの見物をするような強者の気配も無い）

通常であれば突っぱねるところだ。しかし、彼らは皆ズタボロだ。相当な死闘を潜り抜けてきたのは気配で分かる。

多くの犠牲と荷物を引き換えに戻ってきたばかり、というところか、と。そして、そこに平然と下層に降りられるだけの化け物が居るわけだ。

仲間達を集めたのはアステルを討伐する為ではなく、地上進出時に騒ぎにならないようにするため――

見逃す代わりに協力しろ、というのが本命だと分析する。

(断つたところで困る事は無い。寧ろ……協力して困るのはお前達ではないのか？ 何を企む、次代の冒険者)

「もし、協力してくれたら……。ベル様を膝枕していい権利が与えられます」

この言葉にドルムル達^{ドルムル}が嘖き出し、春姫が喘ぐ。

他の冒険者たちも何を言っているんだ、と抗議の声が上がった。

そして——アステルは今の言葉に眉根を強く寄せる。見ようによれば不機嫌な態度になったような。

「どうですかー。今を時めく【ラビット・フット白兔の脚】を独り占めできるんですよー。ベル様はこれでもかなりモテますから」

この言葉に今まで冷徹で氷雪の権化のようなアステルの雰囲気^{アステル}が更に悪くなったように感じた。いや、実際に表情が険悪になっている。そうとしか見えない。

だが、そうではない者が一人だけ居た。

リリル力は相手の反応を見て確信した。

よし、釣れた。

心が揺れば勝ちも同然。強かな彼女は小さく拳に力を籠める。

実際、アステルの心は揺れていた。

(……いくら多少なりとも面影を感じるとしても……。いや、だががかし……。今の私

にそんな資格は……)

内面との葛藤が強すぎて表面を取り繕うことが難しくなっていた。

リルルカは畳みかけるような手段には出なかった。出したい気持ちがあったが相手の様子から勢い余って殺されそうな気配を感じたので。

機会を誤っては水の泡である。

「……ああ、なんと姑息な小人族バルツムだろうか。……この私を相手によくぞ言いかけたな」
男連中の耳には相手が激怒しているとしか思えない声色に聞こえた。

何度か唸り声も漏れている。それだけで何故か、肌寒さを感じる。ここは温暖な階層なのに、と。

(……さあ、ベル様。 出番です)

「……う、うん。……もし、お願いを聞いてくれたらお姉さんの好きにしてくれていいですよ」

、というのを彼が考えられる限りの甘ったるい声色で言った。

リルルカの指導の下とはいえ、人前で披露するのは物凄く恥ずかしく、声が何度か上擦った。それがかえって見た目以上の幼さを演出する結果となり、一部の冒険者達の頬が赤く上気する。

ベルはこのまま逃げ出したかった。だが、ドルムル達の仲間の遺体回収ともなれば一

人では無理だ。自分も出来る限りのことをするつもりだ、と言った手前後てまえあとに引けない。
 (……お姉さん。……何と甘美な響きか……。じゃなくて、いや、その言葉をあの子から
 直接聞きたかった。……全く、どうして私は彼らの話しを聞こうだなどと……)
 そもそも言えばベル達の前に何故来てしまったのか。それはアステル自身にも分
 からない。

白い髪の少年の事をずっと気にしていたからかもしれないし、何らかの未練が引き合
 わせた事象ともいえる。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

異形のアステルが一時いっときの憤怒に彩られた為、リルルカはベルに次の言葉を出さないよ
 うに指示する。

機会を誤つては余計な被害が拡大する。その見極めを下層域のモンスターを相手取
 る気持ちで行おこなった。

気持ち揺らいでいるのは確認できた。もう一押しと言いたいところだが功を焦つ
 てはいけない、と自分に言い聞かせる。

「アタ……、んー」

(いかん。気持ち的に混乱してきた)

アステルは出掛かった言葉を飲み込む。

ここまで自分の気持ち揺らぐのは早々経験がない。——そう、あれは深層域で遭遇した『黒竜』^{ヴリトラ}や『黒竜』^{アシ・ダハカ}や『黒竜』^{テュボーン}を前にした時の様な——

だが、これらはまだマシな部類だ。真の恐怖は意外と身近に居るものだ。

「しよ、少年」

「はいー」

少し興奮気味のアステルに言われて驚いたベルは声を上擦らせながら返事した。

思わず直立不動になる程、今のアステルは怒りに満ちている。

ここでリルカは彼女が余計なことを言う前に畳みかける瞬間だと察知し、自分の言葉をねじ込む。

「お好きにと言いたいところですが差し上げることは出来ません。貸与期間は……一日、これが我々の出せる限界だと思ってください」

（一日!? 一日いっばい膝枕……。さすがにそこまで寝てられないよ。相手も正座の体勢が辛いと思うし）

（……一日いっばい少年を……。いやいや、とても魅力的な提案だが……。ち、違う。そうではない! 別に少年の事などどうでもよい）

アステルにとって大切なのは妹の子だけだ。雰囲気だけ似ていると感じる少年ではない。

というより何なのだ、この交渉は、と憤る。

リリルカは背後に控えているドルムル達にもお願いするように合図を送る。次は数で攻める。

「命からがら戻ってきたばかりで我々も体力の限界だ」

「モンスター共に食い荒らされる前に取り戻したい。仕事に見合うだけの報酬は払えそうにないが地上での便宜には協力する」

本当は駄目だが背に腹は代えられない。そして、彼女に暴れないように言いつける事も忘れてはいけない。

最終的にベルを一日好きにしてい、とこつそりと提言しておく。

少年の犠牲で皆が幸せになる。——多少理不尽な仕打ちだが人助けだと思つて協力してあげてほしいとリリルカは事前に少年を拝み倒していた。

もちろん、相手への要求に対し無理な部分はしっかりと伝える、と。

（ただ要求だけするのは都合がよすぎます。リリ達はアステル様が何を望んでいるのか……、実のところまだ知りません。それも含めて無茶な事をしているのですが……）

いくらベルの事で決心が揺らいでいるように見せかけてもリリルカは騙されない。

賢いモンスターの真の恐ろしきは絶対に動かない意思と決意が存在する。エルフの言葉で言う『大木の心』に匹敵するものがある。

筈だ。であれば、どうして今も笑っていられる？ 勝利の笑いか？ そんな余裕がある程甘くない筈……)

「……随分と余裕があるじゃないか。それなのに私に頼るのか？」

「下層域での戦闘が難しい、というだけです。レベル的にも「ステイタス」的にもいっばいいっぱいなんです」

リリルカの言葉に確かに、とアステルは小さく呟く。

ざっと見た感じだが、適正レベルに見合った冒険者しか居ないようだ、と。

このまま降りても疲労だけが溜まり素材だの仲間の遺体回収だのに使える体力はおそらく無い。

ここでリリルカはベルの脇を肘で突く。攻め時だ、という合図だ。

「お姉さん！」

「!？」

ベルの言葉にアステルが思わず仰け反る。

リリルカはそれを見逃さない。畳み掛けろ、とベルに指示する。そして、はた目で見ている仲間達は容赦が無いな、と呆れ果てた。

「二人で行けとは言いません。ほ、僕も手伝います。体力はまだ残っていますし、回収くらしいなら……」

を隠しているようにリリルカには思えてならない。

（多少の煽りは想定内です。それでもまだ彼女は行動に出ていない。そこがまた恐ろしいところですよ）

少なくともアステルは少年ベル・クラネルを気にしている。

理由は分からないが彼の持つ魅力でも感じたのか。

これまでも彼を取り巻く環境に女性問題は枚挙に暇いとまがないのは事実だ。

人間、ヒューマン 亜人、デミ・ヒューマン 神さえも魅了する。そして、ゼノス 異端児さえも。

「……………」

アステルはベルを見据えながら目蓋を開く。

生前と同じく左右色違いの瞳をベルに見せる。

周りの者からは閉じているように見える顔だが彼女の方では特に問題なく周りが見えていた。あえて相手に分かるように示した形だ。

ベルは彼女の瞳を見て言い知れない恐怖、または畏怖のようなものを感じた。

全身に悪寒が走るようなものではなく、けれども逆らってはいけないような無言の重圧を受けた。

（冷たくて怖い……、けれどとても温かくて懐かしいような……。……僕はこの目を持つ人を知っている？）

(何の因果か……。見知らぬ若者と対峙するとは……。それになんだ、この三文芝居は) 先ほどまで登っていた怒りを鎮める。別に本気で怒り狂っていたわけではない。単に条件に驚いただけだ、と自分に言い聞かせるアステル。

目蓋を閉じて軽く息をつく。その行為にまずリルルカが驚いた。

ほんの数分。いや、一分弱の間。それほどの短時間で相手が冷静になってしまった。

このまま畳み掛けるつもりだったのに回復が早すぎます、と胸の内で叫ぶ。

「こちらの要求を聞きもせず一方的に……。それもお前の仕業か、小人族^{バルクム}」

「心外ですう！ 得体の知れない相手との交渉ですよ。まず言葉が通じるか確認する必要があるじゃないですか」

とりあえず言ってみる、を实践しただけです、と正論をぶつける。

分かかって言っている事はアステルにも理解できる。それでも少し納得がいかない。

おそらく強引な論法でやり込めようとしたのだ、と。

「ぼ、僕は話しをちゃんと聞きます。どうぞ、おっしゃってください」

「……なるほど」

(……なんかバレた？ それほど深い策略があるわけではないのですが……)

(交渉か……。どちらにせよ、対等の立場で対話するのが目的だったか。そして、ままと誘き出された私は選択を迫られている)

最初の時点で無視すればいいものを——
今となつては後の祭りだ。

「ならばこちらの要求を呑んでもらおうか？　それが出来るかどうか」

少し威圧気味に言つてきたのでリリルカは全身を激しく震わせる。

自分達の要求は多過ぎる。それを自覚したうえで相手の無理難題を精査する。しかし、それを見抜かれてしまうと二の句が継げなくなる。

対等の交渉は相手の力量にも左右される。単なる勇気だけでは限界があつた。

「……まず、他のやつらに言つておく。必要な事柄を紙に書け。私の気が変わらぬうちにな」

「え……う？　あ、ああ……」

「仕事が終わつたら地上を案内しろ。……一日好きに使わせてもらえらんだろ？　こちらの要求は少年を一日案内人として使わせてもらう。……出来れば邪魔者は排除したいがな……」

(げっ！)

自分で演技指導した分際だがリリルカとしては一番聞きたくない要求だつた。

本来ならばダンジョンを共に移動するだけである程度の時間を消費させる予定だつたのだから。当てが外れてしまった。

しかし、地上の案内は更に困る。ヴェルフ以下も困惑顔になっていた。

異端児モドキを悠長に地上に連れて行って、あまつえ案内などさせればギルドがまず黙っていない。次いで色々な「ファミリア」に襲われる。

ウィーネの例のように秘密裏に連れて行って暴れられることは無いとしても混乱はきつと起きる。

それとギルドと異端児^{ゼノス}の交渉などはまだ先になる予定だった。



アステルの要求に対し、多くの冒険者は苦悶の喘ぎを漏らす。

満身創痍の一団が襲い掛かっても勝てるかどうか分からない相手だ。余計な犠牲が無いに越したことはない、としても。

会話に参加していない者達もどうすればいいのか思案に暮れていた。そんな中——
「僕でよければ」

「こちらー! 安易に条件を呑まないでくださいー」

思わず怒鳴り散らす小柄なリルカ。

ベルは既に内容を精査した上で決めていた。

アステルが望むなら叶えてやりたい、と。問題は服装だ。外套一枚しか身に着けていないので。

「煩いぞ、小人族^{バルウム}。どの道、私が地上へ行けば騒ぎになる。それくらい分らないとでも思ったか」

「我々の『ファミリア』に多大な迷惑がかかるんです。また異端児^{ゼノス}に関して色々と怒られたり罰金とか払いたくないんです」

「……もうギルドから色々と言われていたのか。それは悪いことをしたな。だが、交渉を持つてきたのは貴様だぞ、小人族^{バルウム}」

「リリ、落ち着いて」

「……だが、譲歩はせん。その意味くらい分からないお前ではあるまい？」

そうアステルに言われて唸り声をあげるリリルカ。

確かに彼女の言う通りだった。協力という不可能に近い条件を相手は呑んだ。それを成功させるためにはベルの協力が必要である。

これ以上は危険水域だと理解した。

それに——彼女は約束した。

可能な限り戦闘^{おこな}を行わない。

だから、既に相手に引き出せる譲歩は存在しない。

それが真実かは分からないが信じるしかない。今は少しでも協力者が欲しい。

交渉において負けたか、といえはそうでもない。ちゃんとこちらの要求を吞ませるこ

とに成功している。それだけでも収獲ではないか。

今以上の欲をかくのは本当に――

ベルの後ろに隠れていたリリルカは一步前が出る。そして、手を出す。

「……握手など必要ない。私はモンスターだ」

「そういうわけには……。こちらとしても対等の立場として相対したのです」

リリルカの行動にアステルは勇気ある者と見るか、それとも無謀と揶揄するか。

しばし出された小さな手を目蓋を閉じた顔で見つめる。

だが、やはり握手を拒んだ。――これは力加減が分からない為に握り潰してしまう事を恐れたためだ。それに――握手に慣れていないのも理由の一つである。

堅い握手は反故になったが交渉は成立した。正式な書類こそ無いがアステルに約束を反故にする気は無い。――握手だけは仕方がなかった、という認識である。

それから準備を終えた後、アステルと体力に余裕のあるベルの二人が改めて下層に挑む。

そつとアステルはベルに命令した。

お前は荷物持ちだ、と。その指示に彼は苦笑しながら頷いた。

03 福音

異形のモンスターアステルは自分でも分からない内に「ヘステイア・ファミア」の要望に応じて下層域を目指そうとしている。本来は地上に向かう筈だったのに。

お供は頼りない見た目だが——かの「ファミア」の団長ベル・クラネル。

あまり髪型に気を遣っていないボサボサの白髪^{はくはつ}。意志の強さを感じさせる深紅^{ルベライト}の瞳。色白の肌の人間^{ヒューマン}ではあるが数々の戦いを経てレベル4に至った実力者である。

青白い肌に尻尾のある謎のモンスターと自分でも思うアステルはダンジョンから採れる資源などを入れる為の大きな袋を携えた。

（急ぐ旅でも無し）

側に少年が居るから浮かれている、というわけはなく——

ベルが自分の記憶にある子供の印象を持っている、というだけだ。おそらく赤の他人。

そもそも目覚めてからどれくらいの間時間が経っているのか実のところ不明。

死して間もなければベル程の年齢ではありえない。

「衣服も頼んでおくべきだったか……」

外套以外は素っ裸。鱗こそ張り付いているが側にいる少年が気にするのではないかと気になってしまった。

こちらから要望を出せば小人族バルウムの少女が調子に乗りそうだったので我慢する事にしたのだったな、と自嘲気味に苦笑する。

一つ呼吸を整えてから中層域に向かう。

依頼を受けたがアステルに急ぐ理由は無く、ベル達の都合でしかない。それと下層に向かう冒険者の姿も見かけていないので焦る必要は無いと判断した。

(……まずは……死体からだ)

放置された死体は二五階層辺りに集めてあるという。

通常であれば一階ずつ降りるところだがアステルの考えでは一気に目的階層まで落下した方が早い、というものだった。

ベルからすれば都合七階層を一気に落下する事は無謀でしかない。ほぼ飛び降り自殺だ。だが、上級冒険者ともなると——下層域まで——五階一〇階層分の踏破など朝飯前となる。

レベル5以上になると足腰の異常な丈夫さに驚くこと請け合いだ。そして、レベル4になったベルも「ステイタス」による恩恵に驚いている最中だ。



飛び降りるぞ、と言った時のベルの怖がりようから少しずつの落下に変更する。

中層攻略の経験が浅いから仕方なく、といった体^{てい}で。

かつて「ヘラ・ファミリア」に在籍していたころは容赦なく病人でも蹴落とされたものだ。

人使いが荒いのはどの「ファミリア」も変わらなかつた印象だったが最近の冒険者はどうやら甘やかされて育てられたらしい。

「……そんな軟弱な気持ちで冒険者になろうとしているのか？ ……つたく、これだから情弱だと言われるのだ」

「すみません」

「仲良しごっこをするために「ファミリア」があるのではない。お前の主神は何を教えているんだ……」

飛び降りつつ不満を述べるアステルに対し、ほぼ謝る事しかしていないベル。

レベル4になって少しは戦えると思いい始めて来たのに、駆け出しの様な扱いに意気消沈する。

実際問題として甘いところは認めるところ。

深層攻略している大手「ファミリア」にはまだ遠く及ばない、と。

「んっ？ モンスターが出たぞ。倒していけ。それと魔石をきちんと砕け。持って帰る

余裕はないからな」

「はっ」

砕くのは他のモンスターが食べないようにするためだ。こうする事で強化種の発生を防ぐことが出来る。

地味ではあるが危険を回避する方法としては最適である。

怒涛の勢いで二五階層に来るまで二時間もかかっていない。それにベルは驚いたが真つ直ぐに来ようと思えば確かにそれくらいで来れるかもしれない。仲間達を連れてきていないからこそ出来た所業でもある。

ここから『グレート・フォール巨蒼の滝』となる。

横幅四〇〇Mメートルからなる巨大な大瀑布が二七階層まで降り注いでいる。

つい数時間前までベル達はここで強化種との死闘を繰り返していた。

(……もう来ちゃった)

「少年。ここから出てくるモンスターは倒せるのか？ 無理なら私が蹴散らすぞ。……

それと死体には触れるか？」

「……連戦はきついですけど、なんとか倒せます。死体は……すみません。扱った経験が無いので……」

弱々しい意見だったがアステルはふむ、と一つ頷いて思考を巡らせる。

布に包くんだものなら運べるはずだ。ここは効率的に行おこなわないと彼の為にならない。
死体に慣れるとはアステルも言わない。

「なら……周りの警戒をしている。無理に遠くに行くなよ」

「はっ」

無駄な議論をせずに指定された場所に向かい、冒険者の死体を発見していく。

損壊が激しくともアステルは平然と触る。それは経験があるから出来ることだ。そうでなければベルと同様に吐き気と戦う事になる。これは身体がモンスターだから、という理由ではない。

多くの死に向き合ってきた経験がなせる業だ。いずれベルも同様のことが出来る筈だ、とアステルは少しだけ哀愁を帯びながら思った。

手際よく死体を集めて一体ずつ布に包むアステルの様子を見て、ベルは感心していた。

よく平気だな、とは思わない。自分達は死者を弔とむらう為に来ている。綺麗汚いの話をする為ではない。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

ドワーフのドルムルとエルフのルヴィスの仲間達の死体の処置を終えたのは更に三時間ほど。

ただ、集めた死体をいっぺんに運ぶことはいくらレベル4のベルでも一人ではできない。そして、二人でもできない。三人でも。

一人につき一つの死体を担いでモンスターと戦いながら宿場場^{リヴィラ}を目指すのは無謀としか言いようがない。

こういう時は専用の隊を結成してもらおう必要がある。

第二級冒険者を多数擁する捜索隊のような――

ベルは遺体をどうやって運ぶのかな、と考えていると近場の水辺から大型モンスターの大水蛇^{アクア・サーペント}が躍り出た。

体長一〇Mもあり、薄緑色の鱗が光りを程よく乱反射させていた。

「うわっ!」

「あれの鱗^{ヒレ}も採集対象だったな」

襲い来る大型の大水蛇^{アクア・サーペント}に対し、アステルは無防備に近づいた。そして、拳一発で壁際まで吹き飛ばした。

見た目は女性の細腕にしか見えないが繰り出される速度、威力はベルの『力と敏捷^{アピリテイ}』を超える。ベルの目から見てもそう感じた。

(……何度か戦う姿を見ているけれど、やっぱりこの人……、強い。……あつ、武器を渡した方がいいかな? 素手の攻撃ばかりだから)

水しぶきによつて濡れた外套が肌に張り付いていて戦いにくそうにしている。

濡れても平気な戦闘衣バトル・クロスを用意すべきだったと、後悔した。

「もう一匹出て来たな。少年。【経験値】エクセリアが稼げるかもしれないから、向こうの止めとどを刺していい」

「は、はい。それと僕の武器で申し訳ありませんが使ってください」

神様から貰ったナイフとは別に小剣も——数本だけ——携えていた。それを一本進呈する。

彼女はそうか、と言つて素直に受け取ってくれた。

弱っている大蛇アクア・サーベントの下に行こうとした時には二匹目が吹き飛ばされて来た。

音から察するに殴打したものの。

「い、一撃!? 僕でもおそろく手こずるモンスターだと思っただけど……」

自分の知る異端児ゼノスでもこんなに攻撃力があるのは——おそろく——アステリオス一体だけだと思つた。

絶対に竜女クイーンでは無理だ。彼女の場合は変身しなければこんなバカげた攻撃力は出せない。

「……どうやら、大漁となりそうだぞ?」

少し嬉しそうにアステルが言うので顔を向けると五体以上の大蛇アクア・サーベントの出現が見え

た。

これが自分の仲間達との行軍であれば阿鼻叫喚は必至。それくらいの事態だ。それなのにアステルは真逆の反応であった。

襲い来る大蛇を次々と物理的に殴り飛ばしていく。折角渡した武器が何の役にも立たない。

(武器が壊れる事を見越しているなら殴った方が効率的……なのかな?)

あちこちに吹き飛ばされるモンスターを見て、本当はそんなに弱い相手ではない筈なのに、と疑問に思いつつ苦笑する。

圧倒的にアステルが強すぎるせいだ。

他のモンスターも現れたが——やはり彼女の敵ではなかった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

リリルカやヴェルフでさえ手こずる硬いモンスターも彼女にかかれば物理的に割られる。この時は多少、不快感を示した。

手が痛い、と小さく漏らしたが素手で甲羅を叩き割るから当たり前だ、と仲間なら抗議している所だ。

(……女の細腕でやる事ではないな)

かつて所属していた「ヘラ・ファミリア」では後方支援の彼女も武器無しで戦わされ

た事が何度もある。

皮膚が剥けて血が出ても。骨が見えようとも。何度も骨折しようとも。

最強派閥だった団員達は死闘を繰り広げていった。

自分より強い団員にかかれば泣き言を言うなど殴れるのが日常茶飯事。

(……モンスターよりも対人戦の方が辛かった気がする。当時の混沌とした時代は我々にとつて良くも悪くも強者を生むには打って付けの土壌だったな)

死にかけのモンスターを次々とベルの下に運び、一段落するまでアステルは戦い続けた。

途中、咳き込むものの戦闘自体は問題なく行^{おこな}えた。

モンスターを倒すときに舞う灰が少々厄介という程度。

呼吸器系に問題があった生前の感覚を引きずっているようで、痛みや吐血はないものの喉に違和感があるのは如何ともし難かった。

(……まだこの身体に慣れていないようだ)

素手から剣へと戦い方を変えて襲い来るモンスターを討伐する。

ベルの存在のお陰でモンスターの発生が滞りないように見える。だがアステルから見ると彼らに避けられている気がした。

深層域のモンスターに戦い慣れているせいか、時差のようなものも感じる。

疑問を覚えつつも次々と現れるモンスターを倒し、ドロップアイテムを集めていく。
途中、人間ヒューマンと大差のない身長を持つ『レイダーフィッシュ』が飛び出してきたが、それらに驚くことなく次々と撃退する。

小一時間ほどでモンスターの襲撃が治まる頃には結構な数の収穫物がベルの周りに集まっていた。

「……少年はそのドロップアイテムを持って。遺体は私が運ぼう」

「はい。よろしくお願ひします」

ひとまとめにして持ち上げようとする^と結んだ紐が軋みを上げる。おそらく途中で切れる可能性がある。

何度か往復するしかないか、と思いつつベルを見やる。彼の方も大量の収穫物を背負おうとして重みで四苦八苦しっていた。

欲をかくと帰還に支障が出る。こういう時に多くの仲間達の存在が大切になる。

♪ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫

物陰を探し、運べない遺体やアイテムを隠しておく。無理をせず運べる分だけ。それがどんなに大変な環境だったとしても、とベルに言いながら。

ふと「ファミリア」で活動していたころを思い出す。

当時はもつと過酷だった。だが、それは一時いつまでものものだ。

過去の栄光を失った自分に幸せは不釣り合いだ。すぐに雑念を振り払い、上層を目指す。

（この辺りのモンスターを仕留められるなら私が先行した方が効率的か。そもそも少数で遺体回収などしないからな）

ベルを抱えてしまうと運べる量が更に減る。ここは無理にでも一人で登ってもらわなければならない。

聞けばモンスターの討伐自体は特に問題ない、と返答してきた。それにアステルは領きだけで応える。

五袋分の遺体を担いで文字通り飛び上がるアステル。

モンスターの身体となつて飛んでいるが飛行能力があるわけではない。そう見えるだけだ。

先行する彼女の動きに驚きつつもベルはモンスターの再出現に気を付けつつ駆け出す。だが、いくらレベル4とはいえ一人での移動は大変だった。元より探索を始めたばかりの彼にとつてダンジョンの罠を避けていかなければならない。

（無駄な戦闘しないようにするにはあれくらい出来ない駄目なのか。……いやいや、いくらなんでも無茶が過ぎると思う）

でも、と思いつつ憧れの人ならばアステルの動きについていけそう、とも。

気が付けばそのアステルの姿は無く、置いてきぼりになってしまった。

のんびりと探索しないからこそ出来る技だとしてもここまでの開きがあるとは思わなかった。

それから三〇分ほど経った頃、上から物凄い勢いで落下してくるものに気付く。

一見すると大^{アクア・サブド}水蛇が落ちてくるように感じるがアステルだった。

もう一八階層から舞い戻ってきたらしい。そしてすぐに残りの遺体を背負って飛び上がったいく。

圧倒的な強者が見せる動きに思わず見惚れていると側の壁からモンスターが湧きだした。

「……レベル4だからって自惚れているわけにはいかないってことだね」

黒いナイフを構えて襲ってくるモンスターを蹴散らす。

アステルとは違い、一時間ほどかけてベルは一八階層に戻ることが出来た。しかし、荷物はまだ下層に残っている。また取りにいかなければならない。

まずは小休止しようと思っていると仲間達がやってきて^{ねぎら}労ってくれた。

「大量ですね、ベル様」

「そう？ いっぺんに運べないからまだ下に残っているんだけど……」

そう言いながら収穫物をリリルカとヴェルフに預けた。

ここからなら他の仲間達に分配しておいた方が運びやすくなる。そうしている間も

アステルが死体を持ってやってきた。おそらく全員分を運び終わったところだろう。それらをドルムル達に引き渡す。

「……あ、ありがとう。本当にありがとう」

彼らの礼にアステルは何の反応も示さないまま下層域に向かう。

休んでいたベルが慌てて追いかけてしようとしたが彼女が断ってきた。効率的な問題で一人の方が捗るはかど。それでも来るなら勝手にしろ、と。

ベルは気を引き締めて再突入を決意する。

——都合三時間ほど。おそらく夕方から夜になりかけの時間に資源の搬入が終わった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

【ヘスティア・ファミリア】にとって当面の資金源が確保されたが殆どアステルの功績だ。依頼的クエストには失敗に近い。

ここから自分達だけで運べばいいのでは、とカサンドラや命が言ったが団長であるベルとしては納得できなかつた。

不測の事態があつたとしても他人に頼つた成果は成功とは言えない。

「何を言っているらっしやるんですか、ベル様。不測の事態が無くとも初期の目的は【ファミリア】として達成しているじゃないですか。……資源の搬入が出来なかつた以外は特

に問題が無いと判断いたします」

「未到達ではない、という話しであれば確かに……」

「そうしてくださいリリ達の為に」

正直者のベルとしては嘘をつきたくない。そんな彼の性格を仲間達は知っているが時には方便も必要だぞ、とは言っている。

それに——ベル・クラネルは仲間や守るべきものの為なら『偽善者』になる覚悟を決めた筈だ。へんに律義なところが玉に瑕。

そんな彼らを眺めつつ功労者たるアステルは依頼していた戦闘衣バトル・クロスの試着を始めていた。

やはり全裸での戦闘は何かと気になってしまう。特にベルが側に居ると気恥ずかしさが襲い来る。——彼女として女性としての恥じらいがあった。

(この太い尻尾はどうにもならんな。……珍しい亜デミ・ヒューマン人とっておけばいいか)

尻尾を持つ亜デミ・ヒューマン人が実際に存在するので特定の部位だけで恐れられることは無い筈だ、と。

いつそ断ち切るか、と思わないでもない。それとは別に——

自分は何をやっているのだろう、と。

(……目的を果たした冒険者はその後、どうなるのか。無様に生き恥を晒すか……。そ

れとも人生を無為に使うか)

何を選ぶにせよ、自分は今ここに居る。

アステルはベル達と離れて仮眠の準備を整える。それほど重労働した、という気持ちは無いが精神的な疲労を感じていた。

また明日——そう思いつつ横になる。今度は人目を避けずに近場の木で。

しばらくすると毛布を持ったベルに気が付く。お節介焼きだな、と思いつつも黙っていた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

周りが明るくなる頃に目を覚まし、顔を上げると近くにベルの仲間達の寝顔があった。

どういふつもりか訝いぶかしんだが無視する。おそらく大した理由は無い、と。

彼らを起こさないように移動し、顔を洗いに水辺へ向かう。

死ぬ少し前まで数々の死闘を繰り広げてきた筈なのに随分と落ち着いている。それがまです気になった。

呑気に素材採集の依頼クエストが出せるほどの余裕があったのか、と今更ながら気が付く。

(やはり妙だ。オラリオは闇派閥イヴァイルスの連中によつて手痛い打撃を受けた。その復興は……

私の知る限りではしばらくかかる筈……)

それとも既に済んでいる時期なのか、と。

どれくらいの間が経過したのか。そして、勝者が今、どうしているのか。

地下の奥底からアステルは思いを馳せる。

彼女が物思いに耽っている頃、目を覚ましたベル達は朝食の準備に取り掛かっていた。

採集した素材で宿場街リヴィラから食料を調達し、それぞれ思い思いに料理を作る。

「珍しい鉱石を思いのほか高く買い取っていただけましたし、地上でもそれなりの報酬になるかと」

「無事に持ち帰れば、の話しだけどね」

駆け出し以外は地上に向かう事にそれほどほどの障害は無い。

問題があるとすれば『強制任務ミッシェン』の成否をギルドがどう判断するか、だ。

ドルムル達の口利きがあつても納得されない部分があつても出そうな気がする、とリリルカは思った。勿論、最悪、口から出まかせを言うしかないけれど。

後はアステルの処遇くらいだ。

そんな時、怪我をした仲間の見舞いに宿場街リヴィラに残っていた「タケミカツチ・ファミリア」の団長カシマ・桜花がやってきた。

偉丈夫の男性でヴェルフは彼の事を大男と呼んでいる。

「桜花殿。桜花殿も朝食を食べにいらしたのですか？」

「いや、そういうわけでは……。今しがた宿場街リヅイラで騒ぎがあつてな。あそこはいつも騒ぎがあるのだが……。今度のは殺しだとか」

この一八階層はベルの知る限り平和、平穏とは無縁で何かしらの騒ぎがあるのが通例のように感じるほど賑やかなところだった。

元々世間的に後ろめたい冒険者が作った街だ。何も起きない事の方が珍しい。

そのゆえか、街は度々壊滅の憂き目にあい、既に三三〇を超える代替わりを成し遂げていた。

ただ、無秩序に見えるが殺人事件が頻発するほど悪いところ、というわけではない。少なくともベル達から見た宿場街リヅイラの住民は良くも悪くも憎めない冒険者に見えた。

「喧嘩ではなく？」

「ああ。明らかな殺しだ」

無法に近いがそれなりに秩序のある街だ。当然、殺人は許されていない。犯人を見つけたら「ガネーシャ・ファミリア」かギルドに引き渡される。

地上とダンジョンの秩序をそれなりに保っているからこそ多くの冒険者達に愛されている。

殺人と言っても大量無差別というわけではなく、特定の人物に対する私怨のようだ

目星がついているなら無関係を装って移動できるのでは、トリリルカが言うとベルは混乱したのかすぐには応えなかった。

団長の決断が無ければ仲間としての指針が示せない。なので——しっかりとって下さい、トリリルカは強い語気で言った。

(……:よりもよって【疾風】ですか……。しかし、お人好しのベル様の事ですから……。:、すんなりと帰るなんて、無理ですよね……)

一部は【疾風】とは誰だ、と疑問を抱いた。

『二つ名』を戴いても浸透しなければ疑問を呈される事はよくある。ベルもまだ大半の冒険者の異名を知らない。

【疾風】はその中でも忘れられないほど身近で——いつもお世話になっているエルフのものであった。だからこそ信じられなかった。

「坊やはどうしたい？ あんたが決めてくれないと動けない連中が居る事を忘れていないだろうね？」

アマゾネスのアイシャの言葉にベルは現実に戻る。少し動揺していたことに驚きながら。

今すべきことは仲間の今後の方針であり、事件を解決する事ではない。頭では分かっている。だが、やはり見過ごすことが出来る気がしなかった。

いつもお世話になってる人が苦境に立たされている。でも、絶対に無罪だとは言わない。人には言えない事の一つや二つあるものだ。

（僕がすべきことは……、仲間を地上に帰すこと。「ファミリア」にはそれぞれ請け負った仕事がある。私的な理由で動いては仲間が混乱してしまう）

「ここで二手に別れるかい？ 『強制任務』の報告は事後でもいいんだし」

「ヘスティア・ファミリア」だけ残つても構わないと思います。仕事自体は完遂してますし。……報告が少々面倒くさくなるのは否めませんが……」

（ドルムルさん達の仲間の遺体を運ぶのは僕達の仕事じゃないけれど……。あつちもこつちも優先しなければならぬ時、どうすればいいんだ……）

気楽な一人探索とは違い、責任が伴う仕事だ。

他の「ファミリア」の団長も取捨選択に迫られている事だろう。そして、今度はベルの番になっている。

何でもかんでも成功させる事は理想論でしかない。希望的観測はより困難を招くだけ。

——その理想を捨てずに今まで頑張ってきた。



決断を迫られるベル達の下に宿場街から出てきた冒険者が近づいてきた。

ダンジョンの中は——モンスターを除けば——冒険者しか居ない。そして、一八階層以下の『安全階層』セーフティポイントに潜れるのはレベル2以降ばかり。それなりの修羅場をくぐつた者が大勢を占める。

ベル達の下に来るのはおそらく容疑者の確認のため。迂闊に避けては怪しまれる。

(この死体の山は問題ない筈ですが……。時間をかけてしまうと腐敗が進んでしまます)

リルルカの懸念はドルムルとルヴィスも同様だった。

手厚く葬りたいのに余計な時間を割くことになるのだけは避けたい、と。

「ヘスティア・ファミリア」はそれほど宿場街リヴィラの利用回数が少ないので交渉事をドルムル達に依頼する。

「容疑者が分かっているなら我々を疑う理由は無い筈なんですが……」

そうしている内に冒険者の一団がベル達の下に到着する。どれも見たことが無い冒険者達だった。

後ろ暗い過去を持っていそうな、いかにも怪しい顔つき。寧ろ、彼らの方が悪人面だ。

それぞれ簡単に挨拶を交わし、迂闊に動かないように指示が下る。だが、それをドルムル達に従わせる強制力は無い。

仲間の遺体を運ばなければならない事を伝えても宿場街側リヴィラがあまり取り合わない

顔にかけた布は煙い事を理由に付けている。どうにも咳が出てしまう、というので。「……先ほどから煩い^{うるさ}が何かあったのか？」

「向こうで殺しがあつたんだと。それで犯人を捕まえようぜつて持ちかけられたところだ」

端的にヴェルフが述べる。

アステルは何の興味も抱かなかつたのか、そうか、とだけ言つた。

早々に興味を無くした彼女はベルに地上にはいつ行くのか尋ねた。

「その犯人というのが僕の知り合いらしくて……。どうしたらいいのか迷つてます」

「……お前はどこまでお人好しなんだ？」

「どこまでも、ですよ。アステル様」

よくぞ言つてくれた、とばかりにリルルカが補足する。

現場に待機しているのは迷っているから、と言われるとアステルも呆れてものが言えなくなる。

ベルは事件の内容を聞くべきか、それとも無視するか決断を迫られていた。

無視したくても犯人が知り合い、かもしれない。——信じたくないが目撃者が居ると言われてしまった。

ゆえに素通りはあり得ない。彼の中では早々に首を突つ込むことが確定した。そし

て、当然のように仲間達が巻き込まれてしまふ。

「少年。物事には優先順位がある。全てを救う為にお前は何を犠牲に出来る？」

アステルの言葉にベルは——何度も投げかけられてきたような気持が蘇る。

気持ちが急いで周りが見えなくなることがある。そして、たくさん後悔する。

自分の決断で犠牲になるのはリリル力達だ。一人だけの責任で済んでいた刻は過ぎ去ってしまった。

(いつも僕は皆を危険に晒している。……そこそが甘えなんだろう)

「……もし、可能であれば皆を幸せにしたい。だけど、全部を満たす事は出来ない」
役割を分割してもいいだろうか、と呼び掛けた。元よりそれしかない。

先の戦闘で多くの荷物を失い、アステルの協力の元でいくらかの資金源を確保できた。ここから更に無茶をするのは無謀であり、指揮を取るには些か不適格だと言わざるを得ない。

まずアイシャと桜花は護衛役。千草とカサンドラとダフネの三人をドルムル達の世話などを頼んだ。

ドルムル達の仲間の内何人かは軽傷なので遺体運びをお願いしておく。

「団長不在でギルドに報告する事ってできるの？」

「出来ませうけど……。絶対に怪しまれます。特にベル様はこの頃信用を無くしております

ヴェルフと春姫は荷物の整理を。

(……もしかして、この少年はいつも何かに首を突っ込んでいるのか？ ……愚かな、と普通なら言うところなのだろうな)

仲間達の顔を見てるとそう思えてならない。

アステルであれば無視するのか、と言うとそうでもない。

冒険とは常に不測の事態が起きて当たり前である。予測がつかないからこそ——
冒険の醍醐味である。

当時は派閥間の争いが絶えず、仲間の死が日常であった。そんな殺伐とした日常にもかかわらず、冒険者は前に進んでいた。——あの絶望を知る前までは確かにあった。

今、ベル達が直面しているような輝かしき未知の試練が。

(歯牙にかける価値も無く……。このような些事に携わる手間暇が実に煩わしい。……そんな傲慢さを上級冒険者となった自分達は持っていた。……今、ここにあるのは磨かれる前の原石……。久しく忘れていた冒険者としての本質)

若き冒険者が愚行を犯す。けれども、それこそが正しい道だった。

——少なくとも生前に相対した小娘達はそのような類たぐいだった。そして、その者達に敗北したのはほかならぬ強者たる自分ではなかったか。

目的を失い、ただ流れるままに動くだけの肉塊——もし、叶うならば自分の意志を通

してみた、という気持ちが湧かないものか。

ベル・クラネルの様子を眺めながら自問自答を繰り返す。

「あ、あの……。すみません」

思考の海に埋没していたところに唐突な少年からの謝罪。思わず僅かに驚くアステル。

軽く呼吸を整えてどうした、と尋ねた。そういえば、随分と彼に声をかけている気がする、と。

「また事件に首を突っ込んでしまい、アステルさんを案内する時間が伸びてしまう事です」

「……それはお前にとって日常茶飯事のように感じている。……おそらく、誰もがそう思うほどに」

ベルは凶星を突かれたような顔になった。

側に付き従っているリルルカも良くお分かりで、と頷きながら感心した。

ここでアステルは気づいた。そして、今自分が考えている事が実に愚かしい事実――

確信――であることを。

ベル達彼らが地上に出ても混乱が勝手に広がる可能性に。

地下での足止めはもはや意味がない。であれば――流されるまま行動したところで

何も変わらない。

いつもの冒険者としての行動に他ならない。

アステルは否定的な意見を述べず、ただただベルのやりたい様に、と告げた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

宿場街で情報を集めていた命がベル達の元に戻り、事件のあらましを簡単に述べていく。

【疾風】は何者かを追いかけて中層に向かったこと。

復讐の為に行動していること。

被害者が『闇派閥』^{イツイルス}の関係者だと疑われた、ということ。

「単に後ろ暗いから殺した、というのであれば宿場街^{リヅイラ}の住人の殆どが対象となつてしまっています。けれども、被害者は今のところ数人だけ。残りは怪我を負わされただけのようです」

「復讐とは穏やかではありませんね。……あのエルフなら仕返しくらいしてもおかしくない気がいたしますが……」

リリル力は自分のお腹をさすりながら言った。

ただ、普段の様子から本当に復讐するような人物だと思っていなかった。それはベルも含めて――

だからこそ、今になって行動を起こしたのが信じられず、彼女を知る者は驚いていた。(度々出てくる『疾風』とは……、まさかあのエルフの事か? ……そいつが復讐とは……。……私の中では繋がらん。少なくとも最後に相對したあいつの様子からは想像できん……)

「ベル様たちが中層に行った時に誰かと会いませんでしたか?」

「ほぼ直通で降りたから、他の冒険者は見かけなかったと思うよ」

(……直通!? 真つ直ぐ降りる一番危険度の高いコースを!?)

「中層にはいくつかの広間^{ルーム}がある。そこに潜んでいれば会わない事もあるだろう」

「……普通は危険を回避するために狭い通路を通っていくらしいぜ……」

短時間で踏破したところから相当な無茶をしたのは想像に難くない。寧ろ、それほど危険を冒したのに平然と行って戻ってくるところから駆け出しとの差を感じてしま

う。もし、アステルの言葉が正しければ確かに誰とも会わない事もあり得る。

行き帰りの時に出会わなかったのであれば改めて通路を探すしかない。

つまり——再突入する覚悟を決める、という事だ。

「……ベル様。三度目の正直という言葉があるそうですよ?」

「……(ざんげ)めん」

（素材採集の場合は何度も潜りますけどね。ですが……、今回ばかりは無茶もいいところ。リリ達の戦力というか体力面や物資の具合からも……。一旦地上に出てギルドに通報した方が無難なんですけどね）

そんなことを考えて居るとドルムル達を伴って上層を目指すアイシャ達の姿を見つけた。

彼女達に「ガネーシャ・ファミア」へ救援要請を依頼すべきだと判断し、手紙を認めた。これにはベルの反対があつても聞き入れる気は無い、と語気を強めて少年に警告した。

仲間の命がかかっている冒険なのだから、と。

「……はい」

「何にしても事後処理まで我々は出来ませんし、余裕ありません。専門家に任せただ方がいいですよ」

「……うん、分かった。……リリが居てくれて助かるよ。僕一人だけだつたらきつと……、皆を怒らせたままになっていたと思う」

「……少し気になったのだが……」

と、アステルが口を開く。

ベルはどうぞ、と彼女の意見を促した。

「仕事の取り分はどうなるんだ？ 採集したものを預けたが……、あいつらは信用に足るのか？」

「……少なくとも持ち逃げは無いでしょう。問題があるとすればリリ達が無事に地上に戻れるか、くらいです」

見ず知らずの者に物資を預けるのは確かに心許ない。

口約束だけして無報酬ということも現実的になくは無い。そういう事がある事をリリルカはよく理解していた。

今回同道してくれた「ファミリア」は懇意にしているところで、信頼の積み重ねもある。新規加入者の信用度は怪しいが——おそらく大丈夫だろう、と。

以前のリリルカであれば全く信用したりはしなかった。それもこれもベルと出会って変わったお陰だ。

「相手を信用する以前に我々【ファミリア】には膨大な借金二億ヴァリスがある事を忘れていませんか？」

「……うっ」

「ホントに主神共々バカでお人好しなんですから」

（……）も主神に頭を痛めているのか。……分かるぞ。うちの主神ヘラも埒外アホの凶神ホだったかな）

側で暗躍していることをお忘れですか？ 全く解決に至っていないんです。昔から……」

リリルカの一言にベルは呻く。

先日の異端児にまつわる騒動で闇派閥に手痛い打撃を受けたばかりだ。そんな彼らを許す気持ちはベルにも無い。だが、殺したいほどの憎しみは持ちたくなかった。

今までの常識が崩れ、ダンジョンに潜る事にも躊躇いが出てしまったけれど——
「とにかく、あの堅物エルフを捕まえない事には始まらないよな」

方針が固まり、次にすべきことは目的の人物とどうやって接触するか、だ。

人員は既に「ヘステイア・ファミリア」だけとなっている。戦闘面が心許ない。

アステルとの再交渉はリリルカにとって危険水域をすでに突破中である。これ以上ともなると目から血が出そうな予感しかない。

（次は添い寝ですか!?! 抱き枕ですか!?!）

一日から数日になる可能性も高い。

敵を見るような目でアステルを見るリリルカ。その険悪な雰囲気と命と春姫が恐れ戦く。しかし、アステルは彼女の睨みをそよ風の如く受け流していた。

ベル達の結論が固まってきた頃にアステルは下方に顔を向ける。

（……内容から考えて、貴様のようだな。顔見知りには会うのは当初の目的の一つだが

……、一体何があつたのか。私はそれを聞くべきか？ 過去の亡霊となつた今、柵しがらみはかえつて無用の長物か)

ここで考えるより直接会えば分かる事もあるか、と思ひ搜索に参加する事にした。

素直な提案に対してリリルカは訝しむが強力な助っ人であることは疑いのない事実だ。問題はどんな見返りを要求するか、だ。

不安の色を滲ませるリリルカの心を見透かしたかのようにアステルは告げる。

単なる気まぐれだ、と。

この一言が何を意味するのか、奥底出来るが現時点では要求は考えていない、が正答のような気がした。そして、相手の気が変わる前に揉み手しておく。

泰然とした異端児ゼノスの女王のように見えるアステルの底は未だ見えず。それが一番恐ろしい、とリリルカは思った。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

ベル達ベルが結論を出した後、搜索隊に加わりたくいと宿場街リヴィイラを取り仕切るボールスヒューマンという人間の男性に言うヒューマンと討伐隊だと言われてしまった。

彼らは賞金首となつている「疾風」を捕縛、ないし倒すつもりでいた。

当然のようにベルは驚いた。

金にがめつたいボールスがそれを決めたのは賞金が八千万ヴァリスだと聞いたからだ。

(……この人、自分の実力を分かって言っているんでしょうか?)

「賞金は俺様達で独占する。お前達は黙って俺様達の為に働け。それが『ならず者達の街』の規則だ!」

配下の仲間達は声を荒げていたが聞いている側は不満タラタラである。

理不尽だと抗議しても大頭の権利を振りかざすボールスが封殺していく。

聞いているだけだと独裁的だが実のところ強者には弱く、すぐに媚びるところがある。

現場の雰囲気からも何かの間違いです、と言えるわけもなく。ベルは焦りを覚えた。

(……何の証拠もなく無実だ、とは言えない。でも、戦いたくない)

「……搜索にしろ、討伐にしろ。当人を見つけないければ始まりません。……彼らにリユー様を捕まえられるとは思えませんが……」

少しだけ逡巡し、リリルカの言葉に頷く。そして、討伐隊に参加する事にした。今は多くの人員を頼つても当人を見つけないければならない。

ベルの参加表明にボールス達は勝鬨を上げるように喜んだ。

今を時めく【白兔の脚】は彼らにとつても有名となっていた。かつてこの街を救った英雄の一人であるから当たり前ではあるが——喜び過ぎのきらいはある。

苦笑するベルは彼らのお祭り騒ぎについ懐かしさを感じた。

(……何人か闇派閥イッイルスに所属していた者が居るそうだが……。見覚えのある奴は居ないな。下つ端なら知らない顔があつても不思議は無い)

アステルは軽く人ごみを一望し、女の勤などに引つかかる者が居ない事を確認する。

闇派閥イッイルスといつても一般人も多く抱えており、彼女とて構成員の全てを把握しているわけではない。

彼らの多くは邪神、悪神を主神とする「ファミリア」の冒険者だ。都市に混乱を振りまき、破壊と殺戮を好む。

アステル達はそんな彼らを利用してただけで本質は別にあつた。
 気たるべき災厄に打ち勝つ英雄を作る。

最強派閥があえなく敗北した『隻眼の黒竜』を倒すため。

それには今以上の冒険者に育ってもらわなければならぬ。それだけ迷宮都市オリオに居る冒険者達は脆弱にして懦弱。失望の塊にしか見えなかつた。

——いや、それは方便だ。本音の部分では違つていたのかもしれない。

(実際、言い訳だ。我々は彼らの敵となり、敗北した。それで終わりだ)

余計な雑念に囚われ、つい感傷的になつてしまった、と自嘲する。

彼女が軽く嘆息していると戦力が整い次第、中層に向かうぞ、とボールスが宣言する。

♪
 ♪
 ♪
 ♪
 ♪
 ♪
 ♪
 ♪
 ♪
 ♪

大勢を引き連れて中層に足を踏み入れることになったベル達は不安を滲ませていた。このまま戦いになるのか、と。

勢いにつられて移動しているが戦意は仲間共々ないに等しい。ボールス達とは違い、理由を聞くために向かっている。

三度目の中層。早速、モンスターが現れる。それをベル達に討伐させるボールス。

「おう。遠慮なく倒してくれ。レベル4になったおめえさんの実力を遺憾なく発揮してくれや」

「……そうすると【疾風】に遭う頃には力尽きそうです」

「回復薬を格安で提供するから心配すんじゃないやねえ」

「宿場街価格だと暴利でしかない。リリルカ辺りは払いたくありません、と抗議する所だ。」

無償提供ではない所が彼ららしい、と思える。

一八階層を根城にしている為か、ボールス達もそれなりに戦えた。あまり被害者も出ず、魔石やドロップアイテムを懐に入れている者がちらほらと。

全員が私怨で動いているわけではなく、こういうお零れ目的の者も少なからず混じっていた。

(回数を重ねている為か、段々と身体の動きが良くなっている気がする)

「ランクアップ」したてのベルは当初苦戦していたモンスターの討伐効率が上がっていることに驚いた。

初見と既知の違いとでもいうような。

この調子であれば二七階層まで仲間達と攻略するのも問題ない、と判断できそうな気がした。——余程の緊急事態イレギュラーが起きない限り、だが。

モンスターの討伐と共に階層に存在する無数の広間ルームを搜索する。

下に降りる毎に広大になるダンジョンの性質上、探索が困難になっていく。

ベルはほぼ中心地域しか通らなかつた為、思いのほか複雑な迷路に驚いた。初見の探索の時にも広いとは思っていたけれど。

「あつ、すみません。自分の『スキル』を使うの忘れておりました」

と、申し訳なきように命が発言する。

モンスターを探知する『八咫黒鳥』ヤタノクロガラスの他に『神の恩恵』ファールナを持つ眷族を察知する『八咫白鳥』ヤタノシロガラスがある。

目的の人物もどこかの「ファミリア」に籍を置く冒険者だ。同じ階層に居れば探知に引つかかる可能性がある。特定までは出来ないけれど。

早速、スキルを使い反応があつたところを限くまなく搜索。

このスキルに隠蔽は通じない。弱点は大勢の中から特定の人物を探り当てることが

出来ない。

命のスキルによって闇雲に探さなくて良くなり、討伐隊はどんどん下層に降りて行った。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

降りつつベル達はボールスが連れて来た冒険者達が気になった。明らかに殺意を感じる。それも憎悪ではなく歓喜のようなものも。

さすがにボールスはその類たぐいではなかったようだ。

賞金目当てにしては異常だ、と不安を募らせる。

そして、二五階層。——その奥の広間ルームから爆発音が鳴り響く。おそらく何者かが戦闘を繰り広げている。

ベルは急いで駆け出すもののヴェルフは少し離れたところにある希少鉱物に目を奪われていた。リリルカはそんな彼に失望の目を向けて呆れた。

戦闘の役に立っていない狐人ルナールの春姫も連れてきているが、こちらはいざという時の切り札だった。

最後のアステルは流されるままついてきていた。

「他に反応なし」

「行くぞ、おめえらー！」

ボールス達が一斉に広間^{ルーム}に駆け込むと木刀を持った人物とズタボロの冒険者が見え
た。

一方は強者の雰囲気を持ち、緑色の外套をまとい顔の下半分を布で隠している。

もう片方は先日まで宿場街^{リヴィラ}に滞在していた猫^{キャットピブル}人の男性だった。彼はケガ人で仲間
と共に「疾風」に襲われたと言っていた人物の一人だった。

この緑色の外套をまとう人物こそが「疾風」であった。

「た、助けてくれー!」

ボールス達の登場にポロボロの冒険者が走り寄ってきた。

多勢に無勢なのは明らかだが、それでも「疾風」は——リユー・リオンは武器を持つ
手に力を込めて駆け出した。それを真つ先に防ぐのはベル・クラネル。

突然の少年の行動に驚いたのはリリルカ達のみならずリユーも同様だ。寧ろ^{むし}、何故、
貴方がここに居る、と。

「どきなさい、クラネルさん。その男をここで、確実に殺さなければならぬのです」
「その前に理由を……。理由を教えてください」

いつも優しくして様々な助言をしてくれた彼女の雰囲気からは想像できない憎悪が
あった。何があつてこんな凶行に至ったのか、ベルはずつと疑問だった。

復讐する相手なのは何となく察せられるが、だからといってこのまま殺人を許しては

いけない気がした。だから、止めに入った。

リユーは気高く高貴なエルフだ。こんな無粋な真似を許していいはずがない。

(……私の速度に追いついている？ クラネルさん、貴方はそこまで強くなつたのか)
 (まだ『アビリティ力』ではリユーさんが上か……)

技と駆け引きもリユーが上手。そんな相手を倒せるとは思えないし、倒したいとも思っていない。まずは話し合いを持つところから、と決めていた。

その間に猫キヤットビープル 人の男性はボールス達と合流し、リユーの悪事を言い広めた。

既に何人もの仲間が惨殺された、と。その死体が離れた位置にある、とも。

言われた方向には確かに血まみれの無残な死体の様な物体が転がっていた。遠めなので正確な形が判別しにくい。それと先ほどの爆発音は逃げ時に使った爆薬である、と男性は言った。

「おめえ、スライパーキヤット【奴隷猫】のジユラ・ハルマーじゃねーか」

誰だ、というヴェルフの問いにボールスが懇切丁寧に解説する。その間もベルとリユーの戦闘が続いていた。

ジユラは闇派閥の一つ【ルドラ・ファミリア】の構成員で、かつて【アストレア・ファミリア】を毘にかけて壊滅させた。彼はその生き残りである、と。

【疾風】は【アストレア・ファミリア】の構成員。ジユラは復讐されても仕方がない立

彼の『耐久』はリユースの一撃にも怯まない。

完全に痛みが無いわけではないが戦闘意欲は消失していない。

「駄目です。貴女はそんなことをする人では」

「奴は、奴だけはこの場で殺さなければ……」

憎悪に彩られたエルフの顔に思わず怯むベル。これほどの激情を今まで見たことが無かった。

理由を聞きたいところだが、とてもそんな雰囲気ではない。だが、それでも彼女を止めなければならぬ気がした。

後戻りできない、とベルの心が訴えている。

周りの雰囲気から手遅れかもしれない。けれども、と。

この期に及んでベルは彼女を、リユースを信じたかった。そうしなければならぬ気がした。

数度の打ち合いになったが足止めは成功している。以前であれば決して追えなかった速度が――

リユースもまた少年の成長に驚いていた。

(引き離せない!? 多少の手加減をしているとはいえ、ここまで……)

ポールスは仲間達に「疾風」を囲め、と言わなかった。いや、言えなかった。

あまりに激しい戦闘について見惚れてしまった。あの中に飛び込める奴は居ない、そんな気がした。

それが油断になったのか、「疾風」を殺せ、と言いつつジュラは逃げ出した。

「あつ、てめー」

この広間^{ルーム}は無数の出入り口がある。逃げようと思えばどこからでも逃げられるし、迂闊に飛び込めば迷ってしまうおそれがある。

仲間の一部をジュラの追跡に回し、残りは「疾風」対策に充てる。

ジュラの逃走にリユーは更に怒りを見せ、ベルの猛攻をもともせず吹き飛ばす。もはや魔法を使っても彼を排除しなければ、と。

そんな中、冷静に佇んでいたアステルがボールスを現場から引きずり出して尋ねた。

「……お前、さっき気になる事を言ったな？ 詳しく話せ」

「な、なんだ、お前は」

「……こう言っていないかったか？ さっき逃げた猫^{キャットピートル}人……【ルドラ・ファミリア】が【ア

ストレア・ファミリア】を壊滅させた、と……」

有無を言わさぬ静かな口調だが、この場では底冷えのする冷気を帯びているように感じられた。

相手の迫力に怯えたボールスはそうだ、と告げる。

詳細までは知らないが、と言いおいて大体のあらましを説明する。

(それほど「ルドラ・ファミリア」が強かったのか？ あいつの様子からは想像できんが……。それに罨程度で壊滅するとも……)

正義の使徒と標榜していた「アストレア・ファミリア」は良くも悪くも強か^{した}でし^ぶとい眷族ばかりだった。直接戦った本人が思うほどに。

それとも——疲弊したところを狙われたのか、と。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「アストレア・ファミリア」が壊滅したのは事実らしくアステルは自分でも分かる程の失望を感じた。

あの生意気な小娘共がこうもあつさり——それはそれで腑に落ちない。何故だが納得できなかった。

単なる罨で滅ぼせるほどヤワではない。

(……私を倒し【経験値】^{エクスピリア}を得たのではないのか？ あの死闘がこんなにあつさり^と無駄になつていいのか?)

強者を倒せばそれに見合った【経験値】^{エクスピリア}を手に入れることが出来る。アステルもその知識があり、それによって強化してきた歴史がある。

だからこそ、彼女達が強くなつていないわけがない。

「邪魔です！ ジュラを追わねば……手遅れになる」

「何故です、リニューさん」

武器を打ち合わせつつ互いに応答する。

一方は何かに焦り、もう片方は訳も分からず止めに入る。この攻防は何処か奇妙であつた。

殺意の塊はすでに消えた通路の先へ。決して無差別なものではない。

【疾風】の目的を聞き出すには彼女を引き倒してもしなければ無理な気がした。だが、出来るのかと自問すればやるしかない、と答えが出る。

ベルが冷静さを取り戻しているとボールスが連れて来た冒険者達は一様に【疾風】をやつちまえ、と騒ぎ出す。

明らかに獲物を前にした狩人達だ。それぞれ武器を構えて囲もうとする。

【白兎の脚】ラビット・フット！ しっかり足止めしておけよ」

「み、皆さんも落ち着いて下さい」

彼らの嘲る表情を見てアステルは得心がいった。

まんまと策にはめられたな、小娘、と。

これも失望かと思えば致し方ない出来事である、とも取れる。無理に判断しようとは思わないが——自分の出番が無いのは面白くない。アステルは大人しく見守っていた。

何らかの策にはまっているのは理解したが、大勢が雪崩込んでいる事に違和感がある。

敵一人に対して少々過剰ではないかと。——自分の事を柵に上げて。

(今の私は少年寄りだ。であればどちらに味方すべきか……。正義と悪で分けるならば……、きつと……)

イヴェイルス闇派閥が悪で少年の敵も同じだ。

復讐心に駆られたリユーを擁護する気は無いが目的の障害となるものは排除されなければならぬ。

なればこそ、アステルの取るべき選択はただ一つ——

吠えるな、小娘。

この場の喧騒の中にあつて広間ルーム全体に響き渡る強者の声——
いやに通る声色により一気に静寂が広がった。

大勢の人ごみの中から外套を身にまとうアステルがベルの下に向かう。それを止める者——止めようとする者は誰も居ない。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

一緒についてきたヴェルフ達も思わず息を呑む。

戦闘が激化するかと身構えていたのに全員が須らく動きを止めた。その現象に思わ

ず身体が震えて来た。武者震いではなく恐怖のようなものによって。

誰もが前を通り過ぎるアステルに疑問と畏怖を感じながら、それでも誰も言葉を発しない。

「……こんな茶番に付き合う道理はないが……、その少年に何かあつては困るのでな」

「アステルさん。……すみません」

「? アステルというのですか?」

罅迫り合いをしている最中なのにリユーは質問した。それにベルはそうです、と素直に答えた。

そして、覆面姿のリユーは後から来たアステルに顔を向ける。

聞き覚えのある声。しかし、姿は全くの異様——だが、雰囲気には覚えがある。

泰然とした佇まいと外に零れている灰色の髪に。

(……まさか?! いや、奴は死んだ筈だ)

突き飛ばすようにベルを押しつけ、アステルに木刀を振りかざす。

もし、自分の予想が正しければ——そう思っているとレベル4の本気の攻撃を武骨なガントレットで受け止められた。

今のアステルは顔以外、肌の露出のない装備に包まれている。

素材の報酬で手に入れたもので強度は考慮に入っていないが、それなりに丈夫な代物

だとは聞いていた。

木刀を受け止められた、と思う間もなく掴み取られる。そして、軽くひねられ壁際までリユースは吹き飛ばされた。

(……弱いままではないようだ。レベル4の中程度か、それ以上といったところか。成長しているのは確かだな。成長が見られなければ手心を加え損なうところだったぞ)

手の感覚だけでリユースの強さを把握し、軽く嘆息する。

他人の言葉だけでは分からない事がある。ここはやはり軽く手合わせをするべきか、とアステルは思案した。

冒険者は結局のところ戦った方が理解しやすい。

「あの『疾風』をいとも簡単に吹き飛ばすとは……。こいつは心強い助っ人だぜ」

「……黙れ。口を開くな下郎」

静かな口調で命令すると冒険者達は一斉に冷や汗をかいて黙った。

現場が静まったところを確認し、ベルの無事を見てからリユースに顔を向ける。

目蓋を閉じたままの泰然たる姿勢で。

「顔見知りに会えると思つて来てみれば……。何たる無様。何たる懦弱か。今一度、鏡で己の姿を見てみるがよい」

「お、お前に言われる筋合いはない！」

そう怒鳴り返し、そして確信する。

目の前の異様な存在はリユーの知る人物。

理由は定かではない。けれどもはつきりしている事がある。

こいつは敵だ。己の邪魔をする仇敵である、と。そして、近くにベルが居る。とても危険だ。助けなければ、とも。

「クラネルさん。そいつから離れなさい。危険だ。今すぐに！」

(どう考えても今のリユーさんの方が危険な敵に……)

「少年は私の案内人だ。……それと、今の発言は心外だ。撤回しろ、小娘」

「黙れ！」

「疾風」相手に大柄おおへいな態度を取るアステルにリリルカは勿論、ヴェルフ達も啞然としていた。

強いとは思っていたが桁が違う相手だとは思わず、想定外にも程がある、と。

「お、お二人は知り合い、なんですか？」

戦闘どころではないと悟ったベルは武器を持ったままどちらともつかぬ質問を投げかける。

それに答えたのはリユーだった。

「私の知っている相手ならば死んでいる筈だ。……まさか生きていたのか？」

「……誤解がないように言っておこう。生き残ったわけではない。だが、その疑問に答える前に……、私も混乱している。どう答えたものか、とな。お前の予想通りの結果だとは思うが……」

(バカな……。だが、もしそうなら……理屈が……。可能性の話しならば一つだけ……。異端児ゼノスとなつたというのか、あの女が……)

見えている顔の肌は青白い。部屋の明るさから見ても人間ヒューマンの色と違うのは理解した。リユーもベルとの付き合いで異端児ゼノスの事を承知していた。それでも現実を受け入れるのに時間がかかる。

もし、可能性が真実であれば最悪の敵が目の前に居る事になる。思わず手に力がこもる。そして、憎悪の炎も。

「クラネルさん！ 早く逃げなさい！」

「……そう吠えずとも少年に危害は加えん。お前こそ黙れ。先ほどから煩くてかなわん」

標的をアステルに定めてリユーは突貫した。が、それらを片手間のようには捌かれて対処される。

レベル4が赤子同然の扱いにされていることにベルは勿論、「疾風」の強さを知る者達は啞然とするしかなかった。

そして、何度か壁に吹き飛ばされつつもリユーは立ち向かった。速度を上げて——しかし、その全てが届かない。

仲間達の補佐が無い一人だけの攻防では、無理があつた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

アステルの言を信じるのであれば生前と遜色ない強さを感じる。そして、今も『魔法』を持つているのであれば無効化される事も。

決定打が無い。それでも攻めなければベルが危ない。そうリユーは思った。

先ほどまで自分の邪魔をした相手だが、やはり彼とは敵対したくない。不器用なエルフに出来ることは力づくで排除する事のみ。——それが事態を複雑化している事も少なからず自覚している。

「あの小うるさい小人族バルウムはどうした？ 赤毛の娘の姿も無いようだが……」

倒れ伏すリユーにアステルは問い掛けた。

先ほどボールスに聞いたことが真実か確かめる為に。

「災厄を乗り越えて英雄に至った筈の『ファミリア』は何処に居る？」

「……さつき逃がしたジユラの『ファミリア』に……。より正確に言えばその時、出てきたモンスターにやられてしまった」

ズタボロになりながらリユーは立ち上がる。致命傷を与えているわけではなく、軽く

いなしているだけなので大きな怪我は無い。

ベルはそんな二人のやり取りを見つめていた。

（あの小娘共を全滅させるモンスター？ 階層主ではないようだが……）

「生き残ってしまった私は復讐心に駆られ、閻派閥を殲滅する人生を選んだ。……正義を捨てて仲間の敵討ちをしている」

「……仲間の死で信念を捨てた、か。私からすればつい昨日の事で、呆れかえる事態だ」（つい昨日？ ……あ、ああ、そうか。彼女に勝利してすぐに正義を捨てたら……、確かに驚くな。というか当たり前だ）

時間差を埋める説明をしている暇が無いのももどかしいが急に戦闘意欲が減退してきた。しかし、敵はまだ残っている。

改めてアステルに顔を向ける。

生前の姿に酷似しているがどこことなく人間離れている。それに雰囲気も優しい。

鬼気迫る修羅の様な覇気が無い事に漸く気が付いた。

「お前達、閻派閥の襲撃から七年……。色々あったのだ」

（……七年）

「お前からすればつい先日の事のようにだが……。悪の暗躍がしばらく続いていた。勝利と引き換えにした犠牲は計り知れない」

リユーは改めて武器を構えて敵を睨む。

個人的な恨みは既に無いが障害となる存在であることは確かだ。リユーは今一度、武器を振るう。だが――

二人の間に割って入ったベルによって衝突が回避された。

♪ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫

どんな事情があるにしろ、二人の戦闘をいつまでも続けさせるわけにはいかない、と判断した。

まずリユーが何をしているんですか、とやってきた。次いでアステルが――だからお人好しと言われるのだ、と聞き分けのない子供に言うような感じで告げた。

「すいません。でも、二人が戦う理由は無いと思います」

「クラネルさん。貴方はご存じないかもしれませんが、彼女はイヴァイルス閹派閥の幹部ですよ」

意外な単語に思わず呻くベル。

構成員ではなく幹部、という単語に。しかも、アステルはそう言われていた時期があったのは認める、と素直に言ってきた。

(オラリオの敵じゃないですか！)

リリルカも胸の内です絶叫した。

生前の事なので今も幹部が通じるかは未知数だ。リユーとて蘇った相手をいつまで

も敵視したくない。だが、感覚はそう簡単に補正されない。

「……しかし、貴女が生きていたとは驚きです」

「どうして、と言われると答えに苦慮するが……。実際のところそれは私も知りたい問題だ。……だが、その前にお前の体たらくを何とかしなければならぬようだ」

それまで落ちていた雰囲気をもとついていたアステルが殺気を振りまく。それだけで広間に居る全員が動きを止めて鎮まった。

リユーも久しぶりの感覚に思わず脂汗をかく。

「……一つ聞かせて頂きたい」

アステルの殺気に負けず、リユーは尋ねた。

なんだ、と静かに応じる絶対者アステル。

「今もあなたの目的はオラリオの崩壊ですか？ 冒険者達の敵ですか？」

「……お前を見ているともう一度この手で潰したくなる気持ち湧く。敵と断じるのは構わぬ。来るならば相手をしてやろう。……私に出来ることはそれくらいだ」

この言葉にリユーは武器を下げた。

それを好機と見たのか、周りに居た冒険者達が襲い掛かってきた。

アステルはベルの防具を掴んで彼をヴェルフ達の下に投げ飛ばす。リユーも何かを

悟り、飛び退った。

「……全く煩わしい雑音共だ」

リユーは耳を塞いだまま駆け出していく。その速度に追いつける襲撃者は居ない。それからすぐに現場に異変が生じる。

それは全体に響き渡る鐘の音の様な――

【福音】

アステルが静かに口にしたその瞬間に周りから音が消える。

超短文詠唱にして彼女の代名詞となっている魔法が炸裂する。

それは音による広範囲の攻撃魔法。一度かき鳴らされれば防ぐ手立てが無いほど強烈である。

僅か数秒で敵性が沈黙する。

苦悶の呻きから身体が砕け散る程の威力は無かった様だ。しばらくは立ち上がれそうにないくらい。

範囲内に居たベル達も多少のダメージを受けていたが無事が確認された。

「……時が経てば対策のしようもないか」

(だが、加減はしたぞ)

「埒外の力は相変わらざるようですね。……つくづく敵対したくない相手だ」

回避したとはいえ完全ではなかった。

リユースは軽いめまいに見舞われたが、戦闘に支障がない事を確認する。死屍累々と倒れ伏す冒険者達の光景に深くため息をつき、改めて確認する。

【静寂】のアルフィア。

アステルの正体であり、その力が本物である、と。

復活に驚きこそすれ、ダンジョンの緊急事態イレギュラーであれば致し方ない。気配からもそれが窺えた。

オラリオに災厄を招いた怪物の復活にリユースは固唾をのむ。

04 崩落

一瞬の出来事であった。

大勢の冒険者がたった一つの魔法によって昏倒されられ、辺りに散らばっている。その中にベル・クラネルの仲間達の姿もあるが——こちらは割合軽傷のようだった。

正に圧倒的^{まさ}。

揺れる視界に苦慮しつつ、何が起きたのか理解する。

(アステルさんの魔法……。でも、誰も殺していない)

彼女がその気になれば皆殺しであったかもしれない。その可能性に戦慄しつつ、強者に驚き、羨望の眼差しを向ける。

この場においてアステルこそが絶対者である、と。

憧憬の中に出てくる金髪金眼の美貌の女剣士を髣髴^{ほうふつ}とさせた。

「こうも人が多いと話してもろくに出来ん」

「……皆を巻き込むべきではなかったのでは？」

そうベルは言うがエルフのリユー・リオンは別の考えだった。

ボールスが連れて来た冒険者の全て——「ヘステイア・ファミア」以外——が敵に

見えた。そう考えると納得するものがある。

「ルドラ・ファミリア」の生き残りである猫キャットヒール人のジュラ・ハルマーが被害者を装いながら何かを企んでいた。仲間達もそれに賛同し、リユーを追い詰めていた。

ベル達には逆に彼女がジュラを狙っているように誘導し、自分達があたかも被害者である事を正当化して場を支配しようとした。

（こいつらはジュラが手引きした者達で構成されている。以前、宿場街リヴィラに来た時には見かけなかった連中ばかりだ）

リユーの予想では殆どが闇派閥イヴィルスの口車に乗った悪党だ。復讐相手ではないが無視も出来ない。

下位も含めてかの組織の人員は膨大であった。「ファミリア」に所属していない者も居るし、おこぼれに預かろうと企む無所属の悪党も混じっていた事を思い出す。

「悪党には違いありません。それよりジュラです。あいつだけは逃がすわけにはいかな
い」

だが、アステルを無視して駆け出す事も出来ない。

正体を看破した今、リユーにとって最も強大な壁だ。武器を構えて睨みつける。

二人が対峙している間、ヴェルフ達が起き上がってきた。非戦闘員である狐人ルナールのサンジョウノ・春姫も目立った怪我が無く、ベルはほっと一安心した。

決断しなければならぬ選択肢にベルは追われた。どれを優先するのが一番なのか。普通に考えればリユード。なら、それを選べばいい。元より一択だ、と即決する。

まず話し合ひましょう、と声をかけてみた。

「それはジユラを捕まえてからにしてください。こうしている間も奴は何かを企んでい
る」

彼女の決めつけるような発言を素直に信じることは出来ない。だが、確信があつて言っている、とは感じた。

単なる復讐であれば止めなければならない。だが、もし、それよりも優先すべきことがあつたら、どうすればいい。

ベルはまだ冒険者としての経験が浅い。対人戦における駆け引きは始まったばかりだ。

個々人の事情にも精通していない。だからこそ言い分が理解できない。

アステルが闇派閥イツイルスだと言われてもピンとこないように。

(……仲間が居るなら誰かが囮になる。……もし、小娘の言い分を信用するなら冒険者が一塊になる事こそが奴らにとつての好機)

現場に留まるのは都合が悪そうだとアステルが判断し、移動するぞ、と静かに告げる。当然のようにベルが疑問を呈する。これが畏だつたらお前はそれでも留まるのか、と

当初武器を構えていたリユーも戦意を消失したのか、救助を手伝うようになった。

「……クラネルさんは凄いですね」

「えっ？」

未熟な冒険者ではあるが大物を動かした。それはリユーには出来ない偉業に匹敵する。だからこそ凄いと自然に言葉が出た。

もし、彼が居なければ殺伐とした結果しか生まなかつた。

「……先ほど逃げられたジユラ……。ジユラ・ハルマーの罠に嵌まり私達の「ファミアア」は生き埋めにされました。……幸い全員無事でしたが……。奴は爆薬を使います。今も持っていると思います。が何をしてくすか分からない」

冒険者を移動させながらリユーは語った。

かつての相対していた状況を。

イウイリス

闇派閥の一員であったジユラ達と戦い、そこで強大なモンスターに出会ってしまった、と。

どうやって生まれたのかはリユーにも分からない。けれども、それは現れジユラ達の仲間とリユーの仲間があつという間に殺されてしまった。

第二級冒険者で構成された「アストレア・ファミア」がなすすべなくあつさりと――

「仲間達のお陰で生き残った。ジユラも死んだふりなどで生き延びたのでしよう。仲間の死に私は絶望し、正義をかなぐり捨てて復讐を選びました」

仲間の仇を取る為に。またはそうしなければ自分を保てなかった。様々な理由で今まで生き足掻いてきた、と。

ベル達は何も言えなかった。

壮絶な人生があつたんだろうな、くらいしか感想が出てこない。

「も、モンスターはどうなったのですか?」

「倒しました。仲間達の犠牲と引き換えに……」

復讐相手が居なくなつた。なら新しい人生を歩めばいい、と簡単に言えるような雰囲気ではない、というのにはベルにも分かつた。

どういふ言葉を掛ければいいのか、正直分からない。先ほどまでは復讐なんかやめてください、と言えればいいと思つていたほどだ。

そんな薄っぺらい説得では何の意味も無いと理解した。

「仲間を犠牲にして何食わぬ顔で生きる事など私には出来ない。悪を殲滅する。それだけを生き甲斐にしてみました。復讐などと言いますが……。単なる私怨にすぎない事は理解しています。でも……、どうすることもできない。そんなに……簡単に……割り切るなんて……」

「積年の恨みは晴れる。だが、それで終わりだとは思っていない」

アステルの言葉に淀みなく応えるリユー。

一度悪の道に進んでしまったら引き返せない、という思いがある。もし、叶うなら別の正義に止めてほしいと願っていた。おそらく、それがベル・クラネルではないかと予想している。

白髪はくはつの少年は強くなった。万が一の時は彼が正義を代行してくれるかもしれない。

「しかし、不思議なものだ」

「何がだ？」

アステルの漏らした言葉にリユーが相槌を打つ。

そういえばアステルは何故、ここに居るのか聞いていなかった。ベル達と共に居るのも驚いたけれど。

「今の私は空虚な存在となっている。……積もり積もった失望を晴らそうとか、激しい憎しみなども感じない。……自分の全てを出し切り、満足したと言えるのか……。それすらも分からない」

いや、満足して逝いつたからこそリユーに特別な憎悪を感じない。

失望するかどうかなどと言っていたが実のところどうでも良くなっていた。

何故、モンスターの身として復活したのか。その疑問の前では此事のようだ。正直、

新しい発見に気持ちいが傾いている。

(胸の内が空虚というわけではない。現にベル・クラネルを気にしているし、ゼノスとかいう新しい単語に興味が湧いている)

そもそもどうして彼らと一緒にになって作業をしているのか理解できない。

疑問を感じつつも数十分程度で移動が終わると満足している自分に気が付く。

もし、一人であれば何も感じなかったかもしれない。少年が側に居るからとしか言いようがない。

ベル・クラネルとは何者だ？

次第に大きくなっていく疑問と興味。それに今、アステルは夢中になっていた。

一息つくとりユーはまた武器を構え始める。

目の前に閻派閥の幹部が居るのだから警戒するのは当たり前だ。勝てないと分かっている——

(このまま彼女と戦うのは不毛だ。……だが、見逃す事も出来ない)

しばらくアステルを見つめ、僅かな逡巡の後に心が決論を出したので武器を下ろす。

最優先目標はジュラだ。唐突に現れたアステルではない。それに何だか不毛に感じた。

激情にかられ目的を見失っては本末転倒である、と自分に言い聞かせる。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

戦闘が中断したことに喜ぶのはベルだけだ。それ以外は警戒を解かない。

他にも敵の仲間が潜んでいるかもしれないので。その上で彼は自分に来ることはないかとリユー達に尋ねた。

復讐の手伝いなどする気は毛頭ないが悪の企みは阻止しなければならぬ。

「ならばやはりジユラを捕まえるしかないでしょう。奴はダンジョンのあちこちに爆薬を仕掛けています。逃走しながら私を生き埋めにでもするつもりだったのか……」

「恩恵持ちならば……」

と、命がスキルを使用する。現場には無数のけが人が居たが他の場所は数点のみ。

このスキルは他の階層に行かれると反応が途切れてしまう。探索範囲もそれほど広くすることは出来ない。

二〇階層以下に来ている冒険者の数はかなり少ないので発見は容易い。

「まずは彼らの避難を。ポールスさん、もう宿場街リヴェイラに戻ってください」

「賞金首が目の前に居るんだぜ。おめおめと戻れるかよ」

この期に及んでまだ金目当てでリユーを狙うか、と聞いている仲間達が呆れた。彼らしいと言えば笑い話になるのだが——今の時点では都合が悪い。

場合によれば全員今一度気絶してもらって無理矢理追いつかないかもしれない。

「……お前達は金と命の重みの違いが理解できていないようだな。次は加減を解くか」
アステルの玲瓏たる宣言にボールスは一気に顔を青ざめさせ一礼した後、仲間達を連れて上層に逃げ帰る。その速度はベルに匹敵するほど。

苦笑しながら彼らの様子を眺めていたベルはヴェルフ達にも逃走の準備だけ指示した。

何が起きるか分からない。警戒しておくように、と。

（敵は爆薬を使うにしても直接攻撃をしてこなかった。……何かを破壊する目的が……。階層を落とすには生半可な量では無理だと分かっている筈……）

現在位置は二七階層。ほぼ階層主が現れる一歩手前のところに居る。

あまり長居するのは得策ではないとリユーが上を目指すように、とベルに言う。

移動しながら現れるモンスターを蹴散らすと先ほど上に向かっていた冒険者達と遭遇した。彼らもモンスターとの戦いに巻き込まれて苦戦を強いられているようだった。主にアステルの攻撃からまだ立ち直っていない者が。

悪党だとしても戦い慣れた者達だ。すぐに調子を取り戻して撃破していく。

次の二六階層に到着するとあちこちで爆発音が鳴り響く。ベル達の居るところから離れているので実害はない。

（音が遠い。誰かが戦っているのか？）

この階層でもやはり爆発音が聞こえる。どうやら敵は複数の階層で爆破作業を続けているようだ、とリューは感じた。

一歩間違えば自分達の逃走経路を塞ぐ事になる。そのような真似をしている事に疑問を覚える。

命のスキルでも離れた場所に何人かの冒険者が居るのは確認できた。すぐに向かいたいところだが避難民が残っている。

——ベル達の足止めの為に残された敵の罠という線もある。
階段で呻きながら道を塞ぐような輩やからが何人か居たので。

「リリ達を足止めするようですね」

「強制排除いたしますか？」

強引な手に出れば騒ぎが大きくなるばかり。彼らが本当に闇派閥イヴイルスなのか単なる金で雇われた悪党なのか、ベルには判断できなかつた。

出来る事なら平和的に済ませたい。しかし、今は緊急時である事も忘れてはいけな
い。

(……おそらく手を出せば仲間達に襲われる。そうすると対処に手間取ってしまう)

なら、緊急事態が起きるまで待った方がいいのか、という悪い事態になりそうとも
思えて判断に迷うところだ。

今のベルには仲間が居る。彼らが無視した行動は出来ない。

「……今、私を呼びましたか？」

横長のエルフ耳を僅かに動かしながらリユーはベル達に尋ねた。全員が首を横に振る。

周りを警戒していたアステルが下層でお前の名前を呼んでいるようだぞ、と告げる。

相当遠くなので正確な文言は聞こえないが拾えた単語から判断した。

「……アホですね。いつまでも同一階に居ると思っていたとは……」

「自分の墓標を作ろうとしているのだろう。無視してみたらどうだ？ その極東の人間ヒューマンのスキルからも他に冒険者は居ないのだろう？」

突然の名指しに命は驚いたが逃走の関係から確認を取つてみた。

ボールス達が連れて来た者の殆どは上を目指している、と。

現場に残るのはほぼジュラの手の者とみて間違いない。

「爆薬が切れた頃に搜索した方が良さそうですね。クラネルさんの「ファミリア」が全員無事であれば私も無理に突貫しなくて良いので」

「……確かにそうかもしれませんが……」

（あの人为本当に悪党だと確定したわけじゃないんだけど……。でも、雰囲気から悪党としか言えない事も……）

手の届かない相手を救うことは出来ない。それはベルにも分かっている。

仲間を犠牲にする価値があるのか、と言われれば過去の出来事から難しいとしか答えられない。

もし、英雄と呼ばれる者ならば善と悪の区別なく救おうとするはずだ。ならば——と、上層とは逆の方向に振り返る彼の防具をアステルは掴む。

「自己犠牲と英雄は等しくないぞ、少年。……お前が選択するのは愚行か？ 冒険者の目的をはき違えるなよ」

「……それでも、自分の目と耳で確認しないと気が済みません。どうか、行かせてください」

少年の決意に対してリリルカ・アーデヤリユーであれば仕方がないと言うところだが、アステルは違う。

既に結論が出ている結果に無策で突入しようとするベルを止めるのが最良。ゆえに引き倒す。

無謀な選択によって犠牲になるのはお前だけではない、と強い語気で告げた。

「それこそが相手の思う壺だ。上級冒険者の殆どが相手の策に自ら飛び込もうとはすまい」

「……ベル様。困って分かりますか？ 時には自分自身もなれるんですよ」

が決めた結果でしかない。

正しい結果など本当にあるのか、と疑問を抱け。それが未知を探究する冒険者の務めだ。——などと親切に解説しなければ分からない者は長生きしない。

(迷い考えろ、少年)

アステルはベルから離れ、階段で立ち往生している冒険者達を一人ずつ上層階に投げつけていく。

他にも通路はあるだろうけれど別の仲間が塞いでいる可能性がある。であれば無駄に移動せず、邪魔者を片付けた方が示威行為の一環になって手っ取り早い。

無駄死にしたければかかってこい、という意味で。

自由になったベルはアステルに頭を下げ、爆発音の根源であるジュラの下に向かう事にした。それについて行くのはリリル力達、「ヘステイア・ファミリア」の面々だ。

口では色々と言ったが団長が決定したことに従う。そう決めていた。彼らが姿を消した後、アステルはリユーと相對する。

「お前は行かないのか？」

「貴女をここに置く方が危険だと判断しただけです。……まさか蘇ってくるとは……」
驚きはしたものの心の内では安心もした。

どのような形であれ命を奪う結果となった事に少なからず責任を感じていた。

弱い冒険者に失望していた彼女に自分達の無力さを見せつけられ、なすすべもなく蹴散らされた。

最終的には勝たせてもらったようなものだ。実質、たった一人の強敵に「アストレア・ファミリア」が苦戦を強いられた。

「これは自分の意志ではない。だが、ダンジョンの意志とも思えん。……そして、七年か……」

「あの戦いから七年……。時間はかかっていますが次代の冒険者は育っています。我々は残念ながら途中で退場する羽目になってしまいました……。きっと貴女から見れば失望の塊でしょうね」

「……お前の「ファミリア」が壊滅した、というのがな……。それもモンスターに、だったか?」

「……はい。突如現れた新種のモンスター一体に……。一瞬の出来事でした。レベル4で構成されていた我々の「ファミリア」が……。滅ぼされるなんて……」

（階層主以外でこいつらを滅せられるモンスターは深層域にでも行かなければ……。だが、新種か……。我々の「ファミリア」は『隻眼の黒竜』によつて壊滅した。……同情はしないが失望は感じる）

仲間を失つて自暴自棄に陥った事は想像に難くない。けれども、意外だと思つた。

この鉱石は僅かな熱を持つているがそのままでは何も起きない。しかし、火に投げ込むと爆発的な火力を生む。その利用方法の多くは火薬だ。

ベルが魔法を一度でも発動しようものなら立ちどころに引火して辺りが吹き飛ぶこともありえる。

「そんなもん、決まってるだろう。困だよ」

（あつさり白状しましたよ、この人）

（どうして演技しないのでしょうか？）

挑戦的な顔つきでジユラはベル達を睥睨する。全ての準備が整い終わったから演技する必要がなくなつた、と見るのが一般的か。

ここで挑発してリユーを誘き出すつもりでのんびりと語っているとみて間違いない。

こうしている間も上層のあちこちで爆発音が響いてくる。

「どうして顔をしてるな。あの糞リユー・リオン女をぶつ殺す為だよ」

「……理由が分からない。貴方の理屈が僕には分からない」

「……ベル様。まともに取り合わないでください」

（……春姫はずつとお役に立てません……）

（あの者以外の気配はないですね。残りは上で待機しているのでしよう）

ヴェルフは話しを聞くのは面倒だからさっさとのしてしまおう、と小声で提案してく

る。先ほどから聞こえてくる爆発音も気になるし、のんびりと結果を待つ必要がそもそも無い。

ベルは相手を殺さない程度に戦う許可を出そうとした。少し強引な手だが仲間の安全などを考慮すると時間をかけているこそが危険だ。

「常識人に悪党の理屈語つてどうすんだよ。俺には欲しいもんがある。だからこそ、こんな御大層な『儀式』をしているのさ。……〔ラビット・フット白兔の脚〕。死人が出るようなダンジョンに何故行くんだって言われてやめるのか？ そんなことしねーよな、冒険者だから」
そう言われると納得しそうになる。

危険だと分かっている所に英雄になりたいから行く、と言えば常識を疑われる。

日々、平和的に安全に暮らす事を何故しない。自殺願望でもあるのか、と。

ベルからすれば憧れの一言に尽きる。けれども、その理屈も場合によればジユラのように変わってしまう。

「金欲しさに他人を欺いたり殺したりするようなもんだ。何度か言われたことはないか、どうしてモンスターを殺すんだって。生き物に違いはないだろうに」

正論を言われてしまえば二の句が継げない。

相手のみならずベルの言葉も時には暴論となる。

それを知るジユラを説得する材料をベルは持ち得ていない。分かる事は彼が悪で自

「来ないなら来るようにさせるまでだ」

ジュラの言葉に警戒し、ベル達は武器を構える。

初見のモンスターである事を悟り、逃走できるか戦えそうか思索し、覚悟を決めていく。

広い空間と言つても大蛇ワーム・ウエールの井戸の存在が部屋を狭く感じさせる。

大きな頭部を持ち上げ、突進する。その速度は速いが目で追えないほどではない。けれども、巨体による突進は小さな少年の身で躲し切るのが難しい。

仲間達は武器で受け流そうとするが威力に負けて吹き飛ばされる。

「階層主の様な突進力があるんじゃないかねーか？」

「リリ達は避難して。思いのほか強い」

牽制するにも魔剣は使えない。辺りに散らばる火炎石が障害となる。

命とヴェルフがリリルカと春姫を護衛する形で上層の階段を指す事にした。

その間にベルは襲い来る大蛇の猛攻を躲し、攻撃する。

見た目からは想像できない速度で飛び回る相手に苦戦を強いられる。

「そうだ、【ラビット・フット白兎の脚】。俺が連れて来たラムトンは二匹。今頃上に居る奴らも襲われているかもな。早くしないと犠牲者が増えるぞ」

と、挑戦的な発言に対し、ベルは一瞬焦る。だが、アステルの姿を思い出し、何とか

なりそうと思ってしまった。

ここで手間取れば犠牲者が出るのは確かだ。——普通に考えれば。

アステルが居なかった場合はベル一人と仲間達の二手で対処する事になる。それがおそらく正しい戦術だ。リユーも参戦してくれる筈だし、と。

(……瞬殺かな?)

結果が分からないけれど、心配無さそうな気がした。

あの人は厳しく優しい人だと根拠はないがそう思えた。だから、何の気兼ねがあるものか。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

焦って仲間を二つに分けて対処するものと思っていたジユラは何の焦りも見せずに襲い来るモンスターに対処するベルに疑問を感じた。

ここでもたもたすれば犠牲が出ると告げた。それなのに全く集中を切らしていない。上に居るリユーを全面的に信用しているのか、と。

相手フォーム・ウェルにしている大蛇の井戸は深層域のモンスターだ。この辺りに出てくるモンスターとは力の差が歴然である。いくらリユーでも瞬殺とはいかないが苦戦は必至の筈

(……みんな、辺りにある火炎石を拾っておいて)

(了解)

(……やつと出番が来ました)

火炎石さえ無ければ遠慮する必要は無い。それと臨時収入の足しにもなる。

リリル力ではないけれどベルもジュラに『拾っておきましたよ』と言いながら素直に返す気が無かった。この鉱石でダンジョンを破壊するのは立派な迷惑行為である。見逃す理由は無い。

それに自ら悪事を告白した以上、問答も必要なくなった。

力業は苦手だが捕縛して「ガネーシャ・ファミア」に引き渡す。それが現場において最善の回答だと思った。

「全然戦意を落としたりがらねー。どうして戦える？　ここで足止めを食っている間にも犠牲者が増えるつてのに」

「そうかもしれない。でも、今は目の前の事でいっぱいなんです」
迫りくる巨体を躲しつつ斬撃を見舞う。

身体の強度に問題はない。気を付けるべきはモンスターの『敏捷』だ。

リリル力辺りに攻め込まれると大怪我は必至。出来るだけ自分のところに来るように誘導する。

「命さん！　牽制、頼みます」

「承知 仕 った」

レベルは低いがヤマト・命も前衛で戦える女性だ。片刃の刀剣でモンスターの体表を切り裂く。

残りは火炎石の回収に努める。これがある限り、魔剣を扱うヴェルフ・クロツゾは戦闘に参加できない。

春姫の魔法は指示が無い限り使わないようにお願いされているからである。

「掛けまくも畏かしこき、いかなるものも打ち破る我が武神かみよ」

ワーム・ウエルム
大蛇の井戸の側面を切りつけながら命は詠唱を始めた。

攻撃と同時に詠唱する事を『並行詠唱』という。

二つの事を同時に行うおこなうにはかなりの集中力が必要である。単に文言を間違えなければいい、というわけではない。

何より詠唱に失敗すれば膨れ上がった魔力が暴走して自爆してしまうおそれがある。

(高い『敏捷アヒリテイ』持ちならば足を潰さなければ……)

彼女の詠唱に合わせるようにベルも攻撃を仕掛ける。

初見のモンスターではあるが目立った特殊攻撃を仕掛けてこない。何があってもいのように気を付けながら。

今日まで増やした「ステイタス」の効果は確かに十全に発揮していた。

(……くつ、自分は付いていくだけで精いっぱいです。ここまで素早いのですか、このモンスターは)

相手の身体が大きいためにそう感じるだけかと思っていたが、そうではない。

身の丈たけによらず、本当に俊敏で瞬く間に命みことの攻撃が届かなくなる。代わりにベルが相手の速度に合っているように見えるほど。

「……【尊き天よりの導きよ。卑小のこの身に巍然たる御身の神力を】」

「リリ！ 頭を狙って」

「【救え浄化の光、破邪の刃。払え平定の太刀、征伐の靈劍れいおう】」

(あと少し……)

ベルの言葉に応えるようにリリルカは腕に装着した弩弓バリスタをモンスターに向ける。

レベル1の彼女にとって深層のモンスターは素早く狙いにくい相手だがベル達が足止めをしているので迷いなく放つ。そして、すぐに現場から離脱する。

身体が大きいためにベル達は決定打が与えられず、戦闘が長引いている事に少なからず焦りを覚える。

「次っ！ 大剣を」

「了解しました」

「【今ここに、我が名において招来する。天より降り、地を統べよ。神武闘征しんぶとうせい】……【フ

ツノミタマ！」

ベルがリリルカから剣を受け取るのと命の詠唱が終わるのがほぼ同時。

半径二〇M^{メートル}の魔法陣がモンスターの真下に広がり、次に直上から巨大な光る剣が現れて狙い変わらず大蛇の井戸^{ワーム・ウエル}の胴体に突き刺さる。

この魔法は重力結界。命の意志で押し潰す事も出来るが相手が強い場合は僅かな足止めにはかならない。だが、それでも仕事は完遂した。

結界範囲は不可視ではないのでベルにも回避できる。——その結界から出ている大蛇^{ワーム・ウエル}の頭部に斬りかかる。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

召喚したモンスターの行動を眺めていたジユラは命令する都合で戦闘に参加していない。彼自身の強さは大したことが無く、事態を見守るしか実質出来なかった。

深層域のモンスターだと思つて安心して見ているつもりだったが形勢が不利になるのは少し面白くなかった。けれども、彼の本来の目的は既に達成している。

もうすぐ倒されそうなモンスターの様子を眺めながら、それでもなお勝ち誇る^{テイマー}調教師ジユラ。

「思つたよりやるじゃねーか、【白兔の脚】」^{ラビットフット}

言い終わる頃にモンスターの頭頂部が大剣によって深く刺し貫かれ、程なく

ワーム・ウエール
大蛇の井戸は沈黙した。

モンスターの絶命と同時に大きな魔石と様々なドロップアイテムが転がり出た。

ベルは引き続き、アイテムの回収を命じながらジュラと相対する。

「大人しく投降してください」

「……おいおい、この期に及んではいそうですかと従うわけねーだろ」

(ですよねー)

「呸だと言っていたので大蛇の井戸が本命かと思っていた。だが、モンスターを倒されても余裕を見せている所からまだ何かあるとみて間違いない。」

悪党と相まみえる機会は少ないが説得が上手くいかないのは心苦しい。どうしてそんなことをすのか、その考え方というか精神構造が全く理解できなくて——悲しさを覚える。

見れば彼はケガ人だ。冒険者としてやっていくには難しいほどの。

それでもなお悪党として立ち塞がる胆力に驚き、恐れ、感心する。決して見習ってはいけないのが見惚れてしまうものがある。

(……ベル殿。この近くに他の冒険者は居ないようです)

命はスキルによつて現場付近に潜んでいる仲間が居ない事を告げ、ベルは小さく頷く。

ジユラはたった一人で囿役をしている。本命は頭上か、と。

そもそも何をしようとしているのかベル達は全く理解できなかった。

彼らが疑問を抱いている時、上層から大きな爆発音が鳴った。いや、轟いた。

「……ああ、予定とは違うが生贄には充分だな」

虎の子のモンスターを倒されてなお、調教師ジユラは余裕の表情を見せていた。

それに振動がいやに大きい。

本来はリユーを前にし、高説を垂れ、絶望に墮とす計画だった。——話している間に

襲われては意味が無いけれど。

時間は十分に稼げた。必要な爆砕作業も滞りなく、そして——階層を連続で叩き落す

音が合図となって聞こえた。

ジユラ達が居る直上では生き埋めになる。かといって冒険者を他の場所に向かわせ

るわけにはいかない。どうしても足止めが必要だからだ。

都合三階層分の崩落をもって召喚する為に。

ジユラがばら撒いた火炎石は特に意味が無い。牽制程度になればいい程度だ。

戦闘の継続も必要なくなった。後は安全な場所に避難するだけ。ギリギリまでベル

達を足止めする事も忘れない。それこそが——相手を絶望に墮とす策の完成形。

♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪

階層を落とすといつても全ての床では下に居る自分達が危うい。

この計画を実行するためにジユラは数年の時を費やした。そして、今が結実の時だ。

ダンジョンは一定以上の破壊行為が行おこなわれると自浄作用を発揮する。それを見つけた時のジユラの喜びようは狂気に満ちていた。

二五階層の大部分の床が落ち、二六階層も事前に破損していた箇所がひび割れて亀裂を広げる。

その破壊音は時間と共に大きくなり、振動も比例して強くなる。

(上から何かが……。避難しないと……)

見えない場所からの攻撃に対し、選択を迫られるベル達。

ジユラの様子から彼の近くに居る方がいい気がした。罠の可能性もあるけれど、他に選んでいる時間が無い。

素早く全員に突撃の命令を下す。

何処から何が落ちて来るか予想できないが——運に頼る事を選んだ。

(……僕の『発展アビリティ幸運』がどこまで通用するか分からないけれど、ここで賭けるしかない)

身体に感じる振動が大きくなる。彼らはダンジョンに何をした、と無言の抗議を上げながら駆け出す。

足の遅い春姫は命が担いだ。

そして、ベル達が居た場所の正反対の通路が大音響を響かせて崩落していく。それは崖崩れにしては規模の大きいものだ。一瞬、上層に戻る方法をどうすべきかと焦る。

あまりの振動と音響で立っていられなくなり、会話も不可能になった。ジュラも片耳だけの獣耳に手を当てて蹲る。

戦闘行為が中断し、音が止むのに数分——とても長い沈黙だった。

衝撃音が途中から聞こえなくなったのは耳鳴りが原因だった。ずっと聞いていた音ではないので助かったともいえる。それらは数分で治ったものの振動はまだ続いていた。

崩落から離れているとはいえ自分達が居る広間ルームの天井もひび割れ、瓦礫が降ってきた。そのまま居ると大怪我をしそうだったので移動する事を敢行。

(……全員無事?)

(リリは無事です)

(俺も無事)

(自分と春姫殿も無事です)

(はい)

固まって伏せていたので小声でも伝わった。

振動が止やんだ事を確認してからすぐに移動します、と伝える。

「単に爆破させるだけなら無理だな。要所要所に亀裂を作って連続的に使いでもしねーと。それと……、当たり前だがそれだけのことを成すには相当量の火炎石が必要になる。この火薬はそんなに安い代物じゃねーぞ」

火炎石は深層域に居る『フレイムロック』というモンスターが落とすドロップアイテムだ。市場価格もそれなりに高い。

階層を破壊するのに使うには数千万ヴァリスかかっても不思議は無いとヴェルフは言い切った。

ジユラはエルフのリュー一人を罠にかける為に用意したらしい。その執念に思わず嫌悪を抱く。

「いったいどのくらい崩落を起こしたんだ？ 下手すりゃあ階層主の部屋も……」
「い、一応既知のモンスター配はあります」

開けた場所で落下物に気を付けつつ互いの無事を確認し合う。

今はまだ上層に向かえない。ベルは広がる惨状に驚きと興奮を覚えた。

ダンジョンをここまで破壊する存在が居る事にも。そして、ベル達以外に深層攻略している——かもしれない——冒険者の命をまるで顧みないジユラに怒りを募らせる。

普段、優しい少年のベルは両手に力を込めた。けれども、単なる怒りで相対しては敵の思う壺。

まずは事態の鎮静化を待ってから行動する事にした。

リユー達はおそらく無事な筈だ。足元に爆弾でも仕掛けられていなければ。

(崩落巻き込まれた冒険者の身体とか見当たらない。……さすがにそういう失敗はしないか)

大がかりな仕掛けだが、対象が居なければ全くの無意味な行為。それをどうしてジュラは行^わったのか。

居ようが居まいが関係ないのか、と疑問を抱く。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

体感した事のない大破壊。落ち着きを取り戻して見てみれば自分達の常識が音を立^{グレート・フォール}てて崩れていく。そんな比喻に相応しい光景が美しかった『巨蒼の滝』を瓦礫へと変えた。

大瀑布は濁流と化し、あちこちに飛び散り水浸しにしていく。

細かな通路の殆どが崩落し、しばらく戻れそうにない。しかし、上層に多くの冒険者が居るし、ベル達が下に居る事を知る人物も居るので、それほど悲観はしていない。

「ベルと一緒に潜ると退屈しなくて済むな」

ヴェルフの軽口にベルは苦笑する。

泣き出す仲間が居ないだけ安心できた。

リリルカは命達と共に背負った大きなバックパックの確認おこなを行う。

(さっきの人を捕まえておいた方がいいかな?)

リユーに見つかるかと殺されそうだが、捉えておかないとまた何かの罠を起動させてしまうかもしれない。

リリルカにロープを出すように指示する。

ジュラの『力』アビリティが分からないから強引に抜け出してしまってもいけない。犯罪の取り締まり経験が無いベルはどうしたらいいのか、悩んだ。

「相手は隻腕ですから、縛るのは難しそうです。拘束に適した魔道具マジックアイテムを用いないと駄目だと思います」

「……じゃあ、どうしたらいいかな?」

「手足の骨を折っておくとか? 少々残酷ですが、ここまでやった相手です。変に手心を加えてもロクなことになりません」

穏便な方法を探るベルにとって犯罪者の扱いは全くの素人であった。

聞いていくうちに自分がいかに甘いか再認識させられ、二の句が告げなくなる。かといつて命を奪う事も出来ない。

迷う団長に対し、とりあえず気絶させておこうぜ、とヴェルフが言った。

「何ならあの覆面エルフに殺さないように説得するの手伝ってやるよ」

「……そうだね」

「我々が証人ですからあの者は立派な黒と確定しました。これ以上は法の裁きに委ねるべきです」

無用の殺生をする必要は無い。命の意見にヴェルフとリルルカが頷いた。

今少し振動による恐怖で動きが鈍いが、全く動けないわけではない。

ベルは武器を携えてジユラの下に向かう。すると彼は既に立ち直っており、大破壊に満足したのか、笑みを浮かべていた。

「早く逃げればいいものを……。だが、都合がいい。……あの糞エルフをぶつ殺す前哨戦として、生贄になってくれよ」

「……はっ？」

さつきも聞いた単語だが彼は何を企んでいるのか、ベルのみならずリルルカ達にも理解できない。だが、ろくでもない事なのははっきりしている。

訝しむ彼らの近くで異変が起こった。

通常、ダンジョンは破壊行為に対して自浄作用を働かせて壊れた個所を修復する。

深層域ではモンスター自ら階層などを破壊するので絶えず、その働きに追われる。けれども、それでも修復に支障が無い程度で収まる。

もし、その支障が限界を超えるものであったなら――

ジユラが起こした大破壊がダンジョンの自浄作用を超えるものであったなら、何が起きるのか。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

壊れたダンジョンを治すのはダンジョン自身だ。

もし、その修復速度を超える事態が起きたら——そんなことを考える冒険者が果たしてどれだけ居るのか。

警戒すべきはモンスターである。それが世の中の常識だった。

かつてそのような非常事態が起きた事がある。リユーが所属していた「アストレア・ファミリア」が壊滅する原因でもある。

彼女は言った。その時に現れたモンスターによってあつさりと団員が殺された、と。それはいかなるモンスターだったのか。

階層を貫く大破壊によって生じたダンジョンの痛み、または激痛ともいえる事態に何が起きるのか。

このような事態を引き起こした原因を抹殺する。

もし、ダンジョンに意思があればこのように判断するかもしれない。

そう仮定した上でジユラが召喚しようとしているものは正まにそういう存在だ。

「さあ、出てこい！　抹殺の使徒！」

その言葉が聞こえたのかは定かではないが破壊の爪痕が残る瓦礫の中から何かが生み出された。

最初に気が付いたのはベルだった。すぐに仲間達に避難を呼びかける。

通常のモンスターも凶暴性はある程度あるが出てきてすぐに近くでできるほどの悪意は感じない。

いや、悪意というより殺意だ。それも身体に震えが来るほどの明確なものは。

同じ殺意でも今感じている純粹なものは記憶に無い。

(……見え!?)

予備動作が見えなかった。だが、感覚だけで避けようと努力した。

鋭い刃物が頭上を通り過ぎる。とにかく、大きい。そんな端的な印象が次々と脳内を埋め尽くす。

警戒しながら伏せるように言った。

唐突な初撃を交わせたのは幸運以外の何物でもない。

「な、なな……、何ですか今の……」

場所が悪ければ春姫がやられていたかもしれない。それに遅れて気づく。そして、春姫は無事か、と食い違う感覚に驚いた。それだけ焦ってしまった。

声をかけると命が無事です、と答えた。

音が聞こえた時には春姫と共に地面に倒れ伏しました、と。

仲間の無事を確認出来たことに安堵し、次はもし——と考え全身に悪寒が走る。

もし、それが無事ではなかったら——考えたくないけれど、確実に取り乱していた事だろう、と。

(ど、何処から……。次の攻撃が来る!?)

明確な殺意だけを察知したベルが敵がどこから来るのか、凡そおおよその見当をつけて回避を試みる。

敵は素早い上に発見しにくい。常に動いている為だと思われる。

微かながら移動音が耳に届いた。

大破壊による耳鳴りが治まっていなければ危険だった、と今更ながら冷や汗をかく。

「……ヴェルフ。無事ならみんなと一緒に壁際へ」

「了解」

体勢を低くし、リリル力達と共に視界確保の為に壁を指す。

ベルは彼らの背後を守りながら警戒する。

殺意は上。天井を徘徊しながら獲物を見定めているようだった。

全貌がはつきりしない敵というのは戦いにくい、とベルは感想を抱く。

(さつき、盾で防ごうしたんだが……。切り裂かれちゃった。……。ああ、軽傷だ。心配

ねー)

と、小さな声でヴェルフが言ってきた。

リリル力が念のために彼の様子を窺う。腕に赤い線が走っていたが回復薬で治せる程度と判断し、すぐにアイテムを使用した。

切り裂かれたのは腕だけではなく盾もだ。すぐに投げ捨てた、と言ったので命が確認する。

切り口が綺麗な盾の残骸が近くにあった。よく軽傷で済んだものだど戦慄する。

(防御が意味を成しておりません。あの敵は危険です)

(……『敏捷』が僕以上で斬撃に特化している？ 長引いたら危ない相手……。未知のモンスターで間違いなさそう)

上級冒険者であれば身に覚えのある人物が一人だけ出てくる。しかし、これほどの殺意を振り撒けるとは思えない。

命が周りに火炎石が無い事を仲間告げる。すぐにヴェルフが魔剣を振るった。

部屋を少し明るく程度だが、ベルには充分だった。

照らされたことで敵の正体が判明した。



それを簡潔に述べるならば大高三Mメドルもの竜系の化石のような大型モンスターだ。

肉は殆ど無く二本の腕と脚は細長く、腰から伸びる硬質な尾は四M^{メドル}ほど。

不死者^{アンデッド}モンスターなのかさえ怪しいが獣の頭部から見える目は血の様な赤い光りを湛えていた。

六本の指に備わる深紫色の爪があらゆるものを切り裂く。

(……デケー)

(……禍々しい)

未知のモンスターは獲物を物色するように静かに移動を始めた。

天地関係なく移動する脅力から、あらゆるところに飛んでくることを予想させる。そして、それはベル達にとって戦いにくい相手でもある。

たった一度の跳躍で二〇M^{メドル}もの距離を移動するモンスターだ。迎撃は容易ではない。

(あのジュラって奴の声がしねーな)

小さな声なのはモンスターが反応する可能性を考慮してのものだ。

命が辺りを窺うとききまでジュラが居た場所は真つ赤な血に染まっていた。

どうして、という疑問が頭の中を満たし、次にあのモンスターによつて殺されたことに気付いた。

何の悲鳴も聞こえなかった。

大破壊を敢行した悪党はあっさりと死んでしまった。

(……次は俺達つてわけか)

警戒している間にもモンスターは何かを咀嚼しているようだった。

おそらくジユラの肉体だ。見る見る血が地面に落ちていく。

ベルは逃走は難しく、ここで迎撃しなければ全滅するのは確実だと悟った。勝てるかどうかは分からない。

問題は仲間を守り切れる自信が無いこと。

(……油断すれば死ぬ。あのモンスターはそれほどの相手だ)

上層で相対したミノタウロスとは次元が違う。

強者に叩き潰されるのではなく、唐突な死を齎す。もたら

戦い方が分からない。防御が通用するのかさえも。

神様から貰った黒いナイフを構える。彼が持つ中で一番の強度を誇る武器はこれだけだ。

(……みんな、上に行つて救援を。無理そうなら逃げて)

(……分かりました)

一緒に戦えないのはリルルカ達も理解した。だから、残つて戦おうとは言わない。

切り札たる春姫は詠唱している間に殺されるかもしれないので、まずは安全圏まで離れる事を命に優先させた。

それぞれ団長の指示に従い、移動する。

「[ファイアボルト]！」

開戦の火蓋が切って落とされる——筈だった。

ベルが牽制を兼ねて放った魔法がモンスターに着弾したかに見えた。しかし、次の瞬間には放った当人に当たっていた。

思わず悲鳴を上げるベル。何が起きたのか理解できない。

最後に逃走しようとしていた春姫には見えていた。

彼の魔法がモンスターに向かい、何故か引き返してきたところを。

(……まさか、反射!?)

骨の様なモンスターの身体はうつつすらとした紫色の光りが灯っていた。それが魔法を反射させた能力なのだ、と。

魔法が通用しなければ接近戦しかできない。次の問題は相手の強度だ。

ベル以上の素早さを持つモンスターとの近接戦は自殺行為に等しい。けれども、やるしかない。容易に逃げられる相手だとベルも思っていない。

焼ける身体に耐えつつ戦意を維持する彼の身体にリリルカは回復薬ポーションの液体を振りかける。

見る見る火傷が癒えるが完全な治癒とはいかない。

ではない。自分より少し速いだけ。

大きな身体ゆえに繰り出される攻撃は生半可ではない威力が上乘せされる。それをもともに受けるのは危険——

何でも切り裂く爪の攻撃を避けつつナイフを一閃させる。どこかに当たればいい。ただそれだけの攻撃。

(……完全な骨というわけではない？ いや、骨だけどそれほど硬くないって事か)
モンスターの身体からパラパラと何かが落ちていく。それは身体を覆う『殻』であった。

『力』と『敏捷』が異常に発達した弊害として『耐久』が著しく低い。そう判断した。攻撃を当てさえすれば勝機が見える。だが、それを易々と許す相手ではない筈だ。

下層に降りれば降りるほどモンスターは狡猾イレギュラーになってくる。先の強化種との戦闘の
ように。

(動きに慣れたからといってもこのまま戦闘が続くわけがない。次に考えられるのは
……)

ベルより足が遅い仲間を狙う。至極単純な戦略にして最も効果的な方法だ。

特に春姫が狙われれば気持ち的にも大打撃を受ける可能性がある。

理由は単純だ。

どうして殺せなかったのか。自分の中にある命題はただ一つ——
ダンジョンに危害を加える者の抹殺。

ただそれだけの為に自分は生み出された。それなのに殺せない。——いや、一人だけ
孤立していた者はあつさりジュウと殺せた。ならばそれで満足すればいい。

だが、一人だけ殺したただけだ。獲物はまだ居る。

生きている限り、目につく生物は全て塵殺する。そうすることが自分の役目抹殺の使徒である。
天井から壁に移動し、ベル達を眺める。向こうから攻めてこないのは観察しているか
らだ、と予想する。

相手からの魔法攻撃は自身の特性によって反射し、それは正常に機能した。特に異常
はない。ゆえに戦闘を続行する。

殺意を漲みなぎらせるモンスターに対し、ベルは迎撃態勢に入る。だが、大きな身体を持つ
モンスターの突進はそのまま受けると身体が持たない。

ギリギリの回避を要求されると予想する。そんな攻防を勝つまで続けるのは非常に
難儀する。しかし、やらなければならぬ。

(少しずつ削り取る作戦は長続きしない筈だ。……出来れば魔石を狙えばいいけれど
……。あの細い身体はどこにあるんだか……。)

予想では頭か胸だ。狙うには飛び込むしかないけれど。

——もし、狙いが外れれば衝突によるダメージ。回避の失敗によって斬撃を受ける事が考えられる。

あのモンスターの斬撃を受けてはいけない。ヴェルフは軽傷で済んだが今の自分達の防具ではとてもではないが受け流したりできない気がする。

完全回避一択。それはとても恐ろしい現実である。

逡巡する暇もなくモンスターが跳び込んできた。狙いは仲間ごと。

「……………」

攻撃に絶対の自信があるモンスターだ。多少のダメージを無視してもおかしくない。大ぶりな一撃だけでも脅威である。

何せ、相手は受け止めきれずに切り裂かれる事になる。

回避不可。防御不可。それを小さな人間ヒューマンであるベルにどう対処できるといえるのか。

可能性があるとするればモンスターの攻撃に動じない——例えば『不壊属性デュランダ』——武器など。

(迎撃できるか？ 仲間は守れる)

咄嗟に脳裏に浮かぶのは半数の無事だけ。残りは無残な死体だ。

犠牲を出したくない彼にとって一番選びたくない未来が提示された。だが、誰も守れないよりはいい。

次の攻撃を繰り出す時間がとてもゆっくりと感じられた。

命の武器は相手の攻撃を防げるものなのか。そうでなければ武器ごと切り裂かれてしまう。近くに転がるジユラのように。

「やらせるかー！」

意識の外側から怒声と共に緑色の閃光が走った。

命への攻撃は結局のところ失敗に終わる。しかし、相手にはもう片方の腕がある。そこらは感覚だけでベルが対処した。自然に身体が動いたといつてもいいくらい無意識下での対処で自分でも驚いた。

互いの攻撃は致命傷には至らず、痛み分けて終わった。

モンスターは攻撃を防がれた事を知ると即座に引き下がった。強引な勝利を避けた分、かなり性格が悪いらしい。

「無事ですか、クラネルさん！」

「……な、なんとか。ありがとうございます」

戦場に入ってきたのは頼れるエルフ、リユーだった。

上層で何があったのかは分からないが大きな怪我が無いところを見ると二匹目の大蛇の井戸ワーム・ウェールに然程苦戦しなかった模様。

リユーはベル達を気にしつつ敵を見据える。ある程度の予想をしていた為か、未知の

モンスターの姿に驚いた様子は無い。だが、見る見るうちに脂汗が流れてくる。

「とうとう現れてしまった。……それで、ジユラ……は死にましたか……」

「すみません。何もできず……」

「……そうですか。悪党の事はいい。今はあれの対処が最優先です。他の皆さんは上を目指しなさい。かえって足手まといだ」

敵を見据えたリユアの言葉にリルルカ達も自覚していたのか、文句ひとつ言わずに引き下がろうとした。だが、モンスターはそれを許す気が無く、威嚇してきた。

かつて「アストレア・ファミリア」を全滅させた因縁のモンスターとの邂逅——それはリユアにとって一番辛い記憶でもある。そして今、大切な友人達が危機に立たされている。

このモンスターの正式な名前をリユアはギルドから聞かされた。だが、他言無用の制約を課せられてしまったので今まで誰にも教えていない。

ギルドは詳細を把握した上で一般公開を固く禁じてしまった。

現時点でこのモンスターの情報を知るのは先に死んだジユラとリユア、ギルドの上層部とダンジョンに祈禱を捧げている神ウラノスだけ。

「私達で倒します。覚悟してください」

「はっ」

一息をついてからリユースは早口でまくし立てる。そうしないといつ襲ってくるか分からないからだ。

モンスターの特性。攻撃方法。自分の知る限りの事を。しかし、リユースとて多くを知っているわけではない。それが正しいともいえない。

当時ですら仲間の犠牲の上で勝利を得た化け物だ。戦い方など^あ在って無いようなもの。

「このモンスターに魔法は厳禁です。物理攻撃か付与魔法……。あるいは自爆攻撃が有効です。とにかく、あの装甲を引き剥がさなければ仲間の支援すら無駄……」

「了解しました」

言い終わると同時にモンスターが跳躍した。態々^{わざわざ}待っていたかのように。それだけ自分に絶対的な自信があるのか、それとも偶々^{たまたま}か。

リユースにとって遭遇経験は一回のみ。だが、その一度の経験が今に繋がっている。

情報の重要性は生き残ってこそ発揮される。相打ちや無駄死にで消費されるものではない。

例え、激情にかられていたとしても。

モンスターの最大の武器は驚異的な跳躍から繰り出す爪の攻撃。時折尾を使う程度の一点突破型。

もし、モンスターより『敏捷』が勝っていた場合、劣っている者に標的を変える。それだけでも充分に脅威である。尚且つ強引な勝利を狙わず、確実に冒険者を殺そうとする。

例えばベルとリユーをあつさりとは無視してリリル力達を狙ったり——
とにかく、狡猾で油断できない。

(また貴様は弱い者から狙うのか！)

軌道変更してきたモンスターに追い縋り、木刀——大聖樹の枝で作られた第二等級武装『アルヴス・ルミナ』——を長い尾に叩きつける。それを不快に思ったモンスターは腕を乱暴に振った。

速度だけならレベル ^{ファイブ}5に匹敵するモンスターの攻撃を辛うじて避ける。

ベルもリユーの負担を減らす為、反対側から攻めた。だが、射程が極端に短いナイフである為、相手からの反撃を受けやすい。

斬撃ではなく殴打によつて小さな少年は吹き飛ばされる。その威力は中々のものだったが耐えられないほどではない。だが、それもあと数回が限度といったところ。

リユーは走り続けた。

駆け続ける事で攻撃力が増加する【疾風奮迅^{エアロ・マナ}】のスキル効果。

魔法を使用しない分、余計な雑念に囚われず攻撃に意識を向けられる。

速度が乗ったリユーはモンスターと同様に壁や天井も駆けていく。二つ名の【疾風】を体現するように。

そんな彼女に追隨するのは【白兔の脚】ラビットフットである。リユーに負けず劣らず、縦横無尽に駆ける。

彼の速度の真価は『逃走』時に発揮されるが頭の中にその文字逃走は無い。撃滅だけだ。

白と緑の軌跡を描きつつ二つのレベル4が脅威のモンスターに襲い掛かる。

(……話しに出たモンスターか。速度から不意打ちであれば瓦解もありえるな。奴なら仲間が一人でも犠牲になれば取り乱すのは容易か……。喪失を知らん冒険者がぶつか
る壁でもある)

二人の戦闘を軽く見た存在がそんな感想を抱き、下方に固まっている足手リリルカ達まといを掬い上げていく。

見捨てる事も出来るが約束がある為に――

ベル達が戦闘に集中している間、広間ルームにお荷物リリルカ達が無くなった。それに気づいたのはリユーだ。

苦笑を浮かべつつ戦闘に意識を戻す。

後顧の憂いさえ無ければ――これほど気持ちが高揚する事も無かった。だからこそ

惜しい。恨めしい。そんな気持ちが湧いてくる。

後悔先に立たず。過ぎ去った時は戻せない。

目の前のモンスターはリユーにとつて未知ではなく既知。大切な友人であるベルだけは守らなければならない。

かつて守り通せなかった仲間達の為にも。

「……クラネルさん、思いつきり戦ってください」

「え？ わ、分かりました」

速度を緩めずに果敢に攻め始めるリユー。

仲間を気にしていたベルにとつては意外だった。だが、すぐに理解する。

己の後方には何もない事を。だからこそ、確歯噛みした。そんな事認に余計な時間を使つてしまった事に。

モンスターの速度は自分達より早い。けれども予測すれば避けられないほどではない。い。

攻撃も通っている。装甲さえ剥がせれば魔法も通用するようになるかもしれない。だが、それは希望的観測だ。ベルにとつてはまだ未知の存在だったから。

数分の激闘。それでも体感的には一時間ほど。

モンスターは一向に諦めない敵に驚いていた。ここまで抵抗するとは予想外であり、

受けたダメージも大きい。

倒せない敵が居るとは思わなかった。

「無理に攻めないでください。このまま削り倒します」

「了解」

「……魔石を無理に探そうとしないでください。それこそが油断の元です」

魔石がどこだか分からなくとも徹底的に叩き潰せば同じこと。

リユーは執拗に殴打し続けた。少し私怨が混じっていたけれど。

ベルも少しづつ装甲を削る。有効打を与えられるのはナイフだけ。攻撃できるだけマシだと思うようにした。

攻撃と逃走を許さず、未知のモンスターを少しづつ追い詰める。

ここで重要なのは勝利を確信してはいけないこと。ベルの脳裏に金髪金眼の剣士の言葉が思い出される。

追い込まれた瞬間こそ一番の好機が見える。

対人戦においてそう教わったけれど、賢いモンスターに通じないとはいえない。

相手もベル達の様子を窺いながら警戒し始めた。自分の強さに驕おごっていない。あるいは予想外の抵抗に驚いているのかもしれない。

未知のモンスターは強さだけならレベル5に相当すると予想。

自由自在に動くのは本来であればベル達の専売特許だった。それをモンスターに使われればたたらを踏まざるを得ない。

追い詰めていたと思つたら追い詰められていたのは自分達の方であった、というのはよくある事だ。

細かな牽制は時間が経つごとに効果を発揮する。

(だが、我々はまだ生きている。あの大ぶりの斬撃さえ喰らわなければ……)

既知だからこそ捌けている。それが出来なかつた時の惨状は今も記憶に焼き付いている。

冒険者の肉体をいともたやすく切り裂く。その脅威の攻撃に対抗しうる防具は無いに等しい。全くの無駄。そう思つた方が早い。

ベルの防具もあちこち裂傷が目立つ。ギリギリで躲せているところ。

「……クラネルさん。防具は邪魔です。捨てなさい」

「そんな暇は無さそうですよ」

「……愚問でした」

モンスターの次の攻撃が飛んできた。

このモンスターは身体が大きいけれど二手に分かれる相手に早々器用に立ち回れない。

もう一人助つ人が居れば、と思わないでもないが——戦闘中の救援それ自体が油断に繋がるおそれがある。

リューは瓦礫の散弾に打たれて苦悶の呻きを漏らす。隙が出来たところに剛腕の一撃が襲ってきたが辛うじて避け切った。

(内臓をやられてしまいましたか)

口から血の唾を吐きながら相手を見据える。

今は顔を背けると死ぬ。そんな気配が充満していた。

ベルに向かって跳ぶモンスター。すれ違いざまに切りつけるが、それを見越した上で尾の攻撃を見舞ってくる。それを避けるも肩口に当ててしまう。

「……………」

速度の乗った攻撃は僅かに掠っただけでもかなりの衝撃が伝わる。

もし、直撃していれば骨ごと粉碎されていたかもしれない。

モンスターの攻撃を一つでも受けずに攻撃を当てる、というのは無茶で無謀もいいところだ。

時間経過と共に勝てる要素が無くなってきた。

(勝たなきゃ死ぬ。勝てるのか？ 強い思いだけで攻略できる相手なのか。そうしなければみんな死ぬ)

(……最悪、自爆攻撃を敢行し……クラネルさんだけでも生きてもらわなければ……
かつてアリーゼが私を助けてくれたように。……彼はここで死ぬべき存在ではない)
痛みと疲労がどんどん蓄積していく。先ほどから身体が重く感じてどうにも意識を
保つのが辛い。

二人とも満身創痍となりつつ戦意を維持してきた。

特に厄介なのは視界いっぱい広がる瓦礫の散弾だ。それ自体は耐えられるが少な
くない痛みが身体を襲う。

(目を潰し、足を潰す戦法を取ってきた……。これでは速度を乗せるのが難しくなる)
リユーが持つ魔法は攻撃と回復のみ。防御に特化した魔法は持っていない。

ベルも超短文詠唱——速攻魔法を一つだけ。

対するモンスターの武器はダンジョンそのもの。物量的にも圧倒的な差がある。そ
して、有効と分かったら効果的に使ってくる。

「【ファイアボルト】」

飛来する瓦礫にベルは魔法を放った。モンスター以外は反射されない。これで少し
でもリユーの助けになれば、と。

それに感謝し、ベルに回復魔法をかける。

(多少のダメージがありますが、奴に比べれば大したことはありません。……だが、これ

（僕達の命を犠牲にして……。それでいいのか？）

（相打ち覚悟の相手とは戦いたくない）

確実にベル達が死ねばそれでいい、と思っているならなんともいやらしいモンスターであろうか。

ベルは無駄死にする為に冒険者になったわけではない。絶対に生き残る、と強く思った。

生き汚くて結構だ。形振り構えるほど人間が出来ていない。

憧れの人の隣に立つまでは死ねない。そう決意を込めて下層域に来た。

「……先に謝っておきます」

唐突にベルが言った。それにリユーは驚く。

戦闘中に弱音を吐く場合は自己犠牲と相場が決まっている、とどこかの神が言っていた。

「……今回ばかりは「ランクアップ」を諦めます。……だから生きて帰りましょう」
「……クラネルさん」

若き冒険者ベル・クラネルが弱音を吐く場面は早々記憶に無い。

常に強くなるうと努力してきた彼が諦めると言った。それはモンスターの撃滅を優先しない、ということに他ならない。

ここであのモンスターを倒さなければ多くの犠牲が出ると分かっている筈なのに。

(……私は私怨で向き合っている。だから、逃げる選択肢など存在しない。でも……、彼は違う。未来ある若者だ。まだ悪に墮ちる前の無垢なる冒険者……。かつて私が捨ててしまった在りし日の目標……)

言葉は違うが正義を掲げていた冒険者達が居た。その中にはリユートの姿もあった。

どんな困難があろうとも決して諦めず、強敵と戦い続けてきた輝かしい冒険者の姿がベルは自身の強さより生き残りを。仲間やリユートの生存を望んだ。

モンスターを倒す、という目的を自ら捨てて選んだ選択肢だ。それを嗤う事も軽蔑する事も誰が出来るというのか。

彼は優しく気高く尊敬できる冒険者だ。ヒューマン

高潔で高慢なエルフよりも。今のベル・クラネルは清く正しく美しい。

リユートは思わず口元が緩んだ。

「……全く貴方らしくもない。獲物を前に逃走を選ぶとは……」

「このまま戦っていると失うものが多くなると思っています……。情報こそが何よりの宝

……。それが冒険なんでしょう？」

「……貴方も……。少しは冒険者としての自覚を持ち始めたようですね。……。全く、生き

何か策があつての発言だと思つた。これで無策なら——それでも別に構わない。彼とならどこまでもついでに行ける気がした。

ベルは戦闘中にいくつか拾つておいた火炎石をモンスターに向かつて投げつけ、すぐに魔法を放つた。

爆風により互いの相対距離が離れる。それを見越して逃走を図ろうとした。だが、モンスターはそんな策をもつともせず、襲い掛かつてきた。

(切り替え、判断力が早い!? ……いや、爆風のダメージを受けている。自身を顧みないモンスター……)

(順然たる殺意の権化……。確実に冒険者を抹殺しようとする、その執念は実に恐ろしい)

敵と接触する、その瞬間に割つて入る存在が居た。

それは——無造作に拳をモンスターの頭部に打ち込んだ。ただそれだけで頭蓋がひび割れ、後方に吹き飛ぶ。

私も充分に少年に感化された、ということか。

自らの行いに呆れつつ眉根を寄せて失望する灰髪の女性アステル。

二人が勝利するまで手を出さないつもりであった。だが、少年ベル・クラネルが諦めの言葉を口にした。そして、それがどういふ意図か察したアステルはまず呆れた。次に

呆れた。そして、三度目も――

失望に次ぐ失望。かつて今も変わらない嘆きの気持ち。だが、過去と現在には明確な違いがあった。

全てを捨てて諦めと次に繋げる敗走である。

(二度と立ち上がれない冒険者と次こそは、と思わせる冒険者……。彼は後者だ。そして、小娘もなんだかんだと吹き返してきている)

託した思いが無駄にならないこと。それはとても大事なことだ。

先達に出来ることは彼らの背を押す。未来を指し示す。

――ほんの少しのお節介も含まれる。

「……深層域のモンスターはこんな温いぬる相手ではなかったぞ。全く……貴様程度、最弱のサポーターでも倒し果おせるわ」

(……ゼウスとヘラのサポーターならば可能かもしれませんが……。最強と謳われた【ファミリア】の構成員は本当に強かったのですね)

アステルはベルに顔を向け、いいんだなど尋ねた。彼は黙って頷いた。

これ以上の戦闘は無意味、とは言わないがリユーが危険に晒される。何より自分が頑張れば彼女も頑張ってしまう。生真面目なエルフであり、戦士である為に。

無様でも引き下がらないと――大切な友人を失いそうで耐えられない。

魔法を反射するモンスターであるがアステルには意味が無かった。それを証明するよう——

突如乱入してきた彼女に向かって大きな跳躍を試みるモンスター。その攻撃に対し、アステルは自然な動作で大きな身体を掻い潜り、長い尾を掴んで力を込めて引っ張った。至極容易く行われた動作だが、それだけで尾が千切れた。

彼女の細腕がモンスタアの突進力に負けることなく、空中で悲鳴を上げるモンスター。すぐに標的をアステルに切り替えて長い腕を振るう。だが、ベル達には勝つていた『敏捷』も彼女には遠く及ばなかった。

ベルとリユーに対して圧倒的な位置に居たモンスターよりもアステルが圧倒的だった。これはただそれだけのことだ。

「攻撃に特化し過ぎて防御が紙だな、貴様。……下位レベルに対して調子に乗れるだけで大したことが無いではないか。それでもモンスターか。軟弱者め」

モンスターよりも素早い手刀が腕の付け根に叩き込まれた。『耐久』が低いモンスターが彼女の攻撃に抗えるわけもなく——

抹殺の使徒は図体が大きいはずなのにアステルの方が今は大きく見える。

かつて「アストレア・ファミリア」を一方的な蹂躪で壊滅させたモンスターが——同じだった一人のモンスターによって無力化された。それも五分とかならずに。

ベルは始終驚いていたがリユーはよく理解していた。

これが上級冒険者のあるべき姿なのだと。そして、自分達は彼らを越えなければならぬ命題を課されている。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

手足と尾をもがれたモンスターはそれでもまだ生きていた。頭部の損壊が激しいが生命力だけは見た目以上に備わっているらしい。

念のためにと切り離れた部位も細かく裁断し、相手の出方を窺う。その間、リユーは過去に何があったか、話せるだけ喋る事を強要された。

アステルに慈悲も拒否権も無かった。

「……このモンスターについてギルドから箝口令が敷かれているのですが……」

「知るか。言え。エルフ耳を削ぐぞ」

「……今の貴女ならそれも止む無し、のような気がしますが……」

足元に転がしたモンスターに顔を向けつつ命令を下すアステル。最後まで油断しない姿勢にベルは言い知れない恐怖を覚えた。

いや、強者に対する畏怖の方が近い。

リユーは一つため息をついてから「アストレア・ファミリア」に起こった悲劇を語った。その元凶たるジュラの事も。

アステルにとってはたかがモンスター一匹というレベルかもしれない。けれども、当時の自分達にはなすすべが無かった。

「それが五年前の事……。仲間を失った私は闇派閥を殲滅する狩人となった。そうしなければ……。何もかもが無駄になると思ってた」

「一番純粋な貴様の心が折れれば悪に染まる。……。悪神の思惑通りになったわけだ」
 （正義ではアリーゼ達を救えない。……。仇を見つけた途端に自制が利かなくなってしまう）

そして、目の前に仲間の仇が見るも無残な姿を晒している。正直、止めを刺したいと思わなかった。

このモンスターは偶発的な事象によつて生まれただけだ。ある意味では悪意の犠牲者ともいえる。

もし、一人で対峙したならば相打ちか一方的に討ち死にしても良かった。だが、今回はすぐ近くに居てはならない大切な友人^{ベル・クラネル}が居る。守らなければ悲しむ人が出てしまう。

彼は尊敬する人間だ。手を取つても嫌悪を抱かない純粋な心を持っている。

「……おい、小娘」

「なんだ？」

ベルからアステルに顔を向けた瞬間に意識が飛んだ。

彼女が最後に聞いたのは『ゴツ』という鈍くて痛そう——いや、物凄く痛そう——な打撃音。

瓦礫と化した広間ルームの中を十数Mは飛んだのではないかとベルには見えた。何の抵抗も出来ずにゴロゴロと——いや、正しくはビュンビュンかもしれない。彼がこれまで見て来た転がり方ではないヤバイ動きとしか例えようが無かった——転がり、全身の骨が砕かれたような——あられもない——格好となつてから止まる。

彼女は白目を剥いた顔で完全に沈黙した。見た目には首が曲がつてはいけない角度に——それと額から血が出て、口元を覆っていた覆面は鼻血によるものか、ドス黒く変色し始める。それと遠目で確証はないが耳からも血が出ているような。

アステルがどのような方法でリユーを吹き飛ばしたのか、彼の深紅ルブライトの目をもつてしても認識できなかつた。

これこそが彼女の秘匿された必殺技『福音拳骨』ゴスペル・パンチである。

なんとこの技は即効魔法より早いと何度も喰らつた経験のある神のお墨付き。ゼウス

彼女の理不尽とも言える暴力に抗える存在は——最愛の妹を除けば——誰も居ないとまで言われる、とか。

「リユ、リユーさん!？」

(……空中で回転しながら飛んで行ったように見えた)

「……少年。お尋ね者の【疾風】が死んだな。あれは確実に即死だ。そうだな？　そうではない場合は確認の意味で全身を砕かなくてはならないが……、いいか？　それとも……、念には念を入れて奴の耳を削いでおくか？」

冷徹に無表情のまま言い募るアステルの言葉をしばし吟味し、何が言いたいのか理解した。そして、彼は全てを悟ったように何度も頷く。

【疾風】は今しがた死にました。見事な死体となり果てました、とはつきりと宣言する。

彼の言葉にアステルは微笑しながらよし、と言った。

05 英雄再誕

ヒューマン
人間のベル・クラネルとエルフの冒険者リユー・リオンは謎の抹殺の使徒との生死を賭けた激闘もアステルという不可思議な異端児モドキにかかれば——文字通り——赤子の手をひねる程度で終了してしまった。

——気高き森の妖精【疾風】リユーも彼女の手にかかり貴い命が失われてしまった。その死に様を間近で見たベルは何とも言えない苦笑を湛える。

「……酷い。とにかく、酷い」

(……こんな姿、仲間には見せられないな。彼女の名誉と人権にかかわる)

せめて寝相だけは整えないと思ひ、だらしない格好の彼女の手足を動かす。——女性の身体に触れるのは気恥ずかしいがやむを得ない、と自分に言い聞かせて。

服を脱がそう、という気持ちは無い。疚しい気持ちは無い。

アステルはバラバラにしたモンスターの動向を見張っていて手伝うどころではないそう。最後まで気を抜かない所は見習わなければならないけれど。

「同情などするものではないよ。どんな理由があつたにせよ。こいつらは弱かった。己の無力を理由にして復讐に走った馬鹿どもだ」

「……………」

ひたすらに厳しい。慰めの言葉など一欠片も入っていない。

深層域に潜る冒険者というのはそこまでの心境に陥るのか、と。

実際、そんなのかもしれない。優しいエルフが激情に駆られる程、ダンジョンというのは油断ならない場所だ。近くにある死体を見て、全員の生存を達成する事がいかに困難であるのか――

(……仲間を失う目に遭えば冒険を諦める可能性がある。……アイズさんに憧れてきた気持ちも喪失感に勝てるとは思えない。……大切なものを引き換えになんて……)

彼女の「^{アイズ}ファミリア」は今でこそ大手と言われるが色んなものを失ってきたはずだ。それでも前に進み続けている。

失つてなお前に進むには理由が居る。単なる名声だけではない筈だ。

それこそが全ての冒険者に課せられた命題『^ク三大冒険者^エ依頼^{スト}』の達成。

今のベルには実感が湧かないけれど、いずれは参加することになり達成しなければならなくなる。

「先の戦いで怖気づいたか？ 深層はもつと過酷だぞ？ それに大型モンスターがたくさん居る。……今の規模では難しいが少しずつ経験を積み。冒険を諦めない心が今もあるというのなら証明し続ける」

何の足しにもならん。生き足掻いてこそ冒険者だ。……そう教わらなかったのか、お前の主神アストレアに……。私はヘラからそう教わり修羅の道を突き進んだ。幾許かの寿命と引き換えにして)

そして、前人未到の末に出会った『隻眼の黒竜』と相まみえ全滅の憂き目にあつた。圧倒的だった、と告げたがあれはそういう次元ではない。つまり——そういう存在である。

絶対に勝てない。

最後の英雄、とはいってみれば生贄だ。それを甘い言葉で誤魔化しているに過ぎない戯言と同義。

アイズ・ヴァレンシユタイン。

と、今はそう名乗っている小娘を最初に見つけた時、「ヘラ・ファミリア」は扱いに困つた。次に見かけた時は「ロキ・ファミリア」の冒険者になっていた。

邪神が召喚したモンスターと戦う彼女を見た時、これこそが自分達が待ち望んでいた英雄の姿であると確信を持った。

——正直、あんな小さな娘に頼らなければならぬ大人など、みつともないにもほどがある。だが、やるしかない。何を犠牲にしても。

(更に七年……。だいが大きくなっている頃か……。そういえば少年の歳を聞いていな

かったな。……思いのほか『終末の刻限』が迫っている気もするが……」
物思いに耽っているとベル達がやってきた。

そこで彼らに散らばるモンスターの欠片を潰すように指示した。

おそらく全て潰さない限り活動し続ける、と予想して。

「持つて帰つてもロクなことにならない。これ以上の犠牲を望まないならしつかりと潰せ。そうしないとそこで肉片と化している悪党のようになるぞ」

「……うわあ」

小人族のリリルカ・アーデと赤毛の鍛冶師ヴェルフ・クロツゾが道具を持ち寄つて作業を始めた。

今まで何の役にも立たなかった狐人ルナールの春姫も金槌を持つて頑張ろうとしたが、狙いが上手く付けられない。

「寄生の特性があるかもしれない。出来ないなら離れて見守っている」

「は、はい」

(本当に油断しない人だ)

素手で触るな、など細かな指示が飛ぶ。

魔法を反射する特性があるので、それだけ取り出せないかと尋ねてみた。

モンスターがまとう『殻』が身体から離れるとボロボロになるので無理そうだと告げ

まとめて袋に詰め、彼が所持していたアイテムをベル達に託した。

気絶したリユーもアステルが運ぶことになった。万が一、目が覚めた時、取り乱す彼女を取り押さえられるのはベルとアステルくらいだ。

団長ベルは女性の扱いが下手なので必然的に適任者が決まる。

「ダンジョンの中で埋葬したら私のように蘇つてまた悪さをするかもしれない。こいつは地上で処分させろ」

「そうですね。『ガネーシャ・ファミリア』の人達に会ったらそう言うっておきます」

さて、と小さく呟き——地上へ凱旋だ、とアステルはたくさん荷物を抱えて上層を目指す。

生き残ったジュラの仲間達は方々に散った。またいづれ相對するかもしれないがアステルには追う理由が無かった。自分の正体を吹聴されようと——協力者たる神は既に送還済みだ。今更イツイルス闇派閥イツイルスに戻る気も無い。

そもそも闇派閥イツイルス自体に興味を覚えていない。

「……よくよく考えたら、どうして私がこんな粗大ゴミジュラとかいうを持たなければならぬんだ？」

「ボールスさんたちは非協力的ですし、別の悪者に何かされるかもしれません」

一般的に冒険者の遺体が新鮮なまま、というのは珍しい。

持つて帰れない冒険者がギルドに依頼し、専属の回収班が向かう頃には大抵白骨化し

ている。

「本当ならジユラの遺体はそこらに打ち捨てたままにするところ。これは単に目障りだから、の一言に尽きる。」

「……それにしても俺が作った防具がもうボロボロかよ。どんだけ強かったんだ、あのモンスター」

記憶に間違いが無ければ『強制任務』の為に用意した新品だ。それが見るも無残な姿と化している。

それだけモンスターの斬撃が鋭すぎて役に立たなかつた事を意味する。

さすがに今以上の硬度を得るにはそれなりの素材が必要だ。

(……一応、混ぜ物とはいえ超硬金属アダマンタイトなんだけどな。火炎石をたんまり頂いたから気にするのはやめるか)

それに——あのようなモンスターは早々出てこない筈だ。全てに対応できるほどヴェルフも技術に自信があるわけではない。

もつと精進しようと誓うのみ。

♪ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫ ♪ ♫

帰りの道中、闇討ちの様な襲撃も無く順調な行軍だった。

特にリルルカは収穫物がいくらになるのか楽しみで仕方が無い。ヴェルフも貴重な

火炎石に表情が少し緩み気味だ。

ヤマト・命とサンジヨウノ・春姫は互いの無事に安堵していた。

団長ベル・クラネルは——地上に上がったアステルの案内のほかに彼女が何を目的としているのか気になっていた。

背負うリユー・リオンも復讐を終えた今、どうするのか、も。

（他人の事ばかり考えている。僕はもつと冒険の事を考えた方がいいよね。……その為にはもつと強くならなきゃ。ただ強いだけじゃなくて生存率を上げる戦い方とか……）
そうしている内に多くの冒険者が行き交う上層にたどり着いた。この辺りになると人通りも多く、地下街の様な様相を呈していた。

特にミノタウロスとの戦闘が無い階層は賑やかだと言つてもいい。

時間的には翌朝か、朝を少し過ぎた頃。

ほぼ強行軍。幾度もの危機に瀕し、大勢の犠牲者が出た。

彼らが宿場街リヴィラに向かえば様々な情報を得て騒ぎ始める事は想像に難くない。
身体の大部分を隠している服装だからか、アステルをチラチラと窺うものの引き留めようとする者は居ない。時折、ベルの二つ名を呟く者とすれ違う。

これから地上でどんな騒ぎになるのか、今から緊張が高まって気が気ではない。そして、それは仲間達も同様だ。

怪しい人物が側に居て、悠々と人ごみの中を突き進んでいるのだから。

服から爬虫類の様な尻尾がこぼれ出ないカリリルカも春姫も心配していた。

(……まるで王者の貫禄の様な)

(アステル様に何かできる冒険者が居るとは思えませんが……。出来れば穩便に済ませて頂きたい。後、「ヘスティア・ファミリア」とは無関係だと宣伝してくれば……。つていうのは無理ですよ。ベル様が案内役なのですから)

彼らの心配をよそに円筒形の階段を上り始める。

ここから更に人口密度が高くなり、アステルが担ぐ物に不審な目を向ける。

一つは確実に死体だ。その腐敗臭で何事かを察知して道を開ける。

先に登ったであろうドワーフのドルムル達の後になるので引継ぎだと思つた者が何人か居るようだ。

よく帰ってきた、と小さく声を掛けられる。

多くの冒険者の遺体は基本的に放置されがちだ。それと搜索に赴ける冒険者もそれほど多くない。必然的に依頼料が法外になる事も屢しばしば。

そして、竜女ヴイヴルアステルは何の障害も無く地上に登り詰めた。

七年振り——彼女の中では数日振りの地上だ。それほど郷愁は感じない。だが、雰囲気の違いは何となく分かった。

多くの人が行き交う『中央広場』セントラルパークにある噴水広場。

倒壊した建物が多くあつたはずなのに痕跡が見当たらない。

(……やはり。……この平和はどうにも落ち着かん。こんな気持ちになるのは心が古い
たせいかな)

迷宮都市オラリオに存在する数多あまたの冒険者は深層域に挑戦するような面構えではない。七年経つても成長が見込めない、というのは少しのんびりし過ぎではないのか。

彼女にとつて出来る方法は彼らにとつて脅威的な存在である敵となること。それしか浮かばず、それしかできなかつた。

勝手に滅びればいい、と無責任な事も言おうと思えば言える。

(……私に出来る事など何もないぞ、オラリオ……。そして、冒険者)

悪も正義も潰えてしまえば残るのは永劫の恐怖。

それもまた一つの時代の幕開けだ。そこから這い上がるか、そのまま朽ちるか。

何もかもを失つたアステルにとつて今に拘りがあるわけではない。

——いや、あるとしても一つだけ。

あの子が幸せであれば何も要らない。

それこそが唯一の哀愁であり、思い残した未練の正体。

そう思いたいだけかもしれない。——と、アステルが思っていると周りの静けさに気

付く。

「……全く。……いやな静けさだ」

弱者が群れを成して怯えている音のようで――

閉じた眼まぶたでも分かる気配は無数。

「……二度ある事は三度ある……。そんな言葉を思い出したよ」

そう言いながらアステルに近づくのは子供の背丈程の人物。

金髪碧眼の小人族バルウムにして「勇者」フレイバーの『二つ名』を持つ冒険者。

「ロキ・ファミリア」团长フィン・デムナは愛用の槍を肩に担いで悠々と歩いてきた。

「……直接赴くとはお前らしくないな、小人族バルウム」

「なーに、『遠征』の下準備をしていたら珍しい客人が居ると……。うちの若い者が大慌てで報告に来たものだから様子見に、ね」

大手「ファミリア」の頭脳担当であるフィンにかかれば誤魔化しは無駄。であれば素直に相対する方が手間がかからない。

多くの冒険者が一八階層から引き揚げた。その中に彼の手の者が混じっていてもおかしくない。

「……見ない顔も居るようだな」

「期待の新人さ。……といっても君から見れば、だけど」

肩を竦めてため息をつく。

それに対してアステルはそうか、と一言呟くのみ。

失望した、と言われると思っていたフィンとつて少しだけ意外だと思った。雰囲氣的にも生前と違う事は理解していたが、彼女と相對した「ファミリア」が勝利した事が少なからず影響しているのではないかと予想する。

(団長と平気で話している人、誰なんですか?)

(……誰だろう。幹部たちは知っているみたいだけど)

と、小声で詮索する下位の冒険者達が騒ぎ出した。

彼らはフィンの命令でアステルを囲むように言われているだけで、どうしてなのかは聞かされていない。何らかの敵だとは思っているようだが――

「そういうえば、あの小娘はどうした? 今も生きているのか?」

「アイズのことかい?」

「そうだ。ダンジョンで私に楯突いた赤毛の小娘たちが全滅したと聞いてな。少し心配になった」

「……ああ、そうだったね。僕も惜しい人材を失ったと嘆いたよ。アイズは先ごろレベル6へと至った。もう少しで君に届くんじやないかな?」

「……時間的には順調だが……、まあいい。もう私には関係のない事だ。……それで最

得物は一対の湾短刀。ククリナイフだが、基本的には肉弾戦だ。雄叫びを上げつつ身体をひねり、強烈な蹴りを放つ。

(今までの冒険者よりも速い……。これは受けるべきではない?)

最高でレベル4まで。感覚の差に驚きつつもすぐに意識を修正していく。

複数人であればレベルが低くてもアステルと互角以上に戦える。ただし、連携の練度が高くなければ成立しない。

テイオネの蹴りを避け、次の攻撃に対処しようとする。と別方向から呑気な声と共に大きな武器を持ったアマゾネスが襲い掛かってきた。

テイオネ彼女の双子の妹テイオナ・ヒリユテ。

第一等級武装『大双刃』ウルガを大上段から振り下ろしてきた。が、それも回避する。

(大振りな攻撃……。周りへの被害を無視。……。これが新人とは) 分析しているところにもう一つの影が近づく。

先のアマゾネスと違い、速度に乗せた蹴りを放ってきた。

灰色のボサボサな髪に獣耳が特徴の少年狼ウエアルフ人ベート・ローガ。

獰猛な肉食獣を思わせる敵意に満ちた顔をアステルに向ける。

「……そこそこ素早いな、こいつ」

「あつ、ベート。邪魔ー」

アステルにとって初見となる冒険者達だが見た感じから、それほど弱くはないと判断した。

例えるなら「アストレア・ファミリア」の小娘共よりも強く、期待が持てると確信できる程に。

だが、荒々しいだけでは駄目だ、と評価を下す。

「……魔法職に対して肉弾戦とは……。何の嫌がらせだ？」

「君の言う周りへの被害を考えると……。どうしてもこうなる」

アステルの愚痴にフィンは苦笑しながら言った。

理屈は理解できるが納得がいかない。少しハンデが欲しいと言いたくなる。こちらは手加減を提示したはずなのに、と。

魔法合戦がお望みとあれば、とフィンの合図で近くに控えていたエルフ達が詠唱を始めた。

(……分かってて命令したな？ ……これも教育の一環か)

幹部であるフィンを含めて王族ハイエルフのリヴェリア・リヨス・アールヴとドワーフのガレス・ランドロツクは様子見に徹して何もしてこない。

手の内を見せない、というより純然たる観察のようだと判断する。それにあまり彼らは危機感を抱いていない。

苦笑している間もアマゾネス姉妹の攻撃が飛んでくる。

その他大勢の団員達にはあまり見えていないがレベル4以上の冒険達には戦闘の内容が見えていた。そして、その凄まじさも。

アステルが愚痴を述べつつも決定打を受けずに避けたり捌いたりしている技術力の高さに驚く者が増えてきた。

「ロキ・ファミリア」の期待の新人とフィンが言っていたが、団員達からすればそんな扱いをしていい冒険者ではない。

押しも押されぬ「ファミリア」の顔だ。その猛攻を今も回避している存在は更に化物と呼ぶに相応しい。

「……中々手出しせんな」

「……彼女にも都合があるんだろう。この辺りを壊すようなことをすると不味い事が……」

「それだと我々の方が悪者になるのではないか？」

呑気に会話するフィン達に団員達は慌てて抗議する。

このまま見ている方がいいんですか、と。

良い訳がないけれど見極めが必要だから見ているしかない、と応える。

それと——ティオネ達にはいい教材なのは確かだ。

オラリオ最強と謳われる【おうしや猛者】オツタルのような冒険者と早々手合わせなど出来ないの。

「……おい、【ブレイバー勇者】」

猛攻を受けながらアステルは言った。

少々不機嫌気味な言葉にフィンは苦笑しがら応じる。

「なんだい？」

「聞きそびれていたが……、手を出していいんだな？ 少々、煩わしくなってきた」

「死なない程度に加減してくれると助かるよ。これから『遠征』なんだ」

加減という単語にテイオネ達三人が反応し、一人は驚愕し、一人は頬を膨らませ、一人

はより怒った。

何なんだそれは、と怒鳴るベート。

それではまるで——

俺達が弱いみたいじゃねーか。

そう言おうとした彼の顔面にめり込むアステルの拳。

全く見えず、全く反応できなかった彼は無様に吹き飛ばされる。

一瞬の出来事に呆けたテイオナの横っ面を蹴り飛ばす。

「……戦いの最中によそ見とは随分と余裕だな、ガキ共」

今まで感じたことのない衝撃に驚いたが、それだけだと切り捨てる。

同じくティオナも既にアステルを見据えていた。

(……あー、こんなに頭がジンジンする相手……。久しぶりだなー)

(吸い込まれるように打ち込まれた。まともに食らったのは久方ぶりだ)

残っているティオネはフィンの命令で停止せざるを得なかった。

周りが騒然とする中、アナキティから色々とアイテムを受け取り、一息つくアステル。

戦闘続きで気が休まる暇が無い、と思いつつ懐かしさも覚えていた。

(……ああ、そうだ。その敵意こそがかつてのオラリオにはたくさんあった。……次代の英雄候補はちゃんと育っているようで安心した)

当初こそフィン達次代の英雄がそうだと思っていた。

「アストレア・ファミリア」が壊滅し、失望と喪失を覚えてしまったけれど——ベート達の様子を見て気持ち在和らいだ。

生きのいい冒険者は大好物だ。自然と表情が緩んでしまう。

「……ちつ。姑息バルウムな小人族め」

舌打ちと共に漏れ出る本音。近くで聞いていたアナキティが思わず怯む。

相手の気配が团长より少しばかり怖く感じた。

「気に障るような事をした覚えは無いんだが……」

「……気に障って当然だ。これほどの冒険者を前にしているのだから」

「彼らは『改宗』コンバージョンしてうちの「ファミリア」に来た者達だ。それと最近になって高みに登ったばかりでもある」

彼の言葉にそうか、と短く言いおいて装備の具合を確かめる。

受け取った回復薬ポーションで両手の痛みを消し、改めてベート達を見据える。

未だに戦意を保ち、アステルの様子を窺う瞳は憎悪というより強敵と戦える喜びに満ちていた。

今までであれば絶対的である強者を前にした冒険者の多くが怯えを見せていた。しかし、ベート達にはそれが無い。

何も知らないからそうなのか、知っていて尚その態度なのか。

それを確かめるには——やはり戦うのが一番早くて分かりやすい。ただ、アイズが居ないのが少しだけ物足りなかつたけれど。

「……キャットピープル猫人の娘」

「………ん。なんですか?」

知らない相手から種族名で呼ばれたアナキティは不機嫌な態度で応答する。

名前を聞いていた筈なのに何故、と疑問に思つたけれど——

それにしてもアステルという人物は近くで見ると異様でしかなかつた。素手を見た

時にも異端児ゼノスとしか言いようがない。

「敵を目の前にして何もできないのは悔しかろう。【勇者】ブレイバーの命があつたとしても……」
「……いえ、貴女程度を相手にする気が無かつただけです」

（……団長の命令を無視するのが怖かつただけよ。貴女なんか全然怖くないんだから！）

口を尖らせつつ引き返していくアナキティにアステルは追い打ちをかけるような真似はしなかつた。

見た感じでは悔しさを滲ませているようで将来が楽しみだ、という感想を抱く。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

待たせて悪かつたな、とベート達に告げて静かに戦闘が再開される。

先ほど顔面に一撃を貰つた彼は怒りを力に変えて突進した。その後をアマゾネス姉妹が追隨する。

ベートの基本攻撃は蹴り。ティオネは拳。ティオナは武器と蹴り。

ほぼ接近戦主体だ。それに対して前衛も務められるアステルは魔法の使用を控えて接近戦で対応した。

死闘であるならば制限なども受ける必要は無いが、そうする予定が無かつたので手加減を選んでる。

今は観光客だ。

気分的にはそうなのだが襲われている所が何とも納得のいかない部分である。

最低限の抵抗を試みている、という言い訳で相手をしているようなものだ。

(こいつらは分かっているのか？ 私程度に苦戦していることに)

冒険者の本来の敵はもつと強大で邪悪で理不尽だ。

単にレベルが高いだけのアステルに勝利したところで得られるものなど極わずかだからこそ、合間にフィンに向けて不満の顔を向ける。

煩わしい、という意味合いではない。もう少し歯ごたえのある冒険者を寄せ、という要望である。

(……彼らはうちの「ファミリア」でもそれなりの実力者なんだけだな)

(……アイズを用意するしかないか)

(数で攻めても不毛じゃしいう)

「……威勢がいいのは結構だが、それに満足しているようでは……」

「うるせー、黙れ婆ババア！」

離れて見守っていたリヴェリアが思わず顔を伏せる。

アステル共々言われたくない言葉だった。そして、当然のように彼女は不満を滲ませる。

敵意の様な雰囲気強くし、ベートに突進してきた。

(七年足せば三十路……。だが、気持ちはまだ二四だ。小生意気な狼人^{ウエアウルフ}め)

ある程度観察すれば大抵のことが出来る、と自負していたアステルも単なる肉弾戦はそれほど得意ではない。彼の戦い方を模倣する事はせず、必要最低限の動きで受け流し、拳を打ち込む。

レベル6である三人の冒険者達にも決定打を許さない動きは次第に周りを戦慄させる。

(潜在能力は怪人^{ポテンシャル}レヴィスと同等か、それ以上……。直接相対したわけではないけれど、底が見えない相手は戦いにくい)

と、フインは分析する。

単なる情報だけなら熟知している。

アステルの基本「ステイタス」が今も同じであればベート達三人がかりでも充分に戦えるということ。

だが、異端児^{ゼノス}となった事でさらに強くなっているとも考えられる。

この点に関して彼女の意志で異形になったわけではない、というのには信じられる気がした。少なくとも——生前の彼女は自身の強さに拘りが無かった。完全に無い、とは言わないけれど。

「……【ステイタス】の伸びもいいようだな。……アマゾネスの二人もそうだったが……」

「ああ？ 何が言いてえ」

「お前達はダンジョンに潜って今の強さを得たのか？」

「……んー、あたし達は他のアマゾネス達と戦って強くなったよ」

アマゾネスはそうかもしれないな、と思えばートに顔を向ける。

冒険者の中で種族によって強くなる方法が違う場合がある。大半はダンジョンに潜ってモンスターを倒して【エクセリア経験値】を得る。

テイオネ達は殺し合いの様な対人戦で強くなってきた。そういう文化がアマゾネスにはある。

「次の段階に向かいたければ死地に赴け。それ以外に方法は無い。……いつの時代も死に物狂いの戦いが冒険者を強くする」

「……けれど、そういう場所に彼らを送りたくない。今の冒険者は一種の職業だ。……残念ながらね」

アステルの言葉にフィンが応える。

大量の死亡者を出すような戦い方をギルドは承認しない。けれども、都市の危機に対しては形振り構わない所がある。

ベートに攻撃を集中させた。

これには当然、フィンも呆れる。

ティオネに頭を使え、とも言えない。無駄なので。

「……ティオネー。ババア言い過ぎじゃない？ 無視されてんじゃん」

「……クソがあー！ こつち向けやコラー！」

アステルはベートの胸を押す形で引き離し、ティオネに向き直る。目蓋を閉じたままの顔で。

他人からは盲目のように見えるが彼女は目が見えないわけではない。

「あ、こつち向いてくれた」

「……馬鹿か貴様。いい加減喚くのはやめろ。体力の無駄遣いだ」

彼女の意見にフィンも同意した。いや、リヴェリアとガレスも、だった。

敵ではあるがアステルはベート達に稽古を付けているような形だ。本来であれば忠告など徒勞にすぎない。それをあえて行うのは強者の特権である。

その証拠に折角振り向いてくれたのにティナネは突撃出来なかった。言い知れない

威圧を感じて――

「……うるせー。うるせー、うるせえ！ てめえのご高説なんざいらねえんだよ！」

「……一応先輩冒険者の意見なんだから聞いてあげて」

「はい、団長お！」

フィンの一言で態度が急変するティオネ。

アステルが彼に顔を向けると速攻で顔を背けられた。何も聞かないでくれ、と身体が語っていた。

何があつたのかは分からないがティオネという団員はフィンにとって大事な存在らしい、という事は理解した。

彼女だけではないけれど――

「……【勇者】^{ブレイバー}。呑気に見えていないで対策アイテムくらい持つてこさせろ」

「熱心な戦いだつたからつい……。でもいいのかい？」

「……聞きたいのはこちらだ。野次馬連中がどうなつてもいいんだな？」

アステルの魔法は広範囲に及ぶ。その知識をフィン達は持つているが新人冒険者は知らない。その事を指摘してみたが加減してくれると思つているらしい。

言葉尻からも被害を最小限にするつもりであつたのは認める。

よそ見しているティオネは隙ありだと思つて突撃した。しかし、突き出した拳を掌^{てのひら}で簡単に受け止められてしまった。

（……手加減していかないのに）

（……あ、やっぱこの人、強そう）

(……痛い。レベル5以上あると私も早々油断できないようだ)

テイオネの拳を掴み、軽くひねると彼女の身体が自然と回転し、そのまま吹き飛ばされる。

多くの団員達が驚き、フィン達幹部は苦笑を滲ませる。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

フィンは念のために近くに居た団員に必要なアイテムの詳細を伝えて持つてくるように命令した。そうしないとアステルの機嫌が悪くなつてどんな被害を齎すか分かつたものではない。

その間も戦闘が続いた。

レベル6が三人がかりで攻めているのにアステルは未だ余裕を見せている。それが——その光景が信じられないものだった。

(……全然隙を見せんのか。もしかや『不治の病』が消えておるのか?)

(どんな理由があつたのか分からないけれど、稽古をつけてくれるのであればありがたい事だ。……異端児ゼニスをこのまま見逃すのは色々と不味いけれど、今回は相手が悪い)

迷宮都市オラリオの平和を掛けた死闘であればフィンも参戦する所——そうであればまだ分かりやすかった。

おそらくアステル本人も復活に疑問を覚えている。

本格的に進撃されても困るが見ている分には微笑ましい光景だ。

(……しかし、ティオネ達を相手にしているのに勝ちの目が見えないとは……。彼女の戦いをこの目で見たわけではないから僕もとても興味を覚えているよ。一冒険者としてあの中に飛び込みたいくらいだ)

団長であるフィンの役割は頭脳戦だ。滅多に自分から参戦する事は無い。

小柄な小人族バルツムだから戦えない、というわけではない。戦闘経験だけなら今でも「ロキ・ファミリア」一だと自負する程に。

「……行ったら……駄目だよな？」

そうリヴェリアに言うのと深くため息をつかれ、苦笑された。ガレスは小さく笑いだした。

気持ちはわかると、と。

団長なので決定権はフィンが持っている。それでもリヴェリア達に尋ねたのは責任の所在だ。

これから『遠征』に向かう予定なのに余計な怪我で延期、ないし団員達だけの危険な進軍による被害などを考えれば安易に許可など誰も出したがらない。それと対外的にも不味い。

「ちよつとだけ行ってくる。僕は退屈な事務仕事ばかりで「ステイタス」の伸びが悪いと

常々疑問に思っていた」

彼の得物は『フォルティア・スピア』という槍。予備に『スピア・ローラン』も持っているがサポーターに預けてある。

静かに駆ける団長フィンの気配にアステルが反応し、彼の突きを避ける。——その頃
に大急ぎで本拠^{ホーム}から戻ってきた団員がアイテムを配り始めた。

持ってきたのは対アルフィア用の耳飾り。これを装備しておけば万が一魔法を使用
されても脳を揺らされる度合いが軽減される。

完全に無効化されないが無いよりましな程度には役に立つ。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

レベル6が四人。それとリヴェリアの防護魔法により戦局が切り替わる。

ただ、それでもなお超常の存在アステルは泰然とした佇まいを崩さない。

軽く息を吐いてからフィンに顔を向ける。

「前から君の強さに興味があった。今は弱点も克服しているようだし……」

「……大したものではないだろうよ。敗北は全てをかき消してしまう。……真の絶望と
言ったが……、この私ですら自信が持てない」

かつて最強と謳われた「ファミリア」が全滅した。その事実もはや覆らない。

後から来る冒険者達は向かう先に待ち受ける暴虐を知らない。理不尽を知らない。

絶望を知らない。

虚無感に満たされたアステル達に出来ることは自分達で全てを葬るか、踏み台になる事だけ。

後進の為に全てを捨てる覚悟を決めたからこそ悪としてフィン達の前に立った。そして、彼らは勝利した。――扉の前に立ち塞がった悪に勝っただけで何の解決もしていない事を知らずに。

「この身はモンスター……。遠慮は無用。何の躊躇いも覚えまい」

「……そもいかなない事態があつてね。皆少なからず困惑している。我々【ロキ・ファミリア】でさえも」

武器を構えつつフィンは苦笑を浮かべながら言った。

二人の会話に手持無沙汰だったティオナが興味深そうに顔を出してくる。大きな武器は邪魔だから、という理由でサポーターに預けて来た。

「なんか難しい話しをしているけどさ。この人、敵でいいんだよね？」

「……うーん。前回同様に敵なんだけど、正確な区分は難しいかな。……鍛錬の延長と
思っておいてくれ、今は……」

そう言うのと難しい言い回しだったらしく、ティオナは顔をしかめた。

彼女は前回の騒動の時に自分の感性を信じて戦いから身を引いた。自分の意に沿わ

ないと判断したら例えフィンの命令でも反故にする。

今は戦う事が楽しいから付き合っているだけで嫌だと思えば引き下がる心積もりだった。

「あとさ。この人、結局のところ誰なの？ 名前も聞いてないんだけど……」

「アステルと……、聞いたんじゃないのかい？」

「そうだっけ？ 何かみんな別の名前で呼んでた気がする……」

ダンジョンから戻った仲間からの情報では謎の存在アステルという者が尋常ではない実力を発揮して沢山の冒険者を畏怖させている。だから、地上に上がってきたら気を付けてください。そう伝えられた。

確かに見た目が異質で世間を騒がせた『異端児』^{ゼノス}のような印象を強く受けた。とても人間や獣人系^{デモン・ヒューマン}の亜人^{ヒューマン}には見えない。

装備で隠されているが顔色が死人のような青白さを超えている。

「……アマゾネス。貴様の名前はなんと言う？」

「んっ？ あたしはティオナ。あっちは双子の姉のティオネだよ」

天真爛漫な笑顔で即答した。

アステルに対する中では異質に近い。普段の態度では誰もが恐れ、怯えていた。

子供は須らく——怖がるものだからアステルは子供が嫌いになった。なのに——

為には――

目の前に群がる【ロキ・ファミリア】が至極邪魔である。

ベル・クラネルと一日いっぱい観光するのに貴様らは邪魔だ。

静かな憤怒が湧きおこり、フィンは突然の気配の変化に戸惑い飛び退り、ティオナは何が起きているのか全く理解できなかった。

「……私には予定がある。貴様らといつまでも遊んでいるわけにはいかなかった。……だが、ちゃんと名乗らないのも失礼か。初見の冒険者も居るようだし」

息を吐いて気持ちを落ち着ける。

別に殺したいほど憎んでいる相手でもない。単に癩に障るだけだ。特に予定の邪魔になる手合いに。

「……だが、名乗るだけ無駄だ、という気持ちもある。それでもいいか、ティオナ？」

「えっ？ あたしに責任を押し付ける気？ 面倒なの嫌なだけだ」

素直な気持ちを吐露する少女にアステルは苦笑を滲ませる。

声をかけても怯えず、素直な気持ちを表現する。そんなことが出来たのは自分よりも上級の冒険者と神達だけだった。

【ロキ・ファミリア】の幹部連中ですら未だに警戒を解かない。そして、それが普通のことだった。

「うん、いいよ。あたしは戦うのが好きなくらい友達を作るのも好きだから。それと冒険譚とか物語を読むのが好き」

最後の言葉にアステルは眉根を寄せる。

アステルも様々な書物を読む。だが、多くはいけ好かない神を思い出すので他人に語りたくない事情があつた。

ティオナの趣味にケチをつける気は無いが——聞きたくない事の一つであつたのは事実だ。

「どうしてかモンスターとして生まれてしまったが……。かつては「ヘラ・ファミリア」に所属していた一冒険者だ。その記憶を持つモンスターだと思つてくれていい」

「へー」

結構な告白に対して平凡な反応。

思わず口ごもりつつなんだこの娘は、と疑問を抱く。フィンに顔を向けると苦笑していた。

取り巻きの方は驚いたり、疑つたりしていた。様々な反応を見せる彼らの方がまともすぎて調子が狂う。

いや、普段から他人に距離を置かれたせいで感性に狂いがあるのだと思つた。

（下級は全て上級を敬え……。そんな傲慢な気持ちに私にもあつたのかもしれない。こ

の娘の反応は……私が欲しかったものの一つのような気がする)

死すまで手に入れる事の出来なかつた宝物が目の前にある。それゆえに手を出す事が怖くなった。

らしくない、と一言で言えばそういう表現になる。

——本当に、長く化け物をやっているからそうなるのだ。

手を伸ばせば頭を撫でさせてもらえそう——

そうしたいのに出せないのは呪いのようだ、と。

「……神口キには勿体ない眷族だ」

「もしかして褒められてる?」

ティオナの言葉に軽く頷くアステル。それだけで満面の笑みを浮かべられた。

何と可愛らしい笑顔だろうか。そんな気持ちを抱いた。

悪に堕ちた自分はこんな笑顔を持つ多くの人々を苦しめ、死なせてきたというのに。

それを手に入れる資格などありはしないのに。

けれども——やはり貴いと思ひ欲しがってしまう。

「……アルフィア。【静寂】という『二つ名』を付けられた過去の遺物だ。だから、遠慮

は要らんど。オラリオの冒険者共」

「ありがとう。じゃあ、改めて……。あたしはティオナ・ヒリュテだよ。よろしくね」

そう言つて一步——彼女の^{ティオナ}の中ではそうだが——跳び退つた。そして、微笑んだまま戦闘態勢に入る。

腐つても冒険者。その気配は確かに偽物ではないらしい、と。

偽名のアステルを捨て——アルフィア・ストラディとして改めて「ロキ・ファミリア」に相對する。

楽しい時間はとても短い。彼らとの邂逅もまた例に漏れず。

（メーテリア。中々面白い子供が居るぞ。お前好みの快活だ。この手合いならあの子の友達として合格を与えても……。ダメなら蹴散らせ。我らには弱者を蹂躪する権利がある。異論は受け付けぬ。それが……。〔ヘラ・ファミリア〕の氣風である）

呼吸を整え、背筋を伸ばす。

魔法職であるアステルもといアルフィアは静かに。そして、激しく加速する。

『^{アベリテイ}力』は異形の身でも大して強くないのは実証済みだ。ただし、素手であれば、の話
しだが。

強さの度合いは専ら^{もつぱ}冒険者時代が基準なので下級冒険者からしてみれば理不尽に変わりない。

レベル6に至っているティオナの視力をもつてしても正確に捉えるのが難しい彼女の速度が白い髪の少年の姿と重なつた。

(アルゴノウト君!?) いや、それよりも断然速いんだけど……、なんであの子の姿が出てきたの?)

驚いている暇もなく強烈な一撃がお腹に突き刺さった。

全く避けられなかった。普段、姉のテイオネから受ける一撃よりも重い。だが、意識は保てている。

想像以上に強いことが分かり、驚いた。そして、不敵な笑みを浮かべる。

こんなに強い冒険者が居て、自分達が戦える事に。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

一撃で昏倒しなかった丈夫さにアルフィアは感心し、次の標的を探す。既にベート達は動いていた。

確実な撃滅を目的としていないのでテイオナをこのまま痛めつける気は無く、向かって来るまで待つつもりだった。

この戦闘はそもそも鍛錬の手合いだ。殺し合いをする気は毛頭ない。

少年との約束があるので。

それが無ければ無駄な肉弾戦などしない。エルフ達の魔法も許可している。

アルフィア
こちらだけ制限のある戦いだ。若輩達に花を持たせるのも先輩冒険者の務めである。

槍を持っているのに拳で攻撃するフィンの手を最小限の動きでいなし、受け流す。

彼が宙に舞っている間、憤怒に彩られたティオネが猛攻を仕掛けてくる。

「……そういえば、貴様。何かを仕掛けようとしていたな？」

「ああ？　うるせえ、黙って沈め」

口汚い手合いをたくさん相手にしてきたが会話するだけ徒労と思わせる者とは——
やはり口を利きたくない。

眉根を寄せつつ相手の突進力を利用して放り投げた。

我流であればあるほど技術力が犠牲になる。特に力に自信がある者は特に顕著だ。

頭を使うフィンと違って切り返しが下手だ、と感想を抱く。

「どりゃあー！」

怒声を張り上げてベートが蹴りを放ってきた。これも同じものか、と呆れたがすぐに思い直す。脚に装備している防具に何らかの魔力が宿っているのが分かった。

武具の中には魔法的效果を付与させるものがある。その一種だと判断。

だが、何の魔法であれ——呪いカースでもないかぎり——アルフィアに痛痒を与える事は難しい。

だが、あえて確認の意味で受けることにした。

「……………」

彼の蹴りが腕に当たった時、通常の打撃の他に何らかの属性魔法が炸裂した。

衝撃は自身がまとう付与魔法で相殺出来るが——まともに食らえば軽傷くらいになる。

確かにダメージを受ける攻撃であるのは確認できた。

(……まるで組手だ。……そういえば、いつからだろう。こういう下級冒険者の面倒を見なくなったのは……)

強大な魔法を行使するために発現したスキルの影響か。それとも失望感に囚われた時か。

あるいは——大勢の仲間達が死に絶えてしまったから、か。

大きいため息をつき、ベート達から距離を取る。

戦闘中も全く本気を見せないアルフィアに対し、ベートは苛立ちを募らせた。

何なんだこいつは、という思いと未だに余裕を見せている敵の姿に。

雑魚は要らない。そう嘯うそぶいていた自分が全く相手にされていけない気がした。

(おいおい、ふざけんなよ。レベル6に至った俺がまだ届かないってのか。あいつ……、レベル7でもないってのか?)

(……あー、すごい。あたし達の攻撃が全然効いてない。深層にも何度か潜ってるのに……)

(……うん。想定が甘かったか。本人も良く理解していないと思うけれど、おそらくレ

ベル9^{ナイン}……。レベル7^{セブン}ではありえない。かといってレベル8^{エイト}でもない。魔法職だから『力』が低くて誤解しそうだけど……)

全ての上級冒険者が似たり寄つたりの「ステイタス」を持っているわけではない。それぞれの潜在能力に見合い、強弱がある。

ベートが本気を出して行けばリヴェリアを単独で撃破できる。単純な力比べであれば不可能ではない。

(……忘れていた。彼女は不治の病^{デメリット}が無ければ「ヘラ・ファミリア」最強の冒険者になれた、かもしれない相手だという事を)

かの「ゼウス・ファミリア」の団員にしてレベル7のザルドという冒険者がアルフィアには勝てないと言っていたことも。

相性の問題もある。それを加味してもアルフィアの潜在能力は底が知れない。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

当の本人はレベル7の感覚でベート達と付き合っていた。

ふと郷愁に思考が沈む。生前の記憶という感覚がある為に度々懐かしさに翻弄されてしまう。それこそが今のアルフィアのデメリットかもしれない。

戦闘意欲が減退したところに詠唱を終えた団員の魔法攻撃が飛んできた。

【魂の平静^{アダラクシア}】

（魔法無効化は健在か。災禍の怪物……。本物になってどうする）

それらを全く避けずに受け止める。とうとうか当たっている側から霧散していく。

リヴェリアが苛立ちで詠唱を始めようとしたところをガレスに止められた。
中央広場を粉々にする気か、と。
セントラルパーク

下級冒険者ならばいざ知らず王族の扱う魔法はどれも広範囲に被害を齎もたらしてしまう。
ハイエッセ

（……私達の魔法が……）

「……その魔法担当。自分の精神力を常に把握しておけ。こちらから反撃しないでやる。存分に放つが良い」

「はい！ ありがとうございます！」

アルフィアからの言葉に思わず礼を言う団員達。それにフィンは苦笑した。

一応彼女は敵だからね、と小さな声で呟いておく。

「……ふむ。あの小娘達より素直な分、調子が狂うな」

そんな言葉を出していると一際強い光線が頭に直撃する。が、即座に打ち消された。

アルフィアが今の魔法を放った者に顔を向けると——リヴェリアの側に居る山吹色の髪を後ろでまとめたエルフの少女と目があつた。

彼女は期待の新人『レフィーヤ・ウイリデイス』といい、ベートと同じく初見の冒険者だった。

(……そんな。【アルクス・レイ】が通じないなんて)

(無効化されたことに動揺する瞬間が、一番の隙だ、小娘)

彼女に向かって手を伸ばすも即座に引いた。

外野に好きにさせると決めたのに攻撃しては可哀相だ。

アルフィアが同情した事にリヴェリアは怒りを覚え、団員達を叱りつける。

魔法攻撃が再開され、その合間を掻い潜るのはベート達だ。多少のダメージを無視し

て――

(……以前であればその畳み掛けが通用しただろうか……。今の私は割り与健康体だぞ?)

フィンの槍。ベートの蹴り。ヒリュテ姉妹の肉弾戦。援護魔法。

その全てを顔色一つ変えずに受け流し、反撃まで行^{おこな}う。

上級冒険者の隔絶した身体能力はアルフィアにも経験があるが理不尽の一言に尽き

る。それを【ロキ・ファミリア】にぶつける。

ただし、決定打を与えない。

自分でも不思議な事だと自覚しながら――

(これではいかな。こいつらの為にならん)

「くたばりやがれえ！」

ベートの猛攻に対し、受け流すと見せかけ、身体から力を抜き両腕を下げる。

彼の蹴りを真つ向から受けることにした。それは何処でも構わぬ、という意味表示の表れ。そして、寸止めされる事なく顔面に激突する。

打撃音が鳴った。だが、それだけだ。

異形の化け物を——一步たりとも——引かせる事に彼は失敗した。

レベル6の多少の不信感から威力が減衰したとはいえ——構わずに押し通した蹴り技だ。並みの冒険者であれば吹き飛んでいてもおかしくない。

「この程度で満足するのか、ウエアウルフ狼人？ そんなわけはないよな」

「……………」

静かに移動し、ベートの脇腹に拳を打ち付ける。それだけで彼の身体が浮き上がった。

重い一撃だった。誰もが聞いたことのない打撃音によつて静寂が生まれた。

女の細腕から繰り出されたものにしては強烈で激烈で苛烈。

(……………骨と内臓が……………今の一撃で潰された?)

感覚で分かるダメージの程度にベートは驚きつつも体勢を立て直そうとした。だが、無様によろけて膝をつく。気持ち的にはそうしたくなかったのに。

全身からの発汗に気付き、次に襲うのは言い知れない痛みの嵐だ。

勝てない、という気持ちは何度も浮き沈みする。

それでも親指の疼きが起きないのは心のどこかで鍛錬の延長という甘い考えに囚われているからかもしれない。

(……これが本物の殺し合いなら……。彼女もおそらくそう思っていたからこそ加減してくれた。モンスターとなっているのだから討伐対象として狙われる事を分かっている筈なのに)

全てを理解してなお彼女は「ロキ・ファミリア」の前に立っている。

言葉ではなく力で対話しろ、と。

一つ息を整え、額に手を置く。

(……僕も冒険者だ。団長のまま腐る気はない。……それに同リリルカ・アーデ胞に笑われたくないからね)

「……ティオネ。君はレベル6になって浮かれていたのか？ 恥ずかしくないのか？

こんなに弱いアマゾネスで僕を振り向かせることなど烏おこ済こがましいと思わないのか？」

「!？」

(……ぐああ！ だ、団長に、団長に嫌われてしまった……。あ、ああ……。こいつのせいだ。こいつが立ち塞がるから私が弱く見えてしまった)」

(……後が怖いから焚きつけたくなかったけど、これも試練だ。頑張れば頑張っただけ

【経験値】^{エクセリア}が貰える。……そうなんだろう、ロキ。……じゃないとしばらく引きこもるよ)

フィンの側から獣の唸り声がして、それが少しずつ大きくなっていく。精神的ダメージと相手^{アルフィア}への怒り。それらが噴火寸前にまで高まっていく。

この糞女は絶対に殺す。そして、団長に優しくされるんだ、と強い思いを抱く。口から火でも吹きそうな変化に妹^{テイオナ}は怯えたが、敵^{アルフィア}は平然としていた。

それもその筈、彼女の様な感情は当時隆盛を誇っていた時代にはザラに居た。^{むし}寧ろ逆に彼女の様な気概を持つ冒険者が少なくてがっかりする程だ。

(……良い面構えだ。【カーリー・ファミア】^{アマソネス}の小娘共とじゃれていた時代を思い出す) 「殺すっ!」

(……あ、相手嗤ってる……。他の団員を下げた方がいいかな? そろそろ彼女も来るだろうし……)

愛用の武器を取りに【ゴブニュ・ファミア】に行っている金髪金眼の冒険者の姿をフィンは思い描く。そのすぐ後でテイオネの爆走が始まった。が、一秒もかからず彼女はアルフィアの一撃を腹部に受けて悶絶した。

速い、と思いながらフィンは魔法詠唱を始める。転がる団員に声をかける暇はもう無い。

「魔槍よ、血を捧げし我が額を穿て」

超短文詠唱を言い終わった時、彼の指先に紅色の魔力光が集まった。それは槍の穂先に似た形を取る。そして、それを額に当てて魔力光を体内に取り込む。

「凶猛の魔槍」

そう呟いた後、碧眼だった瞳は血の様な赤に染まり、凶戦士の様な雄叫びを上げる。

指揮を捨てたフィンが一人の戦士として相対する覚悟を決めた。

この魔法は戦意高揚。効果は能力値ステイタスの大幅な上昇。

代償として使用後は極度に判断力が落ちる。完全に理性まで無くすことはないが、戦い方からそう見られてしまう。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

小柄な体格の小人族バルウムは他の種族より能力が劣っている為に「ステイタス」が伸びにくいと言われる。それでもフィン・ディムナは全ての小人族バルウムの地位向上の為に努力し、今に至る。

見た目は若いが四〇を超えている。

「……お前のその顔は久方ぶりを見るな。私の好きな戦士……、英雄の顔だ」

「褒めても何も出ないよ。……堅苦しい頭脳戦より僕はこっちの方が好みなんだけど……。若手を無視できない立場なんでね。……君たちに余計な手間を取らせてしまっ

ている」

「……そうだ。……全く、隠居していた私を引きずり出して過分な手間を取らせた。……そして今、お前達はこの体たらくのまま絶望に墮ちようとしている」

テイオナは難しい話しに戸惑い。

テイオネは未だに痛みで動けず。

ベートはまだ回復できていない。

「ロキ・ファミリア」が誇る冒険者がたつた一人に撃滅されようとしている現状に他の団員達から動揺の気配が広がっていた。だが、それらをリヴェリア達は鎮めようとしないう。しっかりと見ておけども言うように。

(……絶望って何?)

アナキティは眉根を寄せつつ思った。

アルフィアは何に怒っているのか、と。

フィンの知り合いなのは理解した。しかし、その言動が良く理解できない。だが、団長達は理解している。その乖離の謎が解けずにいる自分が情けない、とも。

「お前達はようやくレベル6になったのかもしれない。……それで? この程度で強者のつもりか? 嘗めるなよ、オラリオの冒険者。お前達はまだ敗北に対して這い上がれる余裕がある。当たり前だ。手加減しているのだから。これから向かう深層域でもお

前達は充分に戦えるだろう。だが、それで終わりではない」

アルフィアは黙っているティオナを手招きした。

何もしなくても殴られるんだろうな、と思いつつ諦めた彼女は素直に近づいた。

嫌そうな顔のティオナの頬を軽く叩く。そして、頭を撫でる。

「先達の犠牲の上にお前達が居る。諦めず深層を目指す気概が残っている。……私は、

私達は諦めてしまった。脱落した。私や最強と言われた「ファミリア」が……」

「多くは命を落とし全滅した。君もその中の一人だ、「静寂」のアルフィア」

敗北者相手に「ロキ・ファミリア」が壊滅状態にされているその事実にはベート達が驚愕する。なんて無様なんだろう、と。

人生の敗北者に負ける事はとても、とつても不名誉だ。他人に顔見せできないほどに恥ずかしい。そして、怒りが湧く。

「強くなる簡単な方法がある。……強い冒険者を……殺せ。我々はそうやって多くの冒険者を屠って強くなってきた。他人の命を糧にして最強を手にした。……そして、全滅した」

「こ、殺して……。あれ、そんな話し、どつかで聞いたような……」

ティオナが首を傾げたがティオナはすぐに理解した。

それは自分達アマゾネスの故郷『闘国』テルスキニョで日頃から行われていた殺戮劇と同義ではな

いか、と。

フィンはその辺りについて知っているので不思議には思わなかった。だが、今の時代にはそぐわない。

ギルドの規則に抵触する行為そのものだから。混沌とした昔の時代は既に無い。

「モンスターを倒すのではなく冒険者同士で殺し合えて言うんですか？」

「弱ければ死ぬ。英雄は一人居れば事足りる。これはただ……、それだけの話しだ。オラリオの最終目的が何なのか知らないわけではあるまい？」

三大冒険者^ク^エ^ス^ト依頼の最後の一つ『黒竜』の討伐。

それを成す為なら何をしてもいい、という理由にはならないが他に方法が無ければ【ファミア】 同士争って強くなる事態が起きてもおかしくない。

現に【フレイヤ・ファミア】はそれを狙っている節がある。

(痛え、痛え、痛え……。糞痛え……。 たった一発喰らって動けなくなるなんて……。 長より強いな、この糞女……。 ああ、でも、なんか納得できた。 こいつが強いのは強いから強い……。 単純な事じゃねーか)

ティオネは苦痛によって乱れていた思考が少しずつ冷静になっていくことを自覚する。

内に秘めた怒りも力へと変換されていく。

彼女の持つスキル『バーサーク憤怒化招乱』が発動した。だが、まだ痛みが足りない彼女により、渴望する。

妹のスキルも『バーサーク狂化招乱』といい、名前こそ同じだが姉は怒り続ける事で更に能力が上がる。

それともう一つのスキルは瀕死時に効果を発揮するが今はまだその時ではなかった。ティオネの猛攻に合わせるようにフィンが槍を突き出す。

力業を好まないアルフィアだが、出来ないわけではない。先ほどからそれを証明している。

不気味なほど取り乱さない顔で相手の攻撃を掻い潜り、拳を打ち込む。

手刀で刀剣と渡り合える彼女があえて拳にしているのは命を奪う気が無い証明だとリヴェリアは察する。だが、そんなことをいつまでも続けられる余裕があるのか疑問だった。

いや、それこそが杞憂かもしれない。

今のアルフィアはほぼ無敵の化け物だ。勝利する気が無いのであれば彼女にとってはやはり——この戦いは単なる鍛錬の一環という扱いに落ち着く。

（「アストレア・ファミリア」と戦っていた時より苛烈な筈なのに……。どこか楽しげだな）

は生ける害悪だ。早急に殺処分しないと気が休まらん」

アルフィアを苛つかせる者の最上位に君臨する人物にフィンは心当たりがあつたが黙っていることにした。

混沌期の冒険者であれば誰もが知るところだが、今の時代では通用しない。ティオネ達も首を傾げる内容だ。

(あの人に狙われているクワツツジイ糞爺クワツツジイって誰?)

(ガレスさん以外の老人は殆どいない筈……)

老け顔と言われるドワーフ族だが、彼自身はそれほど歳を取っていない。だから、漏れ聞こえる内容に不満を募らせた。

少し私情が入った事で調子が狂ったアルフィアは一度、フィンから離れた。

彼の顔や身体は夥しい殴打痕でいっぱいになっていた。しかし、それでも顔が変形するほどの怪我は負っていなかった。

代わりにティオネの顔が酷いことになっていた。

(……いつの間に……。凄い腫れあがってるよ、ティオネ……)

「ティオナ。回復薬ポーションをかけてやれ。さすがにお前達を殺そうとまでは思っていない。無理に戦闘に参加しないでいいぞ」

「ありがとう」

「何度でも立ち上がれ。お前達はまだ生きています」
「う、うるしえー」

口元が腫れていて上手く喋れないティオネの顔に治癒魔法が飛んできた。

リヴェリア達の防護魔法を受けている筈なのに幹部達が手痛いダメージを受けている。その事実^{よゆう}に漸く気が付く者達が驚きの声を上げていく。

攻撃自体は単調だが上級冒険者特有の高速戦闘の為にほんの僅かな時間にもかかわらず、膨大な打撃数が飛び交う。

特にフィンの攻撃は速く、槍捌きが見えなかった。それを上回るのがアルファイだ。複数人を相手取っているのに未だに呼吸を乱していない。

しかし、一方的に勝っているか、というところでもない。ティオネ達の攻撃のいくつかはアルファイに当たっている。驚異的な『耐久』で平気そうに見えるだけ。

当人も少し苦しいな、という感想を持っていた。

（以前の彼女なら時間経過で「ステータス」の能力値が下がってきた筈だけど、今は健康体だからか、衰えが確認できない）

デメリットがあつたからこそレベル3で構成された「アストレア・ファミリア」でも充分に渡り合えた。

もし、今のアルファイと戦ったら間違いなく勝ち目が無かった。それはもうフィンで

(……うーん。狼人は当たり所が悪かったのか? ……それとも欺瞞か? ……欺瞞だ。レベル6の『耐久』がアマゾネスより低いとは思えん)

心配をよそに蹲っているベートは怒りを糧に力を溜めていた。多くの聴衆の目が無様な自分を見ている、という想定で。

否定はしない。弱いから負ける。実に分かりやすい論理だ。

「敵を前にして逃げる事も時には必要だ。殉教者になるなよ、狼人。お前はまだ立ち上がれるのだから」

「……るせえ。お前に言われるまでもねえ」

(ここのう手合いは嫌いだが……、死なせるには惜しいな)

万能薬でも完治に時間がかかるなら早期撤退を選ぶのが最善だ。

それが出来ないなら出来るようにすればいい。彼がそれを選ばなくても選べる奴が行えば問題は解決する。

即ち、現時点で強者であるアルフィアの決定こそがこの場の絶対的な法である。

ベートの介護をしていた者突き飛ばし、睥睨する絶対者。それに対し、彼は睨み返す事しかできなかつた。

当たりどころが悪く、出血も激しい。呼吸もままならない。そして、今は死を賭す場面ではない。

ひたすらに悔しいが勝ち目が無い事を悟った。だが、次は負けねえ、と。

「何度も挫け、立ち上がり、足掻き続ける。それがお前の行く道だ。お前の底が浅いのであれば散れ。存在するだけで邪魔だ。早急に失せろ。目の前に立ち塞がる壁はこの程度ではないぞ」

「……グルル……」

罵倒に近い言葉を掛けられ、獣のように唸る事しかできないベート。

アルフィアは掌を彼に向けた。問答は終わった。後は彼自身の問題である。

「畜生の咆哮しか吐けん屑くずに用は無い。【福音ゴスペル】」

至近距離から超短文詠唱を受けたベートは全身から血を吹き出して意識を失う。

音に敏感な獣人系の種族にとってアルフィアは天敵同然の存在であった。

連れていけ、と近くに居る団員に声をかけるとすぐさま静かになったベートを回収していく。

「……ちとやり過ぎた。それと時間切れだな。楽しかったぞ、【勇者ブレイバー】」

「……予定があるんだったね。けれどこのまま引き下がるのも癪だな」

「別に逃げはせん。だが、今日一日は少年と観光すると約束している。その後で改めて協議しても良い」

「……少年ってベル・クラネルの事か。……まあ、そうだよな」

(……楽しかったか。どうして私はそんなことを……。あれほどまでオラリオに失望していたというのに……)

【アストレア・ファミリア】と戦い、全力を出して負けた。悔いも無い。——その筈だったのに蘇った。

色々と疑問点が残るが今の自分は割と気分が良いらしい。

後進が全ての責任を持つものだから今更自分が出張る必要も無い。これは単なる気まぐれだ。そう思う事にした。

「……どうしたの、皆？」

整備に出していた武器を取りに行っていた金髪金眼の少女剣士が疲労困憊の「ロキ・ファミリア」を一瞥して疑問を抱いた。

遅すぎる登場に思わずため息が漏れるフィン。しかし、叱るわけにはいかない。

アルフィアの出現は予定外の事だから。

それと、彼女の側には白髪はくはつの少年冒険者ベル・クラネルが居た。

お待たせしました、と言おうと思つたら呻き声の様な、悲痛な声が聞こえて何も言えなくなつた。

「ちよつとした訓練だよ。それにしても随分と時間がかかったね、アイズ」

(……あの娘がアイズか……。随分と大きくなった。おそらく実力も上がっているだろ

う)

腰に細身の剣を佩いたアイズ・ヴァレンシュタインは元凶とも思える不審な人物に顔を向け、静かに鞘から剣を抜いた。

目の前に居る謎の存在の気配に覚えがある。けれども、咄嗟の事だったので正体については浮かばなかった。

「……貴女、どこかで会った事がある……」

「大きくなつたな、小娘」

声を聴いた瞬間にアイズは駆け出していた。この人は敵だ。殺さなければ、という強い思いを抱いた。

フィンも止める間もなく彼女の突進を許してしまった。

(……迷いのない鋭い動き。……だが、私の方が強いせいか、お前の動きはよく見える) 必殺の一閃を浴びせるもアルフィアは軽く剣をいなした。それだけで斬撃が簡単に逸らされた。

舌打ちしつつ追撃の斬撃を繰り返すも全て受け流された。

静かな佇まいのまま攻撃を無効化される事は早々に経験が無い。こんなことが出来る相手はアイズの知る限り団長のフィンしかかつて相對した敵だけだ。

(この娘もレベル6か……。七年という期間から考えれば早い成長速度だ。……それに

相手からの攻撃が無いからこそ出来たが、思考が少し混乱した。

遠征に赴く筈だった【ファミリア】と目の前の敵との間に何があったのか。

「馴れ合いで冒険者は強くならん。……少なくとも私は命を削って手にした。お前はどうか？ 今の強さを手に入れるのにどれだけの時間をかけた？ 【ステイタス】の伸びが悪い事に悩んだりした口だろうか？」

「ど、どうしてそれを」

目つきを鋭くして剣を繰り出す。全く有効打が与えられない。

装備しているガントレットのせいか、と疑った。

（……今のは……どれに対しての疑問だ？ 寡黙な奴が急に喋ると私も困る）

「……私、もっと強くなりたい。今のままじゃダメって事は……分かってる」

（……素直。アイズさん、物凄く素直だ）

（……以前の荒々しさが……無くなっている？ 剣を持つ貴様は全てを切り裂く剣そのものになるうとしていたのではなかったのか？）

三者三様の疑念と苦悩が場に満ちた。

ただ、ベルは二人を止めに入る余地を見つけられなくて困惑した。周りの団員達も静かに見守っているので迂闊に声をかけると怒られそうな気がした。

「強くなる方法は簡単だ」

「えっ?」

突進しようとしたアイズが急停止する。渴望していた方法の前で油断を見せる事にアルフィアはつい怒鳴りそうになったがやめた。

このまま戦闘を続けるのは不毛だし、少年も来ている。早めに面倒ごとを解決するのが急務だと判断した。

「強い冒険者をたくさん殺せ。……その娘にも言ったが……。それが一番の早道だ。……お前にそれが出来るか?」

「……ぼ、冒険者をたくさん殺す……」

「暗黒期のオラリオではそこかしこで殺し合いがあった。病人の私でさえレベル7になった程、あの頃は昇華が簡単すぎた」

一つ呼吸を整え、落ち着いた口調でアイズに語る。

冒険者は「ランクアップ」すると全能感によって優越に浸る傾向にある。特にレベル5以降になると弱者を甚振るいたぶような者が出始める。

闇派閥イツイルスに所属する多く冒険者はそういう手合いで、悪事に手を染めるのも不思議ではない。力を手にした者の多くはそういう傾向に陥りやすい。

そうなれば治安維持のための戦いが始まるのも自然である。

「現実問題として簡単かどうかは実力がものをいう。弱者が強者を殺す時、確かに己の

中で偉業の達成に似た感覚を得やすいのは事実だ。私の「ファミリア」で殺人の経験が無い者など珍しい部類と言える」

この言葉にフィン達は反論も否定もしなかった。ティオネ達も身に覚えがあるのか、黙っていた。

それ以外の団員達は驚いていたが。

そして、アイズは思い出す。かつてアルフィアを倒した時、一斉「ランクアップ」を成し遂げた「ファミリア」が存在していたことに。

否定したくても出来ない結果がある。

「……「アストレア・ファミリア」……。けれど、そんな方法を私は取りたくない」

「一つの可能性を示唆しただけだ。実行するかどうかは冒険者次第だ。……お前が質問し、私は答えた。ただそれだけだ」

遠くでリヴェリアがアイズの名前を呟く。

殺人を許容する事は「ロキ・ファミリア」でもしない。ただ、犯罪者や他派閥の抗争において命を落とす結果があるのは誰もが知るところ。

今のオラリオは厳格な規則の基に秩序が保たれている。

「……でも、モンスターなら……殺していいんだよね？」

「出来るものならやってみろ、小娘」

「あ、アステルさん。挑発しないでください」

そこに厄介事に首を突っ込む少年が割って入った。

一度ならず二度ならず三度ならず。おそらく四度と五度もあるのだろうか、とアルフィアは思っていたため息をつく。

こうまでお人好しなバカを見るのは「ゼウス・ファミリア」に居た最弱のサポーターを思い出させる。

あれは覗きに全力を尽くしていたか、と嘆息した。

「とにかく駄目です。二人が戦うのは……なんか僕の勘というかなんというか、駄目な気がします」

「……君はいつも邪魔をするね。……前もそうだった。その前も……。いつも私から逃げていたクセに」

口を尖らせたアイズが日頃の不満を言うとう凶星を突かれたベルは脂汗を流す。

アルフィアも何となく想像がついた。そういう手合いに覚えがある、と頷いた。

「それとアステルってこの人の事？」

「え、ええ、そう聞きました」

「……この人はそんな名前じゃないよ。七年前、オラリオを荒らし回った元凶の一人、だよ……」

左手でベルを掴み、アルフィアから引き離す。

右手に握りこんだデスベレスト剣で牽制しながら相手の顔から目を逸らさず。敵意を少しずつ強めていく。

これこそが【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインの今の姿だ。

「顔見知りにおう目的は達した。……もはや偽名も意味を持つまい。少年。こいつらの言う事は……真実だ。嘘をついたのは名前くらいだが……」

「ええっ!? ……って、そういえばリユーさんも幹部とか言っていましたね」

指摘されても全く否定しなかった事を思い出す。言葉を濁っていた様子も無かったような、とベルはダンジョンでの出来事も思い出す。

アイズとリユーの言葉が真実でもベルの中では善人だ。その気配も勘からも悪い人とは思えなかった。自分はそれを信じたかった。

ただ、そう思い込みただけだ。真実、アステルの事をベルは何も知らない。

「……だが、七年も経っていけば私の様な木っ端冒険者の事を知る者など直接対峙した者以外に居るとも思えない。そのアマゾネス達も知らない様子だったしな」

姉の治療にあたっていたテイオナは自分の事を言われている気がして何度も頷いた。

他の団員も古参の者以外は首を傾げた。

見た感じでは全体の三割強がアルフィアの存在を知っている様子だった。

(アルフィアを驚かせるとは……。ベル・クラネル、やはりただ者ではないようだ)
(……あの人間ヒューマンが空気をぶち壊したのだけは理解できました)

(結構長く沈黙しておるの。世間を賑わせる「白兔ラビット・フットの脚」はいつも農らを楽しませる)
(殺伐とした空気が音を立てて崩れていくのは分かったわ。さすがね、「白兔ラビット・フットの脚」)

様々な想いを抱く「ロキ・ファミリア」をよそに当人ベルは申し訳なさで謝っていた。

本気であまりの事に現実逃避したのはいつ以来か、と我に返ったアルフィアは苦笑を滲ませる。

戦闘中だったアイズも驚きで止まっていたことに改めて驚く。

「さて、少年。目の前に敵が居る。お前ならどうする？ 小娘のように切りかかるか？」

「……いえ、いきなりはちよつと……。でも、敵とも思えません」

「現場を知ればお前でもそうはいっていられない筈だ。あのエルフも口では正義を語っていたが仲間を失えば案外自分の主張など脆く崩れる」

モンスターを倒す事が当たり前だったベルは異端児ゼノスと出会い、常識が変わった。根底から覆つたと言つても過言ではないくらいに。

その観点から言えば側に居るアステルは本当は敵かもしれない。

(……他人の言葉だけで考え方を変えるのは言いくるめられることと一緒だ。それが嘘であつた場合は騙されたことになる)

当人が真実だ、と言つてもすんなりと信じられるほど素直なベルではない。——少し前なら信じていたかもしれないけれど。

アイズの言葉を信じるのか。アステルの言葉を信じるのか。それとも——自分の感性を信じるのか。

アイズと彼女は共に元凶はアステルだと認めている。ならば、それに従うのが自然な流れだ。

自分一人だけ否定する意味がこの場には無い。敵は大枠でアステルだと言っている。でも——何に対して敵なのか。オラリオを混乱させたから。それともそうなるように見えない第三者に誘導されている、とは考えられないか。

(……それはさすがに飛躍し過ぎだ。僕はアステルさんから何も教えてもらっていない。分かつていることは彼女がオラリオの敵だ、という事だけ。理由までは分からないけれど)

「迷い考える事は大事だ。何が真実かは……、見る側によつて違つて当たり前だ。……戦闘も終わったようだし、続きは歩きながらも出来るだろう?」

「……はい」

「……で、小娘はどうする? これから遠征なのだろう?」

アステルを見据えて小さく唸るアイズ。

ベルが敵の側に居る限り迂闊に攻撃が出来ない。尚且つ、敵である筈のアルフィアから殺気が感じられない。

フィン達も手出ししないようだし、このまま戦うと我儘娘と見られてしまう。

また、敵を前に引き下がらなくてはならない。

それにこれ以上の戦闘は周りへの被害拡大に繋がる。

この場での決着は先の戦闘で難しい事を理解した。アルフィアは未だ高みに居る強敵だ。そう認識した。

それでも——剣を構えて敵を見据える。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

アルフィアはベルを下がらせる。戦士が決意を秘めているのに応えないのは失礼である、と告げて。

この場において場を制しているのはアルフィア。挑戦するのは第一級レベル6の高みに登ったばかりの【剣姫】アイズ。

開始の合図は無い。ただ、一步、剣士が動き、それを迎え撃つのは無手の【静寂】アルフィア。

(……先ほどより早く、鋭い)

(……最初に会った時と変わらない。……私はまだ彼女に届かないの?)

剣戟の全てを紙一重で避けられる。明らかに剣筋を見切られている。

悔しい。全く届かない事に。自分がまだ弱い事に。

【ステイタス】の伸びが悪い事に悩んでいたのは事実だ。だから、もつと強くなりたいたい願った。

だが、敵はそんな自分達よりも高い位置に居続けている。早く、早くと気が急^せく。

【目覚めよ】
テンベスト

(……焦りが見えるな。向上心は人を育てる。それを持ち続ける限り……、お前達は決して弱くならない)

【エアリエル】

風の付与魔法を身にまとい、突進するアイズ。

先ほどよりも速く、鋭い剣捌きを繰り出すもアルファイアは同じように受けていく。

他の者からは二人の攻防を肉眼で捉えるのが難しいほど。ついていけないのは第二級冒険者の上位者くらい。

ベルも剣捌き自体は残像のようにしか見えない。

(……風に押される!?! 単なる付与魔法ではないのか)
 (届いてみせる。……いえ、乗り越えてみせる)

「……
 【魂の平静】
アタラクシア」

身体に触れるアイズの魔法を無効化。しかし、それは気休めにしかならなかった。アルフィアはすぐに考えを切り替え、魔法を解除する。その瞬間、暴風に身体が晒され体勢が少しだけ崩れる。

魔法職の彼女アルフィアは頑強な戦士の真似事は出来ても本職には敵かなわないと自覚している。気概だけで超越者を押し返そうとするアイズに対し――

「舐めるな小娘っ！」

「……………ふぎゅー！」

ついムキになったアルフィアは突き出された剣を強く弾き、頭突きした。

負けず嫌いなのはどちらも同じ。これは純然たる女同士の意地のぶつかり合いだ。

可愛らしい呻きを漏らしたアイズは脳天から足腰まで振動が伝わり、一瞬意識も飛び、膝が折れる。

いつもリヴェリアに殴られる痛みによく似ていた。どちらが強いのか、分からないがとにかく痛かった。

思わず涙目になって一步引き下がる。だが、ふらつく身体で後退した為、すぐに尻もちをついてしまった。

「……………全く、なんて野蛮な戦い方だ。優雅さの欠片も無い」

「……………ううっ」

「どうして私の敵は戦士系ばかりなんだ？」

「……魔法を無効化する君の相手が務まる魔法職は居ないと思うよ」

と、遠くからフィンが言った。それにすぐ舌打ちするアルフィア。

才能の権化。才禍の怪物と謳われたアルフィアは押しも押されぬ天才だった。フィンもその実力を否定しない。リヴェリアとガレスも同様に。

前衛も務められる無敵砲台。そんな破格な冒険者は類を見ないと断言できる。

そんな彼女も敗北経験があるのだから信じられない。

「あ、アステルさん。頭突きなんかしたら危ないんじゃない……」

と、ベルが心配そうに声をかけて来た。それにアステルはどうして、と聞き返した。

今のアステルは竜女ワイヴァルだから。額に宝石があり、それを失うと凶暴化するモンスターで

ある。

本来ならばそうなのだが——アステルの額に宝石は無い。そもそも、竜女ワイヴァルなのかも怪

しい。

見えないだけで皮膚の下にあるかもしれない、とベルは思ったので心配になった。

アルフィアは——それより額を割られて血を流すアイズを心配したらどうだ、と言った。

強烈な頭突きを食らったアイズは——半ば脳震盪を起こしたように——覚束おぼつかない足

取りで未だ衝撃から立ち直れていない。額の出血の他に鼻血まで出している。

剣を未だに握っているが目の焦点が合わず、敵がどこに居るのか分からなくなり必死に探そうとしていた。

ベルが彼女に近づくと威嚇された。未だに戦意を失わない心意気は流石だと思っけれど、このままでは危険だと判断し、何とか羽交い絞めにしてみた。すると、激しく暴れる。

「アイズさん、僕です。声、聞こえていますか？」

「……ベル!? て、敵は何処? まだ近くに居る?」

唸りながらベルに尋ねる。すぐ近くに居るのに分からない所から目が見えていない、と思っただ。どうしてなのか疑問に思うものの大丈夫です、と言いつけて安心させようとした。

この時のアイズは強烈な眩暈めまいによって視界が利かない状態になっていた。

レベル6の『力』で暴れるものだからベルも手加減せずに抑え込もうとした。しかし、相手の方が強かった。

怪我を治療しないと危ないと言いつける。その内、意識が不鮮明になりアイズは顔くすおれるように気を失った。

(……思わず本気で頭突きしてしまっただが……。早めに治療すれば大丈夫だろう。それ

無事でよかった。

と、心から安心した。

他人を心配する気持ちなど久方ぶりのような気がした。つい先日まで失望感に苛さいなまれ、他人の命など毛ほども気にならなかった。

充分な覚悟をもって臨んだのだから後悔していない。するわけがない。恥じ入るものなど一欠片かけらも無い。

「……それにしても少年は本当に世話焼きだな。誰の影響だ？」

近くの噴水で濡らしたハンカチを軽く絞り、それをアルフィアの額に当てる。

冷たくて気持ちが良いかった。

「……誰の、と言われると……。しいて言えば育ての親の祖父、でしょうか」

「……そうか。……どうして冒険者になろうと思った？ 危険なダンジョンで仕事をするなど親なら許さない筈だ」

どうしてか言葉が出る。

相手の事情を詮索する事は冒険者にとって規則違反に近い。基本的に詮索しないのが暗黙の了解となっている。

だが——落ち着いた雰囲気の中で自然と出てしまったし、取り消すつもりもない。

♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪

両親の事は知らない。既に他界した後だと祖父から聞いた、とベルは素直に答えた。ならば、その祖父の教育が悪いのか、と怒りを募らせ敵として認定しておく。

両親を知らず、他の兄妹もおらず。未知を求めて迷宮都市オラリオに単身やつてきた。そして——今の主神と出会い「ファミリア」の一員となった。

簡単な説明ながらもベルは言った。

(……祖父に育てられ、一人でここまで来た。……歳は今年で一四……。共通点がありすぎる。……クラネルとは育った村の村長の姓か……。……ありふれた理由としては合致するし納得もする)

次いで聞こえたのは『物語』が好きだ、という部分。これにアルフィアが強く反応した。

普段は閉じている目蓋を開けてベルを凝視する程に。

メーテリア

妹は病弱ゆえにたくさんの物語を読む機会がある。それだけならありふれているのだが、書物というのは高価なものだ。たくさん所有出来る程裕福な村民など居ない。

それが出来る者は——自分の知る中では一人だけ。正確には一柱ひとりだ。

彼の話しの中で『ゼウス』は出てこない。おそらく偽名を使っている。

(……もしや、少年は『発展アヒレリテイ幸運』のスキルでも持っているのか?)

あり得そうだが詮索する事はしなかつた。

仮に考えている事が全て真実であっても、それはそれと処理する。今更な話であるし、彼の道は彼自身が決める事だ。過去の遺物がどうこう言う事ではない。

これはただ——アルフィアが自己満足する為だけの会話だ。

（合点が行き過ぎて怖い。……本当に人生とは油断がならないものだ。幽冥ユレを司る神ゴの氣紛れだな、これは。それ以外ではありえん。なら、他の者はどうなるんだ？ 私だけが対象というのは不自然だぞ）

空高くに居る筈の神々に抗議の念を送る。

もうすぐ出て来るよ、と答えられても困るけれど。

「僕も質問していいですか？」

「……駄目だ」

「……ええっ」

アステルは質問を断ってきたことが無かったので驚いた。そして、がっかりした。

理由は分からないけれど甲斐甲斐しく世話をしたのに理不尽だ、みたいな気持ちが湧いた為だと予想する。

「……ふっ。冗談だ。……私だって冗談を言う権利はあると思うのだけれど」

「そ、そうですね。権利があります、はい」

「うむ。それで……、何が聞きたい？ 小難しい事ではないだろう？」

「すみ……、ああ、いえ。えっと、アステル、というのが偽名なら本当のお名前は何かというのでしょうか？」

「アルフィア・ストラディ。これでも古株の冒険者の中では有名人だぞ。二つ名は【静寂】という」

胸の内でもアルフィアの名前を呟く。

ベルにとって初めて聞く名前だった。このオラリオに来てから一度も聞いたことのない冒険者の名前。そして、どんな物語にも出てきていないものだとは推測する。

聞き覚えがあれば大体わかる。ベルは祖父から読み聞かせられた物語の多くを今でも覚えているほどに記憶力にはある程度自信がある。その上でアルフィアという冒険者の名が出てこなかった。

物語と違い、神様達の名前や【ファミア】と構成員の全てを把握しているわけではない。

そこはまだ勉強中であった。

イツイルス
「闇派閥の幹部というのは？」

「本当。これは小難しいから省くぞ。もう終わった事だし、奴らとはもう何の関係もない。……あえて言えば悪辣な神の口車に乗った。このオラリオに居る懦弱な冒険者を叩き直す為に、な。……最終的に私達は負けた、というところで話しは終わりだ」

（その神様に騙された？ もしくは自ら進んで悪党になった……。 どういう気持ちでそんな道を歩いたのか……。 これはきつと今の僕には理解できない）

真実を告げられたからとてベルに出来ることは何もない。

あるとしても彼女の額にハンカチを当てるくらいだ。

大人しくしている姿を見ている内に童女ウイメネの事を思い出す。今頃どうしているのか――

ベル達は公園に備え付けられている椅子に座り、しばし気持ちを休めた。アルフィアは肉体と精神を。

「……向かってきたのはあいつらだ。少年は気にする必要は無いぞ。これは……。あれだ。喧嘩両成敗というやつだ」

「は、はあ……」

（意識すると緊張するな、この私でも……。 そうか、この少年が……。 私にとつては感動の対面だが彼はそうではない。 全くの赤の他人……。 私も家族らしい暮らしに覚えが無いから付き合ひ方が分からん。 ……親ならともに料理でも食べるのか。 風呂に一緒に入るのか？ それとも……。 いやいや。 世界の危機が迫っているのに呑気な暮らしなど……）

何度か唸りながら物思いに耽る。何を考えても自分に相応しい結論が出てこない。

急な復活も原因ではないか、と。

——そう。一度死んだ人間だ。彼にとって余計な真実はこの先の冒険に支障が出る。きつと出る。そうに決まっている。

「……………」

らしくない。そうアルフィアは自嘲気味に苦笑する。

側に居るベルの顔をしばし見つめてみた。意識すると抱き着きたくなる。何せ妹が残した希望だ。愛さないわけにはいかない。

愛する資格も無いのに——だから、結局手は出せなかった。思い切り抱きしめる事も。

そして、これでいいと諦めに似た結論を出す。その代わりとして彼の興味を惹く話題を出してみる。

どんな反応を示すのか。どんな顔をするのか。

ベル・クラネルはどんな決断を下すのか。

アルフィアにとっても興味があつた。しかし、聞きたくない気持ちもある。これはそれほどのものだ。

「物語が好きなのだったな?」

「はい。殆どはお祖父ちゃんが作った創作物らしいんですが……」

(……ああ、私はそれをよく知っている。当人から嫌というほど聞かされたから魔法で何度も吹き飛ばしてやったほどだ。……当時の私は強くなる事と妹以外は全く興味が無かった)

数分ほど沈黙し、長い吐息をつく。

見上げれば薄曇りの空が見えた。こういう穏やかな天気だと死ぬにはいい日だ、と誰かが言っていた。

地上に視線を戻し、ゆっくりと口を開く。

「ある大英雄がダンジョンの奥底に居る邪悪な竜を討伐する話しをしよう。……といっても大して知っているわけではないが……」

「ああ、英雄と竜の戦いは様々な物語に出てきますものね」

「そう。これは……、ありふれた竜退治ものだ。……だが」

アルフィアは顔を『摩天楼』にあるダンジョンへの入り口に向けた。

ダンジョンの奥底に居る筈の竜を求めて大英雄が冒険の旅に出る。それ自体は本当にありふれた出だしだ。

数々の冒険を経てついに最下層にたどり着くと——と、大幅に端折った。それでも構わず彼女は続ける。

最下層には竜は居らず、宝箱が一つだけあった。英雄はそれを開けて財を手にする。

ダンジョンを征服した証しの宝。彼は偉大な英雄として語り継がれる事になる。

「だが、そんな美談が本当にあると思うか？ いや、ある訳が無い。罨があると疑うべきだ。浮かれている冒険者に理屈は通じない。……様々な理由があると思うが英雄は宝を手に入れた、のではなく手に入れてしまった、と思うべきだった」

真つ当な宝である筈が無い。その証拠にそれは宝などではなく、邪悪な意思が用意した『呪い』の塊であつた。

それを手にした英雄は呪いに蝕まれ、邪悪の権化たる竜へと変貌する。竜退治に向かつたのに自分自身が竜になつてしまう。

あまりの強さから英雄が竜に例えられる話しも無くは無い、と言いおいて。

「大英雄が竜になつたら……、最強の敵が出来上がる。……その竜は長い年月をかけて世界中の悪意を吸収し、いつしか強力無比な『黒竜』へと進化した……」

後は様々な物語で語られるような流れが作られた。ただし、どうして竜が存在したかは時代の変遷で失われてしまった。

アルフィアがここでそれがもし創作ではなく史実であつたらどうする、とベルに尋ねた。

「それが三大冒険者依頼クエストの黒竜と同じなら……、倒すか話し合い……」

「人間性があるなら、対話も可能かもしれない。相手は神話の時代から存在する人外の

モンスターだ。我々はそれを討伐しない限り安寧が来ない。敵はあらゆる悪意の塊だ。放置はできない」

「はぐ」

「……もし、その黒竜が大英雄と呼ばれるアルバート本人だったら……。物語好きなお前はそんな相手に武器を向けられるか？　ちゃんと倒せるか？　世界を救う英雄になりたいと言えるか？　少年。私という証拠がある以上、そういう想定もしておくべきだ。……既になっているのかもしれないし、葛藤している最中かもしれないが……」

はい、と小さく返事をするベル。

確かに可能性の話であれば彼も考えている最中だった。答えはまだ出ていないけれど。

もし、という可能性について考えずにいられれば楽かもしれない。また、考えなかった事で何かを失う事もあり得る。

自分は信用を犠牲にして竜女ウイローネを救い、異端児ゼノスの信用を得た。

信頼関係はこれから構築する予定だ。その上でダンジョン探索もこれまで通り続けると決めた。

「考えて答えを出す事は大事だ。即答しろとは私も言わん。次いでだ、もう一つ聞かせてやろう。お前がこれから歩む上で避けては通れない問題だと思うからな」

「はい。お願いします」

「うむ。……時代を経て黒竜討伐に向かう冒険者が現れる。最強の「ファミリア」による討伐任務だ。結果は全滅だが……。長い戦いの中で様々な事があった」

二大「ファミリア」が台頭していた時代、深層域を攻略していたアルフィアは深層域で不思議なものを見つけた。

多くの精霊達がモンスターに食われ、在り方を変えてしまった。今では生存本能だけで冒険者に襲い掛かる事が多い、と。

そんな中で一つの——一人の『精霊』と出会った。それはまだ穢れを知らず、そこに居た。

種族は『森精霊』^{ドライアド}の上位種『上位森精霊』^{ハマトリユアス}の一体と思われる。古代の精霊などと表されるものの一つ。

彼らは特定の樹木に宿る精霊達だ。姿は人型が多く、限りなく人間^{ヒューマン}と遜色が無い姿を持つ。

「我々が見つけた精霊は『アリア』……」

「……アリア？」

アリアとはある種の樹木の事だ、とアルフィアは言った。特定の人名ではなく樹木の名称、または区別するために暫定的に付けられた名前だったのかもしれない。

とにかく、その精霊アリアは好奇心旺盛な存在で団員達も気を許し、知識を与えた。ある者は書物を。ある者は自分の事を教えて交流を図った。

黒竜討伐前の話しになるが、とアルフィアは呟いだ。

「それと……英雄アルバートが袂取り取ったと言われる黒竜の眼球を発見した」

見つけた眼球をどうするのか、それと精霊について団員達で議論が交わされた。

眼球は長い年月経過したにもかかわらず腐敗せず、おどろおどろしい気配を振り撒いており、手を出す事に躊躇いを覚えさせるほど。事実、モンスターはその眼球に決して近寄ろうとはしなかった。

そんな得体の知れない物体（眼球）に好奇心旺盛な精霊はなんとか清めようとしていたらしい。

己の血を与えてみたり。ただでさえ穢れている素材だ。興味を覚えた団員達もいつしか協力するようになった。難攻不落の黒竜攻略の糸口を探っていた時期でもあったので何でもやってみようという雰囲気も広がった。

「精霊だけでは結果が芳しくなく、団員の血も与えてみるようになった。……そして、それは変化を齎もたらした。まるで人間（ヒューマン）と精霊の間に子供が出たような……。真実がどうであれ、黒竜の目は小さな赤子に変化した」

異種族が結ばれて子供が生まれる話しもベルは知っている。多くは創作だ。現実的

にはあり得ないと言われている。

だが、何らかの条件が重なり、人間の様な子供が生まれても不思議はない。

現に仲間のヴェルフ・クロツツという赤毛の青年は精霊の血を引いている。だから、頭ごなしに否定はしない。

「……人伝ひとついでに聞いたものだから真実がどうであつたのかは分からん。……が、後でその子は『アイズ』と名付けられ、深層域で生活するようになった」

「!?」

母親精霊がその場から移動できないから父親役の団員が度々訪れて面倒を見るようになった。

そして、ある時を境にアイズと両親が別れる事態に陥った。

推測だが、と言いおいて後に深層攻略に訪れた「ロキ・ファミリア」が引き取る事を決めて今に至る。

アルフィア達が引き取らなかつたのは——それが出来ない状況に陥つたからだ。

アイズにとつて父親は名も知らぬ英雄。きつとアルバートのような存在だったので、と。

後に彼の名を引き継つぎようとして上手く発音できなかつた事から今の名前に落ち着いてしまった、とアルフィアは言った。もちろん、これも推測だが、と続ける。

「お前がどんな判断をするのかは自由だ。これは単なる物語の一説にすぎない。あの小娘については正直、どうでもいいと思っている。見どころがあればよし。そうでなければ気に留めないだけだ」

逼迫していた事情から役に立つか、立たないかが判断基準となっていた。

アルフィアの興味はアイズよりも妹の子だけ。後の事は眼中にない。

とにかく、誰かが偉業を成し遂げてくれればいい。だからこそ後進に道を譲った。それがアイズになってもベルになっても一向に構わない。

今でもそのこだわりは変わらない。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

つまらない話しをして時間を潰したな、と言いながら観光に行こうか、とアルフィアは言った。

様々な事柄で頭の中が混乱気味になったが今すぐ何か答えを出さなければならぬ事態ではない。そう自分に言い聞かせて心を落ち着かせる。

真実はそれぞれの受け方で変わるものだ、と彼女は言った。ベルもそうですね、と返す。

「……もし、【剣姫】がお前の腹違いの姉だったらどうする？ 父親が誰か分からない場合の真実とやらもまた多くの創作物にはある筈だ」

「……………」

年齢的にアイズがベルの妹というのはあり得ない。それくらいはアルフィアも承知している。

血を分け与えた団員がもし、彼の父親であれば血縁者という事も充分にあり得る。あと、彼女の知るベルの父親は抹殺対象に入る程のろくでなしである。——その情報を彼に伝える気は全く無い。

別にアイズの育ての親がアルバートだ、とは言っていない。

彼女の姿形の殆どは母親役の精霊に似ている。ベルと同じく目は父親たる黒竜かアルバートのものを受け継いでいるのかもしれない。金眼だったかどうかはアルフィアの記憶には無いけれど。

（あの時見せた憎悪は果たしてどちら側だったのか……。姪の可能性は……、さすがに飛躍し過ぎだな。誰かの血縁というだけ……。後は少年の逞しい想像力たくまに委ねよう）

（……アイズさんがお姉さんなら僕と付き合う事は出来ない。だって、姉弟だから……。つてなってしまう。でも、家族になれるから……。別にいいのか？ どっちも一緒に居られるわけだし）

うーん、と唸りつつ悩みだす多感な少年ベル・クラネル。

想像する事が好きで、好きな女の子の事ばかり考える。今は色恋なのか憧れの先輩冒

険者なのか分からなくなっているけれど。

アルフィアもアイズについて多くを知っているわけではない。分かるのは——誰かが深層域に迷い込んだ金髪金眼の女兒の世話をしていた事だけ。

当時は自分の事しか考えられず、他人に気を割く余裕が無かった。

(真実を確かめるかどうかは少年次第だ)

レベル4の冒険者に与えられるのはここまでだ。

アルフィアは椅子から腰を浮かせ、腹が減った露店を案内しろ、とベルに言う。

一気に情報を脳内に入れた為に混乱気味であった少年はすぐさま思考を切り替えた。気になる話題を早々に忘れる事は無いけれど新たな興味が胸の内湧き起こる。

アイズのこと。ダンジョンのこと。黒竜のこと。精霊のこと。英雄のこと。

これからのこと。

二人が歩き出す場面をもし——古くから付き合いのある者が見ればなんと評するか。

アルフィアは今はモンスターであるから何とも表現しにくい。もし、生前の姿であれば、と仮定しよう。

灰髪の女性を紳士的な態度で迎える白髪はくはつの少年。

双子である彼女の妹メーテリアとは容姿も似通っている。であれば——今だけは親子と見る事

は出来ないだろうか。

——いや、それは詮無い事か。

片や【静寂】のアルフィア。片や【ラビットフット白兔の脚】のベル・クラネル。

あまりにも違い過ぎる。であれば、これは幻だ。

お母さん、僕冒険者になったんだよ、と言え——母親ならば、こう答える。

今すぐ辞めなさい、と。黒童すら裸足で逃げ出す伝説の童の如き憤怒の形相で。

英雄を求めているのは姉アルフィアメーテリアで妹は健やかな人生を望んでいた。だから、それは絶対にありえないし、あつてはならない。

そうでなければアルフィアは彼に会う事は無い、と誓つたりはしない。

「僕がお世話になつてゐるヘステイア様です」

「……ベル君。君はまた騒動の種を持つてきたのかい？　しかも、こつちの子は堂々と

歩いているし。何なんだい、……この王者の雰囲気をもとうモンスター君は」

オラリオ名物の『ジャガ丸くん』を売つてゐる店に案内されたアルフィアは小さく驚いた。——小さくて頼りない、と。

様々な神と対峙してきたがヘステイアは初見だった。紹介されて思わず頭を下げる。

ベルがお世話になつてゐる神だからこそ——すぐに元の様相を取り繕う。

黒い髪を左右でまとめ、破廉恥極まる薄着。ベルをたぐら誑かす悪神の類かと勘ぐつてし

まった。

「……………」

何か言わなければ、と思ったが不思議と何も出てこなかった。

ベルを眷族にして色々と言いたい事があつた気がするのにな。へスティアの純真無垢な顔を見ているとどうでもよくなってきた。

呆れたからではない。安心した、が近い。——女神の恰好かっこう以外は。

「神様。ジャガ丸くんを一つください」

「あいよー」

アルフィアの味の好みが多からなかったので塩味にした。それを購入し、彼女に渡す。

少し戸惑っていたが一口噛り付く。

出来たてで熱かったがモンスターの身体のお陰か、食べ物を取り落とす事態には至らなかった。

温かみがある食べ物に心がとても落ち着くのを感じる。

「……………ああ、美味しい。とても美味だ」

生前も食べた経験はあるが今ほど美味いと感じたことは無い。

殺伐とした時代を過ごしてきて忘れてしまった感覚が目の前にある。それを理解し

た。

かつては仲間達と。今は見知らぬ神と少年と共に。

胸の奥で何かがヒビ割れる。良心の呵責を感じるほど人間が出来ていないアルフィアはすぐに理解した。

この幸せひしひしそうきな一時が永遠に続くわけがない、と。

(……なんのデメリツトも無いなどあり得る訳が無かった。概ね満足だ。これ以上は欲張りすぎだろう)

それに見る者を見て、言いたいことは言った。

もし、時代が違えば自分は幸せになれたのか、と聞かれれば否だ。その時は隣りに少年の姿は無い。あるのは最愛の妹ただ一人だけ。それが正しい結末だ。そうでなければならない。

目蓋を開き、今一度ベル・クラネルを見据える。

「……ベル・クラネル」

「は、はい？」

ずっと少年と言われてきたので改めて名前と呼ばれると緊張する。

玲瓏たる声。神秘的な佇まい。自然と背筋が真っ直ぐになる。側に居るヘステイアも思わず口を噤むほどの存在感を彼女はまもっていた。

「健やかに過ごせ。……それがお前をこの世に生み出した者達の願いだ。英雄になろうと構わないが……。なるからには逃げだすなよ。これはお前の物語だ」

「はっ」

そう返事をした後、アルフィアの胸が大きくヒビ割れる。しかし、彼女は笑顔を湛えたまま。

彼女が持つ付与魔法【静寂の園】シレンティウム・エデンは体内を蝕む呪い^{カリス}によって発現する。いわば肉体の悲鳴だ。

癒える事のないダメージによって外敵の魔法効果を相殺していく。

復活したアルフィアは病気にこそ罹患していなかったが代替として魔石が傷ついた。それが限界に来た。

（もう少し長く居たい、と願うのは烏滸^{おこ}がましいか。……いや、ここまでで充分だ）

「……ああ、それから神へステイア」

「な、なんだい。死にかけのモンスター君」

「ベル・クラネルは私の家族だ。英雄になる前に死なせるようなことがあれば許さん。ゼウス共々葬ってやるからな」

今まで以上の冷たい殺気をへステイアにぶつける。

ゼウス、という単語にベルは首を傾げる。神の名として知っているがへステイアとの

勝ち逃げされた事にベート達は苛立ったが本来はあり得ない邂逅だ。そして、改めて上位者の力を見せつけられ、敗北を味わった。

彼らが本来相手にするのはアルフィア達を敗北に追い込んだ正真正銘の怪物だ。この程度ではないと知っただけでも彼らにとつて得るものがあつた筈だ。

残つた魔石をフィンは受け取らずベルに委ねた。大切に保管するより換金した方がいいよ、と告げて。

それと後で貸したガントレットを返すように、と。

「エクセリア経験値」代わりだと思つて貰つておくといい。君達もいずれ僕達の後から来るんだろ？ もつといい装備で固めないと」

「はー」

そう返事をした後、「劍姫」アイズ・ヴァレンシユタインを探した。

既にケガから復帰しており、額に包帯を巻いた状態で装備を確認していた。

ベルからアルフィアの消滅を聞いて一瞬だけ口を尖らせ不機嫌な様子を見せ、すぐいつもの無表情な顔に戻った。機嫌を損ねた、と彼は内心でひやひやした。

彼の前ではいつもの無表情とは様子が変わる。彼女にしてみればベルから報告を受けた後、少しだけ嬉しそうにした。それが思いのほか顔に出なかつただけで不機嫌に受け取られてしまった。

アルフィアから腹違いの姉という可能性の話しを聞いて、つい親近感が湧いてしまったが——それはあくまで例えであり真実ではない。そう思うと残念でならない、とベルは軽くため息をつく。

(話しの全てが真実だ、とは言わなかったけれど……。聞いてみようかな)

「あ、あのアイズさん」

「……なに？」

「アス……アルフィアさんから聞いたんですが……『アリア』ってアイズさんの……家族……なんですか？」

敵の名前を聞いたアイズの機嫌が悪くなったがすぐに治まった。どうやら彼女の名前はあまり出してはいけないようだとの心のメモに記載する。

元の表情に戻ってからアイズはそうだよ、と言った。

「私のお母さんの名前。お父さんの名前は……難しく覚えてくれなかった。多分ヴァレンシユタインっていう人だったと思う」

(傭兵王ヴァルトシユティン。英雄の系譜を受け継ぐアイズさん。だけど、それはとても……、出来過ぎている?)

冒険者に登録した時のアイズの年齢は八歳と言われている。多少、舌つ足らずで口が回らなかった事もありえる。

アリアは確かに実在し、彼女は肯定した。そうなると腹違いの姉という線も期待を持ってしまう。だが――

父親については強い人という印象以外あまり覚えていないようだ。

黒竜と戦って散ってしまった、と悲しそうな顔で。

ここで長居すると他の団員からの殺気で殺されそうな気配を感じたのでアイズに改めて一礼してベルは退散した。

そして、お互いの冒険を始める。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

神の気紛れがもし、一つだけではなかったら――

下界に騒乱を撒き散らす悪神ならばありえないことではない。

例えば二七階層辺りのとある広間ルームの壁に亀裂が走り、モンスターが生まれる。それ自体は何の不思議もない。

違いがあるとすれば――意思疎通が出来ない筈の彼らモンスターが共通語コイネーを使う。

「あいたー。……ふあ……随分と眠っていたような……」

可愛らしい女性の声の後で亀裂が走る音はまだまだ続いた。

咄嗟に飛び退ろうとしたが様子がおかしい。何がと言われれば身体だ。人間ヒューマンとは似

ても似つかない。

それに驚く間もなく新たなモンスターが壁から生まれ出る。

全部で一〇体。一様に驚き、互いを敵だと認識して戦闘態勢に入る。しかし、それぞれの声を聴いて疑問を抱いた。

「……これは参ったわね。いくら私が強くて賢くて美しい美少女だったとはいえ、これは無い無い。まるでモンスターだなんて……」

「事実から顔を背けんじゃねーよ。立派な化け物だよ、アタシらは」

「……とところで末っ子の姿が見えしませんな」

「んー。リオンは生き残ったわよ。私が守り切った、筈なもの」
「ちっ。運のいい奴め」

一〇体のモンスターは姿形こそバラバラだが名乗り合って正体を確認し、しばし沈黙ののち悲鳴に似た驚愕の声を上げた。聞きようによつては勝鬨かちどきに近い。

そして、今に至る。

完全にモンスターの姿というわけではなく生前の面影がある程度強く出ている。

「もしかしなくても、あの【白髪鬼】ヴェンデッタもモンスターとして再誕生している可能性はあらしませんの？」

「見つけたら退治すればいいだけよ。それよりこれからどうしよう。このまま地上に上がるのは不味いわね。あと、全裸だし」

「……全裸。もう少し人型に近かったらあぶねー。でも、なんか勿体ねー」
今後の事など色々問題が山積し始めた。

思い悩むモンスターの中で赤色を司るリーダー格の女性は鶴の一言のように宣言する。

地上へ行こう、と。数々の障害が待ち受けていても私達ならへーきへーきと能天気
に、高らかに、自信満々に言い切った。

かつて「アストレア・ファミリア」として活躍していた彼女達の復活はオラリオに何
を齎すのか。
を齎すのか。

赤い彼女は言う。

「生きているなら冒険しましょう。正義の剣と翼に誓って。……モンスターだけどね。
大丈夫。私達なら何とかなる。フフーン」

「……この格好だと締まらねーな。とうか何のモンスターだ、アタシら？」

いつもの姿ではないので決めセリフもバラバラ。それでも彼女達は苦笑した。
生まれ堕ちた事には意味があると信じて。

「普通に考えて他の冒険者に討伐されるんじゃないやね？」

「なら、倒されないように特訓しましょう。さあ、みんな現状把握して、生き残って。リ
オンを見つuckerわよ。……たぶん、地上に居ると思うわ」

「……アストレア様が見たらさすがに卒倒すんじゃないかなーかな」

「……でも、こうして生まれちゃったし……」

「黙って殺されたくないから頑張る」

「……そうなるわな」

「自然の摂理」

モンスターとなつて気後れすることなく明るく振舞う元団長。その空元気ともいえる原動力は何処から湧いてくるのか。

他の元団員も驚きつつ自然と笑みがこぼれていく。

そして、自然とまとまりができ、一つの目的の下に行動を開始する。

o r t u s

06 ダンジョンに育児費用を稼ぎに妊婦が向かうのは間違っているだろうか

世界の中心たる『迷宮都市オラリオ』の地下には広大無比な『ダンジョン』が広がっていた。

未だ踏破されたことは無く、内部に蠢くモンスターとの戦いは一〇〇〇年を超えようとしていた。

神々が地上に降臨してから多くの冒険者達が幾度も挑戦するものの結果は芳しくくない。時には力の使いどころを謝り、冒険者同士の殺し合いに発展する事もしばしば——都市そのものが危機に瀕する事態が起こると、その度に英雄が立ち上がる。

混沌とした時代にあつて人々は生きる事を諦めなかった。神々がそれを許さなかった。

深層域の攻略にいよいよ大詰め頃、最後の『隻眼の黒竜』によつて最強派閥であつたゼウスとヘラの両「ファミリア」は大打撃を受けてしまった。

眷属の殆どが死亡。恐怖のあまり逃亡する者も居るとか。

無敵を誇っていた冒険者がモンスターに屈した。

それはオラリオに甚大な恐怖を与え、人々の希望を完膚なきまで粉砕する事態となった。

この世の終わりのような雰囲気の中、今までゼウス達の下で燻くすぶっていた次代の「ファミリア」が反旗を翻す。

——そして、現在。かつての最強派閥はなりを潜め、新時代が到来した。

ゼウス達が居なくなっただとしても世界が平和になっただけではない。頭が変わっただけだ。

数年後にはオラリオの内情も落ち着き、冒険者達は再度地下に広がるダンジョンに挑戦していく。

この物語はそれよりほんの少しばかり時を遡ったところから始まる。まだ最強派閥が現役で黒竜に挑む少し前の出来事——

◆ A u r g e l m i r ◆

大きなお腹を守りながら武器を振るう一人の女性が居た。

名をメーテリア・ストラデイという。

病的なまでに細い身体。真っ白な髪の毛は腰の辺りまで長い。碧玉の瞳は今、苦しみ

を湛えていた。

頼りにしていた夫に先立たれ、それでも食べていかなければならない。その一心で彼女はダンジョンに潜り続けていた。

現在の階層は七。出産予定日は数か月先だと思って、体力をつける意味で潜っていた。

(……おう、下に降りる度にお腹に響くわ。……これ、不味い奴ね)

「キアン・ファミリア」の眷族であり、無理をしないと主神に約束までしたのに急に体調が悪化した。そんな状態でも出てくるモンスターに全く怯まないのは元々の「ステイタス」が高いお陰だ。

一見すると危険な状態だ。上層域に居る冒険者の多くが心配する。

(姉さんに叱られる流れよね。……でも、これから生まれる子供の為には少しでも稼がないと……。産後は殆ど潜れなくなるって言うし……)

子育ての期間が長引くと予想し、現在頑張っている最中だった。それだけ貧窮に喘いでいるともいえるし、それ以外にも理由があるとも。

彼女がこうまで無理をするのは全て子供の為。

自分に何があってもいいように。何不自由なく過ごしてもらおう為ならば——母は命を惜しみません、と強く思っただんジョンに臨んでいた。

(……母とは強い者。……この私がよ。信じられないわ。うっかり身体を許したのが運の尽きと言われてしまったけれど……。あのロクデナシはあっさり死ぬし……。甲斐性なしだったけど……)

姉に頼るのは気が引ける。頼めば助けしてくれるのは確信をもって言えるけれど——いつまでも子ども扱いされるのは我慢できない。これから自分は母になるのだから。お母さんは凄いな、と子供に言われたい。そんな妄想を思い浮かべている彼女は苦境にありながらだらしのない顔を晒していた。

しかし、やはり無理があるかなと少しづつ後悔し始める。そもそも——ダンジョンに育児費用を稼ぎに妊婦が向かうのは間違っている。

それもタダの妊婦ではない。

神々から【静聴】という『二つ名』を賜^レった歴戦^ルの冒険者。——前に所属していた【ファミリア】では下位に位置し、病弱さが祟^レって『改^{コンバージョン}宗』を余儀なくされた過去を持つ。

一歩一歩お腹の様子を窺いながらモンスターを探す。あと少し経ったら帰ろうと決めて。

どうしてそうまでしてダンジョンに居るのか、と言えば効率が良いからだ。

【ステイタス】の数値を増やす為には命の危機を感じるようなギリギリの状況が望ましい。それはかつて所属していた【ファミリア】ではありふれた方法論でもある。

(……一歩が辛い。ヤバイわよね。生まれるかもしれない。……こんな事で負けちゃ駄目よ、メーテリア。貴女は母になる、予定の女……。こんな難題くらい深層域に比べればヘーキヘーキ)

自分に叱咤激励しながら前に進む。

脂汗を拭いながら進んでいくと壁に亀裂が走り、モンスターが生まれ落ちる。

◆ A u r g e l m i r ◆

自分から行かなくてもモンスターが来るのでメーテリアは武器を振りながら対処した。——実際にはそんなに簡単に出来る事ではない。彼女だからこそ出来る芸当である。

具合の事も考えて地上に戻ろうと思つた時、その鳴き声が聞こえた。

「ヴォオオオオ！」

この階層では聞かない鳴き声。いや、咆哮だ。

多くの冒険者がそれを聞いただけで戦慄するに違いない。特にレベル^{ワン}であれば尚更。

通常、それは一三階層にて遭遇するモンスターのものなのだが、七階層で聞くことは本来であればあり得ないし、ありえてはいけない。

討伐推奨レベルも2^ツからとなっている。それは『ミノタウロス』という牛の頭を持つ

人型モンスターである。

だが――

ここにそんなことに動じない冒険者が居た。というより動くのが辛くて足腰が震えていた。

第三者目線から見ればモンスターに恐れをなした、と取られるところ。しかし、彼女の事情は特殊だ。

思わず異常事態だと気づく、その時の緊張で破水してしまった。今は股から小便のように体液が流れ、赤く染まりつつある。

(こ、こんな時に……。もう、なんでミノの鳴き声が聞こえるの。思わず驚いちゃったじゃない)

恐怖に慄く^{おの}どころか、口を尖らせて文句の一つでも言いたい、という感じだった。

歩くことに不快感と痛みが強まる。それと視界が歪んで身体全体が痛い。

度重なる悪阻^{つわり}の苦しみよりも気持ち悪い。

(……うお。吐きそう。かつこ悪い。恥ずかしい。……後何か……産まれそう……。後、七層も戻らないといけないのに)

どうしてこんな所に妊婦が居るのかしら、と他人事のように文句を呟く。

これから生まれる子供を育てるには金が必要だ。前に居た「ファミリア」の稼ぎの殆

どを没収されてしまい貧窮に喘いでいた。

ちなみに貯金は二千万ヴァリスくらい。彼女にとってははした金だ。——実のところ大金を扱ったことが無いだけで現物がどれだけ凄いのか分かっていない。殆ど人任せだったから。

お金を稼ぐことも妊娠が発覚してから始めた。その前は多くの人員がやってくれた。

一歩ずつ進むごとにメーテリアの顔色が悪くなっていく。それと並行するかのようにモンスターの唸り声が近づいてくる。

そして、とうとう追いつかれた。約一〇歩ほど進んだ時に。——彼女にとってはそれだけでも重労働となっていた。

硬い石の棍棒を持つ牛頭人身ミノタウロスが弱っている冒険者を見つけ、何の慈悲も無く襲い掛かってくる。彼らにとっては妊婦だろうとも敵だ。容赦する事は無い。

「ヴォオオー！」

「……ああ、もう。そんなに近くで叫ばないで」

振りかぶられる棍棒で殴られれば大抵の冒険者の頭は碎け散る。

メーテリアは産気づいた為に顔色が真っ青になったひ弱そうな女性冒険者だ。モンスターにとって格好の獲物である。

今まさに襲われそうになっているのに当のメーテリアは意外と冷静だった。いや、苦

しくてモンスターどころではなかった。

◆ *A u r g e l m i r* ◆

打ち据えられようとする棍棒をメーテリアは弱々しい動きで手持ちの武器である細身の剣で受け止める。その衝撃により、お腹に力が入り、一層の苦悶を味わう。

目を瞑って口を丸く開け、喘ぐ妊婦。あまりの苦しさから何度も深呼吸を繰り返した。

(……ヤバイわ。今のはヤバイ。でも、どうしましょう。逃げる事も動くことも難しう……。誰かに助けてほしいけれど……。近くに人の気配が無いのよねー)

状況とは裏腹に呑気な思考に囚われる。

自身の身長よりも大きなモンスターを相手にしているのに目の前の事より身体の方を心配している。

——つまり、目の前に居るミノタウロスを全く脅威と捉えていない。

今、最も大事な事はモンスターの攻撃を受けたことで身体全体が力み、今にも産まれそうなことである。

彼女の『耐久』^{アビリティ}によればミノタウロスに腹を蹴られたところで僅かな痛痒しか感じない。けれども、中身はそうはいかない。

運が悪ければグチャグチャになった状態で漏れ出てしまう可能性がある。それを思

うとより一層顔色が悪くなる。

既に股下からお漏らしのように濡らしている状態だ。とつても恥ずかしくて誰にも見られたくない。けれども、そんなことを言っている場合ではない、という事も自覚している。

(……姉さん、私とってもヤバイ状況ですう……。具合が悪いし、お腹は痛いし、吐きそうな気持ち悪さが襲ってくるし、で……。本当に……。誰か助けてくれないかしら？
出来れば女性冒険者がいいわね)

苦しむ彼女にモンスターが手心を加える筈も無く、油断を見せていると思つて更なる攻勢に出る。だが、弱々しい筈の彼女の防御が思うように突破できない。

押し込めている筈なのに。

「ヴウム……」

鼻息を荒くし、力を込めて冒険者を押しつぶそうとしているのに。

もし、ミノタウロスにもう少し理性があれば気が付いただろう。

モンスターの攻撃を防いでいるのは細い女の腕一本であることに。枯れ枝よりも脆そうな腕に対して両腕で力を込めているミノタウロスの攻撃が負けている。

そんなモンスターの懊悩をよそに女冒険者の内面は悲鳴の連続で埋め尽くされていた。

（くう。ううー。はぁー）

尋常ではない下腹部の痛み。身体全体を覆う不快感。股から流れる体液。足腰の震え。

様々な要素がいつペンに襲い掛かり、判断力が刻一刻と削られていく。上気した顔。熱い吐息。他の冒険者が見れば異常事態にしか見えない。

見ようによればミノタウロスに欲情した娼婦と言われても——それくらい熱に浮かされた顔を表していた。

◆ A u r g e l m i r ◆

思うように力が入らず。また、別方向から強引な力を押し込められる。そんな状況もいつまでも続かない。

下半身が割れるような尋常ではない痛みが走り、メーテリアは悲鳴を上げる。

自分でも理解した。もう我慢することが出来ない事を。

焦る気持ち判断力を鈍らせる。それでも彼女は戦士だ。目の前のモンスターから意識を逸らすわけにはいかないと思っただ。

（こんな時に……、こんなモンスターと邂逅するとは……。私も運が無いのね、きつと）

小さく聞こえてくるのはミチミチと何かが割れる音。聞きようによっては大便が漏れ出るものに似ていて、辛い状況の最中だが羞恥を覚えた。

既にびしょ濡れの下着は邪魔だと判断し、強引に——空いている手で——剥ぎ取った。

周りに人が居なくて良かった。——モンスターが居ても構わない。どうせ倒してしまいうから。

さつさと倒さないのは身体が思うように動かせないからだ。そうでなければ邪魔なミノタウロスにはとつとと退散してもらおう。

あまり身体全体を動かすのはヤバイ——その気持ちがあるので停滞していた。

それも時間の問題だ。何となく彼女は理解した。

子供が出てくる。

名前を考えていなかった、とミノタウロスの攻撃を受けながら物思いに耽る。少し意識が飛びかけていた。

牛から連想して酪農。乳牛。カウベル。

（お乳……。駄目だわ。牛乳みたいな事しか出てこない。神々のような発想力が私には足りないのね……）

呑気にしている間もまたが避けるような痛みが襲っている。

こんな苦境も姉にとつては些事にすぎないと言われる筈だ。それくらい彼女は厳しい冒険を繰り返している。

あまり様子を言いたがらないが風の噂で活躍は嫌でも耳に入る。だから——心配させまいとする姉の存在に頭が上がらない。

（雑音を嫌う姉さん。でも、それは……。そんなことは無い。音楽を誰よりも愛しているのは彼女だもの）

冒険者が発現する『スキル』や『魔法』は本人の資質に関係するものが多い。

能力を見れば冒険者の人生が垣間見える。メーテリアもその言葉に疑いを持っていない。

思考が混濁し、考えがまとまらない。

次第に長閑な牧場が映し出され、乳牛の群れを思い浮かべる。痛みが強くなるにつれて現実がぼやけ、空想が強くなる。

ミノタウロスは急に大人しくなった冒険者に畳みかけようとするもののある地点で進まなくなった事に疑問を抱く。

完全に勝機が見えているのに攻め込めない。それは何故なのか。拳を使えばいい。足を使えばいい。なのに——次の瞬間には負けてしまう気がした。

動くに動けない。

「ヴウ……」

そんな攻防も長く続くわけがなく。

産気づいてから五分ほどしか経っていないのに一時間もの経過した様な雰囲気があった。

メーテリアが呻きだしてから時間の流れが緩やかになったような——
彼女の荒い呼吸がモンスターを怖気づかせる。

(あ、ああ……。うあああ)

股関節が軋み、我慢の限界に達した。そして、激しい痛みと共に体内から大きな物体が真下に流れ落ちる感覚が伝わる。

痛くて涙が出た。

身体が避けるかのような尋常ではない産みの苦しみ。

ダンジョンで絶叫を上げ、ついでに赤子を出産する。——目の前に居たミノタウロスも思わずたじろぐ。

◆ A u r g e l m i r ◆

一気に重さが無くなり、ついで聞こえてくるのは小さな生物の息遣い。

地面に落下した鈍い音の後、堰を切ったような鳴き声こだまが木霊する。

意識が想像以上に体力を失い、意識も曖昧になってきたがモンスターと対峙している事を忘れてはいない。

早く対処しなければ子供が危ない。そう臍げな感覚で敵を見据える。

股間からまだへその緒をぶら下げながら。メーテリアは幽鬼ゴーストのように揺らめいて武器を構える。

一歩進んだ時、体内に入っていた胎盤がニユルリと零れ出た。思わず、小さな悲鳴を上げるものの赤子の安全に比べればなんとという事は無い。

「……………」

一気に障害が無くなった為に思考が鮮明になった。いや、無駄な事を考えずに済み、目の前の事だけに集中できた。

産まれてしまったものは仕方が無い。今更体内に戻す事は出来ない。

赤子が生まれ、自分は母になった。次はその子を守るだけ。

一つ息を整え、無造作に振るわれる武器。それをミノタウロスが対処できる筈もなく

メーテリアの「ステイタス」は深層域でも通用する程に高い。ゆえにミノタウロスは呆気なく灰と化し、魔石を落とした。たった一刀で。

戦闘が終わってもまだダンジョンの中である。次のモンスターが現れるまでそう時間もない。

震える足腰のまま赤子の下に向かい、小さな身体を拾い上げる。

「……………思っていたよりも元気そうね。健康第一……………。それより早く地上に行かないと

……。それから名前を考えましょう。……。やつぱり音に関連したものがいいかしら
……)

動きたくても動けない。

緊張が解けた事といい、体力が思いのほか奪われてしまった。

頭痛や下半身の痛みに加え、おそらく貧血か脱水症状を起こしている。そんな気がした。

他の冒険者が来るまで大人しくしていた方が無難だ。ここは上層階だし、多くの往来がある。出てくるモンスターも大したことは無い。——ミノタウロスはさすがに今の一匹だけだと思っけれど。

「……お母さんが側に居るから……。ちゃんと守ってあげるから安心しなさいよ……」
産まれたばかりの赤子は周りの様子に気付くことなく小さく呻く。頼りない手足を動かして懸命に生きようとしていた。

そして——メーテリアは赤子をしっかりと抱きしめたまま意識を失った。

◆ A u r g e l m i r ◆

次に気が付いた時は暗い洞窟の中ではなかった。ぼんやりとした感覚ではあるがこれでも歴戦の冒険者だと自称している。

多少の修羅場は経験済みだ。

人々の喧騒が耳に聞こえて、どこかの診療所だと理解した。

「……ちやんと見つけてもらえたのね」

追い剥ぎも多少は覚悟したが問題はそこではない。

産まれた赤子がどうなったのか、だ。だが、それを尋ねようにも麻酔を使われているらしく、身動きが取れないし、喋れない。

意識は多少ある程度。ひどく眠い。

「……ふん、起きてたのか」

不機嫌な声が聞こえた。それはとても聞き覚えのあった。

彼女が所属している「キアン・ファミリア」と浅からぬ付き合いがある「ディアンケ

ヒト・ファミリア」の主神ディアンケヒトのもの。

はくはつ白髪の老神で医療を司る。そして、声が大きい。

普段は側に居たくないと思わせる神様だが冒険に必要な医療器具の制作に関して他の追随を許さないほど優秀であり、それに見合った高額商品ばかりなので貧乏人には手が出ない。

「キアンの奴が土下座してきたから仕方なく、助けてやるのだ。ありがたく思えよ、貧乏人」

「……………」

「……全く、どこの世界にダンジョンで出産など……。お前は正真正銘のバカだな。大馬鹿だ」

答えられない代わりに軽く頷く。

ディアンケヒトは普段から機嫌が悪いが、貧乏人が嫌いなわけではない。それは何となく分かった。

命を粗末にする下界の住人に対して文句があるだけだ。

「ふん。……赤子は健康だ。お前たち姉妹の様な厄介な病状は確認されなかった。……健康な奴は金にならん。全く……」

（……健康？ ほ、本当の本当に？ ……ああ、神様……ありがとうございます）

健康という言葉を神から聞かされただけで涙が溢れ出て来た。

病気の自分から生まれる子供はきつと不幸な人生を歩むかもしれない、という思いが少なからずあつたからだ。

それでも命ある限り愛そうと妊娠を知った時から夫婦で決めていた。だからこそ、報われたと思えた。

「儂は何もしとらんで。退院して儂の商品を買えるくらい金を稼げ。お前ら貧乏人は恩の返し方も満足に出来んから嫌いだ」

（……はい、いづれ）

「ディアンケヒト様。病室で大声を出さないでください」

「これが大声なら僕はなんも喋れんではないか」

不満を募らせたディアンケヒトはそのまま病室から出ていったようだ。この部屋には他にも人が居て、彼に注意したのは診療所の職員と思われる。

あまりにも体力を失っていたために声が出せなかったけれど、感謝の念は忘れなかった。

◆ A u r g e l m i r ◆

元々身体が弱かったメーテリアは自分が思っているよりも長く入院する事になってしまった。

その間、赤子は別室で面倒を見られており、授乳の時間が今は楽しみになっていた。主神キアンも時間のある時に訪れて色々と面倒を見てくれる。

彼もまた医療を司る神なのだが大手に客を取られており、貧乏な暮らしを余儀なくされている。かといって多額の借金があるわけではない。

「お前の姉が遠征に行っている間でよかった。噂を聞きつけられたら大騒動になっていたぞ」

「……………」

まだ少し声が出せないが主神はちゃんと聞きとってくれた。

身体の栄養の殆どがまだ戻っていない。回復には時間がかかり、授乳の為の食事も少しづつ増やしている最中だ。

元より他人より虚弱な身体である。一日でも長く生きるのが本来の目的だ。

今回の出産で寿命を大幅に縮めたかもしれない。

「名前は決めたのか？」

いいえ、と首を横に振りながら答える。

候補をいくつか決めているものの決断には至っていない。

死地に向かう冒険者を母に持つのだから苦勞が絶えない筈だ。であればもう少し暮らしやすい人生を用意しなければならぬ。

それを思うと素直に喜べなかった。

(……一番の問題は私の寿命が短いこと。……長く面倒を見てくれる人を探さないと……)

既に余命宣告を下されている。長くて二年だ。それはあまりにも短くて残酷な現実である。——今回の事で更に短くなった気がするけれど。

産まれた時から患っている病気があり、今日まで生きてきたことが奇跡である、とキアンに言われたことがある。——これは双子の姉にも言える。

生きている限り色々な事に足掻き続ける。だから、こんなところで死んでいる暇はな

い。

「退院したら『ガネーシャ・ファミリア』にお礼を言っておくように。全身血まみれのお前達を見つけてくれたのだから」

はい、と声の代わりに頷きで応えた。

その後、大きな変化も無く数日には言葉を発する事が出来るようになり、歩けるようになったのは更に三日後。

子供が生まれた以上はしばらく本拠ホムで大人しくしているしかない。ただでさえ貧乏なのに何もしないのは不健康極まりない、とは思うもの——

危険なモンスターの巣窟に赤子を連れていくのは躊躇われた。

◆ *A u r g e l m i r* ◆

半月ほどの入院生活を終えて、無事に退院した後、貯金を切り崩しつつ赤子の名前を考えていると「キアン・ファミリア」の本拠ホムに長く遠征に赴いていた姉アルフィアが訪ねて来た。既に出産の噂が届いていたようで二人共無事か、と言ってきた。

いつもであればメーテリアと名前で呼んでくれる。

「こちらです、姉さん」

ベッドに腰かけていたメーテリアは姉を手招きする。

外出自体は出来るがダンジョンに潜るのは今しばらく禁止だと主神からも言われた

ので大人しく生活していた。

早速勝手知ったる本拠ホームの中に入ってきたアルフィアはいつもの瞼を閉じたような顔に焦りを滲ませていた。

妹は常日頃から疑問に思っていた。どうして目蓋を閉じていて平然と歩き回れるのかを。

これには糸目の住人と同様に特に問題なく過ごせる、とのこと。

彼女にとっては視界を妨げるものではなく、ちゃんと周りが見えている。もちろん、目蓋を開ける事も出来る。

「……随分とやつれたな」

「これでも幾分か良くなった方ですよ」

灰色の長い髪を乱していた様子から、ダンジョンから直通で来た事が窺えた。

よく見ればあちこちに擦過傷がある。更には武骨な戦闘バトル衣クロスを身に着けているのが分かった。

アルフィアは「ヘラ・ファミリア」の眷族であり【静寂】の『二つ名』を持つレベル7セブンの冒険者。それが妹の為だけに焦りを見せている。

彼女にとってメーテリアは何にも代え難い存在で、場合によれば主神ヘラすら天界に送還させる事も厭いとわないとか。

「深層から駆け足でも三日はかかる。お前の一大事は本当に心臓に悪い」

(……つまり不眠不休でいらしたのですか？ そういえば顔色が悪いですね)

一般的に深層域から地上まで早くて半月ほどかかる。それを三日で済ませる姉に妹はただ微笑を向ける。

もし、それを他の眷族に話せば驚愕される。

帰り道にもモンスターが現れるし、それらを無視する事は出来ない。蹴散らすだけでも結構な時間がかかる。

なによりアルフィアも病弱な人間だ。ヒューマン無理を通せば身体を壊すおそれがある。

「とにかく、ご苦労様です。こちらが私の子供ですよ。名前はまだ決めていないのですが……」

「そ、そうか……。小さくて弱そうだ」

視界には入っていたがまずは妹を労うところから、と決めていた。

ダンジョンから戻ってきたばかりなので身体や手が汚く、大急ぎで洗面所に駆け込み、改めて赤子と向き合う。

そんな姉の姿はメーテリアの前だからこそ。これがアルフィアの本拠地ホームであつたならば、取り乱す姿はほぼ見ることが出来ない。

既に幹部として活躍している彼女は下級冒険者に弱みなど見せない苛烈な女性とし

て通っているし、本人もその自覚を持っている。

レベル7へと至つてから性格もより傲慢というか威厳が深まった。

「……可愛いな」

まだ元気に動き回れるほどではないけれど、赤子は手足を懸命に動かしていた。

髪の毛は白く、目は目蓋が閉じていたので確認できないが妹の言によれば赤いという。まるで深紅ルベライトのよう、と。

アルフィアは『白化』アルビノを疑つたが信頼ディアレンケヒトできる神から健康である、と太鼓判を貰つた事を告げた。それを聞いても納得できなかったようだが、ひとまず健康という部分だけ納得してくれた。

◆ A u r g e l m i r ◆

メーテリアは虚弱ゆえに「ファミリア」に入る事が難しいとされた。それでも姉が働いているのに自分だけ寝ているわけにはいかない。

妊娠発覚後に懇意にしている「キアン・ファミリア」の主神に無理を言つて冒険者の登録をした。これに姉は猛烈な不満を滲ませたが可愛い妹が決めたことに異を唱える事は出来なかつた。

見た目はひ弱でアルフィアも気が気ではないような存在なのだが——

才能溢れる姉と違い、何の才能も無いけれど努力だけで前に進んできた。その結果、

姉をも驚かせる成績を叩き出す。

「……お前にはいつも驚かされる。知っているか？ 私は世間から『才禍の怪物』と呼ばれているんだぞ」

「はっ」

「その私をお前が驚かせるのだ。いつもいつも。時々、その御大層な『二つ名』が張りぼてのようで笑えてしまう。……本当に凄いのはお前の様な努力をして結果を出す者と私は思っている」

姉はいつも妹を引き立てる。最初こそは言葉だけだったものが、今は本心から妹は凄いと認めるようになってきた。

才能に溢れた姉が、だ。

「母子共に生きていてくれた。正直に言えば……無理だと思っていた。体力の面からも出産は自殺行為に等しい」

「……今回は予想外に早まってしまいました……、結果を残せましたよ」

そう言うのと姉は妹の頭を軽く叩く。

本当に手加減しないと鼻血を吹くほどの打撃になるのでアルフィアは人知れず特訓していた。壊れやすい卵などを使って。

魔法職なのにどうやったら耳を疑う殴打音を響かせられるんだ、と仲間から良く言わ

れていた。

妹の為ならばどんな努力も惜しまないのが「静寂」のアルファイアである。

「……本当にこの子は……。この私をここまで焦らせるのはお前くらいだ」

「……あー、やっぱり姉さんを怒らせてしまいましたか。……「ランクアップ」する度に雲上人のような雰囲気強くするから心配していたけれど……。姉さんは姉さんでした」

「……この子を育てていくわけだが……。どうするつもりだ？ 私に預けてもろくなことにならないぞ」

お互い厄介な病に侵されている。共に長生きできるとは思っていない。その上で二人に何かあった時、誰がこの子を育てるのか。当てはあるのか、と姉は尋ねた。しかし、それを聞く前に結論が分かっていたので即座に何も言うなと言った。

迷宮都市オラリオから少し離れた場所にある小さな村に預ける事になる。これは随分前に聞いたが——今もそれは変わらないようだ。

「折角健康体で生まれたのですから。こんな修羅の国のような場所で生きなくても……」

「……そうだな。我々は英雄を欲しているが……。何でも子供に次代を委ねようとは思っていない。……いずれそうなるとしても、だ」

もし、可能性があればアルフィア手ずから教育しても良いと言うと妹は苦笑した。そこまで長生きできれば頼みます、と。

◆ A u r g e l m i r ◆

遠征から帰ってきたばかりの姉を——半ば追い出すように——帰らせ、子育てに悩むメーテリア。

資金もそうだが一番は自身の健康だ。残り少ない命をどう使うかがダンジョン攻略より難しくしている。

主神に預けるのも心許ない。彼は神ではあるが子育てに精通しているわけではない。まして、店を切り盛りしなければならぬ仕事がある。

零細「ファミリア」だが客が全く居ないわけではないので。

「こういうのは直観ちよっかんに頼るべきよね。……うん。決めたわ。貴方は今日からベルよ」由来が乳牛というのは秘密にしようかと心に決めて。

あまり気取った名前も呼び難くなるし、なにより自分が恥ずかしい思いをする。

彼が後に成長した時、他人から呼ばれる名前として恥ずかしくない程度には良い名前になったと思う。そうでなければ——お母さんを恨みなさい。君にはその権利があると言っておいて。

（ベル・ヴァルトシユテイン。ベル・アーカディア。ベル・ネヴァンリンナ。ベル・クラ

ウデイウス。ベル・アウグストウス。ベル・ウエルキンゲトリクス)

歴史に名を遺す偉人や英雄の名前と合わせると仰々しいな、と思った。

文字数が少なく、普通っぽいのが一番呼びやすくて親しみがありそう。

苗字のない住民も多く居る。里子に出した後の彼の彼の人生がどうなるか、自分はそれを知ることなくこの世を去ると思うと涙が出てくる。

生きている間は与えられるだけの祝福を授け、苦しい人生にならないように祈る。

「あ、そうだそうだ。いい事、ベル。英雄、色を好むと言われているけれど程度があるからね。お母さん、かの大神以上の不屈き者になったら許しません。……でも、これだ、と決めた女の子なら全力で愛し、全力で守りなさい。その時にはうるさい親の顔を気にしなくて済むんでしようけれど、今はまだここにお母さんが居ますからね」

「……ああい」

「かのアルゴノウトは牛頭のモンスターと死闘を繰り広げました。守るべき金髪碧眼の姫や女の子たちの為に……。でも、戦いが終わったらあっさり死ぬのが英雄の困ったところ。ベルは間違っても早死にするような事の無いように。生きて帰り、一日でも長く生きろ。それが胸を張れる英雄の真の姿だ、ぞ。……あっさり死ぬ奴はただの莫迦だ。そんな弱虫、お母さん嫌いだから」

自分の英雄がまさにバカ——いや、大バカ——だった。

ろくでなしで財産も残さない。ベルに自慢できるような話しはろくでもない大神から譲ってもらった物書物ばかり。彼の成長にいい影響があるとは——母から見ても——思えない。

（稼ぎの殆どは私の貯蓄……。男としてどうなの？ 甲斐性なしのろくでなしが。……後で色んな神様主に女神から『吊り橋効果』の内容を聞かされた時、しまったと思ったわよ。……あくあ、まんまと騙されてしまった）

物心がつない幼いベルは母親の百面相に一喜一憂した。その中でも笑顔以外はお気に示さず、すぐにぐずった。

子育てで一番大変なのは夜泣きだと聞いているがメーテリアはただでさえ虚弱体質だ。ここは神キアンに頭を下げて協力を要請しようと決めた。

使えるコネは最大限利用しろ、と姉からも言われている。だから、遠慮はしない。母が強いところを見せなければ活券にかかわる。

◆ A u r g e l m i r ◆

余命二年程と言われたがメーテリアは一年と少しでこの世を去る。

曇り空のある日、子供の離乳食の材料を集めている最中に糸が切れた人形のように——力尽き——倒れ、そのまま二度と起きる事は無かった。

沈着冷静で何事にも動じない不動の存在だった姉のアルフィアは妹の死にひどく嘆

き、懇意にしている〔ゼウス・ファミリア〕に当たり散らすように襲撃を掛けたとか。

屈強な冒険者で揃えられたはずの〔ファミリア〕の団員達が悉く打ちのめされ、一部は何故か〔ランクアップ〕を果たしたという。

〔ヘラ・ファミリア〕団長にしてレベル9の〔女帝〕フローラですらこの時ばかりは呆気にとられ、何もできなかった。

アルフィアは妹の死から〔ファミリア〕を脱退し、隠居を決め込む。元々身体にガタが来ていたので丁度いい理由付けが出来た、と。

残された赤子は〔ゼウス・ファミリア〕預かりとなった。アルフィアが引き取るものと思われていたがいつ死ぬか分からない者より健康な人材らすべてを託すことにした。これはメーテリアの遺言でもあり、姉も口出すことを控えた。

間もなく最強派閥が『黒竜』の討伐に失敗し、全滅の憂き目に遭う——
それから更に時が過ぎ——本来の時間に戻る。

「……ゼウスとヘラが去って五……、六年は経ったか……。地下に籠る生活も飽きて来たな、妹よ」

「地下と夜を司る神ですもの。神はやはり……神らしく振舞わないと……」

地下と幽冥を司る男神『エレボス』と夜を司る女神『ニクス』が不敵に笑う。

日陰者として潜んでいる下界の子供達を率いて賑やかな催しを企んでいたのだが、用

意を整えるだけで少し飽きを感じていた。

神とは違い子供達は短命だ。それらを使いつぶすことに少なからず心を痛める。

全ても悪も関係なく神は全てを愛する。それは善神悪神問わず。

「世間の見聞には疎い私も驚きましたわ。あの黒竜が一体だけだと思ってきましたのに……。九体も居るといふのには……」

「……元英雄にして化け物の象徴だ。あれら全てが大神『オーディン』の権能を宿している。……下界の子供達が相手にするには厄介すぎるだろう。……というかどうかやって倒すんだアレ。あと、倒せるのか？」

一部の神は知っていたらしいが、エレボスを含めた多くの神々は知らなかった。

神を取り込んだ竜が混じっていた事を。

だからこそ神がダンジョンに入る事を禁じようと今まさに『神会』デナトウスで議論が交わされている。——既に手遅れだが。

攻略不能に近い敵がダンジョンから飛び立った。放っておけばいずれ人類社会が滅びる。それを防ぐために神々が下界に降り立ち、子供達に『神の恩恵』フアルナを授けた。

——その全ての努力を無にする敵が『隻眼の黒竜』オーディンである。

神と同等の恩恵を持つ最凶最悪の邪竜。眷属に従えていた他の黒竜達ならばいざ知らず、本命は邪神と言われるエレボス達にも攻略の糸口が見えない。

神を殺せるのは神だけ。そういう規則がある。それを覆せる冒険者に心当たりはない。

「まさに『神々の黄昏』……。しかし、このまま傍観しているわけにはいかないでしょう？」

「ああ。俺達には神殺しの英雄が必要だ。……何を犠牲にしても、な……。……。それで妹よ。付き合ってくれるか？」

優男風の男神に言われては妹女神に断れるわけがない。

天界からの付き合いもあるし、二人だけの時は『妹』と呼んでくれる神だ。

(……なんだかんだと言って下界を気にする神々はきつと……。、とんでもないお人好しなのでしょね。他の邪神達もやる気に満ちていますし。あいつら普段は引きこもりのクズのくせに)

神の説得に問題は無い。あるとすれば付き合い合ってくれる眷族の方だ。こちらが非常に拙い展開となる事が窺える。

『神意』とは関係なく、彼らは我欲が強い。命令で動くとは思えないし、お願いでも聞িয়ে いてくれる保証が無い。

古き神々が去り、時代が動いた。

これから先に起きるのは大きな騒乱ではあるけれど、全ての決定権は下界に住まう子

供達が握っている。二人の邪神も裏方に徹する心積もりであった。
これは子供英雄の守護者が記したしる【母マール・ミイスの物語】——

i u r i s d i c a t i o

07 武人の交渉

迷宮都市オラリオにて繰り広げられた小さな戦い。その結果は——結局のところ鍛錬以上にはならず死傷者は出なかった。ただし、それは冒険者側の見解だ。

人知れず一つの命が失われたことを当事者達は知っている。

神々の気紛れにて生まれ出でた孤高の女王。その名は「静寂」のアルフィア・ストラデイ。

癖のない真つ直ぐに伸ばされた長髪は灰色。閉じた目蓋の中に左右色違いの瞳があり、元人間ヒューマンの女性であったが何の因果か竜女ヴイヴルの変異種として再誕した。

ごく小規模の騒動があつたものの都市全体を揺るがすほどの混乱は生じなかつた。

唐突に現れ、唐突に消えた。これはただそれだけの事ではない、筈だつた。

深層への遠征に向かう「ロキ・ファミリア」との争いを都市中央に聳える『摩天楼パベル』の上層から地上に顔を向ける者が居た。

いつものようにダンジョンに赴く白髪はくはつの少年を眺める為に。

天より地を睥睨するのは美と豊穡を司る女神『フレイヤ』——

(……随分と呆気ない最期だったわね。……魔石を持つていたから? ……報告にあった『異端児』の避けられない弱点というのは……、些かつまらないものね)

もし、彼らの弱点が無ければもう少し歯ごたえのある戦いを見ることが出来たかもしれない。しかし、それはそれで倒しにくい敵が現れる事になる。

自分の眷族達を強くするにはアルファイアくらい推定レベル7の強者の存在がどうしても必要だ。だから、その利用価値を見定めていたのだが——思いのほかデメリットが大きい事に女神は嘆いた。

(……レベル7セブン一人居るだけで複数のレベル6シックスを手玉に取れる。そして、彼らから得られる【経験値】はとても多い)

同レベル帯の鍛錬よりも旨味がある分、上位者との邂逅の機会はとても少ない。まして本気の殺し合いなど早々出来る事ではない。

現団長にして【猛者】わうじやオツタルでさえ次の【ランクアップ】に未だ至れていない。——もう七年も経っているのに。

窓に向けていた意識を室内に控える——身長二Mメートルはあろうか——オツタルに向ける。(でも、試す価値はあるのではなくて? ……それには色々と妥協しなければならぬわね。……駄目なら駄目で構わないし、元より成功など望むべくもない。結果が分からない方が楽しみになっていいんじゃないかしら)

一步、足を動かした時、後ろ髪を引かれる様な感覚を覚えた。それは微かな違和感の
ようなもの。

フレイヤが振り向いた先にはオラリオの通りしか見えない。

地上ではない。もつと下の方だ、と感覚が告げる。

意識をダンジョンの底へ向けていくと目的の場所にたどり着く。

(……流石に深層までは届かないけれど……、確実に何かが上を目指しているようね。
それも複数……。とても懐かしい感じがするわ。……ああ、この熱情に似た魂を持つ者
を私は……)

正体までは看破できないが面白そうな客人が現れた事だけは分かった。

フレイヤは側に控える猪人ポアスの武人オツタルに顔を向け、しばし思索に耽る。

「ロキ・ファミリア」だけ楽しい思いをするのは面白くない。自分も楽しみたい。であ
れば——多少の手間をかけて娯楽に浸っても罰は当たらない筈だ。

独占欲がある女神は嫉妬心も備えていた。

「……オツタル」

「はっ」

女神の言葉に即座かしずに傳く武人。

フレイヤは彼にいくつかの御遣いおつかを頼んだ。すると厳めしい彼の顔がより苦渋に満

ちた。

無理難題を言つたつもりはないのだけれど、と女神が言う。と彼は不満を残しつつも御意と答えた。それがフレイヤにとつて氣掛かりを覚えるものになった。

女神は彼に白髪はくはつの冒険者ベル・クラネルが今しがた手に入れた大きな魔石を言い値で買ひ取れと言つただけだ。そのどろろが難しい事なのか、彼女は部屋から退出する彼を小首を傾げながら見送る事になり、一抹の不安を抱く。

(……どんな深読みをしているのか分からないけれど、こちらも急がないと……)

女神フレイヤは呼び鈴を振る。すると数刻を待たずに室内に従者が入つてきた。

静かな足音以外の無駄な雑音を取り払つたかのような静謐さを醸し出すのは多くの侍従達を束ねる女性冒険者ヘルン。

右目を隠すような髪型。灰色の髪と漆黒の如き瞳を湛える人間ヒューマンの相貌には感情というものが浮かばず、フレイヤに対し何の支障も与えないようにしていると思わせる。

「貴女にはいくつかの【ファミリア】の主神に招待状を送つてくれないかしら？ それも大急ぎで」

「御意」

些かの迷いもなくヘルンは頭を倒して肯定の意志を見せた。

彼女の『二つ名』は存在しないが『名ネーも無ムき女神レの遣スい』という通称が伝わっている。

ヘルンに要件を伝え終わつた後、部屋に一人きりになったフレイヤはいつものように大窓から下界を見下ろす。

天より地を睥睨するのは女神の特権である。

(……もう少し私を楽しませて頂戴。……あら？ あの子にワインも頼んでおけば良かったわね)

楽しみを優先させるあまり手持ち無沙汰であつた事を思い出し、苦笑する。
飲み物が無くともしばらくは平気だが楽しみに酔う事はとても大切である。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

女神フレイヤが暗躍している頃、アルフィアとの激闘を繰り広げた「ロキ・ファミリア」は当初の予定通りに深層への遠征に向かう。

そんな彼らと入れ違いに「ヘステイア・ファミリア」の面々は本拠である『ホーム竈火の館』へ帰還する。

未知の強者アルフィアに誘われ、様々な経験を得た少年ベル・クラネルは彼女が残した大きな魔石を即座に売り払うことなく居間のテーブルに置いて、しばし眺めた。

紫紺の色を湛える宝石はダンジョンがモンスターに命を与えた結晶である。これを砕かれるとモンスターは即座に形を失い、灰と化する。

「……大きな魔石だよな。こうしてじっくりと眺めた事つて無かつたな、そういえば」

ベルの側に座るのは赤髪の鍛冶師である青年ヴェルフ・クロツゾ。後から加入した人間だがベルにとつての兄貴分のような態度を表す。

反対側の席に座すのは小柄な体形の小人族の少女リルカ・アーデだ。今回の騒動で一番気苦労を経験したものの獲得した収穫物の収益金の多さに概ね満足していた。

「これだけの大ききなら一〇〇万ヴァリスは硬いかもありません」

「……………」

ヴェルフとリルカの言葉に反応を見せず、ベルはただ魔石を見つめていた。

出会って日が浅い筈なのに昔から気にかけてくれた知り合いの様な雰囲気戸惑っていた。

見ず知らずの存在なのに。どうしてか胸が痛む。

(…………アルフィアさん。まるで、僕の事を小さい頃から知っているような雰囲気があった)

単に優しいだけではない何か彼女にはあった。だが、ベルはそのことを知らない。

それに——どうしてアイズ・ヴァレンシユタインと腹違いの姉弟などと言ったのか、気になった。とても気になった。

そんな言葉を言うからにはベルとアイズの事を知っていなければ出ない筈だ。単に異端児として触れ合ったからお返しとしてそういう話しをしてくれたわけではない。

彼女には何か確信めいた事情があった。そう思えて仕方がない。

(僕の知る限りアルフィアという冒険者の事は何も知らない。英雄に連なる人物ではないのは確かだし、リユーさんとアイズさんの言う通り『闇派閥』^{イッパイルス}の関係者だったのかも
しれない)

数年前、オラリオに破滅を齎^{もたら}した元凶の組織。

当時の関係者であることをアルフィアは否定せず、ベルも証拠が無いので否定できなかったけれど。それでも彼女が心底悪人だとは思えなかった。いや、そう思い込みたいだけなのかもしれない。

「我らの団長様は切り替えが遅いな」

ヴェルフの言葉に彼らの対面に座る黒髪の女神ヘスティアはかける言葉を探しながら苦笑していた。

少年が一度悩むと現実に戻るまで結構時間がかかるのは半年という短い付き合いではあるが、ある程度は理解していた。

ヘスティアからすればいつもの騒動の一つ程度にしか感じなかったけれど、彼にとつて大きな心の傷になってしまったのかもしれない。なにせ、目の前で一つの命が失われたのだから。

「……【静寂】のアルフィア。小耳に挟んだ程度ですが……、彼女は【ヘラ・ファミリア】

なベル・クラネルの心境を理解するのは誰にとつても難しい事だった。神であるヘステイアも同様に。

(下界の子供達は永遠に生きる訳じゃないけれど、身近な死は堪えるようだね)

特にアルフィアはベルをとても気にかけていた、と聞いている。どういう意図があったのかヘステイアには分からない。ただ――

二人がまるで親子のように見えたのは確かだ。

そして、確かに聞いた。

ベル・クラネルは私の家族だ、と。

神に対して嘘は付けない。ゆえにその言葉が嘘か真実かヘステイアには分かる。

(……単なる出まかせなんかじゃあなかつた。あれは……、あの時の言葉は確かに真実だった。……仮にベル君の母親だったなら彼自身が分からない筈がない)

帰り際、こつそりと母親について尋ねた。

ベルは物心つく頃には育ての親たる祖父しか居なかつた。

両親の事は知らず、けれども祖父から幼い頃に死んだと聞かされた。

「ちなみにアルフィア君がベル君と何がしかの関係があるという事はないかい？」

「そもそもベル様の事はあまり知らないのですが……。【静寂】のアルフィア・ストラデイとベル・クラネル……。名前からして繋がりはあるとは……。」

「ヘステイア様は二人が肉親だと思われているのですか？」

「…………いや、まあ…………。アルフィア君が自分の家族だと言ったんだ。…………とても嘘とは思えない。…………これから死にゆく者が嘘をつくとも…………、ボクには思えなかつたけれど…………」

意気消沈するような態度でヘステイアが言うのと団員達が戸惑いを見せた。

アルフィアについての情報はまだ然程集まつていないがリルカが追加情報を得てきましようか、と言うと女神はより一層思い悩んだ。

知らなくてもいい真実が現れるかもしれない。しかし、彼にとつてはとても重要になる筈だから応援しなければならぬ。その気持ちの葛藤に揺れる。

イウイリス

闇派閥の幹部うんぬんはベルも聞いてるので不都合な話題は既に解消していると見て間違いない。問題は彼とアルフィアが本当に家族関係にあるとしたら——ヘステイアはどう振舞えばいいのか、だ。

（と言つても彼女は死んだ。今更彼女の情報をほじくり出すのはベル君の傷を広げることにならないだろうか。それとも第二級冒険者となつた彼に色々と教えた方が今後の為になる？ ……どちらがいいんだろう）

それにベルはとても優しい子だ。身近な死に今は傷心している状態。今しばらくそつとしておいた方がいい気がした。ただし、情報だけは集めておいていいかもしれない

主神同士の仲は険悪ではなく、出会えば言葉くらい交わす。

『神会』^{デナトウス}やパーティかなんかの時はフレイヤと話す機会がある程度だけ……。子供達とは話したこと無いな……」

「フレイヤ様の名前は聞いたことがあるのですが姿は殆ど見たことがありませんね」

「美を司る女神を見ると魅了されるからね。見ない方がいいんだよ。あれは子供達には毒だ。神すらも手玉に取っていると聞いたよ」

そんなことを話している内に命が再度やってきた。

【**猛者**】^{おうじや}の目的はベルが得た魔石を買い取りたい、というもの。

どうしてそれを知りえたか——神フレイヤがどこかで見ていた以外に思い浮かばない。

ヘスティアは銀髪の女神の笑う姿を想像してげんなりした。

（……フレイヤめ……。今日に限って……。全く何を企んでいるのか知らないけれど……、眷族をけしにかけてくる相手だから……。きつと逃げてでも無駄なんだろうな）

フレイヤの神意は分からないし、きつと理解できない。その女神が眷族を送って魔石を所望している。おそらくアルフィアの魔石だと分かった上で。

砕くのか、それとも単に飾る目的があるのか。

どちらにしてもベルの同意を得ない限り勝手な判断は神であっても出来ない。

「……猪人君ポアスを入れてあげてくれ。言い分を聞こうじゃないか」
「わ、分かりました」

そんなものはありません、と断る事も出来るが強引な手に出られれば「ヘステイア・ファミリア」はあつさりあつさりと崩壊する。

本拠ホームは大きいけれど団員数はまだ一桁実質五人だ。

唐突な強者の訪問に右往左往する頃、武人オツタルが厳めいかしい顔のまま命の案内で客室に訪れた。

まず代表として団長が挨拶すべきところだがヘステイアが出る事にした。今のベルには休息が必要だと判断したからだ。

「……や、やあ、猪人君ポアス。ようこそ、我が「ファミリア」の本拠ホームへ」

他の眷族からはしたないだのけしからんだの言われている薄着のままオツタルの対面に座る。

小柄なヘステイアと比べるとオツタルは倍近くの背丈があるような錯覚を覚え、迫力もそれ相応に感じた。それと始終気難しそうな顔つきのまま。

他所よそ所そ行きの身なりではなく、このままダンジョンに潜りそうな簡素な戦闘バトル衣クロスを纏まとっていた。

（……改めて見ると強そうな子だな……。一人でうちの「ファミリア」を潰せそうだ）

ヘステイアがベルを伴うようにフレイヤの側にはオツタルがいつも居た気がする。

喋るところを見たわけではないが温厚なイメージがあった。常に周りに気を張り巡らせる神経質さは無かつたはずだ、とヘステイアは記憶を辿った。

浅黒い肌ホアズに猪人特有の丸っこい獣耳。筋肉質の身体つきだが太っている印象を抱かせない。

「用件を聞こうじゃないか。……ベル君の持っている魔石なんだろうけれど」

「……その魔石を是非とも買い取らせていただきたい」

「君は知っているのかい？ あれが何の魔石なのかを。ただのモンスターから落ちた物じゃないことくらいフレイヤは知っている筈だ」

「……俺はただ主神の命に従っているだけです。目的の魔石が何なのかは承知していません」

（……おいおい。ちゃんと聞いてから来なよ。何でもかんでも命令されたからっていう言い訳は面倒ごとの前兆じゃないか）

仏頂面のオツタルに懔然とするヘステイア。

少しの間、考える振りをしつつ【おっじゃ猛者】を見据える。命令された事に嘘は無い。ただ、彼としても無茶な言い分であることを承知しているような感じがした。

女神の命令だからといって彼とて気まずさを感じていないわけがなかった。

「……いいだろう、なんてボクが言えるわけないだろうが。……フレイヤめ……、何を考
えているのかさっぱりだあ！ ……あー、ボクはベル君に嫌われたくないのにさー」

大仰な振る舞いをしながらも内に溜まる不満をオツタルにぶちまける。この際、多少
の無様さは許容する。

【おうしや猛者】はフレイヤの為だけに行動している。それが自分を辱める事になっても構わ
ない、という強い意志も感じられた。

だからこそ、ヘスティアも自分の不満を隠すことなく露あらわにした。 オツタルか、フレイヤ君 がしよう
とする事はどれだけボクを困らせることになるのか。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

少し待ってくれるかい、と告げると急いでいるので今日中に返事が聞きたいと言って
きた。これについて引き延ばせば力づくで奪う、という声なき圧力を感じ、ヘスティア
は脂汗を流す。

もしかしなくても交渉というより脅迫である。もちろん、オツタルにも言い分があ
り、やむなく従っている所があるのは理解できる。

何を言っても手に入れる事は確定事項のようで、後はヘスティア側が折れるだけ。そ
の際、オツタルを敗走させられる——可能性がありそうな——眷族はベル以外に存在し
ない。

「……無理を言っている事は理解しています。ただ金を払って魔石を譲ってもらうだけでは納得しないでしょう」

「……世間一般の常識から言って納得する方がどうかしているよ。突然来訪してきて金を払うから大事な眷族を買うと言っているのと一緒だよ。……魔石といえどベル君にとって大切なものなんだ。彼の意見を無視することは出来ない。いくらフレイヤの子供であつてもここは譲れないね」

腕を組んではつきりと言いつつ切った。

神であるヘステイアにとってレベル7のオツタルでさえも一人の子供だ。どれほど威圧的に出てもほんの少し神の意識を發揮すればそよ風の如く——と簡単にはいかなうがある程度は威圧に耐えられる。

真に神に危害を加えられるのは神だけだ。

「……一応、ベル君の意見を聞いてみない事には……。君、少し待つてておくれよ」
「は、い」

武人が素直な態度を示したのでヘステイアは少しばかり安心した。その後、扉の外で待機していたヴェルフ達の下に向かい笑顔を見せた後、オツタルに飲み物でも振舞うように指示し、ベルの部屋に向かった。

別室にて彼は枕元に魔石を置いて、対話するかの如く見つめていた。

扉を何度かノックしたものの返事がなく、鍵をかけていなかったので様子見のつもりで覗いたらそうしていた。

「……起きてたのかい？」

「神様……」

廃墟同然の教会に居た時からベルとは共同生活してきた。寝床は古いソファだった。大きなベッド一つだけ。

他の女子の前だと恥ずかしがる彼も神との添い寝だけは特に反応を示さなかった。それがまた納得できない事の一つではあったが――

（……ボクが勝手に入っても、いつものように流される。……それってボクに魅力が無いってことかい!? 神だから特別だと思ってるのかもしれないけれど……）

「……ベル君。その魔石を買い取りたいと言っている子が来ているんだ」

「えっ？」

「相手は『フレイヤ・ファミア』だ。断れば即座に実力行使に出られるかもしれない。……君にとって不本意かもしれないけれど……、彼らには何か考えがあるのかもしれないよ。……彼らというかフレイヤが」

思い悩む少年にヘステイアは優しく語り掛ける。

決めるのは団長だが無理に拒否する事も肯定する事も出来ない。その上でどうする

のかを尋ねた。

こういう場合、買取拒否を示すのが正しい回答の一つだ。金目当てに応じる事も間違ではない。

フレイヤはかなり早い段階から眷族を寄こしている。それは何故か、を考えなければならぬ。

(……ロキの子供達との戦いからそれほど時間も経っていない。もし、アルフィア君が目的なら戦闘中に介入してきたはずだ。魔石だけになつたら寧ろ興味を無くすんじゃないのかい?)

(どうして「フレイヤ・ファミリア」が……。今も居るならリリ達が危ないってこと?)

「……ボクとしては彼らを信用してもいいと思う」

「……神様。ですが、安易に換金するのは気持ち的にも抵抗があります」

「それは相手側も同じだろう。まずは話だけでも聞いてみないかい? 彼ら、というか彼は真面目な眷族のようだし、こちらの言い分も聞いてくれると思う」

そもそも交渉しに来たのだから一方的な搾取にはならない筈だ、とヘスティアは予想する。

言葉尻からも聞き訳が無いようには思えなかったし、なによりオツタル自身困惑しているようだった。何か考えがあつて命令したのだろうけれど眷族である彼はその真意

な様子になっていた。

対話の前に持ってきた魔石をテーブルの上に置く。もし、速攻持ち去るようであれば
 嚴重抗議をする所存である、という意思表示を見せておく。——武人と名高いオツタル
 がそんなことをするとは思えないが念のために姑息な方法を試しておく。

(……顔は魔石に向いたけど……、手は出さないな)

魔石の大きさは二〇〇Cほど。紫紺の輝きを今も湛えている。

これが人型のモンスターセルチの体内にあつたとは思えないのだが、灰と化した時に落ちて
 来たのはこれだけだった。

「……じゃあ、まずは挨拶からするかい？」

「……結構。本題に入ってくれ」

「……一応……。【おうじゃ猛者】オツタル、さんですよね？」

ベルの確認するような言葉にオツタルは静かに頷いた。

挨拶をしなかったのはお互いの名がオラリオに広まっていると考えたからだ。今更
 名乗る事に何の意味がある、というのがオツタルの考えだ。対するベルは世間の常識で
 名乗るのが当たり前かな、と思った。——面識があっても挨拶しないのは失礼にあたる
 のでは、と。

(改めて見ると大きいな。……都市最強の冒険者でレベル7……。確かレベル7は二人

いて、そのうちの一人が【**猛者**】（おうじゃ）でもう一人の【**ナイト・オブ・ナイト**】が海の向こうに居るんだっけ？）

現在知られている最強は二人。レベル8以上は居ない。その正式な記録ではそうなっている。

今日発覚した【**ヘラ・ファミア**】の団員アルフィアもまた強者の一人だった。（こんにち）

まだまだ自分の知らない世界がある事にベルは少し興奮を覚えた。

「オツタルさんはどうして……この魔石が欲しいんですか？ フレイヤ様の命令だから？」

「そうだ。俺は女神の意向に従っているだけだ。その真意までは分からない」

（……目的を知らされていないなら、どうして聞いても無駄か……。でも、もつと価値のある魔石を【**フレイヤ・ファミア**】なら取ってこれそうなものなのに）

「……僕の記憶が確かなら階層主の魔石の方が大きいと思うんですが……」

今まで戦った階層主の魔石は少なくとも一M以上の大きさがあった。それに比べれば他と大差のない代物だ。違いがあるとすればアルフィアのものであることぐらい。

女神がそのアルフィアを目的としているのであれば——譲った方がいいのか。フィン・ディムナも換金した方がいいと言っていた。

唐突な別れで未だ気持ちに整理がつかないが早急な処分は考えていなかった。それ

ゆえに迷う。

早い決断を迫られているようなのは薄々理解しているけれど。

「……どんな使い道があるのか知らぬままでは渡せまい。正直、俺もこれをどうするか知りたいところだ。……もし、方法を知りえたら譲つてくれるか？ 言い値で買い取れと指示を受けている」

言い値、という言葉でヘステシアの両目がヴァリス金貨に変わった。

現在「ヘステシア・ファミリア」には笑つちやうような膨大な借金があり、その返済方法に神と眷属が頭を痛めている。

貧乏ゆえにギルドからの指令を断れず、度々任務に失敗しては違約金を——血の涙を流さんばかりのリリルカが——払ったりしてきた。今回の『強制任務』^{ミッション}による稼ぎが少なからず良い話題となったばかりだ。

（言い値と言つても吹っ掛けるわけにはいかない。……きつとフレイヤ様ならそういうところも見越している筈だ）

ベルの予想ではリリルカの見立てである一〇〇万ヴァリスが無難なところ。これ以上ともなると後々、報復などが起きる可能性が高まる。

交渉であるからには相手からの譲歩を引き出すのが通例だ。アルフィアもそうだった。そして、交わしたからには強者と言えど守るのが『約定』というもの。それが例え

口約束でも。

「……本当に言い値でいいなら……、五千万ヴァリスで……、お譲りします。……もし、この魔石の使い道について教えてくれるか、僕達の立ち合いなどを許してくれたら提示額を半分、またはそれ以下に……下げてもいいと考えています」

「ほうわ!!? ベベ、ベル君!!? そんな額じゃあ借金は……」

(……)、五千万か……。さすがに吹っ掛け過ぎだな。俺の見立てでは一〇〇万も超えない代物だ……。女神フレイヤ様の裁量を図っているのか?)

言った瞬間に眉根を寄せるオツタルの顔を見て、やはりこの人オツタルはある程度の価値が分かっていると感じた。その上で勇気を出して五千万の提示を取り下げなかった。もちろん吹っ掛けた自覚はある。だが、「ファミリア」の借金は提示額より一桁多い二億である。

問題はここから何を言ってくるかだ。

ベルは緊張の為に固唾をのむ。目の前に居るのは弱小「ファミリア」を単騎で壊滅させられる実力者だ。それに果敢に挑むのは世間を賑わせる「白兔ラビット・フットの脚」だ。

(立ち合いで更に半分か……。買い取れと言われたが彼らに何も伝えるな、とは言われていない。……フレイヤ様にお伺いを立てるべきか。それとも言い値で黙らせるか……)

黙らせるのは簡単だ。しかし、額が予想以上に多くて困惑したのも事実だ。

フレイヤの意向に逆らうかもしれないがオツタル自身は目の前に置かれた魔石には多額の資金を投入するほどの価値を見い出せない。無駄に「ファミリア」の資産をドブに捨てるようなものだ。

いくら潤沢の資金を保有しているとはいえ女神フレイヤの資産であるからには使い道が雑であつては沽券にかかわるのではないかと深読みする。

モンスター討伐以外に興味を覚えない武人に交渉事は苦手分野ではあるが――

「……分かった。五千万ヴァリス払おう。……ただし、立ち合いについては俺の独断で決めるわけにはいかない。もし、許可を得れば減額させてもらう事は可能か？」

「も、もちろんです」

「……へ、減らすのかい？」

「……神様。大きなお金を貰つてもいい事はありませんよ」

オツタルは事前に受け取つていた羊皮紙に文字を書いていく。これは『証文』というもので多額の資金を持ち歩かない代わりに信用によってギルドから引き落とすことが出来る。

大手である「ファミリア」であれば眷族に書き方を教えるのは珍しくない。

「ヘステイア・ファミリア」の財政は基本的にリリルカが担つているので彼女も証文を

（リリの想定は一〇〇万です。いくらアルフィア様の魔石だとしても魔石は魔石です。見た目からして特別なものではありません）

そう言いつつ交渉を終えたオツタルが迫ってきたので扉から離れる。気配で何人が控えている事くらい分かっている筈なので相手の邪魔にならない位置に移動する。

悠々と部屋から出て来た彼は足元に控えるリリルカ達を見据え、すぐに顔を出口に向けた。

「……【ラビット・フット白兎の脚】とこの小人族は付いてきてもいい」

「は、はい。急いで支度してきます」

「……急に来たかと思ったら随分と大きな態度だな。大手の貫録つてやつかい？」

「文句があるなら力で証明しろ」

ヴェルフの軽口に意外にも反応を見せたオツタルに眷族達は戦々恐々となった。しかし、殺気を振り撒かなかつたので命と春姫が失神するような事態には至らなかつた。

言葉の少ないオツタルはそのまま玄関に向かい、何事も無かつたかのように外に出た。その後を最低限の武装を整えたベルとリリルカが追随する。

【ファミリア】総出で出かけるほどではないとしても何も起こらずに済むとは思えなかつた。ヘスティアは本拠ホームにてベル達の無事を祈るのみ。

残されたヴェルフ達はダンジョンから戻ったばかりなので静養が必要であることを

「最初はどうなるかと思つてたけど……。意外と私達戦えているよね。なんでかしら？」

「日頃の経験が役に立っているだけだろ？ それに……生前の「ステイタス」が関係している気がする」

それぞれ疑問を抱きつつも戦闘を重ねながら身体の調子を分析する。すると色々分かる事があつた。

まず基本となる身体の強さは凡そ生前の「ステイタス」と変わらず、モンスターだからといって爆発的な強さを得たわけではない。

見た目はそれぞれ違う種族だが階層ごとに現れるモンスター特有の強さではない。——もし、モンスター特有の強さであれば一部は既に滅んでいてもおかしくない。

(……最初はウォーシャドウつてどういうこと、と思いましたが……。速攻で滅びずに戦えるのはアストレア様のお陰……。それと……)

モンスターの身体ならではの増強方法である魔石の摂取だ。

最初は抵抗があつたが生き残る為に試し、今に至る。

体内に魔石を摂取すると気持ち的に『能力値』が増えた気がする。これは『強化種』のモンスターを做つての事だ。

残念ながら本当に強くなつたかどうかの実感が伴わない。しかし、死にくくなつて

いるのは確かだ。

「身体が変わっても痛みは人間の時と一緒に……。モンスターであつても痛みの感じ方は変わらないのね」

彼らが一番不思議に思う事は生前の『スキル』を使えることだ。モンスター由来の能力が未だまともに使えない今はとても重宝しているけれど。

考えている間にもモンスターは壁や床から現れて襲ってくる。

じっくりと考察するにはもつと上を目指さなければならぬ。それだけが今の彼女達——彼女達の第一の目標であつた。

「……その前に重大な問題もあるけれど……」

モンスターの身体とはいえ腹が減る。

今のところ水の都たる階層には豊富な水源があるので喉の渇きは癒せるが食料となる物資が見当たらない。

モンスターも食べられなくは無いが魔石が砕けると全てが灰になる。当然、腹に入れた分まで。それはもう連帯感を伴った現象と言える。

「最悪共食いすればいいわけだし」

「……あと一〇階層も上がれば『雲葉子』ハニークラウドが待っている」

物騒な事を言い出すのは味気ない鉱石^{魔石}を食べている反動からだ。それに誰もが精神

的に疲弊している。

ほぼ休みなく戦闘を続けている為だ。

いつもであれば適度に休憩し、回復薬や携帯食に頼るところだが——今は何も持っていない。身体一つで上を目指さなければならぬ状態だ。

ダンジョン探索において兵站へいたんの確保はとても重要である。それゆえに深い階層を目指すときは入念な準備が必要となる。

「……あー、海の幸さちがたくさんあるのに」

「水が飲めるだけまだマシよね。……それより結構な量を食べて来たと思うけれど……、みんな強くなれてる？」

「なれてるみたいよ。身体が丈夫になってきた」

「……攻撃も通りやすくなっているし、何より怪我が少ないのがいいわ」
 (最大の懸念は……他の冒険者との接敵よね……。どうしよう)

(これだけ戦っているのにどうして冒険者の姿を見かけないのかしら？ 誰かしら居ると思っていたけれど)

楽しんで喋りつつ、けれども戦闘は激しく。そんな乱戦を潜り抜けて次の二六階層に登る為の階段を探していた時、更なる衝撃が彼女達を襲った。

それはつい先日複数の階層を爆破し、地盤を落下させる事で起きた——この暴挙を働

いたのは闇派閥イヴイルスの冒険者である——事故現場である。

未だ修復が終わらぬまま瓦礫の山を晒し、その光景を見た彼女達は唾然としたり、絶望感に打ちのめされたり、乾いた笑いを漏らした。

いつも行き慣れていた階層の風景がここまで崩れているのは——元団長の記憶にも無いほど。

(……なんだこりゃあ！)

(あれ？ 階層間違ったかな？)

辺りを散策しても瓦礫ばかり。それどころかいくつか火炎石を見つけてしまい、何者かによる爆砕——いや、彼女達の中にある「ファミリア」名が天啓のように浮かんだ。

信じられない事だが階層を崩壊させうる犯人に心当たりがあり、団長以下全員に緊張が走る。

08 正義の使徒

何の因果か「フアミリア」総出でモンスターとして現界してしまった。そのことについて早い段階から諦めがついたのは冒険者としての経験と心の強さがあつたから。

それでも『異常事態』^{イレギュラー}に対して即座に平静になれたわけではない。

もし、言葉を発する事が出来なければ互いに殺し合つていた。平和的な解決に至る可能性はおそらく無かつただろう。

この点について、早期にそれぞれ声を——言葉を——出せたのは幸運であつた。——それと長年の戦闘経験が無ければ攻撃の手を止められたかどうかも怪しい。

(……火炎石……。こんなことをするのは「ルドラ・フアミリア」のジユラ・ハルマー以外に覚えがないわ。階層的にも自爆要員つて気もしない)

(……階層を……まで破壊したつてことは……、アタシらは死んでからまだそれほど時間が経つていないつてことか？ そんなに即復活なんてありえるのかよ)

上を目指す道を探しながら一〇匹のモンスターは右往左往した。合間に湧き水を飲みながら。

破壊された階層はゆっくりと修復しており、元の姿を取り戻すのに今しばらくかかり

そうだと推測する。

「……にしても……ここまで景気よく壊すとはな。誰か罠にかけられて潰れているかもしれねーな」

「……掘り出すのは無理そうね。……今の私達にはどうする事も出来ないけれど」

瓦礫が行く手を遮っているが団長である彼女であれば壁面を登るのはそう難しくない。

今の彼女達はモンスターだから。——といっても種族的に上がるのが困難な者が多い。

元冒険者となる彼女達は暗黒期に活躍した「ファミリア」の眷族達だ。本当ならもう一人居なければならぬが団長の捨て身によって生かされたらしく、この場には居なかった。

かつて迷宮都市オラリオに正義の名のもとに活躍した「ファミリア」の名は——
 【アストレア・ファミリア】

女性のみで構成された治安維持を担う武闘派集団だ。

赤を司るモンスターこと団長アリーゼ・ローヴェル。

副団長は極東から来たゴジョウノ・輝夜^{かぐや}。

小人族のライラ^{バルウム}。狼^{ウエアウルフ}人のネーゼ・ランケット。人間^{ヒューマン}のマリユー・レアージュ、リヤー

ナ・リーツ、ノイン・ユニック。ドワーフのアスタ・ノックス。アマゾネスのイスカ・ブラ。エルフのセルティ・スロア。

これらに末っ子であるエルフのリュー・リオンを加えた十一人で構成されていた。

(モンスターの姿が見えないけれど、上でまた戦闘が続きそうね)

(修復まで休憩する?)

「……皆さん、口数が少なくなりましたね」

「……戦闘続きで疲れて来たからな」

いつも団員を牽引してきたアリーゼでさえ荒い呼吸を繰り返し、辺りを警戒している。

満足な武器も無く、空腹と痛みに耐えながら誰一人欠ける事なく突き進めたのは団長が適時指示を飛ばしていたお陰だ。

慣れないモンスターの身体で自分達に出来ることは何かと僅かな時間の内に考察しながら。——それと彼女の勘の良さとか状況判断の速さも。

(モンスターなら天然武器ネイチャーウェポンが使える筈なのに……)

元冒険者の感覚のせいかな、それらしい鉱物とか掴んでも変化しなかった。それがまた心から余裕を奪う。

だが、大規模な破壊のお陰か、新規のモンスターが生まれる気配がない。おそらく壊

れている階層だけだとそれぞれ理解しながら、休憩できる者は壁際に身体を預けて一息つく。

「……一旦休憩しましょう。……武器無しの連戦は流石にきついわ」
 「賛成」

疲労困憊の団長の決断にそれぞれが首肯していく。

比較的広めの空間で久方ぶりの休息をとると一部が睡魔を覚える。

壁より生まれてから既に半日以上も戦い詰めだった。装備に余裕があればまだ少し進軍できたのだが――

身を削る戦いを強いられ、さすがに楽しくダンジョン攻略などできないと思い知る。

(……各団員達の増強を図りながら一人も欠けることなく進む事自体は上手くいつている。けれども……、それも長くは続けられない)

いくらモンスターの身体が頑強だとしても限界がある。なにより彼女達は他の冒険者からも狙われる危険を冒している。

周りを警戒しながら自分達の安全を確保するのは想像以上の難題である。

数分ほど沈黙し、周りの気配を探る。それぞれの耳には修復するダンジョンと水の流れる音が聞こえて来た。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

落ち着いたところを見計らい団員達の様子をそれぞれが眺め合う。

元人類だった者がモンスターとして生まれ直した。そんな情報に彼女達は心当たりがない。

何度も深層域まで行つた経験にも無いものだ。

(……死ぬ覚悟をしても本当に死ぬのは怖くて痛い。その結果が今の私達の姿だということのかしら?) でも、共通語コイネを喋るモンスターなんて……)

「二人ずつ死因でも公表していくか?」

「……結構惨むごたらしく殺されたことは分かっているんで、勘弁してください」

「……リオンは全員の死に様を見たわけでしょう? 仲間の肉片とかかき集めていたりするのかな……」

(……仲間の死に酷く混乱したあの子は……心に大きな傷を作ったはず……。他の冒険者と違って意外と繊細だから……。最悪、引退していてもおかしくないわね)

何しろリユーを除く全員が死んでしまったのだから。新たな団員を募集しているとさえ思えない。

それぞれが残された末っ子リユー・リオンの姿を思い浮かべる。

頭の固いエルフの少女。今頃どうしているのか、と。

何故か私達はモンスターになったのよ、と笑顔で会えるわけもなく。それでも上を目

指さなければならぬのは自分達の行^{わこな}つてきた事を見定める——または見届ける——ためだ。

生まれ出^いでたからには何らかの意思が関わっている。それが何かは分からないが黙ってまた死ぬわけにはいかない。

生きているからには生き足掻かなくては。

正義の使徒とは呼べない何かになり果てようとも。

「……リオンが無事かは分からねーが……。アタシらが最後に相手したあのモンスター……。結局のところどうなった？」

「私のスキルで爆散させた……筈よ。……例え生きていたとしてもある程度砕け散っているんじゃないかしら」

生前最後に相手をしたモンスターの姿を思い浮かべられたのは極わずか。多くは一瞬の出来事だった。

未知にして初見殺し。レベル4を多く抱えていた団員達を瞬殺する凶悪モンスター。もし、また現れたら勝てるか、と尋ねられたら無理と即答できる。

「リオンに会ったら慰めてやらねーと」

「……そうね。見たところ団員が全滅したのは確定事項だし……」

静かな時間の中でとりとめのない話題を交わし、それぞれ静かに息をつく。

既に五分経過した。気持ちも幾分か和らいだ。

まず彼女達は改めて自分達の姿を眺めた。

姿こそモンスターだが顔つきは割りりと人間寄りになっている。

ノインは半人半蛇。

セルティは有翼の歌人鳥。

マリユーは蠍が人型になったような半人半蠍。

イスカは青白い肌と額に赤い宝石が張り付いた竜女。

リヤーナは半人半鳥。

アスタは山羊の頭部を持つ人型モンスターである獣蛮族。

ネーゼは元々が狼人だった為か、それとも単なる偶然か、狼頭人だった。

桃色の髪の小人族だったライラは赤い頭巾をまとう小鬼の赤帽子。

極東から来た少女輝夜は全身が影で出来たような人型モンスターの戦影。

団長アリーゼは彼女の特徴ともいえる赤い髪の毛をそのままに、蜘蛛の下半身を持つ

人蜘蛛。

身体的特徴の多くに生前の名残がある。それと心無しか顔つきも。

元々の種族の影響があるのか、と言われればおそらく否だ。ネーゼを除けば殆ど関係が無いと言えるモンスターばかりだから。

(女ばかりで忘れていたけれど……)

(……私達、素っ裸なのよね)

(ウンコとか出るのかしら?)

「……それでいくつか話題を棚上げしていたけどよー。絶対に騒ぎになるし、この先どうするよー」

身体がモンスターになった。それだけでも彼女達にとつて異常事態だという自覚はある。真っ先に思いつくのは今まで倒してきたモンスターとの付き合い方だ。これに関しては襲ってくるものは敵だと身体が反応して今に至る。仲間意識は——団員達以外——特段芽生えてこない。

冒険者との邂逅についてもそれぞれ思い悩んでいた。モンスターの時と同じく戦闘は避けられない、と。

だからといって黙って殺されてやるわけにはいかない。生きている限り足掻くのが元【アストレア・ファミリア】の矜持でもある。

「その時はその時よ。……それにしても私達と同じように喋るモンスターって他にも居るものなのかしら?」

「……今までの経験からも出会い自体が無かったから……、正直分からねーな」

少なくとも元悪党の場合は仲良くでき無さそうだ、というのは仲間の共通認識だ。

友好的な相手かどうかは——やはり出会ってから考えることになる。

アリーゼは仲間の前で明るく振舞おうとしたがどうにも気分が乗らない。本人も少なからずモンスターとの身となった事に衝撃を受けていた。何より脚が多い。背面に大きな袋状の器官がある。上半身を常に起こしていないと何だか千切れそうな気がする。

様々な驚きを味わいつつ弱音を吐く暇もなく戦闘を続けていた。そろそろ本格的に泣きたくなってきた。

(……今更強がっても仕方ないけれど、仲間を不安にさせたくないのよね。……私はどうにも外面を良くしようとしてしまう。……この辺りの悪い癖は今まで通りのようね)
(……アリーゼの口数がいつもより少ねーな。こんな復活は想定外だから仕方ねーかもしれねーけど……)

(大人しい団長というのも珍しい光景ですね。見ていて微笑ましい)

(……こんなに疲れた顔をするアリーゼって見た事ないかも)

(元人間の面影があるからそう思えるだけで、実質化け物には変わらない)

しばし会話が途切れ、それぞれ胸の内で様々な思索に耽った。

考えなければならぬ事は多い。それらにこれらに対応しなければならぬと思うと気が重い、と誰もが抱いた。

現時点でモンスターだからといって自害する気は無く、他の冒険者に危害を加える気

「単なるモンスター討伐でこんなことをする奴は普通は居ない。……居るとすれば「ルドラ・ファミリア」くらいだ。回収し損ねた火炎石から見てジュラか奴の仲間の仕業だろうさ」

「……生き残ったりリオンに復讐でもしたのかしら？」

「リオンと決まったわけじゃねーが。相当根に持った相手に対する罠って線は濃厚だな。アタシもきつとそうする」

竜女ヴイヴルのイスカと半人半蛇アラミアのノインが瓦礫を少しずつ登っていく。空が飛べる種族である半人半鳥ハービーのリヤーナと歌人鳥セイレンのセルティは実のところまだ飛べていない。なので今の内にそれぞれモンスターとして出来ることを確かめたり、身体の調子を確かめていく。

元々はそういう種族として生まれたわけではないので身体感覚にズレが生じたまままだ。

腕を振るだけで空が飛べるほど人体は簡単に出来ていない。

(……常に空を飛ぶモンスターって相当体力を使うわよね)

(……下半身が蛇だと後ろの方で踏まれる恐れがあるし)

単なる獣人系は目立った特殊能力が無い分把握は早かったけれど、それでもそれぞれ四苦八苦しながら活動を続けて来た。

意気揚々と瓦礫を登るアリーゼは速攻足を滑らせて落下しそうになり、そんな彼女を苦笑しながら仲間達が支え、上へと押し上げていく。

見た目は大きい凶体だが体重はかなり軽い。

助け合いながら次の階層に行き、上への通路を探索する。

次の階層にも火炎石が僅かばかり落ちていた。だが、冒険者の死体は見当たらない。血臭があるのに。

全ての広間^{ルーム}を探索するわけにはいかなので見落としがあるのは否めないが、それでもおかしいと思う。

誰も居ないのは避難しているからだとしても死体の一つくらいはある気がしたので。

(……今更だけど、皆の動きがとても自然よねー)

(沢山の蜘蛛の脚とかどうやって動かしているんだろう)

「……蛇の方は膝を左右に揺する感じよ」

「上半身が這いつくばる形じゃなくて良かった。……何となくだけど元々の脚の感覚で動かしているわ」

と、半人半蛇^{ラミア}と半人半蠍^{バビルサグ}が感想を述べる。

青白い肌を持つ竜女^{ヴァイヴル}は額の寶石をしつかりと守っていた。こちらは最初から背中に翼があつたが脚はアマゾネス時代と同じく二本。

それほど悲観していないのは仲間が居るからだ、とそれぞれ思っていた。そうでなければ自害を検討していてもおかしくない、気がした。

「段々と見慣れて来たわね。昔からこの姿だったんじゃないかっていうくらい」

「元の姿に戻る方法はきつと無いぞ。……死に方が凄かったからな」

談笑しつつ身体に違和感もなく、気が付けば二五階層に到着した。

相変わらず破壊の痕跡があちこちにあるが冒険者の死体らしきものは見当たらない。

一体ここで何があったのか、予測も困難な状態だ。

次の階層への道を探していると上の方にモンスターが居る気配をアリーゼだけが感じた。

団員の中で勘の鋭さは一番だと仲間からも自分でも思っている彼女は警戒を強めるように指示する。

階層の崩壊もここより上には認められない。つまりモンスターが現れる可能性が高いということだ。

「……水棲モンスターじゃなくて良かった。今ならそう思えるけれど……。じゃあみんな、ここからまた戦闘が激しくなるわ。覚悟はいい？」

アリーゼの言葉に残りの団員は鬨こゑの声を上げる。

後戻りのできない戦いが再び始まる事を思いながら上を目指す。

意識に変化が無いかは各自で確認しつつ。

(……凶暴化は起きていないけれど、ウィッチ童女の宝石はさすがに取つたら不味いわよね。肉体変化も今のところ意識してできないようだし。……毒液とかどうやって吐くのかしら?)

もし毒液を吐くと口の周りが焼け爛れそうで怖いな、とアリーゼは思った。それと尻から糸を出すのがどうしても排泄物のような感じがして抵抗がある。

モンスター達はそういう事を意識せずに行使してくる。ある意味では尊敬に値すると評価した。

「……飛ぶの難しい」

「バツサバツサとしていただけで飛べると思つたのに……。みんなどうしているのかしら」

元々備わっていない器官を動かすようなものだから各自困惑していた。

攻撃する時は大きな翼で叩くはたのと脚の鉤爪を使うのだが格好がとても恥ずかしかった。歳若い女性が大股開きで足蹴にする、という方法が。

全員全裸である事を踏まえてもモンスターとして生きるのは難しそう、というのがほぼ共通の感想になりつつあった。

「輝夜はその点どうなの? 全身影になっているけれど」

「どうもしませんよ。人間時代の感覚で動けます」
ヒューマン

独特の発音で仲間に感想を述べる。

見た目が奇異だが行動に特段の違和感はない。ただし、モンスター特有の特殊能力のようなものは使えそうにない、と告げるところは他と一緒のようだ。

光りの玉の様なものが顔にあるが視覚に異常は無いという。

「脚が増えたけれど動かし方は特に問題ないわね。ちゃんと全部の脚に意識を向けられるわ」

「半人半蛇ラミアの長い尻尾もだいたい慣れて来たけれど……。腰下より先はまだ上手く動かせられない。何とか立ち膝歩きしたまま元に戻れないような感じなんだけれど……」

「有翼モンスターは……。とにかく、羽ばたくだけで腕がだるいです。後、何気に肩も痛い……。それと飛ぼうとすると息苦しくなるわ」

その点、人型モンスターであるネーゼ達は特に支障なく動いていた。ライラとアスタも。

見た目こそ変わってしまったけれどそれぞれ命にかかわるような危機感が無いのは確認した。

もし、水棲モンスターであれば呼吸困難や水の無いところでの活動に大きな問題を抱えていた筈だ。

(……喋るのが好きなアリーゼの口数もここまで減るとはね。そろそろ本格的に休ませないと身体がもたないかもな)

先頭に行く団長の足取りは頼りなく、何度かよろけた。

根拠のない元気を振り撒いていた彼女もモンスター化した事で想像以上の精神的、肉体的負担を強いられているのかもしれない、と輝夜達が思っていた矢先――

森に向かう途中で冒険者の一団を見つけてしまった。

見晴らしがよい場所なので――当然のように――相手方もこちら側には気づいた筈だ。

(……)ここまで見つからなかったのに……)

(今から走っても追いつかれるんじゃないか。……アタシら相当疲れているし)

(……アリーゼは意識が混濁しているのか？ フラフラしながら歩いているぞ)

まだ気持ち的に余裕がある仲間が人蜘蛛アラクネのアリーゼを守るように移動し、逃げ道を探す。だが、何処を向いても隠れられそうなどころが見つからない。

最悪、戦闘も止む無し、と覚悟を決めるころ――一人の団員が見知った顔を発見する。

「……あれって……もしかして【ロキ・ファミリア】？」

「……一番出会いたくない【ファミリア】じゃねーか。今のアタシらはモンスターだぜ。見逃してくれるとは……」

事情を話せば許してくれる。そんな甘い相手ではないのはライラだけではなく輝夜もネーゼも知っている。

暗黒期を生き抜いた強豪派閥である「ロキ・ファミリア」に慈悲は無い、と言い切ってもいくらいモンスターに対する対応は苛烈だ。当然それは「アストレア・ファミリア」も同様。ゆえによく理解していた。

戦闘は悪手。だからといって逃走も無意味。

モンスターとなった自分達に許される手段は黙って殺される事くらいだ。

「結果が分かっているなら……。寧ろ……。堂々としてようぜ」

ライラの言葉に他の団員達は諦めに似た吐息をつく。

否定する者は居ない。誰もが同じ考えに至ったからだ。例外は意識が混濁し始めたアリーゼくらい。

度重なる危機にスキルを使いまくった弊害が今になって襲い掛かっているようで、もうすぐ睡魔に負けてしまうと予想していた。

「渦中に飛び込むより休めるところを探そう。ここに居る奴らに見つかるよりマシだ」

「それでいいな、みんな？」

「……水浴びしたい……。後、お腹も空いた。味気ない魔石はしばらく遠慮したいわ」

地上での戦闘の後、数日かけて中継地点の一つに到着し、鋭気を養っていたところに不穏な報告が入った。

強大なクリーチャー、アルフィアから受けた怪我がまだ完全に癒えたわけではないが【劍姫】達の戦闘に支障はない。

(……親指からの警告は来ていない。……とするとまた『異端児』絡みか？ 彼らとの接敵で僕らの警戒態勢も随分と変化したような気がするな)

あまり深入りすると団員達の士気にかかわる予感はあるけれど、安易な暴力行為を許容することもまた出来ない。

モンスターは現在、固まって移動しており、冒険者に気付いても大人しくしていると
いう。

(……数は一〇体ほど。……アルフィアの一件からすると【アストレア・ファミリア】という線もあるな。特に赤い人蜘蛛アラクネが居た、というのが……。ダンジョンから生まれるのは僕達を知るモンスターだ。だが、あの怪人クリーチャーレヴィスは人型だった。あれも何らかのモンスターという線も捨てきれないが……。仮に人型であってもモンスターはモンスターだ)

(……二度ある事は三度ある、だったか?)

団長フィン・デイルナの側に居る王族ハイエルフのリヴェリア・リヨス・アールヴは疲れた様な

ため息を漏らす。

彼らは『異端児』^{ゼノス}と思しき個体をもし発見した時の想定をあまりしていなかった。

詳しい事情もギルドが秘匿したまま。それでも、少なくとも経験を得た以上は無視も出来ない。

「……もし、僕がモンスターになったら君たちはどうする？ ……そう問いかけてられている気がする」

「……想定したくない問答だな。自らの境遇を呪い、自害する。そんな潔い決断はきつと下さないだろう」

「儂らとていずれ死ぬ。その後の事までは考えとらんかったな。 ……後学の為に奴らから色々と学んでおくか？」

幹部の一人、ドワーフのガレス・ランドロックの言葉にフィンは苦笑を見せた後、若い幹部候補を呼ぶように指示を出す。すると数秒で一人のアマゾネスが駆け込んできた。少し後に彼女の妹と灰髪の狼^{ウエアウルフ}人の少年と金髪金眼の少女「劍姫」が来た。

彼らは包帯こそまだ巻いていたが怪我の大部分は既に癒えている。

「団員からの報告を既に聞いていると思うが……。新手の『異端児』^{ゼノス}だと思われる。 ……というか彼らも『異端児』^{ゼノス}という単語に覚えがないかもしれないけれど」

「……戦闘になるんですか？」

「相手側次第だね。……ところでティオネ」

にこやかな、苦笑を滲ませたフィンの問い掛けにアマゾネスの少女ティオネ・ヒリュテは即座にはいと元気よく返事をした。

顔以外の怪我は無く、既に戦線に復帰している彼女にいやらしい質問をする事に多少の罪悪感を覚えた。だが、彼らの返答も今後の為だと思えば耐えられる。

「端的に言うけれど、僕が死んでモンスターとして復活したら……、君はどうする？　こんな想定を今までしてこなかったから興味が出てね」

いつもは即答に近い返事をするティオネが言葉に詰まった。

妹のティオナと後ろで控えていた狼^{ウエアウルフ}人のベート・ローガ。「剣姫」アイズ・ヴァレンシユタイン達が小さく呻く。

あり得ない事態ではない。既に現実^{ウエアウルフ}にそれが目の前に現れている。

「凶暴なモンスターなら倒せばいい。深く考えなくて良かった。だけど、そういう考えが今後通用しなくなる時が来る。かといって全てのモンスターが安全だとは僕も思わないよ」

「【静寂】だから特別だった、とは私も思わないが……。判断基準を設けることは大切だ」
「……僕が小人族^{バルツム}以外になったら興味を無くすかい？」

「そんなことにはなりません。……団長の強さに惚れたので姿形、種族が変わろうと

……。……私は団長についていきたいです」

楽天的なティオナは仲良くなればいいな、と答えた。

ベートとアイズは無回答だった。フィンの予測ではモンスターとなっても敵なら殺す、かなど。

質問した当人も安易に死ぬ気は無いが人生何が起きるかは分からない。だからこそ、自分の死に方くらいは選びたいと正直な気持ちを告げた。

もし、モンスターとなったらきつと生き足掻くだろうね。それが彼の^{フィン}言い分だ。

「僕はどんな手段でも使う男だ。綺麗ごとなんて言わない。浅ましい^{バルクム}小人族さ。……種族が変わってしまうと本来の目的が果たせないから改めて考えなければならぬんだけど……。敵対した時、遠慮しては駄目だ。その時になったら僕はきつと君たちを殺そうと全力を出すと思う。だから君達も僕達の言葉に安易に惑わされず、行動してほしい」

「……はい」

ベートは顔を逸らし、アイズは腰に佩いた剣に手を添える。

それぞれから満足のいく答えが出るとは思われないが待っている余裕も無いので次に進むことにした。

「……改めて説明する。下層からモンスターの集団が現れた。もし、人語を介するなら

……【アストレア・ファミリア】の可能性がある、と僕は予想している。あくまで僕の勘だ。テイオネ達やベートは噂くらいしか知らないだろうが……。アイズ、君に確認してきてほしい」

「……お前が行かないならラウル達に行かせる。……それとも顔見知りかモンスターだと怖気づくのか、お前でも」

リヴェリアの言葉に眉根を寄せて不満を表すアイズ。

確かにモンスターは全て殺す。またはモンスターのせいで誰かが泣くなら殺すと言った気がする。

そんな自分に【アストレア・ファミリア】かどうかを確認して何の意味がある。モンスターならば殺すだけだ。

気持ち的にはそうだが、本当に出来るのか不安もある。

付き合いこそあまり無いが彼女達とは知らない仲ではない。特に件の【ファミリア】の生き残りであるリュウ・リオンとは度々酒場で会うから。

(……あのエルフの仲間を私は殺せるの？ 【静寂】はそもそも敵だったから戦えたけれど……)

目を瞑り、唸り声をあげて——とうとう腰に佩いていた細身の剣を地面に向かって投げつけようとしたが堪え切り、リヴェリアに押し付ける。

武器を持つっていると不穏な事しか浮かばない。であれば無防備になればいい。

モンスターを殺す武器を持つているから迷うのだ。そもそも自分は武器が無くても切れ味の鋭い剣つるぎである。そう自分に言い聞かせる。

(ベル・クラネル以外にも彼女を変ええる存在が出来たようだ)

(……頑張れ、アイズ)

「……戦闘になつても良い。お前が思う通りに行動したらいい」

「……行つてきます」

踵かかとを返すアイズにフィンは黙つて見送つた。

残つたテイオネ達には他の団員の見張りを頼んでおいた。それと食料などを調達するように、と。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

【静寂】から受けた傷を隠す為、アイズは額に包帯代わりとしてバンダナを巻いていた。相当強い一撃を貰つたために安物の回復薬ホーションだと傷跡が残つてしまう。けれども、あえて許容した。

再戦を決意しようとした時、敵の死が齋もたらされた。——とても悔しい気持ちになつたのは記憶に新しい。

あれほどの強敵が魔石が砕けただけで灰に還つたなど、到底許容できるものではない。

い。

だからこそ今でも胸の内に怒りが渦巻いていた。ただし、それは——
アルフィアがモンスターや『異端児』^{ゼノス}だったから、ではない。
モンスターはモンスターで憎いことに変わりはない。

負けっぱなしで終わったことに腹を立てていた。

レベル6に至った自分がまだ弱いと思ひ知らされてしまった。

(……モンスターに怒っているんじゃないやなくて敵に怒っている。……ちゃんと私は敵としてあの女の人を見ていた。……それは正常な事?)

今までの経験からモンスターを執拗に狙う事で怒られる場面は多々あった。いつもいつも誰かしら邪魔をする。

今回は障害となるベル・クラネルの姿は無い。そして、何故か愛^{デスベレイト}剣を置いてきてしまった。

無手で敵と思われるモンスターに向かう自分——

今までであればあり得なかった。だからこそ戸惑いを覚える。

一八階層に来るまで倒せなかったモンスターは居ない。手加減もしていない。それなのに気持ちごとく揺らいでいる。

(誰かが悲しんだり傷ついたりすれば私はモンスターを殺す。……そのモンスターが私

達のように悲しんだり傷ついた事で助けを求めるのなら私は……。ベルは……。そんなモンスターを守る側に立っている。でも、だからといって全てのモンスターを守ろうとは思っていない)

仲間の為ならばベルは今でもモンスターを倒すらしい。直接見えないが仲間の情報ではそういう事になっている。

今の段階では答えは出せない。

アイズの人生はモンスターへの復讐なのだから。それをすぐに覆す事は出来ない。

「……あれが……」

進路上に屯たむろしている一団を発見する。確かにモンスターが身を寄せ合って大人しくしている。というか眠っているように見えた。

冒険者が来ることを分かっている。

アイズが歩みを進めても相手側に変化は無い。迎撃態勢に入っているわけでもなく、赤い蜘蛛のモンスターを囲むように地面に座り込んでいた。

武器を取ろうと手を伸ばすものの腰に剣は無い。

(……数は一〇。この辺りに出てくるモンスター以外も居る。同じ種族は居ないみたい)

更に近づくと何匹かのモンスターがアイズに顔を向けた。

雰囲氣的に——確かに懐かしい気配がある——見覚えがある一団に思えた。それがとても不安を呼び起こす。

モンスターと親しい雰囲気になる自分が怖い。だが、ベルは彼らと手を取り合った。眉根を寄せつつ危険か安全かの判断だけでもしなければならぬ。

(……赤い人蜘蛛アラクネ。眠っている？ 他は戦影ウチシヤドウ、赤帽子レッドキャップ。深層ルイガールに出る狼頭人。それと
フオモール
獣蛮族……。凶暴な顔つきのモンスター達が疲れた表情を見せているし、敵意も無い……)

怯えは無いものの嘲りも無い。疲労困憊でどことなく諦めているように見えた。

ベルと共に居た『異端児ゼノス』達も表情は豊かだった。

それと——

(おしっこ漏らしてる……。襲う一辺倒だったモンスターも出るんだね。……そうじゃない。ここまで来た彼らの目的を聞き出さないと……)

顔つきに見覚えがない。というかモンスター寄りの姿のせいか、知り合いの印象が薄い。

いつも倒してきたモンスターの顔にしか見えない。

身体が違うから仕方が無いのかもしれないけれど、自分の記憶にある「アストレア・ファミリア」の団員の顔と重ならない。

戦闘続きで考察し損ねた事柄にライラは思い至る。

自分達の最期の瞬間には多くの死体が二〇階層以下に転がっていた。——なのにその死体が見当たらない。

階層の崩壊で復活が死後すぐだと勘違いしていなかったか、と自問する。

もし、その想定がそもそも間違っていて——何年も経過していたとしたら。

だからこそ、合点がいく。

復活がそんなに早いはずがない事に。

アリーゼを除くモンスター達の視線が美貌の冒険者に集まった。

見られているアイズは相手側が何だか納得しているような優しい顔に見えた。雰囲気嫌悪感は無い。

なんと形容すればいいのか、温和なものと言えいいのか。温かみがあるのは伝わった。

(……え!? ……え!? マジで【劍姫】ちゃん!?)

(すっげー美人さんになってるー!)

(……あー、何となく面影あるわー)

思い至った仲間達が喜びの声を上げ、それに驚くアイズ。

表情を表せられない輝夜も見違えるようなアイズの姿に何度か頷いていた。

(……静かにしろ、アリーゼが起きちまう)

(そうだった)

「……えと、私の言葉、分かりますか?」

と、アイズから声をかけた。

モンスターである『異端児』と言葉を交わした経験が役に立つとは——彼女も思わなかった。

話しかけられた方は互いに顔を見合わせた後、一匹のモンスターが前に進み出る。そうするとアイズが警戒の為に一步下がった。

「……ああ、分かるぜ。こっちは疲労困憊で戦闘の意思は無い。煮るなり焼くなり、そちらに任せようと思っていたところだ」

流暢に喋る赤帽子レッドキャップの言葉にアイズは思わず呻く。だが、声に聞き覚えが無い。というか印象が薄くなっているので思い出せなかった。

「アストレア・ファミリア」の団員達との面識はある。だが、親しく話すほどの仲ではなく、会話を交わした記憶が残っているのは——おそらくリユー・リオンくらいだ。次が団長のアリーゼ・ローヴェル。後はどうしても思い出せない。

発色の良い赤い色の長髪の団長はとも元気で快活な女性で印象が強く残っている。

「……それで? 喋るモンスターを目の前にしてお前は どうする? アタシらもこんな

姿になって混乱してんだけど……」

そう言葉をかけるとアイズはしばし唸った。

前例をいくつか見てきたとはいえ未だに頭では理解が追い付かない。多くはどうして、という疑問だ。——だが、それは相手も同じ。

もし、逆の立場であれば自分は無害だと主張して信じてもらえるのか、と考えれば否だと即答できる。

モンスターを倒すのが冒険者の仕事だ。それを急に変えることが出来るのは——ベルのようなお人好しくらいだ。そして、自分はそのまでのことが出来ない。

「……そういえば、その赤いモンスターはどうしたの？」

「疲れて寝ている。……出来ればこのまま寝かせてやりたい」

改めてモンスター達を観察すると身体中傷だらけだった。お漏らしを除けばどれも眠そうな顔になっている。いや、三匹ほど途中で寝てしまった。

武装したモンスターである『異端児』と違い、このモンスター達は武装していなかった。だが、共通語コイネを使っている。

アルフィアと同じく別の場所で生まれたモンスターだと推測する。それも元冒険者の記憶を持った——

アイズは唸りつつあれこれと考えを巡らせ、右往左往する。戦闘以外で頭を使う事が

無かった彼女は煙りが出るほど悩み抜いた。

都合の悪い壁にぶつかる度にベルならどうすると自問する。

そう。ベル・クラネルなら平和的な解答を導き出す。あの子はとても優しいから。だが、自分は彼のような選択を選べない事も理解していた。

【静寂】という分かりやすい敵対者ではなかった場合の正しい答えは——

更に唸つてみたものの正しい答えとやらは出てくる気配がない。

項垂れるアイズの様子を見て物騒な結論に至るんだらうな、とライラ以下が絶望感に浸り始める。それでも彼女が頑張つて導き出した答えなら——もはやここで終わつてもいいかな、と思わないでもない。

せめてリユー・リオンが今頃どうしているかだけでも教えてくれれば無駄な抵抗をしないと約束できる。

ライラ達が諦めに似た感想を抱き、身体から力を抜く頃、答えが出ない事に苛立ったアイズの身体から暴風の様な魔力が発生し、モンスターの何匹かが後ろ側に転がされた。

金色の瞳を黒く染めつつ彼女は唸り声を大きくする。

(……勝手に暴走状態になつてんぞ)

(……ああ、やつぱり【劍姫】ちゃんだわ。この感じ懐かしい)

(前に会った時よりも強い気がする。……レベルいくつかしら?)

一般的な冒険者であれば「劍姫」の今の状況を目の当たりにすれば恐れ戦く。おの
モンスター達の反応は違った。

正反対と言っても過言ではないくらいに。楽しみに彼女を眺めていた。

強者と触れ合う機会が多かったライラ達からすれば「猛者」おうじゃを目の前にしても余裕を持った態度で臨める。——それが例え秒殺の憂き目に遭うとしても。

「そちらも私達の様なモンスターと接敵してきた経験があるようですね」

輝夜の言葉に吹き荒れていた暴風が消し飛んだ。そして、アイズは凶星を突かれて呻きながら軽く仰け反る。

分かりやすい反応に輝夜は思わず苦笑した。

見た目は成長しても中身はまだ子供のようにだ、と。

09 鮮血のアーゼ

喋るモンスターの方が友好的な『異端児』ではない。そう【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインは——何となく——理解していた。

金髪金目の少女は少し先に屯たむろしているモンスターの集団に——精神的に——驚かさず、気持ち揺らいだ。

武器を持っていたら確実に自棄やけになって攻撃していた。

先日の【静寂】のアルフィア・ストラディの時といい、判断に迷う相手ばかり現れる。(……敵なら倒せばいい。そんな分かりやすい図式ばかりじゃない事は分かっているけれど……。こうも立て続けに判断に迷わされるとは思わなかった)

威圧のつもりで放った魔力に対して相手は動揺を見せていない。寧ろ喜んでいるようにさえ。

もし、【ロキ・ファミリア】の団長である小人族バルウムのフィン・デムナの言う通りモンスターが元【アストレア・ファミリア】なら敵対する意味がかなり無くなってしまふ。

フィンも一目を置く冒険者達だから。少なくとも【フレイヤ・ファミリア】と違って敵対的な印象を持っていない。

そんな相手を一方的に斬りかかる事は今のアイズには出来ない。

(……もう五分は経過したか)

ウォーシャドウ レッドキャッツ

戦 影と赤帽子が同じ言葉を思い浮かべた。

脅威が目の前にあるのに赤い人蜘蛛^{アラクネ}アリーゼ・ローヴェルは完全に熟睡したまま。

いつもお気楽な女性ではあったがここまで無防備になる事は滅多にない。もしかして出来ないのでは、と疑念を抱かせるのだが――

ライラとゴジョウノ・輝夜は寝息を立てるアリーゼに何が出来るのだろうか、と今更ながら思った。

赤いのは髪の毛と下半身にある模様部分。上半身はモンスター特有の青白い地肌。というか裸だ。

無数の脚はくすんだ黒。顔つきは僅かに生前の面影があるかどうか。

知らない者が見れば間違いなくモンスターとして処理する。

「……もう一度聞くけれど……、言葉が分かるのは……全員？」

復活したアイズが再度問い掛けて来た。それに対し、ライラと輝夜は揃って頷いた。

信じるかどうかはアイズ次第。

ネーゼ達も疲労の蓄積で眠そうな顔になっている。

「あと、皆疲れが限界に来てるんで。……寝かせてやってくれないか？ 運が良ければ

……、そのまま永眠するかもしれないけど」

一匹、また一匹と力尽きる様に眠りに落ちていく。

水と魔石以外口にせず、空腹も相まって睡魔にあっさりと負けてしまう。モンスターとしてはあり得ない事態かもしれないが――

(……今が好機……。でも、そのまま攻撃していいの？ 冒険者なら当然のことだけれど……。助けを求めるほどの弱者ではないから弱音を吐かない？ これは……。どうすれば……)

弱者の救済ならベル・クラネルも手を差し伸べるかもしれない。そうでなかったら黙って見逃がすのか。敵対者なら攻撃するのか。

様々な選択肢が新たに生まれた。

質問に素直に答えているし、襲つても来ない。それどころか目の前で眠りについていく。

「今度はこっちの質問にも答えてくれると助かる……」

「……ん。分かった」

「……お前、歳いくつだ？」

「？ 一六、だけど……」

(……えーと、アタシらが知ってる【剣姫】は確か一〇歳くらい……。最低でも五年か六

年経っているってことになるな。……年頃のお嬢さんになったんだな。小人族バルウムだったから歳聞いてもあんまり変化しないからな)

(……へー。あの子が一六になるとこんな風になるのか……)

アイズの年齢から大体の予測が固まり納得していく。

「ルドラ・ファミリア」との抗争から大体五年経過した。とすれば階層に徘徊している筈のモンスターも既に消滅した後だと推測できる。だが、あの崩落が起きた理由は不明のままだ。

ダンジョンは穴こそ空くが大きな崩落を起こす事は無いと言われている。ライラ達の記憶ではそうだった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

懸念の一つが解消されたことでライラ達はアイズの出方を窺う。

情報だけ知っても事態が好転したわけではない。自分達が納得しただけだ。

目の前には唸る少女アイズがモンスター軍団を見据えている。

「そうだ。……アタシらの目的が聞きたいんなら寢床を寄せ。別に逃げたりしねーし、攻撃したりしねー。それくらいは約束してやる」

「……ん」

(……【静寂】と同じくよく喋るし賢い……。それに……。未だに攻撃的な様子を見せな

い)

もし、モンスターがアイズの知る者達ならばある程度信用できることになる。

正義を司る「ファミリア」の眷族とは浅からぬ付き合いがあるのも事実。それと次々と眠りにについているモンスターを見て、黙っていると日が暮れそうだと思った。

見極めに時間をかけすぎている。きっと保護者であるリヴェリア・リヨス・アールヴが怒る。

いつまで尋問に時間をかけているんだ、と。

「睨めっこしていても時間の無駄だ。もっと建設的な話しをしようぜ」

「け、けんせつ?」

「早い話しがこれ以上の問答は不毛って事だ。もう、みんな限界だって言っただろう。……ろくに寝てねーんだ……」

言い終わった後、コテンとライラが眠りに落ちた。それを皮切りに残りのモンスターも静かに眠りについていった。

自分達にとって顔見知りである【剣姫】の事が知り得ただけで気持ち的に満足してしまい、睡魔に負けてしまった。

モンスターとして生まれ出でて無理に強がってきたがアーゼ達はそれなりに精神的に負担を抱えていた。幾多の困難を乗り越えて来た彼女達も休息せずに冒険などで

きない。

(モンスターが目の前で眠った……。いつもならすぐに襲い掛かってくるのに)

無防備な姿を晒すモンスターを倒す絶好の好機。普段であれば姿を見かけたただけで攻撃に移る。

武器を持っていなくともある程度倒すべをアイズは身に着けているけれど。

両手に力を込めて唸るだけで彼女は動こうとしなかった。

出来なかつたわけではない。考え無しにモンスターを討伐してきた自分に迷いを覚えていたからだ。

ベル・クラネルが竜女ヴァイヴルを庇った姿が目蓋にまだ焼き付いている為に。

最初こそどうかしていると思つた。次は自分達の上している事に戸惑いを覚えた。

——騒動の後もベルは積極的にダンジョンに潜り、モンスターを倒している。

あれは結局のところ何だったのか。——いや、どうしてベルを信じてやれなかつたのか。

何の理由も無くモンスターを助ける訳が無い。そこまで愚かならアイズはもつと早く見限つていた。

(……【静寂】のアルフィア。人語を介し、私達のかつての敵……。それが何故かモンスターになつた。……元々モンスターみたいな人だつたけれど……。今回は誰も殺さな

「アイズの指示に従ってくれ」

「……はい」

相手がモンスターということでも団員の不安が払拭されたわけではない。それらについても団長として幹部として考えなければならぬと思うと気が重い。

今のフィンに言える事が多くないのも事実。

幹部からの指示もあり、モンスター達をすぐさま簡易テントに移動させることになった。

「ロキ・ファミリア」だけならば野ざらしでも問題が無い、が一八階層には他派閥の冒険者が大勢生活している。それらに見つかると騒ぎが大きくなるし、良からぬ輩やかからの邪魔も入りやすい。

(……言葉を話すモンスターがこれからも生まれると混乱が生じる。……だが、最初はそういうものだ。変化を受け入れるか拒否するか……。つまるところ僕らが一つ一つ判断していくしかない)

だが、とフィンは疑問を覚える。

ベル・クラネルが特別だとしても今年も立て続けに異常事態イレギュラーが続いている気がする。混乱期に遭ったオラリオも相当なものだった。特にダンジョンがらみは。

(唐突に発生したわけではないだろうけれど……。ベル・クラネルが立て続けに騒動を

リリルカ・アーデはダンジョンを降^{くだ}っていた。

のんびりとしたものではなく割と駆け足気味に。

小人族^{パルム}である彼女は「ステイタス」的にも彼らより劣るので荷物はオツタルが背負い、ベルはリリルカを背負っていた。

彼ら三人と共に付いていく同行者は他にもおり、「フレイヤ・ファミリア」の団員にしてエルフの男性ヘディン・セルランドだった。

到達目標階層は二七層より下、ということ以外明確に決まっていない。

(……「フレイヤ・ファミリア」と合同探索する手続きがすんなりと済んだのは良いのですが……)

不安を滲ませるリリルカ。

手続きはオツタル達——事務手続き自体は後から来たヘディンが行^{おこな}った。

ベル達は正体を隠して同行する事になり、外套を頭から被った状態でダンジョンを降りることになった。オツタル達と一緒にいうだけで色々と面倒くさい事態になるに決まっている。

他の仲間を連れて行かないのは向かう階層の都合だ。少人数の方がオツタル達にも都合がいい、という意見に賛成したからだ。

「仲間が居た方が【経験値^{エクセリア}】を稼ぎやすいかもしれないが、今回は悠長に付き合っている

わけにはいかない。その代わり二〇階層以降から出てくる素材を回収する」

「は、はい」

寡黙なオツタルと違い、エルフのヘディンはリルルカの疑問に淀みなく答えてくれた。ただし、表情はどうにも苛立っているようだった。

他派閥の「ファミリア」と共に行動するのは主神フレイヤの命令だからこそ我慢している、という不満がありありと顔に出ていた。

駆け足を止めず、呼吸も乱さずに喋る彼らに驚きつつリルルカは懸命に情報を集めようと努力した。対するベルは先行する大きな身体のおツタルの動きを見逃すまいと観察し続けていた。もちろん、周りの状況も疎おろそかにしないように。

見かけによらず脚は早く、憧れのアイズ・ヴァレンシユタインに引けを取らない。

(……必要最小限の動きでモンスターを打倒しているけれど、どれも魔石を確実に粉碎している。……一時間もかからずに五階層を走破したし……)

(……しっかり付いてきているな。……アレンであれば確実に置き去りにしていた)

神フレイヤに注目されているベル・クラネルは今のところ無駄口を叩かずにいる。リルルカのように質問攻めにしてくると思っていたがわきまきちんと弁えているところに感心した。

魔石をどうするか、それはオツタルも分からない。ただ神フレイヤの命令に従うの

み。

同行者であるヘディンも上層だからか、特に何も言わずにいる。

そして、更に二時間が経過する頃にミノタウロスが現れる階層にたどり着く。だが、彼らは止まらず襲ってくるモンスターを作業のように打倒していった。

ベルも見ているだけでなく自分に近いモンスターを倒していく。

レベル4である今、ミノタウロスに対しての恐怖心は無く、しっかりと戦えるようになった。つい半年前までこのモンスターと出会う事に恐れを抱いていたのが嘘のようだ。

(……だからといって一齐に飛び掛かれると困るけれど……)

リリルカを背負った状態だったが怪我もなく、攻略に集中できた。

階層主の一つ前に現れる虎の様なライガーファングの群むれも難なく撃破。

次の階層に現れるゴライアスは既に討伐された後だったようで、出現しなかった。

そして、安全地帯セーフティポイントである一八階層に到着した。



快進撃を続けて来たので、そのまま進むと思われたがオツタルは休憩すると小さく呟いた。

今回、同行するにあたってフレイヤはベル達の身の安全を優先するように指示を出し

ていた。その為には彼は^{オツタル}大して疲労していないにもかかわらず休憩すると言った。

ヘデインも異見を述べずに簡易テントの制作に入る。

宿場街^{リヅイラ}の宿を使わないのは秘密裏^{おこな}に行う作業の都合だ。余計な詮索を避けるために

街から離れた位置に陣取る事を決めていた。

迷宮都市オラリオ最強の「ファミア」と呼ばれている「フレイヤ・ファミア」の活動はリルルカの情報でも謎が多い。

治安維持なのか探索なのか。常に敵対「ファミア」と抗争しているわけでもないし、ギルドからの要請に従っていること以外の活動内容は分からないと言ってもいい。

（強いとは思っていましたが立ち止まらずにここまで降るとは……。深層までこの調子かもしれませんね）

個人主義が多い「フレイヤ・ファミア」がまとまって行動するのは都市防衛くらい。

普段、ダンジョンに潜る機会も少ないはずなのにどうやって強くなっているのか、興味があった。

予想としては一人で深層域に向かう。——これをベルに例えると間違いなく主神であるヘステイアは慌てるし、そんなことを許しはしない。だが、それを許しているのがフレイヤだ。

一見、弱い眷族がどうなろうと知った事ではない、という非情さが伺えるが——本当

にそう思っているのかは分からない。

「……オツタル様達はよくダンジョンに潜られるのですか？」

「……いや。……俺達は常に主神の警護だ」

昼食の用意を整えながらオツタルは呟くように言った。

小さなリルカの言葉に答える気は無い、とでも言うのかと彼女は危惧したが普通に返答があつたので驚いた。

ヘデインは睨むような視線で明らかに話しかけるな、という雰囲気があつた。

(……【おうじや猛者】オツタル。【ヒルドスレイヴ白妖の魔杖】ヘデイン・セルランド。弱小【チャンスファミア】のすぐ目の前に彼らが居る。……この機会を逃すのは大きな損失なのですが……、何を聞いたらいいいのか……。社交的な気配がありませんし)

団長であるベル・クラネルもオツタル達を気にしながら食事の用意を整えている。

罵倒が出てくると思つたが手際がいい為か、叱責の言葉は飛んでこない。

顔つきで言えばヘデインの方が神経質に見える。——彼がエルフだからそう思うのかもしれない。

(……強者が目の前に居るのに何も尋ねないのはかえって失礼かもしれない。減額の見返りに色々聞いた方がいいのかな?)

火の様子を見ながらオツタルに視線を向けるベル。

アイズと違い、彼の行動は謎に包まれている。名声こそ今回の探索の為に調べてきたが戦い方や細かな『スキル』などは分からずじまい。レベル7で猪人ポアズで背が高く
て――

憧れる人で言えばごく最近になって知ったばかりという事にも驚く。それくらいオツタルとの接点が無かった。

(どうすればレベル7になれるのか。……アルフィアさんの言葉を借りるならば【猛者おっしや】は同じ冒険者と戦ってきた事になる。暗黒期と呼ばれる時代に活躍した冒険者の多くは対人戦を行っておこなきた。モンスターではなく人と……)

時には命を奪う事もあっただろう。だが、殺し合いを良しとするような残忍さは感じない。あくまで都市防衛の観点からの戦闘であつた筈だ。

ギルドも殺人を良しとしているわけではない。力なき住民を守るための力の行使を容認しているだけ。

今まで出会つた上級冒険者の多くが尊大な態度であるのもその辺りの事が関係する、と予想する。

【ロキ・ファミリア】に所属するベート・ローガもその辺りの経験を経ているから弱者に敵しいのだと思える。

(……僕は仲間を守る為に戦うことは出来ても命のやり取りをする覚悟は出来ていな

い。……だからこそ異端児ゼノスを守ろうとしてしまった。甘いのは分かっている。……今の僕には学ぶことがとても多い)

苦悩するベルの視線を受けていたオツタルは気づいていたが黙っていた。質問されれば答える。だが、自分で答えを出そうとする者に余計な気遣いは無用だと判断していた。

武人である自分に出来ることは武器を通した対話だ。それ以外の事は分かる範囲でしか言えないし、出来ない。——リリルカからの質問のように。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

気まずい空気に支配される中、昼食の準備が整い、静かな時が流れる。

ベルが全く言葉を発しないのでリリルカがため息をつきつつ好き嫌いは無いかと聞いてみた。

オツタルは比較的答えてくれるがヘーディンは無視した。

(……融通の利かないエルフですね。典型的な気難しいエルフそのままじゃないですかー！)

【フレイヤ・ファミリア】の情報はとても貴重だ。いずれ相対するかもしれない派閥の付き合い方などを模索する上ではリリルカとて攻めに行かないわけにはいかない。

【ロキ・ファミリア】と違い、団員全てが敵意に満ちていると言ってもいい。——オツ

タル以外は。

「そもそも「フレイヤ・ファミリア」は殺伐とした「ファミリア」なんですかね。フレイヤ様がその中に居てもとても楽しそうには思えないのですが……」

リリルカの自棄やけになったような言葉にオツタルが凶星を突かれたように唸った。

主神の為に日夜殺伐とした鍛錬を続けている。それが女神の喜ぶ事だと信じて続けて来た。だが、確かにここしばらく主神の心は側に居る白い兎ことベル・クラネルに傾いている。

女神フレイヤは気に入った人間を見つければ手に入れようと画策するのが日課の様な神だ。オツタルを含めた眷族は自分に振り向いてくれるように努力を欠かさない。

〔ラビット・フット白兎の脚〕はレベル4……。見た目が愛らしい、というだけの理由でフレイヤ様は手に入れようとしている？ それに嫉妬を覚えている眷族も居ないわけではない〕

「……神へステイアは眷族に何を求めている？」

おもむろ徐に問い掛けられ、ベルとリリルカは大袈裟に驚いた。いや、今まで物静かだった為
に反応があるとは思わなかった。

ヘティンも僅かに眉を上げて横に長いエルフ耳を向ける。

「神様……、ヘステイア様は賑やかな「ファミリア」を求めているようです」

素直に答えたのは団長のベル・クラネル。

大柄なオツタルの偉容いようにも臆せず、はつきりと答えた。

「あれをしろ、これをしろといった命令はされません。……僕が強くなるのはあくまで僕自身が願った事です。リリもヴェルフも命みことさんも春姫さんにも頭ごなしの命令をすることはありません」

「そうですかー？　ヘステイア様はベル様を独占しようとして異性との触れ合いを禁止するようなアホ神ですよ？　処女神なのに」

「……そうだっけ？　厳密な規則は作らなかつたよね？」

「作られてたまるもんですか」

聞いている分には微笑ましいが「フレイヤ・ファミリア」の中では主神より眷族の方が独占欲があり、団員でありながら敵同士という有様になっている。

対する「ヘステイア・ファミリア」は良く言えば仲良しごっこ。悪く言えば弱者の集まりだ。——オツタルの中で適切な例えが出なかつた事に本心は気まずさを覚えて発言を控えた。

格式で言えば「フレイヤ・ファミリア」はかなり高い。それゆえに団員もそれに見合つた振る舞いをするのが当然だと思っている。

（低俗と評される「ファミリア」の団員にフレイヤ様は熱中されている。格式以外の何が

【白兔ラビット・フットの脚】にあるのだろうか。俺はその神意が知りたい）

常に最高を求めている団員達には妥協という懦弱な考えを持つてはならない。

「お言葉ですがヘディン様。貧乏〔ファミリア〕に用意できる素材には限界があります」「ふん。日頃からなあなあで済ませて来た貴様らの舌ではその程度だろうよ」

(……使ったことが無い高級素材を渡されても……)

(だいたい何なんですか、この見た事も聞いたことも無い食材というか調味料の数々は……。調理方法が分からない素材を渡す方がどうかしています)

高級なのだろうけれど生かすべを知らない〔ヘスティア・ファミリア〕に扱えないのは火を見るより明らかである。寧ろ、持つてきた本人が懇切丁寧むじに説明する義務があるとりりルカは睨みながら主張する。

彼女の意見にベルは苦笑し、オツタルは頷きながら感心し、ヘディンは顔を背けて鼻を鳴らす。

言葉遣いとか話し方からオツタルは戦い以外では紳士的であった。ヘディンは紳士には違いが無いのかもしれないが、鼻に就く貴族意識があるエルフというイメージを受けた。

直接相対しなければ分からない〔フレイヤ・ファミリア〕の眷族達。

ベルもりりルカも文句を言いつつ貴重な体験を忘れないように脳裏に焼き付けていた。

それから食事を終えて水辺で食器の洗い物をしている時、何処からか大声が聞こえた。

それは喧噪というより悲鳴に似たもの。ベルは洗い物を途中でやめ、濡れたままの食器をリリル力に渡し、警戒するように言いつける。

オツタル達も悲鳴を聞きつけ、武器を手に取り警戒態勢に入っていた。

(……今のは？ 結構遠いところからだと思うけれど)

第一八階層は僅かなモンスターが生息する以外は比較的安全な場所だ。何度か来ているベル達も承知している。

声が聞こえた方向は宿場街リヴィラから離れているのは何となく分かった。

悲鳴と言えどこの階層はとても広く、音が反響する程狭くない。ゆえに自分達にほど近い場所という事になる。

高額な宿泊料を避けて独自に野営している別の「ファミリア」から、となる。

(……また聞こえた。今度はこっちに近づいているような……)

周りに迷惑が掛からないように。また、他派閥に見つかりにくい森の中にベル達は拠点を作っていた。——おそらく相手方もそうしている筈だ。

いくつの「ファミリア」が居るのか分からないが、何らかの事態が起きたのは間違いない。なさそうだ。

最初の声を聞いた時に感じたのは痛々しい悲鳴。モンスターに追われているのか、暴漢なのかは分からないけれど、相手次第では介入も辞さない。ベルは腰に差してある黒いナイフに手をかける。

警戒態勢に入るベルに倣ってか、オツタル達も身構えていた。時間が無いから何もするな、という意見も無く。

リリルカは近くにある木に登り、今も聞こえている声の出どころを探る。

「……何かが近づいてきます。……赤い……怪我をしている何か……、後方にもう一つ、いえ……多数の人影があります」

「……追われているの?」

「そのようですが……。追っているのは……、【剣姫】様のです」

彼女の名前が出た時点で追う側が「ロキ・ファミリア」なのは確定する。

レベル6である彼女が追われる側というのは考えられない。少なくともベルの知る【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインは狩人の様な性質がある。

そして、続け様に報告される内容から追われているのはモンスターである、と。

「ベル様。モンスターに接敵してみてください。オツタル様達は……、出来れば待機を……」

木の上からの指示にオツタルとヘーデンは黙って首肯した。ただ、リリルカの顔は追

跡の方に向いているので、無視されたと思つた。しかし、ベルは彼らの様子が分かつたので苦笑しながら移動を開始する。

荷物を持たないベル・クラネルの速度は大手「ファミリア」から見ればとても素早く目を見張るものがある。それをリリルカが確認すると——自然と——感嘆の吐息が漏れた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

走るモンスターは赤い長髪を血で濡らし、元々青白い地肌が赤く染まり、全身が真っ赤になりつつあつた。それも美しさからかけ離れたどす黒い色合いの赤に。

上半身は人間と酷似した形で下半身は無数の脚を持つ蜘蛛。

人蜘蛛アラクネと呼ばれる姿なのだが、今は幾分か様子が変わつていた。

何かと言われれば顔だ。

元々の人蜘蛛アラクネは赤い瞳を持つ凶暴なモンスターで、それは今走っているモンスターも同様だつた。ただし、瞳は二つだけ。だが——この赤い人蜘蛛アラクネの額は無数の切れ目が走っており、そこから血が止め処なく流れている。それどころかいくつかの裂け目から第三、第四の瞳の様な赤くて丸い眼球が覗いているような——

元々の瞳と合わせれば全部で八つとなるだろうか。

走る人蜘蛛アラクネは急に出来た瞳の痛みに我を忘れていた。

額が割れるような痛み。頭が割れるような痛み。今まで味わったことのない激しい痛みに混乱し、傍目には狂乱して暴走状態に陥ったと見られてもおかしくない事態になっていた。

(……痛い、痛い……。頭が割れる……。水場……。はどこ……。何も見えない……)

痛みによつて口から出るのは悲鳴と苦悶のみ。ちゃんとした言葉を出そうとしているのだが、その度に割れるような激痛が頭全体を襲う。

少しでも痛みから逃げたい一心で走っているが、これは人蜘蛛アラクネの意志ではなく生存本能がさせる行動だった。

とにかく、水辺で頭を冷やしたい——彼女の頭の中にあるのはそれだけだった。

疲労の限界によつて熟睡していたところの激痛だ。思考が未だに定まらない。寧ろ、自分が今どういう状態のかも理解できていない。

目蓋を開こうとしているのか、それと開いていて何も見えないのか。分かるのは視界全てが真っ赤である事だけ。

身体は無意識下における勘のようなもので突き動かされて進んでいる。

いや、彼女自身は痛みから耐えようとしているだけでその場から動いているとは思わず、下半身のモンスター部分は生存本能によつて勝手に動いているともいえない。なにせ、慣れないモンスターの身体だ。何らかの特殊な能力が発揮されていてもお

かしくない。

突如として悲鳴を上げて簡易テントから脱走した赤い人蜘蛛アラクネことアリーゼ・ローヴェルを追うのは「ロキ・ファミリア」の眷族【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタイン。

どういう理由があつて逃走したのか分からないまま追う事になった。——他のモンスターはあれだけの事態にも関わらず、全員熟睡中だった。

(……怪我をしている？ さっき見た時は出血の跡は無かったのに……)

後ろから見ている限りではアリーゼの両手が血塗れだ。顔に深い傷が出来ているのかもしれない。

だが、それなのに逃走速度がやたらと早い。脚の数が多いせいか、と思つてしまうほどに。

方角的に宿場街リヴィラから外れているのが幸いした。予想では水浴びする為の泉に向かつている。

後から追い継る仲間リヴィラに警戒を呼び掛けて追跡を続行し、その逃走劇の最中に見つけてしまった。

白い兎ことベル・クラネルの姿を。そして——彼女は無意識的に叫んでいた。

「そのモンスターを止めて！ ベルっ！」

「は、はいっ！」

彼は僅かに戸惑いを見せたものの了承してくれた。

前方に立ち塞がる形で待ち構えるベルが見えていないのか、人蜘蛛アラクネのアーリーゼは痛みを耐える様な苦痛を漏らしながら走り続けた。

そのままでは激突する。だが、それを分かかって無理を言った。ベルに身体を張つてでも止め欲しい、と。

ズズンっ。

アイズの耳に届いたのは重くて強い衝撃——いや、重低音だった。

素早くて身体が軽そうなベルならば受け止めようとしてあっさりとは弾き飛ばされるのではないか、と思わないでもなかった。

結果として彼はアーリーゼの腹部に顔を埋めるような形で受け止め切った。その反動か、彼女の割合大きな胸が少年の頭に乗る形となってしまった。それはとても柔らかな

レベル4ともなった彼はもはや一昔の弱い少年ではない。だが、それでも完全とはいかず、見る見る後方に追いやられようとしている。

力負けていると悟った。第二級冒険者の『力』アビリティを持つベルが。

「ベル、毒液に気を付けて」

「は、はい。……このまま引き倒した方がいいですか!？」

「可能なら」

「分かりました」

疑問の余地なく即断即決のやりとり。

アイズの言葉にベルが懸命に従おうとした。だが、それは決して簡単な事ではない。歩みを止められたはずのアリーゼが小さく呻き、無数の脚を激しくバタつかせる。

両手で顔を覆い、ひたすらに痛いと言主張する。

ベルが顔を上げると血が滴ってきた。

「……うあ、ああ……。うう……。痛い……。はあ……」

呻き、喘ぎ、身悶える大きな凶体の人蜘蛛アラクネ。

上半身はか細く華奢で、胸の張りを布で簡易的に巻かれた姿が見えた。そんな女性がすすり泣くように苦しんでいる。

それからすぐにアイズが追い付き、アリーゼの様子を見る。

顔を真っ赤に血で染めた痛々しい姿に驚く。割れた額からいくつかの赤い瞳が覗くが、すぐに閉じて別の裂け目からまた瞳が見えるようになる。

最初に見た時には無かった複眼があった。

（……痛そう。いや、痛いんだ。こんなに血が出てるし、額が割れているのかもしれない）

つい先日、アイズも同じような目に遭ったけれど、それよりも何倍も痛いのだ。

このまま戻すより水場で血を洗った方がいいかな、と思い辺りを見回す。

向かう先に予想がついていたが、目的地は「ファミリア」の野営地に戻るより近そう
だ。

普段であればベル達が何らかの騒動を起こし、アイズ達が責める。だが、今回は逆の立場になった。その事を彼女はうつすらと思ひ浮かべて苦笑する。

自分も人を責められる立場ではない、という事を。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

思わず受け止めたけれど血を流すモンスターは未だ呻き続け、咄嗟の事にベルは混乱状態にあった。

駆け付けたアイズの指示に従う形で大きな身体の人蜘蛛アラクネを人目のつかないところまで引つ張っていく。幸い、全く動かさせない事もなく——一度止めた為か——無理な抵抗もされなかった。

共通語コイネを喋ったことも理解した。

(……アイズさん、武器を持っていない)

常に戦い続けて来た彼女にとって相棒ともいうべき細身デスベレイトの剣が無い、というのは特別な事ではないのか、と思った。

先日までモンスターと見れば例え『異端児』^{ゼノス}であろうと殺すと明言していた彼女が今は目の前のモンスターに襲い掛からない。

以前、^{ヴィーヴル}竜女の少女ウィーネを巡る争いの時も最終的に見逃してくれた。

それは決してモンスターに同情を覚えたからではない。ベル・クラネルの言葉に耳を傾けてくれただけだ。

「……地上に戻ってきたばかりのベルが……、どうしてここに？」

森の中へ移動しながらアイズが疑問を覚えた。

彼女からすればダンジョンから戻ったらしつかりと休養を取るものだ。即日降りるような真似は殆どしない。

ダンジョンは気軽に散歩で来るような場所ではないからだ。

「……えーと、色々とありまして……。それより遠征に来ていた「ロキ・ファミリア」と合流するとは思っていませんでした」

「……私達だって休息するよ。休みなく深層に行ったりしない」

「それは分かるんですけど……」

（僕達の行軍が思っていたより早かったとは……）

ある程度、深い場所に人蜘蛛^{アラクネ}を移動し終わり、アイズは改めてベルに顔を向ける。すると頭を真っ赤にした少年の姿に驚いた。

上から滴^{したた}る血を浴びて酷いことになって申し訳ない気持ちが湧いた。そして、もし、ここに仲間の狼^{ウエウルフ}人のベート・ローガが来たら『トマト野郎』とまた馬鹿にされる。

以前、酒場で彼が侮辱された光景が浮かび、アイズの顔から大量の脂汗が流れ落ちる。今のままではマズイと――

「……べ、ベル。水場で頭を洗った方がいい。……血塗れになつてる」

「あ、ああ、そういえば……」

水場の位置は既に把握しているのでアイズはまず彼に血を洗い落してもらい、可能であれば入れ物に水を入れて持つてきてほしいと頼んだ。

彼は快く了承してくれた。その気持ちのいい返事に胸の奥の不安が薄らいだ。

素直で優しく、冒険者らしくない可愛らしい男の子。

アイズにとって守ってあげたくなる存在だ。だが、その行動だけは認めるわけにはいかない。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

彼が去つたのと入れ違いに「ロキ・ファミア」の団員とリルカ・アーデがほぼ同時にアイズのところにやってきた。

まず団員にアリーゼの様子を見てもらい、次に小人族^{バルクム}の少女に顔を向ける。

本来ならばモンスターを匿うような相手に対して怒りを見せるアイズも今は困惑し

た顔になっていた。

会話が得意というわけではないので何を聞かれるのか、実のところ怖かった。

リリルカは既にある程度の状況を遠くから見ているので驚きは無かったけれど、この状況は一体何なんですか、と聞くべきか迷っていた。

最初こそ敵対的だった【剣姫】も最終的にはウィーネを救う一助になった事を後にベルから聞かされた。だが、二度目は無い気がすると思っていたし、感じていた。

「……【剣姫】様」

「……はい」

リリルカが声をかけると企みがバレた子供のように身体を跳ねさせて小さくなる。

説教するつもりは無いがアイズの反応に驚き、苦笑する。

「リリ達に手伝えることはありませんか？ 何らかの事情があたりだというのは分かりましたが……」

「い、今、ベルに水を持ってきてもらおうと……」

そう言われて人蜘蛛アラクネを見上げた。

小さな体であるリリルカから見るとより一層巨大に見える。そのモンスターは荒い呼吸を繰り返し、額から血を流しながら呻き続けていた。後、何気に胸が大きい。

髪の毛は赤く、それ以外は他の人蜘蛛アラクネと大差のない姿だ。

〔劍姫〕様の様子から無理強いしているわけではなさそうですね。無抵抗のモンスターを武器も持たずに……。それとも武器を奪われた？ 彼女に限ってそれはあり得ない気がするのですが……〕

リリルカが様子を窺っている間、団員の方が早く駆け付け、様々な物が用意される。

凶暴な冒険者の姿はなく、それぞれモンスターに対して腰が引けているもののアイズの指示をしつかりと聞いていた。その事から下位の冒険者で間違いないと理解する。

それからは人海戦術によって辺りに飛び散った血の跡などを消したり、人蜘蛛の身体を拭いたりする。ベルも水の運搬を手伝った。

冷たい水で拭かれる頃に呻いて暴れていた人蜘蛛も大人しくなってきた。

「……あー、死ぬかと思った……」

落ち着いた頃に人蜘蛛が言った。すると手伝っていた団員達が驚いてモンスターから飛び退り、それぞれ武器に手をかける。慌てたアイズが攻撃しないように彼らを宥める。

人語を介するモンスターに対し、何の免疫も持たない彼らからすれば脅威の的だ。

対するベルとリリルカも新たな異端児の登場に改めて驚いていたが怖がる様子は見せなかった。

「図体が大きくなって気軽に寝る事も出来やしない。……というより周りが全っ然見え

ないわ」

（頭痛はかなり治まったようだけど……。頭が相当熱を持っているわ。こういう時は眠るに限るんだけど……）

目隠ししている事は理解している。布越しでも彼女の視界は未だに真つ赤なまま。失明なのか充血の影響なのか。

手鏡を借りても見えなければ意味が無い。そう思いつつ深くため息をつく。

「……それから、急に暴走しちゃってごめんなさい。驚いたでしょう?」

（も、モンスターが俺達の言葉を喋ってる!?!）

（噂は本当だった）

（……えーと、受け答えしていいんだっけ?）

見えないながらも周りに居るのであろう「ロキ・ファミリア」の冒険者達に軽く頭を下げる。それに対して冒険者達は驚きつつ呻くように僅かな返答を返す。

アイズは人蜘蛛アラクネとなったアリーゼの様子を眺めていたが自分の境遇に対して慌てるどころか落ち着いてみせた。いつ殺されるか分からない状況に置かれているのに。

目が見えないから平気である、というわけではないように感じた。

（武器の音にちゃんと反応した。だから、周りが殺気立っている事も分かっている。その上で笑って見せている。私達に対して敵意が無い事を示す為に）

「本当にごめんなさい。まさかあれほど痛い思いをすることは思わなくて……。自制が利かなかったのは事実だけど……」

「いいの。休んでいて。他の冒険者が近づかないように見張っているから」

すぐ近くからアイズの声が聞こえた。それを確認したアリーゼは一つ頷いてから上半身を大木に預ける。

流暢に喋るモンスターにも驚いたがアイズの状態にもベル達は驚いた。

モンスターに対してかなりの葛藤を覚えていた少女が見違えるように変わった、と。少なくとも団長であるフィン・デイルナの命令があつたからとは思えない。

10 贖罪

大木に寄り掛かる赤い髪の人蜘蛛アラクネは大人しくしていた。

モンスターであれば冒険者に敵意をむき出しにして襲い掛かるのが一般的な行動なのに。

白髪の少年冒険者ベル・クラネルは『異端児ゼノス』との出会いが無ければ間違いなく警戒し、恐れ、武器を持って相對する。

なにせモンスターは冒険者の敵であり、人類の敵だ。それが当たり前だった。

偶然か、奇跡か。竜女ワイヴルの少女ウィーネと出会い、今までの常識が瓦解してしまった。

自分達と同じ言葉話すモンスター。人々と仲良くしようとするモンスター。そんな存在と出会ってしまった。

彼の深紅ルブライトの瞳に映るのは凶暴な敵ではなく、苦しみ悶えつつも周りの事を気にする一体の人蜘蛛アラクネが居る。

(……アイズさんは武器を持たず、このモンスターを氣遣っている)

モンスターと見れば容赦なく切り捨ててきた「劍姫」の『二つ名』を持つ金髪金眼の少女アイズ・ヴァレンシユタインが、だ。

額に巻いたバンダナを気にしつつ、彼女は濡らしたタオルで人蜘蛛アラクネの身体を洗っている。

少し前までは信じられない事である。

「……貴女は……本当に……アリーゼ、なの？」

恐る恐ると言つた体でアイズが尋ねた。

今まで眠っていたので聞きそびれていた。それと聞くのが怖かった事もある。

先ほどの声を聴いている内に聞き覚えがある、と断言はできないが懐かしく思ったのは事実だ。

アイズの言葉にベルは僅かに驚く。アリーゼという名前は知り合いのエルフからも度々聞いた事があつたからだ。

同じ名前の別人かもしれないので今しばらく黙っていた方がいいのかな、と迷った。

「……さあ、どうだろう。自分ではそう思っているけれど……。なにせ、ほら……。モンスターだから。証明しようがないのよね。……あなたこそどうしたらモンスターが無害だと信じてくれるわけ？」

「……分らない」

（……アリーゼだと本人が言つたとして……。私はそれを信じる？ 証拠と言われても

……。おそらく背中に「ステイタス」は刻まれていない。もし、それがあれば信じるか

もしれない)

冒険者がモンスターに変貌した例——【静寂】のアルファイア・ストラディを除く——をアイズは知らない。だから、どうすればいいのかも分からない。

単なる声の印象だけでは弱い。見た目が変わり過ぎて全く当てにならない。

本人だと認められなくても敵意が無いのは理解した。

唸りつつアイズは様々な方法を浮かべては挫折していく。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

アリーゼという名前について小人族バルウムの少女リルカ・アーデもアルファイアの調べ物のついでに調査していた。

【アストレア・ファミア】の団長にしてレベル4の女性冒険者。

それが【静寂】同様にモンスター化した。

例外を知らなければ疑っていたし、本人だと言われても信じる事はきつと出来なかつた。

——もし、情報通りのアリーゼという冒険者であるならばエルフのリュー・リオンの仲間である筈だ。

(……原因がどうあれ、目の前に居るのは確かに人語を介するモンスターです。重要なのはリリ達の敵か味方か、というところですが……。正義を司る【ファミア】である

ならば脅威度が下がるのですが……)

リリルカも暗黒期を過ごした経験があるので迷宮都市オラリオにおける闇派閥イウィルスと冒険者の戦いについて僅かばかり知っている。

大勢の犠牲者が出たこと。いくつかの「ファミリア」が壊滅したこと。

ゼウスとヘラを欠いたオラリオを守ったのが「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」——それと「アストレア・ファミリア」であったこと。

おそらく「劍姫」もその当時活躍していたのかもしれない。

かつての仲間、または知り合いがモンスターとして蘇る。リリルカの立場であれば非常に長く混乱した事だろう。

今はアイズがどうすべきか悩んでいる。それはもう頭から湯気が出るくらいに。

「……アイズさん。団長ハイ・ポーションから回復薬ポーションを使ってもいいと言われてきました」

下位の団員から高等回復薬を差し出された。

団長フィン・デイルナが使っている、と言ったという事はアイズが思う通りにすればいいという意味だと理解した。

もし、相手が自害を求めているのであれば容赦なく剣を振るう。そうではなく生きる事を求めている場合——ベル達を守っていたモンスターのよう——一度は見逃すと宣言した自分はどうするのだろうか。

はない。姿は確かにモンスターだが。

(……横の坊主は何なんだ？ アリーゼに臆さないとは)

アイズを見かけた時から疑問だった。

モンスターを見たらずまず武器を向ける。それは元「アストレア・ファミリア」の団員だったライラですら知っている常識だ。

ほぼ非常識の塊と言える団長のアリーゼですら可愛い見た目だけで近寄ろうとはしない。

モンスターは人類の敵で滅ぼす対象だ。

それなのに人語を介するからといって対話しようだなんて正気じゃない。

経験則があるにしても受け入れるのに時間がかかる筈だ。少なくとも五年前には無かった概念だ。それがほんの数年で変わるとも思えない。だが――

変わるきっかけがオラリオに起きた。

それがアイズなのか白髪の少年なのか。

(それに「劍姫」が葛藤してんの、あの坊主は平然としてやがる。……あいつか？ それとも近くに居る同胞か？)

もう少し近づけばベルとリリルカの表情の差がはつきりと分かる筈、と赤帽子レッドキャップとなつたライラは少し苛立った。

気を抜いてうつかり熟睡し、つい今しがた目覚めた。

思い切り眠ったお陰で——短時間だけだったが——気分がいい。差し出された飯も美味い。久しぶりにまともな食事にありつけた。

雑草と塩だけのスープも今ならご馳走に思えるくらい感謝の気持ち湧いて出た。

(勇^{フィン・デムナ}) 者の求婚を待ち過ぎてモンスターになったから責任取れ、なんて言ったせい
か。アタシだけ食事がいきなり減ったように……。いや、今はそれはどうでもいい
か)

つい余計な事を口走って白くて柔らかなパンを自分だけ出してもらえなかった。

ああ、と未練がましく呟いたら少し硬めのパンを貰えたので素直に謝った。

底意地の悪い性格が変わってなくて改めて惚れそうだと言いつつになつたがやめた。
側に居た女戦士^{アマゾンネス}の極寒に似た睨みを受けてしまったので。

たった五年で「ロキ・ファミリア」にあんな化け物が住み着いているとは思わなかつた。

(……そう、五年だ。……改めて聞かれると結構ショックだ)

そして、納得もした。

自分達は確かに死んだ、という事に。

地上の様子を見ない事には判断もつかないが、時代が経過した事をどこかで知らなけ

ればならない。

末っ子であるリユー・リオントの邂逅も――

感傷に耽りつつも触れれば切れる「劍姫」が人として悩んでいる姿を眺める。

大きくなればさぞかし凄腕の劍士に育つだろうと思っていたのに、人間と大差のない振る舞いをしている。

もちろん――誉め言葉だ。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

モンスターは殺さなければならぬ。だが、異端児^{ゼノス}は生きたまま捕らえるように言われた。

団長であるフィン・ディムナはギルドからそう命令を受けている。であれば団員であるアイズはそれを尊重しなければならぬ。

それを踏まえて貴重な情報源であるアリーゼと思われる人蜘蛛^{アラクネ}を死なせるわけにはいかない。

幹部として。

団員達に見守られながらアイズはモンスター――異端児^{ゼノス}らしき存在――を助けることにした。決してベルのように同情からではない。

「……………」

未だ出血が続く頭部に高等回復薬の液体を振りかける。

火傷を負わせるような煙が出てきたが回復薬による回復する時の作用だ。より強力なものになると欠損した肉体が再生する。

この回復薬は未知の強力な毒を解毒することは出来ない。

傷跡のように裂けた部分は修復されなかったが出血は止まった。

複眼という新たな器官が出来てしまったので、万能薬でも治す事は出来ないと予想する。

「……ああ、痛みが引いていく……」

「充血まで治ったかは分からないけれど……。痛みが治まったのなら……」

仲間に水桶とタオルを持ってくるように言いつける。

見守っていたベル達も手伝うと言ってきたのでアイズは素直に彼らの言葉に甘えることにした。

それから少ない会話であったものの大きな凶体のモンスターを皆で甲斐甲斐しく世話をした。

落ち着いた頃を見回り、リルルカは自分達のテントに戻る事にした。

呻いていたアリーゼが顔に巻いた布を取り、目蓋を開けてみる。だが、瞳は全て真っ赤なまま。視界もまだ利かないと答えた。

「……複眼が出来たのね。……鏡見るの怖いわ」

「具合はどうなんですか？」

「……もう頭痛が引いたから平気よ。後は目薬で治るかしら？」

今までの瞳と額に出来た新たな瞳の動作を確認する。

感覚的に動かせそうだが視界については変化なし。今が無理なら仕方ない、と人蜘蛛アラクネはあつさり^{アツサリ}と結論付ける。

団員に手渡されたタオルで顔を拭きつつ、改めて暴走した事を謝罪した。

「いくら私が超絶美少女だったとしてもモンスターとして復活するなんて驚きよ。これまで人に恥じない生き方をしてきた筈なのに……。あれかしら？ 仲間リオンに派手にやっちゃって、みたいなことを指示したから？」

身振り手振りで語り出すが早口に似た口調にベルは思わずたじろいだ。

今まで出会った異端児ゼノス達よりも流暢で饒舌だったから。その上、楽天的とでも言うのか。

周りを冒険者に囲まれていると分かっている筈なのに一切動じない胆力に驚いた。

「可憐な美少女を蜘蛛にするなんて、人類の宝を半分ほど失ったに等しい所業よ」

「……それだけ喋れば大丈夫……」

小さな声でアイズは言った。

「最初に見た時は完全に虫の息だった。それが見違えるように変わったのは充分な睡眠と高等回復薬のお陰か、と。」

彼女が言い終わるとどちらともなくお腹が鳴り、誰が犯人か互いに顔を見合わせる。テントに戻る前に——アイズはアリーゼに顔を向ける。相手は目が見えない状態だという事を忘れつつ。

「下から来た貴女達の目的は何？」

「そうねー。末っ子の顔を見る事かな？」

「……末っ子？」

「覆面してた子が居たでしょう？ リオンよ、リオン。あの子は生き残った筈よ」

「アストレア・ファミア」の団員でリオンというのはエルフのリュー・リオンただ一人。そして、アイズにも覚えがある人物だ。

だが、一部の団員は小首を傾げた。

全員が知っているわけではない。特に下位の団員は——

「仲間が全滅してしまって……。あの子一人だけになったと思うんだけど……。まだ冒險しているのか気になってね。……それで【劍姫】ちゃん。リオンは今、どうしているか知らない？」

「……酒場で働いています」

「冒険者としては働いていないんだ……」

「……いえ、今でも冒険者を続けているみたいです」

「……たった一人で？」

「……そこまで詳しくありませんが……、仲間には居るみたいです」

拙いアイズの答えに一喜一憂する人蜘蛛。

目的の人物の情報を聞くたびに嬉しがつたり不安がつたり、とてもモンスターとは思えない豊かな感情表現にアイズと他の団員達は驚いた。そして、側に居るベルも何か言わなければ、と思ったが不思議と会話に口が挟めない。

それに彼女達の邪魔をしてはいけない。今、古い友人と歓談しているのだから。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

穏やかな会話に見えるが片方はレベル6の第一級冒険者。もう片方は人語を介するモンスター。

オラリオに住む者からすれば異常ともいえる光景だ。つい先日起こった事件に対する恐れ of 眼差しを彼が忘れるわけがない。現にこの場に立ち会っている他の団員は武器に手をかけたまま警戒態勢を崩していない。——そんな彼らの態度こそが当たり前だった。

モンスターが例え知り合いだとしてもすぐに割り切れる者など——

だが、のんびりと会話をいつまでも出来る訳が無く、穏やかな空気は一つのきつかけによって霧散する。

「フレイヤ・ファミア」の団長オツタルの来訪によって。

本来はダンジョンで彼を見掛ける事は稀だと言われている。「ロキ・ファミア」の下位の団員達はその事に——モンスター^{オツタル}の出現に匹敵するくらい——恐れ慄いた。

次いでアイズが警戒の為に武器に手を——かけようとしたが無手である事を思い出し、小さく舌打ちする。

人蜘蛛も「猛者」オツタルの名前が耳に入ったが恐れよりも先に軽く苦笑した。

(どうして「猛者」が!?)

そう疑問を抱くと不安を覚えて慌てる彼らにベルが説明する。

今回、オツタル達と共に下層に行く事になったことを。ただし、アルフィアの魔石については言わなかった。正直、そこまで説明しなければならぬとも思えなかったのだ。

明確な目標が決まっているのは到達階層くらい。それ以外の事について他派閥に言う必要性が無いと判断した。

「きつと僕がいつまでも帰ってこないから心配したのかも知れません」

「……そうなの? でも……」

「報酬についての交渉が完了していないので、このモンスターはアイズさん達【ロキ・ファミリア】の預かり……。僕らはそれに干渉しない、という立場を示せばいいと思います」

エルフのヘディンはともかくオツタルならば金額交渉を持ち出せば素直に引き下がってくれる気がした。

彼は他派閥の問題に首を突っ込むようなお人好しではない、ということも希望的観測にすぎないけれど。

そして、ベル達が話している内に武人オツタルがアイズ達の現場に姿を見せる。

威風堂々とした佇まいに下位の冒険者達が呻きつつ彼に道を譲る。

戦っても勝てない。いや、余計な怪我を増やすだけで遠征に支障を生んではいけないと判断したのかもしれない。

オツタルは軽く現場を見回し、隠しようがないモンスターの姿を見て、軽く息をつく。(……冒険者が死した後、何らかの事情でモンスターとなる、か……。他人事のように考えてはいけないようだ)

普段はモンスターと見れば倒すものとオツタルも信じて疑わなかった。だが、異端児ゼノスの存在が今までのオラリオの常識を一変させた。

敵味方の判断は別問題だが、こういう結果が存在すると思ひ知らされた今、武器を向

ける相手についても改めて考えなければならぬ事に気付かされた。

女神フレイヤはアルフィアを利用しようとした。今はそれだけしか分からない。

「……こんなところで油を売らず、さっさと休め」

「す、すみません」

目的の前に異常事態すらも眼中にない。そんな気配を振り撒く【おうじや猛者】オツタルにア

イズは何かを言いかけて——何も言葉が出てこなかった。

見逃された、という気はしないが彼らにとつてモンスターは倒すべき敵ではな

く、単なる障害物ではないのか、と。

実際そうなのだろう。最終目的こそアイズ達と同じだとしても、それ以外の全ても同

じとは限らない。

ベルの安否を確認したオツタルはその後、踵きびすを返してテントに戻っていき、ベルもア

イズ達に頭を下げて立ち去った。

二人の姿が見えなくなつてから——まず、下位の団員達が大きく息を吐く。ついでア

イズが額から流れる汗に気付いてタオルで拭う。

恐怖にも似た緊張感が場を支配した。そして、それは少し離れた位置に潜んでいた

赤帽子レッドキャップのライラも同様だった。

(……相変わらず迫力だけはスゲーな。つていうか白髪の坊主は【ロキ・ファミリア】

じゃなかったのか)

見た感じだと「フレイヤ・ファミリア」の団員とも思えない。あんな物腰が柔らかそうな人物にライラは心当たりがない。

自分達が居ない間に世界が変わったように冒険者の顔ぶれにも変化があった、というのは理解した。

場の雰囲気が落ち着いたようなのでライラはテントに戻り、もうひと眠りする事に決めて現場から立ち去る。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

団員達に運ばれる形でテントに戻ってきた人蜘蛛アラクネは「ロキ・ファミリア」の団員達に謝罪した。視力は未だに戻らないものの感情面の変化は人間の時と大差なく、一時の苦痛もたらが齎もたらした事故だと言いつつ諷する。

この言葉に団長フィンはテントの物損以外の被害が無かったのでお咎めは無し、と伝えて来た。それよりも彼はアリーゼの額に出来た複眼が気になった。

魔石を取り込んでいる話しは別のモンスターから聞いていたので強化種としての特性が働いたと予想する。

一般的なモンスターであればより強く、より凶暴になる。

(……冒険者としての特性が邪魔をしてモンスターの特性が上手く発揮できていない。

感情面もそうだが……、生存本能にとって障害となつて居るのは意外だ)

貴重な異端児ゼノスの考察をいつまでももしたところだが、「ロキ・ファミリア」は地上ではなく、より深い階層に挑戦する為に来て居る。

急に現れたモンスターを野放しにする事も出来ないし、遠征を急遽中止にする事も出来ない。——断腸の思いで決断できないわけではないけれど。

(……しかし、ベル・クラネルが「フレイヤ・ファミリア」と一緒というのも作作的というか運命を感じる。……彼らが関わつて居るとつい勘ぐつてしまふようになった。親指からの警告が無い以上、偶然なのかもしれない。だが、そんな事が連続して起こるだろうか)

もし、全てが作作的なら——どんな理由が考えられるのか。

という事を考えたいところだが、まずはアイズ達が無事に戻つてきたことに安心しておく。

いつもモンスターを見かけたら殺戮人形のように倒し尽くす彼女が自制したのだから。

知り合いだから、という理由で剣が鈍つたのかは分からない。だが、葛藤した事はなんとなく理解した。そうでなければ人間ヒューマンらしい苦悩など見せたりしない。

深層域に挑戦する上で「ロキ・ファミリア」は他の冒険者の邪魔にならないようにい

くつかの班分けを行う^{わこな}。

全員で一気に走破できるほどダンジョンは甘くなく、昔から今に至るまで慎重を喫してきた。そして、冒険者は疲労し、食事を摂ったり休息しなければならぬ。そんな彼らに与える援助物資の確保も考えなければならぬ。

遠征に赴く場合、それらの食事などの補給や武具の調達などで多額の金額がどうしてもかかる。途中で珍しい鉱石やモンスターからのドロップアイテムを集めて地上で換金しても元が取れない場合もある。

大手以外は確実な儲け以外、深くダンジョンに潜らない——冒険しない事の方が多い。

迷宮都市が出来て今日^{こんにち}まで冒険者というのは人類に平和をもたらす職業ではなくなった。だが、脅威が無くなったわけではない事も知られている。

(……テントの物損くらいは損失で済んで良かったと見るべきか。団員の負傷も皆無……)

テント内に用意した事務机で書類の確認をする小人^{パルム}族のフィン。

いつもは他の派閥が起す問題だったものが今回は当事者になった。それによる損失の計算をしていたが軽微であったことに一先ず安堵した。

先のアルフィアとの戦闘ではダンジョンに向かう前に赤字になるといふ事態が起き

たので。特にベートの治療費が思いのほか痛手だった。

「……それで、君の事はライラと呼ばばいいのかな？」

机を挟んだ位置に椅子があり、そこに腰かけるのは赤帽子レッドキャップというモンスターだ。

赤い頭巾が無ければ小鬼ゴブリンと大差が無い姿をしている。

「好きなように。目が冴えちまったから【勇者】ブレイブの仕事ぶりを観察させてもらっているだけ」

「……御覧の通り地味な仕事さ」

武器を持って戦うのが一般的な冒険者の姿だ。

団長となったフィンフィンは団員をまとめる為に多くの時間を机の上で過ごすようになった。それもこれも【ファミリア】の安全度を高めるためだ。決して使い捨てにしようとは思っていない。

団員の支持を集めるには安全を保障するのがいいと判断した。ただそれだけを考えて今に至る。もちろん、最悪を想定し、危急の時は武器を取る。

「君達はダンジョンから生まれ出でた……。で、間違いないんだね？」

「そうだけ。壁からポロつと出ちまった」

「……その前は？ 何らかの意思を受け取ったりはしなかったのかい？」

「意志？ 特になかったと思うぜ。……長い眠りから覚めた……。ただし、暗いダン

ジョンの中だった」

気楽に答えつつもフィンが聞きたいことはすぐに分かった。

モンスターとして生まれ出たのならダンジョンの意志が関わっている筈だと推測し、それを彼は知りたくて質問した。

一八階層に上がるまで何のために復活したのか、というのをライラも考えなかったわけではない。考えても——結局のところ分からなかった。

アリーゼの暴走を見た後ではいざ自分にも何かしらの凶暴性が現れるかもしれない、という危惧こそ出来るが——それ以外に関しては全くの未知と言わざるを得ない。

「隠しているわけじゃあないんだが……。生まれる時に何かしらの意志を受けつつっていう気はしない。なんていうか……。消えた筈の自分の意志がさっき言ったみたいにポッと目が覚めた時のように覚醒した」

【静寂】のアルフィアはその辺りの事を示唆すらしていなかったが……。彼女達も突然排出されたって感じなのか）

嘘かどうかは判断できないが敵意が無いのは分かった。もし、敵意を秘めて居れば勘や親指が疼く筈だ。

だが、とフィンには疑問に思う。

「アストレア・ファミリア」の団員が一つ所に——ほぼ同時に出現した、というのが。

それこそがダンジョンの意志ではないかと。しかし、その理由までは分からない。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

短時間だったが睡眠をとっていた何人——何匹かのモンスターが目覚めて「ロキ・ファミリア」の団員から食事を受け取る。

味覚は人間時代と遜色なく、生前と同じように味わっていた。

全身が真つ黒い影のような姿のゴジョウノ・輝夜も淡々と食物を摂取出来ていた。

「……戦^{ウオーシャドウ}も食べるんですね」

興味深く観察していた下位の団員の言葉に輝夜は軽く苦笑する。——表情の変化は分からないものの雰囲気は伝わったようだ。

腕が翼になっていいる団員達は顔を皿に埋めるような体勢を取っていた。背に腹は代えられないとでも考えたのか、人目を気にしない事にしたらしい。

正義を司る「ファミリア」といえど負けないため、死なない為に泥臭い世渡りを続けていた。多少の不作法を気にする者は「アストレア・ファミリア」に一人しか居ない。

「あの【超凡^{ハイノビス}夫】がレベル4かよ。出世したな〜」

頭部が完全に狼となったネーゼが豪快に笑った。

食事と排泄以外では両手両足を拘束する約束を結ばされている。それは下位の団員に向けて、というより宿場街^{リッツイラ}に居る冒険者に向けてのアピールだ。それは輝夜達も理解

を示して受け入れた。

彼女達の目的は地上に出て末っ子に会う。——可能ならば主神にも会いたい、というもの。

それさえ叶えば後は周りに委ねよう、というところまで話しが進んだ。

「……私らが死んでいる間にリオンがお尋ね者とは……。そこまで堕ちちやつたか、あの子は……」

「アストレア・ファミリア」の団員達が聞いた中で一番の衝撃がそれだった。

殺された、と聞かされても同様に驚くが——生真面目が覆面を付けて歩いていると言われていた団員の心情は死んだ者には理解できない。

生き残った彼女がどれほどの絶望を味わい、激情にかられて荒ぶったのか。

「他の団員から聞いた話しつすけど、おこなここで殺しを行つたらしくて大騒ぎに……」

「……それって最近の事か？」

彼女達と面識のある「超凡夫」ハイイレビスの二つ名を持つ男性団員ラウル・ノールドが気さくに受け答えしていた。

彼とて最初は戸惑った。主に見た目で。

同僚の猫キャットビートル人であるアナキティ・オータムと共にモンスターの世話を仰せつかつてから少しづつ打ち解け始めた。

記録にある「アストレア・ファミリア」の団員のレベルは最高で4まで。同じ強さを持つラウルとアナキティならば同数の足止めは可能だと判断した。

「数日前の事っすね。まだ経過報告が済んでいないんですけど、大きな動きがあった、というところまでしか……」

一見すると単なる世間話のだが、モンスターと一定の距離を離して行われて^{わこな}いる。

彼らのやり取りを黙って見つめるのは厳しい顔つきの女戦士^{アマゾネス}——ティオネ・ヒリュテとベート・ローガの二人だった。

ティオネの妹ティオナは団長が執務している別のテントの警護を担当していた。彼女がここに居るのは妹と交代したから。

（……五年経ってリオンが暴れた。それが下層にあった崩落と関係するのかしら？
……関係しそうね）

（ジュラが今でも懲りずに策を練ってたってこと？ ヤダー、なんか気持ち悪い……）

「この下、階層を跨いだ大崩落になってたけど、お前ら降りる時、修復に巻き込まれるなよ」

「……まだ修復してないんだ」

「……まだ、というより事件経過がごく最近なら……、今月は無理じゃないかな」

「降りようと思えば降りられるよ。……私らも【ルドラ・ファミリア】の罫で生き埋めに

されたっけ……」

下から来た、というネーゼ達の意見といつしか情報の交換に変化していき、現場がとも和やかな雰囲気になりつつあった。

ただ、魔石を取り込んだことで急な暴走に陥らないか、という事だけは双方とも警戒していた。

このまま穏便に一日を過ごすのか、それとも自製の利かないモンスターに変ずるのか。不安そのものは少しずつ大きくなっているように感じられた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

遠征に赴く予定だった「ロキ・ファミリア」は急な異常事態イレギュラーの発生によって足止めを喰らう事になった。だが、全体としての被害はとも軽微であるのは幸運といえる。

僅かな延長期間を設け、地上への連絡や物資の搬入を担当する者と現場の維持に務める者。それと崩落があつたという階層の調査を担当する者を選定していく。

「修復を待つ気は無いが、どの程度の崩落なのか見えてきてもらいたい」

そうフィンが言いおいて選ぶのは魔法特化のリヴェリア・リヨス・アールヴと御付きとしてエルフのレフイーヤ・ウィリデイス。ヒリュテ姉妹とベート・ローガ。

現場の維持はガレス・ランドロックとアイズ・ヴァレンシユタイン。それとラウル達下位の団員。

物資の搬入はまだ余裕があるのでレベル4相当の団員に主神ロキへ連絡に行かせることにした。

「くれぐれも宿場街リヅイラを巻き込まないように。モンスターの事を聞かれたら無視していい」

「了解しました」

「承知しました」

「それと何名か『ガネーシャ・ファミリア』に連絡を入れてくれ。彼女達には悪いがおおで手を振って地上に出られては困るから」

「はっ」

一通り通達を終えた後、それぞれ散開していく。

無理にアリーゼを殺処分するより調教師テイマーを要する「ファミリア」に丸投げする方が気が休まると判断した。

少なくとも「ヘステイア・ファミリア」への心象を悪くする事は避けられるはずだ。それが例え表向きであつても。

もし、彼女達が凶暴なモンスターであつたならば——名声を上げる機会に恵まれたと判断することが出来た、のかもしれない。

(……本当に僕は姑息な小人族バルクムだ)

そう思いつつ歳は取りたくないな、と小さく呟く。

一通り指示を出した後、人蜘蛛アラクネのアーリーゼの事を考える。

生き残るためとはいえ魔石を取り込み、先ほど暴走状態に陥った。もちろん、痛みから逃れる為で見境なく冒険者を襲ったわけではない。

彼女ほどの者が痛みを耐えられないほど、というのが想像できなかった。——想像し
たくなかった、が正確か。

(聞いた話しが本当であればモンスターとしての特性を扱う事が出来ない。……その点
については理解できなくもない。僕が猫キヤットビープル 人に急に變化した場合、獸耳と尻尾を自在に
操れるのか、と聞かれるようなものだ)

生まれつき備わっていない器官が急に出来た場合、まず混乱する。次に思いきり悩
む。

他人事として処理してばかりでは相手の考えを読むことを否定するようなもの。理
解したくないと思つても戦略上思考せざるを得ない。

今まで考えてこなかった事態が次々と起こっている。——考える事が増えると頭が
痛くなる。こういう時は何も考えずに武器を持って下層に突入したくなる。フィン・
ディムナも「ファミリア」の団長の前に一人の冒険者だ。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

アリーゼの血で赤く染まってしまった髪の毛を水浴びに使う泉でしっかりと洗い落とした後、リリルカ達の居るテントに戻ったベル・クラネルは先ほど出会った人蜘蛛アラクネの姿を思い浮かべる。

それは憧れの一人でもあるエルフのリユー・リオンから度々聞かされたアリーゼという名前だった。

異端児ゼノスとして再誕した事が事実なら本人である確率が高い。

今すぐに地上に舞い戻り、リユーに報告すればとても喜ばれるのではないかと、と短絡的に思った。

——短絡的であるから地上の混乱を思い浮かべれば素直に喜べないのはすぐに思い至る。

(当人は喜ぶかもしれない。周りはまた怖がる)

お互いが納得する形に収めるにはどうすればいいのか。余計なお世話である事を重々承知しながらも考えないわけにはいかない。

リユーに何度も助けられ、お世話になってきたのだから礼の一つもしたい。

【ロキ・ファミリア】に今すぐ駆け込んで直談判しようとするれば団長のフィンはきつといい顔はしない。彼は温和そうな顔つきだが決断力があり、時には非情な手段に訴えてくる。

苛烈なベート・ローガを除くとしても「劍姫」のアイズは対モンスターにおいて人が変わったように激情に走る。

——先ほどのアイズはモンスターを殺そうとはしなかった。武器を持っていなかったのは何某かの決断をしたためであると予想できる。

(……僕のせいだと思っけれど)

アイズの本来の目的はダンジョンに生息するモンスターの討伐、または殲滅だ。

憎い仇のように戦っている。それを自分のせいベルで信条を覆された形になった。

彼女にとってモンスターは地上に住む人々の敵だ。共通語コイネーを使うから害は無い、とは思わない。

「思い悩むのは結構ですが、リリ達の事を忘れないでくださいませ」

これから休む為の準備を整えているリリルカが声をかけてきた。

白髪の少年は気になる事があるとそればかり考えて周りが見えなくなる時がある。そういう時は大抵一人で突っ走りがちだ。

仲間が居る事を忘れないで、とりりルカは小声で伝える。

「い、いめん。……さっきのモンスターの事が頭から離れなくて……」

焚火の準備を整えていた猪人ポアズのオツタルも赤い髪の人蜘蛛アラクネの姿を思い浮かべた。

多少離れていたが、かのモンスターがアリーゼと呼ばれた事も耳に入れている。

「……先ほどの、というのは【劍姫】がアリーゼと呼んでいた奴か？」

「は、はい。そうです」

本来の目的と合致するのかもしれないのか、予感的には合いそうだがオツタルは僅かばかり首を傾げつつ言葉を紡ぐ。

気さくに会話を交わしたいわけではない。だが、自分の耳に聞こえてしまった単語が妙に印象に残った。

暗黒期の時代に同じテーブルを囲んだ仲でしかないが――

「先ほど異端児ゼノスと思われるモンスターがアリーゼと呼ばれたので、少し気になってしまつて……。僕に何かできる事があつたんじゃないかつて……」

「何でもかんでも首を突つ込む癖は頂けません。リリ達は弱小【ファミリア】なんです
よ」

「……うん」

ベルは女性とみると見境が無いような気がする、とりりルカは危惧する。

オラリオ全体で見ればモンスターに限らず、誰かしら困っている者が居るものだ。その全てを救う事は一人では無理だし、実力的にもベルでは荷が重い。

大勢の団員を引き連れている【ガネーシャ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】でも困難なのに。

アリーゼと呼ばれる人蜘蛛アラクネの事を気にならないわけではないが、優先すべきは女神フレイヤの指示だ。

買取金額の減額程度で目的を変更する理由にはならない。

(俺達だけで下層を目指す事も出来るが……。それでは約定を違えることになる)

(……あの駄ベル・クラネル 兎は優柔不断で我慢ならん。フレイヤ様の命が無ければ一〇回ほど殺している所だ)

雷撃の短文詠唱を得意とする【白妖ヒルトスレイヴの魔杖】ヘディン・セルランドにも我慢の限界がある。

オツタルとは別にフレイヤから細かな指令書を受け取っており、それに従って一時間のズレも無く行軍を続けてきた。

ここで余計な時間を費やすつもりであればオツタルの静止に関わらず、魔法を打ち込む所存だ。

(買取金額を零ゼロにしろ、と言えばあいつはその通りにしそうだ)

金額が問題ではなく女神の指示が覆くつがえる事が問題だ。

事態に障害が発生するのであればアリーゼというモンスターを消し炭にするぞ、とエルフが低い音程で警告する。するとベルは悲鳴を上げるように縮み上がった。

彼ヘディンにとって【アストレア・ファミリア】の団員だろうと女神フレイヤの障害であれば敵でしか

ない。

エルフの言い分にリルルカも賛同せざるを得ない。これは彼に恐れを抱いたからではなく、ウィーネの時と違い、最初に見つけたのが「ロキ・ファミリア」だからだ。

獲物を奪うな、という言い分が今回は通用しないので奪還という選択は取れない。いくら気になるといつても相手が悪すぎるし、助けを求められてもいない。

——ベル・クラネルに異端児の保護を主張できる権利も無い。

リユー・リオンの知り合いかもしれない、という事が引つかかるベルとしてはどうしたらいいのか迷う所。

自分達は下に向かつて進む予定がある。ここから地上までどんなに急いでも二日かかる。往復を許してくれる雰囲気も無い。更にモンスターを地上に上げる事と同義で結局のところ騒動を振り撒く結果しか生まない。

それが例えかつての友との邂逅を果たせたとしてもリユーが喜ぶ結果になるとは限らない。場合によれば最悪の結果が待ち受けているかもしれない。

アルフィアが唐突に死んだように。

自分の気が治まればいい、というのは自己満足であり、周りの迷惑を顧みない愚か者のする所業だ。今回はさすがに我儘を通すべきではない、とベルは思う事にした。

(……アイズさんを信じるしかないか)

アリーゼというモンスターとも知り合いのようだし、何より自制してくれた。

自分の知らない所で彼女も異端児との向き合い方について色々悩んだ、というか学んだというか——

今すぐ悪い結果になるような事は——無いと信じたかった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

葛藤しつつ体力を回復させるために休息に入る。ここできちんと休むことも冒険者にとつて必要だと様々な伝手から言われてきた。

「フレイヤ・ファミリア」でさえ一時の休息をとる。

気になって眠れない、と思っていたが一八階層の明かりが暗くなった時、ベルはあつさりセーフティポイントと眠りについた。

安全階層と呼ばれていてもいくつかのモンスターが徘徊する場所だ。一日いっぱい眠れるわけがない。

寝ずの番を担う者と交代しながら朝を迎える。

四人の中でリルルカだけ対応が出来ないので残りの三人が決められた時間に起きて警戒態勢を取る。これは離れたところにある「ロキ・ファミリア」でも行っている。

周りが明るくなる頃、まだ少し眠気が残っているのはベルとリルルカ。オツタルとヘデインは水辺で顔を洗い、既に移動の準備を始めていた。

ヘディンは身支度を整え、顔を洗ったら朝食の支度を整えろ、と命令し、自分の荷物を確認していく。

(……【フレイヤ・ファミリア】は何というか……、心構えからして違うな)

単なる憧れしかなかったベルには到底なれそうもない境地が目の前にある。

単なる英雄願望でもなく、綺麗な女人と出会う為でもない。

命を捧げるに足る女神の為ならばこの程度、と思っている態度だ。かつこいいけれど息苦しい。余裕も無い。——仲間と楽しく冒険をしようとする自分達の世界とは相容れない雰囲気を感じた。

戦うしか能がないと思われるオツタルも細々とした作業をしている。武器の手入れも人任せにしない。

ベルは何でも自分でやろうとする悪い癖があるが、まともに出て来た試しは少なく、失敗ばかりだ。

道具もリリルカが居なければ満足に用意できないくらいに。

「腐っていないで顔を洗ってきたらどうですか？」

「……………めん」

日常生活において物凄く頼りないが、強敵との戦闘では有能である。

庇護欲を掻き立てられる人間と評されるベルの特徴は良くも悪くも女殺しの領域だ

と認めている。そして、それを本人が自覚していないから尚性質が悪い。

しかし、それが英雄の資質であるならば意外と悪い気がしないのも腹立たしい。(あんなに気弱なのに【劍姫】様に懸想しているんだから、度胸があるのかないのか……。ヘタレの英雄はみんなあなのですかね……)

【猛者】オツタルに顔を向ける。彼の様な武人がどうして英雄と呼ばれないのか、不思議でならないし、何だか理不尽だな、と。

【フレイヤ・ファミア】の団長でとても強い。オラリオにおいて誰もがそう信じて疑わないほど。——でも、誰も彼を英雄とは思っていないし、そんな呼び方をしない。

全く居ないとは言わないけれど——

「……………」

じーっと見つめてくる小人族バルウムのリルカの視線に小首を傾げるオツタル。

その表情は何だか憐れんでいるような、何かに納得していないような戸惑いに似たものに見えた。

「……オツタル様はレベル7へと至るような偉業を成し遂げた筈です」

「……………」

「なの……、どうして英雄と呼ばれないのですか？ リリが知らないだけですか？」
偉業。そう聞いて今まで考えてこなかった事にオツタルは気づいた。

何度か思った事があるのかもしれない。しかし、己の人生の多くは女神フレイヤの為に強くあろうと努力する日々しかない。

レベル6まで自分はゼウスとヘラの両「ファミリア」の背中を見て育ってきた。今は自分の前に誰も居ない。——何も無い、とも言える。

隻眼の黒竜とはいずれ相対するとしても強者の存在が居ないのは確かだ。

(単なる「ランクアップ」で英雄と呼ばれるならば誰でもなれる事になる。……「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」が健在だった頃は俺にとつての英雄がたくさん居た)

憧れた英雄が居なくなり、自分の目標も無くなってしまった。

オツタルは英雄になりたいわけではなく、純粹に強くなりただけだった。

かつての強敵を打倒し、レベル7へと至った瞬間——目の前に壁が無くなってしまった。ただそれだけだ。

自分が英雄になった、などという気持ちなど微塵も感じなかったし、思わなかった。

今の自分はフレイヤの為に力を振るうだけの存在だ。他の団員もおそらく同じ気持ちの筈だ。

「……単に俺が英雄と呼ばれる存在ではなかったただけだ」

「な、何故に!? レベル7なのにどうしてですか?」

小さな存在は酷く驚いた。それがオツタルには不可解だった。

そもそも英雄とは何か、と聞かれても答えられない。何が英雄たらしめる要素なのか
 街の噂で耳にするのは【ラビットフット白兔の脚】の話題が多い。そして、彼が何かする度に英雄と
 という単語が聞こえてくる。

オラリオで活躍するようになってまだ数か月しか経っていないのに。

人々は彼の何を見て英雄と呼ぶのか。

街の奴らにそう言われたら英雄なのさ。

【ゼウス・ファミリア】団長にしてレベル8【英傑】マキシマにこっぴどく叩きのめされ、頭を踏みつけられた時に聞いた言葉が思い出された。

当時は何のことだが分からなかった。

当然だ。オツタルの目的は頂点を目指すこと。一番強くなる事であり、英雄になりた
 いなどと思つた事など無い。

彼が成りたいのは『最強』だけだ。

「……今よりレベル7が多かった時代に英雄と呼ばれる者は団長級が常だった。だから、何も不思議なことはない」

両手を組んで祈るようにオツタルを見上げながらリルカは何か言わなければ、と

装備と荷物の確認を終えてからベル達四人は一九階層への入り口に向かう。

そして、入って早々にモンスター達が現れ、次々と襲い掛かってきた。だが、それらはオツタルが大剣の一振りですべて倒し、こぼれ出るドロップアイテムについては帰りまで回収しない事にした。

まずは目的が先決ということだ。

(下の方が価値も高くなりますし)

リリルカも全てのアイテムを回収しようとは思わなかった。そんな彼女の横で命令書を懐から出して目を通す白妖精ホワイト・エルフのヘーデンの姿があつた。

戦闘にも参加している彼だが、主に指示出しを中心おこなに行っている。

指示書の中身はベル達にも見せないが、概ね予定通りという返答があつた。

二〇層を越えて、二四階層目で一旦立ち止まり、魔石を小さな袋に一杯になるまで回収し始めた。

そして、崩落現場である二五階層。

(……中心近くが一番被害が大きい。それと修復が始まっているけれど、安全に通るにはまだ時間がかかりそう)

崩壊した壁の修復は時間が巻き戻るようおこなに行われる。生物の様に無機質が泡立って塞いでいくわけではない。

修復中の階層はモンスターが生まれにくいのも良く知られている。

オツタルとヘデインはのんびりと観察する気はなく、足場になりそうな場所を見定めて降りていく。その後をベルとリリルカが追う。

つい先日までここで未知のモンスターと死闘を繰り広げた。そんな喧騒は今は無く、修復する音と上から落ちる水の滴したたる音が静かに聞こえてきた。

モンスターが居ない分、楽に降りられるが以前来た時は相当数のモンスターに襲われ

た。
(命みこと様が居ればモンスターや冒険者の索敵が出来ましたのに)

居ない人の事を思っても詮無い事だ。

ベル達と共に下るのは都市最強の「フレイヤ・ファミリア」である。気心の知れた相手ではないので緊張が全然解けない。

ヘデインの唐突な指示出しを静かな空間で聞くといちいち驚いてしまう。

足場に注意を払っていると上層の音が聞こえてきた。おそらく「ロキ・ファミリア」の斥候達だ。

彼らも「フレイヤ・ファミリア」に次ぐ派閥で攻略速度も速い。そんな彼らが短時間で下に来るのも不思議ではない。

ヘデインの指示で「ロキ・ファミリア」の邪魔にならないように注意しながら階層主

の部屋を目指す事になった。

二七階層の奥で待ち構えるのは尻尾にも頭がある双頭の蛇『アンフィス・バエナ』だ。青白い炎を吐く強敵で討伐推奨レベルは5。

数十人規模の冒険者による戦闘を行うのが基本だ。

(ギルドの情報によればあと数日で現れる筈です。四人で討伐なんて無茶もいいところ)

一度出現したアンフィス・バエナは三つの階層を移動しながら戦う事になる。

大手【ファミリア】も経験する壁の一つだ。

負傷したドルムル達を救出する為に先行した時は運よく無人だった。今回もそうなっているといいな、とベルとリルルカは祈った。

二人は今回只の付き添いだ。満足な用意もしてきていない。あるのはヘディンが事前に用意したものだ。

「……階層主が居ないのであればこのまま進む」

「はっ」

(……後からくる【ロキ・ファミリア】の皆さん、頑張ってください)

いざれ訪れる彼らを労いつつ未踏の二八階層に到達した。

(ここからまた風景が変わる。

「ヘスティア・ファミリア」にとって未到達階層。ほぼ「フレイヤ・ファミリア」のお陰だ。ただし、これを公式記録にしない方がいいとベルは思っていたし、リリルカも肯定した。

(……僕はこの階層のモンスターを倒せているけれど、他の皆はどうなんだろう)

それと階層主であるアンフィス・バエナとも戦っていない。

きちんと戦闘経験を積まないとギルドの要請を達成したとは見^{みな}做^なされないおそれがある。

会話が無いままリリルカはヘディンの様子を窺う。彼は他派閥となれ合う気が無い事は理解したが、待っている側からすると酷く居心地が悪い。

法外な金額を提示されたはずなのに減額しようと言う気が全く感じられない。ある意味、弱みを維持でも見せないとしてもいうような有^{ありさま}様だ。

他の派閥ならいざ知らず、都市最強と謳っているだけあり、難敵だと認めざるを得ない。

リリルカが見守る中、別に見るなども睨みつけたりして顔を逸らそうともせず、彼は必要な道具を用意していく。

それと階層主の部屋以降、時間を気にするようになった。

手伝えることはありませんか、とダメもとで尋ねれば周りに気を付けているだけでいい

と素つ氣無い返答があつた。そして、見物するのは自由だが邪魔だけはするな、と厳命された。

(……) こういう人と一緒に生活したくないですね……。何でしょう、社交的から激しく遠ざかっているというか……。フレイヤ様はこういう人達に囲まれているのでしょう？ 優雅な暮らしをしている筈ですが……。全く賑やかな生活を想像出来ません)

彼らに比べて「ヘステイア・ファミリア」は主神が明るく社交的で誰彼構わず愛想を振り撒く。そして、とても庶民的だ。

外見の破廉恥さを抜きにしても心が温かくなる。前に所属していた「ソーマ・ファミリア」とは真逆の印象だった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

多くの手荷物を抱えたヘディンはテントから出て行き、リルカも後を追う。

そして、迫りくる蜥蜴人達リザードマンを打倒しながら広めの空間にたどり着いた。

一休みできる空間がある以外は特徴的な物のない小部屋にしか見えない。その部屋の奥にヘディンは向かい、持ってきた荷物を地面に下ろす。

杭と金槌を持つて壁に穴をあけていく。

彼は説明をしないがオツタルも事情を把握していない。彼の使命は「ヘステイア・ファミリア」からアルフィアの魔石を譲り受け、可能であれば護衛を務める。

後者はヘーデンから伝えられたものだ。その白妖精ホワイト・エルフは指定された時間内に目的の層にたどり着き、誰にも邪魔されない場所の壁に穴を空けるように、と指示を受けている。

ベル達の立ち合いについても予想されていたのか、彼らの要望には出来る限り応えてあげて頂戴、と言われた。

(……あの^{フレイヤ様}の方が指定された時間まで幾分か余裕があるが……。どうやってお伝えすればいいの……。それとも時間さえ守られれば……)

仕事については完了次第、現場から離れておくように、とは言われている。

おそらくフレイヤ自身もどうなるのかは分かっている。

雑念を払拭しつつ横穴をあける。

まず、大雑把に四角く。奥行きを持たせ、中に放り込む物が落ちないように気を付けつつ。

そうして短時間で開けた穴にアルフィアの魔石を奥まで入れ込み、ここに来る途中で手に入れた魔石も入れる。順番の指定が無かったので適当だが――

全ての魔石が入ったら現場から離れる。

「何が起るのか分からないが……。テントに戻るぞ」

「……はこ」

作業を終えたヘーデンはテントに戻る途中でフレイヤから託された眼鏡の存在を思い出した。

モンスターに気を付けつつオツタルを含めて掛けるように指示する。

ガラスが黒い以外は普通の眼鏡にしか見えない。

(……これは強烈な閃光から目を守る眼鏡ですね。あそこで何か起きるかもしれない、と……)

事情を察したりリルカは早速眼鏡をかけ、ベルにも一応かけて下さいとお願いした。

最後にオツタルもよく理解しないまま眼鏡をかける。

多少、視界が暗くなったが戦闘には支障がない。そうして時間が過ぎていく。

数分から数十分。モンスターを現れる側から打倒して時を待つ。

後からやってくる「ロキ・ファミア」を気にしながら。そして、その時が来た、らしい。

まず、穴の修復が始まった。遠めで視辛いが閉じようとしていた。

(修復されれば穴の中の魔石は潰れてしまいます。……それで、どうなるんでしょうか?)

五千万ヴァリスで買い取った魔石をいたずらに消費する危険性^{リスク}を冒して何も起きませんでした、で済むのか。もしくは済みますのか。

局のところ起きずに数十分も経過した。

ベル以外が諦めや絶望を感じていた矢先、青天の霹靂ともいえる事態が発生する。

例えるならば——盛大な呪詛、だろうか。

エエエエイイイヤアアア！

遙か上方からの大絶叫のような——

あるいはダンジョンの悲鳴だ。

あまりの轟音にベル達は耳を塞いで蹲うずくまる。ついでオツタル達も耳に手を当てたが視線は壁に向いたまま。

天から強大な魔法を打ち込まれでもしたかのような破壊音が遅れてやってきて、そのすぐ後に閃光が降り注いだ。

先ほどまでヘーデン達が居た壁を飲み込む形で。

もし、眼鏡をかけていなければ目を焼かれていたかもしれない。

(……視界が真っ白に……。眼鏡をかけても何も見えませんね)

(……うわー。眼鏡をかけてて良かった……)

(……良かった。定刻に間違いは無かった)

視界が白で埋め尽くされている間に強風が吹き荒れ、盛大な破壊音が聞こえてきた。

足元の地面も結構揺れた。

あまり現場に居るのは危険と判断し、ヘディン達はテントに戻るに事にした。

大音響のせいで互いに声をかける事も難しく、相手の服を引っ張る形で合図を出し合った。

閃光から感じる振動は少なくとも一つではなかった。そして、退避しながら部屋が崩壊していくのが分かった。

光りと音が止むまでテントの中に居座り続けること数十分——耳鳴りが治まるのと同時に白かった視界も薄まっていった。

(……あ、上から来ている「ロキ・ファミリア」の人達、どうなったんでしようか?)
現在位置は中心から結構離れている筈だが、被害が全くないとは言い切れない。

眼鏡を外し、視覚と聴覚が利くようになってからオツタル達に上の様子を見た方がいいか尋ねてみた。

ベルとヘディンは壁の様子を。

リリルカとオツタルは上層への出入れ口の確認にそれぞれ向かった。

まず、小部屋は部屋そのものが何かに穿たれたように消え失せていた。上に顔を向けると恐ろしく風通しの良い穴が見えた。

想像したくない事だが地上まで開いたのではないかと。だが、それも数刻も経てば塞がる。

（神の送還に似ているな。もしや、それが逆になった現象か？ それならばこのような結果になるのも頷ける）

天より地に向けて何かが落とされた。その結果がこの大破壊である、とヘーデンは予想した。

ベルは凄い事が起こった、という結果だけで思考が混乱していた。そんな慌てている彼をよそに部屋の修復が始まった。

アルフィアの魔石がどうなったのか、など問題にならないくらいの出来事に度肝を抜かれた形だ。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

修復が始まったので上層の被害状況が瞬く間に分からなくなった。見えた範囲で言え一八階層まで。

三〇階層から宿場街^{リヴィラ}まで降っているのはほぼ「ロキ・ファミリア」だ。

その更に上となると想像もつかない。

分かる事は階層が丸ごと落ちるような事にはならなかった。

広範囲の地形を落とすようなものではなく、局所的な穴を穿つ被害だけであつたから軽微で済んだ、といえる。

そうでなければリユー・リオンが危惧する魔法を反射するモンスターが現れても不思議

議ではない。

音が止み、新たな衝撃も無く——ベルは辺りをくまなく観察した。

小一時間経った頃、オツタルとリリルカが戻ってきた。

「途中で【ロキ・ファミリア】の方達に話しを聞いてきました」

側に居るオツタルは黙って威圧していただけ、と役立たずぶりを愚痴る。

軽く咳払いしてからリリルカは分かる範囲で説明を始めた。

「斥候達に被害はありません。待機している方達も唐突に起きた衝撃に驚いたけれど現場から離れていたので被害はないとのことです。……天井が幾分か砕けて、その落下物の対処で多少の混乱が起きた程度……」

オツタルに抱えられて直接一八階層を見てきたが野営場所への被害は——目視では無さそうに見えた。

その上の階層の事まではさすがに帰り際に聞くしかないけれど、と。

「天を貫く穴が開いた。状況を見る限り、そうとしか言えません」

「……やっぱり」

ダンジョンに穴が開くくらいで済むとは思えない。地上の被害も少なからずある筈だ。

通行人の安否や出店でアルバイトをしている神へステイアが無事かどうか。

神に何らかの異変があれば背中に刻まれた『神の恩恵』^{ファールナ}が反応する。それが無ければ無事だという事だ。

もし、地上から地下に向かつての攻撃であればとてもない規模の威力だ。何をどうすればそんなことが可能なのか、ベルには覚えがない。

「こつちは崩壊した部屋が治った以外は何も起きてないよ」

「そうですねー」

(……五千万ヴァリスの魔石が砕けちゃいましたし……。このまま何も起こらず、黙って帰っていいものですかね？ 何も起きない事に越したことはないのですが……)

何も起きず、このまま地上に帰り、ギルドに証文を提出すれば「フレイヤ・ファミリア」から正式に五千万ヴァリスが譲渡される。

やはり納得がいかない、と文句を言っても正規の手続きを取った約定であれば取り消しや取り返しは——強引な方法で——しないはず。

これからどうします、とリルルカはオツタルとヘディンに声をかけた。

二人は事態が進展しない事に疑問を覚えつつも女神からの指令を全うした事を認めるしかない、と思った。他にすべきことは指示書には書かれていなかった。

決断が出来ないまま立ち往生しても仕方が無いので、軽く食事を摂りましょう、と提案する。

テントに戻った四人は物静かに軽食を口に入れた。

オツタルとヘディンはいつも通りにしか見えないがベル達はとても気まずい思いだった。

何か起きるだろう思っていたのに——いや、実際に何か起きたのは確かだ。その後の経過が分からなくて困っているというだけ。

物静かな食事。そんな沈黙を破つたのは敵意をむき出しにしていた白妖精ホワイト・エルフのヘディン・セルランドだ。

見目麗しき男性だが口から出てくる言葉はどれも苛烈であった。

「当初の目的は達した。何も起こらなかった、とは私も言わない。もし、危険だと判断したのならば速やかに帰還する」

「……か、確認はされないんですか？」

つい当たり前のことを尋ねてしまい、案の定ヘディンは不機嫌な顔で睨みつけてきた。——元々そういう顔だとすると別の意味があるのかもしれない。

ベルに言われずともヘディンも状況が理解できなかつた。可能であれば調べたい。しかし、女神に報告せずに独断専行していいものか、判断に迷っていた。

「貴様の目的は我々があの魔石をどう扱うかの確認だろうか？ その目的は達した。これ以上、ここに留まっていれば身の安全は保障できない」

(そこで減額の交渉ですよ、ベル様)

と、リリルカが小さな声で助太刀する。

本当は満額で欲しいところだが大きな額をそのまま受け取るのは後々首を絞める結果になりかねない。ここは「フレイヤ・ファミリア」への貢献度のようなもの上げるために下手に出来るべきだと判断した。

武人オツタルは今のところ何の反応も見せていない。

「……いえ、このまま何もせずに地上に戻るのは非常に気まずいので……。可能な限り調査したいと思います」

「……何故、減額交渉をしない?」

「後悔しそうだと思ったからです」

真つ向からヘディンを見据えてベルは答えた。

良い顔をしたいか姑息な考えなどない意志を秘めた深紅ルベライトの瞳を輝かせながら。

確かに彼の言う通りだ。調査を後回しにするのは色々和不味い気がした。

元々はフレイヤの指示で行ったおこな。その結果で起こる事も「フレイヤ・ファミリア」の問題として処理するつもりで、ベル達に責任を押し付けるような卑しい選択はそもそも存在しない。

(……好きにしろ、と言いたいがこいつはあの方がフレイヤ様が気にされる男だ。非常に癪だが無碍

には出来ない)

「調子に乗るなよ、愚兔ぐさぎ。貴様の手を借りずとも我らだけで充分だ」

(……ベル様、リリ達はあくまで彼らの様子を見に来たのであつてお手伝いに来たわけではありませんよ)

そもそも「フレイヤ・ファミア」の手助けが出来るほどの信頼関係も無い。

リリルカの言葉にベルは唸りつつも悩み続けた。

極秘任務の様な体ていで下層域に居るのにあまり目立つことをするのは後々不味い事態が起きる、気がする。それに本拠ホームで留守番している仲間の事も心配だった。

「ヘステイア・ファミア」は既にベル一人だった頃とは違う。守らなければならない仲間が居る。団長の独断で動き続ければ困るのはリリルカ達団員だ。

「……引き時を見誤れば取り返しがつかなくなる事もある。お前は少し後ろを見るべきだ」

オツタルが重い口調で言った。

今回は自分ベル達の荷物が殆ど無い。その上で未踏領域を調査しよう言い出してしまった。

端はたから見れば無謀としか言いようがない。かといって見なかつた事にもできない。

「()より下に行かなくとも上の様子は絶対に見ることになるのですから。危険なとこ

ろはオツタル様達に任せましょう」

(……確かに。下層より上層の方が被害が大きそう)

今のベル達にとつて三〇階層は公式の記録に残せない領域だ。いくら正義感から調査を買ったとしても周りを心配させる原因になるのは確実だ。それにこうしている間にも地上部と「ロキ・ファミリア」や宿場街リッヅラに滞在する冒険者達によつて原因究明が始まっている筈だ。

全く調査をしないで帰る事は無い、という結論を出したベルは荷物の確認をする。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

絶叫の様な大音響の事を考えつつ部屋の中を見回す。

破壊個所の範囲が小さかったからか、大きな穴は半分以上も塞がりかけていた。さすがに即座に、とはいかないようだが。

モンスターが生まれる前に上層を目指しつつ、被害個所を重点的に調査する事になった。下層については今回は諦める方向に舵を切る。

「ヘスティア・ファミリア」を引き連れて調査する気が無かったからだ。

(……五〇階層まで被害が及んでいたら調査に行くのか、と言われれば難しいとしか言えない)

今のベルの実力では一人で深層域の踏破など不可能である。それくらいは弃えてい

る。

仲間達の実力の底上げも無しに向かう事も出来ない。そして、あれだけの事があつたにもかかわらず、リリルカや「ロキ・ファミリア」に被害が無い、というのが心に安心感を与えた。

TENTOを畳み、上を目指すのだが——今回の目的には報酬が関わってくる。

余計な荷物を持ったまま下りない為に我慢してきたが、帰りはダンジョンの資源を回収していく約束になっている。

それをオツタルにそれとなくリリルカが言うと分かっている、と短く答えた。

「……もし、充分な量を確保出来たら一千万ヴァリスまで下げてもいいのでは？」

(元より吹っ掛け過ぎです)

「もし、許してくれるなら支援、というか義援金として拠出していただけませんか？ 僕

達はダンジョンのドロップアイテムだけでいいです」

「ならば名義はベル・クラネルだ。今回の事態に首を突っ込みたいのであればそれを受け入れろ」

ヘディンの棘のある言葉にベルはありがとうございます、とお礼を述べた。

金額についてはお任せします、と続けた。

「何を言っている。「フレイヤ・ファミリア」は^{びた}鏝一文出す気はない。貴様が数千万ヴァ

リスを市中に撒き散らすんだ。我々が些事に女神の財産を投じる事は無い」
「えっ!？」

(……名義がベル様ならヘディン様の言い分は別におかしくありませんよ。街の人達はベル様、というか「ハスティア・ファミリア」の私財による義援金を受け取る事になり
ますから)

金を出す相手の名前が「フレイヤ・ファミリア」かベルかの違いだけ。

どちらにしても被害者に行き渡るなら誰の金でもいいわけだ。

ベルが「フレイヤ・ファミリア」に金を出させる事と報酬として受け取った金をどう
使おうと大差が無いのだから。

「……仮にオツタル様が義援金を拠出する、というのは無理ですか？」

「フレイヤ様の私財を俺の都合で放出する事など出来る訳が無い」

「……ごもつともです。今回の場合はフレイヤ様自身が私財を投じる形にならなければ
意味がありません。ある意味、賠償金ですな」

自分に責任があると認めれば賠償金になる。

素直な神様であればそれもありうるが――

以前、異端児セレスの最強格である『アステリオス』との戦闘でオラリオの街並みを結構破
壊した。その賠償金がベルに請求された、という話は聞かない。

様々な騒動に巻き込まれた時も建物の修繕費用を求められたことはない。多くは相手側に非があつたから免れていたのかもしれないけれど。

「ベル様。ここで今までの贖罪として報酬を放出するのも良いかもしれませんが」

「……うん。……今までの贖罪というところが言い訳出来ない」

ベルが反省を感じた頃、具体的な金額について考えなければならぬ。

実際の所、どこまで出せるのか、オツタルに尋ねてみた。一応、希望額に沿えるよう努力します、と付け加えて。

「二千万だ」

ヘデインが即答した。

金額を聞いて思わずリリルカは呻いた。

「お前達が好きにしているいい金額だ。それなら私も文句は言わない」

「……に、二千万でも結構良い金額ですよ」

「街に貢献できると思えば安いくらいだ。我らは興味が無いから関わり合いにならないだけだ」

仲間の言葉にオツタルが呻いた。それでいいのか、と聞きたそうにしている。

無駄な問答を避けようとしているのか、ヘデインは証文の修正を【おっしや猛者】に命令してきた。

今までの探索において命の危険を感じなかつた機会など早々無い。

ここは冒険者とモンスターが殺し合うダンジョンだ。

(亀裂は一つ。なら、迎撃か……)

ダンジョンに現れるモンスターの多くは冒険者が通過しようとする^と現れる傾向にあり、無視して逃げる事は基本的にしない。

もし、他の冒険者が居た場合、他人に擦り付ける行為とみなされて叱責を受けてしまう。それを冒険者界限では『怪物進呈』^{バスターバレット}という。

非戦闘員であるリリルカを除く三人がモンスターの出現に警戒して臨んだ。そして、壁から生まれたのは――

薄暗い洞窟の様なダンジョンではあつたが視認が困難なほどの暗さはなく、壁から魔石による発光のお陰で比較的周りの色合いが分かる程度には明るかつた。

そんな光量の中で見えた限りでは全体的に青白く、人型である。

肌にくつつか鱗の様なものが張り付いている。つまり『竜女』^{ツイヅル}に特徴が似ているモンスター。

それが高い位置から落ち、顔を強^{したた}かに打ち付ける。

「……あつ」

思わず声が出たベルは手を出しそうになる程、心配した。

見掛けが人型だからか、通常のモンスターであれば壁から生まれてすぐに襲い掛かってくるものだった。そうではない場合の反応に苦慮する。

ウイーネは少女だったが、今回の竜女ウイーヴルは手足が長く大人のようだ。

最大の特徴は腰に至るほどの長い——白銀とも白雪の様な白さ——髪。

「……いたた」

そして、顔を打ち付けた時に出てきた声は紛れもなく共通語コイネーだ。

手に黒いナイフを握り締めつつも声を聴いた瞬間には突進する心構えが崩れてしまった。

側に控えているオツタル達とリルルカもそれぞれ驚きに満ちた顔になった。

(ウイーネより大きな体格……。でも、変身前の姿だよ)

額を押さえつつ何か上体を起こす白髪ウイーヴルの竜女。

側に冒険者が居るのに警戒感がまるで無い。ついベルはオツタル達に顔を向ける。しかし、良い助言は貰えなかった。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「……あ、ああ。はい、大丈夫ですよ。それより鼻血とか出てませんか？」

声を頼りに竜女ウイーヴルがベルに顔を向ける。

形のいい乳房に気が付いて思わず頬を赤らめたベルは顔を背ける。

一瞬見えた彼女の顔は何処か見覚えがあるものだった。

目蓋を閉じていたが優しそうな柔和な顔かんばせ。印象について、ごく最近見た記憶がある。

ジャガ丸くんを食べていたアルフィアに似てはいないだろうか。

彼女アルフィア ヴィールは竜女の亜種。または竜ドラゴニウト人のようなモンスターだった。だが、目の前に居るの

は自分達の知識にもある竜女ヴィールそのもの。額に赤い宝石がしっかりと付いている。

ウィーネが成長した様な姿にも見える。

「……えーと、ここは……ダンジョンですか？」

「はい。ここは三〇階層です」

「あらあら。そんなところに……」

一般的な冒険者であれば三〇階層と聞けば、それなりに身構えるものだ。

レベル2までの冒険者は一八階層たむろに屯するものだし、それより下に行く者は実力に自

信が無ければ行かないほど。

危険度の高いところに居る筈なのに彼女からはあまり危機感が伝わってこない。そ

れとも実感が伴っていないだけなのか。

(……まあ、爪がこんなに伸びて……。服も無いわ。……それどころか……)

竜女ヴィールは周りをせわしなく見回し、自分の身体の様子や額に手を当てる。

なにやら異常事態が起きたようだ、と彼女はすぐに気が付いた。それにダンジョンの

三〇階層など……いつ以来振りか。

手早く状況判断を済ませた後、改めて近くに居る白髪の子に顔を向ける。そして、軽く首を傾げて困ったわ、という仕草を見せる。

「……私、どうやらモンスターのようなね」

「そうですね」

（……可愛い男の子……。こういう子なら命を捧げてもいいかしら。それにしても三〇階層とは……。この子、どうやって来たのか、し……ら……？）

そういえば、と彼の後ろにも人の気配がある。覗き込むように窺うと見覚えのある顔が見えた。

身体の大きな猪人ポアズの冒険者。色黒で厳めしくて、いつも誰かに泣かされていた鼻たれ

小僧によく――

それと同時に武人オツタルも竜女ヴァイヴルに対して同じ、または似たような感慨を味わっていた。例えるならば昔お世話になった人物と邂逅したような――

「もしかして、坊やなの？」

「……【静聴】のメーテリア……なのか？」

彼女が質問した後で出たオツタルの言葉に花が咲いたように喜ぶ白髪ヴァイヴルの竜女。

その前にオツタルを坊やと呼んだことにベルとリルルカが驚愕し、いつも冷静沈着で

何事にも動じないヘーディングが僅かばかりに動揺を見せていた。

名前を言われた当人^{彼女}は薄く笑い始めた。知人に名を呼ばれた事がとても嬉しかったように。

11 魔王の旋律

暗黒期以前から迷宮都市オラリオで冒険者として活動している者は誰でも「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」の二大派閥について知っていた。

次点で「オシリス・ファミリア」が居たようだが、ダンジョン攻略や数々の武勇で言えばゼウスとヘラが最有力候補に挙がる。

今から一五年ほど昔——「フレイヤ・ファミリア」に入りたての少年であったオツタルは女神フレイヤのお眼鏡に適う冒険者になる為、死闘に近い戦いを繰り返してきた。

それ以外に何も無い。何も出来なかった少年時代。

ただひたすらに最強を目指し、強き者に挑み続けた。

後にレベル 6シックスに至るまでの彼は敗北の連続だった。

今でこそ都市最強の武人と称たえられているが、最初は非力なレベル1ワンの駆け出しだ。

強くなるには強い存在ものと戦う事。馬鹿の一つ覚えのように二大派閥に挑み続け、結局のところ満足な勝ち筋は得られなかった。

「ランクアップ」しても勝てず、それでも諦めない若き猪人ホアズ。

ある日、自分より年下の少女に挑み、返り討ちにされて地面に這いつくばっていると

別の少女が近づいてきた。

白雪の様な白い髪にとても冒険者とは思えない優しい笑顔が印象的だった。この者は先ごろ彼を手刀のみで打倒した少女の双子の妹である。

「……また姉さんに挑んで負けちゃったのね」

「……………」

ボロボロの少年を見て苦笑を滲ませながら心配してくれる白い少女。

年下の彼女は見た目とは裏腹に少年オツタルよりも強い、というのがとても信じられなかった。

姉と違い、才能に恵まれてはいないがレベル4フォーに至っていると聞く。

病気がちで滅多に外に出ない筈の彼女がどうやって「ランクアップ」したのか。

「私は優しいから坊やに暴力を振るわないけれど……。自分を大切にしない子はめつ、だからね」

何が『めつ』なのか、当時は理解できなかった。

倒れ伏すオツタルに話しかけ、抱き起こすわけでもなく、ひたすらに話し続ける。

口数の少ないオツタルからすれば相手が何を求めているのか、聞く立場なのに何も言えなかった。

完全に聞き手に回り、気が付けば痛みが消えていた。

当時の医療従事者から不治の病を宣告され、長く生きられないと言われている。

薄命に絶望するかに見えたがアルフィアは一縷の望みにかける決心をした。——全ては妹の為に。

短命の運命に抗う為を選んだのは冒険者になる事だ。ダンジョン産のアイテムや「リンクアップ」時に得られる『スキル』での延命に望みをかけた。

特に姉のアルフィアは自身も病弱の身の上であるにもかかわらず、執念を燃やし続けた。妹を救うために。心の支えでもある彼女が居たからこそ——

「姉さん、あの坊やに少し当たりが強すぎませんか？」

「強さを求めている奴には丁度いい筈だ。殺してないぞ」

自室にてベッドに横たわる妹の話しを聞きながらアルフィアは悪びれずに言い放った。

格上としての風格と立ち居振る舞いを取らなければ嘗められる。

自分の意見を通したければ力で証明する。この当時の冒険者界限では一般常識となつている方法論だ。

【ヘラ・ファミリア】の団員として過ごす彼女達もそういう教育を受けていたが妹は威張る事を良しとしなかった。

「……あいつを坊やと言っているが奴はお前より年上だぞ？」

「あらら、つい……。毎回姉さん達に伸のされる姿が可愛らしくて……」

好きで相手をしているわけではない。小僧オツタルが勝手に挑んでくるのだ、というのがお決まりの台詞せりふとなってきた。

彼はアルフィアとだけ戦っているわけではなく、他派閥の強豪には大体挑んでいる。

現在、彼が打倒の目標と掲げているのはアルフィアの他には「ゼウス・ファミリア」に居る【暴喰】のザルドという男性だ。彼もまたレベル5であり、立ち塞がる壁の一枚だった。

先日、そのザルドが何かの拍子にアルフィアの魔法か攻撃を喰らい、空を飛ぶという珍事が起きた。

「ヘラのお使いに行つた時の事だな。それがどうした？」

「……あの人は姉さんのお陰で強くなっている気がするわ。何というか、見た感じからして打たれ強そうに……」

「……確かに頑丈ではあるな。魔法の的まてによくなくてくれるから助かっている」

妹を喜ばせる為か、破天荒な行動が多いアルフィアの話は確かにメーテリアの心の支えになっていた。

自分よりも気弱で病弱な妹の行く末は決して明るくないというのに。

そんな事情も若きオツタルは承知していた。その上で定期的に強者たるアルフィア

「……正確にはメーテリア・ストラディイ。アルフィア様の双子の妹ですね。どういふ方は存じませんが……」

ギルドの資料にも各団員の詳細が記されているわけではなく、名前だけという事も珍しくない。

他派閥に能力を秘匿する上で、ベル・クラネルも似たような事になっている。

壁から生まれ出でた美しきモンスターは周りを確認し、己の身体を確認し、改めてベル達に顔を向けて一息ついた。

冒険者を見て急に凶暴になる事も無く。

(……本当にダンジョンのようですね。天界で姉さんと楽しく食事していた筈なのに……。魂だけなのに味覚があるというのもおかしな気分でしたが……)

彼女の感覚で言うならば天上の世界で平和的に過ごしていたら足元に穴が開き、真つ逆さまに叩き落され、気が付いたらダンジョンの中に居た。

落下中に気絶していたらしく、地中にどうやって潜つたのか思い出せない。痛みは先ほど打ち付けた額くらい。

「……ぎげんよう」

「あ、あー、はい。こんちには」

竜女が軽く頭を倒しながら挨拶してきたので反射的にベルも返礼した。

見た感じの印象ではとても優しそうなモンスターだった。それと顔つきがアルフィアに似ていなくもない、という感じだ。

曖昧なのはしっかりと認識していたわけではないから。それにアルフィアは太くて長い尻尾があった。

僅かな差異で全く違うモンスターだと錯覚してしまい、何とも言えない気分陥ってしまった。

アルフィアと同一のモンスターには到底見えない。

それと口調だろうか、と。

少しゆったり気味で耳に心地よい。

「……ベル様。見入っている場合ではありませんよ」

リリルカの肘鉄を膝に喰らい、ベルの意識は現実に戻った。

突如現れた竜女ツイーゼルをどうするか、考えなければならぬ。

順当であれば異端児ゼノスの隠れ里に案内した方がいいのだが、新しい拠点の場所が分からない。

「……んー。モンスターである私はこれからどうすれば良いのでしょうか？」

「……どうすればいいんだろう」

ウィーネの時は密売人から守る為に止む無く地上まで連れて行った。

もいかない事くらいは分かる。

「……ベル様。闇雲に助けてばかりいたからこういう時の対処方法が浮かばないので
？」

リリルカの指摘に思わず呻く白髪の少年。

後先考えない行動の弊害に言い訳のしようもない。ベルはただただ苦笑した。

悩むベルをよそに武人オツタルはヴァイザル竜女に一步近づいた。

偉丈夫である彼の行動に全く怯まないヴァイザル竜女。

(……もし、これがフレイヤ様の神意というのなら……、連れて行くのが正しいのか)
単にアルファイアの魔石を砕くだけならこんなところまで来る必要は無い。

このヴァイザル竜女のような復活を望んでいたはずだ。——予想外の人物が出てきてしまった
けれど。

念のために捕獲し、改めて確保するか処分するか決めてもらう。

「俺達はこのモンスターを連れて行く。その後の事でお前達に口出しする権利はない。
それをはつきりと言っておく」

ベル達には魔石の使い道を教えるために連れて来た、とオツタルは強めの口調で言い
放つ。

彼の言い分に思わず反論しようとしたが、元々の約束では確かにそうになっている。横

からかつさらうような真似は約束の反故にあたる。

殺す為なら連れて帰らず、現場で始末する。そうしないのはフレイヤが何らかの利用を企んでいるからだと思つた。

「それでも立ち塞がるというのなら力で証明しろ。俺を納得させてみる」

「……はい」

返事はしたものの【猛者】オツタルはアイズ・ヴァレンシユタインよりも強い。今の自分では勝てない。

なら、彼女を連れて逃げ続けなければいい。——そんなことを「フレイヤ・ファミリア」が許すとは思えない。

逃走は可能性の一つだが——現実問題として竜女の意志を無視する事も出来ない。異端児を救うのはまだベルの我がままだからだ。

「あら、地上に連れて行つてくれるの？ いいのかしら、そんなことをして」
緊張感のない調子で竜女が朗らかに言った。

一触即発の雰囲気は全く気付いていない、または気付いていて尚その態度なのか。白い髪的美しきモンスターは微笑みを絶やささない。

「……連れて行く前に、坊や」

「……ん」

久しく呼ばれていなかった敬称で戸惑ったが明らかに自分の事だとオツタルは思った。その竜女ツイツルの呼び掛けに少し不機嫌気味で反応する。

当時は本当に身体も小さく少年と呼ばれても仕方がない。だが、今は坊やと呼ばれるほど若い気分でもない。——フレイヤから子供呼ばわりされる以外では。

「私の勘だけどね。……警戒した方がいいわよ」

「何にだ？ 新手の……」

モンスターにか、と尋ねようとした時に急に全身に悪寒が走った。それは側に居るヘイン・セルランドとベル・クラネルに小人族バルツムのリルルカ・アーデも同様に。

それは唐突に感じた強烈な危険信号であった。

地の底から這い上がる悪意の塊のような——とにかくヤバイ何かが迫っている。

(……な、なんだ。俺が震えている？ いや、俺だけじゃないな)

(きゅ、急におしっこしたくなっちゃいました。何ですか、この異様な悪寒は!?)

(……こ、これは何だ？ 階層主とは比べ物にならない)

(……は、早く逃げないと……。この場に留まるのは不味い気が……。でも、逃げられるの、かな?)

四人全員が今すぐ現場から移動しなければ後悔する、という気持ちを抱いた。だが、オツタルを含めて足が竦すくんだように動かない。

最強を自負する【おうじゃ猛者】はそんな自分を叱咤し、強い意志で強引に束縛から脱した。動けるようになったものの額からたくさんの汗が流れている事に気づき驚愕する。

ここしばらく自分を恐怖させる存在に覚えがないので忘れていた。かつて自分は常にそれらと戦い続け、何度も死を体感させられた。当然、恐怖も抱いたが乗り越えてきた。

いずれ最強となる為に。

自分を拾ってくれた女神フレイヤに恥じない存在となる為に戦い続けた。

そう。これはまだ『頂天』に至れなかった時代に感じていた気持ちだ。

「……な、何かが来ます」

階層そのものが震動するような。人知の及ばない何かが競り上がってくる気配を感じた。

いわば明確な殺意、または攻撃衝動ともいえるもの。

ベル・クラネルにとつて牛頭人ミタマロス、階層主ゴライアス、アステリオスなどの強敵とまみえた時の気持ちに似ていると思った。

唐突に現れた先日の化石のようなモンスターと相対した時も結構怖かったけれど、今回はその何倍にも――

(……駄目だ。怖がってばかりじゃ……。三〇階層に階層主は現れない。レベル7セブンの

上層への通路が見えるころ、一層強い震動が発生した。敵はすぐ近くまで来ている事を肌身感じた。

走りながらヘデインの様子を見ると早く放せと無言の睨みを見せていた。

三人を通路に置いて武器を取り出す。ヘデインはベル達と共に上を目指すことにした。

言葉は無い。それぞれの役割は理解していた。

「!？」

上の通路に登りつつベル達は取り残される形のオツタルに顔を向けた。そして、それを見てしまった。

都市最強の男と評されるレベル7【おっしや猛者】オツタルが光線としか言いようがない攻撃を顔面に喰らった光景を。

構えた武器は一瞬で碎け、成すすべなく攻撃を打ち込まれた彼の身体がゆつくりと浮いた。——ベルの目からそう見えただけで実際はもつと早い。

何故か、周りの動きが遅く見えてしまっている。

(オツタルさん!?)

手を伸ばそうとしても身体が重く、それどころか一步の踏み出しも遅い。

極度の集中力が見せる遅延の世界。思考が身体の動きを置き去りにした。

オツタルの身体がある程度浮いたところで本来の時間に戻り、ものの一瞬でベルの視界から消えた。ついで聞こえたのは壁に激突する衝撃音だ。

一体何があつたのか、全く理解できなかつた。

(なな、なんなんですか!?! オツタル様が消えた!?!)

「……何か来る」

今の攻撃が止んだ瞬間に震動や恐怖などが霧散していた。そのことにヘーデンはいち早く気づき、杖を構えつつベル達の前に出る。

他派閥の護衛は不本意だが女神フレイヤの意向に逆らうわけにはいかない。あくまで仕事として行う。

怖気づく彼に自分で何とかしろとは言わない。今言えるのは迂闊に出るな、だ。

しばしの沈黙の後、通路の奥から何かが見えた。上から覗き込む都合で上半身が見えづらいが青白い脚がまず出てきた。靴は履いておらず人間に酷似した形の裸足だった。

先ほどの竜女か、と思うと何かが違う気がする。状況からも気配が違っていた。

白い髪の竜女はベルの印象ではとても温和で攻撃的なものを感じなかつた。

「……降りてこい」

通路の奥から低い声がベル達に投げかけられた。

オツタルを打倒したのであれば他人のフリして逃げる事はおそらく出来ない。それ

と既に相手に察知されている気がした。

降りなくても向こうはきつと襲ってくる。それに——共通語コイネーを使った。

声は先ほどの竜女ウイザルのものではなかった。そして、聞こえた声はつい先日聞いたものに
よく似ていた。

閉鎖された空間に居る為か、重低音に似た震えを感じた。

(……)の声。まさかあの人!?)

もし、想像している人物であれば即座に殺される事は無い、筈だ。

聞き訳もい、と思う。

非常に曖昧な予想ばかり出るが言う通りにしなければ全員がやられてしまう。オツタルを打倒した謎の能力で。

相手の正体に見当がついた瞬間、【おうじや猛者】を襲った攻撃にも予想がついた。

いつもお世話になっているエルフの冒険者【疾風】のリュウ・リオンを一撃で昏倒させた凄まじい速度で打ち出される打撃だ。

距離的に直接殴ったとは思えないが、何らかの魔法の力が関わっていると思われる。

(見えたのは閃光のようなもの。雷撃? 炎ではないし、水でもない)

疑問を感じつつヘーデインを先頭に三〇階層の通路に戻る。そして、見た。

腕を組んで直立した姿勢を保ち、長い尻尾を地面に叩きつける強面こわもてのモンスターを。

それは額に宝石の無い竜女ウイトゥルとも竜人ドラゴニユートともいえるような、強者の風格を持つていた。

ふとオツタルがどうなったのか視線をさ迷わせると近くの壁に頭を埋めたまま——壁に刺さって身体が宙ぶらりん——身体を弛緩させたような姿を発見した。

大柄な体格を持つ冒険者をどのような方法を用いればそんな現象に出来るのか。

それを見た面々は一気に全身から汗が噴き出した。冷静なヘーデンでさえも。

「……思わず怒りに任せてしまったが。溜飲は下がった。……その小人族バルックム」

「は、はいい！」

「五分くらい経ったら掘り出していい。それまでそのままにしておけ」

「……え、えーと。生きていらっしやるのですよね？」

馬鹿な事を聞いている、とリルルカは思った。だが、自然と言葉が出た事に驚き、そして——聞き覚えのある声に改めて相手の正体に気付いた。

まさか、という思いがあるが現実問題として「**猛者**おうじゃ」をぶちのめせる可能性があるとするれば彼女以外に誰が居ると言うのだ。

孤高の女王にして迷宮都市オラリオに悠然と足を踏み入れた最強格の異端児ゼノス——

【静寂】のアルフィア・ストラディ。

以前と同じ姿でベル達の前に現れた彼女は長めのため息をついた後、口を歪めて不満を表す。

たものだった、とは到底信じられないのだが、不思議と納得できた。

リリルカはヘディンから荷物を受け取り、彼女の下に向かう。攻撃の意志はないようだが、警戒は怠らない。

「こ、攻撃しないでくださいませ」

「……ああ、約束しよう。……とここでまた何年か過ぎたのか？」

「いえ、数日です。もう五日になるでしょうか」

リリルカの言葉を受けて彼女は素直に頷き、他の者も来ていいぞ、と指示する。それとヘディンにはオツタルを開放していい許可を与えた。

ベルはまず大きく息を吐き、次に何を言えいいのか考えた。

唐突な別れになり、唐突な再会になったものだから挨拶の仕方が分からない。

彼が戸惑う間、アルフィアは爪の手入れ用の鑢やすりや下着を受け取る。改めて名乗るまでもなく、お前達の思う通りだ、と彼女は呟くように言った。

肉体が崩壊したモンスターはそのまま再復活するわけではなく、魂の所在は一般的には考えられていない。

他の異端児達ゼノスも突然自分の意識というものに目覚めて戸惑いを覚えたという。

言葉に関しても誰かに教えられたわけではなく自然と話せるようになっていた、というのが彼らの言い分だった。

「……天界とやらで妹や昔の知り合いと共に楽しく食事を楽しんでいたところを叩き落された。遙か上空から地下深くまで落とされる気持ちがお前達に分かるか？」

静かな口調だが段々と怒りが膨れ上がるのが分かり、ベルが委縮し始めた。

不満のはけ口は主に「フレイヤ・ファミア」のようだ。気絶したオツタルの側に居るヘーデンに唸るような威嚇する態度を見せた。

神々が住む天界は地上世界よりも華やかで就寝も食事も基本的に思うがまま。幸せな時を長く過ごす為だけの世界らしいが娯楽が無い、という愚痴をよく聞く。

その為に神々はちよくちよく地上を覗き見ている。その中に見知った邪神エレボスの姿を見かけたので思わず力いっぱい殴ってしまったがすすきりした、と彼女は感想を述べた。

(……まさか、さっきの悲鳴はアルフィアさんの?)

悲鳴というか天界から叩き落された恨みごとの様な絶叫。

どのような方法かは知らないが、と彼女は状況を告げる。既に下着を穿いたのでベルは彼女の姿を見る事をリルルカから許された。

改めて竜女ヴァイヴルの強化種の様な姿のアルフィアを見て、無事でよかったと思うべきか再誕おめでとうございます、と祝辞を述べるべきか迷う。

以前と同じモンスターで復活してきたことも疑問に残るのだが、本人の資質か何かが関係しているのか。

うとしない。明らかに無視しているように感じられた。それとオツタルの顔が酷く腫れあがっていた。

レベル7相当の『耐久』を持つ彼がこんな状態になるとは予想だにしなかった。しかも気絶している。

ベルがオツタルの顔を見たので、アルフィアが手を軽く振る。

「……直接殴ればいくら私でも脱臼くらいはする。あれでその程度の怪我ならすぐに目が覚めるだろう」

(……あれでその程度ってどのくらいの破壊力なんですか!?)

と、ベルとリルルカは同じ文言を思い浮かべて絶叫した。

第一級冒険者の世界ともなると桁が違う話しがちらほらと聞こえてくる。それは一見するとまさかそんな、と思うほど非常識なものが多いが——おそらく事実が多分に含まれていると今しがた理解した。

「いつもは撫でる程度だったが……。今回ばかりは八つ当たりだ。主犯がはつきりしていたからお前達にまで当たろうとは思わん」

「そ、そうですか」

落ち着いた頃合いに通路奥に置いてきてしまった白い髪のヴァイヴル竜女を思い出した。

その事をアルフィアに尋ねると手数だが連れてきてくれ、と頼んできた。自分で連れ

て来ると言わなかった事に少し違和感があった。

ベルが急いで向かう間、アルフィアはリリルカにいつもの瞼を閉じた顔を向ける。

「私が唐突に死んだ時、あの子はどうしていた？」

「べ、ベル様ですか？ かなり落ち込んでいました」

「……そうか」

答えを聞いてから身体の力を抜き、大きく息をつく。

彼女が物思いに耽るような仕草を見せただけで周りの張り詰めた緊張感が解けた。

見た目は凶暴そうなモンスターだが、人間時代の記憶を持つ為か、不思議な印象を受
ける。

軽く調べた感じだと相当の実力者である事は勿論の事、最年少で「ヘラ・ファミリア」
の幹部になったとか。

最終的な実力はレベル7。それも病弱の身でありながら、というところが恐ろしい。

「健康体になったと思っただが、このモンスターの身体にも弱点があるようだな」

「……そんなこと言っているんですか？」

「構わんさ。……そこに居る奴らが私を欲しているんだろう？ 迂闊な事をすれば価値

が下がる事を教えてやらねば。なあ、小僧共」

そう言われてヘディンは口を堅く結んだまま彼女を睨みつけるだけで言い訳しな

かった。

オツタルを倒されたことで屈辱を受けた事に等しいがフレイヤの指示がある為に仕返しが出来ない。

指示が上手くいったならば、丁重に扱うように、と。

フレイヤには確信があつた。そうとしか思えない。

ただし、これは蘇生魔法ではないし、神の意志によつて死者を復活させる方法などへデインの記憶には無い。

——そんな方法があれば迷宮都市オラリオに墓所など作られたりしない。

(……しかし、五日ほどか。フレイヤが事を急がせたのか？ それともダンジョンがそれを許容したというのか？)

漸くあらゆる軛くびきから解放され、妹と幸せな時間を送れると思つていたのに。

体感的には仲睦まじい昼食の時間を堪能していた最中だった。その世界では思考力が衰え多幸福感が支配する。

そうして時が過ぎて何も考えられなくなり、自分達は新たな生命へと転生する為にまつさらな状態にされる。そういうものだと思つていた。

多少の未練が残るものの死した者の末路など考えても詮無い事だ。

(同じモンスターとして復活したようだな。魔石のせいか？ 手足の感じから顔の造形

も前と一緒だと思うが……。醜いモンスターよりましと思っておこう)

彼女が思索に耽つて数分後に白髪の竜女ヴァイヴルを抱えたベルがやってきた。

急いでいたが、他のモンスターに襲われてヴァイヴルいる感じはない。

——ここに来る前に件くだんの竜女ヴァイヴルを見た彼女アルフィアは別の意味で驚いたが怒りを優先させ、気になる事を棚上げした。

連れてこられた竜女ヴァイヴルにアルフィアは気恥ずさを感じながら顔を向けた。

姿こそモンスターだが間違いなく妹のメーテリアだ。ヒューマン人間時代の顔つきに似た種族でなければ気付かなかつたかもしれない。

アルフィアとメーテリアはこの階層での邂逅が初めてではない。先にも述べたように天界で昼食を摂る時に会っている。今は互いにダンジョンに落とされ、モンスターとして限界したことに戸惑っているところだ。

「……困った事態になったな」

「私はとても面白いと感じておりますよ」

困惑する姉をよそに妹は楽しそうにほほ笑んだ。

常に病弱で作業のようにダンジョン攻略に連れ出される以外は面白みのない生活が続いた。

最初の内は生き急ぐような戦いが続いたが後半はどうだっただろうか、と姉は思い返

す。

妹は最期まで幸せだったのだろうか、と。

「リア……。その子はベル・クラネルというそうだ」

そう言われた妹は姉そっくりの顔かんはせをベルに向ける。

彼の頭から足元まで眺めるように顔を動かした。

白い髪に深紅ルベライトの瞳。——かつて腕に抱いていた面影を残す『あの子』の事を。

しばらく眺めた後、両手を合わせて一層輝く様な笑顔を見せる。

「初めまして。私、今日からメーテリア・クラネルと名乗る事に致しますわ。よろしくの

ほどを、お兄ちゃん」

「お兄ちゃん!？」

「良かったな、ベル・クラネル。新しい妹が出来て」

うんうんと納得顔のアルフィア。

突然の事にベルは顔を真っ赤にして混乱した。

彼の困惑振りに口元に手を当ててまたも微笑むメーテリア。ただ、内心では涙が出る

ほど嬉しがつっていた。

クラネル姓を名乗る白髪の少年など他に思い至る筈が無い。そして、姉がどうして彼

を自分の下に寄こしたのかも理解することが出来た。

も碧玉の瞳だった。

「予定外が起きて少年との観光が途中だ。……今回はメーテリアも居る。三人での観光を望む」

「まあ。それは楽しみですわ」

喜ぶメーテリアに姉は苦笑を覗かせる。

嬉しい事だけであればいいのだがな、と小さな声で妹に言っておいた。

地上に上がった後、おそらく「フレイヤ・ファミリア」に使い潰される。予感というより確定事項だ。

自分の知るフレイヤであればそれくらいやりかねない苛烈さがある。だからこそ「ハラ・ファミリア」を壊滅させられた。

あの女神は実に執念深い女だ、と。

「正味二日ほど貰いたいな。……どの道、我らはまともに街で暮らせない身だ」

「……今この場で判断することは出来ない」

「分かっているさ。だから……、言う事を利かせる抵抗くらいする、とフレイヤに伝えておけ」

強豪「ファミリア」に対して剛毅な発言が出来るのもかつての最強と呼ばれた「ファミリア」の団員だった経験からか。

リリルカから見ればとんでもない発言にしか聞こえないし、それを聞くオツタル達の苦渋に満ちた表情は見ているだけで生きた心地がしない。

【おうじや猛者】が言っていた、文句があるなら力で証明しろ、を地でいく内容の数々――

「……………で？ 小人族バルムムは何か言い分は無いのか？」

「えっ？ ……えっと、リリはあまりの事に思考を放棄したくなりました」

「……………そういうものか。お前も上を目指せば平気になってくるぞ。サポーターでもやりようによってはレベル6くらいになれる」

（……………相当時間がかかりそうですね。ですが、確かにベル様と何度も死地を潜り抜けてきましたし、ここいらで「ランクアップ」でもしたいところですよ）

「……………えーと、ベル様の貸与ですが……………ドロップアイテムの採取をしてくれればその条件を呑みます。……………というより貴女方はベル様に対してどういう思いを抱いているのですか？ 異性交遊は主神の都合で色々問題があるのですが……………」

今を時めく冒険者にしてかなり女性に人気がある。

ここで釘を刺しておかないと後々酷い事になりそうな予感がした。妹発言もうやむやなまま。

それと今思い出した、とりリルカはヘスティアの言葉を思い浮かべる。

アルフィアはベルの家族だ、という発言について。

「一言で言えば愛している。この私がそう思うほどにな」

何の遠慮もせずにアルフィアが言い切るとメーテリアは苦笑して姉の背中を叩き出す。

見ているだけなら仲睦まじい姉妹なのだが――

「一目ぼれって奴ですか？」

「違う。……恋人関係とは違うのだが……。これ以上は日数の増加と引き換えだ」

思わずクソと言いつうになつた。だが、舌打ちまでは止められず、案の定アルフィアはリリルカの反応を見て口元を歪めてほくそ笑んだ。

開き直つて交渉を無かつた事にする、とも言えない。もし言えばオラリオの騒動に対する責任を押し付けられる可能性が高まる。何より地上から地下へと打ち込まれた謎の光線による被害にベルとリリルカが――多少なりとも――関わっているのだから。

(……くうく。すつこい知りたいですう)

「あつ、そういえば、坊や。こちらへいらつしやい」

そうメーテリアが手招きする相手はベルではなくオツタルだった。

リリルカは思わずベルを見たが方向的に違つていた。

「……俺はもう坊やではないのだが」

「女神の脛を齧る者は坊やで充分だ。そもそも貴様には自分の欲が無い」

「……姉さん。その話し、長くなりますの?」

妹の指摘に軽く呻き、姉は口をつぐんだ。オツタルとアルフィアには浅からぬ関係があるようだがベル達が聞いていいものかどうか迷うところ。

アルフィア一人だけなら上位者としての佇まいに恐れ戦おのいていた事だろう。それなのに妹が側に居るだけで場の雰囲気^{おの}が和らぐ。

力関係で言えばメーテリアが最上位に居るような気がするし、実力ならアルフィアが一番なのかもしれない。

不思議な関係性にベルとリルルカは戸惑いつ放しだ。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

メーテリアに呼ばれたオツタルは不満を滲ませつつも彼女の側に駆け寄り片膝をつく。

かつてまだ最強だの頂天とも呼ばれていなかったただの冒険者であった彼は傷つき倒れ伏すたびに彼女の癒しを受けていた。

好いていたわけではないだろうけれど、病に苦しむ彼女に比べればまだ再起の可能性があり、未来ある若者に諦めてほしくなかったのかもしれない。

自分の病は治せないが他者を癒すことが出来る。使える力は使ってこそ価値がある。そして、彼の傷を治しつつメーテリアは言った。

こんな事でも僅かばかりの【経験値】エクセリア稼ぎになるらしいですよ、と。打算ありき、と当時は思っていた。他に考える余裕も無かった。

だが、今は本当にそうだったのか、と疑問を覚える。

【乙女の泉】カナートス

謳うように紡がれた長文詠唱と魔法名が辺りに響く。

耳にとても心地よい旋律にベルは思わず茫然としてしまった。

メーテリアの癒しの魔法は他の回復魔法に比べれば驚愕に値する程ではなく、単純な回復量で言えば王族ハイエルフのリヴェリア・リヨス・アールヴの方が勝まさっている。

各冒険者が身に着ける魔法は本人の望みに見合い、可能な限り叶える、というものが多い。

それは良いものも悪いものも関係なく。

「全快とはいかないけれど、いつものように見栄えの良い顔には出来たわ」

「……ありがとうございます」

ほんの短時間で腫れが引いた後、いつものように彼は礼を述べた。

単なる切り傷や腫れくらいなら完治に近いくらい治せるが失った部位の再生までは出来ない。それと重い病気にも効果が無い。

骨折に関してもヒビ程度なら直せるが粉碎骨折ともなると絶望的だ。

——この魔法の真の効果は実のところ別にある。

「……あらう？ いつもならずぐ不調になるのに……。平気のようだわ」

いつもであれば魔法を使った後は身体のあちこちが痛む。程度の差こそあれ、全くの無痛というのはあり得なかった。

今は全く何の痛痒も感じない。無理に探せば精神力の消費マインドによる疲労くらいだ。

「んっ？ ああ、モンスターになったからだな。だが、安心するのは早いぞ。体内の魔石が傷つけば終わりだ」

「あ、ああ……。そうよね。私達、モンスターだったわ」

妹に対して温和な態度を見せるアルフィア。

【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインと戦っていた苛烈さなど微塵も感じさせない。ここに居るのはモンスターだが姉妹愛に溢れた二人だけ。

胸や腹などを触り、痛いところが無いか確認し終えたメーテリアはベルの側に駆け寄ってきた。

「さつきみたいになっこしてくれる？ お兄ちゃん」

「……その呼び方で行くんですか？」

「……リア。ベル・クラネルにとつて下層域はまだ難しいんだ。我儘は一八階層についてからにしろ」

外套こそ身にまとっているけれど何か声でもかければいいのか、足元から見える尻尾は何なんだ、と尋ねた方がいいのか。

現場はちよつとした混乱状態になった。

ちなみにメーテリアは抱つことが許可されず普通に歩いている。牽引役はリリルカだ。何故か、ベルはアルフィアの手を引くことになった。

上に行く前に彼女は言った。実力差から決めた、と。

メーテリアならばレベル1のリリルカの手をうっかりで引き千切る事はないだろう、と。

（うっかりって何ですか?! そりゃありりはレベル1ですけどね。全く持って反論の余地がありませんけれどね）

憤慨しつつも【静寂】の意見に納得した。

戸惑う【ロキ・ファミリア】の冒険者にそれから何人かすれ違ったが――

二七階層に到着し、今だ瓦礫を晒している様子を見た後、メーテリアはリリルカを抱き上げ、文字通り跳躍した。ベルもアルフィアに抱えられて飛んだがすぐに拒否された。主に彼が恥ずかしさを覚えて。

折角運んでやろうと思ったのに、と不満を見せられた。

「ちよ、ちよつと待つてください。素材の採取を忘れていますよ」

「そうだった。奴ら冒険者が邪魔で忘れていた」

この辺りは下層を目指す冒険者の姿が多くなり、直じきに「ロキ・ファミリア」の幹部も降りる筈だ。

問題は「勇者」フレイバー

フィン・ディムナがアルフィア達をすんなりと通してくれるか、だ。対面を避けていた「フレイヤ・ファミリア」と出くわすことになると思うと不安を覚えて仕方がない。

まず、手近な広間ルームに向かい、壁などを叩いてみる。

素手のアルフィアに金槌などを渡し、以前の探索でメモしていた内容を指示する。

二五から二七はダンジョンの修復の為、モンスターが現れない。そのせいか、酷く静かな印象を受ける。

二四階層からモンスターとの戦闘が始まるだろうけれど――

「……竜女ヴィヴルの能力つてどう使うのかしら？」

「さあな。額の宝石は取るなよ。おそらく理性を失う」

姉妹の様子を近場で見ながらベルも壁の掘削おこなを行う。

のんびりと話しが出来るのは一八階層についてから。それまでは現れるモンスターに警戒しなければならぬ。だから、色々と聞きたい気持ちを我慢している。

特にアルフィアとの別れが唐突過ぎて、心配で仕方が無かった。――ただ、平然と拳

で壁を砕く様を見てしまうと、何とも言えない気持ちになる。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

アンダー・コリアル

アンダー・パール

迷宮珊瑚と迷宮真珠を採取しながら更に上を目指していく。時折現れるモンスター

もきつちりと討伐して。

高レベルの冒険者が四人もいる贅沢なパーティに危機感というか敗北の二文字が全く浮かばない。だが、彼らは全員他派閥の冒険者だ。

ベルはもちろんリルカも彼らの足手まといにならないように戦い方を目蓋に焼ける。付ける。

メーテリアでさえ柔らかな笑みを浮かべながら手刀で襲い来る虫型モンスターを叩き落している。

見ている分だとしても簡単そうにやっつてのけている。だが、ベル達からすると素早く読みにくい軌道を取るモンスターの動きにどうしてついていけないのか不思議でならない。

擬音としてはペシ、ペシという気の抜けたようなものだ。

「……リア。ここいらのモンスターはベル・クラネル達にやらせろ。お前は病み上がり
の様なものなのだから……」

「折角健康体なのですから少しは頑張りたいのです」

腰に手を当てて鼻息を強めに出す妹。

今までの苦悩を思えば自由に動けるといふのはとても幸せな事だ。それでも姉としては心配だった。

(……姉さん。どうして他人行儀のように振舞うのですか?)

(……私達はモンスターなのだ。その面でものを言つても仕方ないだろう。……感動の対面というのはベル・クラネル自身が気付いてこそ映える)

(わ、分かりました。お兄ちゃん路線で行きます)

(そうしろそうしろ。その方が……可愛いぞ)

小声でやり取りする姉妹。しかし、襲い来るモンスターの猛攻の中で、だ。

共に行動しているオツタルとヘインは完全に無言だ。ある意味では仕事が終わったから会話も同様だ、と言わんばかりである。

一応、姉妹を無事に「フレイヤ・ファミリア」の本拠ホームに連れて行く仕事は忘れていない。

「鉱物関係は随分と溜まりましたね。モンスターからのドロップアイテムも充分に……。そういうばオツタル様達はこういつた資源はどうされるのですか?」

「我々の仕事は奴らを連れて行く事だ。それ以外の物については関知しない。好きに持って行けばいい」

「深層域の攻略ではないから「フレイヤ・ファミリア」の損失は軽微だ」

武器を一つ破壊されたはずなのに軽微と言いつける武人。

分け前について少しだけ危惧、というか気になっていた。食事代くらいは——と思つたのでダメもとで彼らに物資の打診を試してみた。

するとアルフィアが助太刀するように、小人族バルムムはともかく、少年はしつこいぞ、と言つた。

「かなりのお人好しだそうだからな。黙って受け取つておけば静かになる」

「……分かった」

(……僕、そこまでしつこいかな?)

(さすがです、アルフィア様。ベル様は欲が無くて困ります)

ベルは自分の評価が実はとても低いのでは、と不安を覚えた。

交渉ごとにおいてリルルカに任せきりだったけれど、それ以外の分野では確かに周囲が迷惑を覚えるような事が多々あるかもしれない。

誰の気が済むのか、という問題は判断が難しい。自己満足と言われてしまうと二の句が告げなくなる。



報酬についての懸念が払拭され、一八階層にたどり着くと多く冒険者がせわしなく行

き交う姿が最初に見えた。

天井の水晶が激しく壊れており、辺りが少しだけ暗くなっていた。

以前、この階層に階層主ゴライアスの強化種が落下してきた事があった。その時と状況が似ていたが大型モンスターの姿は確認できない。

(……まあ、普通に大混乱してますね)

分かっていた事だが改めて見ると被害の甚大きさに胸が押しつぶされそうだ。――べルは全く悪くないのに。

この壊れた水晶も時間が経てば修復される。

地上の建築物と違い、自動的というところが神秘的というか不思議なところである。

不審な動きを取り始めたベルにまずリルルカが軽くため息をつき、次いでアルフィアが鼻を鳴らす。

対照的にオツタルとヘディンは全く悪びれず、というより自分に責があると全く思っていない態度で突き進んでいた。――メーテリアは除外するとして。

案の定、誰にも邪魔されない場所でテントを張って一日休憩しようか、と無責任なヘディンが提案していると眉根を寄せた猫キツヒール人の女性冒険者アナキティ・オータムとアマゾネスのティオネ・ヒリユテがやってきた。そして、開口一番にこう言った。

「団長が面貸せって言ってるんだけど、もちろん来るわよね？」

眉間にいくつかの青筋を立てていたのを見て、条件反射的にベルが襟首を掴まれた捨て猫の様に力なく『はい』と言ってしまった。ただし、他のメンバーは可能な限り無視した。

リリルカは美しき戦闘民族出身の少女と目を合わせるのが怖かったのでベルの後ろに隠れていた。

様子を窺っていたアナキティは首を傾げた。現場の惨状からどうしても主犯がベル・クラネルだとは思えない。それに——彼の側に居るのが尋常ではない冒険者達だったからだ。

すぐに状況を察したが、これはどう扱えばいいのかと頭を押さえつつ。

(……いつも謝っているような態度だな。騒動にいつも巻き込まれている癖でもついているのか?)

アルフィアは小さく縮こまる彼の様子に微かな苦笑を滲ませる。

現場が混乱しているのは自らの復活の影響なのは理解した。ただし、責を負うべきなのはベルではなく「フレイヤ・ファミリア」の筈だ。そう考え、彼の身体を自分に引き寄せておく。メーテリアはこの時、周りで起こっている騒動を興味深く見物していた。

「……ベル・クラネルがはいと自供してしまったのだから無視は出来まい。彼の立場も少しは考えたらどうだ?」

「ベル様は「フレイヤ・ファミリア」を監視していただけです。今回はそれによって不可解な現象が起きて大惨事になってしまった。全くの事故ですよ。意図的でもないのですし」

「……そ、そうかな……」

「秘密裏に異端児^{セノス}を匿っていたとしても地上にはまだ出ていません」

前回——ウィーネを巡る騒動の発端はモンスターの密売組織から守る為に起きたもの。決してベル・クラネルがモンスターを集める趣味を持っていた、などという馬鹿げた理由が原因ではない。

彼の大義名分が迷宮都市オラリオの風土に合っていないなかっただけ。

「……そうですね。例えるなら……火炎石を運ぶのを手伝ったら大爆発しちゃった、みたいな感じです。もちろん、意図的ではなく偶発的な事故です」

リルルカが説明するのはベルが世の中の事を知らなすぎるからだ。彼は綺麗な部分ばかり見えてきて育ったようなので。

後ろ暗い世界の経験が豊富なリルルカがいつも泥をかぶる役だ。

「ベル様は自分が歩いている内に起こる全ての事象が自分に原因があるのではないかと思ってしまうくらいの厄介な病気を持っていていらっしゃいます」

一息に告げられる欠点に思わずベルは呻いた。そして、否定できない。

「そういえば、と思り返すと身に覚えのある場面が次々と思いつき出され、羞恥心で顔が赤くなる。」

「それともベル様は採取の為に壁を削っただけで階層を大崩壊させた原因が自分にあるとお思いですか？」

「……時と場合によれば」

「……例えば悪過ぎましたね。んーと、ベル様がオラリオで冒険者になったせいで今まで様々な事件が起きてしまった。とするならば毎日のように謝罪なさる、という事態ではどうでしょう？」

「それだと僕、みんなに謝る為にオラリオに来たみたい……」

「実際、そういう日々になるかもしれない。罪の意識を感じるのももう少し重い場合に……、階層崩壊これも充分重く思いますけれど」

無視しろとは言わない。ただし、地上に出るまでは無視してもいい。全体の把握が出来ていないのだから。

ここで一つずつ認めていると後々取り返しがつかなくなる。

それと彼の謝罪で済む問題でもなく、軽い事態は想像以上に甚大である。

関係があるのかはつきりしない弱小【ファミリア】が率先して罪を被る必要など無い、とりりルカは主張したかった。

「私の「ファミリア」は大きな騒動が起きた時、力で黙らせてたみたいよ」

と、呑気そうな声でメーテリアが言った。

そうでしょうね、「ヘラ・ファミリア」ですもの、とりルルカは即座に納得してしまっ
た。

かつての最強派閥だった「ヘラ・ファミリア」はこれくらいの事は些事だと判断して
もおかしくない。なにせ、彼らは千年もオラリオに君臨していた「ファミリア」だから。
何人が死人が出たとしても——無視はしなかつたと思うが——問題を収束させる自
信はあつた筈だ。

「謝つたら負け、とか言っていたかしら？」

「……噂に名高い女神さまの言い分ですか？」

「本当に謝らないといけない時は姉さんが神様の頭を鷲掴みにして地面に叩きつけるか
ら」

それが出来る立場だったのか、女神ヘラの姿を見たわけでもないのにある程度は想像
出来た。

時には謝罪も必要だ。だから、リルルカは何度も領いた。

♪ ♪ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫

オツタル一人で黙々とテントを設営し、ベル達はヘーデン達の帰りを待つことになっ

た。——何故か、「ロキ・ファミリア」の団員達に取り囲まれてしまったが。

リルルカの言げんによれば宿場街リヴィラに居る冒険者が抗議に来ないようにするためでは、と。

一応、「ヘステイア・ファミリア」は秘密裏にダンジョンに入っている。今回の騒動の主犯にされてはならない。

ベル・クラネルは今とても目立つ立場だから悪評が広まっては居心地がまた悪くなってしまう。

（戦闘だと心強いのですが……。普段のベル様は保護欲を掻き立てられるくらい役立たずになってしまいます）

それに見た目が可愛い男の子だ。リルルカからすれば年下でもある。

守ってあげたい。弟にしたい、などのランキングがあるらしく、ベルはオラリオの中でも結構上位に昇る人気があると噂で聞いた事があった。

それも踏まえてベル・クラネルはととても目立つ。白い髪も相まって本当によく目立つ。

「慌てても仕方ありません。食事の用意をしましょう」

「そうだね。……えつと、水辺まで行ってもいいのかな？」

「この階層の中なら行き来の自由はあるでしょう」

ベルとリルルカが遅めの昼食の用意を始めるとメーテリアはテントの床に座ったま

ま大人しくしていた。

手伝ってくれないのかな、と思いつつベルは移動を始める。そんな彼の背中をリリルカが押していく。

テントから出ていく彼らを見送った後、彼女^{メーテリア}は軽く息をついて寝転がる。

天界でのんびりとした日常から急に慌ただしくなってしまう事に混乱しなかったわけではない。その疲れが出たのか、身体がだるくなつた。

以前までの病気による痛みと苦しみは感じないが気持ちの切り替えにまだ少しかかるようだと思つた。

(……素直に喜べないって辛いわね。でも、自己満足の観点で言えば充分なのだけ……。……あの子はどんな冒険をしてきたのかしら)

両親が唐突に居なくなつた後、どんな育ち方をするのか気にならないわけではない。

姉の様子を見る限り、人の道に外れるような生き方をしていたわけではないようだ。

一見すると非常に頼りないがモンスターとなつたメーテリア^{おの}を見ても全く怯まなかつた。これが一般的な冒険者であれば恐れ慄く。少なくとも自分の知るオラリオでは考えられない異常事態^{イレギュラー}である。

それなのに彼は普通の冒険者然とした佇まいを崩さなかつた。

素直に凄いと思つた。

いと言われてきたし、自覚もある。

「そういえば、お兄ちゃんはこの『ファミリア』なの？」

(……すつかりお兄ちゃん呼びが定着してる)

「【ヘステイア・ファミリア】です」

「……聞き覚えのない【ファミリア】ね」

少なくとも生前には見た事も聞いた事も無い。

これについてリルルカが今年あたりに興した弱小です、と教えてくれた。

主神ヘラとキアンから聞いた覚えがあるような無いような、と思い出そうとして首を傾げる。

「改めて……。【ヘラ・ファミリア】に所属し、後に【キアン・ファミリア】となったメーテリアです。二つ名は「静聴」といいます。回復魔法が使えるくらいが取り柄です」

「ど、どうも。ラビット・フット【白兎の脚】という二つ名を貰ったベル・クラネルです。即効魔法が使えます」

二人とも照れながら自己紹介した。

双方とも白髪だが片方がモンスターなのでリルルカから見ると違和感がある。

ウイーネの母親の様な見た目をしているところも。

(……凶暴なモンスターに全く見えません……)

「……【キアン・ファミリア】……？ 聞いた事がありませんね」

「あら、そうなの？ 医療関係の【ファミリア】だったのだけれど……。私が死んだ後で解散でもしたのかしら？」

側に居るベル・クラネルを見ながら時の経過を思う。

小さな赤子が一足飛びに成長したよう——現実感が無い。

彼女の中ではまだ乳飲み子の赤子しか思い出せない。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

膝枕してお兄ちゃん、と甘えてみるとベルは苦笑しつつ正座し、どうぞと言った。

大きな凶体の童女ウィーゼルの頭が膝に乗る。以前は少女のウィーネにやってあげた。

モンスターという印象がある以上、安心できないものだ。だが、ベルはそんな蟠わだかまりに

拘らず、素直さを表すことがある。

冒険者としての常識が無いのか、それとも心構えが出来ていないのか。

他人から見れば異常とみなされてもおかしくない。

(……どうしてベルは冒険者になったの？ 君はもつと長生きする道が選べた筈でしょう)

そう言ってやりたい気持ちになったが飲み込んだ。

彼は既を選択した。今更変えることは出来ない。そうでなければ三〇階層まで降り

る訳がない。

どんな人生を送って、迷宮都市オラリオに居るのか。メーテリアには伺い知れない。もう自分は彼を置いて旅立ってしまった。それがある時舞い戻って文句を言うのは筋違いだ。

(……腕に抱えてあやす事も出来ないくらい……、大きくなったのね)

白い髪に赤い瞳。他人の空似という線を抜きにしても印象が変わり過ぎた。だから——本当に一目見た時には誰だか分からなかった。

薄暗いダンジョンの中で『あの子』とベル・クラネルが重なるなど思いもしない。だが、今は——

英雄アルバートの名を騙るあの人^{かた}の面影がチラつく。

あれは「ゼウス・ファミリア」の団員とお付き合ひする事になってすぐの頃。

深層攻略に向かっていた筈の彼^{アル}が帰ってきて早々にダンジョンで娘が出来たと大はしゃぎした。——この時、メーテリアは思わず彼を殴った。

日頃の行い^{わざな}はとても褒められたものではなかったが浮気だけはしない、と信じていたのに。

姉は言わずもがな。メーテリアは頭に血が上った反動からか、数日程寝込んだ。——数日程度で済んで良かったと『改宗^{コンバージョン}』前の時はそう思えた。

の様子を眺めた後で外に出た。既に辺りは暗がりに支配されていた。

夜間の一八階層は宿場街リヴィラ以外に明るい場所が無く、それ以外は野営している所くらいだった。

少し離れたところにある「ロキ・ファミア」の滞在地は松明が焚かれて結構明るい。遠征に臨む彼らは唐突に起きた異常事態イレギュラーの調査で右往左往している、とりりル力から聞いていた。

(地上はもつと混乱しているんだろうな)

天井を覆う水晶も時間を巻き戻すように修復される。その光景が今正まじに起こっているが、一七階層からは様子を窺えないのだから不思議だ。

モンスターの襲来でも起きない限り、聞こえる音は少ない。僅かばかり風によって揺れる木々の音や遠くにある水辺の音などが辛うじて聞こえるくらい。

何も無ければほぼ耳鳴り以外、聞こえないくらい静かだ。

つい先日受けた『強制任務ミッシンジョン』から日が経っていない筈なのに世界が物凄い速さで変わっていったような気がした。

ベルがオラリオに来てからまだ半年しか経っていない。

アルファイア・ストラディとの邂逅。

リユー・リオンの恩讐。

きちんと確認しないと女性達の怒りを買う事になる。

一般的に男女共用で水浴びする時は薄絹やタオルを装着する。それと広い場所は大抵、女性が占拠する。

現場に向かい、辺りを窺うと案の定先客が居た。それもモンスターの。困いの様なものが無いので事前の予測が困難だ。

冒険者と思われるのは金髪金眼の少女アイズ・ヴァレンシユタインだけ。彼女は膝丈まであるブーツを脱いで、各モンスターの身体を洗っているようだ。

ベルはアイズを見つけて引き返そうとしたが物音を立ててしまい、気付かれてしまった。

「……ベル？」

「す、すみません。別の泉を探してきます」

「もうすぐ終わるから、待ってて」

モンスターの殆どは乾燥待ちで、大きな蜘蛛型に取り掛かっていた。

つい先日までモンスターと戦う事の多かった彼女がどういう心境の変化を経てモンスターの身体を洗う事になったのか。

ベルからすれば凄い事であった。

もし、そのモンスターが知り合いではなく、まして異端児ゼノスでもなければ保護などしよ

うとは思わなかった筈だ。ベルでも手を差し伸べたりはしない、気がした。

異端児ゼノスの中には人の言葉が話せない者も居る。

(……たった半年で僕も随分と心境が変化したと思う。ウィーネに出会わなければ僕は今でもモンスターを見たら倒し続けていただろう)

それと神であるヘステイアも保護を後押ししてくれた。子供の我がままだと切り捨てなかつた。

対するアイズ達の主神ロキはどうなのか、疑問に思う。

ウィーネの騒動の後、かの神から難癖を付けられる事も無く、ギルドに抗議文も出していなかつたようだ。それでも今までの常識を破る事態を起こしたベルに何も言う事は無かつたのか。

「……こいつ【白髪鬼ヴェンデッタ】の関係者じゃないよな?」

水辺に足を突っ込んだ赤帽子レッドキャツプがアイズに尋ねた。

作業の手を止めてベルに向き直るアイズ。そして、何か納得するように頷いた。

彼の耳にも『ヴェンデッタ』という言葉が聞こえたが『二つ名』という予想以外は聞き覚えが無い。

「違うと思う。……ベル。オリヴァス・アクトつて人、知ってる?」

「……いいえ」

飲料に使うわけではなく、洗顔用だ。使用別に使い分けたりしないので水浴びに使っていたものだとしても構わず使う。

ダンジョン内で水を得る手段が限られている。——一応、綺麗な場所を探して汲んだ。

「……あ、ベルなら覆面のエルフのこと、知ってると思うから」

「はっ? この小僧と知り合いなのか?」

「うん。私より知ってると思う」

アイズの言葉を聞いたモンスターの面々が驚き、次々と彼に近づいていく。

水浴びで解いていた胸当てはしっかりと巻き直して。

人蜘蛛アラクネ以外に詰め寄せられたベルは軽く悲鳴を上げつつ他の冒険者の迷惑にならない

場所で話しましょう、と言った。

責任転嫁したアイズは赤い髪の人蜘蛛アラクネを引き連れて移動しようとしたが、彼女も話し

が聞きたいと言ってアイズだけ野営場所に戻るようになった。見張り要員を別途向かわせる事を伝えて。

ベル達は泉から離れて、木々に囲まれた場所にて彼女達と相対する事になった。

「……皆さん、同じ仲間というか【ファミリア】……という理解でいいんですか?」

アリーゼやリオンという単語を聞いていたので、何らかの関係者である予想はしてい

た。

ウイーネを受け入れてくれた異端児達ゼノスは元冒険者という者は無く、その手の話しも聞いた覚えが無い。

ベルの言葉に恐らくは、と言いおいて全員が仲間だと誰ともなく言った。

「……その前に。お前、アタシらを見ても動じないよな？ 他の奴らの反応からして違うし、どうしてだ？」

赤帽子レッドキャップの指摘にどうしてと、と口ごもりつつ異端児ゼノスと出会った顛末を語り始めた。

探索している途中で出会った竜女ヴァイガルの少女と出会ったのが全ての始まりだ、と。

「……道理で【ロキ・ファミリア】……というか【勇者ブレイバー】が平然としているわけだ。前例により騒動があったからなんだな」

「……可愛い女子おなじだから助けようとしたら大騒動になっただけではありませんの？」

「……男の子は女の子が大好きだからね」

「その子、きつと可愛い見た目なんでしょうね」

否定しきれない指摘の数々にベルの顔が恥ずかしさで赤くなる。

もし、人の言葉を話さず、ただ弱っているだけのモンスターであつたら——ドロップアイテムチャンスの機会だ、と思つて武器を振るつていたに違いない。

そうしていればまた違った未来があつたのかもしれない。

「それはもういいや。なんか面倒クセー事態になったつてことは分かったからさ」
（それに……。ギルドに目を付けられていればこんなところを平然と歩いているわけが無いし、【剣姫】が放っておくわけもねえ。……オラリオを巻き込む騒動を起こしといて無罪放免なんかありねえな）

（……ここにいらつしやるといふことは何らかの取引が成立した？ ゼノスとやらを始末したわけではなさそうですね……）

予想を立てたところで自分達が知りたいことに繋がるとは思えない。それらは「口キ・ファミア」が考えればいい事だ、と早期に問題を棚上げした。

本題はただ一つ。リユー・リオンについて。

「リユーさんは僕が冒険者になってすぐの頃からお世話になっていきます。度々助けてもらったりして……。未だにお礼が出来なくて困っているくらいです」

「人間の小僧にしか見えないんだけどな」
ヒューマン

「詳しい事は分かりませんが……」

仲間達がリユーについていくつか質問するとベルは淀みなく答えた。それによればリユー・リオンは間違いなく自分達の知る人物で間違いが無い。

懸念があるとすれば人間ヒューマンである少年ベル・クラネルを度々助けているところくらいだ。

「リオンが既に処分したんだろ。地上に行っても何もねーよ、きつと……」
 ベルが聞いている情報は多くない。単なる世間話の中でポロつと出てくる程度の事しか知らない。

そもそも冒険者の過去を聞くのは御法度に近い。誰しも人に言えない過去の一つや二つあるものだ。——ベルの過去は農村での暮らししか無いので面白みが無いだけだ
 が。

「ねーねー。リオンは今、何してるか分かる？」

セイレーン
 歌人鳥のセルティが尋ねてきた。

「アストレア・ファミリア」の名前しかベルは知らず、団員の名前で聞いた事があるのもリユーを除けばアリーゼだけ。

何と呼べばいいのが、迷いつつベルは軽く息をつく。

「……ここで起きた騒動の後に怪我をしまして。今頃は回復していると思いますけど……」
 「……リオンがケガするような事件？」

「怪我で済んで良かったじゃん」

「普段何してるかは分かる？」

「『豊穰の女主人』という酒場で女給ウエイトレスをしています」

「……あのでっけードワーフが居る酒場か……」

それぞれ顔を見合わせて何がしか話し始めた。

積もる話があるのかもしれないが一遍には対応できない。

その後も細々とした質問が飛んできたがベルもそれほど詳しいわけではない。会った時の印象くらいしか――

「仕事の合間に冒険者として活動しているのですね」

「……つーかさ、お前の助太刀ばつかじゃねーか」

「……はい」

半分ほど呆れ、もう半分は微笑ましいものを見る目をした。

リユーが特定の男子に拘り、助け続けるところが彼女達にとつて一番の驚きだった。

「ファミリア」が壊滅した後の事は当然、知り様が無い。それも数年も経過した後となれば尚更だ。

元気でいる事を喜ぶべきなのか、そこに自分達が居ない事を嘆くのか。

（そういや、ベルと言ったか。本当に何者なんだ？ リオンが助けたにしては騒動に巻き込まれ過ぎないか？）

「ロキ・ファミリア」でもないし、「劍姫」の知り合いだし、と彼についての謎が多くなる。

見た目は可愛らしい男の子である事はライラを含めて他の団員達も認める。――盲

アルファイア・ストラディ。

かつて自分達が討伐した上級冒険者——の成れの果て。

「随分と賑やかだが、何かいい事でもあったか？」

灰色の髪の毛のモンスターは長年の付き合いがある友人に語り掛けるような態度で言った。

彼女の言葉に対し、それぞれのモンスターは肩をすくめたりして少しね、と応えて立ち去ろうとする。

ここで何匹かのモンスターはアルファイアもベルの事を知っているのか気になった。

団員の話しぶりでは「フレイヤ・ファミリア」と一緒に行動していると聞いていたのだ。

「可愛い男の子に会っただけよ」

「……ほー。そいつは白い髪の毛の男子ではなかったか？」

（……ベル君）

（ベル君ね）

（……ま、まさかアルファイアも狙っているんじゃないかあ？）

「小さな【白髪鬼】ヴェンデツタ君かと思っただ子よ」

そう半人半蛇ラミアのノイン・ユニックが言うと微笑んでいたアルファイアの顔が一瞬で険し

いもの変わった。まるで一緒にするな、とでもいうように。

眉根を寄せた彼女にすぐさまノインは小声で謝った。

「あんな狂信者と一緒にされては堪らん。……だが、ベルを可愛いというお前達の観察眼は確かだ。あの子は【劍姫】に惹かれているそうぞ」

「えっ?!? そうなの?」

不機嫌から一瞬で機嫌が良くなったアルフィアに驚きつつ、【劍姫】が好きだと聞いて更に場が賑やかになった。

一時は敵同士だった彼女も昨日の内で打ち解け、お互い過去の柵しがらみで戦闘おこなを行わないと小人族バルウムのフィン・ディムナの前で制約させられた。

ただし、互いに文句だけは言い合った。それが結構長く続き、階層崩壊の話は女子連中を除いたメンバーで改めて行う事おこなになってしまった。

アルフィアが素直だったのは「ヘスティア・ファミリア——というよりベル——が不利益を被こわむると考えたからだ。そうでなければ多少なりとも戦闘行為に至つていた可能性べルがある。

フィンが彼を含めた内容に言及していれば決してありえない話ではない。ある意味では彼女アルフィアへの脅迫材料とも取れる。

大人しくしてくれればベル・クラネルを招聘しない。

けた。

水浴びをしていたというアルフィアもどんな話を話したのか、肩を竦めるだけで何も説明しなかった。

「説明も何も不可抗力だ。何しろ、神がする事に下界に住まう我々に説明など出来る訳が無い」

「……つまり詳細は神様達なら可能だと？」

「……までフレイヤを引つ張ってこれるなら、詳細が判明するだろうさ」

そうアルフィアが言い、ヘデインは顔を逸らすのみ。

元よりベル・クラネルを責め立てたところで彼に満足な説明は不可能だ。オツタルも戦闘以外の説明が得意だとは思えない。

疑問は残るが納得するしかない。

「アルフィア様の復活に対して何かおっしゃっていましたか？」

「……苦笑していたぞ。私とて想定外の事だ。こればかりは神を恨めとしか言いようがない」

それに、とアルフィアは今まで命を落としてきた多くの冒険者達を思い浮かべる。人として死した者達がモンスターとしてしか復活できなければ将来に不安が残る。

倒すべき対象の存在として復活し、穏便に人生を歩めるとも思えない。ギルドの成り

立ちや神と人が手を取り合って人の営みを支えてきた事を思えば、文化を壊しかねない事態である。

相互理解がままならない内は争いの歴史が続く。

人とモンスターは千年以上もの長き渡って戦い続けてきた。それをほんの数年で解消できるわけがない。

「……はい」

ここで今まで大人しくしていたメーテリアが手を上げた。

アルフィアは訝しみ、ベルは苦笑した。

彼はどうぞ、と告げる。

「難しい話したのは分かったけど、ベルお兄ちゃんが考えなければならぬものなの？」
「……：異端児^{セノス}を巡る騒動を起こした責任は感じています。無視も出来ないもので……」

「今のところベル様お一人に責任を負わせる気はギルドには無いようです」

リリルカの補足を聞いてメーテリアはもちろんアルフィアも胸に手を当てて安心したようだ。

様々な騒動に首を突っ込むベルの事だからギルドから何かしらの罰則でも受けてい
るのでは、と思ってしまう。

確かに「ヘステシア・ファミリア」は立場が悪くなり、ギルドの指令を断れない状態

アルフィアは『お前は馬鹿か?』とベルに対して言いたそうな顔をし、リルルカは『ベル様と共に居るのは色々大変なんです』という疲れ気味の顔で彼女に答えた。

そもそも今回の事件というか騒動の発端は神フレイヤの気紛れだ。

もし、ベルだけであればアルフィアの魔石は売却しなつたとしても本拠ホームの床下とかに隠して話が終わる。

それに水を差したのは「フレイヤ・ファミリア」だ。少年には何の責も無い。

「もし、フィン様の前に行つたら共犯者と言われただけで全ての罪を被かぶると思えますよ」
「……………どこまで気弱なんだ、この子は……………」

そんな子に育てた親の顔が見てみたいな、と小声で言いながら佇むメーテリアに顔を向ける。

素直で優しくして正直者のどこが悪いのですか、と微笑みの表情で言い返された。

(……………程度があるだろ)

(……………正直なところ教育を施したのは私ではありません。赤子の『あの子』しか知りませんから)

(……………あの糞爺ゼウスにこんな可愛い子を育てられるとは思えないんだが……………)

(素直な部分は案外キアン様のお陰かも……………)

姉妹が顔を突き合わせて言い合っている所に湯気が立ち上る野菜スープを出す。

一八階層には様々な果物が成っており、材料が足りなければ現地調達するのが常だ。ここより下層はそういう素材の宝庫でもある。

ダンジョン内での売買は値段が高額な事もあり、余程切羽詰まった状態でもなければ購入を控える。

そんな場所で商売が成り立つのか、と言われると地上では捌けないレア商品や非合法なものも手に入るので顧客には困らない。それと持ち帰れないアイテムの処分にも重宝するので。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

想定外の騒動が起きたものの目的自体は完了した。後は地上に戻って報酬を正式に受け取ればベル達は解放される。元より自分から関わった案件だったけれど。

問題があるとすればこれからの事だ。

観光を抜きにしてもアルフィア達がどうなるのか。

気にしても仕方がないと言われるかもしれない、とベルは思いつつ。

TENTを片付け、帰り支度を整えていると上層階への出入り口から緑色の冒険者が現れた。その存在にベル達はまだ気づかない。

その者は顔に酷い怪我を負い、寝込んでいたエルフのリュー・リオン。

彼女がここに来たのは同僚のシル・フローヴァからお使いを頼まれたからだ。

酷い顔のままでは酒場の仕事に支障が出る、ということと急に出来た休日に戸惑っていたところをシルに依頼された。

ベルさんにお弁当を届けてください。

顔の腫れは回復薬や回復魔法で既に引いているが痣が残っていた。それと連日の捜索と憎きモンスターとの邂逅が後を引き、愛想笑いですら作れなかった。——元より意識して笑顔になる事は苦手だったけれど。

死人の如き衰弱した気持ちを払拭するには気晴らしにダンジョンに潜るのが一番だ
とリユーは考え、シルの頼みを了承した。ついでにベルがダンジョンに潜っている事も
教えて貰った。——彼が即座にダンジョンに潜ったのは何故なのか、疑問を抱くべき
だったのかもしれない。

そうしてベル達から遅れて、つい昨日——ダンジョン内にて壮絶な震動を感じた。

運よく彼女は閃光を見る事は無かったが、あまりの事態に現場から動けなくなつた。

警戒しつつ階層主の部屋にたどり着けば、壁がひび割れた広間が視界に入り行き交う
冒険者達が戸惑っていた。

一旦戻ろうかと思つたが既に一五階層を越えていたのでベルの様子を見てから、とい
う事にした。そして、現在——

天井の修復が始まっているものの、半壊した安全階層の光景に戦慄する。

壁の亀裂の大きさから相当強烈な何かがあった事は分かった。

(……二七階層の爆破規模よりも大きい。もしや、あのモンスターがまたどこかで生まれているのかも……)

かつて「アストレア・ファミリア」を一瞬で壊滅させ、つい先日自分達の前に現れたダンジョンが生み出した刺客。

ギルドより箝口令を敷かれているものの暫定的に付けられた名前は聞かされていた。竜種の骨格を模しており、魔法を反射し、尋常ならざる敏捷性を持つ。

かのモンスターは『ジャガーノート』と称される。

不安を覚えたリユーは宿場街^{リヴィイラ}を避けている野営地を探すことにした。既に「ロキ・ファミリア」が遠征に赴いている事は聞いていたので。

後詰めの際でも居れば情報が得られると思った。

既にギルドの『要注意人物^{ブラックリスト}』の名簿から削除されているものの、その事実を知らない冒険者はまだ多数存在する。

大切な友人の安否を思う彼女は多少の些事を無視して臆することなく走り続ける。

a m b i t i o

1 2 慈母揺籃

元【アストレア・ファミリア】の眷族にして【疾風】の二つ名を持つエルフの冒険者リユー・リオンは大切な友人である人間の少年ベル・クラネルに弁当を届ける為だけに危険なダンジョンに潜った。

一般的な常識からすれば忘れ物を届ける為に一八階層に向かうのは自殺行為に等しい。特にレベル^ツ2までは。

浅層の攻略であればまだ納得できる。

冒険者となったからとて気軽に奥深くに行けるものではない。

それを可能足らしめるのが上級冒険者達だ。

リユーはレベル^フ4である。障害が階層特有のモンスターだけであれば何の問題もない。

(……地上は大丈夫でしょうか)

先ほどまで感じていた足腰が震えるほどの振動は既に収束しているが、安全階層^{セーフティポイント}である『迷宮の楽園』は遠目で見える限り、無事ではなかった。けれど、極端に酷いとも言

シル・フローヴァ

友 人の無茶ぶりはいつもの事だが今回はどういふ意図があるのか。意味のない事はしない筈だが全く分からない。

激情に駆られた時間が夢のようでもあるし、顔の傷の痛みが現実であると教えてく

る。
目が覚めて鏡を見た時、顔面が歪んでいて思わず叫んだ。性質の悪い毒を盛られたのだと。

傷薬などを塗って一日冷たいタオルで冷やしたら腫れが幾分か引いた。もし、引かなかつたらどうしようと不安に思ったものだ。これが復讐に走った報いか、と。

医者に診てもらつたら骨が砕けているらしいと言われ、傷跡が残る事を覚悟して手術を受けることにした。

(幸い深刻な被害は無く、一か月ほど経てば元の顔に戻ると言われたけれど……。あの腫れ上がった顔には恐れ入った)

内出血が悪化すると顔面の形があそこまで歪むとは。

落ち着いた時に魔法を使い、今は走っても傷が響かないまでに回復できた。

——多少、資金が目減りしてしまつたけれど。

今回、弁当を届けたら素材回収をすると決めた。

(……アルフィアめ。加減というものを知らない)

氣絶した後、彼女がどうなったのか分からないが、少なくともベルに危害を加えていない気がする。

他の者に対する態度は敵意が含まれていたが彼に対しては優しさがにじみ出た。

惚れたわけではあるまい。可愛い男の子だから気に掛けた、という事も無くはない気もするが――

無様を晒した事を抜きにしても彼にはきちんと謝罪しなければ、そんな事を考えながら巡っている内に大きな集団に行き当たった。

「ファミリア」の『紋章』^{エンブレム}を堂々と掲げているのは「ロキ・ファミリア」だ。

多くの冒険者や「ファミリア」は大体一時拠点として滞在する。その中でも広めに土地を確保しているところはあまり無い。

それらを横目に通つていくと、見慣れる一団に気付いた。

明らかに冒険者とは思えない姿なので思わず立ち止まってしまった。

(……モンスター？ 異端児^{ゼノス}でしょうか)

何人かの団員に取り囲まれていたものの戦闘しているような雰囲気は無く、遠目からも事情徴収を受けているような様子だった。

ベルが彼らを保護していたからといって全ての異端児^{ゼノス}を助けなければならぬ理由も義理も無い。

単身で「ロキ・ファミア」に挑んだところで無駄骨になる。何より——集團の中には王族ハイエルフのリヴェリア・リヨス・アールヴの姿もある。

見なかったことにしよう、と強迫観念のようなものを感じて移動しようとしたがリヴェリアに見つかってしまった。——他の団員であれば見逃すところだが気配察知に關してはレベルシックス6の彼女の感覚を誤魔化す事は難しい。

「おい」

「はっ！」

彼女が声をかけて来たので——条件反射的に——思わず片膝をつく姿勢になつてしまった。

同族の中でも高貴な存在であるリヴェリアを前にしてしまふとどうしても腰が引ける。これは他のエルフも同様である。例え「ファミア」が違つても。

軽い気持ちで声をかけたリヴェリアはリユーの礼に些いささか驚いた。

「……………」

見知つた服装の人物が居たから思わず。

軽く苦笑してから堅苦しい挨拶はよせ、と言うとリユーは顔だけを上げた。

周りに居た団員達はエルフ特有の儀式だと思つたのか、それほど大きな騒ぎにはならなかつた。

リヴェリアの側に居る【千の妖精】サウザンド・エルフのレフィーヤ・ウイリデイスと【純潔の園】エルリーフアリシア・フォレストライトも当然の反応です、と自慢げだった。

(……げえ!!? リオン!?)

(……全く変わってない)

(……あ、いや……。髪が短くなった? 少し染めているようにも……)

(あいつ、服ちゃんと洗ってるのか?)

(……新しい服も買えないくらい困窮してたのかしら?)

リヴェリアの近くに居たモンスター達はそれぞれ驚愕したり、疑問を抱いたり、様々な感情を表した。

まず、見た目の変化が乏しい。

髪を除けば生前に会った時のまま。

急に騒ぎ出したモンスターに世話を担当する団員が戸惑った。暴れないでください、と小さな声で言うのと彼女達は素直に謝罪して大人しくなる。

目をタオルで覆った赤い髪の人蜘蛛アラクネだけは何が起きたのか分からない。ただ、近くにとても懐かしい気配が居る事は感じた。

「ベル・クラネルと共に居たエルフだな。一人という事は探索か?」

「……いい、いえ。その友人に弁当を届ける為に参じた次第です」

モンスターの次なる斬撃目標は首。それを無意識に反応するリユー。突然の攻撃に驚きつつも攻撃の意志を察知し、膝まである長靴ロングブーツによる蹴りで牽制する。

「……ちっ」

「……ふっ」

リユー
片方は苛立ち。片方は感心。モンスター

見た目の面妖さも相まって不気味だ、と思いつつ「ロキ・ファミア」が見守る中で戦闘を余儀なくされた。

リヴェリアは静止の命令を出さず黙って見守り、他の団員達も戸惑いつつも一定距離を保っていた。

「……異端児にしては腕がいいですね」ゼノス

(……リオンもゼノスの事を知っている。だから、加減したのか。この甘ちゃんめ) 人間的な表情を持たない戦影ウォーシヤドウは失望とは違う感情でエルフの冒険者に相対する。五年、と聞いた。その時の流れ、差がどれほどなのか興味が湧いた。

リユーが持つ小太刀は輝夜が渡したもの。長年愛用していた武器だ。今、その武器を元の持ち主に向けられているのは酷く滑稽であった。

剣を下段に構え、軽く息を吐く。戦影ウォーシヤドウといえども呼吸するのは生前のクセである。

本来は片刃の刀で振るう技だが、斬ればなんでもいいとばかりに輝夜は踏み込みを開始した。

(浅層に出る戦ウオーシヤドウ影とは比べ物にならない。それにかんりの熟達者だ)

(……おーおー、小生意気に避けおるわ。……しかし、「ステイタス」的には強くなった気がしないですね。……それとも更新できない状況になったから?)

【ロキ・ファミリア】から簡単にだが【アストレア・ファミリア】が解散したことは聞いている。それと主神アストレアは天界に送還されておらず追放という形になった事も。

リユーが戦えているのは主神の恩恵が残っている為だ。もし、神が送還されていたら輝夜と互角に戦う事など不可能である。

(馬鹿正直の攻撃ではなくなっている……。私らの戦い方を身に着けたのか……。それとも……。死んだ仲間の思い出に引きずられてこんな風になったのか)

(よーし、私達も輝夜に後れを取らないように戦うよー、つてなったら駄目だね)

(……リオン一人に一〇人がかりはさすがに反則だ)

リユーの戦闘方法バトルスタイルを分析する傍ら、輝夜の仲間達は黙っているのに耐えられなくなっていた。

そんな気配を盲目の人蜘蛛アラクネであるアリーゼは感じ取り、見えない事を悔やんでいた。

だが、他の——戦闘している輝夜を除いて——面々は自身がモンスターに代わり果てているので感動の再会と簡単にはいかなない事を感じていた。

分かってもらえばいい。そうでなければ冒険者とモンスターという今まで通りの付き合い方で接する。

「…………ぐつ」

(…………極東の技を駆使する異端児ゼノスというのは厄介です。…………構え方が仲間に似ている所も…………)

それから数合打ち合った。

リユーは割りとは本気で攻めているのにモンスターは器用に捌いてくる。

強さはレベル4の冒険者と渡り合えるもの。

(…………ぐつ、器用な立ち回りを身に着けおって…………。確実に腕を上げているようだが…………【ランクアップ】はしていないようだ)

輝夜は少しずつ攻めに力を注いでいく。

いつもの片刃ではないからか、剣が重い。ただし、重量ではなく気分的なもの。

切れ味に特化していればもう少し軌道を鋭くできる筈なのだが——

輝夜は隙を見計らい腰だめに構えて一閃した時、思わず剣がすっぽ抜けた。久しく武器を握ってこなかったのとモンスターの手の感覚を掴み損ねたようだ。

飛んでいく先にはリヴェリアが居た。

「リヴェリア殿！」

「リヴェリア様！」

輝夜とリユーは同時に叫んだ。

それに対し、王族は軽く息をついて案ずるな、と言って飛来する剣を杖であっさりと叩き落した。

怪我無く済んだことに輝夜とリユーはほっと一安心した。そう思っていたらリユーの小太刀『双葉』の切っ先が戦^{ウオーシャドウ}影の首元に当てられた。

(……………、卑怯な)

「なかなか良い腕をしていますね、モンスター」

勝ち誇ったようにリユーは言うが顔を汗で濡らして荒い呼吸を繰り返していた。結構、苦戦していた事がありありと伝わる。

止めを刺すか、それとも「ロキ・ファミリア」に任せるか思案しようとしたところ、リヴェリアが武器を下ろせと言ったので彼女は即座に従って、その場に片膝をつく。

元人間である輝夜はリユーのような儀礼を取る気が無いので立ったまま。それと姑息な真似をした末っ子の頭を拳で殴りつける。

「……………なっ!？」

「…………ふん」

間抜けな真似さえ起こさなければ負ける道理は無かった。

不機嫌になりつつ仲間のもとに戻っていく輝夜は内心では悔しい思いを感じていた。思い通りに武器を振るえなかった事に。

他の団員もそうだ。未だにモンスターの能力を扱えず、日常生活もままならない。かといってダンジョン内で暮らすのも難しい。

(……素直に嬉しさを表現できないのは辛いですね)

(お疲れさん)

肩を寄せ合うモンスター達の姿を一瞥しながらリユーはリヴェリアから探し人について教えて貰った。

ベル・クラネルは未だこの階層に留まっていること。それと――

「階層破壊事件のお陰で我々は足止めを食らう事になった。……地上からの報告を受け次第、帰還するか降りるか決める予定だ」

「私は下りる途中で震動を感じたので地上がどうなっているのかは……」

彼女の言葉を聞いてそうか、とだけ呟き友人の下に行つて良いと許可を与えた。王族ハイエルフに改めて一礼したリユーは一目散に駆け出す。

そんな彼女の後姿を見ていたモンスター達は様々な感情を胸に秘める。

人が隠れそうな場所はたくさんあるので。

宿場街リヅイラでも店の奥に居れば人影が簡単に見えなくなる。それと隠れ家的な店舗もいくつかある。

今回向かうのは水辺にほど近い開けた土地だ。

「……!?」

目的地にあるというテントを見かけ、そのまま駆け続けようとした。だが、そこにも先ほどのモンスターのような異端児ゼノスの姿があった。

どうして異端児だと思ったのかと言えば冒険者と共に居たからだ。そして、一匹は確実に見覚えがある。

あれは——

【静寂】のアルフィア。

灰色の髪の竜女ツイーヴル。——それに気配にも覚えがある。

地上に向かうと聞いていたが未だにダンジョンに居たとは、と気絶していた間の事を全く知り得ないリユールは警戒態勢を取った。

良く見るとアルフィア以外にも竜女ツイーヴルが居る。こちらはギルドにも公式に記されている姿そのままだ。ただし、髪は白い。

更に彼女達のそばには目的の人物であるベル・クラネルの他に「フレイヤ・ファミリ

ア」の眷族である【猛者】オツタルの姿があつた。

(……リヴェリア様から聞いていたが……、本当に一緒に行動していたとは……)

自分が寝込んでいた間に何が起きたのか全く理解できない。

復讐心に囚われていた時はただ一つの事だけを考えていれば良かった。帰つたらもう少し寝ようと決めて現場に向かう。

ある程度近づいた時、リユーに気付いたのはアルフィアだった。次いでオツタル達。その次辺りでベル達がこちら側に顔を向けた。

「リユーさん」

口元を布で覆った姿なのにベルはリユーだと突き止めた。これについて彼女自身は別に何とも思っていない。元々素顔も他人に見せないから。

いつもは酒場で女給ウエイトレスをしている彼女が度々冒険者としてダンジョンに潜っている事を知る者は意外と少ない。そのせいもあるのか、正体を知る者もまた少ない。

先日の【疾風】による殺人事件という騒ぎは宿場街リヴィラの中だけのもので、地上にはまだ大々的に伝わっていない。——その前にギルドに実行犯の死体を届けて簡単な説明を伝えている。

事後の説明でひと騒動起きるかもしれないが、その時は『豊穡の女主人』の主あまじが何らかの沙汰を下すはずだ。

「先日はお世話になりました」

近寄ってきたベルに頭を深々と下げるエルフのリュー。

それと忘れないうちにシルから託された弁当を差し出し、中身が無事かどうか確認を、と言った。

【疾風】の速度でも一八階層に来るのに一日以上の時間がかかる。その間に弁当が駄目になっても不思議はない。

「……日が当たらないから割合い長持ちしそうですけどね」

「レベル4の『耐異常』^{アビリティ}を過信してはいけません」

（……後で気付いたんだな）

せつかく持ってきてくれたのにその場で捨てるのも気が引けるし、変に発酵していたり腐っていれば当然食べられない。それとシルの料理はお世辞にも美味しいとは言えないのは周知の事実。

不味いものを無理に食べるよりはつきり拒否した方が造り手の為になる、と色んな人から聞いた。

ベルは覚悟を決めて弁当の蓋を開ける。するとモアっという不快で生温かい空気が顔にかかる。

（……あ、これ駄目な奴だ）

穴をあけて中身を廃棄する。

ただ、この弁当をアルフィアに渡せばそのまま倒せそうな気がした。

「……アルフィアがまだダンジョンに居たとは……。地上に戻られたと聞いたのですが」

「……ああ、色々ありまして……。アルフィアさんは無暗に攻撃しない事を約束してくれたので、地上に出るまでは多分大丈夫だと思います。「ロキ・ファミリア」も確認していますので」

「そうでしたか。あちらも多数のモンスターが居ました……。異端児のようですが、「ロキ・ファミリア」に任せて良かったのですか？」

前回は竜女の少女ウィーネを巡る戦いがあつたばかりだ。リユーもやむを得ずベル達に協力したが本音で言えば混乱していた。

現在の状況は異端児達を「ガネーシャ・ファミリア」に引き渡す名目で保護していて、ベル達の側に居るアルフィア達は「フレイヤ・ファミリア」預かりになったと説明した。元々そういう約束で協力している、と告げる。

「アルフィアはともかく、もう一匹……のモンスターは？」

「彼女の妹のメーテリアさん、です。元「ヘラ・ファミリア」でしたが闇派閥ではないそうです」

(……アルフィアの妹。……メーテリア。遠目で見た感じでは温和そうな印象を受けませんが……)

元々「ヘラ・ファミリア」の情報に疎いリユーは戦った経験のあるアルフィアしか知らない。

意外な名前に驚きはしたもののベルの様子から害は無さそうだと思った。——それ以前に件のメーテリアはオツタルに背負われて笑っている。

聞けば昔世話をした礼として下僕のような有様になっているとか。

【おうじや猛者】が下僕。

それを聞いて思わずリユーは吹き出して驚いた。下品な反応など気にも留めない、または留められない程の衝撃だった。——覆面に妙な染みが出来たのでベルが洗うと申し出て、彼女は小さくお願いしますと言った。

アルフィアであればある程度の事情は聞いているので分かるが、と。

「メーテリアさんが背中に居ればアルフィアさんは絶対に暴力を振るわない、ということだそうですね」

「……なんだ、その理屈……」

背負った程度で大人しくする女か、とリユーは思った。

ベルは何らかの攻撃を仕掛けるとメーテリアに何らかのダメージが入る。自分の弱

目元を隠した赤い髪の人蜘蛛アラクネが居るのは知っていた。それと他にも多数のモンスターの姿も確認している。

随分と捕獲したものだと思っていたが――

もし、自分の予想が正しければあの集団の正体は――

だが、あり得ないと強く否定する。

どうしてか否定の言葉ばかり浮かぶ。

人は死ねば蘇らない。それが世の中の道理であり真理。

だが、ベルは知っている。その世の中の常識を覆す『魔法』が存在する事を。そして、その効果も。

「……あ、アリーゼはっ、し、死ん……死んだ、んです」

過呼吸になったような不可解な言い方になってしまった。まともな言葉が出せない。

急に動悸が激しくなり、額から汗が次から次へと出てくる。

アルフィアという存在を目にしているのに。どうしてか認められない。認めてはいけない気がした。それも強烈な強迫観念の様なもので。

(な、何を言っているんだ。私は……)

「ただ、謀たばかるのもいい加減にし、して……下さい」

敵意に満ちた否定の言葉をベルに浴びせかける。彼女の言葉はリリルカにもアル

フィアにもオツタル達にも聞かれている。

荒い呼吸を繰り返しながらリユーは貧血を起こしたように足元が覚束おぼつかなくなる。

彼女に今触れると破裂しそうな気がした。

「そこまで否定するのはモンスターだったからか？」

玲瓏とした声でアルフィアが言うと凶星を突かれたようにリユーは呻く。

確かにそれもあるが、と呟いたものの真実は——仲間をこの手で殺めた記憶が蘇ってしまつたからだ。

喜びたい気持ちよりも罪悪感が大きかつた。それほど、当時は絶望に沈んでいた。

ただ一心に仲間の仇をうつ為に闘いの日々^に身を投じてきた。その修羅の日常がついに先日、終わりを告げたばかりで身体や精神、気持ちの感覚はまだズレたままだ。

「お、お前こそどうなんです！ 我々に打倒された貴様は何とも思わないのか！」

血を吐くように絶叫しながら怒りの形相でリユーはアルフィアに言葉をぶつけた。だが、そんな激情もそよ風の如く受け流し、彼女は平然と佇む。

何とも思わないのか、と改めて言われたが別段感情が揺れるような事は無い。

先日出会つた時も旧友に巡り合つた程度の気持ち^{が湧いた}。その前にリユーとの問答の時はある程度の怒りを覚えていた事は事実だが——

「アストレア・ファミリア」が相対したモンスターの事を考えると一概に責められない

気がした。

レベル4だというリユー・リオンですら苦戦を強いられた。初見であれば瓦解もありえなくない。

(……当時は強気な事を言ってしまったが、アダマタイトの盾を切り裂いたとなれば……。言い過ぎたと認めないわけにはいかないな)

第二級冒険者にとつてのアダマタイト製の武器というのは命綱に等しい。それを容易く切り裂くモンスターを初見でどうにかしろ、というのは――

言い訳を考えたところで仲間は死んだ。それが事実だ。そして、それを乗り越えて強くなる者が居れば出来ない者も居る。ただそれだけの事だ。

「勝利者に対して恨み言を言うつもりは無い。私の場合はその割り切った」

多少の憐れみを込めて「静寂」と呼ばれたアルフィアは言った。

確かに同じモンスターとなった彼女達を見て、不甲斐ないだとか文句を言つてやろう、という気持ちが一番初めはあった。

だが、取り返せない結果に今更弱いだの言つても仕方がない。そんな運命も世の中にはあるのだと腑に落ちただけだ。

「失望が無かつたわけではない。……お前を救うために命を投げ出した結果が死だっただけだ。他の選択肢があつた筈だとは言わない。それとも、もう一度、あのモンスター

と戦えと言えはいいのか？」

「……アリーゼは……彼女は生きるべき人間ヒューマンだった……」

嗚咽するエルフはその場に頽くずおれ、地面を殴りつける。

仲間達の選択は未つ子であるリユーを生き残らせること。

生き残った彼女は惨めな生活を強しいられ、希望も正義も無くしてしまった。だからこ

そ、自分よりも生き残るべき人が居た筈だと主張する。

結果論ではあるが、それはもう取り戻せない。アリーゼ達は選択し、リユーは生き

残った。

(……ベル。男の子らしく、慰めてみる)

アルフィアは黙って聞き手に回っていた白髪の少年の背中を叩く。

リユーの仲間の話しに部外者が割り込むのに抵抗を覚えた。するとよく首を突っ込

んでいるんですから別にいいのでは、とリルルカが追隨する。

オツタルに背負われているメーテリアはベルを応援していた。

(……、) こういう時は何て言えば……)

「……え、えと……」

自分では気の利いた言葉などすぐに浮かぶわけもなく。かといって何も言わないの

も失礼だ。

散々迷つて何とかひねり出した文言を可能な限り相手を不快にさせず、元氣が出るような明るいイメージで。

朗らかさを与えるように。親指を立てて微笑み白い歯を光らせながら彼は——多少苦笑してしまつたが——勇氣を出して言った。

「どんまご」

咄嗟に浮かんだ言葉がそれだった。

少し前にアイズが主神ロキから人を慰める時に使う言葉だと聞いた覚えがあつた。

もう一つが『きゆるるん』だった。——こちらは完全に違ふと思つた。

ゴ、ゴッ！

ベルは『ふごつ!?!』という言葉を発した後、後頭部を殴打される音が聞こえた瞬間に意識が途絶えた。

ふざけた文言に怒つたアルフィアが勢い余つて必殺技である『福音拳骨』ゴスベル・パンチにて彼を地面に打ち付けた音だった。ちなみにオツタルに放つた技は超必殺技である。

無意識で繰り出したため、慌てた彼女は妹に顔を向けると苦笑を滲ませて仕方がない子ですぬ、と言つていた。

今の所業に彼女はメテリッどうやら無罪放免にする事にしたらしい。

姉はほつと胸を撫でおろす。

「……ま、まあ、とにかく、だ。近くに居るんだから話しても聞いてきたらどうだ？ 地上に上がったら色々々と面倒ごとが続いて話どころではなくなるぞ」

「そ、そうですねよ、リユー様。姿形は変わってしまいましたが、言葉が通じるんです」

リリルカはそう言いながら気絶したベルの頭に傷薬を塗った。

彼の発言に誰も同情を覚えず、こうなつて当然だと判断した。

場の空気が非常に気まづくなつてしまつたがベルの甲斐性にも限界があるようだとそれぞれのため息交じりに納得した。

嗚咽していたリユーも気絶しているベルを見て思わず苦笑が漏れた。

死んだ人とは二度と会えない。そんな常識がすでに崩れている。

死者の全てが異端児ゼノスと繋がつていゝとは思わない。そうであれば人の社会が根底から覆る事になる。——既に大きな混乱が起きてしまつた後だ。

「話だけでも聞いてみます」

そう言つてリユーは一礼してから「ロキ・ファミリア」の下に向かつた。

去り行くエルフの後ろ姿を眺めつつアルフィアは懸念を思い浮かべていた。

奇跡の様な邂逅の全てが『幸運』の一言で片づけられるわけがない。ダンジョンは悪辣な場である。

これは昔から連綿と言われ続けてきた概念だ。

「今日は随分と異常事態イレギュラーが起きとるな。賑やかで結構な事じゃわい」

ドワーフのガレス・ランドロックは笑おうとしたが、そんな気になれなかった。既に彼も下から来る嫌な気配を感じていた。

「【静寂】のアルフィアの復活といい、これもベル・クラネルが起こした事件とやらか？」
「彼の場合は起きた後の異常事態イレギュラーに關係してしまっただけで、彼自身が意図的に事件を起こすわけじゃあ……無いと思うけれど。毎回規模が大きくて困る」

かといつてベル・クラネルに何もするなどは言えない。

それが出来るのはギルドか主神であるヘステイアくらい。

——フィンに出来るのは警告、または忠告だ。

(どちらかというと「フレイヤ・ファミリア」だと思っけれど)

(いずれあの小僧とは酒の席を設けねばな。さぞ愉快な冒険譚を聞けるだろうよ)

ここ数日で起きた騒動での死者の報告はほぼ零ゼロ。家屋の倒壊セロはあるかもしれないが、ダンジョン内で起きるにしては被害規模が小さすぎる。

何らかの予兆とみるのが常道だ。そうフィン達は判断し、警戒を緩めるなど団員に指示を飛ばす。

そこに先ほど来ていた覆面のエルフが団長達に「面会したいと許可を求める報告が齎もたらされた。

ハイエルフ
王族自ら買って出た事にリユーはおろか、他のエルフ達も危険です、とか抗議めいた言葉を発したが彼女は悉く無視した。

少なくとも団員に心配される程弱くないし、少しは自信をもった意見を言えと強い口調で叱責した。

異端児ゼノスの為に誂あつらえた大きなテントの中には首輪に繋がれたモンスター達が——居るわけもなく、普通に雑魚寝していた。

予定外の邂逅なので調教師用の拘束具の用意が出来なかった。それと「ガネーシャ・ファミリア」の団員が来るのは早くても明日以降である。

魔法も操る一〇体のモンスターに施せるのは第二級以上の冒険者で警戒を固める事だ。

多数の魔石を取り込んだことによる暴走もあり、免疫のない冒険者はただただ不安を募らせた。

「申し訳ありません、リヴェリア様」

「……何度も謝るな。お前の事情を思えば無理からぬことだ。……正直、私も戸惑った」

赤い髪のアリーゼ達が元人類で「アストレア・ファミリア」の団員の記憶を持っている事に。

それが真実かどうかはおいといて、共通語を自在に扱うモンスターに近くで会うこと

になるとは夢にも思わなかった。

そして、なるほど、と理解する。

知り合いがモンスターというのは心が揺れるな、と。

テントの中に入る時、リヴェリア以外にも同伴者が居た。彼女にしてみれば過保護に過ぎるのだが言う事を聞かないし、煩いので好きにしろと言ってしまった。

リユーは改めて異端児ゼノスと邂逅することになったわけだが、完全に面影はなく、形が人類に近いくらいしか分からなかった。

何となくでも似ている人物というのはたくさん居るものだ。それに声も。

他人の空似だと思ってしまうほどリユーは多くの人間と会ってきた。善人悪人間わ
ず。

今は姿すら変える魔法の存在もあり、似ているだけで本人と断定する自信が無くなっていた。

(……駄目だ。一見しても仲間達の姿と重ならない。戦ウォーシヤドウ影がおそらく輝夜だと思うのだが……。ライラ、ネーゼ、ノイン……。本当にお前達なのか?)

苦悩するリユーに対してモンスター達は再度やってきたリユーにどんな言葉をかけ
るべきか話し合ってきた。結果は無言。いや、何も浮かばなかった、が正確か。

モンスター同士であれば多少の同族意識というもので納得できたが人類側を見ると

仲間だと言い張るのは無理そうだと感じた。

人と同じ言語で喋るだけで敵に変わりがない。

(……それよりも問題なのはアリーゼがすっかり黙っちゃまった)

(いつもは率先して明るく振舞う团长さんなのに……)

赤い人蜘蛛アラクネは中央に居て、リユーと真つ向から対面する位置に佇んだまま一言も言葉を発しない。それどころか何の感情も浮かんでいなかった。

輝夜達もそれが不気味で仕方が無かった。他のモンスター達は自身に何か異常が無いか確認し合ったがアリーゼだけおかしいという結論に至る。

アリーゼだけ。

赤い複眼を外気に晒し、未だ周りが見えているのか分からない瞳にリユーの姿をちらりと捉えているのかはなは甚だ疑問である。

(……赤い瞳？ いやまて、おかしいだろ。……ああクソつ。どうしてその発想に行きつかなかった)

赤帽子レッドキャップがリヴェリアの下に駆け寄ろうとすると身体が急に重く感じた。移動疎外の魔法をかけられたわけではない。

よく分からない感情、または気配が身体を拘束したとしか思えない。

それに気づいたのは他にも居て、すぐに仲間達やリヴェリアに声をかける。

「……なんかヤバイ」

「暴走の前兆っぽいので気を付けて」

「……承知した。総員警戒態勢！」

リヴェリアは即座に号令を発した。

それが合図になったのか、人蜘蛛アラクネは口が裂けたように見えるほど不気味な笑みを浮かべた。それに呼応するようにモンスター達は——約半数——次々と瞳を赤く灯らせる。

一人の団員がモンスターの急な変化に戸惑うリユーを後方に引つ張った。

「アー！……アー」

人蜘蛛アラクネは少し前傾姿勢を取り、白い吐息を吐きだす。

外から他の団員が駆けつけ、一体ずつ拘束していく。

対応が早かった為か、それともモンスター達が覚悟していたのか、大した抵抗もせず次々と無力化されていく。——ただし、人蜘蛛アラクネだけは抵抗を試みた。

近づく団員を追い払うように無数の足を動かし、モンスターのようには暴れ出す。

(……暴走したモンスターをベル・クラネルは鎮めた、と言わなかったか?)

報告がたくさんあるので即座に思い出せたのは多くない。

リヴェリアはモンスターの暴走を想定していたが解決方法までは考えていなかった。

——考える必要が今まで無かったからだ。

人語を介するモンスターが凶暴化するの仲間危機ともう一つ何かがあった。それを今まで失念していたことに軽く舌打ちしつつ団員達に防護の魔法をかける。

自我が残っているのが半数ほど。人蜘蛛アラクネを除けば被害規模が小さくて助かる。

「あたしに手伝えることあるー?」

テント内に呑気な言葉が広がった。

声の主はアマゾネスの少女ティオナ・ヒリユテ。モンスターにも一定の理解を持つベル6の冒険者だった。

「あのデカブツを取り押さえろ。口から毒液を出すかもしれない。警戒を怠るな」

「りょうかーい」

天真爛漫なティオナはまず挨拶代わりとして蹴りを放とうとした。いつもの癖でそれを咄嗟にやめて失敗失敗と反省する。

戦う相手を見極める。前回、異端児達ゼノスと戦った時、戦意のない者もある程度いた。

彼女は気分屋などころはあるが無闇やたらと暴力で解決する事を好まない。この点で姉のティオネに甘いだの言われて怒られる。

(……うーん。こういう時、アルゴノウト君が居れば心強いんだけどな)

自分達は暴力でしか解決できない。けれども、ベル・クラネルは自分達が取る方法以外で物事を解決する。

戦闘以外で活躍する為に鍛えてきた頭を今使わなくてはならないのに、と齒噛みしながら解決策を模索する。

意識あるうちに。少なくとも——アリーゼにリユーを手に掛けるような真似はさせてはならない。

人蜘蛛アラクネの興味がリユーに向いている為か、脇から迫るテイオナに気を配らず、彼女の突進を容易に許した。

「ちよ〜つとごめんねー。外に出すよ〜」

「テントを破壊しても構わん」

リヴェリアの鶴の一声にテイオナはにこやかに笑って頷いた。そしてすぐ、大きな図体の人蜘蛛アラクネを放り投げた。

風雨の心配がないとはいえ、暴漢への対策の為にしっかりと建てられたテントはレベル6のテイオナによつて簡単に吹き飛ばされた。

狭い空間だと同士打ちが起きやすい。——本来は異端児ゼノスの姿を隠す意味があつたが非常時なのでリヴェリアもフィンも諦めることにした。

投げ飛ばされたアリーゼは器用に身体をひねらせて地面に着地し、不敵な笑みを浮かべる。そこにテイオナが向かおうとしたところでリユーが彼女の下半身に抱き着いてきた。

「……………おう!？」

「……………こ、殺さないで……………」

「そんなつもりはないよ。……………でもまあ、どうやって大人しくさせるかは分かんないんだけどね」

目の前で仲間が殺されそうになっている。もし、ティオナであれば——全力で助けようとする。相手がモンスターだったとしても。

姉と違い、非情になりきれないアマゾネスである事を自覚している。

(……………ティオネがモンスターだったらあたしは守ろうとする筈だ。……………うん。あたしはきつとそつちを選ぶ)

冒険者の仕事はモンスターを倒すこと。それと人々を守る事だ。

エルフの冒険者が助けを求めている。理由はそれだけで充分だ。きつと白髪アルゴノットの少年もそう決断する。

気絶させる方法が浮かばないがまずは取り押さえる事から、と思っていたが人蜘蛛アラクネは意外にも身のこなしが素早い。

「アハッ。ハハッ」

「……………声が変わった?」

籠ったような反響するような声をアリーゼが発したので首を傾げた。

他の異端児ゼノスのものとは明らかに違っている。これはモンスターが響かせるものに近い、というかそのものだ。

疑問に思いつつも打ち出された糸を腕で受ける。溶解能力が無いので火傷は負わない。

人蜘蛛アラクネというモンスターは手と背囊から糸を出す。それと口から溶解能力のある毒液を出す。

罨を用いた戦術を取るのが一般的だ。

（額の眼球が不気味に動いている。こっちの動きが見えている？ モンスターだから見えるようになったのかな？）

他の面々も——意識が——モンスター化したら今まで使えなかった能力を行使する可能性がある。

そんなことを頭の片隅に置きつつティオナは人蜘蛛アラクネの繰り出す腕をしつかりと受ける。

敵の力はそれほど高くなく、戦闘に支障はない。だが、受けた側から糸が絡みつく。——だが、ティオナはそれらを力づくで振り払ったり容易に引き千切る『力アビリティ』を持っている。

♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪

テイオナは可能な限り手加減して相手の出方を窺う。

人蜘蛛アラクネというモンスターネの討伐自体は慣れていたが——今回は相手が悪い。

二人が戦闘おこなを行っている間、リヴェリアは地面に這いつくばるリユーに早く立てと厳しく言い放った。

ある程度の確信をもつて会いに来たのは理解できるが、混乱している暇はない。

しかしながら、一度暴走したモンスターを諫める事など誰に出来るのか。元々がモンスターだ。

(モンスター本来の姿に戻ったという理屈なら我々に打つ手がない)

何もできない事に苛立つリヴェリアは杖を握る手に力がこもる。打つ手がない、というのは人としての人格を取り戻す方法の事だ。

出来る事なら助けてやりたい。相手がエルフでなくともそう思う。

殺すのは簡単だ。いつもやってきた事だから。

ため息をつく頃、人蜘蛛アラクネが突如として燃え上がった。

「わっ!？」

テイオナの技に相手を燃やすものは無い。他に誰かが火をつけたわけでもない。戦闘を見守っていたライラ達には理解できた。

モンスターと化したはずのアーリーゼが炎の付与魔法エンチャントを使ったのだと。

「アハハハ！」

彼女の事を知らない者から見れば自分の身体を燃やすのは自殺行為だと捉える。だが、生前のアリーゼは炎に耐性を持つ。火炎石の爆弾でさえも彼女に大火傷を負わせることは出来なかった。——ただ、放っていた糸はあっさりとは焼け落ちた。

テイオナが梃子摺てこずっている間にガレス達も合流してきた。

「あちち。……虫なのに炎使いつて……。アイズと同じ付与魔法エンチャントつて奴？」

多少の火傷は我慢できるが迂闊に近づけないところが歯痒い。

単なる戦闘であれば楽だった。

敵を倒す。難しい事を考えなくていい。

(……あー、ほんとにどうしよう。……ねえ、アルゴノウト君)

弱いけれどお人好し。それでいてどんな苦境に遭っても必ず勝利をもぎ取る。

迷宮都市オラリオの騒動の渦中に何度も遭遇してきて、そのたびに強くなつていく少年はテイ

オナにとつての英雄であった。

勿論、決して強くない。今はまだ——

軽く呼吸を整えて攻撃態勢に移り、相手をしっかりと見据える。

一撃とは言わないが決して打倒できない相手ではない。

身も心もモンスターであるならば強者を前にすれば多少は怯むはずだ。レベル6を

燃える人蜘蛛アラクネを茫然とした面持ちで見ているリユーは腰に佩いている武器に手を添える。

ここに来たのは仲間であることを確認するため。殺す為ではない。

(……すぐ目の前に仲間が居るのに私は何もできない)

一目で相手が誰か——分からなかったけれど、確かに気配は「アストレア・ファミリア」の団員達だ。

モンスターになったことが信じられなくて、すぐに受け入れる事など出来る訳が無い。

ベル達と共に居た異端児ゼノスという存在ですら前代未聞。

かつての面影を殆ど残さない彼らを仲間だとして言えるのか。

(……アルフィアのような分かりやすい気配であれば……。言い訳しか出ない)

リユーが葛藤している間、リヴェリアも悩んでいた。

すぐ目の前に仲間が居るなら抱き着いてみる、と言う事は簡単だ。だが、割り切る事は出来ない。

すんなりと仲間意識を取り戻すことなど、出来る訳が無い。

彼女に言える事は立って状況を見極める、と叱咤激励すること。そして、彼らを支援する事だ。

「お前はここに何しに来た？ 感動の再会を期待していたのか？」

「……………」

王族ハイエルフの言葉にリユーは身体を一瞬だけ跳ねさせる。

感動を期待していなかったわけではない。結果があまりにも残酷だったただけ。次にすべきことは何だ、と自分を叱咤する。

冒険者であればモンスターが目の前に居るなら戦うだけだ。それが今までの常識だった。

今は——異端児ゼノス おおむは概ね人の世に憧れを持つ。決して敵一辺倒ではない。

(もし、この場にクラネルさんが居れば助けようとする筈だ。彼ならば決して諦めない) 復讐にかられたリユーですら助けようとする人間だ。ヒューマン彼の選択は常に清く正しい正義に満ちている。

かつて捨て去った正義の心。無くしてしまった瞋恚しんい。

今一度回してみたい。その資格は無いかもしれないけれど、覚悟を常に胸に秘めている。

言葉は必要ない。ただ駆けるのみ。

緑色の疾風と化したリユーは燃え盛る人蜘蛛アラクネに迫る。テイオナは背後から来たリユーに驚きつつも場を譲った。

(……こんな再会になるとは……。これも運命なのでしょうか)

「……アハ。……アー、リオンノ気配ガスル……」

「……その通りですよ、アリーゼ」

嗤っていた人蜘蛛アラクネの表情が消えて額にある複眼が迫るリユーに向けられる。

そして、唸りつつも——疑念によるものか——薄っすらと苦笑を浮かべた。

何度か確認するように。そして、振るわれる大木刀を難なくいなす。

「……リオンダ。……ア？ 殺サナキヤ……。殺ス、殺ス、殺ス……」

(……急激に殺意が……。喋るモンスターだからか、明確に意図が分かるのは気分のい

いものではありませんね)

強者と戦いたい、というものであればまだ希望が持てた。

殺意であればまた対処方法が変わってしまう。

モンスターは冒険者の潜在的な敵だ。ダンジョンから生まれる彼らには一つの目的が与えられる。それが殺意であれば分かり合えない事は必至だ。

元よりお互い理解しようとは思わなかった。それが当たり前のまま千年の歴史が紡がれている。

「燃ア工ル盛ガレ、燃ア工ル盛ガレ、燃ア工ル盛ガレ」

短文詠唱を繰り返す毎に人蜘蛛アラクネの脚、手、身体の火力がより一層増していく。

この光景にリユーは見覚えがあつた。

アリーゼが戦闘の際に使用する発火呪文。バーストワードそして――

かつての仲間を本気で殺そうとしている。

彼女の本意ではない筈だが悲しかった。

ただただダンジョンに翻弄され、冒険者を殺すように仕向けられたことに。

人とモンスターの本来正しい付き合い方なのかもしれないけれど、それを素直に認める事は今のリユーには難しい問題であつた。

「ちよつとー。仲間に対して殺すとか物騒過ぎない?」

不満顔のテイオナが割り込んできた。

彼女にしてみれば折角の感動の対面が殺伐とすることに納得できなかった。

アマゾネスとして大切な友人ともいえる存在を何人も手に掛けた自分が言える事で

はないが、それを抜きにしても幸せになる権利はまだある筈だ、と。

二人が人蜘蛛アラクネに對峙している背後からリヴェリアによる防護魔法が飛んできた。

「そちらは任せただぞ」

王族はそう言つて人蜘蛛アラクネをテイオナ達に任せて他のモンスター達の対処に臨んだ。

リユーは戸惑いつつもリヴェリアに一礼して人蜘蛛アラクネに向き直つた。

「で? 作戦はある?」

「ありません」

「そっか」

作戦が無いなら適度に叩きのめして気絶させるしかない。

それでも無理なら——いや、その考えは後にしよう、とティオナは思いつつ突進する。元々の技術力が高いせい、レベル6相手にも決して怯まない。

リユートの牽制もあまり役に立たない様子だ。——というより適度に発射される糸が邪魔をする。

(……先ほどまですぐ燃えたのに。これは一体?)

(糸を太くして耐熱強化?　なんて器用な……)

少し強引な方法だな、と思いつつ燃える糸によって火傷効果も付随し、攻めあぐねる結果になった。その間にもアリーゼは魔法の詠唱を続けた。

唱えた分だけ火力が強まり、速度が向上し、攻撃力が増えていく。

アリーゼ・ローヴェルが神々から賜った二つ名は——

【紅の正花】

スカレット・ハーネル

生前のレベルは4。

モンスター化したことで幾分か強化されているとはいえティオナの敵ではない。——だが、苦戦は必至。戦いにくい相手に変わりが無い。

(……アルゴノウト君の時と一緒だ)

自分より下位の冒険者が戦うたびに強くなる。既に強者となった自分が置いてきてしまった感覚でもある。

かつての弱い自分が上を目指す気概はとても熱く、貴いものだった。

リユーもかつての団長の強さを目の当たりにし、戸惑いいつも昏倒を試みる。だが、無手である筈の人蜘蛛アラクネの動きがどうにも機敏でやりにくい。

見た目はお気楽なアリーゼだが戦闘に際しては一線を画す。

団員を引き連れる者はそれに見合った実力を持つ。

(……アリーゼ。身を焼く魔法を解いてください。このままでは……)

生前の肉体ならいざ知らず、モンスターまで炎に耐性があるとは思えない。

自身の繰り出す糸が燃えているのだから全くの無傷はありえない。

嗤っているものの火達磨になっている事に人蜘蛛アラクネは全く気付いていない。または頓着していない。

耐性は無効化ではない。威力を弱めているだけだ。

戦闘が膠着していたところ、燃え続ける人蜘蛛アラクネに覆いかぶさるように突撃した者が現われた。

それは全身に水分を含ませた——異端児ゼノス——嘗ての仲間達だった。

「あつちいー！」

「あちち」

動ける半数が泉に飛び込んできたのだろう。それでも炎の付与魔法は消えない。

一見すると無謀な突撃だが相手を驚かせる事には成功した。

火の勢いを急激に弱められた事に動揺する人蜘蛛の横つ面にティオナの拳が。顎にリユウの持つ大木刀が当たる。

二つの打撃により顔全体に衝撃が迸る。だが、しぶとい冒険者時代の「ステイタス」の影響か、朦朧寸前の意識のまま飛び退り、両者に糸を巻き付かせる。

深層域で何度も死線を潜った歴戦の猛者であり、レベルは低いものの第一級冒険者達の背中を見て育った彼女はこの程度では沈まない。

「……「アガリス・アルヴェシンス」」

衰えた火力を復活させ、前傾姿勢を取り——地面を砕く勢いで駆ける。

複数の脚はそれ自体が凶悪な針の如く。後に残るのは炎の轍のみ。

急加速に驚きつつティオナは冷静に相手の動きを観察する。対するリユウは近くに居た仲間を弾き飛ばしつつ敵に向かう様が恐ろしく感じた。

（アンフィス・バエナのような凶悪な炎ではないようじゃな。……あの快活だった娘が敵に回るとは……）

どっしりと構えているドワーフのガレスは哀愁の様なものを感じた。

年端のいかぬ若者の死は年長者にとってはかなりの痛手。特にアリーゼはあらゆる種族に理解を示す明るい性格の持ち主だっただけに武器を持つ手に力を籠められない。

今でこそ見守っているが取り押さええるだけならすぐにでも駆けだしたい気持ちがあった。

——いや、幹部だからという役職に甘んじている場合ではなかった。

「……小娘の力を儂に見せてくれんかの」

突進してくるアリーゼに横合いからガレスが割り込み、彼女の必殺を受け止める。

唐突な乱入にティオナは不満を滲ませるが裸体に近い状態で炎に包まれた彼女を止めるのは——正直に言えば——躊躇したい気持ちだった。

アリーゼの必殺は全身に炎の属性を付与し、敵に叩き込む。その攻撃の最もたる特徴は『爆散鍵』^{スベルキ}を使った自爆だ。

魔法を扱う者は誰もが持つ魔法の強制解除の方法。使い方によっては故意の暴走も起こせる。

「凶体のわりに攻撃が軽いの〜」

「……ウツ？ ドワーフノオジ様？」

上半身がガレスに向き、下半身は突進の為に未だ動きを止めず。

それでも急激な停止による疑念がモンスターの渦巻いた。身体が焼けている事などそよ風の如く。

珍しいものを見るかのように彼の頭に触ると掌てのひらにびつちりと糸が張り付き、すぐに燃え上がる。

「……オジ様。触ルト燃エル。燃エルカラ熱イ……。消エナイ……。危ナイヨ」

「それがどうした？ 燃えとるのは儂だけではないぞ。お主もだ」

自身が燃えるのは何となく理解しているし、それがどうしたのだと人蜘蛛アラクネは思う。

今正まじに冒険者を殺そうとしているのだから何がおかしい。何もおかしくない。正常な事だ。——だが、異常でもある、という思いがある。

「アー？ アウ？ 殺ス……。殺サナキヤ……。オジ様ヲ？ ドウシテ？」

殴りつけては疑問を覚え、思い出したように燃え上がっては自分のやっている事に疑問を抱く。その繰り返し。

ガレスはその間にもつと水を掛ける、と指示を飛ばす。

大きな変化は無いが高火力を無限に生み出せるわけはなく、いずれ精神力マインドは尽きる。これは我慢比べだ。



膠着状態に陥るかに思えた戦場に新たな乱入者が駆けつける。

上層に向かった筈のベル・クラネルであった。そして、彼の背には白髪ウイールの竜女の姿もある。

戸惑うリユーが彼らに気付いたもの思うように言葉が出ない。

「アルゴノウト君!?! なんで戻ってきたの?」

予想外の人物の姿にテイオナは驚いたが当のベルは苦笑するばかり。

そもそもここに来たのは背中に背負っている竜女ウイールことメーテリアの要望があつたらだ。

嫌な予感がするから連れていけ、と急に言い出した。

「ラビット・フット【白兎の脚】だと? ベル・クラネルか。今、忙しいんじやが。何しに来よつた?」

前面部に火傷が見られるドワーフのガレスがアリーゼを見据えたまま尋ねてきた。

暴走している彼女もベルの名前が聞こえたらしく、ドワーフ越しに確認しようと首を巡らせる。

「お手伝いに。……【フレイヤ・ファミリア】の方々にも許可を戴きました」

「そして、私はお兄ちゃんの背中から指示を出す為にやってきました」

にこやかにメーテリアアラクネが挨拶する。

駆け付けたものの人蜘蛛アラクネが燃えているし、膠着状態である事も確認した。その上で何が出来るのか、とベルは考える。

これはメーテリアだけではなくアルフィアも気付いた事だった。

言葉にするのが難しく、それでも動こうと提案したのは妹のメーテリアが先だった。

議論を交えず、姉は上層を目指し、妹はベル・クラネルに一任された。そして、現在に至る。

『我が声を聴け』

拡声のスキルを持ってメーテリアは告げる。

この階層全てに彼女の声が響き渡る。

音に関するスキルを持つ姉に憧れて「ランクアップ」時に得てしまったスキルの名は【木霊反響】という。

戦闘の役に立たないが同階層に居る仲間確実に呼びかけられるところから初期のころは重宝された。だが、それだけだった為に神ヘラから早々に役立たずの烙印を押されてしまった。——その後、主神が姉の制裁を受けたのは言うまでもない。

(声が……)

(何処からだ?)

一八階層に居る全ての冒険者にメーテリアの声が行き渡った事で多少の混乱が起きた。だが、声を出した当人は遠くに居る者の存在に頓着しなかった。

このスキルの最大の特徴は人だけではなくモンスターにも作用する。

「あえて皆様に尋ねます。そこで燃えているモンスターを助けたいですか？」

スキルを解除してからメーテリアは現場に居る者達に尋ねた。

大半は倒した方がいいと思っただ。

ガレスは何でもいい、という大雑把なもの。

リヴェリアは無回答。ライラ達は戸惑っているだけで答えられず。

リユーは涙に濡れた顔で助けを懇願した。どうしたらいいのかわからない為にも言葉も乱れていてまともに聞き取れない状態だ。

「お兄ちゃんは当然、助けた方がいいのよね？」

「はい」

大切な友人かもしれない者が暴走して我を忘れている。

気丈なりユーがまともに立てなくなる程、絶望している。復讐に駆られていた時とは

真逆といってもいいくらいの変わりようだ。

尋ねたメーテリアは既に現場を把握し、軽く息を整える。

彼女自身も覚悟を決めてここに居る。

(……悪辣なダンジョンの刺客。その気配自体は私も姉さんも感じていた。だが、跳ねのけた。……心の間隙って奴ね。それもまた運命を感じるわ。キアン様の予想通り

……)

ディアンケヒトとミアハを友神ゆうじんに持つ医療系の主神キアン。

彼は長くダンジョンの仕組みを調査していた。当時は神がダンジョンに向かう事をそれほど制限していなかった。

結局のところメーテリアが生きていた間に研究が実を結ぶことは無かったようだが
天界に居る彼は今でも下界を気に掛けている。

もし、何らかの方法で転生するようなことがあれば、と淡い希望に縋りつく姿が目撃されている。

ベルの背中から降りたメーテリアは手を叩いて指示を飛ばす。

モンスターをひとまとめにし、燃えているモンスターは皆で消火するように、と。

「生前使う事が叶わなかった秘策を用いてみます。……もし、効果が無くても恨まないでくださいませ」

「何をする気は分かんが、任せた」

「こちらも全力でサポートしよう」

リヴェリアも周りの団員達に動くように指示を飛ばす。

暴走していないモンスターにも協力してもらい、大きな塊になってもらう。当然、彼女達もアリーゼの魔法によって焼けてしまうが少しの間だけ我慢してもらおうように頼

んだ。

ある意味容赦のない指示にライラは苦笑を滲ませるが抗議の声は挙げなかった。他の者も同様に。

「何が起きるか分かりません。お兄ちゃん、これが今生の別れになるかもしれません」

「……別れ？」

「無事なら良し。そうでなければ……覚悟してください」

「……分かりました」

「大きな力には何かしらの代償が必要になります。……それが寿命で、このあと私が死んだとしても後悔しないように。もし、それが君だったら躊躇いますか？」

死ぬ。後悔。聞きたくない単語にベルは怯む。

誰も犠牲にしたくない少年にしてみれば残酷な事である。だが、それら全てをどうにかする力は自分には無い事も知っている。

メーテリアは死ぬ気は無いけれど、それに匹敵する代償と引き換えに皆を救おうとしている。

もし、それがベルであれば、と聞かれている。当然、救える命があるなら使用に躊躇いは無い、と言いたいところだが――

仲間の姿がチラつく今、前のようになりふり構わない行動もとりにくくなる。

「命が大事なら躊躇ってもおかしくはありません。無謀な手段である事を自覚しない方が性質が悪い。英雄も生きていなければ偉業を成せません。私達の家訓には生きている事が一番の強者である、というものがありません」
(生きているだけで凄いです)

今はまだ発展途上にあるベル・クラネルの答えを聞く気は無い。

彼に背を向けたメーテリアは歩き出す。

ベル・クラネルの答えを聞くべき相手はきつとメーテリアではない何者か、だ。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

燃え盛るモンスターと向き合い、火傷を負いながら一塊になろうとしているモンスター姿を一瞥する。

ガレスはおろか団員達もアリーゼの炎に炙られて苦悶の表情を滲ませていた。

これで何の効果も無ければ甘んじて彼らの刃を受け入れようと思った。なにせ、成功例を確認したことが無い。あくまで使えることが分かっただけだ。

冒険者が取得する魔法は発現した瞬間に効果内容を知る。その解除方法も同様に。

それによればこれから使う能力の代償は未記載。無い、わけではなく使った後に現れる可能性があるあやふやなもの。だからどうなるのかメーテリア自身にも分からない。

体内の魔石が砕けるのか、猛毒を喰らうのか。それとも——もつと悪い結果に至るの

か。

どちらにせよ、モンスターである自身が死ぬくらいであれば問題は無い。ベル・クラネルが悲しみに暮れる可能性を思うとメーテリアでさえも躊躇いを覚えてしまうが。

覚悟を決めた後、リヴェリアの防護魔法を受ける。しかし、それとて長くは持たない。メーテリアはアリーゼの真ん前に座り込み、彼女の前足を掴む。

モンスター達は手を繋いだり、紐のようなもので繋がれたりし、要望通りの形になった。

それらの確認を終えてメーテリアは魔法を紡ぐ。

「暗闇に揺蕩う堕ちし我らの稚児。枷に囚われし我らの同胞」
玲瓏たる声色が『スキル』に乗せられて階層内に木霊する。

誰しもが母から生まれた事を思い出したように。

喚くのは階層内に徘徊するモンスターと暴走するアリーゼ達のみ。

「絶望するなかれ。其方は神の眷族であり、母の子である。即ち森羅万象の子である。許しは慈母の御手より賜れり。私はあなたを愛しています」

危機を感じ取ったアリーゼが突如火力を上げ、悲鳴を上げる。

メーテリアが使おうとする魔法の効果に気付いたのか。

大人しくしていた——元「アストレア・ファミリア」以外の——モンスター達も彼女を敵と見定めて集まってきた。

「襲い来るモンスターを排除しろ！」

「……を死守せよ！」

一斉に向かっていると云っても膨大な数ではない。

第二級冒険者が数十人居ればどうということもない数だ。それでも警戒を緩める理由にはならないけれど。

モンスターとの戦闘が始まると同時にダンジョンが震えた。

自我が残っているライラ達にも感じ取れた。

ダンジョンが怒っている。

何に對しての怒りなのか。それは考えるまでもない。

メーテリアがこれから成すことに対してだ。そうとしか思えない。

そしてそれはメーテリア自身にも分かった。

(……そりゃあ怒りますよね。これはある意味では対ダンジョン用の魔法でもありませんから)

モンスターを倒す魔法ではないけれどダンジョンにとっては都合の悪いものである。

もし、それを唱えられたらどうなるのか。

存在意義が失われる。そして、ダンジョンはそれを迅速に防ぐ方法を持たない。出来るのは原因を排除する使徒を差し向ける事くらい。

何も出来ない事に怒りを募らせるダンジョンの気持ちの表れなのか、震動は時間経過と共に強くなる。

だが、それは所詮強がりすぎない。メーテリアは軽く苦笑し、詠唱を完成させるべく言葉を紡いだ。

「此の者に掛けられし罪過（縛鎖）の悉く（ほど）を解く。聴け、迷宮嘆」

超長文詠唱が完成すると同時に遠くにある壁が大きくひび割れる。

警戒していたフィン・ディムナ達は武器を持って、と命令する。

ベル・クラネルも神へスティアから授かった『ヘスティア・ナイフ』を握り込む。

リユーは足元に巨大な魔法陣が広がるのを確認した後、アリーゼの口を閉じさせるために大木刀を叩き込む。一瞬でもいい、彼女の意識（アリーゼ）をメーテリアから逸らせるために。

「慈母揺籃」
アルマ・レデンブトリス・マィテル

メーテリアの魔法が完成し、彼女を中心に光りの波動が広がっていく。

生前ついで発動する事が無かったものだが、その効果は——ダンジョンが保有する悪意を浄化する。

ベルが震動で我に返った後、足元に転がるメーテリアに声をかけた。意識を失っているようだ。おそらく精神疲弊マインドダウンに陥っている。

すぐさま移動しなければ——嫌な気配はより一層強く感じる。

「皆さん、壁と足元に注意して下さい！」

メーテリアを抱え上げたベルは大声で言った。

ここに居ては危ないと。

リユーとティオナにも人蜘蛛アラクネの移動を半ば命令した。

「了解っ」

「分かりました」

それぞれ手の空いているものが動かないモンスターを担いで逃げ出した時に地面が大きく割れた。いや、壁も割れた。

そこから飛び出すように出てきたのはベルとリユーにも見覚えがある存在だった。

竜種の骨格で出来たような大型級のモンスター『破壊者』ジャガーノート——それが都合三体も現れた。

「ロキ・ファミア」にとっては未知のモンスターだ。大なり小なりの驚きが漏れる。

「なんじゃ、このモンスターは？」

「エルガルドム重傑」、気を付けて下さい。このモンスターこそアストレア・ファミア我々を全滅させた災厄です」

突如として湧きだしたモンスターに戸惑いつつ震えていた足腰を叩いて鼓舞する。

リユーにとつて既に未知ではなく既知であるモンスターだ。

襲い掛かれる前に伝えられる情報を叫び散らす。

そこに話し半分の内にはリヴェリアが杖を振るい、魔法を放とうとした。それをリユーがすかさず無礼を承知でやめさせる。

「攻撃魔法を使つてはいけません！ あいつは魔法を反射させる」

「そ、そうか。……うむ、承知した。聞いたな、お前達っ！」

戸惑いは一瞬。

ハイエルフ

王族の言葉に魔法担当が元気よく答えていく。だが、声が届かない連中も居る。それらは既に駆けだしたリユーが端的に情報を伝達する。

声を広げる能力を持つメーテリアは未だに意識不明。無理矢理目覚めさせる案も出たが、ベルが既に連れ去った後だった。

現れたジャガーノートの攻撃が始まる。

下級冒険者には対応せずに逃げろと伝えるが既に犠牲者が出てしまった。

驚異的な敏捷によって防具が意味をなさない。その結果が地面に撒き散らされる血で表される。

「盾役ごと、じゃとっ！」

防御せずに逃げろ、と言っていた意味を理解し、歯噛みする。

死傷者はまだ出ていないが重傷が相次いだ。

レベル4のラウル・ノールドとアナキティ・オータムも戦闘に参加するものの素早いモンスターに翻弄され、防戦一方だった。

【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタインは下位の冒険者を守りつつ襲い来るモンスターの硬い外皮に確実に斬撃をお見舞いした。

(……魔法を反射するって言ってたけど、私の魔法は通用するみたい。……でも、飛び回るから戦いにくい)

唸りつつ戦い方を模索する所に強烈な蹴り技で圧倒する狼ウエアウルフ人のベート・ローガが合流してきた。

素早く打撃が有効とだけ言って跳ぶように去っていく。

彼の言葉を聞いた団員達はそれぞれ今の情報を伝達していく。

ものの数分で混乱を収め、それぞれ敵性モンスターとの距離を測る。

(我々の時は一瞬で全てが終わってしまった。……広い空間だからこそ余裕が出来たのかもしれない)

大木刀で新手のジャガーノートを打ち据えつつ【ロキ・ファミリア】の練度に感心した。

リユールの時は最初から詰んでいた。特に気持ちを保たなかった。

落ち着いて望めるのは経験のお陰だ。そうでなければ今もその場から動けずに足手まといになっていた。

後悔しても取り戻せない。自分はまだモンスターとなった彼女達を受け入れたわけではない。まだ迷いがある。

「宿場街に向かう前に倒したい」

「……もう動けるぜ。誰か武器を貸してくんねーか。アタシらも参戦する」

「異端児達に武器を与えろ！ 敵は未知のモンスター三体！ 可能な限り回避しながら

打撃を与えろ！」

【勇者】^{ブレイバ}フィン・ディムナは可能な限りの大声で通達する。

彼に迷いはない。明確な敵が居る。それを打倒すればいい。

ベル・クラネルとリユール・リオンも同意する。だから自分達も乗り遅れるわけにはいかない。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

複数のレベル4を擁するパーティだった「アストレア・ファミリア」と違い、第一級冒険者が居る「ファミリア」の戦闘は圧倒的だった。

まず二人も居れば充分だと言わんばかりの高火力の攻撃は大型級であるジャガー

ノートをものともしない。

裸に近いアマゾネスの姉妹であるティオナがうっかり防御態勢に入り、モンスターの破爪を受けて手首を半ばまで切り裂かれて騒いだ以外は順調だ。

結構な出血量に少し意識が朦朧としたが回復薬で傷口を塞いで保存食を齧る。

「少し休んでいなさい。あのモンスターの尻尾なら受けられそうよ」

「ごめん。ここまで切れ味がいいとは思わなかった」

「……防具が通用しないって聞いてけど、ここまでとは……。確かに初見で襲われれば私らでも不味い相手よね」

姉のティオネはモンスターを侮っていたことを後悔した。

確かに素早い敵だが、魔法が通用しない程度は問題ないと思っていた。

レベル6の『耐久』なら耐えられる、と。

「ガレスは無事なの？」

「めっちゃ血塗れですが命に別状なし。防具は紙くずになりました」

「……げっ。それもうヤバイじゃん」

「……本当に盾役意味ないんだ。まだ竜種の方が戦いやすいんだね」

善戦しているとはいえ無傷ではない。

ベルとリユーは仲間を庇いつつ安全な場所に避難しなければならぬ。敵は確実に

弱い冒険者と戦闘意欲のない者を狙っているようだ。

数分の激闘で一体が粉々に飛び散ったが、地面から新たなジャガーノートが湧きだした。

「また!？」

「同じ個体ならやりようはある。魔石は?」

「見当たらないそうです」

フィンには戦いながらも情報収集に余念が無い。

ベルも相手の動きを見ているが相変わらず速く、姑息であった。——だが、目で追えない程ではない。寧ろ——

(……遅い?)

リユーに相手の速度について尋ねてみると彼女も同じ感想を抱いた。

すぐにそれらをフィンに伝える。

自分達が戦ったモンスターより弱体化している可能性がある事を。

「……階層依存型か。それでもレベル3以上でなければきついな。攻撃力はレベル6でも無視できないと来ている」

フィンにとっては未知の相手だ。だが、対処方法が分かれば勝てないまでも負ける道理は無い。

ベートに無理を言つて先行させる。

このモンスターは打撃特化の冒険者と相性がいい。逆に重装備と魔法特化とは相性が最悪だ。

「この二人に剣を渡せ。いや、メイスか斧がいいか。やつてくれるかい？」

「はい」

「承知しました」

フィンの指示を受けたベルとリユーはそれぞれ武器を手に取り駆け出していく。彼らと入れ替わるように拠点に戻ったりヴェリアは傷だらけになったガレスの治療を始める。

見た目こそ重傷に見えるが実のところ命に別状はなく、戦闘もまだ少し継続できた。

鈍重ゆえに足手まといになると思つて素直に引き上げることにしただけだ。

「斬撃特化すぎじゃろ」

「事前に知らなければ私の魔法で全滅もあり得たかもな」

広範囲爆撃をそっくり反射されれば戦う意欲を失う可能性がある。それを思えば現場から引き下がる事にも納得できる。だが、何もできないというのは存外悔しいものだとリヴェリアは愚痴のように零した。

二人の様子を眺めたフィンは事前情報が無ければ被害はもつと悪い方に傾いていた

るな、と強い口調で言い放った。

「寄生型のモンスターらしいわ。完全に滅びるまで近づかない方がいいわよ」「ああっ？ お前もかよ。そんなにこのモンスターを独り占めしたいのか？」

言い争いが始まろうとするところに一体のジャガーノートが飛来する。それを察知したベルがアナキティを突き飛ばしつつ迎撃する。

モンスターの攻撃を完全に避け切れなかった彼女の背中に薄く切れ込みが入り、血が滲む。

体勢を立て直し、警戒するもモンスターは驚異的な移動能力を持って壁に着地し、標的を探す。

「幸い傷は浅い。中心からも逸れています。が、早めに回復薬ポーションを使う事を勧めます」「分かったわ。……しっかし、なんて速度なの。全く気付かなかったわ」

アナキティは四つん這いの姿勢で拠点へと戻る。急襲された事で冒険者は散ったが敵はまだ生き残っている。彼らを守りながら戦うとなると気が重い。

一番の問題は空間が広すぎる事と守るべき冒険者の人数が膨大であること。

通常知られている階層特有のモンスターと違い、突発的に出現し、且つ希少モンスターである。

アイズはフィン^の命令で下級冒険者の防衛に回っていた。

「もう何体目よ」

「十二体かな？ 魔石無し、ドロップアイテム無し。被害ばかり増える。……旨味が全くないモンスターだよね」

「……だが、久しぶりの強敵だ。あれの異端児^{ゼノス}が居たら是非とも戦闘訓練に参加してもらいたいものだよ」

苦笑しながらフィンは言った。

今のところ共通語^{コイネー}を使う個体は確認されていない。——居てもらいたくない、というのが本音だが。

杖を手放し、棍棒にてリヴェリアも戦闘に参加した。

「……それにしても、妙に賢いなこのモンスターは」

「多少どころか、かなり知恵が回るようです。魔法による迎撃が出来ないのが悔やまれますが……」

飛び道具を持っていないのはモンスターも同じ。攻撃は主に接近戦だ。

動きを読めれば倒せなくはない。しかし——

ジャガーノートは斬撃以外にも階層にあるあらゆるものを使う。それは土だったり、小石だったり。

仲間の死体すらも礫しづてとして使用する。

(……この時こそ盾役が役立つ。迎撃は我らに)

傷を癒しているガレスにリユーは小声で伝えた。

業を煮やすまでが長いが囹役は意外と有効な手段である。特に簡単に死なない冒険者はジャガーノートにとって最も相性が悪い。

「初期の混乱さえ脱出できれば我々に敗北は無い。総員、戦闘準備つ！」

「おおーっ！」

フィンが鼓舞し、団員達が応える。

ジャガーノートの情報は把握した。後はそれを有効に使うだけ。

数が増えようとこちら側が倒れなければいい。これはダンジョンとの根競べである。

無駄の無くなったベートによる蹂躪によって生まれ出るジャガーノートの討伐時間はどんどん早まっていく。

【アストレア・ファミリア】の面々も【ロキ・ファミリア】の働きに感動を覚えていた。

有効打の無い自分達では一体か二体までしか対処できない。彼らは既に一〇体以上も仕留めている。

実力差をまじまじと見せつけられ、悔しい思いと同時に頑張れと応援する気持ちが湧き上がる。

い。

フィンが思案している間、ベート、アイズ、ヒリュテ姉妹による同時撃破が敢行された。——結果は同時に三体のジャガーノートが新たに生まれただけだった。

(……冒険者を皆殺しにしない限り湧き続けるつもりか)

だが、それなら三体ではなく数の暴力に任せればいい。なぜ、三体なのか。それとも最悪を想定したくないと思いつつもフィンは長槍を握りつめ、戦闘に参加する事にした。

本当に無限なのか。それとも他の条件があるのかを確認するために。

リユーとベルは新たに生まれ出たジャガーノートを翻弄しつつ無駄のない動きで手足と尻尾を刈り取った。

下層に現れた個体より動きが読みやすいし、土の多い階層の為に礫つぶてのダメージも少ない。

「本気で我々を殺しにかかっているとしか思えません」

「でも、黙って殺されるわけにはいかない」

「敵は三体です。無理に戦わず、休息できる時は休んでください」

「[レア・ヴァンデミア]」

で攻めてきたり、様々な戦法を取ってくる。

目的が冒険者の抹殺だとしても考え無しに突っ込んで来るわけではない。

「ああもう、魔法で叩き落したいのに〜!」

怒りを露あらわにするのは山吹色の長い髪を後ろで一つにまとめたエルフのレフイーヤ・ウイリデイスだ。

遠距離からの迎撃が出来なければ何の意味もない。その菌痒さに気持ちが悪く、苛立つてくる。他の者達も疲労が溜まっている。

ジャガーノートは動きが鈍ってきた者を優先的に狙ってくる。

(……確かに遠距離攻撃が出来れば少しは楽になると思うけれど……)

硬い外骨格の為に生半可な投擲武器ではダメージに繋がらない。

それは相手も同じで、息吹ブレスなどの飛び道具が無い分、脅威度は幾分か低い。

このモンスターの特徴は切れ味の鋭い破爪と驚異的な速度。巨体そのものもある意味では厄介な凶器だ。

攻撃側を適度に回復させ、第一級冒険者に全てを委ねるのが安全策だ。逆に彼らが瓦解すれば勝ち目は一気に無くなる。

(撃破後に現れる個体を狙えばいいんだけど……。今の所、どれも冒険者からかなり離れた位置から生まれている)

ダンジョンが冒険者の戦略を読んでいるかのように。

ベルが状況を思案している横で苛立つレイヤーはケガ人を見つけてはモンスターから引き離そうと奮闘する。

役に立てなければ無理に戦闘に加わらない。悔しい思いだが、それも戦略の一つとして納得するしかない。

「おい、下つ端エルフ！ 魔法を寄せせ」

疲労を滲ませたベート・ローガがモンスターに顔を向けたまま声を発した。それにレイヤーが自分の事だと思い、急いで詠唱を始める。

法撃は通用しない——らしい——が反射されなければ通じる。

アイズとアリーの奮闘により、魔法が全く通用しないわけではない事は理解してた。

「[アルクス・レイ]！」

レイヤーの魔法は狙い変わらずベートが足に装備している白銀のメタルブーツ『フロスヴィルト』に着弾する。

魔力伝導率の高い『ミスリル』という金属で作られている第二等級特殊武装スベルオルズの武具はあらゆる魔法を一度だけ貯め込み、属性を付与された攻撃を叩き込める。それはアイズのような付与魔法エンチャントであつても可能である。

ジャガーノートは広い空間内を自由自在に飛び回る為に——必然的に——追隨しようとする冒険者の体力が著しく失つていく。

第一級冒険者であるベートやアイズ、ティオネとティオナも汗まみれだ。

倒しても倒しても湧き出てくる。これは五〇階層以降で経験する重労働である。

「う、うあああ！」

連続戦闘の影響か、キャットピープル猫 人のアナキティが吠えた。そして、怒りを滲ませて駆け出す。

す。

黒髪黒目の「貴猫」アルシヤールが向かう先には白い髪に疲労を滲ませた深紅ルベライトの瞳の少年が居た。

周りで休んでいる冒険者達も何事かと驚きに包まれる。

寧猛な野生動物の如く、敵意をむき出しにして力いっぱいベル・クラネルを殴り飛ばす。

「ぐあー！」

まさかいきなり殴つてくるとは思わず、意表を突かれた形でベルは彼女の攻撃を受けてしまった。

何が何やら分からず戸惑う少年に構わず、アナキティは彼に馬乗りになり、憤怒の形で殴り掛かった。

（クソ！ 仲間が何人も死んだ。多くのケガ人が出た。それもこれもあなたのせいよ、

【白兔の脚】！
ラビット・フット

疲労の蓄積で貯め込まれた様々な不満が爆発した。

事態に気付いたフィンは手をかざして止めようとしたが言葉が出なかった。

リヴェリアもガレスも同様に。

混乱するベルは逆に僕のせいかと納得してしまい抵抗しなかった。それが逆効果になり、アナキティはより一層怒りを募らせる。

怒りに任せた攻撃で痛い事は確かだ。だが、不思議と死を感じさせるほどの痛みではない。

レベルは共に4。『耐久』アビリティも高いので怪我自体は大したことが無い。

本当に痛いのはどちらかの心だ。

「や、やめるつすよ、アキ……」

「うるさいうるさいっ！」

仲裁に入るのはアナキティと付き合いが長いラウル。だが、彼らが揉めている間もジャガーノートは冒険者を襲い続ける。

ベート達のはのんびりと見物する暇も無く、戦闘を開始する。

(八つ当たりで一番痛えのは自分だけ、お嬢ちゃん)

身体中切り傷だらけにした赤帽子レッドキャップのライラが黙って彼らを見つめていた。

声を掛けようかと思つたがレベル4は既に子供じやない、と。

もし、アナキティがレベル3であれば後頭部を蹴つているところだ。

「あー、青春ね、ライラ」

「……痴話喧嘩の間違いじゃねーか」

視力が回復したアリーゼはベル達を少し遠目から興味津々に眺めていた。

すっかり調子を取り戻した元「アストレア・ファミリア」団長は借りた剣を振り回して喜んだので、仲間達が危ないからやめろと叱咤する。

迷惑をかけた分はしっかりと働きます、と宣言した通り彼女は破竹の勢いでジャガーノートを屠っていた。

一瞬で「アストレア・ファミリア」を壊滅させたはずのモンスターなのに、とライラや輝夜は啞然としながら驚いたものだ。

彼女曰く——

もう倒し方が分かったから平気。

更には言えば攻略方法が分からなかったから自爆攻撃してしまつたけれど、リユウが居なければ一人でも相打ちくらいは出来たと自信をもって言い放つた。

それに目の前に居るのは当時戦っていた個体より弱いのは確実、とはつきり言い切つた。

「これは所謂アレよ。一度見た技は二度目は通じなくなる……」
「……ふ、ぎ、けんなー！」

「ふざけてなんかいないわ。大丈夫。あいつの動きはちゃんと見えている。さつき輝夜だつて一刀両断してたじゃない」

縦ではなく横だがな、と戦影ウツァーシヤドウの輝夜がため息交じりに言った。

何の考えも無しに剣を振るつたわけではない。ちゃんと関節部分を狙つた、と。

骨格系のモンスターモンスターの攻略は非常に単純だ。骨と骨の継ぎ目を狙えばいい。

階層主を含めてこの条件は深層域でも通用する攻略法だ。

「油断さえしなければあんなモンスターの一〇や二〇……。敵じゃないわ」

「……その前に……末っ子の顔を見てやれよ」

ライラはアリーゼの背後でチラチラと様子を窺う緑色の外套を纏ったエルフを親指で指し示す。

姿自体は確認している。戦闘にも加わってもらっている。

まだ会話が成立していない。主にお互いがお互いに遠慮して。

明るいアリーゼが仲間と今もこうして話せるのにリユー・リオンはまだ面と向かって話せていない。

(……暴走した後でリオンに声をかけるのつて改めて考えると恥ずかしいわ)

それに——彼女には辛い選択を選ばせてしまった負い目がある。

悪の道に墮としてしまった責任もある。

そんな事を頭の片隅で考えつつ白髪ルの少年がどうなったのか覗き込むように首を伸ばす。

しこたま殴った後、最後に彼の顔に唾を吐いて立ち去ったところが見えた。

(……髪が白いから血が良く映えるわね)

モンスターもだが——アナキティの追撃の様子が無い事を確認してからベルの下に向かう。ライラ達もアリーゼの後を追ひ、最後にリユーも追隨する。

彼女もベルが殴られているところを目撃する事になったがどちらを優先すべきか迷ってしまった。

リユーにとつてはベルもアリーゼも『尊敬する人間ヒューマン』という枠組みに入るので。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

新手のジャガーノートは今も発生中だがアリーゼ達は警戒しつつベルの様子を窺う。

鼻血こそダラダラと流れていたが顔形が崩れるほどではなかった。

目元より鼻を狙われたらしい。

「生きてっかー?」

脳震盪を起こしているのか、それとも単に気絶しているのか。

胸が上下しているのもまだ生きている事は確認できた。

マリユ仲間に治癒魔法をかけさせ、用意した手拭いで顔を拭う。すると綺麗なベルの顔が拝めた。

念のために回復薬^{ポーション}を振りかけたり、飲ませておく。

「モンスターとしつかり戦えていたのに冒険者に倒されるなんて、とんだ災難ですね」

「アタシらの知らない間に色々とあつたんだろうよ。ほら、坊主。そろそろ起きろ。ここで悠長に寝られる度胸は買うが……。意識の切り替えはちゃんとしろ」

ライラはベルの頭を軽く蹴る。

彼女にとつて意地悪でしているわけではない。今、一八階層は死地となっている。回復したなら即座に戦線復帰しなければ命に係わる。

「ロキ・ファミリア」の団員達も数分の休憩後に戦線に復帰している。彼らはきちんと覚悟を持って臨んでいる。

だから――

「よし、アリーゼ。潰せ」

「任せてー、つてするわけないでしょう。彼だつて何体かあの化け物を仕留めたんだから休息は必要よ。貴重な戦力を使い潰すにはまだ早いわ」

「水を持ってきた方がいいよね？」

「確かにな。特に血塗れの連中の為にも……。リヤーナ、マリユー、セルティは泉担当。アスタ、イスカ、ノインはそろそろ戦線復帰だ」

「了解」

「私は【ロキ・ファミア】と合流して回復薬の配布を手伝ってくる」

ネーゼ・ランケットの言葉にアリーゼは頷いた。

方針が固まり、それぞれ散っていく。

アスタ・ノックスはベルを担いでジャガーノートの襲撃に備え、アリーゼ達は軽く身体の調子確かめる。

「……というわけでリオン。貴女も協力してね」

「……はい」

アリーゼはリユーを背にしたまま声をかけ、彼女がそれに応えてくれた事に激しく嬉しさを感じた。

自分の声が届いた。それだけで生きてて良かったと思えた。だが、残念ながら今は戦闘中だ。落ち着くにはまだ早い。

複眼含めて目を瞑り、数秒間だけ無心になる。

色々と考えなければならぬ事がたくさんあるけれど、今はそれらを全て棚上げにする。そして、鬨の声を上げる。

「正義の剣と翼に誓って……、あの化け物を殲滅する！」

「おおっ！」

（私も誓います、アリーゼ）

アリーゼは二本ある小太刀のうちの一本を戦^{ウオーシヤドウ}影に放った。

元々は輝夜の持ち物だ。使い慣れた武器の方が戦い易いと判断した。

互いに言葉のやり取りは無い。だが、今はそれでいい。

アリーゼとアリーゼが駆け出し、ライラ達は別動隊の補佐に向かった。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

休息を取らずに戦闘し続けたせいとか、唐突に怒りが湧き、本能のままに【^{ラビット・フット}白兔の脚】を

殴り続けた。

アナキティは【ロキ・ファミリア】の拠点に戻った後、冷静さを取り戻し、顔を青ざ

めさせていた。

彼女の所業は多くの団員達も目撃しており、一部ではよくやったと褒めていたが彼女自身はとんでもない失態を犯した事で身体の震えが止まらない。既に言い訳のできる状況ではないし、間違いなく団長フィン・デイルムナから叱責を貰う筈だ。

他派閥とは言え彼は暴力的な行為を嫌う。特に私情が絡んだものは。

（ああ〜！　なんで私、あんなことを……）

蹲った後、床に頭を打ち付けて悶える猫キヤットピリアル 人に休憩レスタしていた「剣姫」が心配になって声をかけた。

彼女アイズは先の戦闘で顔や身体に結構派手な切り傷を作ってしまった、その治療を受けていた。

本人は平然としているが他人から見れば顔面を蒼白させるほどの大きな怪我にしか見えない。

運良くモンスターの破爪が鋭すぎたので痛みの伝達が遅く、軽症だと思い込んでいた。だが、鏡を見た途端に「剣姫」といえど大きく呻いた。

「私に気に掛ける必要はないわ。しばらく自己嫌悪に陥っているから」
「……そう。みんな疲れているよね。私、頑張るから」

このところモンスターとまともに戦えなかったせいで、今回の戦闘は頗る満足すまんじふしていた。

未知の脅威で明らかに敵だから。

仲間の犠牲には少なからず心を痛めるものの、それで「剣姫」が止まる筈が無い。

防御が役に立たない事が分かったので戦闘衣バトルクロスを脱ぎ、より身軽にすることにした。

見た目的にはアマゾネスの衣装に似ている。完全な裸は流石のアイズも抵抗を覚えた。

彼女は紐が結べない。なので団員にしつかりと解けないように縛ってもらった。戦闘以外では意外と不器用な面がある。

「……凄く破廉恥な恰好に見えるんですけど……」

「……少しでも身軽にならないと」

それと敵を追うのに無駄に体力を消耗してしまう。かといって黙って待ってても自分の所には来ない。

ジャガーノートは特定の人物——例えば元凶メーテリアと思われる者——を狙っているわけではなく、動きの遅いものを優先にしているように感じられた。

それを囷に使うとしても「ロキ・ファミリア」の団員は多く、固めていると宿場街リヴィラが狙われる。——そちらはヒリユテ姉妹が担当しているが防衛は芳しくない。

移動砲台。無敵砲台と巷ちまたで噂される「千の妖精」サウザンド・エルフも魔法を反射する相手では成すすべが無い。はつきり言つて役立たずだ。

(……このモンスター、嫌いです)

威力を弱めて試したところ確かに反射してきた。

ジャガーノートの身体が紫紺の輝きに包まれる事で起きる現象のようだ。魔剣の攻撃も放射だと跳ね返される。

放射されないのはアイズ達の付与魔法エンチャントのみ。

それらを俯瞰していた小人族バルウムのフィンは団員達の疲労度に不安を覚えていた。

間断なく出現すると言っても所詮は三体ずつだ。落ち着いて対処すれば問題ない。
——その筈だった。

一〇〇体近いモンスターとの連続戦闘により思いのほか団員達の動きが悪い。アイズですら手元が狂うほどに。

(……まず出現場所が一定しない。というより冒険者の位置からかなり離れている。待つていれば向こうからくるが……、同じ相手を狙っているわけではない)

当初は魔法を行使した者を狙ってくると読んだのだが、メーテリアには何故か一体たりとも向かわない。

向かえないのか、向かうと予想しているから避けているだけなのか。

それと三体という数を維持している所はいかにも怪しい。

(討伐推奨レベルは4といったところか。ある意味、三体の階層主と連続で戦闘しているようなものだ。しかも相手はいつ尽きるか分からないときている)

確実に遠征は中止だ。損害が意外と大きくなってしまう。

無視したいところだが冒険者を全滅させない限りジャガーノートが現れ続けるのであれば——戦い続ける以外に方法が無い。

だが、無限に現れるものだろうか、という疑問もある。

この未知のモンスターは一八階層の固有種ではないし、何らかの条件によって現れる類だ。

五〇階層以降まで攻略した経験のある「ロキ・ファミリア」にとって初めて経験する危機である。

（討伐できていると言っても一撃で倒されるような雑魚じゃない。ベートの速度をもつてしても最短で三分。今は疲れの為に一〇分ほどかかっている。アイズも五分以上……。それをあつちに行ったりこつちに行ったりを繰り返していけばそれだけ疲れも溜まる。レベル4の団員達だと三〇分以上もかかる相手……）

既に戦闘開始から五時間以上はかかっているのか。それともっとかと終わらない戦いに嫌気がさしてきた。

魔法部隊に犠牲は無いが全滅しているのと同義な有様だ。

不本意だが彼らを無理に戦闘に加えるより大人しく補佐に回す方が有用だ。

13 妖精女王の撃墜

突如、宿場街リウヰラに現れた『破壊者』ジヤガノントの討伐数が一〇〇体を超えた。それでも敵は倒される度に壁から生まれる。

気絶していた白髪の竜女ウイツルメーテリア・ストラデイが目を覚まし、唐突にアナキティ・オータムに殴られたベル・クラネルも意識を回復した。

死傷者も僅かに出てしまい、現場に居る冒険者達の精神状態の悪化が懸念される。

汗や血にまみれたものを手早く洗うのは魔法部隊の者達だ。

第一級冒険者の負担が甚大だが逃げる事も出来ない。このまま全滅するまで戦い続けなければならなかった場合、フィンはなりふり構わず敗走を選択しようとは心に決めた。

不本意だが打開策が見い出せない。

（上層のキラアアントの比じゃない。あそこも無限に近いくらい出て来るけれど放置しても問題が無いからこそ移動できる。だが、深層域よりも執拗なモンスターの手は戦いたくないな）

下位の冒険者にとって貴重なエクセリア（経験値）なのだが、敵の攻撃が死と隣り合わせなので

突っ込めと命令できない。

相手が死んだかどうかは次の出現まで分からない、というのも問題だ。

徹底的に潰しても灰にならない所から魔石を持たないモンスターと結論付ける。

「あらあら。凄いことになったわね」

死屍累々としている戦場にあつて場違いなほど朗らかな声を出すのは白髪の竜女ワイイーガルで

あるメーテリアだ。

精神力の殆どを使い果たした彼女は軽い頭痛を覚えつつ戦況を分析する。

今も縦横無尽に飛び回っているモンスターを確認し、打倒する冒険者達を眺めた。

現場の状況を手早く把握した後、ベルの姿を探す。

「お兄ちゃん、どこ〜?」

そう声をかけると顔に包帯を巻いた白髪の少年が慌てて駆け寄ってきた。

彼女が既に目覚めているとは思わなかったのだ。

ベルが側にやってくるメーテリアは花が咲いたように微笑んだ。

「起きてて大丈夫ですか?」

「魔法は使えそうにないけど、大丈夫よ。……あのモンスター達はどうなったのかしら

? 人蜘蛛アラックネとか……」

「えっと、無事に正気を取り戻したようです」

ベルが戦闘に参加している赤い髪の人蜘蛛アラクネを指さす。

現在、アリーゼ・ローヴェルは身体を燃え上がらせてジャガーノートの一体と切り結んでいた。

大きな怪我也無く数分で件のモンスターくだんの手足と尻尾を斬り飛ばし、残りの胴体を仲間に処理させていた。

無理に打倒しきらず、役割分担する事で疲労度を調節しているようだ。

『アーン』

状況を踏まえた上でメーテリアは『スキルエ』を使用した。

自分を中心とした音の反響。当然、それらはこの階層に居るあらゆる存在に届く。飛び回るジャガーノートにも。

空間内に飛散した彼女の声は木霊こだまとなつて静かに霧散していく。

(……なるほど、なるほど。……それよりスキルを使つても身体に痛みが無いっていいわね。歌ったら怒られそう)

確認が取れた後、彼女は現場に指揮を飛ばしているフィン・ディムナの下に向かった。彼とのちゃんとした面識は無いが見たことはある。

走り回る冒険者を避けつつ散歩のように歩く彼女の後姿はベルから見てもとても危ういものがあつた。

「ロキ・ファミア」は既に異端児ゼノスに対して敵対行為を見せる事が無い。——多少警戒される程度だ。

「貴方がフィン・ディムナね」

微笑みながらフィンにそう声をかける。テイオネが現場に居たら修羅場と化すが、彼女は少し離れた現場でモンスターと相對していた。

名前を呼ばれたフィンは苦笑気味に白髪の竜女ヴィーヴルを見上げる。

小人族バルムの彼から見てメーテリアの背丈はリヴェリア並みだった。

「僕に何か用かな？」

「散っている冒険者を集めた方がいいわ」

「ファミア」の団長に対して意見を述べる。それは下位の冒険者から見れば喧嘩を売っているのと同義だ。

そんなことを知ってか知らずか、メーテリアは微笑みながら言った。

「……確かメーテリアと言ったか……。情報が少ない冒険者だったと思うけれど……。追い返すのは得策ではない？ ……このまま戦いを続けるのも不毛だ」

「どこに集めればいいのか？」

「このテントの周りでいいと思う。街の方に居る人達も可能であれば連れてきてもらいたい。あの人達、私の声でも言う事聞かなそうだから」

宿場街リヴイラについてはフィンも頭を悩ませていた。今はまだ実害が無いだけでいずれ大きな被害が発生する予想はしていた。

唐突な意見だが、それをすんなりと受け入れることは難しい。まず根拠が無い。信憑性も無い。——そして、それらの詳細を聞いている暇が無い。

（主導権を握られるのは癪だけど……。打開策が無いのは僕も一緒か……）

近くに居る団員を呼び止め、メーテリアの言葉を伝える。

人を集めるだけでいいのか尋ねると彼女は黙って頷いた。

軽く息をついてから戦闘に参加する第一級冒険を除く者達の招集をかける。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

程なく方々に散っていた冒険者や宿場街リヴイラに滞在していた者達も幾分か集まってきた。

ケガ人や疲労によって倒れそうなものを優先的に休ませ、可能な限り食事を摂らせらる。

異端児ゼノスの姿については黙認してもらおうしかない。この戦闘に限り協力体制を持ってもらう、と強めの口調で言い放つ。

（……【ガネーシャ・ファミリア】に引き渡すって名目があったっけ。僕も結構疲れて来たのかな）

「余計な犠牲を出すわけにはいかない。ボールス、そっちの犠牲はどれだけ出た？」

「三人くらいか」

眼帯を付けた宿場街リヴィラの取りまとめ役の男ボールス・エルダーは武器を持ったモンスター異端に威嚇されながら素直に答えた。

混乱を避けるために無駄口を禁止した為だ。

乱暴な手法を取りたくはないが緊急事態の為に止むを得ず——

来なかつた者の安全は保障しないと告げた後でメーテリアに顔を向ける。要望に応えた後をどうするのか、と無言で促した。

「モンスターは三体ずつ現れている。でも、それは見せかけだけ。実際は地面や壁に数百体も控えが存在しているようよ」

(……新規に生み出しているわけじゃない? ……ああ、なるほど。時間稼ぎか。でも、それだといつ本隊が来るんだ?)

何となく予想していた事だが一〇〇体の討伐でも本気を見せなかつた。であればいつなのか、が脳裏に引つかかっていた。

フィン達が相手にするのは他派閥の冒険者でも神でもなくダンジョンのモンスターだ。

どんなきつかけを生めばいいのか、フィンをもつてしても考え着かなかつた。

「手っ取り早い方法は私を一人残して皆で逃げちゃう」

(……うん。極論の一つとしてはありだ)

フィンと思わず苦笑した。

原因である彼女を生贄に捧げれば万事解決する。理屈としても正しい。

問題は残ったモンスター処理だ。

「もう一つはこの階層を丸々吹き飛ばす攻撃を敢行する。そうすれば一網打尽よ」

「こんなことが本当に可能なら苦労は無いね。……それで、誰がやるんだい？」

「……お兄ちゃんはそのような攻撃できない？」

甘えたような声色でメーテリアはベルに尋ねた。当然彼はすぐさま両手を激しく振りながら出来ませんと言った。

彼に出来るのは直線的な攻撃のみ。範囲攻撃は全く試したことが無い。——おそらく出来ない。

即効魔法である『ファイアボルト』と最近身に着けた『チャージ畜力』による『アルゴノウツト英雄願望』の効果をもつても階層の全ては対応できない。

「なら、アルフィアを連れて来るしかあるまい。あやつ必殺の魔法なら可能だろう」

首から下を包帯で包んだドワーフのガレス・ランドロックハイエルフが言い、王族のリヴェリア・リコス・アールヴも頷いた。

当の本人アルフィアは時間的にも一〇層くらいまで登っているかもしれない。リリルカ・アーデ

を伴っているとはいえ第一級揃いである彼らの踏破速度は尋常ではなく早い。

今から追いかけても地上で合流する事になる可能性が高い。

「一か所に集中させるなら第一級冒険者を総動員すれば可能だと思う。それで全滅させられるのかは分からないけれど」

もし、魔法が使えればリヴェリアの魔法でも充分だ。

アルフィア・ストラデイの必殺も魔法なのでガレスの意見は見当違いだ。

「何を弱気な事を。私だって戦えるんですから。【剣姫】ちゃんと一緒なら無理じゃないわ。フフーン」

胸を張って言い切るのは赤い髪の人蜘蛛。アラクネ

一休みの為にテント内に顔を出していた。

混迷極まる現場において決して諦めを見せないのはかつて存在していた【アストレア・ファミア】の再来と言われても過言ではない。

フィンもアリーゼ達の実力を知っているので、任せてもいいとは思う。だが、作戦の成功率を少しでも上げたい彼はまだ首を縦に振らない。

「可能性の話しばかりで疲れて来たよ。はつきり聞こう。……あのモンスターをどれだけ倒せばいいと君は予想している?」

「……んー、五〇〇体くらいかな。小出しにしているから大変なんであって、いっぺんに

出て貰えばあのモンスターも自由が利かなくなるはずよ」

(……五倍か。……五倍程度か。面白いな、本当に……)

フィンが苦笑し、今まで大人しくしていたティオネ・ヒリュテは怒りの形相で地面を踏みしめる。

彼女はメーテリアに対して何だこの女は、という印象しか受けていない。

へらへらしやがって、とかそんな感情ばかりだった。それもこれも戦闘による疲労で精神的に苛立っていた為だ。

「ああ、そうか。……ああ、まだ試していなかった方法があったな」

(……ん?)

顔を押しさえてフィンは苦笑から忌々し気な気持ちを隠そうともせずにはくう。

団員の安否ばかり気にして考え着かなかった。——考え着かなかった事に疑問を覚えた。もちろんモンスターを打倒する事も大事なことだが——

滅多に感情を露あわわにしないフィン・デイルムナが怒りで地面を踏みつけた。それだけでひび割れ、震動が周りの冒険者に伝播する。

多くの団員は畏怖するがメーテリアは珍しいものを見るような顔で微笑み続けた。

今の彼の行動をモンスターに対するもの怒りと勘違いしたものが大半で長い付き合いのあるガレスとリヴェリアも気付かなかった。——というより気付けなかった。

「リヴェリア。『レア・ラーヴァテイン』を指示する」
「何？」

「魔法が反射された場合、ベートは問題ないとして残り二つ以上の相殺が出来る者は居るか？」

リヴェリアの疑問を無視してフィンは言葉が続けた。するとベルが手を上げた。

ヘスティア・ナイフであれば一度だけ魔法を『収束』することが出来る。無理でも切り払って見せると。

残り一人はアリーゼだ。炎属性なら無効化は出来なくともかなり抵抗出来ると言った。

ここまで聞けばガレスとリヴェリアもフィンのやりたいことが予想できる。

ただ、単純な火力で言えばリヴェリア一人だけの魔法では全く足りない。ここでレフィーヤ・ウィリデイスを含めた魔法職にも総動員してもらおう旨を話した。——リユー・リオンも参加の意志を示す。

（当然宿場街は壊滅するな。そうしなければ打開出来ない程僕達は追い詰められてしまった）

ボールス達に軽く作戦を伝えた後、荷物を持ってくるように伝えた。どの道、実行するまでに時間がかかる。余裕をもって安全を心掛ける。

持ち込んだ物資の中から精神力を回復させるものを多めに各魔導士に配る。

懸念があるとすれば地面への対応だ。

「ただ砕くだけなら儂がやろう」

そう発言したのはドワーフの「重傑」エルガルドガレス・ランドロックだ。だが地面への対応は無視する事にしたので彼の言い分は即座に却下した。

理由として元々地面から出てくる分は少ないと予想していたし、逃げ場が無くなるからだ。メーテリアもこの懸念に同意を示した。

他に零れたモンスター撃ち漏らしのの対処はアリーゼ達のような異端児ゼノスや他の冒険者でも事足りる。

この終わりのない戦いに終止符を打てるかはやってみなければ分からない。正まさに未知との戦いだ。

「最後に……。犬死だけはするな。下級冒険者の皆は速やかに地上に戻ってもいい。命まで賭けるとは言わない。それでも僕達についてきてくれる者は歓迎する」

そうフィンフインは冒険者達に言った。

最後にうま味のない戦いの為に大赤字である事を付け加えて。

各自散開と伝え、戦いに臨む。

敵の総数は未知だが五〇〇体以上。だが、その情報が真実である保障は何処にもな

劣る、と当人は思い込んでいる。

レベル6相当と言われているメーテリアの察知能力は実のところズバ抜けている筈だ。だが、当の本人が元来寝たきり生活者だったために戦闘経験が乏しく——本人の感覚では——優劣について自信を持っていなかった。

確かに『木霊反響』は何となくわかる程度——本人の感覚では——の能力だ。本来の使い道は声を伝えるだけ。相手に伝わったかどうかは使用者の感覚頼り。

小さな声で先ほどから悪口や罵倒を放っていたが、それは彼女が試行錯誤していたものだった。——実はその影響が他の冒険者達にも無いとは言えないのだが。

「さっきの魔法の効果は生物が内に秘める黒い感情を浄化するようなもの。人間の言葉だと『宿痾』のようなものを取り除くのかな? ……病気が治る訳じゃあないんだけど……」

戦闘続きの現場を見回しながら秘密の暴露おこなを行う。

冒険者の情報はそれだけで金になる。他派閥においそれと漏らさないのが暗黙の規則だ。

リヴェリアは小さな声でそれとなく指摘してみた。するとメーテリアは苦笑しながら迷惑料として受け取って、と言った。

「ダンジョンは様々な悪意を取り込み、それをモンスターという形として生み出す。だ

から……、私の魔法を食らったダンジョンはとても怒った筈よ。使い方によつてはモンスターが現れなくなるんだから。……その筈なんだけど」

とはいえ、生前この魔法を使ったことは無い。発現してから死ぬまでの期間が短すぎただけ。

あの子の出産がこの魔法の元になったのは間違いない。

この身に宿る筈だった宿痾の宿命をダンジョンが栄養として吸い取る。そう神キアンは予想していた。それに一縷の望みをかけてメーテリアは挑み、見事希望を勝ち取った。

それと安全階層^{セーフティポイント}で先の魔法は全くの無意味ではないか、と思われるがダンジョンにとつてはどの階層だろうと関係ない。脅威と思わせたから今の惨状に繋がっている。——なら、その原因となったメーテリアの立ち位置とは。

「他のモンスターの様子から一時的に攻撃性を失わせるだけで倒すには至らない。戦闘面ではあまり役に立つとは思えないわ」

それに——精神力^{マインド}が一気に枯渇する。一日に一度使えばいいところだ。ただし、彼女の予想は全て生前のもので今の自分の状態としては考えられていない。おそらく把握しきれていない。

「出ているモンスターを無視して派手に辺りを破壊し尽くせばいいんじゃないかしら？

……」

「……実際、それをやろうとしているのだが……。そうだな。もはや戦略など考えるだけ徒労か」

敵は冒険者を狙う凶暴なモンスターだ。守るべき対象ではなく殲滅しなければならぬ敵だ。

出現しているジャガーノートはほぼ無差別に攻撃を仕掛けている。本来ならメーテリア一人に殺到していてもおかしくないのに。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

交代しながら冒険者達は団長の指示に従って移動する。

「ロキ・ファミリア」の犠牲は一〇人ほどとなった。その全てが下級冒険者だ。僅か一人と見るか、一〇人も未来ある冒険者の犠牲と見るか。

宿場街ではその倍以上の死傷者が出ているが情報の伝達が難しく、それぞれ混乱の極みに陥っていた。

僅か三体。第一級冒険者が相手をすれば比較的楽な戦闘になると思われがちだが、ジャガーノートは縦横無尽に駆けまわり、弱そうな相手を率先して狙う。たどり着く前に犠牲が出て不思議ではない。

迂闊にばらけているより固まっていた方が安全度が高まる。だが、戦闘の邪魔になる事も忘れてはいけない。

石やモンスターの死体などを礫のように使い、様々なものが冒険者に襲い掛かる事もある。それが一つや二つであれば問題は無い。

一〇〇近い回数の攻撃に第一級冒険者といえども防ぎきる事は難しい。

(……連携が取れてきている。被害も少なくできた。そろそろこちらから打って出る頃合いか)

一八階層にはポールス達宿場街リヴィラの住民以外にも探索目的で訪れる他派閥の冒険者がたくさん居る。それらをまとめて面倒見なければならぬのが現在の状況だ。

最初は非協力的だった彼らも無駄な犠牲を嫌い、止む無くフィンの言葉を聞くようになった。

逃走を手助けしたいが他の階層にもジャガーノートが現れない確証が無い。可能な限り退出を促しているが、そういう所に一匹二匹と攻め込んでくる。

階層から出れば安全だ、と言える者はこの場に居ない。

(最終的にはメーテリアを殺すしかない。……ベル・クラネルがそれを許すとは思えないけれど……。彼女はどうかだろうか?)

狙われていないけれど原因が今も生きている。なら、それを排除すれば無限の生産が

な体力を消耗する。

確実に倒せてはいる。段々と討伐時間が長くなっていることに気が付いていた。仲間と連携しているアリーゼ達も疲労の色が濃くなり始めていた。

(……野放しに出来ないモンスターが次産間インターバル隔無しで出て来やがる)

(ダンジョンが本気を出すとこれほど厄介とは……)

「……魔石が無いから出来る芸当、なのか？ 生まれてもいずれは消滅する。その間まがアタシらにとって脅威であればいい。……なるほど悪辣に似つかわしい戦術だ」

「人を相手にしない分、何の気兼ねも無いけれど……。これはこれで辛いわね。体力的な意味で」

大きく息をつく赤い髪の人蜘蛛アラクネ。

元はと言えばモンスターの自我が表に出してしまったのが原因だ。それがアリーゼの弱さが招いた失態とは言わない。誰も予想できなかった事態だ。

それでも原因を探るとすれば——モンスターとして生み出したダンジョンではないのか。

(……うん。私達は何も悪くない)

(こういうのを自作自演って言うんだよね)

(私達は賢いから騙されない)

アスタ・ノックス、ノイン・ユニック、リヤーナ・リーツが何かに納得し、頷いた。戦闘中だった狼頭人ルイ・ガルのネーゼ・ランケットと半人半蠍パピルサグのマリユー・レアージュは仲間の様子を見て首を傾げた。

前回は一瞬で蹴散らされた彼女達も恨みを晴らすかのような快進撃を続けていた。相手の情報さえあれば恐れるに能あたわず。伊達に四〇階層以上も攻略してきたわけではない。

「折角モンスターなのに特有の能力が使えないのは勿体ないわよね」

我に返った途端に糸が出せなくなったアリーゼは戦闘の合間を窺いつつ挑戦していた。

毒液に関しては吐き気に襲われそうなのでやりたくないな、と。

「先輩ゼノスに聞くしかないよ、こればかりは」

「この戦いが終わったらモンスターとして生きていくのか……」

死ぬために冒険者になったわけではないし、せつかく蘇ったのだから色々と人生を楽しみたい。それぞれ胸に思いを秘めて次の標的に向かう。

白髪はくはつの少年ベル・クラネルは下級冒険者の逃走を手助けしていた。彼らをこの階層に押し留めろ、とは言われていないので。

本当なら一か所に集めたかったが大勢居ても邪魔なだけとフィンが判断し、ラウル・

ノールドにベルの手助けを命令した。

「来たつすー！」

「はいー！」

下層より動きが遅いとはいえ素早さは自分と同等か少し上。動きが見えていれば何とかなる、とベルは判断し、突貫する。

狙う個所を絞れば一人でも相手に出来る。このジャガーノートは下層より脆い事も分かった。

(ナイフより切れ味が悪い武器でも斬撃を叩き込める。あまり接近戦を挑めないのは痛いな)

身体の大きさは下層と同等。そんな相手の懐ふしつろに不用意に飛び込んで捕まりでもしたら腕や脚を失ってしまうかもしれない。

今は行動を制限されるような怪我を負うわけにはいかない。

斧での攻撃を繰り返すが一度では切断に至らない。ベルの『力』でも五回以上はかかっている。

そもそもヘステイア・ナイフ以外に切れ味のいい武器が無く、他派閥である彼にラウルは良い武器を用意できなかった。——出来る事なら貸し与えたいが団長の許可を得るのを忘れてしまった。

(必殺を何度も使えないし、いざとなればナイフだけで戦うしかない)

いつもであれば強烈な一撃で事態を解決する。だが、今回は分散型の敵だ。まとめて一掃という手段が取れない。

例え一体倒しても次がすぐに生まれてくる。

当初、手足と尻尾を落としたままにする、という方法が考えられた。だが、誰かが見守り、新たに生まれるモンスターを同じように処理できる実力者がどれだけこの階層に滞在できるのか、という問題があった。

いずれ打ち止めになると信じて一〇〇体も討伐したのに敵は未だに生まれ続けた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

魔法職の準備が整う頃に変が生まれた。

今まで三体だけしか現れなかったジャガーノートが倍に増えた。これにはフィンも想定していたとはいえ頭の痛い問題が起きたなど苦笑を滲ませる。しかし、強さ的には今まで何ら変わらないし、討伐出来ないわけではない。

モンスターの見た目や攻撃方法も未だ従来のまま。——それはそれでとても恐ろしい事ではあるのだが。

(悪辣なダンジョンが僕達の行動に対応してきた。……だが、そうであるならばもっと苛烈に攻めてきても良さそうなものだが)

戦況を俯瞰しながらフィンは疑問を覚える。

冒険者を一掃したければもつと数を増やせばいいし、もつと強化された個体を輩出すればいい。それが出来ない理由があるとしても些か拍子抜けいささかの感が否めない。

これではまるで『この脅威を乗り越えさせるために調整している』と思われても仕方がない。

今までの経験から言ってダンジョンが冒険者の為に殊勝な対応をしてくるとは到底思えないし、考えられない。

攻撃しているモンスターも別に手加減しているわけではなく、動きに関して特に目立った変化はない。どう見ても冒険者を確殺する為に動いているようにしか見えない。

(……それと先ほどから身体に感じる振動……。思考誘導の気があるのは気付いているけれど……。これは無意識からか？ だとすれば何の目的が……。)

指示を飛ばしつつ元凶の様子を見れば特に怪しい動きをしているようには見えないし、他の冒険者に危害を加えているわけではない。

そう見えているだけでかなり深刻な事態が進んでいる気もするし、実際そうとしか思えない。だが、懸念も感じる。

例え本人の無意識の行動だとしても攻撃には違いない。

親指の警告をすり抜ける程度の弱いものだとしても。一度でも確信してしまうとそ

うそう簡単に頭から追い出す事も出来ない。

(役立たず。……おそらくそれが原因で戦闘に組み込まれなかったのか。そうしなければならぬ程だとすれば……、「ヘラ・ファミリア」の中でも無視できない存在と言えなくもない)

実際に「ヘラ・ファミリア」との戦闘経験を持つフィンはメーテリアについて殆ど知らない。アルフィアの妹であることは薄っすら情報として持っている程度だ。それに故人でもある。

こうして意識して相手を見据えれば何とも驚異的な存在であろうか、とフィンは軽く唸った。

メーテリアは広範囲に『不協和音』を広げている。

その性質は聴く者の判断力を僅かに鈍らせる程度のものだが、極限状態の戦闘において僅かな効果だとしても効果的に作用する事は無視できない脅威である。

性質たちが悪いのは耳を塞いだ程度では防げず、身体全体に振動として伝えてくる場所だ。

心の弱い者は甘言に引っかけやすい。

これはなにも特別な事ではない。継続として囁かれれば洗脳と同義になる事もある。

【静聴】という『二つ名』を持つメーテリアの言葉の内容は音による確認だけであり、

言語による誘導はしていない。それでも気が散ったり苛々したりするのは耳障りの悪い音が絶え間なく——強制的に——聞かされている為だと思われる。

(意識してしまえば何ともない、とは言えないが……。強い洗脳作用はない。であれば気絶させた方がいいのか迷う所だね)

それと戦闘民族たるアマゾネスの姉妹は攻撃力が上昇したかのように戦い続けている。全てがデメリットというわけでもないのが理解できた。

今は怒るに怒れない状態といったところだ。

戦闘には役立つが判断する時は疑心暗鬼になりやすい。

頭脳担当にとっては頭の痛い能力という事は理解できた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

メーテリアの性質を理解した上で戦闘に意識を向ければ大きな瓦解は確認できず、ジャガーノートの数が増えたからといって混乱することなく対処していた。これも戦闘経験がなせる業だ。

もはや同時討伐に拘らない。出てこなくなるまで殲滅し続けるだけだ。

フィンヒュームバニーは念のために兎ヒュームバニー人のラクタにメーテリアを黙らせるように命じた。もし、この指示に従わない場合は物理的に黙らせる所存だ。

団長の指示を受けたラクタがメーテリアの下に向かうと突然、走って逃げだした。そ

うとしか見えない行動だった。

「……はっ？」

これには意識を僅かに外していたフィンも驚いて思わず舌打ちしそうになった。構わず追うように指示を飛ばす。

こちらの懸念を気取られたのか、それとも近づかれたから単に逃げ出したのかは定かではないが優先すべきは彼女の『スキル』を止める事だ。現にメーテリアは逃げつつも悪口やら意味をなさない言葉を発し続けている。

一見するとそれは応援にも聞こえるから周りも不審に思われにくい。だが、フィンは騙されない。

逃走を始めたとはいえメーテリアは他の冒険者に攻撃を仕掛けているわけではない。冒険者の合間を縫って多少の邪魔をしてしまう以外は目立った物理的攻撃は行っていない。おこな

(ダンジョンの使徒と化したと仮定して、もしそうであれば『スキル』の停止は都合が悪いと判断されたのかな？ アリーゼの例もあるし、警戒は続けた方がいいか)

他の団員にもメーテリアの対処を与え、フィンは本命に意識を傾ける事にした。場合によればベル・クラネルにも動いてもらう所存だ。

リヴェリア達の準備もあと少しで整う。地面からモンスターが現われない限り、充分

対処できるところまで来た。

狙う個所の選定も終わっているし、万が一反射された場合の対処も想定済みだ。

「詠唱開始！」

団長の号令によりリヴェリアとレフィーヤ、他の魔法職達が範囲攻撃魔法の詠唱を開始した。

今回の目標は点ではなく面。モンスターでもない。

多少のしくじりは問題ない。あるとすればモンスターやダンジョンがどう対処しようとするか、だ。

ジャガーノートの動きに変化はない。だが、フィンの親指は強い警告を放ってきた。

（敵は防衛態勢に入らない。魔法職も狙っていない。では、どう出るダンジョン）

一応、メーテリアの動きも気に掛けたが詠唱地点からかなり離れていたので石や魔法を放ったところで届きはしない。

懸念だったアリーゼも戦闘に集中しているし、仲間達がすっかり見張っている。

額から脂汗が一滴垂れるころには超長文詠唱も終わりに差し掛かっていた。

そして、いぎ魔法を放つ段階に入った時、攻撃目標たる壁面に亀裂が大きく走った。

（壁の中で集結し、全ての魔法に対処する事も想定している。……だから、今更やめることは出来ない）

になつてしまう。

一定条件を満たさない限りにおいてモンスターは壁内で眠っているか、生産されていない筈だ。

では、今回の場合は事前に生産自体は終了して、覚醒条件だけ満たされていない。それゆえに壁内に居たジャガーノート達は未覚醒のまま地面に叩きつけられる事になつてしまった。そう考えれば納得である。ただし、果たしてそれが本当に正しいかは検証しなければならぬ。

(覚醒しようがしまいが今は壁面の破壊が優先だ)

フインはすばやく気持ちを切り替え、次弾の詠唱を命令する。今はとにかく広範囲に破壊活動をするのが第一の目標であり目的だ。

次の魔法による攻撃で更に大量の未覚醒体が零れ落ちてきた。それはまるで以前、遠征時に現れた芋虫型のモンスターを想起させる。

何処から湧いてきたのか、その時も結局は分からずじまいだったが。

ダンジョンの意志か、それとも謎の怪人^{クリーチャー}の意志か。

「未覚醒のモンスターに魔法の着弾を確認っ！」

「反射確認できません」

「そうか。油断せず対処せよ」

戦闘に加わっている冒険者達も疲労が溜まっていくし、休憩を与えたいところだ。それと逃げ回っていたメーターは既に捕えており猿轡を噛ませて縛り上げた。

自称ではあるがレベル6のメーターはラクタ一人でもどうにかなるほどだったのが意外といえた。——それとも無理に抵抗しなかったか、だ。

「勇者様。怒涛の勢いで討伐したけどよ。アタシらの生贄が足りなくて攻撃が止まない条件ってことはないよな？」

赤帽子レッドキャップのライラが不安を滲ませつつフィンに意見を求めた。

答えようがない問なのは重々承知している。それでも聞かずにはいられないからこそ言葉だと理解する。

確かに冒険者の生贄を求めている気がするが、それが果たしてどの程度なのかは答えようがない。もしくは事態を引き起こしたメーターを捧げれば解決するのかもしれない。

今までの経験からそんなことはありなと思うっているとまだ破壊していない壁に大きな亀裂が走った。——天井ではない事は見て確認した。

(そういえば……。動いているモンスターは殆ど討伐したけれど、追加が現われていない?)

単純作業の弊害か、意識が少し散漫になっていた。その事に気付いたものの失態と見

るべきか迷う所。

とりあえず、ガレスやベート達のところまで休憩を入れる事を指示しつつ壁の様子を窺う。

亀裂は地面から昇るように走り、天井との中間地点のところまで大きく広がっていた。

下の階層からモンスターが湧き出て居ない事を祈りつつ親指の警告に意識を向ける。今のところ下層については特に問題が無さそうだが実際に見てみない事には安心できない。

「いや、倒した倒した。ここまで来ると『ランクアップ』出来ないのが悔やまれるわね」
そう赤い髪の人蜘蛛アラクネであるアリーゼ・ローヴェルは汗を拭いと言った。

下位の冒険者を守りつつ、異端児ゼノスの面倒も見なければならぬ状況に置いてジャガーノート以外が大人しい事は幸いであった。

ベル・クラネルも多くの擦過傷を作っていたが五体満足だった。

エルフのリュー・リオンと半人半蠍バビルサグのマリユー・レアージュは戦闘が止んだ頃合いを見計らい、ケガ人の治療に当たっていた。

「反射能力がなければ魔法で一掃して終わりなのに……」

(楽な相手ばかりだったらダンジョン攻略で苦労はしないよ)

持つて制裁しなければならぬ。ダンジョンの敵は排除されなければならぬ。

その敵とは具体的に言えばメーテリアではあるのだが、冒険者達には伺い知ることのできない情報だ。

そもそも彼女の存在はダンジョンにとつての異常事態であり、アルフィアとは比べ物にならない敵対者でもあつた。

残存戦力を敵性体であるメーテリア一人に絞り、一本の杭突パイルが生成されようとしていた。——いや、無数の破爪をより合わせているので場合によれば途中で拡散する散弾と化すかもしれない。

壁の亀裂が大きくなる事に比例して凶悪なる一撃が生まれようとしている。そしてそれは間もなく放たれようとしていた。

冒険者に出来る事は一目散に逃げ惑う事であり、決して防御したり迎撃しようと思つてはいけないものだ。

ジャガーノートの破爪はレベル6の『耐久』を容易に貫通する。それゆえに現行の装備ジャガーノートパイルで破壊者の杭突に対抗するすべは不壊属性デュランダを付与したオリハルコンをもつてしても防ぎ切るのは難しい。少なくとも無傷で済む事は無い筈だ。

残り全てのジャガーノートを資源として消費し、一撃必殺の杭突パイルが完成すると同時に亀裂の入った壁が砕け散つた。

(……何かが来る！)

何らかの攻撃が来ると分かってもフィン達に迎撃手段は無く、身を隠すよりも逃走を選ぶ以外に選択肢は無い。

そう、目標であるメーテリアの射線に入りさえしなければ他の冒険者が命を失う事態にはならない。だが、そうとは知らない冒険者が多数入り乱れており、運悪く射線上には魔法担当の冒険者が固まっていた。

慌てふためく下位冒険者を叱咤激励するのは第一級冒険者達だ。

破壊された壁から漆黒の殺戮兵器の姿が現われ、それを見た冒険者はすぐに退避や迎撃態勢を指示する。フィンは退避を。ガレスとリヴェリアは射線に入らないように。

アリーゼ達とベルと元々射線から外れていたので黙って見つめてしまった。元より迎撃は——距離的にも——無理そうだと。

ドバンッ！

大きな発射音と共に壁が吹き飛び、巨大な杭突パイルが打ち出される。

音がした瞬間には既に冒険者達に向かって迫っていた。気休め程度に掲げていた無数の盾は一瞬で粉碎された。

そんな中であつて、縛られていた筈のメーテリアは杭突パイルの到達目標を既に理解していたのか、驚異的な身体能力を発揮しながら退避していた。

撃つた後ならばいかようにも闘争が可能になる。相手は真つ直ぐにしか飛べない兵器だ。途中で軌道変更するような事態が起こらない限り。

『力』がレベル4に劣るとしてもレベル6の『敏捷』は伊達ではない。それに今の彼女は竜女としての身体能力も備わっている。

ベル・クラネルが居る階層において素直にやられるわけにはいかない、という無意識の衝動で驚異的な生存本能を發揮した。

この階層に現れるジャガーノートは精々レベル4程度の脅威度だ。全てが寄り集まったとしてもレベル5の中ほど。メーテリアにとって充分に対処できる範囲であった。

目標を失ったとしても攻撃は既に成された。射線の変更も自力では不可能。

そんな状態において不運なのは杭突パイルの射線上に居た冒険者達だ。

既に意識して逃げる時間は無く、無情なる殺戮兵器は冒険者に襲い掛かる。

(……レフイーヤが丁度いい位置に……)

到達する射線に偶々逃げ遅れた冒険者が居た。それがエルフのレフイーヤである事を感覚的に察知したリヴェリアは無意識的に彼女を突き飛ばす。

視界には黒くて長い凶悪な兵器の姿があり、武器で迎撃する余裕は無い。更に運が悪い事に突き飛ばし方が不味かった。

様なものは無かった。

「早く回復薬を！」
ポーション

「治癒魔法もお願ひします！」

男性眷族を弾き飛ばしつっつりヴェリアを囲むのはエルフが大半で外周部は女性冒険者が固まるように待機した。

ジャガーノートの事よりもリヴェリアが大事という有様を呈し、団長であるフィンもおいそれと近づけない。

現場に一番近くに居るのは長年リヴェリアに仕えてきたアリシア・フォレストライト。その彼女から見ても酷い容態に見えた。

「エルフ以外は見るな！」

それは血を吐かんばかりの強い命令だった。

アリシアは変わり果てたリヴェリアを目撃し、涙を流しつつも出来る事を懸命に模索した。それでもどうしたらいいのか、考えがまとまらない。動かしていいのかさえ判断に迷う。

結構な出血だが頭部全体が砕け散ったわけではないが、いくつか肉片が散らばっているのが痛々しさを物語っている。

頬は完全に抉り取られ、美しく整った形をしていた長い耳は千切れていた。

筋肉が断裂している為か、だらしなく口が開いており、舌が零れ出ていた。それと眼球が片方飛び出ているところから衝撃の凄まじさが窺える。

（一刻も早く治癒……。地上に連れて行って治療院に運び込まなければ……）

万能薬を要望しつつまだ懸念がある気がした。それは先ほど打ち込まれた杭突だ。

巨大な質量兵器たるそれは未だ塵に還っていない。アリシアは怒鳴るようにアイズに杭突をどうにかするように乱暴な命令を下した。

母親のように面倒を見てくれたリヴェリアが大怪我したことはアイズも目撃していたので即座に頷き、巨大な杭突に突貫していった。

（耳は残念ですが頭部は……。脳は零れていませんね。……おいたわしやリヴェリア様……）

リヴェリアに庇われたレフィーヤも号泣しつつ何度も謝罪の言葉を呟いていた。それに関して一部のエルフは睨んだが王族の行動の結果を貶す事になると気づき、無理矢理自分達を納得させた。

何人かのエルフの手により、顎を固定する為の包帯を巻いたり、飛び出た眼球を戻してみたり千切れた耳や念のために飛び散った肉片をかき集める。

心臓は動いていたので即死を免れた事が分かり、それぞれ安心していく。

言葉を掛けたいところだが集まったエルフ達は号泣したまま満足に言葉が出せない

状態になっていた。その中でもアリシアは気丈に振る舞い、泣きながらも指示だけは出し続けた。



今以上に怪我が広がらないように包帯で固定したりヴェリアを搬送しなければならぬのだが、現状近くに居る多くのエルフは役立たずになっていた。それゆえにアリシアは苦渋の決断を下す事にした。

全てはリヴェリアの為だ。

『敏捷』の高さで言えばベート・ローガに頼むところだが彼は乱暴なところがあり、扱っても粗雑で信用が出来ない。ゆえに誠に遺憾ながらベル・クラネルに地上まで送り届けようとした。

この決定に大多数のエルフは不満を表したが、こと速さに関してベルの信用度は高い。それと女性の扱いに関してもあまり悪い噂が無い。人間ではあるが性格も申し分が無い。今回限り、という条件でなら文句は無いと言い切れるほど。

「必要な治療費は全て【ロキ・ファミリア】に請求して下さい。リヴェリア様を治療院まで、可能であれば安全に運んで下さい。それと【ディアンケヒト・ファミリア】の助方も得て下さい」

小難しい説明を抜きにベルに言った。追隨する護衛用の眷族も整えさせた。

ベルは元々「フレイヤ・ファミア」の要望でダンジョンに潜っていた。しかし、目的は既に果たされ、メーテリアの処遇以外は問題が無いように思われた。

それに関してアリシアは自分の責任をもって対処する事を約束した。どの道、このまま遠征を続ける事は難しいし、フィンもリヴェリア抜きでダンジョン攻略を良しとはしない筈だ。

一刻も早く、という指定の下、ベルの意見を聞いている余裕もなくリヴェリアを背負わせ、早く行けと強い語気で命令した。

「は、はい！」

彼の手荷物なども無視しての強行軍を敷きつつ護衛の眷族も走り出した。

残ったエルフ達に出来る事は無事を祈る事だけ。ベルではなくリヴェリアの。ベルが地上に向けて走り出した後、杭突パイルを処分していたアイズが戻ってきた。

(……ベルは……リヴェリアを運んでいったんだね)

新たな敵性体の出現も無く、静かな時間が流れていた。

【ロキ・ファミリア】が御通夜状態に陥っている間、アリーゼ達は戦闘の疲れから休憩に入っていた。暴走の兆候も心配も薄れた、というか感じられない程になっていたのだ。

幹部の一人であるリヴェリアの喪失は大きいが見れば勝利したと言える。

ライラの言葉にリユーは頷いた。

元々ベルに弁当を届ける為だけにダンジョンに潜った。用件が済んだ今は酒場に戻って準備しなければならない。

かつての仲間達と邂逅したからといって「アストレア・ファミリア」が復活したわけではないし、追放した神アストレアの意見を蔑ろにするわけにはいかない。

「ギルドも地上の人々も異端児を受け入れる準備が整っていません。しばらくは不自由な生活を強いられる事でしょう」

「……折角復活できたのに世知辛いのかな……」

リユーは改めてかつての仲間達を見据える。

見た目がかなり変わってしまったが、それでも彼女達には生きてほしいという思いがある。

アルフィアの例からも胸の奥に魔石があり、それを失えば——モンスター達がそうだったように——塵と化するのだろう。

アリーの暴走から見ても安易に安心も出来ない。素直に喜べないのが辛い。

(ここではクラネルさんを責めることが出来ませんね)

天井の水晶の明るさから考えてもうじき夕方になる頃合いだった。

無理に帰還するより上層への出入り口付近で野営の準備に取り掛かる方が安全だと

「ロキ・ファミリア」は判断した。

このまま何も起こらなければいいのだが、ダンジョンの気紛れはフィンでも予想出来ない。

それから少し経って先行していた団員が上層から戻り、様々な情報が伝えられる。

数時間で一八階層に到達するからにはかなり無茶な行軍だっただろう。まずは団員を労^{ねが}って呼吸を整えさ、それから無理を承知で報告を聞く。

まず浅層付近にジャガーノートらしきモンスターの存在は確認できず、次に「ガネーシャ・ファミリア」の団員が下層に向かっている。

ベルに連れていかれたリヴェリアは無事に治療院に運ばれた。

「上は特段の異常は無かったんだね？」

「はい」

自分達には問題が無かったけれど、と報告する団員が恐る恐るといった体で言った。

五階層付近に居たアルフィアが暴走状態に陥っていた、と。

団員に実害は無かったけれど一緒に居たりリルカ・アーデがケガをした。その事にフィンは目に見えて慌てた。

他派閥だが同族^{バルツム}として気に掛けていたので。

(……アリーゼのようにモンスターの意識に引つ張られて襲い掛かったのか。時期的に

も合っている。……怪我はしたが命に別条がないのは「フレイヤ・ファミリア」が同行しているお陰だろう。

いかに【猛者】おうじやや【白妖の魔杖】ヒルトスレイヴが居ても荒ぶる【静寂】を沈めるのは簡単ではない筈だ。

話しを聞くにアルフィアは現在、ベルの団員を傷つけてしまった事を気にして落ち込んでいるらしく、しばらく現場で待機する事になったのだとか。

話しだけ聞くと笑い出しそうになる事態だが彼女もリリルカを大事にしている事が分かって、少しばかり安心した。

だが、それ以上報告に重要な事があった。

えっ？ あの【静寂】が？ なにそれ、超見たいっ！

元気を失くしていじけているであろうアルフィアの様子を。

フィン報告は童心に返ったような微笑みで夢想してしまった。

リリルカの事は気になるけれど、それ以上に【静寂】のアルフィアの様子が勝った。もちろん、興味本位で観に行けば殺される可能性が大いにあるが、命を懸ける価値が多分に——ありそうな予感がしたのは確かだ。

七年前であれば適当な理由をでっちあげても現場をガレスなどに押し付けて駆け出している所だ。——本当にそうするかは分からないけれど。

彼女は全身にたくさん擦過傷を作っており、他の団員に巻かれた包帯がたくさん巻かれていた。

多少の疲れが見えるが満身創痍には見えなかった。狼ウエアウルフ人のベート・ローガも健在。多少戦力が減った程度だ、とフィンウエアウルフは苦笑を滲ませる。

(……さて、次は何が起こるんだ。何が現われる?)

既存の知識は今のところ役に立っていない。未知との連続だ。

既知の存在であれば『迷宮の楽園』アンダーリゾントにおいて「ロキ・ファミア」が苦境に立たされる事態に落ちる事は非常に稀だ。それこそ前回の遠征時に現れた芋虫型のモンスターならば今は充分に対処できる。

もちろん、慢心があつてはいけなのだがあまりにも未知の頻度が早すぎる。後手の対応ばかりでは身が持たない。そう思うほどフィンは自分でも歳を取ったなど改めて苦笑する。

それから間もなく壁の崩壊が始まると予想し、身が得ているところに別の団員から下の階層への出入り口から何体かのモンスターが現われたと緊急の報告が入った。

「数は少ないですがオラリオに現れた武装したモンスターだと思われます」

戦闘を回避したのはアリーゼ達の存在があったからだ。戦っていいのか判断に迷ってしまったためと思われる。

既に『異端児』の存在は認知している。彼らが襲い掛かってくるのであれば戦闘を許可すると告げ、様子を見るように指示を出す。

既知の存在であればそれほど迷わず行動できる。そんな楽な事ばかりだったら、とつい愚痴が零れそうになる。

武装したモンスターも気になるが、今は壁の亀裂が優先される。果たしてどちらが自分達にとって脅威になるか、武器を持つ手に力が入る。

それからすぐに事態は急転する。

どりゃあああ！

そんな掛け声とともに壁面が大きく吹き飛んだ。そして、大きな笑い声と共に姿を現したのはジャガーノートよりも大きく黒い竜種のモンスターだった。

数は一体のようだが、フィンは呆れよりも恐れを感じた。いや、恐怖ではなく敬う方の畏れか。

言い知れない感情とも言えいいのか、身体が全く動かない。悪寒とも違う不可思議な気持ちに声も上手く出せない。

(……あれは……黒竜？ いや、喋ったからあれは違うはずだ)

他の団員達も現れた黒き竜のモンスターに言葉を失っているようだった。

命令が出せず、怖気づいていると言われても仕方がない状態に陥っていると武装した

モンスター達がやってきて叱咤激励してきた。

フィンの下には空を飛ぶ歌人鳥セイレーンがやってきた。

「しつかり『ロキ・ファミア』ノ皆さん。……こんな状態デスガ一体何があったのデスカ？ あれも気にナリマスガ……。迷宮マザーガ激しく怒ってイマシタ」

「……あ、ああ。……うん、少し待つててくれるかい？ 動揺がまだ治まらないんだ。歳だから動悸、息切れ、眩暈なんてこともあるかもね」

何とか呼吸を整える。件くだんの大型モンスターは未だ壁面の穴に待機しており、攻撃態勢には入っていない。

自身の年齢を茶化してみたものの事態が好転するわけもなく。だが、激しく動揺している事は紛れもない事実だ。

地上に飛び去った『黒竜』ほどの恐ろしさは無いとしても。

フィンをもつてしても言葉にするのが難しく、先のジャガーノートとは違う意味で脅威だった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

別の場所に居るアイズもまた黒き竜を目撃していた。こちらはいつでも攻め込める体勢を整えていたのだが――

何故か、脚が動かない。それは恐怖というより困惑だ。

敵である筈なのに怒りが湧かない。確かにモンスターは地上を睥睨こそすれ今のところ攻撃態勢には入っていない。というより――

(下に降りるのを怖がっている?)

存在自体は驚異を覚えさせるもののだが、目で見る限りどこか滑稽さがあつた。そして、その感覚をアイズは――現場にいる多くの団員達は身に覚えがあつた。

いや、その謎の威圧感の正体に――感覚的に――気が付いたと言つた方が正しいか。

あの黒い竜のモンスターから感じる畏れは――

『超越存在』
デウスデア

通常のモンスターも先ごろ発生した異常事態イレギュラーのモンスターとも違う。

数年前、ここで死闘を繰り広げたモンスターとも違う。

明確な殺意でも持っていれば今すぐにも斬りかかるのだが、残念ながら対象は存在こそしているが特段の行動に移していない。

通常のモンスターであれば誕生と共に冒険者に襲い掛かるものだ。それは昔から変わらない。

であれば――答えは絞られる。

あのモンスターは大型級だが『異端児』ゼノスと呼ばれる武装したモンスターに似ていると。

それに女の子の様な声が聞こえた。

「下界の童共わらわつ！ 出迎えご苦労である」

流暢な共通語コイネーが唐突に黒い竜のモンスターから発せられた。その竜種のモンスターは人間的に腕を組んで仁王立ちの状態になった。

多くの団員達が驚き困惑する中、誰も声を発する事が出来なかった。

それは休憩しているアリーゼ達とメーテリアも。

「どうした皆の衆。妾の身体がモンスターである事に恐れを抱いているのか？ それはあいすまんな。妾自身も戸惑っているものでな。……というか元に戻るかも分からなくて困っている」

静まる冒険者を無視して喋り続けるモンスター。

やはり通常のモンスターとは違う。それだけは声を聞いた冒険者達の共通の印象だった。

アイズやフィンがこのモンスターを観察すると胸部に大きな水晶の様な物体があり、その中に人型の生物が封入されているように見えた。

中に居る人物ではなくモンスターが喋っているのか疑問だが。

戸惑う冒険者を無視して勇氣ある一人——いや、一匹のモンスターが件の黒きモンスターくだんのところに向かった。

空を駆ける歌人鳥セイレンだ。

「アストレア・ファミリア」のセルティ・スロアも歌人鳥だが、こちらは他の冒険者同様に動揺している真つ最中だった。あと、彼女は飛べない。

「何者デス？ 危害ヲ加えるならば……」

「おお、おお。自分以外にも喋るモンスターが居るとは……。下界はなんと面白きものよ。……威厳ある喋り方は疲れるな……。まあ、なんとというか、何者と言われると答えにくい。なにせ、こつそりとダンジョンに潜ったから……」

「いいから、はつきりシナサイ！ あと、私ハレイです、ヨロシクっ！」

拙い共通語で怒鳴る歌人鳥セイレーンのレイ。彼女は少し前に地上で騒動を起こした武装したモンスターの一体だった。

有翼レのモンスターに怒鳴られた竜のモンスターは軽くたじろぎ、ボソボソと文句を呟きつつ自分の名前を言った。

声の大きさから聞こえたのは間近に居るレイだけだったようだ。

相手の名前を聞いたレイはそれが特別な意味を持つ者ではなく、個人を特定する程度の認識にしか取らなかつた。

他の冒険者に身体を向けて発表しようとした時、下層への出入り口から人型の黒つばい存在が姿を表した。

14 暴喰と夜の女神

ベル・クラネルと「ロキ・ファミリア」が『抹殺の使徒』ジャガーノートの大軍と死闘を繰り広げている時期より少し前――

地下深くで生まれた一体のモンスターが上層を目指して歩いてきた。

それは腹を空かせていた。酷く飢えるほどではないけれど食事の途中を邪魔されて苛立っていたのは確かだ。

何よりも『食』に拘り、食べる事も好きだが自分で調理する事も好きだった。

ダンジョンの中に木霊こだまする程、腹を鳴らした。

ふと、腹に手を当てた時にそれは気づく。

新たな身体には何も身に着けるものがなかった。

一言で言えば全裸。しかし、モンスターの身体のお陰か下半身の多くは体毛で覆われているので薄暗いダンジョン内であれば特に支障は無い。

手持ちに食べ物がある訳もなく、途中で見つけられたのは天より降り注ぐ水のみ。何も無いよりマシなものではあるが満足する程ではない。

食は大事だ。飢えていると人間性が失われ、判断力も倫理感すらも維持しにくくな

る。

「……全く。腹が減っている時に限ってモンスターの勢いが強い」

（こいつらは何の腹の足しにもならん。せめて魔石を喰らって身体強化に使うしかないとは……）

途中で身体が動かなくなる事態に陥ったが——気合を込めたら楽になった。

常日頃から浴び続けた様々な害悪などそれにとつてはそよ風のごとく。

それ——彼の中にあるのは上手い飯が食べたい、そのみだ。

何の因果か、三七階層まで落とされた彼は本能の赴くままに上を目指す。そうしないと後で何をされるか分かったものではないからだ。

（迷宮都市で面白い出会いがあつたと聞いたばかりだ。続きを聞かなければまた痼癩を起される。……健康体のあいつほど恐ろしい存在者はない）

やれやれと愚痴りながら現れるモンスターを倒し、難なく二七階層まで上がると丁度階層主が生まれるところだった。

他の冒険者であれば運が悪いと言っているところ。だが、彼は丁度良い肩慣らしだと鼻息を強めに吹く。

彼に相對するのは白い鱗を纏まとう双頭竜。二七階層の『迷宮の孤王』の『アンフィス・バエナ』だ。

首の長さだけで二〇M。^{メートル} 体長はその倍以上もある。

青い火炎を吐く、アンフィス・バエナを前にして彼はなお余裕の表情だった。

(……この身体の『耐久』の程度も知っておくべきか。……肌が黒いところから黒^{ブラックライノス} 犀だ
と思うんだが……。角の生え方が変わってるからな)

左右の側頭部から生えている角のせいで頭がいやに重い。

最初の違和感から自身がモンスターであると知った彼は世の中に絶望するでもなく、
次いで感じた空腹感で思考が埋め尽くされた。

難しい事を考えるより何か食えば大抵のことは何とかなる。腹が減っている時に
色々と考えてもろくな答えは出ないものだ。そう結論を出した。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

^{ボアズ} 猪人であるオツタルに勝るとも劣らない体格を持つ彼は軽く首を振り、襲い来るアン

フィス・バエナを前にして僅かばかり悩んだ。

自身を守るのは厚い胸板だけ。

武器は無し。

素手で相手をしなければならぬ。——即ち、^{すなわ}いつも通りの地獄だ。

(寝起きの準備運動にしては派手だな。……これで背中に「ステイタス」が無ければ戦い
損でしかないんだが……。……まあ)

仕方ないか、とため息とともに愚痴をこぼす。

超大型の階層主『モンスターレックス孤高の王』に素っ裸で挑む冒険者はそう多くない。ある意味ではアマゾネスが単騎で挑むようなものだ。

何度か自身に気合を入れ、駆け出す。

敵は重量を生かした突進と強烈な二種類の息吹。ブレス——それと隠し玉が無いと言われている。

手持ちに何も無い冒険者に出来る事は逃走か物理攻撃のみ。そして、彼には第三の攻撃方法がある。

(外が硬いモンスターといえど中身は柔らかい。ブルーナーバーム蒼炎じゃない方に潜り込めれば勝利の確率は上がるんだが……)

普段であれば——

この手に武器があれば楽だった。だが、楽であれば【エクセリア経験値】を多く得ることは出来ない。

今は【ファミリア】の枷が無いからどうでもいいのだが。

「……地上のモンスターならばいくらか食いでがあるんだが……」

自分とモンスター以外に聞かせる相手が居ないというのに彼は独り言を呟いた。

いや、モンスターに聞こえるように愚痴を言ったのだ。

これからお アンフィス・バエナ 前を倒す相手がどういふ存在かを知らしめる為に。

対格差では圧倒的にモンスターが上。討伐推奨レベルでも並みの冒険者に引けを取らない。

——だが、目の前に居る黒いモンスターは大型モンスターであるアンフィス・バエナを前にしても怖気づく事は無く、寧ろ威圧的に佇んでいた。

モンスターから見れば小さな身体にしか見えない筈なのに彼の身体から発せられる不可視の威圧はアンフィス・バエナをもつてしても警戒させるに足るものだった。

何度も冒険者に倒され、記憶を引き継いでいるわけではないのに昔から相手取つてきた強者と相まみえているような——

(……さつさと安全階層セーフティポイントに向かうか。それからでも検証は出来るだろう)

行動指針が決まった後、彼は雑念を捨てて駆け出す。

アンフィス・バエナの視界から消えるような勢いで黒 ブラックライノス 犀は駆け出した。

突進力の強いモンスターの一撃は巨大モンスターの胴体に尋常ならざる衝撃を与えた。

対応できない速度でもつて振るわれた拳による一撃にすぎないが数 Mほど巨体が動いた。いや、動かされた。

対格差の有利を無視するかのよう。

体力がかなり減るが長期戦と然程変わらない事を思うため息が漏れる。

鞭のように振るわれる長い首を拳ではじき返し、一気に片を付ける事にした。

ここで死ぬのも冒険者と戦って死ぬのも一緒だが飢えて死ぬのは我慢がならない。そう彼は強い意志で決意を固める。

なによりアンフィス・バエナは階層を移動して冒険者を翻弄するモンスターだ。一度逃がせばそれだけ無駄に体力が消耗する。

階層主はそう簡単に沈められる相手ではないが条件次第では短時間で屠れる。しかし、それには尋常ならざる力の行使が要求される。

(後の事は飯でも食ってから考える事にするか)

強い一撃をモンスターに入れつつ自身に気合を入れる。

そして——詠唱を開始した。

かつて所属していた「ファミリア」の主神より与えられた力が今もまだ残っているのであれば出来る筈だ。

多くのモンスターと冒険者を屠り、喰らい続けてきた必殺。

飢餓より発現せし力は後天的な宿痾により能力を大幅に増強した。しかし、今回はデメリットとなっていたスキルが消失していればあるいは——

僅かな逡巡が脳裏をかすめるが今の自分にとっては僅かな誤差に過ぎない、と言いつ

かせる。

「父神よ、許せ。神々の晚餐をも平らげることを！」

呪文詠唱を始めた途端に身体全体が炎に包まれる。

瞬間的に身体能力が向上し、敵を粉碎する為の準備が整う。

「貪れ、獄炎の舌。喰らえ、灼熱の牙！」

強大なモンスターと敵対する冒険者相手に使われた彼にとって必殺の魔法――

今はただただ純粹に振るわれようとしていた。そこに憎しみも恨みも乗っていない。

心穏やかなれど内に灯るは暴喰の炎。

劍しるぎは無く。肉体のみが唯一の武器。

「レーア・アムブロシア！」

魔法の完成と共に爆発的な速度を持ってアンフィス・バエナの胴体めがけて駆け出す。

大柄な体格に似合わず、その速度をアンフィス・バエナが捉える事能あたわず。

彼の後に残るのは踏み碎かれた地面と燃え盛る炎――

あらゆる障害は全て喰らいつくす。そんな暴力の権化のような存在が振う攻撃はモンスターの身体を激しく損傷させていく。

ただ殴られただけにしか見えないのに大きく肉体が破碎――いや、食い破られてい

く。

本来ならば彼の獲物大剣に炎の魔法付与を与え、炎の暴風を叩きつける技だ。

今は素手に魔法付与を施しているので本来より威力が減衰傾向にあるが、それでも構わず攻撃を繰り出した。

(……しばらく安穩とした生活を送ってたせい、か、身体がすっかり鈍なまっちゃったな。……自分の魔法で感じる痛みがはつきり分かる)

それでも耐えられない程ではない。

皮膚が捲めくれる程度の火傷などかすり傷だ。

——自信の身体が黒ブラックライノス 犀である事をすっかり忘れて、そんな感想を抱いた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

一撃一撃が必殺となった魔法付与を纏まとった打撃が僅かな時間に数十と叩き込まれる。

こんなことはレベルファイブ 5の冒険者でもできはしない。

打撃が当たる度に階層そのものが振動する。それが物凄い速度で発生する為、同階層に他の冒険が居れば立っていられなく可能性がある。

アンフィス・バエナは階層を移動する階層主だが、それを安易に許すほど彼は優しくない。なにより時間をかければかけるほど空腹が響く。

よって二本の長大な首を無視し、一気に魔石がある胴体部分を粉碎していく。

かつては病に蝕まれ、滅多に本気が出せなかつた肉体だが今は頗る調子が良く少し歯止めが利かない。

攻撃を振るうたびに火傷の様な熱さはあるものの、それは何の障害にもならない。

反撃を試みようとするモンスターが鎌首をもたげるが、それより早く胴体を打ち抜いた彼を止めるすべはもはや無い。

階層主と言えどそう簡単に倒せる相手ではないが——何故か、モンスター敵の耐久力が低下していた。それを彼は手の感触だけで把握し、疑問を抱くが即座に脳裏から追い出した。

一番大事な事は腹を満たす食事だ。それ以外の些事に構っているほど心に余裕はない。

美味しい飯を食う。

不利と見れば撤退し、有利な位置取りから相手を翻弄するアンフィス・バエナは成すすべもなく打倒され、黒い塵が大量に舞った。

第一級冒険者を複数人用意したとしても数瞬で決着をつける事は現実的ではない。腹が減っている為に長時間戦闘したくない理由があつたとしても。

様々な疑問も空腹より勝るまさものは無し。そう判断した彼は黒い塵となつて消えゆく階層主を一瞥する。

戦闘時間は強引に進めたために一時間も掛かつていない。——五〇階層まで体力を

今回の落下も言わば『ついで』または『巻き添え』だ。——ただ側に居ただけ、という理由で。

(……んっ? 階層が崩落している。……さっきの階層主は俺が来た時に出て来たから、それ以前からこうなっていたわけか。それもごく最近……)

修復中である事は見て分かった。

水流を眺めながら進むと見慣れたモンスターが一匹顔を覗かせた。それは『人魚』マーメイドだった。

普段であれば凶暴な面構えで襲い掛かってくるのだが、それは何故か穏やかな顔で彼を観察するように見つめてきた。

(……あれが話しに出た喋るモンスターとやらじゃないだろうな)

近づいたら水に潜られ、離れた場所からまた顔を覗かせた。

危機感のない顔をしているが水の中には他にもモンスターが居る筈なのだが、人魚マーメイド以外の気配が感じられない。

仲間意識を持つて近づかれても人魚を連れて歩くことは出来ない、というよりは難しい。彼らは水棲生物だからだ。

「……アステリオス?」

「はっ?」

唐突に言葉が聞こえたのでつい舌打ち気味に言い返してしまった。確かに共通語コイネーとして聞こえた。その発生源はやはり人魚マーメイドだった。

姿形は確かにモンスターだ。おそらく『アステリオス』という名前のモンスターに似ているのだろう。

「……アステリオス、違ウ？ ……コンナトコロ、居ナイカ」

たどたどしく言葉を紡ぐ人魚マーメイドは酷く落胆したようだ。それでもアステリオスに似ている為か、興味本位で少しずつ彼に近づいてくる。

追い払うのは簡単だが話しを聞くついでに食料を要望してみた。すると人間ヒューマンのように感情豊かに微笑み、水の中に潜っていった。

（色々と訳が分からないところがあるが……。喋るモンスターは居たな。元々知能が高い奴がいるくらいだ。喋るくらいは……、とは思っていたが）

彼にとって先ほどの人魚マーメイドが初めての遭遇というわけではない。

実例を知るものの確証が得られなかっただけだ。

精霊が喋るくらいだ。ダンジョンの中において不思議な事など『無い』と言い切る方が難しい。

近くの岩場に腰を下ろして佇んでいると先ほどの人魚マーメイドが現われ、どこから手に入れたのか果実をいくつか持ってきた。

驚異的な『力』^{アベリテイ}による絞りにかかれば水気を一度で抜き切るのは造作もない。

「……アナタ、迷宮^{マザー}ノ影響、ナイ?」

「……なんだ、その『まぎー』というのは?」

「マワリ。ココニアル全部」

(ダンジョンの事か)

彼女の口ぶりでは先ほど身体が利かなくなつた現象の事だと思われる。

影響を受けるとどうなるのか実際のところは分からないが、おそらく暴走状態の事だと予想する。その予測が合っているならば目の前の人魚^{マイメイト}は影響を受けていない気がする。

ダンジョンが怒っている。たどたどしい言葉尻からそういう意味だと受け取る。

「マザー、静マルマデココニ居タ方ガイイ」

いつまでいればいいのか分からないが、長居するわけにもいかない事情がある。

自分が直接の原因ではない事は人魚^{マイメイト}も分かっている為か、喋りながら水の中を移動し、時には追加の果実を持ってくる。

時には久しぶりに現れたモンスターも難なく仕留めて見せた。

そうして時間を潰してどれくらい経つたか、自分達の居る階層の天井付近に亀裂が走り、瓦礫が落下してきた。——危機を察知した人魚^{マイメイト}は彼に気を付けるように言いつけた

後、水の中に潜っていった。

それから数分と経たず現れたのは水の都の階層ではお目にかかれない異形の大型モンスターだった。

「……竜種のモンスターか」

一〇Mを超えようかという体躯を誇る漆黒のモンスター『破壊者』（ジャガーノート）が一体。

第二級冒険者を容易く屠る驚異的な『敏捷』を持つが今居るのは単騎で『迷宮都市』（オラリオ）を滅ぼさんとした冒険者の生まれ変わりだ。その実力はモンスターとなつて更に増強されている。

脅威度レベル5程度のジャガーノートが相手をするには分が悪いのだが、そんな事当のモンスターが知るわけもなく。

あらゆる武器を破壊してきた破爪を繰り出すも余裕で躲される。それどころか彼の重そうな角を刈り取る手段に使われる始末。

うまく調整して角を失つた彼は頭が軽くなつた事に至極満足していた。
（おー、軽くなつた軽くなつた）

斬撃による痛覚は多少あつたがそれだけだ。

モンスター特有の雄叫びから言葉が通じる存在ではない事を理解し、挨拶代わりに突貫する。

身体は大きいが変幻自在に移動するすべを持つジャガーノートはいつもの如く冒険者を翻弄しよとした。しかし、それは叶わなかった。

自信を上回る『敏捷』により容易に懐まで攻め込まれ、彼の拳を胸に受けた。それだけで軽く罅ひびが入った。

呻く間もなく逃げ切目が入り、抵抗しようとして繰り出した破爪は容易に相手の手によって掴まり、そのまま握り潰された。

「この辺りの階層に現われる中では強いようだが、相手が悪かったな」

ジャガーノートは決して弱くない。相手が強すぎただけ。

ここに来る前に単騎でアンフィス・バエナを屠った相手など知る由もない。

竜の化石の様なモンスターは抵抗虚しく拳のみで粉碎された。

彼にとつては一匹のモンスターに過ぎなかった。ただそれだけの事だった。

唯一褒めるところがあるとすれば彼の角を容易く切断せしめたことくらい。

軽い運動を終えたような気分マイメイトに陥つているところに拍手の音が聞こえた。ふと視線

を巡らせれば先ほどの人魚マイメイトが居た。

「スゴイスゴイ！ アナタ、凄ク強イ」

滅多に褒められたことが無かった為か、モンスターである人魚マイメイトからの賞賛でも嬉しかった。これも天界でぬるま湯につかっていた弊害だろうかと思わないでもないが――

地面に落ちている角は果物代として人魚マイメイトに渡す事にした。意外な事に重そうな物体にもかかわらず軽々と彼女は笑顔で受け取って姿を消した。

しばらく水の流れを眺めていたが長居すると体調を崩しそうだったので改めて上層を目指す事にした。別に彼女と共マイメイトに探索する約束を交わしたわけではないので。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

人魚マイメイトから得た食料によって僅かばかり飢えを凌いだ黒ブラックライノス 犀の彼は未だ崩落している階層を上っていく。

モンスターの襲撃は未だなく、そのまま二四階層に入るといつも通りの景色になった。それとモンスターの姿もここから多く見られた。だが、何故だがいつもより弱く感じる。

自分が強いから相手が弱く感じるのは別段おかしくない。

男の勘、または戦闘経験からいつもより弱いと感じてしまった。だが、だからといって手を緩める理由にはなりえない。自身がモンスターとなっていたとしても。

襲い来るモンスターは仲間ではなく敵だ。それは昔から変わらない不文律ともいえる。

それから一時間もかからず二〇階層まで上がったがやはり冒険者の姿ない。代わり

に微振動と言える揺れは何度か感じた。それとモンスターの出現頻度が極端に落ちている。

ここから先は冒険者が独自に隠れ家を作っていたりする場所に出る筈だが、その冒険者の姿自体が見えない。

常ならば数人程度の第二級冒険者が探索しているものだ。それが無いという事はどこかで異常事態イレギュラーが発生したか、偶々居たまたまなかつたか。

(……残り二階層も上がれば厭いやがおおにも冒険者の様子が窺えるはずだ)

飯に誰も居ないのであれば勝手に食料を漁るだけだ。

物資を一気にすべて持ち出す事は難しい。彼はそれを少し期待していた。

空腹を覚えているからと言つてまだ一日だ。この程度の我慢は出来る。水も多めに飲んできた。最悪、一気に地上まで駆ける事も辞さない気持ちだった。

三〇階層より下に比べれば幾分か気持ち的にも体力的にも楽になってきたが、こんなに静かな時間を過ごしたのは引退してから久しく覚えがない。

既に一日ほど経ったのでないかと彼は思った。今のところ腹具合以外で時間を計るすべが無い。それと濡れていた布もすっかり乾いていた。

一つの階層に長居する理由も無いので散歩気分次へ向かう。こんな気持ちでダンジョンを巡るのは記憶に殆ど無い。そして――

第一の目的地ともいえる『迷宮の楽園』^{アンダーリゾート}と呼ばれる一八階層に到着した。久方ぶりに訪れるので気持ち的に少し高揚を感じた。そしてすぐに鼻腔に懐かしい血の匂いが漂ってきた。

今は懐かしい戦場の匂いだ。本来この階層には似つかわしくないが悪い気分ではなかった。

(……で、早速何かいやがるな)

階層の出入り口からもよく見える偉容。黒き竜のモンスターの姿が。

彼の知る最大の敵である『黒竜』に比べると小柄で覇気も感じられないが油断できない相手である事は分かった。

それと冒険者の姿も。

さて、と小さく呟きつつ彼は思案した。まずは腹ごなし。それと人探し。どちらを優先すべきか、と。もちろん現状の様子を知る事も大事な事なのだが、意外な光景に思考が定まらない。



大型モンスターが壁面の穴に鎮座しているのは遠くからでも確認できた。だからといつでも黙って突つ立って観察し続けているわけにはいかない。

彼には待ち人が居るのだから。合流時間こそ約束していないがあまり待たせすぎる

と後が怖い。

今は角の無い黒^{ブラックライノス} 犀だが、冒険者達の混乱についてはどうとでもなる。問題は無視できない大型モンスターの方だ。だが、その前に空腹を満たす方が先か、と一人ごちる。

何をするにも腹が減っている。果物だけでは満たされない。

まずは『宿場街』^{リヴィラ}に向かおうとしたが多くの冒険者が上層の方へ移動しているのが見えたので今は避難の真つ最中だと判断する。

近くづくにつれて冒険者の他にモンスターの姿もいくつか見えてきたが、戦闘自体は始まっていないようだった。

(どういうことだ。モンスターと戦闘になっていないどころか交渉しているように見える。さっきの喋るモンスターの仲間……。俺達が死んでいる間に色々面白い事になっていようだな)

英雄を生み出す戦いから確かに何年かは経過しているだろう事は理解できる。だが、モンスターと交渉する程とは想定していなかった。自分が今モンスターである事を棚上げにしてもおかしいと思えるほどに。

それと近づいてみて冒険者達の所属が分かった。

かつて雌雄を決した派閥の一つ「ロキ・ファミリア」であることに。

まずは挨拶からか、と呑気に彼は思った。待ち人であるアルフィア・ストラデイの言^{げん}

によれば彼ロキ・ファミリア、らと既に面識がある筈だ。

「色々と言いたいことがあるかもしれないが、まずは食い物を寄せ。そうすれば暴ない事を約束してやろう」

太々しい態度かもしれないが、このくらいでなければ俺ではない。彼は話し合いより戦いに比重を置いていた。

そんな彼の声を聴いた冒険者達は別方向からの言葉に騒然となる。壁面に居る大型モンスターすら顔を向けてくるほどに。

傍若無人なる態度を示した彼に対して果たして——
「ああ、いいだろう。彼に食料を分けてやってくれ」

何の迷いもない、と言わんばかりに決断したのは「ロキ・ファミリア」の団長、小人族バルウムのフィン・ディムナだった。

懐かしい顔を見て黒ブラックライノス犀の彼は感嘆した。

現場が少々荒れてはいたものの大きく崩れてはいない。未知の存在ではなく既知である事は理解した。

下位の団員達が恐る恐るといった体ていでいくつか食料を持ってきたので彼は今まで持っていたアンフィス・バエナのドロップアイテムを駄賃代わりに進呈した。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

現場が膠着している中で黒^{ブラックライノス} 犀の彼は平然とその場に座り込み昼食を——いや、夜食を食べ始めた。

天井の水晶は既に暗くなり始め、団員達が松明や魔力灯で辺りを照らし出している。大型モンスターについては何の解決もしていないが、どうやら降りるのを渋っているらしい。その情報は自然と耳に聞こえてきた。

未知の存在である黒^{ブラックライノス} 犀の彼に近づいてきたのは団長のフィンではなくドワーフのガレス・ランドロックだった。

(ガレスか。随分とまあ傷だらけだな)

頑丈な身体を持つドワーフであるはずなのに、と不思議に思った。

よく観察すればケガ人がとても多く、悲壮感に包まれている。まるで遠征に失敗して敗走途中であるかのように。

今も見えている大型モンスターに振り返りに遭った、とは思えないが不思議な光景である事に驚いた。

「その尋常ならざる雰囲気じゃあるのう。まさかとは思うが……、ザルドで間違いないか？」

「生前はそうだったが、今はただの一匹のモンスターだ」

正体については相手がそう思うのなら好きに呼ばせるつもりだった。だが、名前が

無いのも不便かと思わないでもない。

自慢するわけではないが、と思いつつ自分は「暴喰」の『二つ名』を神々から賜ったザルドだ。つい先ごろまでそう思っていた存在なのは間違いない。

一八階層に来るまでモンスターになった自分にザルドと名乗る資格があるのか自信が持てなくなつた為、名乗るのが恥ずかしくなつてしまった。そんなささやかな気持ちで芽生えたので聞かれない限りは種族名でもいいかと思つていた。

「ついでに聞くが、あのモンスターも連れの一人か？」

ガレスが指差すのは今も壁に出来た中に居る大型モンスターの事だ。

天界に居る時の自分はアルフィアも含めて魂だけの存在だ。肉体はあくまで自分達の思い描く現象だとか小難しい事を神々は言つていた。正直、思考が曖昧になる空間だったので話し半分聞き流していた。

「あれがアルフィアだと名乗ればそうだと言える」

(あの女ならあれくらいのもンスターに生まれ変わつても驚きは無いがな)

黒^{ブラックライノス}犀のザルドの言葉にガレスは僅かに呻いたもののアルフィアとは名乗らなかつた事を伝えた。

では、あの黒い竜種のモンスターは何者なのか。

直接本人から聞いてきた異端児^{ゼノス}で歌人鳥^{セイレン}のレイのたどたどしい共通語^{コイネー}による説明に

く。

一つはアルフィアとの合流だ。これについて一つ分かった事がある。近くにメーテリアが居る事だ。しかも竜女ウイザルになっていた。

天界から落とされる時、身体がどうなるのかザルド達には伺い知れない。最悪、どこかの赤ん坊になっているのでは、と薄っすら思った。

生まれ変わりはそういうものだという思い込みがあったが見事に当てが外れた。

「……で、こいつらもまとめてモンスターになっていると」

夜食の為に集められた冒険者の中にモンスターの姿が多数あった。それがかつて敵対していた「アストレア・ファミリア」の団員達だと聞いて驚いた。

事前に話しには聞いていたのだが——実際に自分の目で見て改めて驚いたところだ。聞くのと見るのでは感じ方が違うな、と。

自身の感覚は天界でのぬるま湯で鈍ったものだと苦笑を滲ませる。

「私達はつい先日復活したけれど、貴方はどうなの？」

赤い髪の人蜘蛛アラクネになったアリーゼ・ローヴェルが尋ねてきた。

ザルドの場合はアルフィアに引きずり込まれる形で地上に墮とされた。

腐れ縁という付き合いもあつたし、彼女のみならず妹のメーテリアにも多少の——もとい大きな恩というか縁があつた。

ゼウス・ファミリア 覗きが趣味のサポーター
 う。ちの腐れ団員が多大な迷惑をかけて申し訳ありません。

【暴喰】が丁寧な言葉遣いをするほど。——そうしなければいつ殺されるか分からない生活を送っていた名残というか後遺症でもある。

主神ゼウスが色々とやらかす度に鬼の形相のアルフィアが乗り込んでくるので、すっかり彼女に対して委縮、というか下僕癖がついてしまった。

「アルフィア同様、貴方も死んだから別段オラリオをどうこうするつもりはないって理解でいい？」

「旗頭たる『絶対悪』エレボスが居ないんじゃあ俺一人暴れたところで意味はあるまい」

それより勝利者である「アストレア・ファミリア」が全滅という事はどういう事だ、と逆に尋ねた。

七年前の抗争より二年後に全滅。相手は未知のモンスター。特徴から下層に現れた竜の化石の様な大型モンスターの事らしいことは理解した。

ザルド本人の感覚では雑魚モンスターだった。だが、力押しの出来ない冒険者が相手であれば苦戦しても仕方がないかもしれない。あるいは偶々たまたま弱い個体だった、という事もありえる。

(……模様かと思っただけ角を綺麗に経ち切ったようね)

(何のモンスターに転生したんだ、こいつ)

屈強な肉体を持つモンスターの候補はいくつかあるがザルドが何のモンスターか分かったのはフィンとエルフの団員達くらいだった。

実害が無い事をいくつか確認した後はメーテリアと下に降りられない竜のモンスターについて話し合う事になった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

ニユクスと名乗る存在はモンスターとして復活したが現われた地点が思いのほか高くて怖気づいてしまった。

ずっと待機していると修復が始まり、いずれは弾き飛ばされてしまう。

冒険者達に強気な態度を見せてみたもののやはり怖い物は怖いので素直になって助けを請う方が無難な気がした。

一番の問題は腹部に露出している大きな水晶だ。これを破損してしまうと塵になる気がして仕方がない。

(視覚などはモンスターの頭部が担当しているし、腹部の方は明らかに弱点の露出以外の何ものでもない)

オラリオに降り立って楽しい毎日が始まる筈だったのに、どうしてこんなことになったのか。それは偏ひしえにニユクスがダンジョンに潜らなければ起きなかった。

おそらく他の誰に聞いても同じ答えが返ってくる。

ザルドやアリーゼ達と違い、ニユクスは生きてそのままダンジョンに取り込まれ、長く身動きが取れない生活を強いられた。

運が良かったのは食事が不要な事と排泄をしなくても問題が無かった事だ。いや。それは運がいいと素直に言えるものでもないけれど。

寝たい時に眠れるが起きたとしても真つ暗闇。——実のところ延々と闇に閉ざされてもニユクスには何の問題も無い。

ずつと一人で過ごしていた為に物思いに耽る事が多くなった。そのせいか、近くにザルドがやって来ても気が付かなかつた。

自由に身体を動かせるようになったのは七年振りだ。だから、明かりを見て安心してしまった。

気が付けば——首根っこを掴まれて地表に落とされた。それはもう叫ぶ暇も無いほど鮮やかに。

「……………」

僅かに頭が地面にぶつかった以外は特に大きな痛みは無い。

地上に落とした張本人であるザルドは片手間の仕事に何の感慨も無いと言わんばかりに立ち去って行った。

二人の間に沈黙が広がる。

(……あつさりと地上に下ろしてくれた。……あまりの事に言葉が出てこない)
 僅かに呻き、高い視点から地表に移った景色をしばし堪能する。

薄暗い中に魔力灯の僅かな明かりが見えるだけ。音はあまりなく、遠くに居る冒険者の話し声くらいしか聞こえない。

竜種のモンスターを助けたザルド当人はニユクスを冒険者ではなく女神だと思つて助ける事にした。自分の感覚からも常人とは一線を画す存在だと感じていた。

なにより自分の知る神々の気配によく似ていた。

レベル7の冒険者^{セブン}だった時でさえ神を敬い続けた。性格的に難があろうとも。神だけは対応が違っていた。

(……女神ニユクス。それだけでは分からなかったが邪神エレボスの関係者だったな、確か……。どうして居なくなったのかは忘れてしまったが……)

七年前、アルフィアと共にオラリオを襲撃する計画の話し合いで聞いた事を思い出した。

エレボスは一柱で来たわけではなく連れが居たがはぐれてしまった、と。気分屋だからいざ戻つて来るとして捜索しなかった、とかなんとか。

それが女神ニユクスだったのだろうと見当をつけた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

女神ニユクス。夜を司る邪神の二柱。

エレボスの妹的存在だったが「ファミリア」を作る前に失踪し、今まで行方不明になっていた。よって彼女の眷族は存在しないし、オラリオの襲撃にも乗り遅れてしまった形になるので特段の罰則も存在しない。

地上に降りられた竜のモンスターになってしまった女神ニユクスは弱々しくフィン・ディムナに簡単なあらましを説明した。

今まで誰かと話す機会が無かった為に自信を持った喋り方が上手くできなかった。精々威張る為のキャラ作りで自分を誤魔化す事に費やしていた。というよりそんな事ではか暇潰しが出来なかった。

「地上に降臨してダンジョンに潜ったはいいけれど、そこで落とされ穴に落ちた、と……」「……はい。まことに間抜けな事でごめんなさいませ」

巨体なのにフィンより小さくなったような印象を抱かせる。

当初は兄のように慕うエレボスと途中までは一緒だった。共に『絶対悪』として振舞おうと勢い込んだところダンジョンの罠にかかり取り込まれてしまった。

その当時はニユクス以外の邪神もダンジョンに潜っていたのでニユクス一柱程度が居なくなっても誰も気にしなかった。

殆どがエレボスと兄弟の契りを交わした神達ばかりだったので一柱二柱ひとりふたりの消失は例

え妹同然のニユクスであろうと気にするレベルではなかったようだ。

それとニユクスは他の神々同様に騒ぎを見物する気満々だったので【ファミリア】を率いるつもりは無かった。

「……神を生贄にしてモンスターを召喚するとか言つてた気がしたけれど、女神ニユクスはよく巻き込まれなかったね」

当人は壁の中に追いやられたので分からないと思うけれど、今だからこそ笑い話に出来るが、何年も個族を強いられるのは神と言えども精神的に辛かったのではないかと、少し同情を覚える。

例え邪神だとしても、だ。

『神獣の触手』が生み出されている横で女神はずっと壁の中に居た事になる。控えていた、というよりは気付いてもらえなかった？ または出番を与えられずにダンジョンからも忘れられていた？』

神がダンジョンに入ると取り込まれるから禁止された、という話しはフィンも知っている。

ダンジョンは昔から神々を敵視している。それは今も変わらないらしい。

ここで安易にニユクスを討伐するのは色々と不都合があると判断した。アリーゼ達とはまた違った扱いを強いられることに頭が少し痛んだ。

水晶に囚われている事に関して自分ではどうする事も出来ないらしい。おそらく破壊しようとするればその身ごと砕け散り、即座に送還される気がすると――

本来、地上の人々は神に危害を加える事はしない。ある程度の暴力は可能だが神殺しに当たるほどの攻撃は忌避感を抱かせる。それゆえに例え邪神であろうとも――「フレイヤ・ファミリア」の団員であろうとも――手を下す事はしないし、出来ない。

よく自分の眷族に『ぶつ殺してやる』『死ぬ』と言われていたり全身の骨を砕かれたりしている例があるけれど。

それとニユクスに対して他の神々が無責任な扱いをしている事に関して、元々天界の住人なので地上で死んでも送還されるだけ、という意識が働き大して危機感を抱かない。ごく一部の例外があるか無いか、神々にとってはその程度の認識でしかない。

それと送還される時に発生する『光りの柱』は迂闊に近づくくと命に係わるし、ダンジョンの中では地上まで貫通する攻撃に当たる。

「視線が高くなった事で遠慮なく童達を睥睨出来て大満足なのじゃ」

呵々大笑するのは水晶の中の本体ではなく竜の頭部。

少女然としたニユクスにとって偉そうに振舞うのは至極楽しい事らしい。それ以外は素直で大人しいのでフィン達も扱いに少し困っている。

邪神の一柱だったエレボスと直接対峙した「アストレア・ファミリア」の印象は――

正義を司る少女達から見ても——『糞神』だった。

偉そうに振舞う以外は大人しいがダンジョンに残すのも都合が悪いし、結局はアリーゼ達と共に連れて行くしかない。そう思うとフィン達上位の団員の頭痛は益々ひどくなる。

それと頭痛の種のもう一つである『異端児』^{ゼノス}達は現場が落ち着いたことを確認次第撤退する事を伝えてきた。

「ロキ・ファミリア」としては捕獲すべきなのだろうけれど、ここはあえて無視を選択した。ただでさえ「アストレア・ファミリア」だけでも手一杯なのにアルフィア、メーテリア、ザルドと増えていく問題に流石のフィンも許容量が溢れてしまうと降参の意を表す。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

疲労している団員達が休んでいる間、アリーゼ達は本場の『異端児』^{ゼノス}にモンスターとしての能力の使い方を教わっていた。

全く怯まない彼女達の様子に下位の冒険者達は驚いていた。ある意味、逞しいとさえ

新たな脅威が生まれないうまま一夜を過ごした後、地上からやってきた「ガネーシャ・ファミリア」の団員達が到着し、多くの喋るモンスターにそれぞれ怯んだ。

遠征を中止せざるを得なくなった〔ロキ・ファミリア〕は仲間達や『宿場街』^{リヅイラ}の住人の遺体を運ぶ準備に取り掛かる。

大型モンスターとなったニユクスには荷物運びを頼んでみた。

箸より重い物を持ったことが無い、とか言いそうな雰囲気だったが強靱なモンスターの力を確認した後は素直に作業を手伝っている。

ジャガーノートと違い、こちらの竜種は大ききこそ小振りだが深層域に出てくるモンスターと遜色がない肉厚さがあつた。残念ながら背中の翼はアリーゼ達同様に扱えない——動かせるだけで飛べない——ようだが。

水晶に封じられた本体は裸身なので隠すように布が巻かれている。神としては冒険者に見られてもどうということはなく、処女神でもないので気にするな、と本神^{ほんにん}は言っていた。

「折角だから背中に乗りなさいよ」

アリーゼが末っ子のリユー・リオンに声をかけた。

死闘を終えた今、彼女達の不安は生き残ったエルフのリユーの今後のみ。可能であれば共に生きる選択も出来るのだが——

既にいくつかの選択を彼女達は選んでいた。知らないのはリユーのみ。

その彼女はライラ達に後押しされ、人蜘蛛^{アラクネ}の背に乗せられた。

歴戦の冒険者であるガレスやザルドは警戒を解かない。

地上への帰還作業と並行として新たな脅威に警戒していた。

ニユクスにはアイズを付き添わせた。見た目は凶悪なドラゴンなのだが怒りや殺意は湧かない、と物騒な感想を彼女に告げられてフィンは苦笑する。

今まで大人しくしていたメーテリアだが黙って作業を眺めていた。

暴れるでもなく喚くでもなく、ザルドに会っても手を振ったり笑顔を見せるだけ。天界で会っているし、久しぶりというほど離れていたわけでもない。

そのメーテリアが唐突に駆け出し、ラウル・ノールドとアナキティ・オータムに覆いかぶさるように追突した。

一見するとわざと体当たりしてちよっかいを掛けたようにも見える行動で目撃した団員にも緊張が走る。

小言を言おうとした時、真下から強大な魔力の波動が発生、拡散した。

ザルドとニユクスを除く多くの冒険者達が一斉に冷や汗をかくほどの異常事態が起きた。そして、何処からともなく玲瓏たる音——いや、超短文詠唱が誰の耳にも届く。

警戒していたフィンの命令よりもそれは早く起きてしまった。

『福音』
ゴスペル

本来それはこの階層で聞こえない筈のもの。まして、その術者は五階層に今も待機し

ているという報告を受けていたし、今も彼女アルファイアは戻ってきていない。

であれば誰がこの魔法を扱えるというのか。

唐突にかき鳴らされた魔法の衝撃は平地を一瞬にして吹き飛ばし、多くの土砂が引き上げようとしている冒険者達に襲い掛かる。

運がいいのか悪いのか、魔法による攻撃を直接的に受けなかった為、被害は想定よりも軽微であった。

「……ああ、忌々しい。未だ私を悩ませる雑音が消えないとは……」

クレーター状に抉れた地面の中心地点にそれは居た。居た、というか上半身しか見えていない。

七年前の暗黒期に実際に彼女が身に着けていた黒いドレス姿。深窓の令嬢のような佇まいはフィン達にも見覚えがあった。

灰色の髪。閉じた両目蓋かんぼせの顔。死人の様な色白の肌を持つ人間ヒューマンの女性。

瓦礫を退かしながら這い上がってくる姿は地獄から生還した亡者の如く。

(……馬鹿な。では、上層に居るアルファイアは偽物!? そんなわけは……)

フィン達はモンスター化したアルファイアの能力を目撃したのは地上での邂逅時のみ。再復活時の能力までは確認していないし、同一人物だと今まで疑いもなかった。

安易に偽物と断じる事も出来ないが不可解な現象に少々戸惑ってしまった。

身体を完全に露出させたアルフィアは生前の姿そのもの。違いがあるとすれば身体全体が燻くすぶっているのと服装が相当傷んでいる事くらい。

「……しかし、これはどうしたことだ？」

（それ以前に……私は何だ？ 記憶があやふやだ）

全身を苛む痛みはいつも通りだとしても、とアルフィア・ストラディは疑問を覚えた。

姿形は人間ヒューマンそのもの。角も尻尾も無く、肌に鱗一枚も張り付いていない。

本人も気付いたが身体が煙が立ち上っているし、服が一部焼け焦げている。

なによりも不可解なのは強烈なほどの怒りがあつた筈なのに今は何故だが霧散してしまい、気持ちごとくも落ち着いている。

地面を吹き飛ばしたのはもちろん邪魔だと思ったからだ。そうなのだが——何故だ
が自分自身の事なのにおかしいと思っっている。

明らかな異変。周りに居る冒険者の中にモンスターが平然と紛れているのも気付いて
いたが——

一番の異変は呼吸がとても楽になっている事だ。そう、先ほどまで感じていた筈の
雑音雑音が気のせいだと思えるくらいに。

15 継承

一八階層の平地を吹き飛ばしながら現れたのはアルファイア・ストラディは——そうとしか見えない——生前の姿を保ったまま自身に起きた事に疑問を抱く。

激しい怒りがあつた。原因は定かではない。

破壊衝動とも取れる何らかの意思。——それが地上に出た途端にぱったりと霧散霧消してしまった。

(……周りに居るのは「ロキ・ファミリア」か?)

各団員達が持つている「ファミリア」を示す団旗から判断した。

彼ら以外にモンスターの姿もある。何故か冒険者と共に居るし、戦闘になつていないように見えた。

覚醒してから記憶の混濁は少しずつ治まってきているものの自分がどうして地面の中にいたのかは分からない。何かがあつた事だけは臆気に覚えているというのに。

胸に手を当てると心音が——全く聞こえない。停止しているのか脈動は待てども待てども起こらない。

(……ああ、そうか。私はここで死んだのだな)

冒険者を引退したはずの自分が地面に埋まっている。何かがあったのかもわからないが結果的には埋められるような事があった。ならば、答えはただ一つしかない。

息苦しさは地面の中に居たせいだとして一向に起きる筈の本来の痛みが来ない。

音に対する付与魔法『静寂の園』を解除し、体調を窺ってみた。
付与魔法を解いた事によって彼女の魔力が吹き荒れる。

(……やはり体調に変化は無いな。……馬鹿げているが……、そういうことなら理解できさる)

ため息をつきつつクレーターから這い出て、大勢の冒険者を見据える。

誰もがアルフィアに恐れを抱いて警戒していた。

軽く手を前に向けるだけで誰もが一步後退する。

膠着状態に陥るかと思う間もなく人ごみから前に出てたのは彼らの代表である小人族のフィン・ディムナだった。

「お目覚めのところ悪いが、こちらは敵対の意志は無い」

「……【勇者】……ここはダンジョンだな」

「そうだ。……君はどこまで覚えているんだい？」

何を覚えていて何を忘れたのか。単純な問いかけだったが正確に答えるには幾分か時間がかかりそうなことだけは理解した。

気分は悪くない。それにとって自分は退場した。怒りも薄れているというか改めて湧いてこない。

アルフィアは口元を緩ませ、自然体で――

フィン・ディムナの首目掛けて手刀を繰り出した。

それはとても静かな攻撃だった。

音は無く、駆け出した事さえ気取られない程に洗練されていた。

だが、油断という点でフィンもただの冒険者ではない。彼には優秀な危機管理意識を持つ親指の権能を持っていた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

「ヘラ・ファミリア」所属でレベル7セブンの「静寂」のアルフィア・ストラディ。そう公式記録には記されている。だが、目の前に居るのは枷のないアルフィアだ。

その身体能力はレベル9ナインの冒険者にも引けを取らない。まして――
ダンジョンの使徒であるアルフィアは与えられた命令に忠実である。

フィンは常に携帯している『フォルティア・スピア』という槍で防御。いかにアルフィアとして素手で超硬アダマンタイト金属級の金属で出来た武器を斬断するのは無謀だった。

素手と武器の柄がぶち当たると耳を疑う衝撃音を奏でた。

女の細腕にしか見えない攻撃にフィンが押し込まれる所を見ると『力アレリテイ』がかなり高い

事が窺える。

(攻撃の際、彼女の身体から煙が噴出したな。まとな存在ではないようだが……)

生前のアルフィアの最期をフィンは直接見ていないが燃え盛る一八階層より身を投げた事は聞いている。

炎に包まれて灰と化した影響かは分からないが何の理由も無く煙が出るとは思えなかった。

だが、それより問題なのは疲弊した今の状況でアルフィアを打倒するのは困難を極めるということ。

「……フィンは下がってて」

言うより先に助けに来てくれたのは「劍姫」アイズ・ヴァレンシユタイン。

無駄口をたたかず細身デスベリートの剣で応戦する。

素手の敵に武技で立ち向かう形だが、それでも相手は何の支障もなく対処していた。

それと魔法による牽制を使わない事が気になった。

「……………」

突如として戦闘が始まり、外野のニユクスとザルドは半ば呆然としながら見物するところになった。

ザルドはまだ興味深そうに見ているが黒い竜たるニユクスは何故戦っているのか全

く理解できなかった。

彼女からすればどちらも地上に住まう子供達にしか見えなかったからだ。理由があれば納得する。無いから困惑している。

アイズが参戦したからといって戦況の変化が変わるわけでもない。七年前の時より強くなった彼女の攻撃ですら今のアルフィアにはまだ届かない。

混戦模様に陥るかと思われたが、ここには一つの『異常事態』イレギュラーが存在していた。

「姉さん、こんなところで何をしているの?」

殺し合いには似つかわしくない呑気な声かけ。

たった一言なのにアルフィアが大いに動揺し、アイズから飛び退った。いや、初めて危機感を持った行動を取った。

今の声掛けはアイズではない。

(幻聴!?)

目蓋を閉じたまま眉根を寄せるアルフィア。

声の主を探すために頭を巡らせようとした時、突然背後から抱き着かれた。

「捕まえた〜」

「……貴様」

アイズの目にはアルフィアがどうして抱き着かれたのか理解できなかった。もし、自

分であれば気配を読み取って躲す自信がある。

声の主は特別な動きは取っていない。寧ろ、何故バレなかったのか。

「姉さんは一緒に来た姉さんではないのね。何となく理解できたわ」

「……リア。ダンジョンに魂を取り込まれたのか？ 神ではなくお前が」

「……そういうわけじゃあないんだけれど……。ここは私に免じて戦いをやめて。みんな疲れてる。そうしないと姉さんを残して塵になるわよ」

聞きなじみのある妹の声で言われればアルフィアも命令を中断せざるを得なくなる。

全てにおいて妹に比重が傾いている彼女は不満顔のまま身体から力を抜いた。

ダンジョンの使徒であるアルフィアも愛する妹の命令——お願いを無下にする事は難しい。

「……ああ、儂く可愛らしいメーテリア。お前を救うために研鑽を重ねてきたが……」

「姉さん。運命は変えられないのよ。……それにいつまでも愚痴を言うのは姉さんらしくないわ」

労わるように両手を差し出すアルフィアは妹の言葉で動きを止めた。

それまでは確かに悲しげな表情をしていたが思い通りの結果にならなかった事に——姉は僅かに不満を滲ませる。

（……妹だというのは理解しているのか。それとも声が似ている相手だから相手をして

偽物とは言え限りなく記憶を再現しているせい、立ち居振る舞いに違和感が少なすぎる。開き直つているとも違う気がした。

フィンには苦笑した。滅多に弱みを見せない彼をして、こんな敵と戦いたくないと思わせる。

アルフィアの目的は——メーテリアが尋ねたらあつさり答えてくれた——ダンジョンの敵対者たる冒険者を皆殺しにすること。

今回の原因の大元がメーテリア自身なのはアルフィア自身気付いていない様子だった。

「ごめんなさい、姉さん。……その原因は私かも」

「……なんだと……。リアが原因!？」

忠実に再現しているせいか、妹の返答にだけ大袈裟に反応する。これがフィン達とあまり本気にされないので少々納得がいかなかった。いや、態度が違い過ぎるだろうと文句を——一応は言つたが相手にされなかった。

それからアルフィアは妹の言葉に驚きを見せつつ攻撃態勢に何度も入ろうとして失敗していた。

傍目には大袈裟な身振り手振りにしか見えないが動きが不自然だった。

「……周りが少し騒がしいな。【福音】^{ゴスペル}……」

「『らららら』」

「……むっ」

アルフィアの魔力によって引き起こされる魔法の衝撃を『木霊反響』によって次々と相殺しつくす。

出始めであればある程度の減退が出来るのは同じ音を司る者ならでは。

かといってアルフィアの能力は絶大だ。例え模倣された存在だとしてもダンジョンが満を持して用意した報復装置。偽物と安易に侮るなかれ。それは紛れもないジャガーノートを凌ぐ災厄であった。

しかし、必殺である筈の魔法もアリーゼ達にとっては彼女の全力ではないのは理解した。

真の力を発揮すれば軽傷どころでは済まない。

(……アルフィアの魔法を『スキル』で相殺した、だと!?)

(さすが妹って……思えばいいの?)

外野が困惑している間も姉妹の対話は続く。

激闘を繰り広げた経験を持つアリーゼ達の目から見てもメーテリア達の行動は想像の埒外にあった。そもそも気軽にアルフィアに触れられない。——妹の特権といえはそうなのだが。

魔法を放とうとする姉の顔を掴んで方向転換させるなど、ただの冒険者には出来ない事だ。ましてレベル7に挑むなど自殺行為と変わらない。

「……偽物とて矜持がある。与えられた使命は全うせねばならない」

「……それで本物になれるわけがないの？」

「別に構わんだろう？ 本物でも私程度に倒されるような懦弱な者は存在するだけ虫唾が走る」

「……聞き訳が無いのは姉さんらしいかと思っただけれど……」

そう言いながら大きいため息をつくのはメーテリアだった。

冒険者時代の姉であればその言い分に反論の余地はない。だが、今は色々と事情が違
うし、天界で出会った姉の様子からも今の言葉を容認する事は——妹だからではなく——
メーテリアにはできない。

ダンジョンの意志をある程度把握しているメーテリアには分かる。これは姉の意志
というよりダンジョンの悪意が多分に含まれているということに。

もう一度魔法を使えば一気に事態が解決するのだが、さすがに大技は何度も出来な
い。

(……英雄の作法を教えてやろう)

「英雄の……、ん……。貴様、今、何を考えた？」

アルフィアが動揺を見せた。

孤高の女王が何かを言おうとするたびに一歩ずつ後ずさる。

三言目からは口を開閉するだけになった。

「【静聴】のメーテリア・ストラディは姉さんに負けなくらい強くなれるんですよ。今は竜女ウィザードですけど」

そう言いながら額に存在する宝石をもぎ取り、それを人のいる場所に放った。

何気ない動作だがフィンやアリーゼ達は大いに驚いた。

額から血を流しつつ微笑みを絶やさないメーテリアの身体が変化を始めた。

成人女性の様な体軀の彼女の身体は二倍以上に大きくなり、背中から有翼の器官が生えていた。

両脚は強制的に閉じて癒着し、一本の長い尾になった。

表情は凶暴なモンスターのようにな変わったが頭を何度か振ると狂気が治まった落ち着いた顔に。

「メーテリアの本気ですよ、姉さん」

「……莫迦かお前は」

ダンジョンの使徒とはいえ自分の意識もあるアルフィアは変化した妹の身体を労わるように擦り出し、心配のあまり言葉にならない呻き声を発するようになった。

そんな動揺する姉を頭というか顔を大きな口で噛んだ。

肉体的には人間ヒューマンと変わらないせいにか、多少出血したが骨格が砕ける事は無かった。

そのまま『スキル』を発動する。

目の前で強烈な不協和音を浴びせられ、魔法による抵抗も上手くいかない。なにより物理的な排除が出来なくなっていた。

普段であればレベル6の冒険者だろうがか弱い妹の物理攻撃だとしてもものともしない。それが今は動揺のあまり本来の力が発揮できない。なによりたかが『スキル』に過ぎない筈の技に肉体が悲鳴を上げている。

確かに病弱だった頃の妹であれば何の痛痒も感じない。だが、今は健康体にしてモンスターの力が加わり、更に想定以上の「ステイタス」を持っているのだからいかにダンジョンの使徒を自称するアルフィアとて無傷では済まされない。

魔法であれば『静寂シレンティウム・エデンの園』で無効化出来る。だが、今喰らっているのは単なるスキルだ。——スキルだろうと無効化しそうなものだが何故だか出来なかった。

それは肉体に不協和音を浴びせられた事によって不快感が増大し、思うように肉体を制御出来なくなつたからだ。

不意に背中に指を這わせられると震えてしまうように。

二の腕や足の裏、腋わきをくすぐられるように。——場合によれば唐突な失禁を誘発させ

てしまう事も。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

単なるいたずら程度の効果だと思おう事無かれ。

レベル6のメーテリアが本気で姉を倒そうとして全力を振るっている。その効果は想定以上に強く表れる。

身動きできないアルフィアの鼓膜や眼球の毛細血管は真つ先に破れ、鼻血も出てくる。しかし、そんな損傷もダンジョンの使徒としての特性か傷の修復が始まる。

倒し切ることは出来なくとも肉体的な損傷を与える事は可能だ。

強靱な肉体を得ているせいで安易に気絶も出来ない。

——偽物とはいえ姉を倒すのは僥^{しの}びないと思い、途中で離れた。それが間違いのもとになるとしても最後まで戦い抜く事はメーテリアには出来なかった。

「……姉さん、血塗れ」

「……はあ、は〜」

足腰が震えて立っている事が出来なくなったアルフィアは地面に膝をついた。

他の冒険者ならいざ知らず妹の攻撃であれば敗北も素直に受け入れる。だから、特に負けたからと言って悔しいとは思わなかった。

突如始まった戦闘を固唾を飲んで見守っていたアリーゼ達外野連中はただただ感心

した。孤高の女王が手も足も出せずに屈した姿に。

相性の問題もあるだろうけれど、同じことが出来る人間は『迷宮都市』の中でも二人と居ないだろう、と。

(……生前であれば姉さんをここまで追い詰める様な事は無理。健康体でモンスター肉体があつたからこそ)

(……リアに攻撃された。外に出る事も難しかったあの弱い子が……。誉めるべきか怒るべきか……)

アルフィアは自身の怪我など眼中にないくらい妹の強さに感心したり驚いたり、様々な感情が渦巻いた。その多くは喜びだ。恨み言は使徒として抱えるが、それだつて軽微に過ぎない。

変身した竜女ヴァイヴルは理性を失うものだがメーテリアは何の問題なく自我を保っていた。本人からすれば身体が大きくなり、力が増した程度にしか感じていない。

姉と妹の戦いはまだまだ続くと思われたが、先に降参の意を表したのはメーテリア。理由は単純、偽物とはいえ姉を本気で倒す事に抵抗を感じたから。——本音の所は違うのかもしれないけれど。

身体から煙を立ち上らせるアルフィアを真の意味で追い詰める事はフィンでなくとも不味いと感じていた。それを感覚的に察知したから、ともいえないかもしれないが——

（モンスターのアルフイアは『シレンティウム・エター静寂の園』を乱用すると体内の魔石が傷つくと言っていた。ならば、彼女もその条件に当てはまる可能性がある。決して本気を出せない孤高の女王……）

戦闘を自ら放棄したメーテリアはフィン達の下に戻ってきた。ただし、変身したまま。

元の大きさに戻るには先ほど捨てた宝石を額に戻す必要がある。それを探しに来た。残されたアルフィアは急速に傷を癒していく。生前、そのような特性を持っていたので確実にダンジョン由来の能力だと誰の目にも明らかとなった。

はくせき白皙の肌に赤い血管が浮き出て煙の量が増大した。だが、敵意はそれほど感じなかった。冒険者達は油断せずに警戒しながら見守った。

「……待て、リア」

少し俯き加減になったアルフィアが声を発した。それは小さくとも誰の耳にもはっきりと届いた。

大きな体躯となってしまうメーテリアも思わず振り返る。最初に見た時よりも姉が小さくなったような印象を受けた。それは自分が大きくなったから、というわけではない。

「ダンジョンを怒らせたのはお前か？」

「そうですね。凄いでしょ？ えっへん」

腰に手を当てる胸を張って傲慢する大きな竜女。グイーゼル

見た目こそモンスターだが姉から見れば可愛らしい印象を思い起こさせるに足りた。か弱い妹が大きなことを成した。それが例えダンジョンの使徒としては受け入れがたい事実だとしても既に比重は妹に傾いている。

微笑みを見せつつ一足で妹の側に降り立ち、彼女の頭を撫でようとした。——今は巨体になっているのでつま先立ちでも届きそうにない。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

戦闘は唐突に終わった。使徒である筈のアルフィア自身がやる気をなくした。——
 または強引にダンジョンの指令を反故にした、ともいえる。

アルフィア 本人の感覚では身体はもって一日だろうとフィン達にあつさり告げた。

終わって見れば「ロキ・ファミリア」の被害は軽傷のみ。メーテリア一人の勝利という驚異的な成績だった。

ザルドもニユクスも事態を見守る側に立っていたものの、戦闘に加わっていればもっと酷いことになっていたのは明らかだと評した。——図体が大きいニユクスは元より戦力に数えられなかったかもしれない。

「……もう一人私が居るのか」

戦闘意欲を無くしたアルフィアをメーテリアの側において今までの事情を——簡単にだが——説明した。

生前の姿をかなりの精度で再現している彼女にモンスター組は至極興味津々だった。複眼が現われたアリーゼを除けば身動きが取れない程度で済んでいるが、ダンジョンがその気になればあらゆる存在が敵対する。

生物的な振る舞いはフィン達も以前から感じているし、神々もある程度はそういう認識を持っていた。

(向こうのアルフィアを引つ張つてこれなかったから忠実な僕しもべを作り直したんだ。だが、結局その企みもご破算になったわけだ)

身体から立ち上る煙はアルフィア本人もどうする事も出来ないらしい。

傷の修復の為に現れた太い血管も近くで見れば植物の弦つるのように成長していつている。僅かに動いている様子が窺えた。

それからガレスとザルドは普段であれば説明役として控えているのだが、アルフィアを怖がっているのか離れた位置に避難していた。

結局、聞き手として残っているのは団長であるフィンのみ。後方に何人かの団員は控えていたが。

それとメーテリアは宝石を額に戻したら変身前の姿に戻れた。本人はとても不思議

アマゾンネス

女戦士のティオナ・ヒリュテが興味深く観察したり、話し相手になつたりしながらニコクスの安全を確保し、姉のティオネ・ヒリュテは団長のお世話で手一杯だと主張し、些事には殆ど関わらない姿勢を示した。

道中は快調だった。異常があるなら上から来た冒険者から報告がある筈だし、何も無ければそれに越したことはない。

不審な点があるとすればモンスターが殆ど出てこない事くらいだ。居ないわけではない。新たな生産が確認できないだけだ。

数時間後には五階層にたどり着き、待機していた「フレイヤ・ファミリア」の団員であるオツタルとヘディン・セルランドのすがたを確認した。

いじけていたと言われていたアルフィアは階層を破壊しながら気持ちを落ち着かせ、今は比較的立ち直っているようでフィン達が残念がった。

そして――

二人のアルフィアが邂逅する。

交わす言葉はなく。互いに睨み合う形から始まった。――といつても互いに目蓋を閉じているので立つたまま寝ているように見えなくもない。

当人は既に互いを敵視し、魔力によるぶつかり合いが始まっていた。だが、それも数瞬で終わりを告げる。

自分は二人も要らない。消えるべきなのはどちらなのか。その答えは出会った瞬間に出ていた。

「私の妹は強かったぞ」

「私の妹なら当然だ」

同じ声色による妹自慢。

ミーテリア
当人は顔を手で覆い恥ずかしがった。

本当は実力で言えば下の下もいいところ。それは姉であるアルフィアが一番理解していた。

そんな妹が姉を翻弄し、元はとまでは言わないまでも窮地に追いやったのだ。現役で言えば「ランクアップ」させてやりたくなくなるくらいの偉業だ。もちろん、多分に過大評価している。

ゴスベル・サタナス・ヴェーリオン
「福音・魔王の旋律」

一拍の間の後、人間のアルフィアが制限なしの超短文詠唱を唱えた。

一瞬にして広がる膨大な魔力の波動に対し、竜ドラゴニユート人のアルフィアは涼しい顔で堂々と受け止めた。いや、身体に触れた瞬間に反撃に転じた。

同じアルフィアであれば『静寂の園』シレンティウム・エデンの存在を知らない筈がない。

自らの魔法すら大幅に制限する外部の魔法を無効化する付与魔法エンチャント。

極大の『福音』^{ゴスペル}を持つてしても相手にダメージを与えられるか分からない。そして、同じ存在にそんな魔法を放つ事など本来はあり得ない。今、この場でのみ見ることが出来る奇跡の一戦であつた。

竜^{ドラゴン} 人のアルフィアは妹とベル・クラネルの為に自らに枷を設けた。それは自身の魔石を傷つける行為を行わないというもの。

それはつまり『静寂の園』^{シレンティウム・エデン}の使用を禁じる。——それと自分でも確かめてみたくなつた。

普段、敵に向けていた魔法の強さがどの程度であるのかを。

「聞きしに勝る雑音だな。……確かにこれは聞くに堪えん」

相手にどう聞こえていたのか、こうして同じ魔法を放つてくれる存在が居なければ永遠に理解することが出来なかつた。これはこれで好奇心を満たす上で僥倖といえる。

望外の破壊音波の筈がモンスターのアルフィアからすれば力の入った物理攻撃と大差が無かつた。もちろん、程度が低いわけではなく、まともに食らえば流血する程の強さなのは理解している。

後方に居る冒険者達やメーテリアにも被害が生まれてしまうので呑気に技を味わっているわけにもいかない。

思索を試みている間も自分以外にあまり被害が行かないように同じ魔法によつて衝

撃を相殺している。

同じ波長の魔力ゆえに触れさえすれば相手の魔法を利用するだけで簡単な作業になつてしまう。

(千日手か一撃必殺の二択か)

(膠着などありえん)

戦う前から勝敗は明らかだ。そう判断を下したのは竜ドラゴニユート人のアルフィア。

自分達は過去の遺物で敗北者だ。例えば「アストレア・ファミア」が全滅していようが全ての冒険者が居なくなつたわけではない。

ベル・クラネルとの出会いで壊れかけていた時計の針が元氣よく回り始めたばかり。その動きを更に良くするのは自分達の役目だ。

ゆえに――

少年ベベルの歩みを邪魔する者はすべて排除する。

二人の攻防は経過時間こそ数分足らず。レベル7以上の戦いは僅かな時の間に数十を超える攻防が繰り広げられるものだ。

彼女達のやりとりを性格に視認する事は難しいが第一級冒険者であればだいたい見る事が叶う。

そして、刹那の間に決着がついた。いや、より正確には残るべき者に委ねただけ。

大怪我をしたリルカ・アーデも適切な手当てを受けたので歩くだけなら問題ないと主張した。

ザルドはアルフィアと共に居る事を選び、メーテリアは「ヘステイア・ファミリア」預かりになる事で話しが付いた。

とはいえ、最大の懸念が実は残っているのだがダンジョンの中で考える事ではないと判断したフィン達はその事を棚上げる事にした。

疲弊が沈黙を呼び、重い足取りになつていたが浅層の道中はいつも以上に静かで平穩そのものだった。

地上に出れば——空は夜天に覆われていた。

アルフィアとメーテリアは当初の約束通り、ほんの数日を「ヘステイア・ファミリア」で過ごす事になり——自動的にザルドも一緒となる——アリーゼ達「アストレア・ファミリア」の多くは「ガネーシャ・ファミリア」に向かう事になった。

「ロキ・ファミリア」はそのまま本拠ホムに戻り、死んだ仲間達の埋葬やら細々としたことがたくさん待ち受けていた。

オツタル達「フレイヤ・ファミリア」も自分達の本拠ホムに戻る予定だった。

重い空気にさらされて気まずさを感じていたりリルカ・アーデは一番自分が不幸な役回りだったことを嘆く。——死んでいないから幸運だ、とは素直に喜べない。

暴走したアルファイアにいきなり襲われたので何しにダンジョンに潜ったんだ、と自己嫌悪に陥った。肝心の団長であるベル・クラネルは地上に上がったまま戻ってこないし、今もどこに居るのか——恐らく治療院に居るのだろうけれど。

「痼癩を起さない。この大きな魔石をあげるから機嫌を直して」

と、メーテリアから巨大な魔石を貰ったので早速予想金額を夢想する。それとアルファイアから「フレイヤ・ファミリア」に奪われる前に売ってしまえ、とありがたい助言を貰って気持ち少し楽になり、ついでに本拠^{ホーム}まで護衛してもらえらることになった。

多くがそれぞれの拠点へ迎え頃、他と違う行動を取るのはアリーゼ・ローヴェルとゴジヨウノ・輝夜の二人。

地上に戻る前に二人はひっそりとモンスターの魔石を食べ続けていた。この事はアストレア・ファミリア仲間達も承知している。

「ねえ、リオン。地上に出られたし、ここで決着をつけましょうか」

アリーゼの提案に末っ子のエルフであるリユー・リオンは混乱した。

仲間達は既に話し合いを終えていたらしく、見物人以外は残らずに「ガネーシャ・ファミリア」と共に移動を開始していた。

輝夜はアリーゼとは別行動しており『迷宮都市』^{オラリア}の中心である『中央広場』^{セントラルパーク}を歩きつづつ前を歩く【劍姫】に声をかけた。

「夜間は人気も少ない。丁度良い間合いが出来とります。なので……ここで私と立ち合つてくれませんか？」

ウォーシャドウ

戦 影の唐突な挑戦に対し、アイズ・ヴァレンシユティンもまた困惑した。

戦う理由が無い。いつもであればそう言える。だが、相手はモンスターだ。普段のアイズなら一も二も無く剣を振るう。それがいつもの日常だ。

戦つてみたい、という理由では弱い。私怨でもない。単なる妬みという線も無理過ぎる。

だから、普通に尋ねてみた。そして、興味があつた。

今の自分の技は【剣姫】にどれだけ届くのかを。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

輝夜の生前の【ステイタス】はレベル4。

今はモンスターの姿を借りて復活し、魔石を取り込んで増強している。だからといって【剣姫】に届いているとか凌駕しているとかはどうでもいい。

ただ、強い冒険者と剣を合わせる。

「別れは済ませた。うっかり討滅されても、それは事故……。そちらさんの【ファミリア】を恨んだりしないように言っておきました。……仮に仲間が仕返しに来るようでしたら倒せばよろしい」

「……別れ？ 貴女はそれでいいの？」

「愚問。それ以上は剣をもつて語り合えばよろしいです」

輝夜は腰だめに構えて鞘を握る。

アイズは輝夜の態度に真剣である事を感じ取り、仲間に関心するように言った。真剣勝負が始まると仲間は思ったようだが見世物にする気は無く、一応輝夜に確認を取って見たところ好きにすればいいという返事が返ってきた。

剣を合わせるに充分な広さを確認できた後、細身の剣デスベレットを抜き、輝夜の要望に対する答えを示した。

輝夜は圧倒的な壁に思えたアイズ・ヴァレンシユタインが今は頑張れば手が届きそうな位置に居る気がした。幻想かもしれないし、単なる希望的観察に過ぎないのかもしれない。

英雄の領域に踏み込んでいるアイズに挑戦できる機会は意外と多くない。この状況を逃せばもう機会はやってこない。正に千載一遇の機会は今において他にない。

——ああ、アイズ・ヴァレンシユタインを殺せる。

何の気兼ねも無く——ただ、純粋に殺意をほしほし迸らせる。

剣士というより暗殺者。ただただ殺める為だけに特化した家系『五条』の末裔。

極東に生まれ、正義を冠する「ファミリア」に所属していたのは何かの冗談かと自嘲

したのは随分昔のように燃えて笑えてくる。しかも今はモンスターと成り果てた。

夢半ばで倒れ、今また立ち上がる事をダンジョンより許された異端の権化。であれば好きにしても構わないだろう。今は制限する者の無い我欲のみしかない。

(……とはいえ、素直に殺されてくれる相手ではありません。が、殺す気でなければ届かない)

その為には生贄が必要だ。

力を得るために輝夜は色んなものを捧げた。最期は自身を——
ならば今は何を捧げれば満足するのか。

(……無粋。小難しい理屈は性に合いませんな。……やはり……)

極東の神髓を刻む。それ以外は必要ない。

もうすぐ欲しい者が手に入る。あと一步——

輝夜の気配を察知してアイズも迎撃態勢に移る。勝負は一瞬でつく。自分は全力で

臨むだけ。

【吹き荒れよ】

その身に風の付与魔法を纏う。

長時間の連続戦闘でアイズも疲れが残ったまま。重傷のリヴェリア・リヨス・アールヴの容態も気にかかる。不安要素が内に残っている以上、本気をどこまで出せるのか本

人でさえも未知数であった。

だが、それでも戦う以上は全力で当たらなければ相手に失礼だ。

斬撃戦において自身の防備は無粋。けれども黙って斬られるわけにはいかない。

斬られる前に斬ればいい。勝負はおそらく一太刀で決まる。

歴史を積み重ねてきた輝夜をして戦いの権化たるアイズの強さは異常の一言に尽きる。五年の月日で更なる高みに昇られていると思うと——正直に言えば気が重い。考えたくない。そう思わせる。

(……何が届く、だ。その程度で満足するのか。五条とは手が届く程度の技で満足するのか)

否、と言いたいところだが反論するすべが無い。

背筋を伸ばして迎撃の準備を終えたアイズを見据える。そんな彼女の美しい姿勢に思わず見惚れる。

至高の敵の姿に——本当に、馬鹿めと言いたくなる——微笑を湛えたいが戦影ウオーシャドに表情を表現するすべが無い。

開始の合図は無い。先に仕掛けたのはアイズ。彼女の間合いは広場全域にも及ぶ。

ただ一言を持つて全てが終わる。

【禍まがつ彼岸の花】

輝夜は両手をだらりと下げ、刀を無造作に落としながら夜空を見上げた。

雲が無いので星空がはつきりと見えていい景色だと思った。

手応えから結果は分かっている。今、空を覗かなければもう二度と拝めないと思った。

たった一閃。それで殆どの自由は奪われた。やはり【剣姫】は遥か高みにある冒険者だった。そして、そんな第一級冒険者と立ち合えたことは至上の誉である、と思えて満足することが出来た。

僅か二閃。一つは顔に斜めの傷をつけ、もう一つは利き腕を断ち切った。

任意の場所に斬撃を起こせる技だが超反応次第によつてはかすり傷で終わつてもおかしくなかった。ゆえにこの結果は輝夜の人生において充分な成果と言える。

(……殺す気で斬った、と思つたのだが……。どうやら手元が狂つてしまった。いやはや、何たる未熟……。なればこそ、この結果は至極当然か)

アイズの方は顔に痛みが走つた程度、と思つていたら腕がズルリと動き、感覚が唐突に喪失し、どうしてこうなつたと混乱が大きくなつた。

自分の意志で止められず、剣を握つた腕が無情に地面に落下していく様子を眺める事になつた。

「……………」

骨折の経験は何度もある。怪我自体は珍しくない。だが――

腕がここまで短くなったのは初めての経験だ。今正に血が噴き出した。どうしよう、どうやって止めたらいいの、と。

左腕はプルプルと震えて思えように動かせない。

すぐに止血しなければならぬのは分かっている。手足の欠損は仲間内でも見たことがあるし、対処方法も覚えているのに。

勝った筈なのに。どうしてこんなことになった。斬撃は全て躲した筈だ。いや、躲せなかつたから怪我を負った。当たり前的事じやないか。

アイズが人事不精に陥っている時、輝夜は立ち尽くしていた。

——そうではない。

圧倒的な力の違いにより輝夜は二〇を越える斬撃を打ち込まれ、身体のうちこちを塵に変えている最中だった。

最後に輝夜がアイズに顔を向けようとしたところで首が離れ、頭部は更に斜めにずれて消え去った。

後に残るのは砕けた魔石と持っていた刀のみ。

勝利者であるアイズは——最初だけ激しい出血だったが数分も経たずに落ち着いてきた——足腰に力が入らなくなつて地面に座り込む形となった。そして、すぐそばに転がる利き腕を拾い上げて声にならない嗚咽を漏らす。

輝夜が消滅するより少し前、赤い髪の人蜘蛛アラクネなったアリーゼ・ローヴェルとエルフの
リユー・リオンは少し人の居る場所で戦う事となった。だが、戦闘意欲があるのはア
リーゼの方でリユーは戸惑っていた。

戸惑いを覚えるのは想定内なのでアリーゼは構わず炎の付与魔法エンチャントを使い、武器を構え
た。

(……輝夜は持つて五分くらいだろうな)

「……なぜ、戦う必要があるのですか」

「それは私がモンスターだからよ。……それに限界なのよ、意識を保つので……」

複眼を動かしつつ自分の状態を改めて確認すると気を突けば昏倒しそうなほど眠い。
冷や汗や危機意識を感じるところから単なる睡眠とは違う気がしていた。

一番に魔石を摂取して生き残りをかけた代償ともいえる。

実際に戦う事は方便でしかない。その方が分かりやすいし簡単だからだ。

冒険者は本能的で自分が何をすべきか理解する生き物である、と常々思っていた。

こうして未リオンつ子と戦う事も必然だったのかもしれない。憎いわけではない。自殺願
望があるわけでもない。

皆を守りたいから戦う。

(……この場に限り正義は関係ない。単なるわがままだもんね)

そう思いながら剣を繰り出す。

リユーが一步引ききがるのなら無数の脚を使って追いかける。

横に逃げようとしても複眼が動きを捉える。

「リヴェリア様とお揃いの耳にすれば本気になってくれる？」

「ふざけるな！」

「……ざくんねん。私は本気よ。悪を許さない気持ちがあるなら、それは正しく正義よ。仲間思いの優しいエルフ。でも、私は悪いモンスターだから」

突進して距離を詰めよるとたまたまりユーの武器が腹にめり込む。距離感が狂って驚くものの構わず武器を振るう。

一定距離に居る時は役に立つ複眼も接近時はまだ慣れない。

(……互角ってわけじゃないわね。寧ろ、私の方が弱っている?)

思うように力が発揮できないのは理解した。

末っ子だから、というより身体の主導権を奪われつつあって本来の力が出せなくなってきたと考えた方が自然だ。

手合わせする名目で殺し合いをしようとしているのに力が出せないなんて、とアリーゼは自嘲する。武器を振るっても思うように力が入らない。それどころか、視界の一部が真っ赤で見えない。

目が霞む。音が聞こえにくい。様々な障害が襲ってくる。

「……アリーゼ？」

急に動きが鈍くなり、俯いたまま停止する。

少し経って顔を上げた彼女は酷く疲れが目立ち、苦笑していた。

猛烈な倦怠感。身体の半分近くの自由を奪われる喪失感。剣を持つ手が震える。

覚悟を決めて来たのに酷く格好の悪い結果に情けなさを感じた。

「肝心な時に私って駄目ね……。無理矢理にでも虚勢を張るのが私の持ち味なのに」

(リオンになら殺されてもいい。本来、そんなことを考えては駄目なんでしょうね。し

かも二度目だし。……あくあ、私って駄目な団長だわ。闇落ちしたリオンに更なる追い

打ちを強いるだなんて……)

弱音を吐いていると離れた場所から大きな破壊音が聞こえた。

強烈な殺意の気配からアイズの仕業だと感じ取り、派手ねと他人事のような感想を抱

いた。

戦意を失った為、戦闘はここで終了。

最期の戦いに臨んでみたもののアリーゼとしてはリユーがとても愛おしく、このまま

続ける意欲を欠いた。

(降参、だけれど……。これからどうしようっか……)

「本当に……こんなところで死にそうになるなんて……」

馬鹿ね、と小さく呟きつつ彼女に近づき持っていた小太刀を回収する。

ここでアリーゼは違和感を覚えた。

どうしてリユーに向かって歩いてたのか。あまりにも自然体で気付くのが遅れた。

彼女の武器を取り上げるより自分の武器を拾えばいい。どうしてそんなことをしたのか。

それ以上に声が出ない。いや、出しているつもりになっていた。

(……あつ、駄目……完全に制御を奪い取られ……)

気遣うつもりで近づいたわけではない。モンスターは敵である冒険者を殺す為に生み出されている。だから、アリーゼの抵抗虚しく凶刃が振るわれる。

意識を喪失しかけて弱り切ったリユーにとってアリーゼの攻撃は贖罪に等しい。それゆえに何の抵抗も示す気にならなかった。なにより彼女自身がそれを望んでしまった。

急激な脱力に抗えず、後はただ倒れるのみ。

大切な友人の顔が走馬灯のように思い出される。特にベル・クラネルとシル・フローヴァアとの出会いを。

(生きて下さい、リユーさん)

(まだそちらに行つては駄目よ、リユー)

彼らが言いそうな言葉が幻聴として木霊する。けれども少し眠りたいのも事実だった。

かつての仲間達との邂逅がリユーの生きる意味を持つて行つてしまった。いや、安心してしまった。聞きたい言葉も貰えた。満足してしまった。

最後の戦闘もアリーゼは止めてくれた。だからもう何も言う事は無い。

痛みは無く、首を撥ねられた後、地面に落ちて転がる時もその微笑が崩れる事は無かった。

一拍遅れて頭部を失つた身体から血が噴き出し、その勢いで倒れていく。

末っ子の惨状をアリーゼは無感動のまま見つめていた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

誰が見ても即死。それにもかかわらずアリーゼは全く動かない。既に意識はモンスターに乗っ取られている筈だ。であれば確実な止めを刺すべく行動してもおかしくない。

離れた位置にいる住民や冒険者も凶行を目撃している筈なのに誰も声を上げない。それは刹那の行動で彼らが動き出すのもう少し先だからか。

時が止まったような空間において鼻歌が唐突にアリーゼの耳に届く。この現場にお

いて酷く場違いなものに彼女が気が付くまで更に何秒か時間を要した。

気が付けば近くに第三者が居た。けれど身体は視線以外に動かせない。

謎の闖入者は転がるリユートの生首を拾い上げて興味深そうに観察し始めた。

「切断間もない内はまだ反応するんですね〜」

間延びした声を出しつつリユートの口を開けて舌を引つ張ったりして反応を確かめる。

冒険者の殺害はギルドの規定で禁止されている。例えば「フレイヤ・ファミリア」であっても。

規制をすり抜けた殺人事件が無いとは言わない。いくら『迷宮都市』だからといって何でも許されるわけではない。

「本当は身体には立ったままでいてほしかったけれど……。仕方ないか……」

不満を示しつつアリーの武器を取り上げ、リユートの頭と身体を引きずっていく。完全に持ち去るわけではなく、モンスターから引き離すだけの行動だった。

茫然自失となっている人蜘蛛アラクネを無視するのは人間の少女。二大回復師の一角『ハイズ・ベルベット』という。

偶々通りかかったわけではなく、本拠ホームに戻ってきたオツタル達と女神フレイヤの意向で様子見を仰せつかった。その過程で興味深い結果が目の前で見られて興味が勝っている最中だった。

「大抵、首をはねられたら即死するもんなんですが……。生きようとする意志があれば……何秒、一分？ 正確な時間は分かりませんが生存し続けることが出来るそうです。貴女の場合はどれだけ保つんでしょうか。……最期まで見守るわけにはいかないけれどとても興味がありません」

不敵な笑みを浮かべるヘイズは「フレイヤ・ファミリア」の団員でレベル4の治癒師である。

本人曰く、完全に死んでいなければ大抵の怪我は治せると豪語する。

「……その前に」

持つてきていた長杖ロッドを振りかぶり、人蜘蛛アラクネの顎を強打して昏倒させる。近くに居るだけで邪魔な存在が完全に動きを止めていたので何の抵抗もなかった事に鼻歌を交えつつ満足した。

邪魔者アリーゼを沈黙させた後、リユウの身体の位置を調整し、首の切断を合わせる。

失敗したところで手遅れだったと報告するだけだ。もちろん、治癒師ヒーラーとしての仕事に手は抜かない。これは女神フレイヤの指示があればこそ。そうでなければ興味があつたとしても赤の他人を癒す道理は無い。

ヘイズは聖女ではない。傷ついた者を誰彼構わず救済しようなどと殊勝な心掛けは持ち合わせていない。

「我が名は黄金。不朽を誓いし女神の片腕。焼かれること三度、貫かれること永久に。炎槍の獄、しかして光輝は生まれ死を殺す。祝え、祝え、祝え。我が身は黄金。蘇る光のもと、果てなき争乱をここに」

邪魔する者が居ないためか、鼻歌交じりで詠唱が紡がれる。

もちろん、呑気に時間を掛ければ本当の意味で手遅れになつてしまう。しかし、ヘイズにとつて死は身近だ。慌てる様子を表さない。

毎日のように眷族達が殺し合つている風景の中で暮らして来たのだから、リユーのような状態にも然程驚きはない。——さすがに首の切断は一度あるかないかだが。

詠唱の終盤、彼女の足元に現れたのは広場を余裕で覆う金色の魔法円。

「ゼオ・グルヴェイグ」

個人に使うには勿体ない超広域回復魔法。

威力を高めるために少しずつ範囲を狭めてから発動した。少し離れた位置に居る無関係の者まで癒す事になるが些細な誤差として無視する。

この魔法は四肢を欠損しても部位が存在している限り、傷口に接合するだけで黄金の魔力光が癒してくれる。その治癒能力は炭化した肉体も元に戻すほど。

ヘイズの興味は見慣れた怪我ではなく、リユーの首元だ。完全に死んでしまえばいかに強力な治癒魔法として意味をなさない。

(……エルフの方は身体の制御を取り戻すのに時間がかかりそうですね。少し時間が経ちましたから……)

リユーは女神フレイヤの『お気に入り』の一人なのは「フレイヤ・ファミリア」の上層部にとつて周知の事実で、ヘイズも当然承知していた。

女神の寵愛を他派閥が受ける事に多少の嫉妬を覚えるものの完全に排除するには至らない。それでは女神の神意に背く事になる。だからアイテムや魔法を使う事に後悔はしていない。

ヘイズが現場に残って少し経った頃、治安維持の冒険者がやってきた。

戦闘が始まってからまだ一時間もかかっていない。先行していた「ロキ・ファミリア」はアイズを回収してとつくに撤退済み。残っているのは監視要員の数名くらい。

「……ヘイズ・ベルベット。現場の説明をしてくれるんだろうな?」

僅かな恐れを抱きつつやってきたのは「ガネーシャ・ファミリア」の団長シャクティ・ヴァルマ。

ヘイズとしては他派閥に説明するのは億劫なので無視したいところだが、女神の意向としては可能な限り言う事を聞くように、とのことだった。

とはいえ、戦闘のあらましを正確に言えばいいのか、見たままの結果だけを報告すればいいのか。

「ケガ人の治療をしていただけですよ。あと、このモンスターをどうすればいいのか迷っていました」

「そいつは我々が回収する。……それとそのエルフは……無事なのか？」

「どうなんでしょう。意識が戻らない事には分かりませんね。さっきまで首と胴体が綺麗に離れていたのだから」

何でもない事のように言われシャクティは思わず唖った。

シャクティから見てもヘイズが面白半分で凶行に走るとは思っていないが首の切断は流石に驚いた。

すぐさま駆け寄りリユウの様子を窺うと外套の首辺りのところだけ血にまみれていた。それ以外は目立った外傷の痕は無い。顔色は多少悪いようだったが顔と身体双方が動いていた。

「私も忙しいんで、失礼していいですか？」

「……ああ。それから、友人を助けていただき感謝する」

「私にとつちや仕事の一つですよ。ではでは、失礼します」

飄々とした態度でヘイズは手を振りながら去っていった。

残ったシャクティ達はリユウの容態を確認した後、一旦「ガネーシャ・ファミリア」の本拠に連れて行くことにした。

アルフィアはまだ予感があったから納得するとしてもメーテリアは想定外だった。今日明日の滞在を終えたらアルフィアだけ「フレイヤ・ファミリア」に向かう予定だ。即座に処分されるわけではないとはいえ気にしないであらうわけがない。

「ギルドの依頼もありますし、生活費も稼がなくてははいけません」
リルカの肩口を包帯に包まれているが傷自体は殆ど治っている。

彼女がどうしてケガをしたのかといえばアルフィアが凶悪なモンスターに変貌して襲い掛かったからだ。強靱な自制心を咄嗟に発揮したものの怪我を負わせる結果になった。

あの時、あの瞬間に猛烈な悪意が働いたのは事実だ。

「……それでモンスター君たちはずっとこヘステイア・ファミリアこで暮らすのかい？」

「二日後には「フレイヤ・ファミリア」に厄介になる。リアはずっと残っていいんだが……」

「いえいえ、姉さんを一人にはさせませんよ。ザルド君と三人で……」

アルフィアからすればメーテリアとベルを一緒にさせたかった。

妹は少年より姉を優先したのは既に命を終えた者だという意識かららしい。その気持ちは分からないでもない、と姉として反論も出てこなかった。

他のモンスターについては「ガネーシャ・ファミリア」に一任しているのでベルは伺

い知れない。

最期の問題は今回の騒動における被害者への補償だ。

二千万ヴァリスをそのまま補填に当てる予定になっているが、他に自分達に出来る事はないかと、ベルは考えていた。

前回は『異端児』の騒動で色んな方面に迷惑をかけた。今回は「フレイヤ・ファミア」の手によるものなのでベルは被害者ではあるけれど加害者と呼ぶには無理がある。色々考える事があるが二日は気晴らしにしてもいいのでは、とヘステイアが言った。

「ボクから言えることは災難だったね、くらいだよ」

「そうですよ、ベル様。あの「フレイヤ・ファミア」と騒動を起こしてただで済んだんですから。リリはずっと生きた心地がしませんでしたが……」

「……ごめんね、リリを先に行かせて」

オツタルは大人しいからいいとして陰険眼鏡で有名なヘディン・セルランドと一緒に空間に居るのはリリルカの人生において死刑宣告に匹敵するほどだったという。

機嫌を損ねたら雷魔法が飛んでくる。実際に愚痴を言いつつモンスターを即座に消滅せしめた回数は数える事を諦めさせるほど。たまにオツタルに誤射する事もあったとか。

「ヘスティア・ファミリア」は誰も欠けなかった。だから、安心していい、わけがない。多くの犠牲を生んで自分は関係ないなどといえるのか、とベルは自問する。

派閥間の戦闘において犠牲が出来るのは致し方ない。死者を出さずに戦闘を終える事はとても難しい。

今回の初遠征にしても何人もの冒険者の死と向き合った。それがダンジョンに潜るということ。

思索の海に漂っているとアルフィアに抱きしめられた。彼女の大きな胸の感触で意識が現実に戻る。

「今回の責任は私が取らせる。ベル・クラネルは金の用意だけしておけ。……お前に何もするなといっても無駄だろうからな」

「お兄ちゃんは優しい英雄なんです。武骨で偉そうな態度はまだまだ似合わないと思う」

そう言ったメーテリアにベルを押し付けて食事の手をつける。

モンスターではあるが大人の女性に挟まれているベルに対し、リリルカと狐人ルナールのサンジョウノ・春姫は顔を赤くして慌て出した。

普段はヘスティアもベルを独占しようと声を上げるところだが、アルフィア達の場合だけ大人しく見守っていた。

嘘を見抜く神々から見ればアルフィアとメーテリアの二人はリルルカ達とは毛色が違っていた。それを口に出すべきか迷い、結局飲み込むことにした。

積極的な接触を図っているがベルの扱いはとても丁寧だった。はた目からそれがどういう風に見えるのかヘスティアは理解していた。

まさか、という思いがある。それと二人からベルの扱いについて神ヘスティアに任せると告げられた。これはアルフィアではなくメーテリアから強く言われた事だ。

その代わりとしてほんの数日の間、ベルを独占する事に口出ししなくてもいい、とこちらはアルフィアから言われた。

(ウイーネ君の例があるからモンスターである二人の要望を聞くのは構わないんだけど……。あまり子ども扱いするのもどうかと思うよ)

アルフィアとメーテリアに挟まれるベル・クラネルの様子を見て、そんなことを思った。

二人の母に可愛がられる少年。もし、時と場所が違えば――
ヘスティアは空想を止めて現実に意識を傾ける。

ベルと違い、二人の女性はそんな甘い生活が起こりえないと理解している。

別れの時まで夢を見ようと無理をしている。二人の顔を見ればそれが分かっ
てしま
う。

心の底から笑っていない。痛々しいとさえ言える雰囲気。水を差すような無粋な真似がヘステイアには出来よう筈が無かった。

16 懺悔

過酷な冒険を終えたベル・クラネルは二日間という約束でアルフィア・ストラディと
メーテリアストラディというモンスターの姿として復活した双子の姉妹と共に
『迷宮都市』^{オラリオ}を散策する事になった。

メーテリアが竜女^{ヴイヴル}なのは分かったけれどアルフィアの種族が今も不明だ。だから暫
定的に竜^{ドラゴン}人と呼称している。

凶暴化すると身体が大きくなり、顔つきが人間からモンスターよりに変化し、尻尾は
より太くなり側頭部から角が伸びて背中から翼も生えてくる。これは自分の意志では
出来ないらしい。

二人を案内する上で一応、身体を覆い隠す外套を纏ってもらった。充分にオラリオを
騒がせたので無駄かもしれない、と思いつつ。

街中の各所に「ガネーシャ・ファミリア」の団員が配置され、必要胃所の混乱が起き
ないように配慮されているし、ベルもその辺りを聞かされている。

まず最初に二人を連れて行ったのは女神ヘスティアが働いている『じゃが丸くん』の
店だ。アルフィアは既に知っているがメーテリアは初めて訪れる。

「いらつしやい。新味も取り揃えているから好きなの選んでおくれよ。一つ三〇ヴアリスだ」

「あれ、神様。滋養強壮にいいようです黒いジャガ丸くん売れたんですね」

「ああ、買って行つたのは大柄の男だったよ」

どうなつたかは怖くて聞けなかつたし、ヘステイアも詳しく説明する気が無かつた。

少なくともお気の毒に、という言葉が二人の脳裏に浮かんだ。

いくつか適当に見繕い、食べ歩きつつ次の店に向かつた。

通りを歩いているだけでベルは様々な人物に声を掛けられる。先日、騒動を起こしたばかりだというのには今は応援の声大きい。中にはまだ恨み言を言ってくる輩も居るけれど。

アルフィア達はしばらくベルに任せて店巡りを続けた。

(……『二つ名』で呼ばれることが多いな)

(ベルばかり目立つても仕方がないわ。仲間の団員達は何をしているのかしら?)

【ヘステイア・ファミリア】の団員を全員引き連れると人ごみの多い場所では混雑してしまう。よつて普段は少人数で移動する事が多い。揃うのはダンジョンに挑む時くらい、と説明した。

一日目の最後に街の被害個所を巡る。大勢の人員が修復作業に当たっており、思つて

団長アリーゼ・ローヴェルと副団長ゴジョウノ・輝夜を失ったとはいえ悲壮感は無さそうだった。

「二人がどのような最期を迎えようと天界で温かく迎えられたら、それでいいじゃねーか。元死人だし。元が取れただけだ」

檻の中なのに悠々自適の生活を送るライラがにこやかに言った。

ベルがアリーゼ達が死んだことを伝えられたのはダンジョンから戻った後、夜間になつてから聞かされた。

面識のある人物の最期くらいは知っておいた方がいいという団長シャクティ・ヴァルマの配慮からだ。

アリーゼと戦う事になったリユー・リオンは「ガネーシャ・ファミリア」の施設で『リハビリ』に勤しんでいた。

意識を取り戻した時は多少、暴れたが今は大人しくしている。

首の切断による後遺症なのか手足の痺れが残り、言葉もうまく喋れなかった。知能の低下が見られなかったのが唯一の救いか。

治療に当たった人物によれば完治には数週間かかるらしい。

レベル4の「ステイタス」を持っているのでその程度で済んでいる、とも。

「リオンが完全に復活するまでアタシらも大人しくしている事にしたよ」

いずれ自由に歩ける日が来ると期待して。

アリーゼ達ほど思い詰めていないし、モンスターとしての生活も興味がある、など。前向きな眷族が多くてベルは驚いた。

それと黒い竜のニユクスについて気になったので「ガネーシャ・ファミリア」の団員に尋ねてみた。

ほぼ日中は寝ており、非常に大人しい。手間が掛からないので世話が一番簡単なモンスターだそうだ。

本ならりユーの様子を見たかったが無様な姿を見せるわけにはいかない、と本人が強く拒んだために実現しなかった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

夕方にギルドに向かう予定にしていたがアルフィア達は「フレイヤ・ファミリア」に向かう用意をする為に別行動にしようとして提案してきた。

本なら姉妹の思い出の場所だという教会に行きたかったが「ヘスティア・ファミリア」と「アポロン・ファミリア」の抗争で完全粉砕されて今は更地になっていた。

そのことを伝えるとアルフィアは目に見えて怒りだし、メーテリアが宥めた。

よって予定が大幅に狂い、午後はもはや行きたいところが無くなってしまった。

「ベル・クラネル。今回の事をあまり気負うな。私がしっかりと釘を刺しておく」

「お手柔らかに……」

「それは保証できません」

アルフィアは不敵な笑みを浮かべつつメーテリアを残して自分の作業に向かった。

少しの間、ベルを見つめていたメーテリアも姉についていくことを決めた。彼に伝えたいことはもはや無い、と。

たくさんの仲間や知り合いに囲まれて幸せそうなベルを見て羨ましいと思いつつ、自分の手から巣立った少年は思っていたほど大きくなっていた。

「……ベル。貴方は自慢の息子です」

「ありがとうございます」

いつものお兄ちゃんから息子になった事で少しは認められたのかな、という程度の認識で受け止めた。

微笑みを湛える彼女はどこか懐かしさを感じさせ、大人の女性という印象が強かった。

「最後に私の事をお母さんって呼んでくれる？」

「お母さん」

「……言われたから言っただけみたいな感じでヤダな。もつと実の親だと思っただけで呼んでほしい」

「い、いめんさい」

口を尖らせて不機嫌になるメーテリアを少年は何とか宥めた。

ベル自身は物心がついた時には育ての親たる祖父しか知らない。本当の親を知ったからって今更感動するものだろうか、と疑問を覚える。

実際に会えたら——嬉しいのかもしれない。

「実際に会えたら嬉しい」

「えっ?」

「幼い息子を残して死んでしまった私がこうして復活出来て成長した息子に会えたんですもの」

「……それは僕の事、ですか?」

「何の因果か……。ベルは冒険者になった事を後悔している? もし、そうなら今すぐ辞めてもいいのよ。親からそんなふうに育てられたわけではないでしょう?」

子供っぽさが抜けた真剣なメーテリアの言葉が何故だが重く胸に突き刺さる。

もしかして、という思いはあるがベルはまだ実感が伴わず、半信半疑のまま。

同じ名前の別人の線を選ぶほうとして自分ばかりと間違っているのだろうか、とも。

「僕はお祖父ちゃんが死んだから他にやりたい事もなくて……。それで……」

「あの爺が簡単にくたばる訳ないでしょう。ヘラに追われて隠居しているだけよ」

「ええっ!？」

「……でもそうね。家に誰も居なくなってしまったのね。……そして、新しい家を手に入れて今がある」

「……お母さん?」

(まさかそんな……。この人が? 竜女ツイヅルが僕の……。いや、竜女ツイヅルじゃなくて……)

「……今、大変失礼なこと考えなかつた? 私は元々人間ヒューマンよ。そこは間違えないで。ついでに姉さんヒューマンも人間だから」

「は、はい」

メーテリアははつきりと実の母とは言わず、意味ありげな言葉でベルとの会話を楽しんだ。——伝えたいことは無いと思つていたのに結構長く話す事になつてしまい苦笑する。

正しくても間違つていてもいい。だが、ベルは困惑しつ放しだった。

何が本当なのか、嘘なのか。

お母さんと呼んでもピンとこない。それは母親の事を殆ど知らないからだ。

白い髪だけを頼りにする事も出来ない。祖父は死んだのか行方不明なのかも今ははつきりと明言できない。

でも、いつかは真相が知りたい。

「少なくともベルは親の影響を受けずにここまで来た。自分の力……、頼れる仲間達の協力があつたのかもしれないけれど。それは誇つていいわ」

「ありがとうございます」

「私に似ていたら万年駆け出し冒険者のまま人生を終えても不思議じゃないわ。だからきつと、私の息子であるベルとベル・クラネルは似ても似つかない人物なのよ」

「メーテリアさん……。お母さんの知るベルはどんな子供なんですか？」

「病気一つしない元気な赤ちゃんよ。私はその子しか知らない。成長を見守れなかったから」

それからしばし沈黙し、ベルは今だけは彼女の息子でいよう、かと思つたがやめた。

本物かどうか確証も無いのに名乗るのは失礼な気がしたから。

それが例え嘘でもいいと言われてもベル自身は納得できない。きつと辛い別れになる。

「お母さん、僕はしつかり冒険しています。それはこれからも続けると思っています」

「黒竜退治という重荷を背負わされても同じことを言うの？」

「はっ」

何の迷いもなく答えたベルにメーテリアは思わず息をのむ。

真剣である事は伝わった。この子は色々察したからお母さんと言つてくれた。洞

察力が無いわけではない。単に自信が持てないだけ。

この辺りは年相応なのかしら、と今後の成長が楽しみでもあり、残念な点でもある。

「私としては長生きしてほしい。みつともなくても生き足掻いてほしい」

「はい」

「そんな息子のベルにお母さんから依頼を出します」

「はい」

「いずれ戦う事になる黒竜……『黒竜』^{テイファート}を見事に討ち果たして見せなさい。ちなみにレベル9でも歯が立たなかつたから覚悟するように」

「は……いい？ レベル9でも駄目？」

「駄目というか次元が違ったらしいわ。それだけ生物界の頂点である竜種は強大ということよ。まずは既存の竜種から色々と情報を得る事ね。もちろん一人で倒せとは言わないわ」

とはいえ今から探索を頑張っても黒竜戦にはまだまだ臨めないだろう。それくらいはベルにも理解できる。

本気で英雄を目指す上で避けては通れない強大なモンスター。

ベル以外にも強くなろうと必死になっている人達がいる。自分はまだ第二級冒険者。もつと上を目指さなければならない。

達を敵に回しているよね)

「ヘスティア・ファミリア」の女性陣でも出来ない羨ましき。何となく察しているヘスティアも無下に断れないところが悩ましい。

たった一日だけ、とはいえ——ベルというよりは——アルフィア達にこそ許可を出したかった。でも、全裸は駄目。不健全にしか見えない。

——で、結局見張りとしてリルルカと命がベルの部屋の片隅で就寝する事で落ち着いた。

その後、大きな騒動は無く朝を迎えるとベッドから叩き落されたベルの姿があった。アルフィア達は互いに抱き合い幸せそうな寝顔を晒しているのが印象的だった、とりりルカ達は主神に報告した。あと、寝相の悪さを危惧していたが部屋が損壊する事態にならなかつた事に一堂胸を撫でおろした事はベルに内緒である。

次の日、別れの時が来た。もう二度と会えなくなるわけではない筈だが——何故だがもう会う事が無い気がした。言葉にするのは難しいが予感めいたものとベルは思った。

「そういえば、ベル」

「はい」

「お前、ギルドに寄るだろう？ 早めに要件を済ませて本拠ホームに一日引きこもれ」

アルフィアの言葉が理解できず、つい聞き返した。

ひと騒動起こすから被害を被りたくなかったら退避しろ、という事らしい。それだけで背筋が冷たくなってきた。

興味本位で見物するのは構わないが身の安全は保障できかねる、と玲瓏たる声色で告げられると自然と背筋がまつすぐになるのが不思議だった。それは自分だけではなく仲間達も姿勢が良くなっていた。

「好奇心は猫をも殺す。そういう諺ことわざがあるらしいぞ」

「ならば身を隠して見物すればいいのでは？」

とはヤマト・命みことの言葉だった。

騒動が起きる事が確実なら隠れている方が危なそう、と呟いた。——気が付かれな
い、という意味で。

ベルにとつての頼れる兄貴分たる赤い髪のヴェルフ・クロツゾは断然面白い事には首を突っ込むべきだと主張した。

リリルカ・アーデは可能な限り安全圏で大人しくしたい派だ。それと面倒ごとはたくさん、と神ヘステイアと同意見だった。

ちなみに狐人ルナールのサンジヨウノ・春姫はよく理解できていなかった為に小首を傾げるのみ。

「謝罪の作法を教えてやろう」

姉の仕草を真似てメーテリアが威厳たつぷりに言った。

真似されたアルフィアは尻尾を器用に動かして妹の頭を軽く叩く。はた

一体何が起るのか、詳細を告げずに荷物をまとめたアルフィア達は早めに——「ハスティア・ファミリア」の——本拠ホームから出た。

もつとたくさん言葉を交わせばよかった、という気持ちが湧いたのは彼女達の姿が見えなくなつた後だ。

今更追いかけても邪魔になるだけだし、ベルには大切な仲間が居る。それを無視するわけにはいかない。

「何にしてもリリリ達は普段通りに過ぐすだけです」

「団長のベル君は……一人でギルドに向かうのかい？」

「手続きと新たな依頼が無いか聞くだけですから」

そんな事を言いながらベルは騒動をたくさん引き連れてくる。少年一人では心許ないとベル以外が思っている。

念のためにリリルカと命が付き添いとして向かう事になった。

神様の提案に対して大袈裟だと思つているのはベルだけ。



騒動が起きるらしいことを言われているのに外出するのは莫迦じゃないのか、とりり

ルカは思いつつもギルドに向かっている。

目的は二千万ヴァリスの使い道について、とベルから聞いていた。

直接下ろすには大金過ぎる。手続きだけ任せれば書類一枚に署名するだけで終わる。

そんな事を思いながら冒険者ギルドに向かうと職員総出で荷物の搬出作業をしていた。どうやら外で何かしらの催しをする為の会場造りのようだ。それだけでリルカは嫌な予感を感じた。

職員に声を掛けずに中に入りましょう、とベルを強引に引つ張り受付に並ぶ。人以上に混雑しているかと思いきや意外と空いていた。同伴していた命みことには外で異常が無いが見張ってもらおう。特に何も無ければ帰り際に合流する約束を伝えておいた。

早速、受付でベルのアドバイザーたるハーフエルフのエイナ・チュールの呼び出しを依頼すると彼女はすぐに現れた。

「おはようございます、エイナさん」

「おはよう、ベル君。今日は「フレイヤ・ファミリア」の報酬の件だったよね？」

事前に事情を伝えあるので話があつさりと進んだ。

巨大な魔石の買い取りと運搬という個人取引について「フレイヤ・ファミリア」の証文を持参し、エイナに渡す。それと同時に報酬を地上で被害に遭われた人々への補填費用とする契約書を貰いに来た。

「どういう方法かは分かりませんが、確かに神の送還現象のような事態が発生し、オラリオには大きな穴が開きました。その影響で家屋の一部が壊れたのもまた事実……」

死傷者こそ出なかったが重症者が多数。それらは既に「フレイヤ・ファミリア」の治療師達^{ヒール}によって治療済み。

ベルが支払うのは被害者への見舞金だ。見積書によれば報酬の七割ほど。けれども全額寄付する事にしたし、リルルカも不本意ながら同意した。

「フレイヤ・ファミリア」相手に文句を言う気になれないし、幾許かの借りが出来るのであれば安いものだ判断できる。

「ところでギルドの外で何が始まるんですか？」

「ああ、あれはフレイヤ様が被害者に対して謝罪するらしいのよ。公開会見場つてやつね」

普段は『摩天楼^{パベル}』と自分の本拠^{ホーム}から出てこない女神で、民衆に姿を見せる事は殆ど無かった。それが今回はどんな心変わりをしたのか、姿を見せる事を発表した。

彼女が来るだけでも大騒ぎになるのでギルドの中では対応できないと判断し、急遽会場の設置の為に今の騒ぎになった。もちろん、女神フレイヤの姿を見たいだけの野次馬も想定している。

「それにこれは「フレイヤ・ファミリア」から提案されたの。それだけでも異常事態でね」

二日前の通達から今日まで不眠不休で働く者が多数現れる始末。ベルも多少の覚悟はしていたが事態は想像よりもずっと大きく驚いてしまった。

その謝罪の中にはベルの補填費用も入っているわけだがエイナはあえて触れなかった。

「とにかくベル君は書類にサインだけしてすぐ帰った方がいいわ。ここは色んな意味で戦場よ。興味本位で女神を見物しようとしないう方が身の為よ」

と、いつも親身になって話しを聞いてくれるエイナの言葉はとても重く響いた。

それでもベルの中では少なからず自分もかわっているので多少の荒事は覚悟していた、つもりだったが——今更になって多くの民衆の力に気圧けおされてしまった。

(……ここだけの話し、もし興味本位で見物するなら少し離れた建物の上からにしときなさい。近くで見ようなんて思っちゃダメ)

(……は、はい)

と、顔を近づけて小声で忠告するエイナにベルはただただ素直に従うのみ。

彼女はベルの事をよく理解していた。付き合い自体は半年足らずと短いのだが、様々な騒動を引き起こしつつ生きて帰って元気な姿を見るうちに冒険者『ベル・クラネル』のファンになってしまった。普段は彼を弟のように可愛がるところから同僚からも『弟君』の愛称でベルの事を報告してくる。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

書類に書く事柄は本当に名前だけだった。ただし、ベル・クラネルの個人名は伏せた方がいいから『二つ名』の方でサインするように、と。

謝罪する側である【フレイヤ・ファミリア】に抗議する民衆は実際のところそれほど居ないかもしれないが弱小にしてここ最近騒ぎばかり起こす【ヘスティア・ファミリア】の方が圧倒的に悪者度合いが高い。

もし、民衆が怒りを覚えたら間違いないくベルの風当たりは尋常ではなく悪いものとなる。リリル力達も身の危険が大きくなる。そう、強い警告をエイナは指摘した。

「ただでさえ弱小にして貧乏な【ファミリア】が万年金欠に陥ってしまったら今後の活動も難しくなるわよ」

「……はい」

「それに今回の騒動って巻き込まれただけでしょう？　ベル君がというっかりでもオラリオに穴なんかどうやったたら開けられるの？　魔法？　天から光りの柱を落とすような技つて使えたっけ？　前回だって相手の攻撃だったでしょう？」

ん〜と探るような視線をベルに送ると彼は始終苦笑するのみだった。

きちんと説明したいのだけれどエイナには見透かされている為に言い訳が出来そうにない。かといってどう説明すればいいのかわからない。特にオラリオに光りの柱を

落とすという下りは想像できなかったからだ。——必殺の一つで下から上に向かつて
グランド・ベルによるフエア・ホルト

大 炎 雷 を放つなら頑張れば出来そうな気がした。

エイナは必要書類にギルドの大きな判を押し、控えをベルに渡した。手続きはこれで終了だ。それとは別にリリルカはドロップ品の換金もしようと別の受付に向かつて手続きをしていた。こちらは見舞金にする気は無い、と本人が強く主張した。

「それと君のところにいるモンスターについても【フレイヤ・ファミア】と【ガネーシャ・ファミア】の連名で事情は聴いたけど、相変わらず大変な事態を……。ああいや、ベル君に言っても仕方がない事は分かっているんだけど……」
「すみません。いつも迷惑ばかりかけて」

「……それでも君が生きて戻ってきてくれると私はとても嬉しいわ。それと有名になるのは良いけれど悪い目立ち方は感心しません」

「はい。本当にごめんなさい」

そう謝罪するも大きな声は出さないように、とエイナから忠告された。

手続きが終わった以上、今日は世間話しも早めに切り上げて帰りなさい、と言われた。本当はベルと二人きりでダンジョン談議するのは彼女にとつて秘かな楽しみであった。それを犠牲にしても今日の会見にはベルに参加してほしくなかった。

おそらく尋常ではない大騒動になる。それだけ女神フレイヤが人々の前に現れると

いう情報は大きい。

(……あ、そうだ。ベル君にリヴェリア様の事……。駄目だ、今日は諦めよう)

【ロキ・ファミリア】の幹部にして王族ハイエルフのリヴェリア・リヨス・アールヴの緊急搬送もまた大きな問題だった。それもベルに背負われて運ばれてきたのは誰の目にも明らかだった。一体何があつたのか、その後の経過も秘匿されてしまっている。

なによりエイナの母はリヴェリアとは親友の間柄。いつも事ある毎に気にかけてくれる彼女リヴェリアの事を心配しない筈が無かつた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

手続きよりエイナとの何気ない会話の方に時間を取られた気がした。

忠告通り早めに帰るべきなのだが責任感が強い男の子であるベルは直接民衆の前に立つ事は出来ないまでも見届ける義務があるような気がして手頃な建物の上に登った。

壁伝い昇るのではなく、小人族バルウムのリリルカを抱っこして跳躍する。半年前では考えられない身体能力だ。

「ベル様。あまり近い位置取りは危険かと。監視のための要因がそこかしこに配置されているところから、あれらも「フレイヤ・ファミリア」なんでしょう」

ギルドの建物の前は比較的広い通りになっている。現在、そこは見物人が集まり、もう少しすれば通行が困難なほどに発展する。

それと何があっても現場に参加しないでください、とりりルカは強めに警告した。

——一応、念のために戦いませんよね、とも尋ねた。

ベルは強い相手と戦いたい『戦闘狂』バトル・ジャンキーではない。巻き込まれる騒動で仕方なく強敵と相まみえているだけだ。

こうして野次馬の一員になりつつ現場に——と思ったところでやはりもつと離れた方がいとりりルカは進言する。

こういう時、何かの拍子で人前に出てしまうのが彼の悪い——いや、騒動の開始だった。

「……信用無くてごめん」

「分かっているのですしたら文句は言いません。……どの道、建物の都合で見下ろせる場所も少ないですし」

周りに顔を向ければ一部の建物の補修作業の様子が窺えた。場所が悪ければギルド本部も被害に遭っていたかもしれない。そう思うとベルは自分のしたことの重大さに押し潰されそうになる。

今回は偶々たまたま無事だった。それが何度も起きてそのたびに誰も被害に遭わないなんて都合のいい話などあるわけがない。

そんな物思いに耽っていると全身を外套で覆い隠した不審者がベル達の下に音もな

くやってきた。

思わず短刀ナイフを引き抜き、リリルカを庇いつつ迎撃体制に移る。

「戦う気は無い。驚かせて済まない」

その声はとても聞き覚えがあるものだった。まずリリルカが激しく動揺した。しかもこんな場所に単身で現れる様な人物ではない、と。

フードを捲れば金髪的美男子の顔が現われる。

その人物は「ロキ・ファミリア」の団長にして小人族バルウムのフイム・ディムナだった。

「今日の為に仕事を早く片付けてね。僕も見物に来たんだよ。君たちに会いに来たわけじゃないから」

「……フイム様」

「もし、叶うならリリルカ・アーデと二人きりにしてくれとありがたいかな」

勧誘というわけではなく秘密のデートとして、と小声で「勇者」ブレイバーは言った。だが、それを真に受けると女戦士アマゾネスのティオネ・ヒリュテの怒りを買うのでベルもすぐには返答出来なかつた。

彼の言葉にリリルカは少し恥じらいを見せたものの立場違いに混乱する。少なくともフイムとリリルカはまだまだ距離が縮まらない関係だ。少しずつ話しを交わす程度。付き合いはもう少し先だと予想している。

日がある程度昇り、昼前にギルド職員から重大発表がある旨を拡声の道具にて通達する。

身を潜めるベル達は気分は暗殺者みたい、と揶揄しつつ事態を見守った。

女神フレイヤの姿はヘステイアの共として向かったパーティで見掛けたことがある。

銀色の長い髪。銀色の瞳。白皙の肌。ヘステイアやニユクス 幼神とは違い成人女性と遜色ない長身。

この世の者とは思えない美貌。そして、男女問わず魅了する『超越存在』——

その当人は堂々と大通りから数名の眷族を引き連れてやってきた。場の混乱を考えて頭部は薄絹で覆われていたが間違いなく女神フレイヤだと離れた位置に居るベル達も理解できた。

神々は見た目だけで一般人と違うと思われる何かがある。だから、見た目が幼いヘステイアでも彼女が神であると誰もが理解してしまう。そんな不思議なことが起きる。

護衛についているのは都市最強と誉れ高い猪人のオツタル。ホアズ それともう一人は全身を外套で包んでいるが太くて長い尻尾が覗いている所からアルフィア・ストラディである事が窺えた。

ダンジョンに居る時に身に着けていた粗末な服装ではなく「フレイヤ・ファミリア」で支給されたのか豪華なドレスが僅かに覗いていた。

これから始まるのは地上の混乱を起こした事に対する女神の謝罪である。

ある意味ではベルに対してお詫びを兼ねていた。その事は一般人には伏せられているので事情を知る者は触接交渉したベル達だけである。

「静粛に！」

ギルド職員が女神の登場に騒ぎ出す民衆に注意を促す。

その間にもフレイヤは悠々と指定された位置まで歩いていく。

会場には机と椅子が人数分用意されていたが座つたのはアルフィアだけ。明らかに隠す気が無いのか尻尾が丸見え状態になった。

机には水を入れたコップと煙草を嗜む者の為の水晶で出来た灰皿が置かれていた。

優雅に歩くフレイヤは正に女王の貫録があり、指定された位置に就くと椅子に座る事無く民衆に顔を向けてフードを外す。

その美貌を直視した一部の者達は魅了にかかったかのように頬を上気させる。

(……やっぱりフレイヤ様だ)

ベルは美貌を晒すフレイヤに対して淡白な感想を抱く。

手を振り挨拶を交わした後、早速本題に移る。

「今回、私の我がままで地上の建物が壊れたと聞いたわ。まずは被害者の方達に深くお詫びします」

そう言いながらも頭を下げる仕草は取らない。言葉のみだ。

本来なら拡声の道具を使うところだが彼女は生の声で語り掛けた。道具を使っていないのに彼女の声はとても広く民衆に届き、離れた位置にいるベル達の耳にもはつきりと聞こえるほど。

事のあらましを簡単にだが説明しつつ私財を投じて保証金を出す事を約束した。それと決してオラリオを破壊するつもりが無かった。自分でもまさかそんな事態が起こるとは思わなかつた事を一応告げておく。

神々に根回ししたけれど知らぬ存ぜぬを突き通すのはベルの為にもしないことを決めており、フレイヤとしても民衆への心配りをアピールするのに丁度良いと考えた。

自分よがりの為に多くの^{下界の住民}子供達に迷惑をかけた事は本当に悪いと思つた。

「単なる興味本位だつたの。それがまさか建物の倒壊を招く事になるなんて……」

「保障してくれるんなら文句はねー」

「女神さまの謝罪があるだけで俺達は儲けものだ」

フレイヤの言葉に賛同する声がいくつか上がった。これらは仕込みではなく本当にそう思っている者達の——現場の声だ。

中にはふざけるな、という抗議めいたものもある。それらはいつも神々に振り回される被害者達だつた。もちろん、そういう否定的な意見もあるし、フレイヤは発現に対して真摯に対応した。頭だけは下げなかつたが。

「それともう皆は気づいていると思うけれど……、ダンジョンからモンスターを連れて来たわ。といつても数体ほど。これらは「ガネーシャ・ファミリア」と協力して事にあたっているけれど……。万が一、ケガ人が出た場合は私の「ファミリア」が責任を持って治療に当たる事を約束します」

モンスターを連れてきた理由は眷族^子達の為と告げた。

愛玩用ではなく今後の戦いに必要な存在である事を強調する。——そう言われると一部の民衆も黙るしか無くなる。

ダンジョンは未だに人々の脅威だし、地上進出したモンスターの対処と最大の敵である『黒竜』の討伐が控えている。

「だから、今回の事は本当に悪かったと思っっているわ。えと、その……みんな、こんな私を許して頂戴」

と、前半の威厳ある喋り方からしどろもどろな言い方になって後半は謝っているのか、言い逃れしようとしているのか分からないものとなった。

普段から謝罪し慣れていないので、これでいいのかフレイヤ自身分からなくなった。途中までは眷^{ヘディン・セルランド}属が用意した台本通りに進めていた。

これでも随分とマシになった。最初は手っ取り早く『ひれ伏しなさい』から始めようとしていた。それを考えれば随分と成長したと自画自賛する。

「もちろんですよ」

「俺は許します」

一部のバカな聴衆の声が上がったが怒りを覚えた女性陣に無理矢理黙らせられる。

聞いていたベルも一応余った形になったから許してもいいのかな、と曖昧な気持ちになった。だが、リリル力は拳を強く握り締めてふざけている、と強く抗議の意思を示した。

たくさんの声が上がった中で一際大きいのが『本当に悪いと思っっている態度か』だった。

それは多くの女性陣と紛れ込んでいる女神連中が声を大にして同意した。特に女神たちの大半はフレイヤを敵視していた。

(……全く無粋ね。悪いと思っっているから謝っっているのに)

フレイヤとて謝れないわけではない。慣れていないだけだ。

それと一部に女神が紛れ込んでいるのは分かっていた。普段から敵対している相手は結構覚えている。

潰す価値は無いが邪魔だなどは思った。

何にしても『神の力』^{アルカナム}を使えば全てが無かった事になる。このような些事にもかかずらう事も無い。——しかし、その手法は選べないし、選びたくない。

何も悪びれずに宣う^{のたま}フレイヤに対して、女神達が少しだけ騒いだ。ならば、と言いおいてフレイヤに指示という名目の命令を告げる。

「聴衆の顔を一人ひとり見てみる。被害者に対して言葉だけの謝罪など無意味に等しい」

「……そんなことないけど」

と、小声で言う男性が居たが無視した。

中にはフレイヤの言葉が聞けただけで許してしまう奇特な存在が居る。だが、今はそんな雑音に構っているわけにはいかない。

謝罪の形は誠心誠意。けれども神々の中には床に手をついて謝る『土下座』なる手法がある事をフレイヤは知っている。それをすればいいのかしら、と思った。

思案に暮れる女神をよそにアルフィアは机に置いてあつた未使用の水晶の灰皿をひっくり返し、中央に寄せる。

「私の言うとおりにしてみろ。何、心配するな。お前より厚顔無恥だったヘラにも出来たんだ。お前が出来ない通りは無い。ただ一言言うだけの簡単なものだ」

「そっ、おっ」

自然体で言う彼女の言葉にフレイヤは何の疑問も抱かずに従う。

後方にいたオツタルも腕組したまま待機していたが何やら様子がおかしいと肌で感

じた。

戦う事しか知らない武人は謝罪会見の経験は無く、女神の所業というか所作の何処に不備があるのか分からないでいた。

フレイヤは指示命令された通り、改めて民衆に顔を向ける。そして、ただ一言謝罪の言葉を言うだけ。

言葉を発しようとしたフレイヤの後頭部を徐おもむろに掴む。

「誠心誠意の謝罪に必要なのは言葉もだが……、態度も重要だ。まず、お前がすべきなのは……」

と、言いながら女神が抵抗する間もなく力が籠められる。

最強の「ファミア」と名高い主神とも言えども下界での身体能力は一般人と大差ない。ゆえにレベル7以上とも言われるアルフィアの力に抗いようが無かった。

ゴシャ！

広場にとても鈍い音が広がった。

悲鳴は無く、肉を潰す音とも何かが砕ける音とも違うような――

聴衆の半分近くは時を止め、もう半分くらいは息をのんだ。

机の上に置いてあった筈の水晶体の灰皿はどこにも無く、あるのは今も広がり続ける赤い染み。いや、フレイヤの血。

悲鳴は無い。何が起きたのか分からずに気絶したのか、それとも自分に何が起きたのか混乱したまま固まっているのか。

「こうして平身低頭……つまり頭を下げる事だ。ほら、悪いことをしたら言う事があるだろう？ それとも言うまで何度も頭を下げてみるか？」

かつてアルフィアはこの手法で『絶対に謝らない』と豪語したヘラを素直にさせた。次の日にはケロツといつもの状態に戻ったが——少しだけ態度を軟化させたのは間違いない。

見守っていたベル達もあまりの光景に言葉を無くしていた。そして、メーテリアの『謝罪の作法を教えてやろう』という言葉が脳内に流れた。

あれはこういう意味だったのか、と戦慄する。

後頭部を掴まれたまま引き上げられると額から鼻から色んな所から血が流れ出ていた。それと顔の所々に灰皿の破片が食い込んでいた。——眼球は無事だった模様。

美貌が一瞬で損なわれたことに女神の信奉者の何人かは気絶した。

呻くフレイヤをもう一度机に叩きつける。今度は割合手加減したようで音は小さかった。

ヘラの時は机が完全に壊れてしまったがな、という呟きが——

大怪我をしているように見えるが神々はこの程度でも数日で完治してしまう。命に

係わるほどの怪我でなければいい。それを理解した上でアルフィアは凶行に及んだ。

「……まことに……もうしわけありませんでした。……も、もう許して、本当に……」

歯が碎けるほどではなく主に鼻を強く打つ格好だった為、声はよく通った。

ただ、鼻血が酷くて机の上は血塗れになってしまった。

アルフィアは民衆に顔を向ける。誰もが言葉を失っていた。

「言葉が足りないようだ。もう少し心を込めてみる」

冷静で冷徹な言葉と容赦ない三度目の打撃。しかし、これは自分を天界から叩き落した恨みも実のところ含まれている。よって元々三度以上叩きつけるつもりだった。

美しかった銀髪が血を吸って錆色に染め上がる。その光景に何人かの人々はもうやめてと言いつい出し、それらが伝播して謝罪は受け取りましたと大きな声があつていく。それを確認したアルフィアは小さく『うむ』と言つてフレイヤを開放した。

顔を上げたフレイヤは鼻血を出しながらみつとも無く泣き出した。

恥も外聞もなく。失禁こそしていないがあまりの理不尽に昔の事を思い出したのか、ヘラの悪口が混ざった。

直接、アルフィアに抗議するとまた顔を打ち付けられると思つて怖くて言えなかつた。

フレイヤの謝罪どころか泣き言まで見る事になった女神達はとても幸せな気分を味

「その時はまた叩いて矯正すればいい」

「……………ううっ」

細かい破片を取り除いた後、顔の多くを包帯で包む事になり、血を吸った髪の毛は本拠ホトに帰って洗い流さなければならない。

鼻血はまだ治まらず、詰め物をしている最中だ。そんな自分の顔を手鏡で確認して大いに不満を表すように深く深くため息をつく。

(……………こんな顔にされたのなんて何時いつ振りくらいかしら)

天界でしばし神同士の殺し合いが起きるが、地上では十年以上は覚えがない。

ロキやヘスティアに今の顔を観られたら長く揶揄される事を思うと気が重い。かといって謝罪は必要だ。だからこんな顔にされても恨み言を言うつもりは無い。

心配してくれる眷族やオツタルに対しても大丈夫であることを伝えて暴れ出さないように指示しておく。

(全治三日くらいかしら?)

想像よりは確かに軽い。そうでなければあの場で送還されてもおかしくない。それを思えばアルフィアの手加減発言は正しいのかもしれない。

でも、人前で鼻血姿を晒されたのは痛い以上に恥ずかしかった。これなら人前で全裸謝罪の方がまだマシと本気で思えるほどに。

異常事態イレギュラーが無ければもう少し稼げたはずだ。毎回騒動トラブルによって「ファミリア」は火の車。それどころか命の危険も同じくらい発生してしまう。

ベルの「ステイタス」は爆上がりしているのに仲間達の方は微増という理不尽。

「ダンジョンアタックする毎に装備を新調していたらお金なんて溜まる筈もありません」

毎回のように装備が駄目になる。もう少し大切に扱わないとこれからの探索にも支障が出る。その事にベルも気が付いているけれど、何故か騒動が起きてしまう。

ダンジョンでは毎度階層が崩落するような事態は起きないし、階層主が次産間隔インターバルを無視する事も無い。それなのにここしばらく立て続けと言ってもいいくらい常識が覆されている。

リリルカでも分かっている。明らかにおかしい、と。

「なら、今度は資金稼ぎの為に中層に行くか？ 俺はそれでも構わない」

「そうだね。ある程度の資金は必要だし、そうしようか」

自身を高める事も冒険者の務めだが先立つ者が無ければ戦えない者も居る。

今の「ハステイア・ファミリア」は十八階層を拠点にして長期的に滞在できるだけの経験がある。突発的な事情が無い限り、という条件は付くが。

仲間との会話を聞く限り騒動が起きる気配は微塵もない。その筈なのだが何が原因

開店にはまだ早いかと思つたが客の数はそれなりに居た。

獸人の店員に案内されてカウンター席に座る。

料理を選びつつ主人である大柄のドワーフ『ミア・グランド』にリユー・リオンの様子を尋ねた。

ミアもリユーが怪我をした事は聞いていた。

「まだ本調子じゃないそうだよ。全治二か月つて聞いたから酒場にはまだ来れないんじゃないかね」

「そうですか」

「会いに行つたりするんじゃないよ。まだろくに動けも喋れもしないから。坊主が来た途端に治りかけが悪化しないと限らないからね」

ミアが見た限りは動きはぎこちないが会話の方がまだまだ時間がかかりそうな印象を受けた。

心の支えを失い、死を受け入れた身体を無理矢理復活させた影響で回復に時間がかつている、と担当の回復師ヒールラーから聞いた。

自殺しないだけまだマシなのだが気持ちと身体の齟齬はそう簡単に埋まらない。

「飯は食つてるみたいだから、もう少し待つててやんな。頼りない弟分の為に奮起するには心の整理が必要なんだろうよ」

「はい」

ということで、と言いながらミアは大盛りのパスタをベルの前に置いた。サービスだ、と豪快に笑いながら。

レベル4でも食べ切れるか分からない量に思わずたじろぐがリユートの回復祈願として受け入れる事にした。

「リユートはサボれて羨ましいニヤ〜」

「サボりたいから重傷になったわけじゃないよ、アホンダラ共。美味しい飯が食えなくなる事とどっちが大事なんだい」

「ゾめんニヤ〜」

キャットビープル
猫 人の店員が逃げ回ると入れ違いに人間の女性店員がベルの側にやって来た。

彼女はルノア・ファウストという。

リユート達とつるんでいる店員の一人としてよく見かけますが冒険者としての活動は見ることが無い。だが、ここで働いている以上、弱くないはずだとベルは思った。

「私が見た感じ、リユートは生きることを諦めていなかったよ。ただ、まだ舌が上手く回っていないから何言ってるのか分からなくなる時がある。特に君と会うと今は酷く混乱すると思う」

「ありがとうございます」

「ちなみにシルもここ数日姿を見せていないんだけど。あいつは別に病気とか怪我とか聞いてないよ」

という情報を伝えた後、ルノアは仕事に戻っていった。

確かにここ数日、シル・フローヴァの姿を見かけない。ミアも無断欠勤してるよ、とだけ言っていた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

アルフィア達が「フレイヤ・ファミリア」で生活を初めて一週間ほどが経過した。その間、ベル達の周りで身だった騒動は起きていない。

代わりに「フレイヤ・ファミリア」の下位の冒険者が毎日のようにボロボロになりながらダンジョンたくさんをしているという噂や情報が聞こえてきた。

それから偶々^{たまたま}リハビリ中のリユーを見掛けた。朝の鍛錬の為に『摩天楼^{パベル}』に通りかけた時に。

姿を見られて脱兎のごとく逃げ出す、というような事は無かったけれど頭を下げる程度の挨拶は交わせた。会話はまだ無理だと担当医に聞いていたので、無理に近づく事はしなかった。

「……そーいや【劍姫】って今何してんだ？」

大怪我をした、という噂からばったりと噂も姿も無い。

朝の鍛錬の時は外壁でよく剣の修練を積んでいる姿を思い出す。

こちらにも偶々たまたま買い出しに出ているエルフのレフィーヤ・ウイリデイスと会う機会があり、尋ねてみた。

相変わらず彼女には敵視されていたが、アイズの情報は何も得られなかった。

「過酷な修練をしているそうです。あと、汗まみれになるので人前には出ていないだけ、と……」

「そっか」

「ロキ・ファミア」も大きな被害を被りましたもの。再度のダンジョンアタックをかけるのであれば数か月は先でしょうし、半年以上かかる事もありえるかもしれません」

団員数が多い大手「ファミア」は武器とアイテムの手配だけで天文学的な金額が動く。資金稼ぎからして規模が違う。

まだまだ弱小「ファミア」と言われる「ヘスティア・ファミア」も多大な入用に必要な資金稼ぎしなければならぬのだが――

（……どうしよう。実はヴァレン何某君とは結構な頻度で会っているって言い出しづらい……）

神ヘスティアはジャガ丸くんの売店の都合でアイズとは結構会う。お得意様となっているほどに。

先の話題に出た怪我した後も何食わぬ顔でジャガ丸くんを購入している。ただし、一人ではなく付き添いが居て、安易に彼女の事を伝えないで欲しいと頼まれていた。

ベル君大好き女神たるヘステイアは敵対派閥の眷族たるアイズの詳細を教える気が無かった為、今に至る。

「そういえば神様」

「ななな、なんだいベル君」

「フレイヤ様とはよく会いますか？」

「集まりで見かける程度だよ。フレイヤがどうかしたのかい？」

「謝罪会見で血塗れになっていたので……、その後はどうしているのかなって」

ヘステイアは見物に行かなかったけれど神の情報網から大体の事は聞いている。

ケガは既に完治しているが数日の間、顔を隠すような姿だったことは確かだ。

話しの出どころはフレイヤを嫌う女神連中であり、男神は黙して語らず。

「もうケロツとしているよ。……でも、君に心配されるなんて僕は嫉妬を覚えそうだ」

ベルには何故か『魅了』が効かない。それでも美の神を心配するのは紳士的な性格ゆえだと理解はすれば納得はしていない。

かといってヘステイア自身が大怪我をするわけにはいかない。痛いのは怖いし嫌なので。

リリルカの迫力に狐人ルナールの少女サンジヨウノ・春姫は悲鳴に似た声で返事をした。

「ヘステイア・ファミア」の中で一番の弱者が春姫で二番目がリリルカだ。

戦闘経験はある。だが、「エクセリア経験値」がなかなか稼げない。結構な数のモンスターを討伐しているのに。

小人族は冒険者としては非力で不遇と言われて、実際成長速度はとても遅い。

「フレイバー勇者」のフィン・デムナも尋常ではない時間と努力で今の地位を築いている。彼のようにするには圧倒的な経験と時間が足りなさすぎる。もちろんそんなことは百も承知だ。

（弱い冒険者が強くなるにはひたすら経験を積まなければなりません。ベル様は特別なようですが、実際か国の連続でももんね。リリは何度弱音を吐いたでしょうか）

ベル・クラネルは普段の姿を見る限り、とても戦闘が大好きな少年には見えない。扱っている武器が接近戦用のナイフ。

大きい凶体で凶暴なモンスターを小さな体でたくさん倒し続けてきた。

第二級冒険者なのが今でも信じられない。

先ごろの「ステイタス」更新においてももうレベル5に王手をかけているとか。それもまた驚きの一つだ。

（数値の上がり方が明らかにおかしいです。もしかしてベル様の身体がとんでもないこ

目的もある。

そんな彼らを眺めていると近くの休息用の椅子に見覚えのある人物を目撃する。緑色の長い髪に魔導士の出で立ち、身の丈を超える長杖ロッドを所持。

服装は動きやすい薄緑色の魔法衣。——多くのエルフは肌の露出を好まないらしく、リヴェリアも頭と手以外は肌を見せない格好だ。

「ロキ・ファミリア」の副団長リヴェリア・リヨス・アールヴに間違いないと思った。多くの冒険者が居る中で意外と似ている人物というものに出会わない。それで間違いないと思ってしまった。

リヴェリアらしき人物は椅子に座り、ぼくつとしたままダンジョンに向かう冒険者を眺めているようだった。

違和感があるとすれば顔の右半分を薄絹ヴェールの覆いで隠していた。

（耳は治った筈だ）

ベルが見た時は包帯で隠されていたが顔の半分を損傷する酷いケガだったことは今でも覚えている。

命に別条が無かったとはいえ、男性と違い傷に忌避感を抱くものだ。

あまりジロジロ見るのも失礼ではあるが気になって仕方がない。護衛も無く一人で居るのも疑問だった。そして、ベルの視線を感じ取ったのか不意に顔を向けてきたので

飛び上がるほど驚いてしまった。

このまま逃げようかと思つたが、それはそれで失礼だと思ひ黙つて佇むことを選んだ。

第二級冒険者になつてから逃げ癖を治そうと努力している。嫌な者からは逃げない。そう思つても未だ身体は怯えを覚えてゐる。

懊悩しているとリヴェリアが手招きした。そこで逃げようものなら確実に追われてしまう。今は何も悪い事はしていないし、モンスターも引き連れていないが――

「おはようございます」

観念して覚悟を決めたベルは彼女に近づきながら挨拶する。すると相手は言葉は無かつたが頷き、自分の右隣に座るように椅子を叩く仕草をした。

表情は穏やかというか全くの無表情で、怒つてゐるのかは分からないが妙な迫力は感じた。

大人の雰囲気なのか第一級冒険者としての貫禄なのか。ただ座つてゐるだけなのに勝てる気がしない、そんな気持ちに囚われる。

「……失礼します」

取り巻きのエルフが居れば王族ハイエルフの許可があろうと怒り狂う場面だ。特にレフイーヤ・ウイリデイスとアリシア・フォレストライトが。

座れという仕草でつい座ってしまったが位置は彼女の右側。つまりケガをした方だ。横を向けば嫌でもヴェールが目に入るし、場合によれば中も見えそうだった。

どう声を掛けたものかと思案しているとリヴェリアが小さく何事かを呟いた。かなり近くに居るのに聞き取れない。

治療院に担ぎ込んでから数週間。一人で出歩けるまで回復した事からだいぶ怪我が治ったとみていいのだろうか、と不安に思う。

ベル達のような零細「ファミアリア」と違い、資金力にもものを言わせることが可能な「ファミアリア」だ。高額な回復薬や強力な治癒魔法も受けられる。

思案に暮れるベルをよそにリヴェリアは持っていた長杖を左側に立てかけ、懐から紙とペンを取り出し、流暢な仕草で文字を書いた。

書き終わった紙をベルに渡す。

「……えつと」

読めという事だろうかと思つて紙を受け取り、文章にぎつと目を通す。

顔にかかつている薄絹ツヴェルを捲り、感想を聞かせろ、と書かれてあつて思わず息をのんだ。

威圧感を振り撒く王族ハイエルフに触れる事にベルは畏れを抱く。もし、他のエルフに目撃されれば命の危機が訪れる事受け合いだ。しかし、ここで拒否してもろくなことにならない

気がする。その王族直々の命令なのだから。

まず飛び出していた眼球は元に戻っていた。ただし、白目部分は見当たらない程真っ赤に充血していた。瞳までは赤くなかったけれど。

問題は頬。縫合跡が痛々しいし、所々黒ずんでいるように見える。

口元に近い部分は大きく裂けたような大きな傷口があり、放射状というのかあちこちに広がっていた。それは鼻にまで達していた。

治療風景を見たわけではないから現在の様子を言葉にするのは難しい。それから反対側は——失礼な例えだが——比較的綺麗に見えた。

顔面が抉れている、という言葉聞いていたので改めて彼女の顔の全体像に目を向ける。

やはり左側が全体的にほっそりしている。左右非対称だとはつきり分かるほど。

確かに怪我は酷いが見せられない程ではない。——彼女が男性であれば。

リヴェリアは女性だ。見目麗しき高貴なエルフ。

これほどの怪我であれば人に傷跡を見られるというのは相当な覚悟が無ければ無理だ。男性であるベルでも分かる。

それから数分が経過し、何も言えないでいるとリヴェリアに手を添えられ、薄絹ヴェールから離れていい許可を得た。

(紙に書いたつてことは喋れないのか。傷口が開くから大きく開けられない状態なん

だ)

それはつまり魔法を詠唱できない事を意味する。

唄えない妖精エルフは戦力外。王族ハイエルフともなればそれがどれほどの屈辱か、人間のベルヒューマンには

安易に想像できないし、してはいけない気がした。

「……少し、気……楽、なった」

僅かに口を開閉して紡ぎ出される言葉。

完全に閉じたままではないことだけが救いか。

「……すみません。僕からは怪我の感想は……言えません」

「……かま……。無理、った……」

言葉が拙すぎでまともに聞き取れない。それは自分でも理解しているようで、また紙に文章を書いた。

食事は僅かながら出来ること。ベルに対して深く謝罪すると共に感謝する旨。

魔法は無理でも物理攻撃は出来るが団員達から戦闘に参加する事を激しく止められた。

全治するまでの期間は不明だが数か月ほどかかるらしい、と。

ほぼ筆談になってしまった。それと顔面の損傷の影響で表情を形作る事が痛みでまだ出来ないと言えられた。

(傷口が開くから……。本人は戦えるような事を書いているから元氣なんだろうな)

冒険者はずっと無傷で探索できるような職業ではない。それは王族^{ハイエルフ}であるリヴェリアも例外ではないし、【劍姫】であるアイズ・ヴァレンシユタインも同様だ。

今はまだ傷跡が残らない程度で済んでいる。いずれ自分も手足を欠損するかもしれないし、仲間も酷い目に遭うかもしれない。

「右目は大丈夫なんですか？」

この疑問に対する返答は視力が弱くなったが無事だ、と。

失明を免れただけでも安心した。

改めて彼女の顔を見る。酷い大怪我からここまで回復し、まだ冒険者として続けようという意思を感じた。

細身の体型だが【ステイタス】はベルを凌駕し、決してひ弱ではない。
「？」

安心したところにもう一つの文章を見せられた。

アイズも付けるから来週末予定を開けてダンジョンに連れていけ。

思わず叫び出しそうになったが周りの冒険者の目があるので必死に抑えた。

ベル個人としてはとてもありがたいがアイズを引き合いに出されると弱みを握られたような気分になる。実際、是非お願いしますと即答しそうになったけれどリルカの

鬼の形相が浮かんだので自制した。

「……あの、えっと、僕としてはともありません。……でも、本当にいいんですか？ あと、レフィーヤさんとかエルフの方々に恨まれたり怒られたりする……」

ベルの懸念に対して無表情ながらエルフは黙らせると簡潔な言葉を返された。

それとあくまでリヴェリア個人の問題で「ロキ・ファミリア」として依頼するわけではない事を強調した。——だが、巻き込まれるアイズの意志がどうなっているのかベルは不安を覚える。

一方的なお願いだが予定を調整してみる事した。

平凡な日々を過ごせていると思っていた矢先、空前絶後にして超絶怒涛の災難は彼を容易に逃がすような真似が出来ないらしい。正しく異常事態を愛し、異常事態に愛された世界最速兎レコードホルダーのように、と空想の世界へ逃避を試みたくなった。

それはリヴェリアと約束を交わして二日後の早朝だった。

『竈火かまどの館』の玄関前に血塗れの黒猫を引きずる隻腕の『剣鬼』が尋ねてきた。

ごく普通にやってきた、その人物をベルは最初誰だか分からなかった。

見覚えがある筈なのに違い過ぎる姿、というか雰囲気という言葉無くし戦慄すら覚えた。

咄嗟に浮かんだのは金髪金眼の少女〔剣姫〕だった。だが——どう見ても佇まいからして印象との齟齬がありすぎているように感じた。

なにより返り血を浴びている人物に何も声を掛けられず、触れれば壊れてしまいそうなほど彼女——アイズ・ヴァレンシユタインは傷つき疲れ切っていた。

s u p e r s e

17 女神の黄金

【ロキ・ファミリア】が遠征途中でダンジョンの使徒『破壊者』ジャガーノットの集団と戦闘に陥り、少くない犠牲を強いて勝利したものの帰還を余儀なくされた。

帰り際の団員達はいつも以上に疲れを見せ、屋台骨足る王族ハイエルグの喪失も相まって悲壮感さえ漂わせる。

数の少ない階層主との戦いであれば——と言い訳をすればきりが無い。

幾度となく危機を乗り越えてきた経験を持つ団長や幹部の一人ガレス・ランドロツクも掛ける言葉が見つからない。

煮え切らないまま地上に戻ってきても災難は続いた。

【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタインが大怪我を負った。そけだけならば治療院に連れて行けばいいだけだ。

問題は戦闘結果だ。

一足先に本拠ホムムに戻った団長フィン・ディムナは監視にあたっていた団員から報告を受けていた。

（モンスター化したとはいえ葛藤くらいはあるだろう。対人戦はあまり教育に良くないが避けて通れるものでもない）

戦闘に際し、利き腕を失い、その後どういいうわけか怒り狂い落された腕を叩きつけて損壊させた。

粉々にはなっていないので早めに回収すれば最悪は避けられる。

問題は腕ではなく心の問題だ。

失血によって意識を失ったアイズを回収しようとした。その時、別の現場から治癒魔法が飛んできたため酷い状態だった腕は立ちどころに回復を始めた。ただ、アイズの怪我は即座にはいかなかった。

（暴走したアイズの力が治癒の魔法マジックサークル円を拒絶してしまったか）

現場を見ていないので推測の域を出ないがアイズ本体の怪我が治らなかった事だけは確実だ。

監視要員の報告を信じるなら治癒魔法の使い手も予想していなかったに違いない。命に別状は無さそうだし、後は意識を回復するのを待つだけ。

それから数日後、事件のあらましをアイズ本人に聞かせた後、酷く気落ちしてしまった。この時、フィンハイエルフは事務処理に忙しく個々の団員に気を配る余裕が無かった。細かな修正をしてくれる王族の存在が失ったのはかなり大きい。

リヴェリア・リヨス・アールヴはアイズにとって母親のような存在でもある。

「……で、アイズは何を気にしているんだ？」

幹部候補なっているアイズの問題をさすがに無視できなかつたので仕事をいったん棚上げにした。それはガレスも納得する事だつた。

事情を聴けば——暴走時に飛ばしてしまつた剣が別の場所で戦っていたエルフに刺さつて致命傷を与えた事を知り、酷く衝撃を受けた。

自分の事ならば自己責任で納得するアイズも人様を傷つけた事はさすがに堪え^{こた}えられ^らない。

「背後から心臓を一突き。……意図していなかつたとはいえ……不運だつたとしか……」

不運の一言で片づけられればいいのだが、敵と断じていない相手を死に追いやるほどアイズは冷酷ではない。

自分の責任を痛感し、荒れ気味に陥っているという。

(……いや、別の現場の様子を考えれば無理も無いか)

戦闘状態とはいえ赤い髪の人蜘蛛^{アラクネ}として復活したアリーゼ・ローヴェルの目の前でエルフのリュー・リオンが致命傷を負つた。それもアイズの不注意で。

実際に見ていないがアリーゼはおそらくリューに殺されようとしていた。もちろん、

「ミリア」の治癒師ヒーラーで有名な『ヘイズ・ベルベット』が現われ、立ちどころに復活させてしまった。

見ていた団員も蘇生魔法かと驚いた。

現状、死者蘇生の魔法の情報は無い。それは神も認めるところ。ただ、無い、とは言い切れない事をフィンは様々な情報筋から得ている。

（アリーゼは治癒魔法を受けたのに消滅した。これは推測通りだと思うが……。
【女神の黄金】の実力はさらに磨きがかかっているようだ）

まずはアイズに【疾風】の無事を伝えるように指示した。

午後になって話題に出た【女神の黄金】ヘイズ・ベルベットが単身でフィンに会いに来た。

薄紅色の長い髪。栗色の瞳。白の上衣ヒアフォナと赤の看護衣ナース・ウシピースの上に軽装鎧をまとい、金の装飾ロッドが施された長杖ヒューマンを持つ人間の少女。

「フレイヤ・ファミリア」とは敵対しているが戦闘行為は禁じられている。世間話程度であれば何も問題はない。

丁寧に執務室に案内させた彼女ヘイズをフィンは温かく迎えた。

「ようこそ。今日はどのような（用命なのか）かな？」

「フレイヤ様のお使いで【劍姫】の様子を見に……。引き抜きに来たわけではなく、無事

かどうか、というところです」

「……無事？」

「意図しない攻撃で心が壊れかけているのであれば癒すようにと……。相当心配されておいででしたので。……それとも杞憂でした？ でしたら確認だけさせてもらえればすぐに御暇します」

飄々と宣う人間の少女。

アイズに対して執着するのは神フレイヤ。そのお使いの意図は単なる気遣いかもしれない。ヘイズ自身に何かある、という話しは聞いた事が無い。

その女神がとても心配しているから彼女を遣わせたのだろう。であれば攻撃の意志が無いのも頷ける。

要望通りアイズを連れて来るように団員に指示した。

件の【剣姫】は荒れ模様だと聞いていたが執務室には大人しく来た。満身創痍ともいえるような痛々しい雰囲気醸し出していたけれど。

「お久しぶりです。私の事、覚えていますか？ ヘイズです」

「……うん、知ってる」

素っ気無い態度。言葉だけ聞けばいつも通りだ。

刺々しい態度でもない。ただ単に返事しただけに聞こえる。

軽い挨拶の後にお互い椅子に座る。

アイズは顔と利き腕に包帯を巻いていたが傷自体は完治しているとのことだった。

「じゃあ早速本題から……。【疾風】は酷い状態でしたが一命を取り留めました。嘘だと思うなら直接見に行ってもらっても構いません」

「……………」

「確かに心臓を一突きされましたが、あれつて迂闊に引き抜くとかえって出血量が多くなつて危ないんですよ。だから、魔法を使う時、誰にも邪魔されなかったのが幸運でしたね。……多少の障害が残ってしまうのは仕方ありませんが」

心臓の下りでアイズは両手の拳を強く握りしめた。自分の責任だ、と強く意識してしまつた。だが、ヘイズは【劍姫】に咎を求めているわけではなかつた。

ありのままの報告を伝えるのに終始した。

おそらく女神の意向でそういう説明をするように言われているのだと聞き手側のフィンは思つた。

「で、蜘蛛のモンスター、アリーゼさんと言いましたか。あれも回復したはずなんですけど……、どうしてか死んでしまつたらしいですね。自害した、とも思えませんし」

「どうしてそう思うんだい？」

アイズが何も言えないようなのでフィンが代わりに尋ねた。

ヘイズが見た限りアリーゼは動く気配を感じなかった。生きる気力も無く、ただそこに存在だけしているような――

そこで自分が邪魔される事を防ぐために昏倒させたと話した。

「もし、力加減をミスしていれば即座に塵になっていたでしょう。【ガネーシャ・ファミア】に任せるまでは確かに形は保っていたのでお疑いならば尋ねて下さい。団長であるシャクティさんも来ていたので」

「わかった」

「こうして説明しても不可解な点が残ってしまう。……結果論として私の昏倒させる攻撃が止めになった、というのはどうでしょう？ どうせ、誰も証明できない。【剣姫】のせいで、というのは無理がありますし」

言い返そうとヘイズは椅子から立ち上がると言葉が続かない。

殺したと思ったのは【疾風】のエルフであってアリーゼに関しては全く関知していない。だけれど、自分のせいで死なせてしまった、と思い込んでいた。

状況を聞く限り、誰のせいでもない気がするし、どの道討伐される運命にあった。そう考えられれば気が楽になれる。

ヘイズは自分に責任があるからヘイズは無罪放免だと言っているようにしか聞こえない。それがフレイヤの意志であるならば苦情程度しか言えないのもまた事実。

アイズとしては昏倒攻撃が事実で、それが原因でアリーゼが死んだのであれば確かに自分のせいではない。直接見ていないので証明しようがないのが口惜しい。

「そうですね。どの道助からなかった。【劍姫】にはその方法すらなかった。であれば……、何をしても無駄でしょう。既に過去となつてしまつたし」

「……はい」

「私も自分の魔法には自信がありますが万能でもない事を知っています。出来ない事もあります。努力しても過去は変えられません。神でも無理なんでしょう。失敗を無かつた事にするなんて」

（出来るとすれば記憶を改竄して無かつた、という事実を埋め込むくらい。起きてしまった事象まで変えられるなら敗北の歴史を無かつた事に出来た筈です）

「それで、どうします?」

ヘイズはアイズに尋ねた。あまりの抽象的な問いに思わず息をのむ。

何を聞かれていて何のか分からぬ。現実には変わらない。事実も曲げられない。その上で何が言えて何を堪えられるのか。

「つまりあのモンスターを殺したのが私か貴女か。どちらが都合がいいかって事です。私としては止めを刺した覚えはありませんが結果的に死なせたから私のせいでしょうね。それで構いませんが」

「アイズ。君に責任を押し付ける気は無いが、気負い過ぎも良くない。直接手を下したわけではないのは明らかだ。目撃者も居る」

「そうそう」

フィンの言葉にヘイズが相槌を打つ。それは紛れもない事実だ。だから、否定しなかった。

綺麗ごとを並べられているようにしかアイズには聞こえない。けれども、それはとても甘い言葉なのは理解した。

アリーゼは死んだ。それも酷い死に方だ。

直接見てはいないが心がとても痛い。今も胸が締め付けられている。だから――

「……罰、が欲しい」

「無罪に罰を与える事を世間では冤罪っていうんですよ」

「構わない」

「じゃあデスペレートをください」

そう言われて即座にいいよ、と言いそうになって息が詰まった。

騙されなかった事にヘイズは小さく舌打ちした。実際、武器を貰う気は無く、精々互いの武器の交換か貸与くらいだ。

貸し借りなら別に構わなかったので提案してみただけでフレイヤの意向は入ってい

外見の問題で議論しても虚しくなるだけ。それをアイズは理解しているが納得して
いない。

単なる腕試しではなく殺し合いだった。手を抜けば死ぬ。殺気を振り撒く相手に油
断を見せる事は出来ない。

一步深く踏み込んでいたら自分が死んでいた。

「……だから、殺した。殺した。私が殺した！」

激高するアイズに対してヘイズは涼しい顔のまま両手を使って彼女を宥める。

少し突くと爆発するところから精神状態は見た目よりも悪いと理解した。

このまま放置するわけにもいかず、結果も変えられない。

「やっぱリデスペレートを渡してください。それが貴女にとって良い罰になると思いま
す」

「……ん」

「譲渡というより貸与。数日程私に貸してください。もちろん、フレイヤ様に献上した
りはしませんよ。個人的に使ってみたいと思っただけです。何なら私の長杖ロッドと交換し
ましょう。壊したら弁償してくださいね」

朗らかににこやかにヘイズは提案した。側で聞き耳を立てていたフィンも声をかけ
る機会を失っていたが悪い方に傾いているようには感じなかったし、親指からの警告も

来ない。

わざと怒らせたりしているようだが女神の意向で行おこなっているのは明らかで、ヘイズはとても仕事に忠実であることは窺えた。

追い詰めているというより誘導していると言った方が正確か。

アイズに罪の意識を強く持たせるような文言を避けている。

「それと少しダンジョンで気晴らしでもしますか？ お供しますよ。女同士二人きりでもいいし、お仲間を連れてもいい」

両手を合わせて再度提案する。

怒りに囚われた時、アイズは仲間の声が届かない事がある。だが、ヘイズの言葉はほぼすべて彼女に届いている。

相手の感情をうまく操作しているかのように。

「二〇階層の虫でも倒しに行きましょうか？ たくさんアリーゼを殺しに行きましょう」

「……うん。たくさん殺そう……」

「ちよつと待つんだ、君達」

少し油断したせいかわいさもアイズもアイズも目がグルグル回っている事に気付くのに遅れてしまった。

目の当たりにした。もちろん、フィン自身も含まれる。

「……【劍姫】って虫が嫌いなんでしたっけ？」

「好きな部類ではない、と思う」

「虫だろうとモンスターだろうと知り合いが転生すると混乱しますよね」

「……そうだね」

「その知り合いは意図的に敵対するんですか？ それとも無意識？ 後学の為に教えて

貰えませんか？」

喋るモンスターについてはギルドが詳しいと睨んでいるが情報は未だに秘匿されている。無理に聞こうとしても答えてくれないだろう、とフィンは小声で告げる。

ヘイズは少しがっかりし、アイズは気持ち的に落ち着いてきたのか大人しかった。

少し間を設けて飲み物を飲むことにした。ついでに軽い食事も頼むと顔は笑っていたが内心ではどんな気持ちか渦巻いているのか分からないティオネはまた大人しく退出していった。

「全てのモンスターが知性を得て喋り出したのならまだしも、ごく一部であれば今まで通り倒すなり保護するなりすればいい。フレイヤ・ファミリア うちだとみんな敵ですからね。きつと倒

しにかかりますよ」

「そうだろうね、……としか言えない」

「……【劍姫】は割り切りたいのでしょうか？ 自分の気持ちを……。君は正しい、間違っていないよって言われたいんでしよう？」

戦う事しか知らないアイズにとって小難しいことを理解するのは難しい。けれども一生懸命に学ぼうとする意思はある。今回の事もたくさん悩んだ。どうすればいいのか。

彼女にとって不運なのは「ロキ・ファミリア」は老齡な考え方の冒険者が多かった事だ。

厳しい意見が大半で柔軟性に乏しい。

「それとエルフの問題もありましたか。……なら、ここは素直に謝り行けばいいのでは？ どんなにボコボコにされても私が治療してあげますよ。デスペレートを貸してくれるならタダにしてあげてもいい」

「……そんなにアイズの武器が欲しいのかい？」

「個人的なものですよ。私だって元々は前衛職でダンジョンに挑んできたんですから」
能力的な問題で後衛職に甘んじているが戦い自体は嫌いではないし、長杖ロッドで物理攻撃も平然わしなと行う。

それに交渉次第では扱えるかもしれない。特に有名人の武器なら猶更。

本音を言えばアイズから武器を取り上げたい。そうしないと彼女は自分で自分を傷

つけてしまう。そうなると女神の意向に反してしまいそうな気がしたから。

ただし、それはヘイズの優しさではなく女神フレイヤの為だ。そうでなければこんなところなど来ないし、勝手に自爆していろと唾を吐いている所だ。

(……混乱する事態を回避すれば【剣姫】の魂もおいそれと穢れまい。いつも話題に上る【白兔の脚】ラビット・フットにでも任せればいいものを……)

元々アイズが一冒険者を殺した程度で魂が汚れるという話しになるのか懐疑的だった。

実際に会ってみても酷く混乱する事はあつても兆候が掴めなかった。——その兆候があつてからでは遅いのかもかもしれないが。

少なくとも取り乱すほどの事態に陥つたのは理解した。——この女でも。罰を受けたいなどと世迷言までのたま宣うとは滑稽だ。

思わず笑みを浮かべそうになったヘイズだがすぐに仕事に意識を取り戻す。

何にしてもアイズのやりたい様にやらせ、調子を取り戻してやれば女神の使命も達成される。もし、危険だと思つたら都度修正すればいい。

団長フィンは油断できない相手ではあるが、今回に限って敵対行為とは無関係だ。滅私奉公の体ていで仕事に臨んでいるし、と。

寧ろ、王族ハイエルフが不在だったのが幸運というか好都合というか。女性ならではの繊細さや

機微といったもので心の奥底まで見抜かれてしまう可能性があり、今回の仕事も半ばで追い出されるおそれがあった。

（厄介な女が居ないだけで随分と楽に進めましたが、全く居ないわけではない）

例えば扉の外に控えている第二級冒険者の二人とか。

ヘイズにとって最大の障壁はリヴェリア・リヨス・アールヴただ一人、の筈だが先ほだから睨みを利かせているティオネも意外と油断ならない。特に脳筋女戦士は扱いが難しい。——言葉が通じない所とか。

「そういうえば……報告するのもどうかと思いましたが【疾風】はまだ本調子ではなくてですね。言葉に不自由しています。何しろ首がもげちゃいましたから。これは【劍姫】の……ほんの少し貴女のせいですが……お気になさらずに」

「……首。……ううっ」

「こういうのは変に隠すと面倒なので言つてしまいますが、もう過去です。なので取り戻す努力をするしかないです、はい」

項垂れるアイズは小さく返事した。

モンスターの時より素直になった。

「言葉に不自由しているエルフはただの案山子です。殺るなら今、ですよ」

「しない！ そんなこと……」

今回ヘイズに与えられた期間は一年ではなく、一か月程度。——最悪命令不履行となるようならこの身をもって女神フレイヤに謝罪する所存である、と強い意志をもって臨んだ。

もちろん、アイズの為ではなくフレイヤ一択だ。

「ラビット・フット【白兔の脚】がいいと言つてもいいですが確認はさせてもらいます。これも仕事なので。……お前が不甲斐ないからこちとら苦労してるんだ。さつさと気持ちを切り替えろ、と言いたい気持ちを呑んで下手に出ている。……おほん。今のは嫉妬です。私も前衛で頑張りたかったもので……」

途中で鬼気迫る形相になったが別段、それも隠す気が無く淡々と説明した。

アイズとは同年代だが一人の小娘程度の認識しか思つていない。例え第一級冒険者で自分より強かろうと——

ヘイズは己の力量の限界を知り絶望した。だから嫉妬を覚えた、という言葉はそれほど嘘ではない。

有象無象の回復ばかりしてきたのでたまには前に出て活躍したい、そんな気持ちも無くはない。レベル4の「ステイタス」を持つているけれど所詮は第二級冒険者。

「うん、話しても不毛だ。【剣姫】、ダンジョンに行こう。貴女を癒せるのはダンジョンだけだ。モンスターとの戦いで癒えるような魂とも思えないが……。きつかけ程度には

なるでしょう」

「……そうなのかな」

「他に思いつくとしたら……【ヘステイア・ファミリア】に改宗コンバーションすることと好物のジャガ丸くん断ちでしょうか？」

アイズは顔を青ざめさせた。時に後者の方で。

改宗コンバーションはさすがに主神共々認められない選択ではあるが一時的な貸与ならばありえない。くない。

一か月くらいジャガ丸くんを食べてはいけない、というのはフィンからしても立派に罰になりそうと思った。——最悪一週間でもげっそりと痩せこける気がした。

「あくまで気晴らしですから深層には行きません。珍しいドロップ品でも探しに行きましよう」

「……私はそれで構わない」

と、鼻息荒くやる気を見せる。

見た感じでは女神フレイヤの命令はここで終了してもいいのでは、と思わないでもない。

ダンジョンに行くのは打算ありきだが、【剣姫】と同様とまでは言わないまでも自分も気晴らしが必要なのかな、今日は少し強く思った。

リユー・リオンの生首を観察していた時にあれこれと物思いに耽って色々調べ回ってきた。その過程とあるアイテムの制作依頼も既に済ませている。

アイズほどではないが自分も頭を整理、または冷静にさせる為に「ファミリア」を出る許可を得た。用は都合のいい方便が欲しかったからに他ならない。

(私は治療師だ。誰よりも冷静で居なければならぬ)

神は嘘を見抜く。既に醜い思想を読まれているかもしれないがそれ自体は構わない。主神を心の底から崇拝するヘイズにとって何より優先されるのはフレイヤだけ。もちろん、自分の我欲が無いわけではない。

了承を得られたものものすぐに向かうのか、それとも時間を空けるのか尋ねてみた。アイズは今すぐでも構わないと言った。念のためにヘイズに準備などの都合を聞くが、こちらは今すぐで構わないと回答する。

(……食料は途中で買うので足りない物は……何かありましたかね?)

荷物については「ロキ・ファミリア」に任せるので小さな鞆一つでも充分だった。

対するアイズは剣一本。無補給でダンジョンに挑むには命知らずにも程があるのだが——戦えればそれでいいという姿勢は少し共感できる。だが、治療師としては許可できない。そこは不本意ながら心配するフィンと同意見だった。

善は急げということで急な呼び出しにもかかわらず、キャットヒール猫のアナキティとエルフ

は怠れない。

店内には数万ヴァリスの商品が並んでいたがヘイズは涼しい顔で「剣姫」に合ったガントレットを購入することにした。

刀剣類は人気が高く、アイズが壊さない物となると特注品オーダーメイドになるだろうし、出来るまで呑気に滞在する時間はヘイズには無い。——時間を作れなくはないがアイズの為にそこまでする必要が感じられなかった。

「代金はデスペレートの借り賃だと思ってください」

「……う、うん」

武器を実際に装備して具合を確かめ、気に入ったものを購入する。次は防具の番だったが必要ないと言ったので了承した。アナキティ達は自前の武器で満足したので、こちらは何も買わなかった。

その後、細々とした回復薬ポーションなどのアイテムを買い揃え、ダンジョンに挑む。

第一階層でさっそくヘイズはデスペレートを振り、現れたモンスターを攻撃した。

(扱いやすいけれど私にはもう少し重量感が欲しいかな)

ガントレットによる接近戦を仕掛けるアイズはいつもと違う武器に動きがぎこちなかったが連戦していくうちに慣れてきた。

まずは準備運動がてらの動作確認の後に一層ずつ降りていく。そして、一時間ほどで

十層目に入った。

四人パーティーで特に苦戦する事も無く、次の階層を目指していると多くの冒険者として違った。

上層は特に冒険者の遭遇率が高い。一見するとすぐに飽和状態になりそうなものが七階層以降になると一人では対処しきれないキラークラントの集団に出くわす事になる。

それと上層で資金稼ぎをするのは難しい。鉱物資源の質やレアモンスターの遭遇率が悪いからだ。

そして、最初に戦う事になる階層主は冒険者の致死率が結構高い。

「いや〜順調順調。普段と違う武器の具合はどうですか？」

「うん。今のところ問題ない」

【剣姫】を除けば全員レベル4。規定攻略難度から見ても問題はない。

魔法職のレフィーヤも物理攻撃が出来るし、アナキティも淡々と仕事をこなしている。

荷物持ち役の二人はダンジョンに入る前から疲れ切った顔をしていたが戦闘が始まる事には気持ち切り替えたのか、ヘイズから見ても言う事なしだった。

無駄口を叩かないので戦闘音以外は聞こえてこない。

ていた。

二五階層以降も既に修復され、多くのモンスター達が生み出されているという。「久々にダンジョンに潜りましたが『フレイヤ・ファミリア』とは違った緊張感でしたね。まるで遠足ですよ」

「……それはそうでしょうね。毎日のように殺し合っている場所に比べれば……」
伸び伸びと満喫するヘイズに対し、アナキティは苦笑した。

他派閥の団員とはいえ何の気兼ねも必要ない實力を見せられると安心感に囚われて油断しそうになる。闇討ちは無いとしても警戒を解いていい理由にはならない。

一日で随分と深く潜ったわけだが、今のところ喋るモンスターとは出会わなかった。本来はそれが普通なのだが――

(……やっぱり【ラビット・フット白兎の脚】に何かがあるのか)

(アイズさんと一緒に居られるのは良いんですけど……。ヘイズ・ベルベットの目的が全く見えない。かといって飄々としていて隙を見せない。やっぱりベル・クラネルがおかしいんですよ、きつと)

ヘイズは野営を提案し、さっさと場所取りを始めた。

今のところ否定意見も出ず、淡々と過ごしてきたが何か言った方がいいのでは、という不安が募る。アイズは完全に肉弾戦の模索に忙しく、寧ろ彼女に倣った方がいいので

はと思わせる。

全身女子なので食事も就寝も気を張らずに済んでいる。なによりヘイズがたった一人にもかかわらず豪胆な態度で驚く。さすが「フレイヤ・ファミリア」の治療師だ、と。特に問題も無く充分な休息を取った後、二階層分降りる事となった。

当初の目的階層でもある二〇階層に出ると様々なモンスターと出くわす。それも大量に。

ヘイズは改めてこの階層に来た目的を告げる。アイズに大量のモンスターを討伐してもらおう。それ以外は魔石とドロップ品の回収。——それだけ聞くと最初から変わっていない気がする。

「もつと下に行ってもいいんですが、^{フレイヤ}【勇者】との約束なので」

「分かったわ」

「私も了解しました」

現場から大きく離れない限り自由時間としてモンスターを討伐していく。魔石の回収も忘れずに。

レベル4以上ともなると苦戦する場面が出てこなくなるが数をこなせばさすがに疲労する。特にレフイーヤは生粋の魔法職なので。

小一時間ほど戦闘を続けた結果大量のアイテムが集まった。だが、これだけのものを

「今回は散歩じゃなかった？ さすがにそこまで行くのはちよつと……」

「私も予定がありますので、言ってみただけですよ」

アイズは即答しかねているようだったのでゆっくり考えていて下さい、と言いおいて休憩を切り上げてモンスター討伐に向かった。

普段は団員達の回復ばかりで率先して戦う機会がめつきり減ってしまった。それでも自分の力量は思つたほど出ていない気がする。才能の問題なのか、今以上に強くなる想像が出来ない弊害か。

デスブレイト
細身の剣を振るつても満足する答えは得られなかった。

(……手頃な場所。モンスターの数も邪魔な冒険者も殆どいない)

『宿場街』リヴィラよりに向かうと冒険者の数も格段に少なくなる。モンスターの数も質も段違いに増えるので実力が伴わなければ深くは潜れない。

場数を踏んでいるレフイーヤでさえ未だに単独踏破を躊躇う。

一つ呼吸を整えてアイズは武器を確かめる。

「……では、改めまして。幾分か身体も温まってきた事ですし、構えて下さい」
剣を収めて腰をかがめた状態でアイズを見据える。

疑問を抱くもエイズから殺気を向けられた事で慌てて拳で防御態勢を取る。唐突な闇討ちではないようだが緊張が走った。

「私はお前が嫌いだ。制裁するわけにはいかない。フレイヤ様のご意向は貴様の精神の安定にある。それも最早どうでもいい。ただただ、私はお前が気に食わない。……といつてもこの武器はちゃんと返すから安心しろ」

気さくな雰囲気から眈を釣り上げ憤怒の形相を形作る。

ヘイズの怒りは女神の寵愛を奪われた事、それだけだ。

制裁とは言ったものの勘定を安易に爆発させたりはしない。だから、ただ愚痴として言っただけだ。

「戦闘馬鹿の貴様にとつて言葉より戦いの方が分かりやすいだろう。怪我をしても癒してやる。例え四肢がもげようとな」

「……ん」

前衛を諦め、苦渋を舐めて今の地位を甘んじて受け入れた。もつと強くなりたいと願った少女は未だに向上心を燻らせていた。

【戦いの野】フオールクヴァンクの『洗礼』をもつてしても彼女の望みは未だ叶わず。

己の限界が成長を疎外している事に抱くは怒りのみ。

「罰を与えてほしいのだろうか？　ならばくれてやる。我が私怨も伴うが文句は言わせない」

格好は後衛の治療師だが迫力は既に前衛と遜色が無い。そんなヘイズが突進し、アイ

ズに斬りかかる。

レベル6のアイズにとって対処できない動きではないが気迫が伴い、思った以上に戦いにくいと思わせる。

剣の才能はアイズより劣る。繰り出される剣を拳での確に牽制する。

相手の方が有利ではあるが守りを固めればどうということもない。ただ、ハイズ側もそれを分かった上で突っ込んでくる。

唐突に始まった戦闘で外野のアナキティとレフイーヤが静止の声を上げても二人は聞き耳を持たなかった。

(捨て身の突進ばかり。でも、何のためらいも無いのが怖い)

剣だけかと思いきや捨て身の覚悟の足技も繰り出してくる。それで何度かアイズの体勢が崩される。

拳が顔に当たろうとも押し返す勢いにたじろぐ事あった。

ハイズの攻撃事態はまだ届いていない。実力差があるとしてもアイズは決して油断しなかった。

(私怨って言うってたけど、この人凄く冷静だ。自分の力量もきちんと把握している。……それに致命傷をどうしてか避けている)

こちらから攻撃すれば勝てる相手だ。レベル差はどうしても戦闘に洗われてしまう

た。

「劍が無くては強いですね、貴女は」

「…………どうも」

敵意むき出しのような始まり方だったがヘイズは素直な感想を口にした。

凄^{ヒド}い武器を持ったからと言つて冒険者が強いわけではない。ましてヘイズは元々治療師^{ヒーラー}だ。武器を選ばないとしても器用な立ち回りが出来ていたわけではない。

（【劍姫】の壁は团长^{オウタカ}より低い筈だが……、全然そんなことを感じさせないですね。正攻法ではやはり無理か……）

割合無心で戦闘で来た事はそれほど嫌な気分ではなかった。それは本人も認めるところだ。

細身^{デスベリート}の劍を鞘に戻して怒りの形相でアイズを睨みつけると彼女は軽く呻いた。

自分より年下に見える少女が見せるものにしては怖すぎた。

「フレイヤ・ファミリア」における『洗礼』を毎日のように受けていた貫祿^{クワンリク}というか凄みというか。

「…………ほんと、貴女は強くて羨ましい。才能に溢れているのか。この限界知らずが……」

「ご、ごめんなさい」

「ただの嫉妬です。大いに気にして下さい」

(……ええ。ど、どう返したらいいの?)

嫉妬は本心から。羨望もあるし、そこはどうしようもない。ヘイズとて厚い壁に何度もぶち当たりながら研鑽を積んできた。

【劍姫】が恵まれた才能故に強くなったとは言わないし思わない。そして、その才能も有無もまた運命のようなものだ。

ヘイズは恵まれなかった。代わりに治療魔法の才能を開花させた。

それと彼女の真の目的も今しがた果たされた。

冒険者同士の私闘は基本的に禁じられている。——が、ダンジョンの中ではその限りではない。

壁はやつぱり高かった。

それを再認識したヘイズは少しだけ心が楽になった。——デスペレートについては憧れが勝り、ヘイズを弱体化させようだとか姑息な考えは無かった。元より「フレイヤ・ファミリア」としての矜持があるので女神に恥をかかせるような意識は持ち合わせていない。

「私の用事はここまでにして……。本来の目的である貴女の罰について話し合いましたよ。うか？」

一度収めた剣を再び抜く。

「酷い罰ではあるけれど……。アイズに酷い罰を求めているわけ？」

「だって、この人のせいで首がもげて大切な仲間が死んだんですよ。復讐されても文句は言えないでしょう」

反論できなかった為か、アイズはその場にしゃがみ込んだ。

多少、殴られる事は覚悟していたが命を失ったことに対する者としては軽いと本人も気付いた為だ。

謝って住む事ではないし、被害者は今も言葉に不自由しながら懸命に生きようと必死だと聞いている。

「……本当に首がもげたの？」

「現場に居合わせたので真実です。神を連れてきてもらってもいいですよ」

（相当な自信があるということは本当なのね）

「チンコうんぬんの話しが出ましたが……」

「……良く平気でそういう単語言えるわね」

チンコではなく性器だったはずなのにどうして言い直したのか、と疑問を抱く。

潔癖なエルフでお馴染みのレフィーヤは顔を赤くして反論しようとしたが何も言えなかった。

絶えず人体の損壊風景を見てきたヘイズは歳若い見た目に関わらず精神がとても凶

太くなってしまった。それゆえに大抵の事では動じない。

「そうですね。この剣で性器をぶっ刺して非処女になってみますか？ 処女神の

【ファミリア】に改^{コンバージョン}宗^{ジョン}したい人には辛い罰となりましょう」

「……………」

聞いているアイズも十六のお年頃故に思わず下腹部に手を当てた。

何にしても痛い思いをするのは確定のようで身体が震えてくる。しかし、ここで穩便に済ませるのは罰とは呼べないのもまた事実だ。

(……………怪我は魔法で治るとしても酷い方法ね)

(やってみたい残酷な方法。……………私の想像力ではこの辺りででしょうか?)

大きなおっぱい限定で乳房を抉り取るのもあるがアイズの胸は大きすぎず小さすぎず、面白みに欠ける。と、ヘイズは少し残念な思いを抱く。

拷問が好きなのではない。どうせ治るのだからどこまで痛めつけられるか興味が無いわけではない。嗜虐の意味ではないけれど——他派閥が相手なら遠慮はいらない。といつても女神フレイヤに怒られない程度に治めなければならぬけれど。

軽く息を吐いてアイズに向かって一足の後、剣を振るう。身構えようとする彼女に動くなど小声ではあったが強めに命令する。するとアイズは咄嗟に身体を急停止させた。

剣を振り抜くまで僅か一瞬。頬をかすめつつ鼻を深く切り裂きながら顔を横断する。この時、眼球をあえて避けた。

「……………んっ!？」

呻くと痛みが強まり、鼻から大量に血が噴き出た。

手を見るまでも無く大量の出血にアイズは混乱しつつ鼻を押さえた。

致命傷を避けられた結果にヘイズは納得し、何度か頷いた。

「その綺麗な顔に一生の傷を残すのも罰になりますか……………。世の中には便利なアイテムがあるから大した損害にはならないんですよね〜」

怪我の度合いとしては小さいが出血量が意外と多い。ヘイズも鼻血が中々止まらなくて困った時期があった。

防具を血に染めつつ目に涙を浮かべるアイズを見て、軽く微笑したものの愉悦に浸るほどではない。あくまでヘイズを楽しませる為の罰ではない。

はを全部折るという案も無くは無いが、後々報復されることを思うと迂闊に調子に乗れない。

彼女達の主神ロキであれば人知れず眷族の一人や二人社会的に消す事も可能だろう。

「ほらほら手を退けて下さい〜。痛いのは百も承知ですが、私も仕事として請け負う以上妥協できないんですよね〜」

泣きながら鼻から手を離したのを確認し、即座にまた剣を振るう。今度は鼻そのものを削ぎ落した。

最初の痛みが酷すぎて何が起きたのか分からなかった。だが、目の前が少し広くなった事だけは分かった。

地面に落ちた鼻をヘイズは拾い、声を失っているレフィーヤ達が見ている前で遠くに投げ捨てた。——実際はフリで鼻の代わりに小石を投げた。

「ぎゃああつー！」

「なんてことを！」

アイズの代わり叫んだのは外野の二人だった。すぐに駆け出してどこに行ってしまった。

鼻を失ったアイズは鏡が無くとも顔から血が噴き出る様子を見て意識が少し遠のきかけた。

何か言おうとしても呻き声だけ。

アイズだけが残り、ヘイズは掌に乗る鼻を眺めた。生物から切り取っただけあり、少し動いているように見えた。

（治療師ヒトラーとして私は色んなものを見て来ました。もうこれくらいでは動揺のか……。それとも感覚が麻痺しているのか）

身体を震わせて朦朧としているアイズの姿が酷く無様で苛つかせる。

美貌の剣士として持てはやされた「剣姫」の哀れな姿はとても英雄とは程遠い。しかし、それは無理からぬことだとヘイズも分かっている。

どんな英雄も等しく良い面と悪い面があるものだ。

自分が理想とする英雄はきつと痛みを知らない化け物に違いない。そう思いながらアイズの鼻の在った場所に剣を突き刺す。あまり深すぎると死ぬ可能性があるので僅かに剣先が沈む程度だ。

痛い痛いとは小さく呟くように言いづけ、段々と言葉が消えていく。

やり過ぎなのは自覚している。だが、嫉妬はそう簡単には消せない。

剣を引き抜き仰向けに倒し、鼻目掛けで何度も殴りつけた。朦朧としているので何の抵抗もしてこない。それゆえに虚しい攻撃になっていた。

完全に意識を失ったのを見て、彼女の鼻を傷口に乗せて回復魔法を唱えた。

貧血は想定内だが、その程度で彼女にとつて罰になるかは分からない。

「フレイヤ・ファミリア」では四肢の損壊は日常茶判事だ。自分達の眷族であれば鍛錬の一つとして処理されてしまう程度のもの。

本当に命を捧げる事が罰に匹敵するのではないかと。

♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪

結局のところヘイズのやったことは自身の憂さ晴らしだ。それでは罰にならない。

かといって被害者に対する謝罪にしてもエルフ側はせいぜい怒りに任せて殴るか、剣を突き刺すかしかしないだろう。許しは論外として。

命にかかわる怪我に対して同じような怪我が等価と言える。

(失神している今ならあちこち刺せそう。本当に股間を突き刺してみようか。……さすがにフレイヤ様に叱られるか)

丸坊主にしても魔法で治せたりするので却下。——見た目は面白いかもしれないけれど、後々自分も丸坊主にされそう。

治療魔法によつて顔が元に戻ったアイズを見ていると少し苛つきが戻ってきたような気がした。なので鼻は削がずに大きな傷跡を付ける事にした。意識が無い状態なので抵抗も叫び声も無かった。

あまりに傷が深いと脳を傷つける恐れがある。そうなればいくら魔法でも完全に癒せず障害が残る可能性が出てきてしまう。

作った傷は低級の回復薬ポーションで癒しておく。そうすることで怪我だけ治り傷跡がしつかりと残った状態に出来る。

(「剣姫」を実験台にした私はきつと酷い死に方をしそうです。串刺しとか……性器破壊とか……下半身を喪失とか……)

念のために自動回復の魔法を自身に掛けておく。そうすることで戻ってきたアナキティ達の奇襲に対処しておく。

軽く呼吸を整え、飛び出していったアナキティ達の帰りを待ちながら精神統一する。レベル6の【剣姫】を倒した。しかし、条件付けの勝利なので卑怯ともいえる。本来の目的は別にあるし無効で良いと判断する。——真つ当な勝負ならまず勝てない。それはヘイズ自身が一番理解していた。

（エルフへの謝罪は根気強くやってみようか。私なら許しません。その場でパントツくらい脱がせるかも……。ん、日頃の疲れが出ているのでしょうか。発想が物騒なものしか出てこない）

怪我をさせたらきちんと癒す。それは場合によつてはやつてはいけけない時もあるだが身体が既に自動化されたように行動してしまう。治っていないと落ち着かないというか。

だからどんなに残酷な状態にしようとも元に戻せる自身がある方法しか取れない。そこが自分の中では甘いと思われる部分だ。相手が憎くとも自分は治療師だと自覚させられてしまう。

（腐敗が始まった手遅れの状態でもない限り治してしまいそうなんですよね）

それにヘイズは自身が火炙りの刑に処されても完全復活する自信があった。さすが

女性の鼻を削ぐという行為自体が彼女達にとって忌避される事なのは理解した。もちろん、ヘイズ自身も残酷な事は百も承知だ。あと、ちゃんと治した事も確認してほしかった。

大量に血を失っているので栄養をしっかりと摂らせるように言っておいた。アナキティ達は不満タラタラの様子だったが素直に聞き入ってくれた。

「フレイヤ様から【剣姫】を八つ裂きにしろとは言われていません。罰を与えろとも……。けれど、今のままでは【剣姫】は目に見えて衰弱するでしょう。それを危惧されたから私が派遣されたのです。方法は問わない、という条件で」

正しくは方法は任せるわ、だ。

ヘイズにとっては久しぶり休日気分です調子に乗っていたところもある。それでも仕事としての意識は忘れていない。

神の視点で【剣姫】が危ういと判断されたのだから、それを是正するのが眷族の務め。滅私奉公の気持ちで臨んでいる。

「私が被害者なら鼻を削いだ程度じゃ許しませんけどね」

「……それにしては酷すぎますよ」

意識のないアイズの顔に包帯を巻くレフイーヤがヘイズを睨みつける。

手法は確かに褒められたものではない。かといって無傷の綺麗なままで相手に臨め

るかと言えは否である。

言葉による謝罪で殺人を許すほどお人好しの冒険者が居るなら見てみたいものだと言葉には出さずに思うだけにした。

（私のうっかりで友達を死なせてごめんねって言つて許せるのか？ 余程の悪党なら言いそうだが……）

【劍姫】は優しい人物だ。甘えとも取れるが。

そんな人物が今、魂が傷つくほど疲弊している。時が経つごとに傷は広がり、やがて戦えなくなる。本当に戦えなくなるかは分からないけれど。

少なくともフレイヤはそれでは困ると思っている。

「……ああ、それと私の事を許す必要はありませんよ。元々敵対派閥の眷族同士ですし」
 そう言いながら剣を一閃させ、意識のないアイズの右肩から肘の中間地点を一太刀で斬断する。

唐突な凶行にアナキティ達は悲鳴を上げるだけで何も出来なかつた。

すること全てが残酷極まりない。こんな眷族は『闇派閥』^{イワイルス}の団員以外に見た事が無い。

驚きで身動きが取れない二人を他所に血が噴き出ている様子を全く気にせず落ちた腕を拾上げた。

切断面に水筒の水を振りかけた後、『ディアンケヒト・ファミリア』に依頼していた薬

怒りを煽らせるアナキティはヘイズに対して殺意を抱くが冒険者として「ロキ・ファミリア」の団員として武器を持つ手を緩めなければならぬ事は頭では理解していた。それでも許せない事がある。だから――

ヘイズ・ベルベットの顔面へ渾身の力で蹴りを見舞った。

骨が折れる様な異音が側に居たレフイーヤの耳に聞こえた。

唐突に攻撃されたヘイズは地面に何度か打ち付けられつつ転がっていき、自身に掛けた自動回復が発動したのか、攻撃を受けた個所に金色の魔法円が現われる。

彼女が持っていた手荷物は――運よく処置の為に地面に下ろされたまま――無事だった。

自動回復の様子を見てアナキティは思わず舌打ちし、そのまま駆け出した。

(……厄介な魔法ね、全く。それでも痛みまでは無くせないでしょう)

猛然と襲い来る猫キャットビートル人に対し、ただの人間の少女にはなすすべが無い。たとえ同じレベル4だとしても。

【ステイタス】の細かな数値の上でヘイズが上回っていたとしても無防備を晒した瞬間を狙われてしまえば呆気なく終わってしまう。しかし、それでもヘイズはただ者ではなかった。

【ファミリア】の『洗礼』に毎日揉まれていた彼女にとって不意打ち程度では気持ちは

折れない。かといってダメージまで無効化は出来ないが。

戦意を振る立て、首を強引に戻してアナキティを見据える。

(……脳震盪？ 掛け値なしで蹴ってきたつてことですね。……ちよつと目が霞んでますよ)

回復が作用している筈なのに頭は酷く揺れていた。怪我は治つても衝撃はまだ治まっていないということになる。

抵抗しようにも武器は地面に置きつ放し。確か荷物の近くに、という所まで制限時間が来てアナキティに対処する為に思考を切り替えざるを得なくなつた。

「がああああー！」

獍猛な雄叫びと共にアナキティが突貫する。

頭が揺れて迎撃体制に移れないヘイズは強烈な蹴りを脇腹に受け、吹き飛んでいく。更に追撃とばかりにしなやかに飛ぶ猫キャットピープル人。

自動回復できる相手だからと容赦ない猛攻に対し、ヘイズは呻く事しかできない。

(……後衛潰し共が……。調子に乗るなああ！)

胃の内容物と血をぶち撒けながら闘争心を燃やす。生きてさえいれば起死回生が出来るとはいえ呼吸が出来なければ意識を保てない。

怒りに身を任せたアナキティは刀剣類を使わず肉弾戦のみで打撃していく。

いかに自動的に回復できる能力を有していようと許容量を超えるダメージを受けてしまえば意味が無くなる。

彼女達の下にたどり着いた時は全てが遅かった。

魔法の効果時間は既に切れていたのか、血塗れになったヘイズの回復する兆しが一向に確認できない。

『オートヒール自動治癒』として時間制限がある。彼女がその魔法をかけてからアナキティ達と合流するまで結構な時間を消費していた。——だが、だからといってその程度で持続時間が切れるものだろうか。

実際は意識が朦朧としたまま連続戦闘に入り、完全に気を失っただけでまだ間に合う、という事もある。ならば——

「アキさん！ もうやめて下さい。死んでしまいます」

「フウ〜！ フウ〜！ フウ〜！」

体毛を逆立て興奮状態のアナキティを羽交い絞めするように拘束するが止めきれない。

真面目な仲間だと思っていた女性がここまで怒りを表すところをレフイーヤはあまり知らない。特に自制が効かないほどの怒りは記憶に無いほど。

それと地面に座り込むように倒れているヘイズはもはや生きているとは思えない姿

に変わり果てていた。

様々な荒事を経験してきたレフイーヤですら目をそむけなくなる惨状とでも言え方がいいのか。

血塗れなのは遠くからでも分かっていた。

片目が飛び出し、顔の中央から額にかけて皮を剥がれたような状態で今も血が噴き出ている。早く止血なり応急手当てをしなければ助からないのではないかと思わせる。

意識が既に無いにも関わらず胸は動いており、手足も——微かにだが——動いていた。

慌てて荷物を確認すると何も持っていない事に気付いて、元居た場所に戻ろうとしたがアナキティはまだ怒りに震えていた。

「ヘイズさんを殺してはいけません。この方は誰も殺していませんのですから。お願いです。私の話しを……、声を聞いて下さい」

（……レフイーヤ・ウイリデイスの……声が……。私が死ぬ？ ……ああ、魔法の効果が強制的に……、急いで唱えなきゃ……。口が動かない？）

意識まだ残っていたが身体が利かない。

ヘイズは思い通りに行かない現状に苛つきを覚える。死ぬような目には何度も遭ってきた。その度に復活してきた。それが今回こそは終わりだともいうのか、と疑問を

抱く。

顔は熱を帯びたように熱い。視界は何故かきかない。頭が激しく痛い。思考が乱れる。

フレイヤの命を受けたのに不履行になるのは我慢できない。敬愛する女神の為ならば命すら捧げられるというのに――

ヘイズの心の火は未だに消えていないのに身体は全く言う事を聞かない。それがまた腹立たしい。――背中に刻まれた「神聖文字」が焼けるように熱を発した。

女神フレイヤが立ちなさいと命令しているかのように。

なけなしの気力を総動員し、詠唱に意識を傾ける。

「……【アース・グルヴェイグ】」

最初の一撃目で意識が朦朧としなければ同じレベル帯に負ける要素は殆ど無い。

身体中が発光し、治療の効果が始めたが殴られ過ぎたせいでまだ本調子になれない。立っているだけで意識がまた消えそうだった。そこに猛獣の拳が叩き込まれた。どうやらレフイーヤが荷物を取りに行った一瞬をついたものだった。

そのお陰か、アナキテイの拳に今も握り締められている鼻の残骸が近寄ったお陰で癒着しようと発光する。

唐突に腕が引つ張られたことで少し混乱したアナキテイの腕を手探りでヘイズは掴

み、見えないながらもひねり上げる。

「……このクソ猫が……。傷ついた程度で逆上しやがって……」

「シヤアアア！」

獣人種特有の『獣化』のような凶暴な一面を見せる。

ヘイズの顔面の修復がある程度済んだところで視界が良くなってきた。それでも尋常ではない痛み^のせいで涙が勝手に出てくる。飛び出した眼球が僅かに渴きを感じたせいかもしれない。

怒りはヘイズも感じているがアナキティほどではない。思考はとても冷静だ。

いつものように腹が立つ他派閥の団員の相手をさせられている事を再認識しただけ。

(帰っても役に立たない団長オツタルの尻ぬぐいが待っているというのに……。こんなところで寝ている暇は私には無い)

という怒りもまたいつも感じている。

仲間が傷ついた程度で理性が保てないなど片腹痛い思いだ。ヘイズはだいぶ回復してきた己の状態を冷静に分析しつつ反撃の機会を窺う。正直、黙ってやられるほど人間が出来ていない。

さつと周りに顔を向けると慌てたレフイーヤが荷物を持って駆け寄ってくるところだった。

た。

思考がぼんやりしているし、目に見える風景は現実離れてしている。意識を失った時、にたまに見るものなのは理解した。

ならば無理に歩き回っても仕方が無い。寝転んで目覚めの時を待つだけ。そうであれば——手遅れになってしまった時だけだ。

「まだ逝くことを私は許していないわ」

聞き覚えのある声。それは間違いなく主神フレイヤのもの。

咄嗟に飛び起きたい衝動も一瞬で拡散し、身体は怠惰を求め、おそらく体力をかなり失ってしまった。

怪我は治るが失った血は簡単には戻らない。仮に目覚めてもすぐに意識障害に陥る。何度も瀕死の重傷者を見てきた勘がそう言っていた。

(……あのクソ猫、しこたま殴りやがって……。どんだけ血が流れたんだ？ 臨死体験みたい)

異常な脱力感も身体が死に向かっている為だと思われる。

ここから脱出するには自分を呼ぶ声などが必要だが怪我の度合いがよく分からない。顔を殴られていたところから頭の打ちどころが悪かったのだと推測できるが、逆上した猛獣の攻撃で死地に追いやられるとは想定外だった。

慌てても仕方が無い。無理に足掻くと余計死に近づく恐れがある。今は大人しく体力回復に努める。

(……フレイヤ様の声はきつと幻聴だ。弱い私の作り出した妄想……)

「そう思うのも仕方ないわ。恐らくだけど、存在が希薄になった事で私の声が届く安くなったのではなくて？　つまり早く目覚めないと本当に死んでしまうわ。少し無理をして声掛けしているんだから……」

(幻聴じゃない？　……本当に死にかけているんだ、私……)

「こういう時はどうすればいいのかしら？　土下座？　姿が見えないのよね？　……えと、じゃあ……戻ってきたら一日添い寝してあげるわ」

(はい！　何とか頑張ってみます！)

元氣よく思ったものの声は発せなかった。だが、生きる気力が生まれた、というか強まったお陰で景色に大きな罅ひびが入った。

自分を鼓舞すると共に声だけのフレイヤからも応援の愛の手が聞こえてきた。

必要としている女神の声があればヘイズは何度も立ち上がれる。

たかが貧血。目覚めたらすぐに苦を食おうと強く強く思ったところで意識が暗転した。

♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪
♪

気が付いた時はどこかの施設の寝台に寝かされていた。

うっすらと記憶の奥底から次に自分が何をしなければならぬのか忘れないうちに声に出す。

今の自分に必要なもの――

「肉を食べさせてください！」

元氣よく声を出した途端に意識が少し遠退きかけた。まだ身体の血は少ないままだった事を思い出す。

過度な活動を控えつつ小声で回復魔法を唱えておく。

声に気付いてやってきたのはエルフのレフィーヤ・ウイリデイスだった。

敵対派閥だったが構わず食べ物を要望しておく。戦いは後回しだ。

まずは水を一杯飲んでから出された食事手を付ける。本当ならすぐにでも手を伸ばしたいところだが戻す可能性があるので少しずつ口に入れる。慌てても身体に栄養が行き渡るわけではないので。

少し落ち着いたところでレフィーヤから事情を聞くと昏倒してから三日以上も過ぎしており、既にダンジョンからも脱出していた。そして、今は『摩天楼^{パベル}』の診療所に入院中とのことだった。

「重体が三人、元氣なのは私一人。その状態でダンジョンから出るの大変だったんです

よ」

「四人中三人が重体ということはレフイーヤ・ウイリデイスが三人も担いだということですか？」

「そんなわけないじゃないですか。アキさんが痛みをこらえて担いでくれたんですよ」

「……あのクソ猫が？」

「……治療師^{ヒーラー}なのに口が悪いですね。丁寧に喋る方だと思つてたのに……」

「敵ならクソつてつけるだけです。……それで……他の人達は別の病室ですか？」

そう尋ねるとレフイーヤは苦笑を滲ませ、口ごもる。

ヘイズは個室を与えられたようだが他の患者や担当医の声は聞こえてこない。偶々^{たまたま}

空いているのか、それとも防音設備が備わっているのか。

答えにくい事なら、と別の事を尋ねた。主にヘイズの右腕とアナキティの尻尾だ。

そちらは既に「ディアンケヒト・ファミリア」に届けてあるという。それを聞いてヘイズは——自分の事は今は置いて——忘れ物は無さそうだと思つた。

過酷な『洗礼』を受けていた時でも食事を摂っていた。それを三日も疎かにしていたせいか、身体にあまり力が入らない。その間の排泄はどうしていたのか今更になつて気になつてきた。

貧血気味で頭がよく回っていないのか、思考が時々断裂したように続かなくなること

一応連れて帰るのかで話し合いが行われた。

(……普通に考えて他派閥の私をその場で処分した方が話しが早そうですね)

自分ならそう考える。そして、大きな問題に発展していく。

下位の団員同士の争いごとではあるが『迷宮都市』にとつては「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」の抗争勃発か、と騒ぎになる可能性が少なからずある。ヘイズにとつてもそこまでの規模は望んでいない。

アイズは取り乱していたもののヘイズ側に就いた。当初からその立ち位置が変わっていない事に少し安心した。

件のアイズは早速、切断された腕を持つて被害者である「疾風」に謝りに行っているという。その後の経過は分からないがすんなり許してくれるとは思っていない。——自分ならそうするからだ。

「……ヘイズさんはどうしてそんなに残酷なことが出来るんですか？」

少し意識が飛びかけていたところに質問が来た。

まだ本調子ではないためか、長く起きていられない。怪我は魔法で治せるとしても失ったものの再生は時間がかかるらしい。

「身命を賭して戦い続けられるか、道半ばで諦めるか。その線引きをしているだけです。私がいなくてもダンジョンやモンスターは容赦なんかせません。こちらは死な

ヘイズが長期入院している頃、利き腕をまた失ってしまったアイズ・ヴァレンシユタインは目の前に転がる己の右腕を眺めていた。

適切な処置を施されたそれは長期的に腐敗を防いでくれると聞いている。それにとつて被害者への謝罪も長期に臨めるとのことだ。

片方の腕が無い。それだけで体幹が崩れ、動きがぎこちなくなる。その補正をするのも鍛錬の一部だと己に言い聞かせる。

【疾風】ことリユー・リオンの下に向かつて来たアイズが目の前に切断された腕を置いたので——それと同時に隻腕の姿になった【剣姫】にも——驚いた。

まだ上手く喋れないエルフのリユーは呻く事しか出来ない。精神的なものなのか、怪我自体は殆ど完治している、とは言われている。

「……私の不注意で、貴女を、アリーゼを死なせた。ごめんなさい。命以外で差し出せるものはこれしか、浮かばなかった」

（……私が死んだ……。あの時の攻撃は【剣姫】の武器が飛んできたから……。事情は聞いていましたが……。謝罪に来られるとは……。その為に腕を……）

リユーは喋れたとしても何を言えればいいのか分からないくらい混乱した。

当日ならば怒ったかもしれない。今は精神的に落ち着いていて冷静な判断が出来るようになった。その上でアイズの謝罪を受けているわけだが、どうすればお互い納得す

るのか分からないし、良案が浮かばない。

黙っているとアイズが両膝を屈し、より平身低頭の姿勢で謝罪してくる。本当に悪いと思つて色々と謝り方を考えてきたのは理解した。

（アリーゼの最期は……私の責任か……それとも剣を飛ばした【劍姫】のせいか。私がそうであつたようにあのアリーゼも目の前の惨状に平気でいられたわけがなかつた……）

【ガネーシャ・ファミリア】の団長シャクティ・ヴァルマからは心が死んだ、という表現を聞かされた。

もし、自分だつたら——そう考えると腑に落ちる。

自らの意志は既に無く、止む無くの凶行だつた筈だ。原因はどうであれ——アイズは深く反省している。最初に出会つた頃と比べれば驚くべき進歩と言える。

一日目は気が動転していたが二日目も同じように謝罪に訪れた。おそらく許しを得るまで続けるのだらうと。そうしないと【劍姫】という少女は儂く壊れてしまう。アリーゼ・ローヴェルのように。

もし、喋れたら立ちなさい、と叱咤している所だ。相手からの返事が無い、というのは不安を募らせる。もちろん、こちらから何も言えないのもまた辛いのだが。

それよりもエルフのリューは同族以外に触れられる相手が殆どいない。本当なら肩や頭に触れて慰めるところなのだが、それがどうしてもできなかった。

相手がベル・クラネルであればおそらく触れられる。それを考えると【劍姫】に申し訳ない気持ち湧いてくる。



リユートの舌は味覚を感じ取れるが麻痺したように上手く動かせない。それによって魔法を唱える事が出来なくなつた。同じような理由で王族のハイエルフリヴェリアも診療所に通い、検査を受けているという情報を得ている。

運動においてリヴェリアの方が勝つてまきいるがレベル6にしてエルフの代表者の陥落は他人事とは思えなかつた。

呑気に入院生活をしている場合ではない、と頭では分かっているのに身体は思うように動いてくれない。それでもだいぶ改善してきた。

言葉は発せないが筆談なら問題ない。何度か応援の文言を無礼と思いつつ送つたことがある。当のリヴェリアからも返事が来た。それだけで生きる気力が湧いてくるようでお互いの調子は僅かずつではあるが快方に向かつていた。

その最中にアイズが謝罪に訪れた。片腕を失いながら。いや、自分で落としたのか、落とさせたのか。それはリユートには分からないが尋常ではない覚悟をもってやってきたのは理解した。それと後で気付いたが顔に傷が出来ていた。

(普通に考えれば腕一本程度で許せとは随分と誉められたものだ、とか言う場面か……。

だが、あの「劍姫」が真摯に頭を下げている。……それを安易に許す事はアリーゼの死を冒瀆する事になる、のか……)

どの道、結果は変わらない。と、人は言うかもしれない。死を覚悟したからこそゴジヨウノ・輝夜はアイズに討ち取られた。それに對する怒りは無い。

リユーがアリーゼの最期は酷く絶望していたような気がする。シヤクテイから聞いたように心が死んだ、としか思えないような状態に陥った。

彼女の本来の最期はモンスターとして討ち取られる事だった筈だ。それをリユーは素直に受け取れなかったが――

(……アリーゼ。天界に居るであろう貴女から見て何か良い案を出していただけませんか?)

そう空に向かって問えばいつもの快活な彼女の声が聞こえそう。

もし、仮にそれが有り得たならば、きっとこう即座に言つてのけるだろう。

ムリね!

と、憎たらしいほど澆刺とした笑顔でのたま宣言が容易に浮かぶ。

偶然飛んでいった劍がリオンの心臓を見事に撃ち抜くとは「劍姫」ちゃんも想定していなかった筈よ、と補足も交えて。

細かな説明を一言一句覚えているわけではないが、確かと過去の説明を思い出す。

劍を握った利き腕を地面に叩きつけて魔法で吹き飛ばした、と。

それだと劍だけを意図的に投擲した事にはならない。飛んできたのは劍だけなのは現場検証した「ガネーシャ・ファミリア」が把握している筈だから。

偶発的な事故だとしてもアイズが悪い事は明らかだ。罪の意識をもって謝罪に来る姿勢も受け取らなければならない。だが、気持ちの中では怒りと悲しみが鬨ぎ合っていた。

結果論から言えばアイズも悪いしリユーも悪い。最善の結果が出せない自分達の無能さを恨めと「フレイヤ・ファミリア」辺りなら言われそうだ。

リユーは地面に置かれているアイズの利き腕を拾い上げた。普通に人に触れる事よりは忌避感が無い為か。それを自分が与えられている病室に持ち帰る事にした。

何度も持つてこられても困るし、途中で投げ捨てられるかもしれない。であれば一時的にせよ預かった方が無難だ。

アイズは何か言いたそうな様子だったが何も言わずに立ち去った。

明日もまた来るだろうと見当をつけ、リユーは彼女の姿が見えなくなるまで見送った。

病室に持ち帰った腕を台に乗せて観察する。肌の露出が無いほど徹底的に包帯に包まれおり、身動き一つしない。

怪我をしたのはすでに周知されている。ではなにがそんなに彼らを怖がらせるのか。談話室に向かうとレフィーヤを始めとした見慣れた団員達の姿に【ロキ・ファミリア】に帰ってきたという時間が持てる。残念ながらリヴェリアはまだ入院生活を続けている。

「……日に日に怖い顔になっていくわよ。被害者とか言うエルフに何か言われたの？」
いつも団長に付きまといている女戦士アマゾンネスのテイオネ・ヒリュテが訝し気に尋ねてきた。
鏡を見ていないので今、自分がどんな表情なのか分からないが皆が怖がる表情らしい。

確かに顔の中央に目立った傷跡があるけれど、それ以外はいつも通りだと自分では思っていた。

「怒った顔というより表情が無くなった、が正しいかもね。人間味のある顔から遠ざかってきているわよ」

「……そう？ ……よく分からない」

空いている席に座り、特に何をするでもなく辺りを見渡す。

謝罪に出かけることを決めてから元気をなくし続ける金髪金眼の少女剣士に団員達は扱いに困っていた。団長や幹部、幹部候補でもない者は近づく事を躊躇うほど。

ずっと塞ぎ込んでいるよりマシではあるが今のままでは彼女の身体、というより心が

持たない気がした。かといって何か出来る訳もなく。

謝れば許される、そんな簡単な事ではない。フィンからも長期戦になるから温かく見守るように、と各団員に通達されている。

そこにエルフのお姉さんと呼び声高い【純潔の園】エルリッパアリシア・フォレストライトが近寄った。

「同胞の人は何か言ってた？ ……あ、喋れないんだったわね」

「特に何も……。それと腕を持って行かれた」

「……それを素直に見ていたの？」

アリシアの言葉にアイズは無感情に頷いた。

顔から表情が消え、いずれ何も言わなくなるのでは、と誰もが危惧していた。それでも自分達に出来る事などたかが知れる。

場合によっては同胞の人である【疾風】の下に行つて取り返してきてあげる、と言うと今はいいと素っ気無く言われた。

だいぶ心が疲弊している。それは誰の目にも明らかだ。

（アキは尻尾を失つて部屋に引きこもっているし、アイズは段々白化しているように見えるし……。ヘイズ・ベルベットは半殺しに遭つた後は大人しくしているという事だつたけれど……。誰もが疲れ切っているわね）

何の表情も表さないので見ようによつては睨みつけているとも取れる。

「何の用？ まさかヘイズ・ベルベットを半殺しにした事？」

腰骨を少し痛めているので動きが鈍いが下位の冒険者程度なら迎撃できる。さすがにアイズ相手にはもう叶わない。——だから、少しだけ覚悟した。

雰囲気からも彼女は何か怒っている。それが伝わってきた。

「……そう、なのかな？ ……うん。私は怒ってる、みたい……」

「黙つて怒られるのは気持ち悪いから説明してくれるとありがたいわ。……この通り尻尾が無くて激痛で満足に動けないのよ」

正しくはそんな状態で二〇階層も流血しながら踏破した為に危険水域に突入した。

もう少し帰りが遅ければ下半身不随もおかしくないと強めに叱られた。

今は回復薬ポーションや何人かの治療師ヒーラーのお陰で最悪は脱している。

仰向けで眠ることは出来ず、胸を圧迫するよううつつ伏せや横に傾けながら安眠を模索している。

「アキも罰を受けたんだよね？」

「は？ 罰なら絶賛受けている最中よ。……なに、ヘイズ・ベルベットに頭を下げに行けって？」

「ベル。……アキはベルにまだ謝ってない」

ぶつきらばうなアナキテイの言葉にアイズは頭を左右に振る。

ベルの名を聞いた時、彼女は何のことか一瞬分からなかった。だが、少し経ってから理解した。

ダンジョンで唐突に彼に殴りかかった事だ。確かに当初はそれに対する謝罪を考えていた。

ヘイズ・ベルベットの所業の酷さですっかり頭から抜け落ちていた。

「今は無理よ。見てわかるでしょう？ 腰を痛めているし、無理をすれば……」

「大丈夫。万能薬エリクサーを持ってきた」

(……この子怖いんだけど……)

今のアイズは手段を選ばない危険な存在にしか見えない。

たまに強引になる事はあるが今はより危険な方に舵を切っている気がする。その証拠にベッドに近づいてうつ伏せで寝ている彼女に近づいて布団を剥ぎ取り、寝間着のズボンをずり下ろそうとした。

尻尾の部分は化膿防止の薬液をしみこませたシップを張り付け、その上で包帯が巻かれている。あまりに乱暴に筆り取られた為に傷跡が大きく、出血を押さえる為の処置に数時間を擁した。——つまり見ず知らずの相手に長時間尻を見せる事になった。

そして今、尻を丸出しにされて顔を赤らめる。下半身がまだ痛いので逃げる事も困難

を極めた。

「ギャツ！ 痛たたつ！ ちょよ、ちょっとアイズっ！ やめなさい」

まず動きを止める為か、腰目掛けて踵落としを叩き込み、動きを制限してから包帯を剥ぎ取った。

尻の上の方は赤い溶液を塗られた為か、血塗れのように見えるが血は垂れていなかった。——アイズが蹴りつけるまでは。

穴のように見える尻尾の傷跡に万能薬エリクサを注ぐ。

「ばっ！ 傷口を塞いだら尻尾が……」

「付ける時にまた斬ればいい」

「斬られる私は困るのよー」

文句を言いつつも痛みが引いていくのが分かった。だが、液体を臀部に振りかけられているので傍目にはおしっこを漏らした状態に見えなくもない。

自然乾燥で目立たなくなることを祈るばかりだ。

治療院で万能薬エリクサを使わなかった理由は傷口が完全に塞がってしまう事と在庫がそもそも無かった。急患用の備品に欠品が偶々たまあった為に。

不運というのは続くものだ、とアナキティは半ば諦めの境地だった。

濡れたズボンとは下着と共に脱いでしまい、大きいため息をつきつつベッドに腰かける

体勢になった。下半身に何も身に着けていない状態だが女同士という理由で放置した。

年齢的にアイズより年上のアナキティは我儘な妹分にいつも振り回されてばかり。今回の事も大筋では自分に責任があるのだけれど――

「治ったから今から行けとか言うんじゃないでしょうね？」

「……早い方がいい。後悔してからじゃ遅い」

（随分強引ね。精神状態がそれだけ不安定って事かしら？ ……ちよつと待つて。謝罪じゃなくて罰を受けに行けってこと？）

謝るのは構わないけれど罰は何なのか。

アイズのように命に係わるような事であれば理解も出来るがアナキティはベルに対して腕をもいだとか物騒な案件は無かつた筈だ。彼の仲間を殺してもいないし。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

一人で悩んでも答えは出ない。

アイズにそれとなく尋ねてみた。すると首を傾げられた。

――何も考えていないか、自分が罰を受けたから貴女もどうぞって意味なのか。

これがヘイズであれば理解できなくはないが――

全く表情に変化のないアイズはある意味怖い。容赦がないところから何で腹を立てるか分からない。利き腕が無い事でいきなり剣で斬りかかってくるのが無いだけマ

シなのか、と。

「……ベルに対して確かに謝るだけで罰はそれほど必要ない……。うん、私と違う」
「分かってくれたのなら……」

と、ほっと一安心するアナキティの横つ面をアイズの回し蹴りが強襲する。

手加減抜きの一撃にベッドから飛んで壁に顔からぶち当たる。

意識が飛びそうになりながら何が起きたのか。

「ベルを襲った事で団員が何人か死ぬことになった。……仕方が無い事かもしれないけれどアキがすべきは謝罪と罰を受けること。……違う。うん、違う。私から戦う理由を奪おうとした。許せない……」

アイズの身体から魔力の波動が迸り、辺りに風が吹き荒れる。

一人で悶々と失った腕を見つめている内に言い知れない怒りが溜まっていった。それを発散するすが分からなくなった。それゆえに理由を見つけて発散する事になってしまった。

本音ではベルも仲間もどうでもいい。アナキティが邪魔さえしなければ対象はヘイズになっていた。それを横取りした結果が現在の形だ。

ロキが見たらこう表現するに違いない。

情緒不安定。

元々復讐心に駆られていた幼子だった。成長するにつれて穏やかな精神状態になってきたと思われていたのに今回の事で振出しに戻ってしまった。

それでも仲間意識があるだけマシともいえる。

「謝れ」

鼻血を吹いて身体を震わせるアナキテイの後頭部を左手だけで掴み持ち上げる。

レベル4のアナキテイをレベル6のアイズが翻弄する。

体格差は同程度だが『力』^{アベリリテイ}などの差は歴然としていた。

もはや制裁と変わらない所業だが彼女の精神はとも落ち着いていた。それくらい静かな怒りをため込んでいると言っても過言ではない。

大きな物音で団長にも報告が言っている最中だが、一際大きな音が「ロキ・ファミリア」の本拠^{ホーム}に響き渡る。

慌てて駆け付けた団員達が目撃したのは椅子を粉碎するように顔を床に打ち付けた半裸の女性の姿と——僅かな月明かりに浮かぶ返り血を浴びた冷徹な【劍姫】の姿。

「ううおう！ 何があつたの、アイズ!!? アキ、死んでる!?!」

テイオナが駆け付け、現場の惨状に大いに驚いた。

問い掛けに答えず、黙って突っ立っているアイズを下位の団員達は恐ろしいものを見るような目で怯えた。

「? たぶん」

「今回の事で君を追放すると言ってもか?」

普段通りの眼差しでアイズに詰問する。声を荒げたいわけではない。アイズが非人間的に変わる事を嘆いているだけだ。

もし、追放を受け入れるつもりなら、それはそれで仕方が無いと——表面的には思う。「みんなに迷惑をかけた。……そういう事なら……仕方が無い。私が……悪い。反論、出来ない」

平坦な物言い。けれど、どこことなく身体が震えている。

何がしたいのか分からなくて怯える小さな女の子。そうフィンには見えて仕方が無い。

親として抱きしめるのが良いのか、それとも厳しい言葉による叱責が良いのか。

黙って見守って事態の悪化に戦々恐々とするのか。

親指からの警告は来ない。ゆえに現状維持以外にフィンには選ぶ道が無い。

(籠の中の小鳥ではない。一度、彼女の好きなようにさせるのもいいか。ダンジョンに潜る以外でなら……)

常にモンスターとの戦闘を望んできたアイズが変わろうと必死に足掻いている。

方法はとても褒められたものではないが、抑圧が生んだ弊害ともいえなくはないし、

無闇矢鱈と八つ当たりをしているわけでもない。

ヘイズに唆されたのだとしても当人はまだ入院中だ。あの魔女を今一度呼びつけたとしても飄々と受け流されてしまう事は火を見るより明らか。それに――

アイズは誰も殺していない。

それは変わらぬ事実であり、例外も含まれている。

アリーゼは言わば事故。避けられぬ運命だ、と言葉では言えるかもしれないが。

意図したわけではない。

(大事なことはゴジョウノ・輝夜との戦いが含まれていない事だ。アイズは彼女の事を気にしていないというか、何故か罰の対象に入れていない)

モンスターだから、というわけではないと思う。

いや、モンスターだからこそなのか、と疑問を抱く。

試しに興味本位で聞くが、と輝夜の事に触れてみた。

「……殺さないでいたらこっちが殺されていた。それに……正々堂々とした戦いだっ
た、と思う。あの時はそれが正しいとつ、思った！ モンスターだからじゃ……ないっ
……」

直接戦いを見たわけではないがアイズは利き腕を落とされた後、猛烈な悔しさを表した。モンスターにやられたとかではない。剣技に後れを取って敗北したと自身が認め

てしまったからだ。

アイズとて無敗ではない。何度も負けている。その上で激しい怒りをもつて悔しがる姿は久方ぶりだった。

成長して落ち着い佇まいになつてきた彼女は未だに戦士であるとフィン達は思い出されてしまったものだ。

（それに僕達は普段の戦いにおいてアイズに制限を設けている。それを任意で外すほどのだから相当なものだ）

事前にリヴェリアにアイズの事を尋ねてみたら見守つてやれ、の一言が返つてきた。おそらくこの場に居ても静観の構えは変わらないだろう、と予想している。

アイズは十六歳。もう大人として見るべきで保護者面は卒業しなければならぬとは思っている。

主神ロキも気の利いた助言一つ出せないまま。寧ろ、むし改宗コンバージョンしないか不安を抱いているくらいだ。

ベル・クラネルに懸想していると言われた方がまだ気が楽なほどに。——今のところ冒険者として好感を抱き、立ち位置的には弟子らしい。

どんどん強くなる彼の将来を楽しみにしている。それはフィン達から見れば姉のようなものだった。——実際、彼より年上だ。

昨日の変わらぬ冷徹な雰囲気を纏わせたアイズはそれだけ言つてベッドに歩み寄る。いつもの彼女であれば暴力的な事をしない大人しい少女だった。それが僅か数日で人が変わったように変貌していてエルフのアリシアはとても悲しくなつた。

よくよく見れば返り血がそのまま。風呂に入らず自室でも一睡もしていなかつたことが窺えた。おそらく精神状態はより悪い方に傾いている。

そんな彼女に近づけば何をするか分からない。特に下位の団員では取り押さえるのも悪手となると悲しげな顔でアリシアは思い、黙つて見ているしかなかつた。

襟首を掴まれたまま引きずられ、途中で衣服がボロボロになるところから追跡班を用意する事にした。

何処まで連れて行くのか分からないが、道すがら地面との摩擦で尻か尻尾の後が傷つたのか血が出てきて赤い線を作り始めた。目的と思われる場所にたどり着くまでアナキティが目覚める事は無かつた。

アイズの目的地は「ヘステイア・ファミリア」の本拠ホームである『竈火の館』だつた。

片腕なのでいちいちアナキティを離しては扉を開けたり戸をノックしたりした。そして、応対に出てきた者にアナキティを預けて帰宅の途に就いた。——それらを茫然と追跡班は見つめ、アイズの姿が見えなくなつたところで『竈火の館』に向かつた。目的は衣服や回復薬ポーションを渡す為だ。

「……聞くのも怖いけど……、この猫キャットビープル 人 君を預かってもいいのかい？」

「……しばらくの間でいいんで。アイズが大人しくなるまで……」

対応するヘステイアも尋常ではない雰囲気のアイズに言葉を失っていた。

今の彼女に掛ける言葉は無いが、今すぐ解決するものではない事は理解した。それから、と言いいおいてアナキテイのもぎ取られた尻尾を入れた容器を渡す。

(……おおう。なんてものを渡してくるんだい)

荷物を置いた後は何も言いたくない、とばかりに追跡班は撤収していった。

押し付けられた気もするが、とりあえずアナキテイの手当が先だと女性陣に指示を出した。——ベルもアイズの様子を見ていたが言葉を失ったまま立ち尽くしていた。

それからしばらくして医者を手配してアナキテイの容態を見てもらったところ全治三か月と言ひ渡された。もちろん、万能薬エリクサーを使わなかった場合の算定だ。

仮に怪我を治しても今の「剣姫」は『剣鬼』のような状態なのでまたボコボコにして送られてきそうな予感がした。

しばらく預かる事には賛成するが「ロキ・ファミリア」で何が起きているのか、ベルを含めて不安が広がっていく。

18 劍乙女の慘華

「ヘステイア・ファミリア」に預けられたアナキティ・オータムはヤマト・命たち女性陣によって手厚い看病を受けていた。

部屋数が多い本拠^{ホーム}『竈火の館』の一室を急遽用意し、そこで面倒を見る事になった。尻尾部分に僅かな突起が出来ていたので仰向けでも寝られるように手拭いを厚めに当てた。

「この方の事の考えるのはやめましょう。【ロキ・ファミリア】も無理に取り返そうとは思っていないようですし」

人助けとして首を突っ込むには相手が悪い過ぎる、と小人族^{バルウム}の少女リルカ・アーデが見舞いに来た団員に強めに警告する。

様子見は交代で見るとして「ヘステイア・ファミリア」として今後の活動を考えなければならぬ。その筈だったのだが――

(大きな騒動が終わったばかりだというのに)

見舞金を納めた後、ギルドから通達は来ていない。

【フレイヤ・ファミリア】からも。

現状、休暇とほぼ変わらない。

『迷宮都市』では毎日のように騒動が起きて死闘が繰り広げられるような場所ではない、断じて。とりりルカは付けたかった。

アナキティを残して団員達は大広間に移動した。

「……ベル様。我々はどう行動すればいいですか？」

単刀直入に聞いてみた。

白髪の人間の少年ベル・クラネルは突然舞い込んできた難題に窮する以外に出来なかった。

どの道、数日後には王族のリヴェリア・リヨス・アールヴが金髪金眼の少女アイズ・ヴァレンシユタインを伴ってやってくることになっている。そこで事情を聞いてみようと思う、と告げた。

強引な手法に従う義理は無いし、アイズのお願いだとしても納得したわけではない。

「僕らが気にしても解決できるとは思えないから今は待つしかないかな。次の『強制任務』に向けて増強を図ったり……」

看病する者を残してダンジョンに向かう方が精神的にも安定する。そうベルは思い、仲間達に普段通りに過ごすように告げた。

「ヘステイア・ファミリア」の団長として少しずつ前に進む姿にヘステイアも目頭が熱

過ぎていた。

見た目にはのんびりとした少年にしか見えない。

仲間達が置いていかれている状況は好ましくないので、心を鬼にしてダンジョンアタックを指示する。——ベル以外。

指導役が居ればいいのだがベルがダンジョンに向かうと『異常事態』^{イレギュラー}ばかり起こるので彼を抜いたメンバーで頑張ってもらうしかない。

「よくよく考えればベル君以外は移籍組だよね」

「そうですね」

『迷宮都市』^{オラリオ}に来たばかりのヘステイアもよく理解していないが本来冒険者は世界の各地で有能な人材をスカウトしてからダンジョンに臨むらしい。

唐突にオラリオに来てから冒険者を募るのは稀だとか。

ここは冒険者がダンジョンに臨む街である。冒険者になりたい者がオラリオに来る事自体が間違っている。

オラリオで冒険者になるのではなく、冒険者がオラリオにやってきて腰を据えるところだ。

ヘステイアも軽い気持ちでオラリオに来たばかりに苦労している。しかし、他の神々からすれば当たり前の事だった。

ほぼ運だけでのし上がっているといても過言ではない。そのやり方は本来、忌避されるべきもの。人類の悲願を達成するものとしては受け入れがたい甘さである。

（他の神に何と言われようとボクの【ファミリア】は止まらない。このまま行かせてもらおうか！）

青い紐に支えられた大きな胸を張り、黒髪の女神ヘステイアは気合を入れた。

次の日、休暇を得たというので竜ドラゴニユート人のアルフィア・ストラデイが『竈火の館』ホムにやってきた。

身体を隠すような外套を纏っていたが中身は冒険者には似つかわしくない豪華なドレスだった。一応、戦闘衣バトル・クロスの一種である。

「う、ちの下位の冒険者共と一緒に鍛錬に付き合わせてやろう、と思つてな」

ベルは買い物に出掛けていたので対応したのは命みことだった。

探索範囲は十階層ほど。充分開けたところで鍛錬する予定だと言った。ちなみに妹のメーテリアは本拠ホームで留守番している。

彼女の要望に団長の許可が要るといって一旦はお帰り願った。後から合流しても良い、とのことだったのでアルフィアは素直に帰っていった。

「フレイヤ・ファミリア」の鍛錬はリリ達が死ぬような目に遭う予感かしません」

「【ランクアップ】は確実に出来そうですね」

狐人の少女サンジヨウノ・春姫が苦笑しながら言った。

戦闘職ではないにしても「ステイタス」を伸ばさないといけないことは理解していた。今後の探索はより過酷になる。辛いからやめる、という選択肢は選べない。

ヘステイアとしてはベルを除いたメンバーが鍛錬する事に賛成ではある。ベルが参加すると彼の「ステイタス」は確実に爆上がりし、リリルカ達をより引き離してしまう。「猫」君の面倒の事もあるし、二人ずつ行けばいいんじゃないかな。ボクは反対しないぜ」

ヘステイアはリリルカ達の帰りを待つ以外に出来るとすればアルバイトくらいだ。

探索系の「ファミリア」の主神は根回し以外は自堕落な暮らしをする。それなりに忙しいのかもしれないがヘステイアには伺い知れない。

生産系でも治安維持でもない。神自身が率先してできる事などたかが知れる。

(タケやミアハの子供達に留守番を任せるのも気が引けるし)

たまに「ヘファイストス・ファミリア」の団長である椿・コルブランドが武器を作り態々来ることがある。本来、人様の鍛冶場を勝手に利用しないようだが彼女は大らかに気にしないらしく、来るたびにヴェルフと揉める。

元々彼は「ヘファイストス・ファミリア」の眷族——その前は「フォボス・ファミリア」——だった。

右腕は無く、切断箇所は嚴重な封印処理を施されたかのように特別な包帯に包まれていた。

左手にはガントレットが装備されていた。彼女の愛デスベレト劍の姿はどこにも無い。

早朝の訓練を見終わった後、挨拶すると普通に返事を返してくれた。毛嫌いされているわけではない事が分かり、まずは一安心する。

ここに彼女を慕うエルフのレフイーヤ・ウイリデイスが居れば絶対に近づけないところだ。

(……どうしよう。会話が進まない)

憧れはあるものの当人アイズを前にすると言葉が出なくなる。

今日来たのは早く腕を治してもらいたいのとアナキティを連れて来た理由を聞く為だ。

元々怖いところがある人だったが今回は異常だと分かるほど荒れていた。

だが、いざ覚悟を決めても躊躇ちゅうちゆしてしまう。レベル4なのに。

「……どうしたの？」

無感情な体ていで声をかけられた。

表情が豊かな人ではないと分かかっていても臆おそしてしまふ。

改めて彼女を見つめると鼻の辺りに大きな傷跡が見えた。普段は綺麗な顔なので思

わず息が詰まる。

「……腕、早く治さないと……」

「……今は、いい。……これでいい」

分かっているのであればベルも二の句が告げない。

本人が決めた事に部外者があれこれ言う権利はないし、ベルが言われても同じ対応をしたかもしれない。

口数の少ない女性ではあるが言葉が通じない相手ではない。しかし、今の調子ではアナキテイの事を尋ねても似たような返答が返ってきそうだ。

本当なら一緒に鍛錬したい所だが今のアイズは鬼気迫る気配を漂わせている。己に重責を課した彼女の隣には立てない。

一礼した後、リユーの下に向かう。直接会う事はまだ難しいらしいので人伝で対話を試みる事にした。

言葉に不自由していたと聞いていたが幾分か快方に向かい、運動も支障なくこなしているそうだ。

冒険者にありがちの「ステイタス」にものを言わせた身体能力の成せる業かもしれないが常人であれば数か月は安静にしなければならぬところだ。

(^{ついで}衝立の向こうに居るのに随分と離れてしまった感じがする)

距離的には数Mも離れていない。こちらの声も聞こえている筈だ。エルフ特有の潔癖というわけでもない。

口が上手く回らない姿を見せたくないし、聞かせたくない。という理由らしい。

ここまで会話を拒むのは普段のリューを知るベルからすれば初めての経験だ。

冒険に出る時は助けてもらったり助言をいつも貰っていたので。

「アイズ・ヴァレンシユタインさんに恨みはなく、腕を治してもらっても構いません、と仰せです」

世話係の人が伝言を伝えてきた。

切断された腕は「デイアンケヒト・ファミア」に預けてあるので頼めば対処してくれるはずだとも。

リユーからすれば突発的な事故なのは理解した。ゴジヨウノ・輝夜の性格から考えれば決闘も止む無し。アリーゼに関しては嫌いなモンスターとなってしまうた彼女を献身的に世話した事を鑑みれば恨む理由にはなり得ない、と。

直接自分の口から言えない事が心残りである事も伝えてきた。

「分かりました」

顔を見せないのは酷い怪我をしているわけではなく、みつともない自分を見せたくないだけである、と。

筆談と伝令役を交えた対話だがリユーは意外にも長く付き合ってくれた。

入院してまだ日が浅い事もあり、来月辺りには顔を見せに行けるよう頑張ります、と締めくくられた。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

気掛かりだった二人の様子を見た後、アナキテイの様子を聞いたり自己鍛錬に励んだりするうちにリヴェリア・リヨス・アールヴとの約束の日がやってきた。

正確な日時は伝えられていなかったが連絡役が先行して伝えてきたので準備を整える余裕が生まれた。

約束どおりというかりヴェリアはアイズを伴ってやってきた。少々、込み入った事情でもあったのかアイズの頭にタンコブが出来ており、顔には明らかに殴られた青痣があった。いや、リヴェリアの見えている方の顔にも打撃痕が――

(……何があったんだろう)

『竈火の館』に来たのは彼女達だけではなく、荷物持ちと思われる者が数人と簡素な服装だが腰に細剣デスレイトを佩いた人間ヒュマンの少女。

少し遅れて「ディアンケヒト・ファミリア」のアミッド・テアサナーレが居た。

まずは彼女達を大広間に案内する。

挨拶をそれぞれ交わした後、男性陣というかベルとヴェルフを除く女性陣は別室に向

かった。

居間に取り残されたベルはリヴェリアが連れて来た団員から事情を聞く事になった。「すみません、慌ただしくて。それとお部屋を貸していただき感謝します」

まずは団長のベルに頭を下げ、続いて主神ヘステイアに感謝の意を伝える。

用件は二人の怪我を治すこと。アナキティはついで。

「ロキ・ファミリア」でやらなかったのは喧嘩が始まったからだ。原因はここしばらく精神が不安定だったアイズだ。

傍観を決め込んでいたリヴェリアはベル達とダンジョンに向かうにあたって我儘なお姫様にそろそろ現実と向き合ってもらおうと思つて有無を言わさずいきなり殴りかかったらしい。

普段はやり返さない——やり返せない——アイズもこの時ばかりはやり返した。

「些細な親子喧嘩のような物ですよ。アイズは片腕。リヴェリア様は両腕ですからすぐ

に勝敗が決まりました」

軽く言われたが二人は共にレベル6だ。単なる殴り合いと本人たちが思つても下位の冒険者から見れば物凄い戦闘だったのでは、とベルは油汗が出る思いだった。

勝者の言う事を聞く理論で怪我を治させることにした。その為にアミッドと先ほどの少女ヘイズ・ベルベットを伴つた。

仮に無事に腕が接合されても数日は動かさせないから隻腕と大して変わらない、と言われた。

ヘイズの魔法は広範囲に怪我人を癒すのでアナキティの尻尾や怪我が諸々治る可能性があると小声で伝えられた。

何人が連れて来たのはそれぞれの怪我を治療する為の人員だという。

「……それで、今回の事をロキは何か言ったのかい？」

「な～んも知らん、だそです」

「……自分の子供達眷族の事だろうに。ロキがそういう態度ならボクも同じ態度になるしかないね」

両腕を広げて肩をすくめて見せると連訳役の団員は深く頭を下げた。

見返りについて言及するつもりはないよ、と小声でヘスティアは言った。本音はこれ以上のトラブルは御免だ、という事だ。

話しが一段落すると大広間の床に魔法円マジック・サークルが現われた。これがヘイズの魔法らしい。(ここれって遮蔽物関係無しなのかい？ 凄いやつ眷族が居たもんだ)

攻撃魔法ではない、という事なのでベルにも魔法円マジック・サークルの中に入るように言っておく。治してもらえらなら今にうち、と女神ヘスティアは判断した。

ベル・クラネルは少なからず連続的に戦闘に巻き込まれてきた。安物の回復薬ポーションでは癒

「腐らないための薬品を塗布したんですから。彼女なら三日くらいで元通りだと思えますよ。あと、食事と鍛錬は必須です。リヴェリア様も肉をたくさん食べて下さいね」

顔を扶られたと言っていたリヴェリアは未だに顔の半分を薄絹ヴェールで覆っていた。

ベルの前で詳細を言うつもりは無いのか、アミッドとヘイズは揃って会話を打ち切った。

アナキテイの方は尻尾は繋がったが引き続きベル達に預ける事になった。当人もしばらく「ロキ・ファミリア」に戻りたくないとか。というよりアイズと一緒に居たくないのでは、と思ったが言葉に出さなかった。

(……こんな状況でベル君とダンジョンに向かうのか)

(……色々あり過ぎて声をかけづらい。アイズさんもリヴェリアさんも不機嫌なまままだし……)

怪我が治ったからといって不満が即刻解消されるわけではない。

【ロキ・ファミリア】の事情なので首を突っ込むわけにはいかない、と頭では理解している。親子喧嘩と言っていたし、部外者のベルに出来る事は——なんだろうか、と思考を巡らせても解答にたどり着けない。

リヴェリアは何度か顎に手を当てつつ咳払いをした。それから拙いながらも言葉を発する。

「……予定、通りダンジョン、向かう」

前より聞き取りやすい声にベルは安心した。

普段の音程に当人の顔も幾分か和らいだように見えた。

リヴェリアはアイズとサポーターの団員一名。ベルはリリルカを伴いたかったが現在動けそうなのはヴェルフと命。その命はアナキティ——リリルカと春姫——の世話がある為、ヴェルフ一人だけとなる。

二名で構わないかと尋ねると頷かれた。

それとアイズの腰に愛デズレイト剣があつた。無事に返してもらえたようで安心した。普段の装備をしている方がベルとしてもアイズらしいと思えて自然と嬉しくなつた。顔は不満そうだが。

「サポーター、どうした？」

「先日、物凄い特訓を受けて寝込んでいます」

どんな特訓だったのか聞けるような状態ではなかつた。生きた心地がしなかつた、というよりは何度か死にました、とか言つていた。

春姫は真つ白に燃え尽きていた。

深層に連れて行つたわけではないそうだが、今後も連れて行く予定らしく帰り際に逃げるなよ、とアルフィアに低めの声で動けなくなつたりリルカ達に言われてしまいベル

は萎縮した。

「どうやらやるからには徹底的に鍛える所存らしい。

「……あく、私が居ないから復活できないんですよね〜」

のんびりとした口調でヘイズは言った。

その言葉にベルではなくリヴェリアが驚いた。

ヘイズは隠す事でもないのか、特訓の内容を簡単にだが説明した。

普段の「フレイヤ・ファミリア」では眷族同士が殺し合いのような戦いを繰り返す、動けなくなったら治癒魔法を受けて再度戦場に向かう事を繰り返す。

さすがにリリル力達にいきなり殺し合いはさせられないが、死ぬような目に遭わせる事は確かだとか。

全身骨折しても万能薬エリクサーで無理矢理復活させるとか。

「それでも「ランクアップ」には至りません。彼らは偉業を成していないので。酷い鍛錬だとしても「ステイタス」の上昇が見込めない事はよくあります」

無駄とは言いませんが、と添えながら。

リリル力達の「ステイタス」があまり増えないとなると絶望しそうだと言われは気の毒に思えた。

冒険者の「ステイタス」はそう簡単には増えない。何年もかけて「ランクアップ」す

るもの。だが、ベルは短期間で強くなっているので従来の感覚から逸脱気味だ。

死ぬような目に遭った程度で冒険者が強くなれるのであれば第二級、第一級冒険者の数はもつと多くなければならない。

「強い冒険者を殺せば『ランクアップ』する、みたいなことを言われたご経験はありますか?」

ヘイズの言葉にベルは頷いた。

強大なモンスターを倒せば「ランクアップ」するのか、と言われればしそうだが実際はそんな事はない。もし、それが事実なら階層主を乱獲すればいい。

下位の冒険者であれば可能性が無くもない、という程度だ。

「手っ取り早く強くなるのであればそれでも構わない所があります。ただし、今後の「ランクアップ」に悪影響を受ける恐れがあります」

「今後? それと悪影響というのは?」

「発現する『スキル』ですかね。殺しを経験した者はマイナススキルみたいな力と引き換えに何かを失う……。そういうのが出易い傾向にあります。かといって清廉潔白な者が頑張っても早々に次の段階には至れない。世の中は上手くできて、と言わざるを得ません」

分かりやすいところだと暴走でしょうかとヘイズは小さく呟いた。

序盤の内は戦闘に役立つ技能もが発現し、より高みへ至ろうとすれば無理を押しがち。過度な望みは身を滅ぼす。

(強くなりたいと望めば何かを引き換えにするくらいの気構えが必要ってことか。……僕はちやんと強くなれているのかな?)

憧れだけでここまで来た。そこに無理はなかったかと言われれば否だ。決して平坦な道のりではなく、過酷な戦闘の連続であった。

一般の冒険者はそこまで酷くない。酒場でも笑顔が多かったところから『イレギュラー異常事態』が頻発する事自体、おかしい。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

気さくなヘイズはその後、軽く頭を下げた後、帰っていった。

ベルからすれば初対面の相手だ。残ってる団員に聞くと治療師ヒーラーだと教えてくれた。

何者であれ、多くの怪我人を癒す存在に感謝と敬意を胸に秘める。

アナキティの怪我が治ったとしても命はリリル力達の面倒を見る為に留守番するのは変わらなく、男二人で行くことになった。

「そうだ、ヴァレン何某君」

「……はい?」

自分の名前をぞんざいに扱われている事にアイズは特に気にしていないようだ。

そういう愛称だと追い込んでいる、というか刷り込まれてしまったと言うべきか。

「戻って来たらジャガ丸くんを食べさせてあげるよ。どんな味がいい？ ベル君の稼ぎ次第だけ……」

(……無料ではないんですね)

(抹茶クリーム味。ピリ辛甘ダレ味。焼き塩……)

苦笑するベルをよそにアイズの脳内は様々なジャガ丸くんであふれさせた。そのせいか棘のあつた顔つきから年齢相応の可愛らしさに――

ベルは甘いものが苦手だがアイズは甘党というより新味に興味津々だ。食が細そうな印象を受けるが大体のものは食べる。

調理に関してヘスティアは店頭販売している事もあり、事前に材料を用意すれば本掘ホームで作る事も可能で、割りと人気がある。

アイズはいくつか要望し、ヘスティアは任せておけよ、と元氣よく返答した。

当初はベルの好きな相手という事で敵視していたが店の常連ということもあり、それほど悪い娘ではない事も理解している。ベルの事に関わらなければ――

機嫌を直したアイズにリヴェリアは呆れたものの元氣が出たのならそれでいいと割り切ることにした。

ベル達の準備が終わり次第ダンジョンに赴くのだが、リヴェリアは待っている間手鏡

で自分の顔を確認する。

(……顎はある程度治ったようだが、まだ違和感があるな。ヘイズをもつてしても完治には至らぬか)

アイズの腕とて接合できたものの戦闘に支障なく、という程には至っていない。

しつかりと食事を摂ってから何度か治療を受けない限り元の顔には戻らないと分かり、軽く嘆息する。

最初の酷い顔に比べれば幾分かは人に見せられる、程にはなった筈だ、と。

冒険者となったからには大きな怪我からは逃げられない。王族だからとて無傷で済むわけがない。

(アイナにはまだ見せられないな。……エイナにはそろそろ見せられるか？ 悲鳴を上げられると思って避けてしまったが……)

リヴェリアには守るべきものが存在する。その者の為にここに居る。

当初は鳥籠のような生活に飽き飽きし、外の世界を見る為に無理をおして里を飛び出した。それから数十年が過ぎてしまったが里では味わえないような波乱万丈な冒険者生活はとて充実していた。後悔は無いとは言え切れないが概ね満足している。

心残りがあるとすれば従者としてついてきてくれた無二の親友でありエイナ・チュールの母アイナの存在だ。彼女は肺の大病を患い綺麗な空気に満たされた診療所で生活

している。

(たかが怪我だ。病気ではない。……私はまだ喪っていない)

強がりを書いて本当に顔を失ったらエルフ達による阿鼻叫喚の地獄絵図が出来上がってしまう。それを思うと踏み出す脚が重くなる。

ただのエルフであれば手足を失った程度で、と言われるのだろうか(ハイエルフ)が王族となるとそうはいかない。本当に本気で世界中のエルフが悲しみに包まる。

対等に接してくれるのはエルフ以外の種族で、今はそれがとても尊く思う。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

全員の準備が終わった頃にダンジョンにいざ向かう段階でリヴェリアは追加要因を団員に告げ、そのまま歩き出した。

オラリオの中央に聳える『摩天楼』の地下にダンジョンへの入り口である大穴があり、下に向かう為の階段があるのだが、その淵では多くの冒険者が準備を整えたり情報の交換をしていた。

行く者が居れば帰る者も居る。中には探索に失敗して帰らぬ者となる。

全員が無事に済むわけはなく、ダンジョンは常に悪辣で冒険者にとっての最大の敵といえる。そして、千年以上も踏破された事が無い。

ベルも冒険者となって幾度も挑戦してきたが不安が拭えたことは一度もない。

改めて各自が荷物の点検をしていると追加要因が現われた。

一人は何度か顔を見た事がある黒髪の人間の男性ヒューマンラウル・ノールド。もう一人は会うと大体殺意を向けてくる山吹色の長い髪のエルフの少女レフィーヤ・ウイリデイス。

二人はサポーター用の背負い袋バックを背負っていた。

「……………」

顔を見た瞬間からレフィーヤの身体全体から闇のような不穏な気配が醸し出す。側にリヴェリアが居る為にも言つてこないけれど、それはそれで不安を煽られる気分になる。

二人とは違う団員の背負い袋バックからリヴェリアは今回のダンジョンアタック用の装備を取り出し、身に付けていく。

アイズは特に追加装備は無く、黙つて佇んでいた。そのアイズの腕が治っている事にレフィーヤは物凄く喜んだ。

リヴェリアは魔導士から拳闘士のような格好に変貌した。手には武骨な手ガントレット甲。足は狼ウエルフ人のベートバトル・ローガが身に着ける様な金属靴ブーツ。服装は上下とも身体の線が目立つような深緑色の戦闘衣バトルクロスになっていた。——外套に包まれていたので元々着ていたと思われる。

スカートではなく足元まで覆うズボンのみ。

翡翠色の長い髪の毛は団員の手によって一つにまとめられた。

肌の露出を嫌うエルフの服装としてはかなり大胆なものとなっている。

短いスカートに剥き出しの脚でないだけマシと言えるが。

(り、リヴェリア様……。その格好で行かれるんですか!?)

思わずレフィーヤは顔を隠した。特に下半身の大胆さに。

せめて長いスカートを穿いてもらいたかった。

ベルは彼女の長い脚について見惚れ、同行しているヴェルフも言葉を失っていた。こちらはエルフにしては大ききの分かる胸の形に。——アイズは平然としていた。

異論が多分にありそうな雰囲気は満ちたが言葉に出せた者は居らず、準備が整った

王族ハイエルフが歩き出すとベル達も黙ってついていく形になった。

悠然とした佇まい。歩幅は決して広くない筈なのに早歩きのような気分にさせられる。

通りすぎる冒険者はリヴェリアの姿に固唾を飲み、エルフ達はどうか片膝をついて見送る。

る。

アルフィアも孤高の女王としての風格はあったがリヴェリアは神聖さが伴い薄暗い

ダンジョンの中においてさえ輝いて見える。

背が高く背筋も真っ直ぐに伸びているのでベル達から見ても畏敬の念を覚える。

背が高く背筋も真っ直ぐに伸びているのでベル達から見ても畏敬の念を覚える。

背が高く背筋も真っ直ぐに伸びているのでベル達から見ても畏敬の念を覚える。

臣下を引き連れるように第一階層に降り立つと雰囲気は神聖なものから殺伐としたダンジョン由来の気配に変わる。

さつそくモンスターが現われるが有無を言わさずリヴェリアは拳で撃滅する。そこに容赦はなく、零れ落ちた魔石は踏み砕く。

(魔法を使わないリヴェリア様の戦いって初めて見るような……)

戦闘中のリヴェリアは小鬼ゴブリンより背が高い為に打ち下ろすような戦い方になっていた。子供に折檻するような微笑ましさは無く、戦姫のごとく敵モンスターを撲殺していく。

アイズも接合したばかりの右腕で殴りつけるものの想像以上の激痛に涙目となった。これはモンスターが硬いのではなく腕自体から痛みが発生した。すぐに蹲る彼女アイズにレフィーヤが治療魔法を施す。

ベル達は手伝うことなく淡々と彼女リヴェリアの後を追う形となった。

単独戦闘は最初だけで大量のキラーアント戦にはアイズもベルも参加した。

(……ああ。やはり身体を動かすと煩わしさから解放されるな)

少し汗をかきつつリヴェリアは口元を綻ほころべせた。先ほどから『並行詠唱』を試みているがある程度ポーションのところで口が回らず失敗していた。

魔法や強力な回復薬をもってしても速攻の完治は無理——いや、無謀だったと判断する。

剣類ではなく肉弾戦だ。それなりに戦えるようになったとはいえかける言葉が見つからない。

(……ベル・クラネルを供にすれば何か起きるかと期待したが……。そう簡単にはいかないか)

リヴェリアにはそれなりの打算があつた。

ダンジョン探索においてベルが高確率で『イレギュラー異常事態』を起こす。——故意にせよ、偶発にせよ。

もどかしい日常に変化を付ける意味もあつたが何も無ければそれはそれで構わないと思つていた。

(アイズはそろそろ限界か。さっさと怪我を治さないからそういうことに……)

痛みをこらえる金髪金眼の少女の様子を眺めていると天然武器ネイチャーウェポンを持ったオークに思いきり頭を殴られる。しかし、それはわざとそうさせたものだ。

助けが入らない距離でモンスターからの攻撃をあえて受ける。

リヴェリアは常に誰かに守られてきた。今回は想定外の攻撃によつて顔に大きな傷をつけられた。

魔法を詠唱出来ない程の怪我をしたことが無かつた王族ハイエルフが無様な姿を晒す。それはそれでとても滑稽な事だと自虐的に思う。

レベル6の『耐久』^{アビリティ}を持つとはいえ無傷ではいられず、思いのほか衝撃が強くて片膝を地面に付き——いや、少し意識が飛んだ。

「うおお……」

無理矢理自身を叱咤し、意識を保ちつつ唸りながら一歩強く前に出る。その勢いのまま渾身の力で拳を繰り出し、オークを殴り飛ばした。

攻撃が当たった後、思わず吼えたのは気分が高揚した為だ。

女性と言えど戦闘に携わる冒険者。その来歴は決して短いものではない。

常に冷静沈着で物静かな王族^{ハイエルフ}などではない。血生臭い世界に身をやつすリヴェリアという一人の冒険者である。

多少の打撃をもつとせず、相手の攻撃を受けから反撃する事を繰り返す。

「……はは」

鼻血を吹きながらリヴェリアは嗤う。

血の通った冒険者はこうでなくては、と。

現れるモンスターを悉く^{こじと}撃滅。野蛮な行為が続くが意に返さず——

気が付けばベル達が周りに集まっていた。どうやら粗方モンスターを倒し切ったらしい。戦いに夢中になっていて索敵が疎かになっていたようだ。

心配するレフイーヤが治癒魔法をかけてきたが黙って受け入れた。

顔に掛けてある薄絹ヴェールは血を吸って頬に張り付き視界不良に陥って意味をなさなくなっていた。

(……邪魔だな)

モンスターの返り血なのか自分の血のものなのか、バトル・クロス戦闘衣の多くがどす黒く染まっていた。

落ち着いてくると不快な匂いにも気が付く。だが、今はどうでもいいと彼女は判断した。

痛みに耐えていたアイズも今は気力だけで動いているらしく、気迫のこもった顔つきになつていた。

(……痛い。痛い。……こんな腕なんて要らないって思うくらい痛い……)

手当てを受けながら騙し騙し動かしていたが想像以上の激痛があった。腫れ上がってこそえないが内部が完全に腐っているのではないかと思えるほど。

指は動く。だが、剣がもう握れない。それと腕から頭部にかけて熱い。炎で炙られているようだ。——アイズは熱に浮かされたように前に進む。

治癒魔法で痛みを軽減出来てもすぐに再発してしまう。早めに診療所に向かつて適切な処置をしてもらう方がいいとはレフィーヤ達も思っていた。リヴェリアも限界を感じたら帰っていいとは伝えていた。

(アイズにとって丁度いい極限状態だ。腕を犠牲にして前に進むか、未来を勝ち取るか。それらを決めるのもお前次第だ)

「……あつ」

と、ここでベルが声を上げた。

リヴェリアが彼に顔を向ける。レフィーヤ達も思わず同じように。

アイズを除く全員の視線が集まって思わずベルは取り乱した。それから軽く咳払いして気持ちを落ち着ける。

「アイズさんの腕は接合したばかりで内部にはふはいきんというのがあって、それが激痛の原因、なんですよね？」

「……ああ。治療師、言葉が正し、ければ、そうだな」

「腐る寸前の腕を無理矢理繋げたって意味つすね。切断した場合は出来る限り早い治療を受けるのが鉄則だとは俺も聞いたことがあるつす」

「大抵は傷口を焼きつぶして出血を押さええるからな。俺には接合についてよく分からねえ」

周りを警戒しながらリヴェリアは腕組をして続きを促した。

接合した後、長期間にわたって腐敗菌を除去する為に解毒の回復薬や専用の魔法でじっくり治す予定になっていた。何事も性急過ぎるは身体に悪い、とはアミッドの見解

である。

「つまりアイズさんの腕をまた切り落としてしまえば痛みが無くなる、とでも言うつもりですか？」

「ち、違いますよ。そう何度も出来る方法でもないでしょうし」

「当たり前です！」

ムキになったレフイーヤに怒鳴られたが痛みの原因を除去する方法の一つとしてはありだと思つてしまった。

帰りの事を考えると一旦切除する事も視野に入れるべきなのだろうけれど、ベルとしてはアイズを救いたい。いや、彼女アイズだけではないけれど。

ベルは神のナイフとは別の白い小刀を取り出し、それを見たヴェルフが思わず声を上げる。

『白幻』
はくげん

刀身が三五セルチほどの輝白色のロングナイフ。素材は『ユニコーンの角』である。

回復アイテムの素材になる貴重なものを武器として制作した。

この武器の効果は刺した相手を解毒させる。ただし、痛みは与えるという用途不明の武器であつた。——今までは。

武器の説明を聞いてリヴェリアは眉根を寄せ、レフイーヤはこんな武器を作つた

鍛冶師スミスの常識を激しく疑った。ラウルは苦笑するのみ。

散々な感想に対して制作者ヴェルブはこめかみに怒りを滲ませるのみに抑えた。

本人からすれば貴重なユニコーンの角で武器を作りたかっただけで、効果は二の次だった。それに切れ味は頗すこぶる良いものだ。

「その武器でアイズさんを刺して解毒させようと……。バカなんですか？」

(……ですよね)

(早い内に解毒させねばならない事は分かっていたが……。何なんだ、その武器は)

「……言いたいことは分かるつすよ。……ん〜」

現場に唸り声こだまが木霊する。

仮に刺して解毒できなかったら痛みを倍増させるだけに終わる。せめて実証実験くらいしてから提示してほしかったと誰もが思った。

だが、ここに来てベルが意外なアイテムを持ち出した。これは偶然かとリヴェリアは戦慄する。——こんな『幸運』があるのか、と。

期待が無かったわけではない。彼は何かを起こす要素を持ち合わせている。その正体までは看破できなかったが目の前にすると末恐ろしさを感じずにはいられない。



効果について半信半疑の部分はありますが検証している余裕がアイズには無かった。

熱に浮かされた彼女はベルから『白幻』を奪い取り、痛みの酷い部分に突き刺した。激痛の上に刺したものだから我慢できずに悲鳴を上げる。慌てたレフィーヤが彼女の腕の根元を布で強めに縛って大量出血を防ぐ。

思わず男性陣も見つめてしまったがラウルがまず顔を逸らし、ヴェルフとベルもそれに倣^{なら}った。

リヴェリアの目から見て、傷口から白幻の刀身に毒素が移っていく様子が見えた。

(効果は発揮しているようだ。使いは酷いが……)

見た目に分かると言うのはありがたいと思い、最後まで見守った。

刀身から毒素が移らなくなった事を確認した後、リヴェリアが白幻を引き抜いた。その後、手当てを指示する。

刀身が吸い取った毒素はそのまま浄化された。

「どうだ？　だいぶ、楽になったか？」

試しに指を動かすと先ほどまでの激痛は治まっており、刺し傷の痛みは回復薬^{ポーション}を受けている側から小さくなっていった。

傷口が無くなった後は腕自体を動かしても気にならなくなった。

応急処置だから包帯を念の為に巻かせ、戦闘は任意で参加するように通達する。それと男性陣にこっちを見て良いと言っておいた。

「助か……。礼を言う」

アイズに代わりリヴェリアはベルに頭を下げる。

彼は恐縮したがアイズを救えたのなら満足ですと答えた。ただ、レフィーヤは納得できなかつたようで、不満顔のまま謝意を述べる。助けてもらったのは事実だから。

解毒できて熱までは収まらず、アイズは汗まみれとなり少し疲れを覚えているようだった。

和やかな雰囲気になる暇もなく、次なるモンスターが現われる。

少し気持ちが悪くなったリヴェリアが率先して戦いに没入していく。

前衛はほぼリヴェリア。ベル達はドロップアイテムやレアモンスターの搜索を優先させた。

アイズは怪我から復帰したばかりで思うように動けなかったが無理しない範囲で付いていった。

リヴェリアはモンスターの攻撃を受けながら戦っている為に十五階層に着た頃にはスタボロの姿に変わり果てた。

アルミラージ達から多数の石斧トマホークを受けたり、ヘルハウンドの炎を真っ向から浴びたり

レベル6の「ステイタス」でなければ何度死んでもおかしくない状態だった。

「…………ぐっ」

ミノタウロスの大剣を手で往なそうとした時、当たり所が悪かったらしく手首をひねってしまった。音から骨が折れた可能性がある。

慣れない肉弾戦を続けているのだから身体が悲鳴を上げてもおかしくない。

痛みに怯んだところ、モンスターは容赦なくリヴェリアの顔面に大剣を叩き込んだ。できた。

「!？」

切れはしなかったものの薄絹ヴェールが吹き飛び、鮮血が舞った。

高貴な王族ハイエルフは無様に地面に転がったが闘志を絶やすことなく、立ち上がる。

自分では見えないが頬から鼻にかけて大きな裂傷を生み、止め処なく血が流れ落ちる。

(…………疲労の蓄積で要らぬ怪我を負ってしまった。こんなに痛い思いをするのも久しぶりだ。…………いや、そうではないな)

モンスター相手に肉弾戦を挑むことは滅多にないが、ここまで長い時間費やしたのは記憶に無いほど。

お陰でいい運動になった、とは言わない。これは良い経験になった、が正しい。そうリヴェリアは思い苦笑を滲ませる。

籠の中で大事に育てられたままであれば決して知ることのできなかつた世界——痛み。

誰しもが頭を垂れて当たり前であった。だが、ダンジョンにはそんなものは存在しない。王族も冒険者として扱われ、等しく洗礼を受ける。

「……度し難い。だが、それも許そう」

ミノタウロスの胸に拳を打ち付ける。王族の華奢な細腕から繰り出されたとは思えない殴打音と共にモンスターの苦悶の吐息が漏れる。相手がよろけたところに長い脚を——ほぼ垂直——上げ、そのまま踵を敵の頭に叩き落とした。

一呼吸の後に後ろ回し蹴りにてもう一体のミノタウロスを吹き飛ばす。

「……アイズさん。対抗意識を燃やさなくていいんですよ」

「……ん」

リヴェリアの真似をしようとして脚を上げようとした所をレフィーヤに止められた。理由は彼女の服装が原因だ。脚を上げると下着が見えてしまうので。

深緑の風の如くりヴェリアは戦い続けた。それはベルの深紅の瞳から見ても【疾風】リユー・リオンとは違った美しさだった。

背の高いエルフの女性で脚も長く、長い髪を振り乱しても無様には決して見えない。ただ、あまり見つめてしまうと近くに居るレフィーヤに殺気をぶつけられてしまう。

しかし、流麗とは言い難く反撃を受けると容易に体勢を崩してしまふ。

太腿に強烈な打撃を受け、リヴェリアが何度目かになる尻もちをついた時、ベルは助太刀する事にした。もちろん、一言断つてから。

疲労困憊の王族ハイエルフはさすがに苦言は言わなかった。

程なくモンスターを殲滅し終わった後、回復魔法や回復薬ポーションにてリヴェリアの怪我を癒す。

最後にラウルが万能薬エリクサーを彼女の頭に景気よく振りかけた。

「無理のし過ぎです」

「……ああ。迷惑をかける」

意気消沈気味のリヴェリアの顔の大部分の怪我が消えていく。

ガントレットを外し、折れた手首には念の為に包帯を巻いていく。それはレフィーヤわこなが行い、他の者には触らせなかった。

アイズはリヴェリアが脚を高く上げた事に驚き、見惚れて金色の瞳を輝かせた。

王族ハイエルフとしての振る舞いからははしたない行為ではあるが、戦闘によつて興奮していた

為か、どうしてそんなことをしようと思つたのか自身でも理解していなかった。

後の戦いで太腿を痛めたので同じことが出来るとは思えない、とアイズに言つた。正

直、股関節が痛くなって帰りが辛いかもしれない、と心配になつてきた。

「リヴェリア様です。名前です呼んであげてください」

ヴェルフの眩きにレフィーヤがすかさず意見を述べた。

様付けかよ、と文句を言いつつもリヴェリアの無茶な戦い方に対して武器を渡した方がいいのか、意見を述べてみた。

普段は杖を装備しているが剣を持たないわけではないし、持つてはいけない決まりはない。レフィーヤも小剣を腰に佩はいている。

「接近戦が望みなのでしよう。距離を取ろうとしませんし」

それとモンスターの攻撃をあえて受けているのは理解した。

まるで自分の未熟さに罰を与えているような――

そもそも一人で戦う事自体、ありえない。魔法を詠唱出来なくなった時に抱いた不安を払拭しようと足掻いているようにも見える。

「……………ふう」

(……………身体が重い。こんなに動かしたのは記憶に無いな)

レベル6の『耐久』アビリティをもってしても攻撃を受けると痛い。大怪我をするかしないかの違いかもしれない、と。

全身くまなく打ち据えられ、回復薬ポーションなどを受けていなかったら青痣に包まれていてもおかしくない。

当初は無能と化した自分に出来る事は下位の冒険者の盾になること。それを想定した戦い方で始めた。今は純粹に、というか無心で戦闘を続けている。

小難しい戦略抜きで。ただの一人の冒険者として。

「……次から次へと。いい加減顔を見飽きてきたぞ」

痛みのお陰か、割りと口が回るようになってきたことにリヴェリアは気付かなかつた。

適度に攻撃を受けた事でまた流血しても構わず。相手の懐に猛然と突っ込んで拳を振り抜く。

アイズ達の援護など頭から無く、たった一人で戦い続けた。もちろん、ベル達も黙って見ていたわけではなく適度に援護に回っていたが意に返さない奮闘ぶりに驚いた。

純粹な戦士であれば『力』と『耐久』の数値が高いのだがリヴェリアは元々魔導士だ。前衛は得意ではない。誇れるのは『魔力』のみ。

（魔法が使いぬ私はこうやって不器用に振舞うしか……）

大振りを避けられミノタウロスの頭にある角が胸に刺さり、痛みに顔を顰めさせつつ乱暴に引き離そうとして肉をバトルシノクスごっそりと抉られる事態となった。

心臓こそ守れたが戦闘衣がバトルシノクス大きく裂けてあわや乳房が露出する所だった。

怪我の大きさからそんなことを気にしている余裕はないが左手で怪我を庇いつつ胸

を押さえながらモンスターに睨みを利かせる。

「……この、痴れ者がっ！」

唇から頬にかけて出来た傷跡が裂けたが構わず吼えた。

怒りに顔を歪ませつつ真下からミノタウロスの顎目掛けて蹴り上げた。そのせいで更に戦闘衣バトルクロスが裂けたが気にする余裕も無く、モンスターに飛び掛かる。

怒れる王族ハイエルフはその後、五体のミノタウロスミノタウロスを文字通り血祭りに上げた後、胸の痛みと出血により意識が朦朧となり、その場に前のめりに倒れた。

ベル達は彼女が倒れるまで呆気にと取られていたが、戦闘が終わった事で我に返り急いで駆け寄ろうとした。——気が付いたレフィーヤが立ちはだかり、リヴェリアに近づけない。

助けたい気持ちは理解しているが相手は王族ハイエルフなので緊急だとしても容易に多種族を受け入れる事はエルフの矜持からも許せるものではなかった。

あと、アイズは紐が結べない、という弱点があり包帯を巻かせることが出来なかった。

「リヴェリア様。帰りましょう」

レフィーヤの言葉に唸り声をあげたがすぐに静かになった。

身体のを抜いて手当てを受けたところ諦めたのか、レフィーヤの言うとおりだと認めめたのか。荒い呼吸を繰り返しつつも意識を保ち、疲れたと小さく呟いた。

「……おい」

「？」

(……えっと、何が起こったつすか?)

ヴェルフを除いて大きく目蓋を開いて驚いた。

戦闘が終わった筈なのにアイズはどうしてリヴェリアを攻撃したのか。ベルでなくとも答えが知りたかった。

下手人であるアイズは不敵な笑みを浮かべており、さすがにベルも今の彼女の様子はおかしいと思ったし、とても怖いと感じた。

「リヴェリアばかりずるい。私も戦いたかった」

口を尖らせて我儘を言う【劍姫】アイズ・ヴァレンシュユタイン。

不安定な精神状態であることは【ロキ・ファミリア】の中では知られていたがベルも何となくではあるが感じていた。今のアイズは近寄りがたい雰囲気醸し出している、と。

アナキティ・オータムのように追い打ちをかける事はないようだが、ダンジョンから帰還後の彼女はいつもと様子が違っていた。

周りに視線を巡らせた後、アイズはモンスターを探しに行ってしまった。

(アイズさんも気になりますが、今はリヴェリア様の手当てが先決ですね)

目立つ怪我を優先的に手当てしていくと全身の殆どが包帯に包まれる事態となった。レベルから考えればたかがミノタウロスなのだが、攻撃を受け過ぎてゐる為に弱体化したかのような状態になっていた。

ラウル達にリヴェリアを先に帰還させることを提言すればすぐに頷かれた。

気絶している王族^{ハイエルフ}を背負い、レフイーヤは気に食わない相手であるベル達に一応の例として頭を下げた後、地上に向かった。

彼女達を見送った後、手持無沙汰になったラウルとベル達は互いに苦笑を交えながら今後の事を話し合う。

「アイズを一人残すわけには行かないっすから。気の済むまで付き合うしかないっすね」

「^{ナイン・ヘル}九魔姫」や「^{アイン・ヘル}劍姫」といい。「ロキ・ファミア」は大変だな」

（俺達も人様の事は言えねえけど……）

僅かな一休みを挟み、新たに生み出されたモンスターと相対する。

リヴェリアが居ない今、残っている理由は無く淡々と作業のようにモンスターを倒して魔石を回収する。

ただ、ベルはダンジョンの様子がいつもと違う気がした。いつも色々な事が起きるので確証は無いのだが。

ている。

時には自分でも回収する事もあるので全くできないわけではない。

ある程度殲滅した後、地面に転がる魔石を回収しなければ、と思ったところでラウルとベル達の姿が見えない事に気付く。

(あれ? いつまに……。下に行った? それとも地上に戻った?)

下の階層に挑む時も帰還する時も仲間に声をかけるのが鉄則である。ラウル達が何の連絡もしないという事は考えられない。

つまり先行し過ぎてはぐれてしまった、となる。

元来た場所を目指して赤茶けた階層内を歩き続ける。その間も右腕の痛みが少しずつ強くなる。それに伴い頭も痛くなってきた。

腕に巻いた包帯に顔を向けると血が滲んでいた。

(荷物はラウルが持っていたはず。……。でも、そんなに離れていたなんて……)

焦る気持ちをお殺し、仲間を探すも現れるのはモンスばかり。

無駄な戦闘を避けたいところだが魔石の取りこぼしは『強化種』を生む原因となるので無視できない。

余計な体力と使い痛みを感じつつ走り続けるもベル達の姿はおろか冒険者の一人とも出会わない。完全に迷子になったかもしれないと思い始めた。

こういう場合は仲間を見捨てて下層、または上層を目指した方がいいと言われてい

る。
【劍姫】が迷子で右往左往しているとは思われないし、第一級冒険者として自己判断している想定すれば地上を目指していると判断してくれるかもしれない。それに長い時間滞在する予定でもない。

(……なら、上に行こう)

荷物が無い以上、十八階層に向かうのはあまり意味が無い。

もし、仲間が一緒だったならば下層に向かうところだ。第一級と第二級では判断基準が違う。

言い方は悪いが足手まといが居ると居ないのでは方向性に違いが出て仕方が無い。

すぐさま駆け出し、階段を探すが見つからない。——下層への階段も。

通い慣れた階層の筈なのにいつもと構造が違うと気が付いたのは更に時間が経つてからだ。どうやら痛みで判断力が鈍っていたらしい。

頭は高熱に斃うなされ、少し景色がぼやけてきた。右腕の包帯は真っ赤になり、もはや戦闘に使えない。

(……あるだけ邪魔になってきた。一旦、斬った方が楽になるかも……)

回復薬も治療魔法も無いので安易な手段が取れず、アイズは見つけた広い部屋の中で痛みに耐えた。

充分な休息期間を設けなかったのが原因かもしれないが、リヴェリアに無理矢理参加するように言われて少し頭に来た。拙い喋り方だったのが気に障ったのかもしれないが、機嫌が悪かった自分にも原因があると今は反省している。

このところ、意味も無く苛々していた。命令されるのが嫌になった。

どうして自分はこんなに怒っているのか。それとも痛みのせいで感情がおかしいのか、気持ち落ち着けていると色々と気付いたり、苛立ったり、反省したり、感情が目まぐるしく変わっていく。

(……………痛い、痛い。また一段と痛み出した)

「……………はあ」

壁際に座り込み、意味も無く小石を蹴った。

自分は何に苛立っているのか、咄嗟に出た舌打ちは何なのか。考えても分からない。顔や背中^{ホム}は汗でびっしりと濡れている。見えないが下着も濡れている気がした。

早く本拠に戻って風呂に入り、服を着替えたいと思った。

ダメですよ、アイズさん。止血をしつかりしないと。

レフィーヤの言葉が蘇る。

包帯を巻いた部分が痒くなった時、解こうとして言われた事だ。

大きな怪我の時は痒くても解いてはいけない。傷口が閉じ切っていないとまた血が流れて意識障害に陥るからだ、と。

「……駄目だ」

安静にしなればならないと分かっているにもかかわらずに眠れない。

ダンジョンの中は危険がいっぱいだ。壁を大きく傷つけてからでなければ休息^{レスト}する余裕が生まれないのは冒険者としての常識だ。

それなのに今の自分は楽な方に思考が傾いている。もうこの腕は要らない、と。後で繋がるならば、楽になって眠りたい。

(二度も斬り落とされた。なら、三度目も大丈夫)

熱に浮かされ正常な判断が出来ない為に本来ならば選ばない選択をアイズは容易に選んでしまった。

それだけ激痛が尋常ではなく、少女の金色の目が血走っていた。

左腕で細^{デスレト}剣を握り、叩きつけるように右腕の付け根付近を何度も斬り込む。思うように力が入らなかつたので苦悶の嗚咽を漏らし、痛みによつて涙が出ようとも構わず続けた。

都合、一〇回と少しで厄介な右腕は地面に転がった。何度も切断された為か、出血は

それほど無く、自然と血が止まった。——それをアイズは別段、おかしいとは思わなかった。

(……痛みが引いた？ でも、やっぱり痛い)

全体的な痛みは引いたが傷口の痛みは残っている。それでも幾分かは楽になった事は確かだ。

何度か呼吸を整えていると肩口の痛みも治まり、眠気がやってくる。

こんなところで眠ってはいけけないと分かっているも抗えない。そんな時にベルの声^{ベル}が聞こえた。自分を探している。けれども音が反響しているせい^{せい}か、発生源が特定できず^ず心配が読めない。

こちらから声を出そうとしたが掠^{かす}れた音しか出なかった。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

自分を呼ぶ声に向かって進もうと一歩足を前に出す。それだけで身体全体に痛みが走る。どうしてか^かと我が身を振り返ればたくさんの傷が見えた。

いつの間に、と小さく呟くも夢中でモンスターの^{モンスター}大軍に突つ込んだのだから当たり前だ、という結論に至る。

しかし、ここは十五階層。ここに出てくるモンスターに後れを取るとは思えないし、風の付与魔法を纏っている限り、攻撃が通る事はない筈^{はず}だった。

(痛みをこらえる為に自分で付けたの?)

ありえそうで怖い、と思いつつ前進を再開する。

ある程度歩いたところで壁際に斬り落とした腕を置きつ放しにしてきた事を思い出し、振り返ると先ほどまで居た筈の部屋が無くなっていた。

驚く間もなくミノタウロスが壁から現れる。

それらを殲滅し、辺りを見回すが通路の構造自体が見覚えのないものになっている
としか思えなくなった。

「……………えっ?」

(私の……………腕はどこ?)

痛みの原因である腕が見つかったとしても今は繋げる気はしない。だが、無ければ困る気持ちはある。

眠気と戦いながら辺りを見回すが見つからない。それに代わりベルの声が大きく聞こえてくる。

助けを呼ぼうにも声はほぼ出ない。

痛みを我慢しながら一時間以上は歩いただろうか。未だにベル達の姿が見えず、けれども声だけは見に届いているのがおかしいと思いはじめた。

何かがおかしい。けれども原因が分からない。

思考が混乱し始めた金髪金目の「劍姫」の視界に見覚えのある白い髪の少年の姿が見えた。急いで向かおうとした時、壁から新たなモンスターが生まれる。

それは金髪の人蜘蛛アラクネで振り返った容貌はアイズ・ヴァレンシユタインに非常に似ていた。

いつも鏡で見る不愛想で少し眠たそうな顔に身体全体が寒気に襲われる。

ここまで自分に似ている存在を見た事が無かった。

言い知れない恐れを感じ、左手で握っている細デズレイト剣を構える。すると少年の方にもモンスターが現われた。そちらは赤い髪の人蜘蛛アラクネだった。

(アリーゼ!?)

少し遠いので容貌までは見えないが、何故かそうとしか思えなかった。

二体の人蜘蛛アラクネはそれぞれ風と炎の付与魔法エンチャントを纏い、襲い掛かってきた。

武器こそ持っていないが強烈な体当たりと腕による殴打は第二級冒険者を吹き飛ばすほど。

身体の小所から糸を飛ばし、動きを封じてくる特殊能力を持つ。

「【ファイアボルト】！」

炎に対して少年は炎雷の速攻魔法を放つ。

アリーゼ・ローヴェルは炎に対して強力な耐性を持つ。レベルこそ彼と拮抗している

筈だが無策では意味のない攻撃となる。

アイズも彼に構っている余裕はなく、自分よりも素早い敵に翻弄されて早くも苦境に立たされていた。

満身創痍の状態での戦闘は身体に堪^{こた}える。

利き腕でないからか、斬撃を叩き込んでも大して効果が見込めない。モンスターの肉体がそれだけ強固なのかもしれないが決定打が無い事は理解した。

(先にアリーゼを倒してベルと一緒に……)

助太刀しようとしてもアイズ型の人蜘蛛^{アラクネ}に妨害される。

自分もモンスターとして生まれ変わったら、きつとこんな状態なんだろうな、という悪夢が目の前に居る。否定するのも面倒なので偽物という別個体として扱う事にした。

ダンジョン内で会う人蜘蛛^{アラクネ}の肌は青白いが目の前に居る個体は内部^{ダンジョン}の魔力光^{明かり}の都合もあるだろうが人肌と遜色が無い。

無表情のまま通路を縦横無尽に駆け回り攻撃を繰り返す。

「どおけえ〜」

彼の怒号が聞こえた。

最初会った時の初々しさは無くなり、敵を前にしても怯まなくなつた。いや、数々の冒険で彼は成長し、いい面構えになつてきた。

アイズが思う理想のベル・クラネルだ。

黒いナイフを繰り出し、アリーゼ型人蜘蛛アラクネに強襲する。

人語を介する『武装したモンスター』の一体の筈だが襲い来る敵と認定すれば彼とて戦うようで安心した。

(……そうだ。彼は戦っている。私は何をやっているの)

声は出ずとも武器は振える。

自分に活を入れて壁を駆け上がる。迎え撃つ人蜘蛛アラクネも素手とはいえ器用に対応してくる。

飛ばしてくる糸は全て切り裂き、モンスターの腹に飛び蹴りを見舞う。

表情に変化は無いがダメージを受けて少し後退した。

地上に降りてすぐに飛び掛かり、振り上げた脚による踵落としをモンスターに見舞う。脚に硬い物を打ち付けた衝撃が伝わるが相手も動きが止まった。

怯んでいるところに剣で胸部の中心——魔石があると思われる部位——を刺そうとしたがギリギリのところまで躲された。

(弱点以外は頓着していない？ 周りを切り崩していけば……)

下半身の蜘蛛型が大きいために巨体に見えるが上半身はアイズと同じくらい。対人戦の要領で対応できる筈なのだが変幻自在の動きに思考が混乱する。

ベルの方も実力が拮抗している為か、まだ勝敗がついていない。時間がかかるという事は『強化種』の可能性がある。

——後は二体共、上半身が裸だった。

変幻自在に動くという事は胸も慣性に従って動くということ。

戦闘中は気にしないようにしていたがベルが居るので早く決着を付けたくて焦ってしまう。今のところベルの相手はアリーゼ——もはやその呼称で固定されてしまった——だが、おそらく向こうも自在に動く胸に翻弄されているのでは、と。

「しつかりなさい！」

どこからともなく聞き覚えのある声が轟いた。

ここには居ない筈のエルフのアリシア・フォレストライト。彼女の声で視野が少し明るくなった。

姿は無いがどこかで見ているのか、はたまた幻聴か。

雑念を振り払い、敵を見据える。

通常のモンスターとは隔絶した実力を持っているとはいえ無手た。果敢に攻めれば勝機が見えるはず、と。

一気呵成に責め立てるも声が出ないというのは大きな負担デメリットだった。

体術を交え、不慣れな斬撃を繰り返す。力が乗らない為に剣戟だけでは通じそうにな

い。

「……………んふう〜」

鼻息を荒く吹き、飛び蹴りを敢行。避けられたらすぐに体勢を変えて飛び上がる。

アリーゼの下に行こうとすると妨害するはずだから、と見当をつけて攻め続ける。

敵性体は空中で無理矢理体勢を変えてアイズの眼前に現れる。それを見越して相手の顎目掛けて蹴り上げを見舞う。

頭部への一撃に頭を仰け反らせ、体勢が崩れたところに剣を繰り出すが見えていない筈なのに体勢を変えようと動き出した。

（上半身でものを見ていない？ 何なのこのモンスター）

通常ではありえない動きにアイズは戸惑うも攻撃を今更止められない。

ベルは炎を纏う人蜘蛛アラクネと一進一退の攻防を続けていた。彼の速度はどんどん速くなり、アリーゼを圧倒していく。

それを一瞥しつつもう一度アイズは魔石を狙う。やはり見えていないのに避けようとする。気配を察知しているのか、別の視界が存在するのか。

それらが仮に存在していたとしても避けられない攻撃を繰り出せばいい。

一度、避けさせて空中に飛び出したアイズはそのまま踵落としを敢行する。体術だけは何故か当てられる。

頭部に一撃を見舞ったまま首筋を狙う、が剣を避けようとした。だが、それが狙いだった。

(……それでいい。避けられたらまた同じことを繰り返せばいい)

魔石狙いの一撃はやはりどうしても避けられるが代わりに張り出した乳房を一つ斬り飛ばした。

飛んでいったそれは^{おっぱい}ベルの後頭部に当たり、思わず『なんで!?!』と口には出さず、胸の内で叫んだ。

どうして都合よく彼の下に行くのか、アイズは不可解な現象に驚いた。明らかに彼の動きが不自然というか胸の飛ぶ軌道が不自然というか。とにかくおかしい事だけは見ていて分かった。——彼の下に行った乳房はそれが何なのか分からないまま踏み潰された。

^{アイズ}自分のものではないが自然と胸が痛んだ、気がして悲しくなった。

(……ゆるさない)

金色の瞳に炎を宿し、アイズは唸り声をあげて責め立て、斬撃が通じない相手を蹴撃し続けた。

何度か頭部を蹴りつけ、朦朧としかけたところを^{デスベレット}細剣で首を撥ね飛ばした。斬撃が全く通じないわけではない事が分かり、下半身の処理を始める。

このモンスターは首が無くても動き続けるようだ。

いつもより不自由な動きを強いられているが勝てない相手ではない。

「……………」

(……………この音は……………ベルの?)

戦場に鐘チャイムの音が鳴り響く。

僅かに視線を向ければ彼の腕に光の粒子が集まっている様子が見えた。

あらゆる苦境から逆転する一手。少年が持つ希望の一撃。

アイズは決着が近い事を悟る。であれば自分も目の前に敵に備える。

通常のモンスターよりも明らかに、不自然なまでに強い。それを打倒できるのはレベ

ル6の「剣姫」をおいて他に無し。

斬撃が通じないからとて防御が厚いわけではない。現に肉弾戦は通じている。それ

も不自然な事だが。

打撃だけで打倒はできない。元々、そういう戦い方に特化していないし、利き腕も無

い。

(……………決定打を失うところまで苦戦する。……………私はまだまだ弱いまま……………)

自分に呆れていると大きな鐘の音が聞こえた。それを聞くだけで勇気を貰ったような気持になる。

弱音を吐いている暇はない。あと少しで倒せる。新しいモンスターが現われるかもしれないが、今は目の前の敵の事だけ考える。

両脚に力を込めて、飛び掛かろうとし時——耳元で魔法の詠唱が聞こえた。

それはこの場には居ない筈の人物の声。それと不可解なのが真後ろに気配が生まれた事だ。それも唐突に。

驚きに振り返る暇も余裕もなく、アイズは首無しの人蜘蛛アラクネを見据えたまま混乱した。

「一掃せよ、破邪の聖杖いかすち。ディオ・テュルソス」

「……あがつー」

アイズの胸から雷いかすちほとぼしが迸る。

背骨を砕き、心臓を撃ち抜き、胸を守る防具が吹き飛び、飛び散る細かな血と肉片は即座に焼け焦げて塵と化す。

ほんの一瞬の出来事だった。

目の前が光りで満たされる。延長線上に居た人蜘蛛アラクネはアイズの背後から放たれた魔法によって撃ち抜かれ、塵と化するのが僅かな時間の中で見えた。

声の主はレフィーヤ。同胞の魔法を再現し、彼女ごとモンスターを撃ち抜いた。

胸に大きな穴が開いたアイズは魔法による影響からか、勢いにつられるように数歩前に歩いた。そして、大鐘楼グランド・ベルが鳴り響く。

「アルゴ・ウエスタ
聖火の英断！」

今一度、閃光が迸る。

ベルから放たれたのは「英雄願望」の技能スキルの特性である集束を利用したもの。

神のナイフに先ほど胸を貫いていった「ディオ・テュルソス」の雷撃チャージを蓄力させ、斬撃と共に放つ強力無比な力業。

最大蓄力チャージによって放たれた一撃は白光の大炎雷を伴って敵に襲い掛かる。

まずアリーゼは成すすべもなく木っ端微塵。そのまま延長線上に居たアイズにも――

――
身体ミタマの自由が利かず、成すがままベルの一撃を受けて――背中にかかるほどの金髪が焼け落ち――首から下が消失した。

「……………」

(……………あ)

痛みは無く、熱さも感じない。

身体ミタマの消失は視点の都合でよく見えなかったが地面に落ちているな、という事は辛うじて分かった。

通路の先に居る筈のベルがどんな表情をしているのか、それを確認する事はついで出来なかった。

地面に落下した後、少し転がるがアイズは気の抜けた感想を抱いていた。あつ、死んだ、と。

(……報いだ。きつとこれは……)

【疾風】はきつとこんな気持ちで死んだ。——今は生きている事が分かっているけれど、死ぬ瞬間はこんな空虚な気持ちなんだろうな、と。

身動きが取れないアイズはぼんやりと考え、死を待つ。

物凄い眠気に襲われ、目蓋を閉じる。そして、すぐに死んだように眠りについた。

【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインがダンジョンにて死亡した、と後に『迷宮都市』^{オラリオ}の各所で報告される事に——

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

ベル・クラネルとリヴェリア・リヨス・アールヴ達がダンジョンから出て数日が経過した。一週間も経っていないが大きな騒動も無く、^{トランプル}「ヘステイア・ファミリア」はいつもの日常を送っていた。違いがあるとすればリルカ・アーデとサンジヨウノ・春姫から表情が消えた事くらい。

それと怪我から復帰した黒髪の猫^{キャットピール}人アナキテイ・オータムが洗濯に勤しんでいた。接合した尻尾も問題なく動かせて腰の怪我也すつかり完治した。——これにはレベ

ル4の「ステイタス」に感謝した。

「アナキティ殿。身体の調子はどうですか？」

「少し身体が鈍なまったな、くらいよ。そろそろダンジョンに行きたいわね」

一緒に洗い物をしていたヤマト・命みことは無理は良くないと言いつつ一枚一枚手拭いやら下着類を干していく。

『竈火の館』には特注の風呂場があり、アナキティも何度か入ったが頗すべる気持ちよくて気に入った。

温泉に拘る眷族によって身奇麗になり、不思議と怪我の治りも早まった気がするほど。

主神であるヘステイアは厄介になっているアナキティに特段の命令はせず、好きなか
け居てもいいと言っていた。しかし、ずっと長居するわけには行かないのでまずは一週
間ほど滞在する旨を伝えた。

長期間の滞在を許せるのは護衛というか監視要員も厄介になっているからだ。一人
増えようが五人になろうが一緒だからまとめて来ればいい、と。

「ここでは『ロキ・ファミリア』の情報が入ってこないのですが、心配ではありませんか
？」

「……まあ、ね。リヴェリア様が重体というのは大きなニュースだったみたいだけど
……」

ダンジョンから連れ帰った王族ハイエルフが見るも無残な状態だった、という噂が「ヘスティア・ファミリア」で留守にしていた彼女達の耳に届いた。

ベル達と一緒にダンジョンに潜ってまだ日も浅い筈なのに、と一気に緊張感に包まれる。特にリヴェリアはエルフ達にとつて心の寄りどころ。

本拠内ホームに騒動トラブルは確かに無かった。外では殺意の籠った目で監視する多くのエルフ達が潜んでいた事を除けば平和そのものといつても過言ではない。

命たちはベル・クラネルが生きて帰ってくるのか不安になったほど。

「ベル君が犯人だと決めつけられていたけれど、実際はそんなこと無かったわけだし」と、顔を見せるヘスティア。手には作り立てのジャガ丸くんを入れた器があった。

胸胸を紐で支えるを紐紐で支える。いつもの薄着でうろつく女神は肩の荷が下りた、とばかりに嘆息する。

ダンジョン内で無謀な超接近戦フル・ファイトを繰り広げて力尽きた、と意識を取り戻した本人が心配で見舞いに来たエルフ達に言った。

薄絹ヴェールは無くしたが顔は包帯に包まれていたので傷跡を見られる心配は無かった。それと全身の怪我は本人の想定以上に酷くて内容を聞いた彼女は顔色を青くした。

アイズの踵落としがトドメ、というのには伏せられたようだ。本人も見えていなかったのが気絶したのは単に力尽きたただけだろう、と。

後でバレるかもしれないけれどレフィーヤは黙して語らず。——アリシアの目を誤

魔化せるとは到底思えない。

「……ベル殿は前科がたくさんありますれば」

「……否定できない所が地味に痛い」

（……ああ。【白兎の脚】ラビット・フットも犯罪者か）

犯罪者云々の問題で言えば器物損壊や他派閥への迷惑行為があるだけで一概に無罪とは言えない。

『異端児』ゼノス達を巡る騒動でギルドからも警告を受けている。今や彼は清廉潔白の少年冒険者ではない。——お尋ね者になった過去さえあるくらいだ。

完全に黒だとしても地道に信用を勝ち取り、オラリオで生活する事を許されている事も忘れてはいけない。

ヘスティアは持っていた物が冷めない内に、と庭に向かい白髪の少女の下に向かった。

「出来立てのジャガ丸くんだ。好きなだけお食べ。でも、慌ててはいけないよ」

「……ありがとうございます」

質素な衣服に身を包む白髪の少女はアイズ・ヴァレンシュタイン。

今日はヘスティア手ずから用意したジャガ丸くんのフルコースをご相伴にあずかる為に『竈火の館』に遊びに来た。

彼女が来た理由は単に食べる為ではない。白くなった髪の毛を元に戻す為に命が用意した温泉効能を試すためだ。

ベル・クラネルの懸想する相手とはいえ、今回はさすがに気の毒に思ったヘステイアが断腸の思いで彼女を誘った。

温泉と言えば神々の為の湯治場があるのだが、ロキの懇願はあえなく却下された。——その方が恨みが晴らせると思った男神と女神の妨害によって。

ダンジョンから連れ帰った時、アイズの様子を見てどうしようトラウル達が悩んでいたところ、極東の温泉の効能を試してみましよう、と命が提案した。

黙ってても数か月で元通りになるかもしれないが少しでも健康になつてほしい、という想いもあった。

「ボクは責任が持てないから聞かないけれど、食事くらいならいつだって歓迎するよ。ロキんとこより貧相かもしれないけれど……」

「……いえ」

「憑き物が落ちた感じだ。今の君は……」

そう言いながらアイズの目の前には鞘に納められた細^{テスレット}剣が墓標のように庭に刺さっていた。

ここに來てから彼女は無気力のまま愛剣を眺めていた。

ベルも事情が分からないようだし、本人以外に答えを持つていない。そんな気がしているのだが聞くに聞けない気配を感じていた。

「はい……」

そう言いながらアイズの頭を自分の胸元に押し付け、優しく撫でた。

「ロキ・ファミリア」だと気を張って言いたいことも言えないかもしれない。逆に言えるかもしれないがロキの性格からすると言えない雰囲気になれそうなきがした。

ダンジョンでアイズが何と戦ったのか。何を見て、何を聞いたのかは分からない。

真つ白になってしまった少女に出来る事は何も無い。——というのはヘステイアの性格上、無責任この上ないので頭を撫でる事に決めた。

戦い続けてきた少女にも休息は必要だ。それも精神的な。

この世界ではあまり聞き馴染みがないかもしれないが長い時を生きる神々には意外と馴染みのある概念があった。

それが精神的な病だ。アイズはどうしてか戦う理由を失った。武器を取ろうとしない。目的が無くなった冒険者はほぼ死人同然だ。他に希望があるならばまだしも——何も無くなった者というのはとても危うい。

（黒歴史に気付いて身悶えするようなものか。それにしても髪の毛サラサラだな）

大人しくなった「剣姫」は食べて撫でられを繰り返し、満腹になった頃にあっさり

眠ってしまった。

無理に戦いの場に送り出すよりマシかと思いつつ命みことに彼女を寝室まで運んでもらった。

アイズが『竈火の館』で寝泊まりする事になり、ベルは心の内では喜んだ。だが、それを素直に受け取れない事も理解している。

元氣を出せ、とも言えないし事情を根掘り葉掘り聞くわけにもいかない。少なくとも髪の毛の色が戻るまでは――

なので命を応援する事にした。必要な材料は可能な限り集め、資金も稼ぐと約束した。

（サポーター君たちの「ステイタス」も順調の伸びているけれど反比例するように顔から表情が無くなったな……。どれだけボコボコにされているんだろうか。春姫君の『耐久』が余裕で三〇〇を超えているし）

今日は三〇回死にました、と目が死んだまま嬉しそうに報告する姿がとても痛い。

骨が折れる回数を数える余裕が出来れば御の字です、とりりルカもどこか狂気じみてきたが。――同行している「フレイヤ・ファミリア」の下位の団員達はもつと酷い事になつていないか。

見た目には健康そのものだけど心が死んでいる。アイズとは違った意味で。

彼女を特訓に出すと金色の瞳が真つ黒を超えて闇色になりそうなのでアルフィアには引き合わせない事にした。後、ヴェルフと命みことに命拾いしたね君達、と皮肉を混ぜて言っておいた。——見逃してくれるほど甘い相手かは分からないけれど。

代わりに——翌日、様子を見に来たと思われた——アリシアに脅されて白状ゲしたラウルから真相を聞いて——鬼の形相で包帯姿のリヴェリアによる流麗な脚線美が天空に向けて昇った。そして下界を踏み砕かんとする勢いで華麗なる踵落としがアイズの無防備な頭に振り下ろされた——耳を疑う打撃音——事で顔が地面に地面に打ち付けられ、少し浮いたところを勢いにつられた——獣化時のような凶暴なる咆哮を上げながら飛び掛かる——アナキティによる後頭部の鷲掴みからの再度の顔面強打——何かが破壊される音——の後、止めの一撃として静かなる佇まいで臨むリュウの大木刀による軽い打撃——ポコという擬音が聞こえそうな軽いもの——の見事な連続天罰を受けて血の海に沈んだ。

19 劍姫と氷姫

情緒不安定だった〔劍姫〕アイズ・ヴァレンシユタインは真白き髪に変わったことが『迷宮都市』中に知れ渡り、ちよつとした騒動が起きた。

同時期に王族であるリヴェリア・リヨス・アールヴの重体が告げられたばかりの珍事に街ゆく者達は様々な想像を掻き立てられた。

それとは別に――

全ての騒動の中心には〔白兎の脚〕が居る。

と、実しやかに言われてもいた。

事実確認を冒険者ギルドが求められる事もあつたが当事者達は黙して語らず。とうより、この時期は冒険者家業を休止していたようで『摩天楼』で待ち構えていた者達は無駄な時間を費やす結果となつた。

〔ロキ・ファミリア〕は世間の喧騒を知らながら下位の団員達に資材の調達や資金稼ぎに奔走し、幹部達は堪っていた事務仕事に邁進していた。

〔ヘスティア・ファミリア〕は以前からの騒動の反動からあまり注目されなかつたが、リヴェリアの事で再燃し、多くのエルフ達の殺気のこもつた監視が増強されてしまつ

た。

常ならばレフィーヤ・ウイリデイスが真つ先に突貫しそうなものだが、彼女は特にも起こさず、古参のエルフでお馴染みのアリシア・フォレストライトも同様に静かに佇むのみ。

「リヴェリア様のお耳汚しとなつてはいけませんから」

と、涼しい顔の内では憤怒の感情を押し殺していた。

王族の重体にベル・クラネルは立ち合いはしたものの関与はしていない。それに戦闘は当人経つての希望で彼は助太刀以外は見守つていただけだった。

その当人は「ヘスティア・ファミリア」の本拠『ホーム竈火の館』の風呂場を利用していた。ヤマト・命みことが様々な伝手を使って取り寄せた温泉の効能の粉末を使ってリヴェリア達に楽しんでもらつていた。

「ロキ・ファミリア」の風呂場でも使用できるのだが雰囲気合わない様子を見せてもつたら命が是非に、と頼み込んで利用させている。勿論、女神ロキも体験済みだ。

「【劍姫】殿の髪も色が戻ってきて良かったですね」

「……………うん」

元の「ファミリア」の主神タケミカツチに頼み、極東から髪の毛に聞きそうな物や食材を取り寄せてもらった。

ジをしてもらった。

今では「ロキ・ファミリア」の女性陣が命に風呂と頭皮マッサージの教えを乞う事態に発展している。特にアリシアは鼻息荒くやる気満々で教わりに来た。

零細「ファミリア」には限界があるので資金力がある「ファミリア」にはそれなりの情報を渡した。元より金目当てではなかったので情報料の相場が分からず、無料進呈することになってしまった。

当然、小人族バルムムの少女リルカ・アーデの機嫌は急降下した。このところの特訓で凶戦士化していたので目力だけで人を殺せそうなほど。

「自前の風呂を持つ資金力が無ければ成立しませんし。生憎と貧乏が過ぎて物の価値が分かりません」

「せめて受講料を幾許か貰ってほしかったです。折角、王族ハイエルフが来ているのですから」

「いいじゃないか。いずれ大手が独占しようとして大失敗するに決まっているよ。ボクらは慎ましく行こうじゃないか。欲をかくとろくなことにならないしさ」

命の教えが巡り巡ってダイダロス通りを拠点とする清貧を司る女神ペニアの耳に入り、最初は不満タラタラだった彼女も肌艶の魅力には抗えず、こっそりと変装して「ヘステイア・ファミリア」に来たとか来ないとか。

身奇麗にする事自体は健康に繋がり、防疫の面でも有効であることは多くの神々が証

明している。だが、オラリオ全土を賄うほどの拠点が存在しないし、貧しい者が利用できる場所もない。

そこに金の匂いを嗅ぎつけた「ディアンケヒト・ファミリア」が何やら画策したようだが一週間と経たずに瓦解する事になったのはまた別の話である。

「なくにが『ケヒトの湯』だ。聖女の出し汗だしじるじゃないか」

懇意にしている「ミアハ・ファミリア」の団長ナーザ・エリスイスが愚痴りにやって来た。

ベルが冒険者として活動してから世話になつている元冒険者で犬シアンスロープ人の女性だ。ダンジョンに潜らないが戦闘は可能で薬師でもある。

「……はは。でも、随分とお金を掛けたようですけど……大丈夫なんですかね」

「さあね。まくたぼったくり価格の万能薬エリクサーで稼ぐんじゃないの？」

間延びした喋り方が特徴のナーザだが怒り心頭でもこの調子である。

アミッド・テアサナーレとは浅からぬ関係であり、発想力において二人は常に競い合っていた。

純粋に薬師として彼女は優秀でベルは度々依頼を受けていた。ただし、リルルカはナーザのぼったくりを看破しており、それでもなお付き合いをやめようとは思わなかった。

眼鏡をかけたエイナの疑問に答えるように薄絹ヴェールを捲つて見せた。

ベルが見た時より傷跡は薄くなっているが、放射状の傷跡は未だ健在だった。

食事をしつかり摂っているので顔はほぼ対照的な形にまで回復した。

「全治に数か月もかかると言われた傷だ。この通り、醜い痕が残っている。……が、前より口が回る分、こんなでも平気になってきた」

（平気って……。確かに口が回らなくなつて魔法が唱えられなくなつたって……）

「正直なところ、アイナには傷の事を伏せたいと思つている」

「も、もちろんです。母を心配させるのは良くないですし」

「風の噂が届けば飛んで来そうだな。何か妙案はないものか、と」

（確かに。穏やかな療養生活が一変しそう。……でも、嘘だとすぐバレるし……）

「僭越ながら……」

と、壁際で待機していたアリシアが手を上げつつ発言した。

彼女の言い分は深層域にて強大なモンスターに傷つけられて治療中だということにしたらいかが、と。

正しくは無いが間違つてもいい。問題は受け取つたアイナがどう反応するか、だ。

「そもそも正直に伝える必要がありますか？ 噂はいずれ風化していきます」

「リヴェリア様は自分にも正直でいたいですよね？」

「……隠し立てばかりすると……嫌われるからな。それに……、アイナには正直でいたいと思っっている」

本来ならば里から出られない身体だった。無理を押しつけてきてもらった上での病氣療養だ。自責の念が強く、アイナに心配をかける事と嘘をつく事がどうしても出来ない。

自分の半身と言っても過言ではないくらい大切な存在だと思っている。

本来ならば色々と濁すところだがエイナの前だと弱音すら出てしまう。側にアリシアが居る為に制限はかかっているが、彼女が居なければすぐに抱き着いて泣き喚いたとしてもおかしくない。

「それはそれとして……。リヴェリア様。……ミノタウロスと殴り合ったというのは真まことでしょうか？」

「……ああ。魔法を詠唱できない無能な自分を罰する意味だな。あれはあれでよい経験になった」

事も無げに王族ハイエルフは言った。

エイナは先日こっそり事情をベルから聞いて思わず叫びそうになったほど驚いた。

清楚な佇まいのリヴェリアが野蛮な格闘術でモンスター討伐に勤しむなど、と。だが、それは事実であると今、当人の口から言われてしまった。嘘であつてほしいと思う

反面、ベルの言葉に嘘はないとも思っていた。

「お前が担当するベル・クラネルを供としたが……。私の我がままに付き合わされてさぞ迷惑だったやもしれぬ。……あるいはエルフ共の恨みを買う原因を作ってしまった。しかし、彼は面白い。色々を知ることが出来た」

「そ、そうですか。ベル君がお役に立てたのですね」

物静かな王族ハイエルグからベルの事を言われ、エイナは複雑な心境に陥った。

色んな騒動を巻き起こす問題児として有名になってしまった彼がリヴェリアに興味を持たれた。それはとてもすごい事なのだが素直に受け止められない。

常日頃から冒険者は危険な仕事だと言い聞かせ、それでもダンジョンに挑む彼を生温かく見守ってきた。それが今では第二級冒険者にまで上り詰めた。僅か半年足らずで。驚異的な反面、とても危うい綱渡りをしている彼を素直に褒められない。

冒険者は花形の職業であると同時にとても短命である。いつ命を落としてもおかしくない。

エイナとしては少年より大人に任せてしまえばいいのに、と思うものの職業柄、それを口にするには出来ないし、勇気が無かった。

「我々が困難に陥った時、彼は救いの手を差し伸べた。外聞の悪い部分が目立つが……。冒険者としては好ましい性格をしている。……言葉は悪いが……。使い方次第では様々

な形に化けるな」

(……確かに悪い表現ですね。利用しようとする側からすれば物珍しい宝のようなもの……)

「……あるいは、ベル・クラネルこそがアイズを真に救ってやれるかも……。というのは言い過ぎかな」

誰ともなく呟かれた言葉。だが、エイナはアイズと聞いてしまった。

ベルが目標とする人物であり好意を寄せている人。

遙か高みに居るアイズに怒涛の勢いで追いかけている。その速度はもはや計り知れないままに至っていた。

いつレベル5に到達してもおかしくないほどに。

「さて、エイナ」

「は、はい?」

「手を出せ」

そう言われて一瞬戸惑ったが対面に座るリヴェリアに向けて手を出した。その手を彼女が掴むと——それほど強くない力で——自分の顔まで引つ張り傷跡が残る頬に触れさせた。

同胞だから、というよりアイナの娘だから、といった方が正確か。

「ベル・クラネルにも触らせたことが無い私の弱点だ」

リヴェリアの手は温かく、柔らかく、肌のきめが細かい。

頬も柔らかかったが、なんとというか骨が無いくらい。

その事に気付いて身体が一瞬硬直したがリヴェリアは微笑むだけで手は離さなかった。ちゃんと理解しろ、と目が言っている気がした。

「治りかけだったところにモンスターと接近戦をしただろう？　また完治が遠のいてしまった」

「……なにをしているんですか、全くっ！」

リヴェリアに手を掴まれたまま怒りでつい声を荒げてしまった。けれども、そんな彼女を愛おしそうに見つめるリヴェリアの表情はとても柔らかかった。

エイナを自分の娘のように可愛がるからこそその吐露だ。そうでなければ極寒の冷氣よりもさめざめとした眼差しを向けている。

今日はエイナの為に時間を作り、エイナの事やベルとの話題に終始していた。

ギルドに来た本当の目的は怪我やダンジョンの報告をする事ではなく、他愛も無い世間話をする為だった。誰でもいいわけではない。

エイナの愛娘であるエイナでなければ満足できないだろう。

この部屋にはアリシアも居るが本音というか本心を話せる相手は中々居ない。だか

アイズには分からない事があった。

自分は何に怒っていたのか。

(……私は怒りを誘導されていた？ 誰に？ あの竜女？^{ウィーヴル} それともアリーゼ？)

ジャガーノートとの戦いにおいて多くの冒険者が感情を操作されていたと団長のフィン・デイルナが説明した。

手段については確証はないが『声』にまつわる何か、だと。

だが、それは最近の話しであって昔から持っている怒りの感情は違うはずだ。

(……それに夢の中で見た自分の死……。とても現実的で夢だとは思えない。今見ている方が夢なのではないかと思うくらい)

こちらが夢ならば現実の自分は既に死んでいる事になる。

精神が弱っているから弱気になるのではないか。そうならば鍛錬を続けて強くなるしかない。

ベル・クラネルに殺される自分を否定する為に。

夢の中の自分は戦いに明け暮れていた。引き返せない位置に居たから巻き込まれた。

故意でなかったにせよ、今のベルはアイズを殺しうる実力を身に付けている。彼に追いつかれ追い越されない為には強くなるしかない。

アイズの願いは両親の仇である『黒竜』の討伐だ。深層域も踏破できない今の自分に

はまだ届かない敵だ。

(それとレフイーヤ。……暴走する私を撃ち抜いた。……私がみんなの迷惑になれば……、あの夢はきつと現実になる)

戦う理由を消し飛ばすほどに。

鮮烈なる英雄の一撃。あれを防ぐ、または突破するには――

今の自分を超えなければならぬ。

復讐する自分さえも超克の糧にしなければ届かない。いや、手にする事は到底不可能だ。

アイズは静かに風の付与魔法エンチャントを紡いだ。柔らかな風の魔法が自身を包み込む。

夢の中では消し去られたが現実ではまだ戦う術すべがある。

振り返れば全身を外套で隠した存在が佇んでいた。長い尻尾が見えている所から相手の正体は容易に想像がつく。

「……なにか、用ですか?」

「単なる散歩だ。……少し見ない間に面白い事になっていたようだな」

玲瓏たる声でそれは応えた。

殺気は無く、戦意も無く、ごく普通に佇んでいるところから言葉に嘘はないのだろう、とアイズは身構えずに対応した。――魔法は維持し続けたまま。

「何も考えず、敵を殺し続けられていれば楽だった……。そんな殺気だった貴様は美しき復讐の姫だった。それが今は漂白されて面白みまで失ったとか」

「……………」

「メーテリアの【木霊反響】に当てられたのかと思つたが……。言葉は人を惑わす。妹はレベルが低い内は確かに役立たずだった。ベッドからそもそも動けなかつたしな」

だから、大半は誰かに背負われていた。

自分で動く必要が無い。スキルも魔法も使うだけに集中していればいい。

一人ごちるように竜人のアルフィア・ストラディは言った。——今はアルフィア・クラネルかもしれないが。

【静寂】たる彼女がオラリオの中を自由に動く場合——外套は勿論——首に捕獲の証しである装飾品を装着しなければならない。それと当たり前だが街民に危害を加えてもいけない。

目立った制約は以上だが、それらを守っている限り【ガネーシャ・ファミリア】は彼女の移動を黙認すると約束した。鍛錬については別問題なのでダンジョン内に於いては自己責任の範疇にある。

「【剣姫】はまだ若い。影響を受けやすいともいえる。大いに悩め。何度も乗り越えろ。頂を登り切るにはまだ早い」

「……………うん」

「ベル・クラネルはまもなくお前を超える。ぐずぐずしている暇はないぞ。あの子はきっと『頂天』^{オツタル}すら飛び越えるだろう。お前はちゃんと冒険しているか？」

「……………していない。……………出来なくなることが怖い」

アルフィアはそうか、と柔らかな言葉で応える。

硬質な返しを予想して身構えたが、それは自身の恐れを表れ——
前を見ているようで何も見ていない。そんな気持ちに気付かせてくれる。

「憧れは冒険者の糧だ。あの子はそれをたくさん持っている。我武者羅だけが取り柄のお前は何も持っていないかった。……………であれば、少しは『物語』に目を向けてみたらどうだ？ お眼鏡に合う英雄を探り当てる事もまた戦いではないのか？」

「……………ん」

本は母から読み聞かせられた。英雄は父だった。

自分で本を読まなくなつたのは両親を失つてから。それからずっと戦いに明け暮れていた。学が無いのも認めざるを得ない。

今更になつて読書に明け暮れる、というのはどうなのだろうか、とアイズは急に不安になつてきた。魔法を解除した途端に顔が脂汗で濡れてくる。

ベル・クラネルが物語に詳しい事は女戦士^{アマゾンネス}のテイオナ・ヒリュテの話題でも聞いてい

た。——殆ど興味が無くて耳から出て行ったけれど。

「…………ふむ。そうだな。戦うだけの英雄は……、単なる戦馬鹿だ。単細胞……いや、単純だからこそ分かりやすい」

「…………うう」

単細胞の下りで胸に痛みが走る。

本拠ホームに戻ったらたくさん本を読もうと誓った。

「私が失望を覚え、今一度オラリオを滅ぼそうとする時、お前はその時、何を持って立ちはだかる？ それとも逃走を選ぶか？」

「…………今の私の手には何も無い。貴女と戦うだけの力も…………」

「ならば…………、何かを見つけたらかかってこい。その気概があるならば…………遠慮なく相手をしてやる。お前達英雄候補の礎いしすえになってやるのも先達の務めだからな」

アルフィアは外の景色からオラリオ全土に顔を向けた後、立ち去った。

驚異的な存在敵だと思っていた「静寂」がとても温かみのある存在ものに思えた。彼女の後姿に向かつて深く頭を下げる。

英雄になりたいわけではない。強くなりたいだけ。——でも、それだけでは駄目だと気づかされる。

ベルは今も登り続けている。こんなところで立ち止まってはられない、と頭では分

強い人物だけど目指す先とは違う、という感じだった。

「きちんと休暇を与える、という事は計画性があるんだろうね」

「そうですね。というか、あんなの鍛錬でも何でもありません。あれが出来るのは「フレイヤ・ファミリア」だけだと思いますし、他の「ファミリア」が真似する事なんて到底無理ですね」

と、はつきりと言い切った。

眷族同士の殺し合い、という内容だけで参加拒否したくなるのだが、それに参加——強制的に——しているリルルカは地獄つて地上にあったんですね、と呟くようになった。

春姫は本拠ホームに戻って寝た後、飛び起きるように尻尾ホムがある事に安心する。

「はい、そうです。春姫様は何度も尻尾ホムがもげました。他の獣人の皆様も同様ですから、彼女だけ特別に酷いということはないですよ」

「……えーと。もうやめたらいいんじゃないかな。やめてもいいんだね？」

「あれは途中からやめられなくなりまして。やめるといふ事は冒険者ごとやめるといふ意味になってしまふような……。そんな不安を抱かせますから。……あれは……悪辣というか全てヘイズ様むしが原因ですね。寧ろ、オツタル様の方が優しいですよ。あの方はとても紳士でした。あと、ザルド様の作る料理は絶品でした」

(……うわ。すごい気になるけれど聞きたくね。全身がぞわぞわしてきたぞ)

淡々と説明される場所も不安を煽る原因だ。

見えない恐怖というものが「フレイヤ・ファミリア」にあり、女神フレイヤを信奉する眷族はヘステイアからしてもどうかしているね絶対と言わしめるほど。

かといって一概に悪い部分だけではないのは二人の「ステイタス」の内容を見れば明らかだ。

短期間の拷問、もとい研修によって物凄い数値の伸びが確認された。

レベル1だから伸びやすい事を鑑かんみてもベルに匹敵する勢いが感じられた。

ひ弱な春姫の『力』が三五〇を超えている。リリルカは八〇〇だ。初期の頃の数値の伸びから見れば驚異的と言える。

一番増えているのは春姫の『魔力』とリリルカの『器用』と『敏捷』だろうか。もうじき評価が『S』^{九〇〇}に届く。

ただ、数値の上では二人共「ランクアップ」する資格を得ている。可能であれば潜在的な数値を加味したいので限界まで増やしてほしい思惑があるが——過酷過ぎるので、そろそろ鍛錬をやめさせようか迷うところ。

「引き際は肝心だよ、二人共」

「分かっています」

アリーゼに関して恨みはない。輝夜も納得の上での戦いだつた筈だ。

正々堂々の決闘であるならばリユーは何も言わない。仲間達も早くから覚悟していたようだし。

「ライラの檻は来るたびに物が増えていきますね」

「手先が器用な前世のお陰かね」

『武装したモンスター』こと『異端児』と呼ばれる存在になった元「アストレア・ファミリア」の団員達は檻の中で悠々自適の生活を送っていた。

檻と言っても自由に出入りが出来る。トイレも風呂も用意されており、餌と称しているが食事もちゃんとしたものが与えられている。

黒竜ニユクスは神が取り込まれたとあつて排泄や食事が不要らしいが食事は食べているらしい。

「今日はどうした？ 別れの挨拶か？」

「……いえ。そろそろアストレア様に会いに行こうかと思ひまして」

「……それは別れの挨拶と何が違うんだ？ ま、まあ……とにかくだ。うん、行つてこい行つてこい。アタシらの事を告げて卒倒するか教えてくれよ」

「……そういう目的ではないのですが。……しかし、アリーゼと輝夜の事をどう伝えたものか……」

あつげらんとした態度の赤帽子レッドキャップのライラとてアリーゼと輝夜の死は小さくない。

戦つて死んだのであれば納得するのだが、厄介な事にリユーを殺した。少なくとも当人はその意識のまま死んでしまった。だから、天に上る魂がどうなっているのか、他の眷族達も心配していた。

——案外、後悔を覚えて引き返し、ダンジョンで再復活していたり、と考えたところであり得ない事に気付いて寒気を覚えたものだ。

(人間の形に復活したくらいだ。アリーゼも今度は人型に……なるかな？ あいつ、どういう風に死んだのか、そういえば知らないな)

アリーゼを含めて団員達はほぼジャガーノートに殺され、その遺骸はモンスターに食べ尽くされた為に骨も残っていない。

アルフィアが人間ヒューマンとして復活した部分も謎がある。身体中から煙を吹き出していたのだから、まともな存在ではなかった筈だ。それをアリーゼに当てはめるのは危険だと感じる。

「……なあ、リオン」

「はい？」

「アストレア・ファミリア」が全滅してから「ステイタス」を更新してないんだろ？

今のお前がどれだけ強くなったのか知りてえな。生きているんだから、もつと生き足掻

「けよ、末っ子」

「……言われなくても」

（……もう五年近く更新していない。その間も私は戦い続けた。少なくともレベル5は確実な気がします。そろそろクラネルさんに追い越され……、もう追い越しているかもしれない）

「おい、あの白髪のがきを気に入ってんだろ？ 逃がすんじゃないぞ」

「なっ?!? 何を言うのです」

頬を赤くしてリユーは言い返した。

恥じらうエルフにライラは微笑ましいものを見た気分になった。

常に神経をすり減らし、正義を追い求めたエルフが恋を知る乙女のような顔をすると、は——ライラは過ぎ去った時間を大いに後悔した。彼女がベル・クラネルと知り合い、どういう風に過ごしたのか知ることが出来なかった事に。

「【劍姫】に懸想しているって？ 大いに結構。一夫多妻上等だ。それでこそ英雄つても

んだろうが、なあ？」

「ふ、ふしだらですよ！」

「そういえば、肝心なことを聞いてないんだが……。【アストレア・ファミリア】は今も健在なのか？ お前が自由に動けることはアストレア様は送還されていないわけ

だし」

「そうですね。遠い街で新しい眷族を迎えているのかもしれませんが。新しい団員達と正義を回す為に……」

「……あの女神さまの事だから、全滅したから総入れ替え、なんて切り替えの良い性格はしてねえと思うぜ。お前がここで今も活動してんだ。それを知らない訳がない」

リユートの背中には女神アストレアの神血イコルによって「神聖文字」が刻まれている。

『神フアルナの恩恵』は未だに消えていない。

どんなに遠く離れていようとも自分の眷族の生死は手に取るように分かるのが神だ。

「……つまりだ。何が言いてえかと言うと……。お前を抜きに正義を語るほどアストレア様は薄情じゃねえってことだ。……だから、行ってこい。そして、「ステイタス」も更新して来いよ。アリーゼと輝夜はお前に後を託したんだ。アタシ達はそう簡単に死にたくないから生き足掻いている最中だが、いつでも力を使ってくれて構わない」

(……ライラ。もしか、貴女も長くないと言うのでは?)

見た目には元気そうだが実は弱っている、という事もありうる。残念ながらリユートはその辺りの機微を読み取ることが出来ない。

託された想いを引く次ぐのは残された者の使命である、という事は理解できる。

本来ならばライラ達は死んだ存在だ。ダンジョンの悪意によって復活してしまった

のはリユーにとつても想定外の事態だった。

想いを託したはずなのに何故か復活してしまつたら、リユーでなくても合わせる顔が無いほどに恥ずかしくなる。その気持ちは分からないでもない。

他のメンバーもどこかよそよそしい。ライラくらいだ、真面目に話しをしてくれるのは。

「あと、ついでに新しい団員の事を調べといてくれよ。先輩がモンスターになつてるけど……」

「……ぜ、善処します」

「アストレア様に会えたらアタシらモンスターだけど受け入れる気があるかも……。これはまあ……。聞けそうな雰囲気だつたらでいいぜ」

長く会わなかつた主神に言いたいことがたくさんあるようで、頭の中でまとめるのが難しくなり、一旦別紙にて認め直したす事になった。

モンスターとの対話は最初は嫌悪感があった。それは事実だ。

慣れれば平気かと言われれば——実のところは怖いと思つている。

ダンジョンにはまだ多くの殺意のこもつたモンスターが居て、それらの中から対話が可能な者を見つける事は難しい。見つける気があるのは自分ではなくベル達になるの
だろうけれど。

共有時間が遠い過去のように思えるほど。

それだけ少年が密な時間を過ごしていると言える。

(半年か……。まだそんなに経っていないんだな)

ダンジョンの中は季節感が無く忘れがちだがオラリオには四季があり、様々な催しもじよちが開催される。

ベルが最初に見たのは『フィリア祭』だった。街中にモンスターが解き放たれてひと騒動が起きた。

思えば騒動の連続だった。次に始まる『女神祭』もきつと何かが起きるんだろうな、とぼんやり考えた。

賑やかなのは好ましいが住民が困る事態は受け入れがたい。

献花を終えて本拠ホームに戻ろうと墓地からの帰り道、急に周りの温度が下がったような肌寒さを感じた。ただ、悪寒ではなく嫌な気配なども無い。

空を見ても雪が降ってきたわけでもないし、曇りから雨が降ってきたわけでもない。今日の天気は雲が多いが晴れた。もうすぐ秋の気配が訪れる。

周りに気を取られていたベルの側を冷たい冷気の塊が通り抜ける。——気配が希薄な為に気が付かなかった。

(……寒っ。……あ、人が来てたんだ)

危なくぶつかるどころだった。

その人物は藍色の外套で身を隠し、水色のロングブーツを履いていた。身体つきから女性であることが分かった。

そのまま通り過ぎようとしたが彼女の武器が脚に当たってしまった。

「す、すみません」

「……いいえ」

と、白い呼吸を吐きながら彼女は軽く頭を下げた。

肘まで包まれた厚手の手袋で外套を掴む彼女は一歩進んだが、すぐ立ち止まりベルへと振り返る。

背はベルより頭一つ分高く外套の奥にある顔は真つ白だった。それくらい白い顔に見えた。完全に真つ白というわけではないが、第一印象が白すぎて戸惑った。

釣り目気味の顔かんばせ。高貴さを匂わす整った鼻筋と細い柳眉。

うつすらと見えた瞳は青氷色アイズブルー。

「あの……」

「は、はい？」

「オラリオには【剣姫】なる冒険者が居ると聞いたのですが……。どこへ行けば会えますでしょうか？」

の場所に彼女は居ない、筈だ。

(ど、とうしよう。いつもの調子で……)

物陰で控えていたベルは慌てた。嘘をつく結果になるとは思わなかったのだ。

偶然を装うか、素直に出て行つて謝るか。

少しだけ順々したが素直に謝る事にした。

彼女が門番に声をかける前に大急ぎで駆け寄り、石に躓いて転びそうになりながら女性の外套を掴んでしまった。

無理矢理剥ぎ取られる事になった女性は小さく悲鳴を上げつつ取られまいと外套を掴む手を放さなかった。そのせいで体勢を崩され、横倒しになった。

「だ、大丈夫ですか？」

と、心配で駆け寄ってきたのは門番の冒険者だった。

引き倒された女性は外套の埃を払いながら立ち上がった。その時、彼女の頭部が露になる。

淡い空色と白が混じる綺麗な髪の毛。鋭角的な形の獣耳が頭頂部から伸びた。

髪は首元で切り揃えられ、端正な芸術品と遜色ない美しき姿が現われた。

外套の中は碧玉の戦闘衣バトルクロスとなっており、首元から見える内着は紫紺。そして、胸は割りりと大きめで厚手の服装からでも分かるほど。

「……いきなり何をするのでですか、全く」

口を尖らせつつ外套を羽織り直し、頭部も隠した。

埃を振り払った後、女性は何番に顔を向ける。

「アイズさんは……。【劍姫】の事なんですけど、ここには居ません。そのことを思い出して……」

「そうだったのですか？」

とりあえず、転ばせたことを謝ると女性は寛大だったようで許してくれた。

一応、落とし物が無いか確認した後、案内する事にした。

見えた獣耳の特徴から猫^{キヤットレプトル}人か狐人^{ルナール}だと思われる。

個人差があるので確定するにはまだ材料が足りないし、種族を問うのは失礼にあたる気がした。単なる興味本意だったので。

道すがら荷物はどうしたのかと尋ねると宿屋に預けてであると答えてくれた。

言葉尻からも優しいような雰囲気があり、転ばせたことを本当に申し訳ないと思った。

彼女は外套が外れないように胸元でしっかりと掴んでいた。ベルはそうでもないのだがとても寒がりなのか、口元から白い呼気が何度も出ていた。

根掘り葉掘り聞くのも気が引けるのだが、謝罪の意味を込めて自己紹介から始めてみた。すると見ず知らずの人に個人情報を伝えるのはちよつと、と僅かな嫌悪感を抱かれ

たので諦める事にした。

冒険者ですか、という質問に対しては引退しました、とだけ。

「ファミリア」の事も個人情報に当たるので、秘密と言われた。

質問責めをしているので、これ以上はさすがに相手も怒るだろうと思い、黙って歩き続けた。

口数が多い方ではないようで二人で歩いている間、とても静かになった。

気まずい空気を抱きつつ『竈火の館』に到着し、大きな門扉を開けて彼女を招待した。

元冒険者というには歩幅は大きくなく、とてもゆつくりと歩いていた。外から見るとは春姫のような着物ではなく、歩きやすい格好だった。

分かりやすい例えだと厚着したアイズ・ヴァレンシユティンだろうか。

重厚な鎧をまとっているわけでもなく、内部の服装だけなら軽戦士フエンサーのような戦士系。

腰に佩はいている武器は扱いやすい剣だと思われる。

失礼を承知で彼女の格好から色々想像してしまった。

(……寒い。……ここまで案内してくれた少年は特に裏があるわけではなさそう。ベル・クラネル。私の国元にも届いた有名な……)

歩きながらベルに気付かれない程度に緊張を解く。

見知らぬ土地に居る者は大抵、信用できない。人を見たら泥棒と思え、というのは一般常識というくらい言われ続けてきた。

既に敵地だ。女性はそれなりの覚悟を持ってここに居る。宿屋に預けている荷物は盗まれてもいいもので、取りに帰る事は想定されていない。

もし、運よく目的を達成出来たら——取りに帰らないといけない。不要なゴミを押し付けるのは気が引けるので。

ベルと共にたどり着いたのは鍛錬に使う中庭だ。そこに何人かの人物が居た。

(……あれ？ 金髪の少女が【劍姫】だと……。ど、どこにも居ない?)

赤い髪。白い髪。緑色の髪。黒髪。

金髪が見当たらない。女性は振り返り、ベルに詰め寄った。

「金髪金目の【劍姫】は何処？」

「……えっと、アイズさんは白い髪の方かたです。少し前に髪の毛が白くなってしまつて……」

そう言われて建物の縁側で寛くわいでいる白い髪の少女に顔を向けた。

目の前に刺さっている剣を見つめている少女が探していた【劍姫】だという。

噂だけで探していたので当人の姿形は初めて目にする。

近くに寄つてよく見ると生え際から金髪らしき色が見えていた。

(白髪から金色が……。色が変わっただけでこんなに印象が変わるとは……)

【剣姫】が人間ヒューマンというのも事前に承知していたので春姫と間違える事は無かった。

目的の人物はまだ歳若く、それでいてレベル6の第一級冒険者だという。

このひ弱そうな見た目の少女が人類を千年に渡り苦しめてきたダンジョンの最も深い場所まで突き進んできたという。

冒険者の役目とはモンスターを今以上に地上進出させない事と『三大冒険者依頼』の達成である。【剣姫】はその最前線に最も近い場所で戦っている冒険者の一人だ。

「お会いできて光栄です」

女性はアイズに向かって深く頭を下げた。

初めて見る相手なのか、アイズは少し戸惑い気味に相手を見据える。少し肌寒いと思つて腕をさすりながら何の用なのか尋ねた。

自己紹介をするものと思われたが、まずは要件から聞く。それがベルにとって意外に思えた。

「遠路はるばるオラリオまで……。貴女との手合わせを願いやつてきました」

「……殺し合いではなく？」

「そこまで物騒な目的は持つておりません」

礼儀正しく女性は言った。

「劍姫」に戦いを挑むのは大抵が名声目的で、次に自分は強いと思いついでいる態度が尊大な相手くらいだ。

見た目が弱そうという事で舐め切っている相手というのは少なからず存在していた。第二級冒険者となつてベルもその手合いに勝負を挑まれる事があつたが全て返り討ちになっている。

「試合より殺し合いがお望みならば、それでも構いません。が、こちらは貴女を害する気はありません」

「……分かつた。戦おう。……でも、その前に寒いから着替えていい？」
「構いません」

始終丁寧な対応を取る女性の言葉にアイズは一旦、館の中に入った。

一緒に湯治に来ていたリヴェリアは黙つて見ていたが昔の小さなアイズの姿を思い出し、今の彼女との差を比べてみた。

敵は全て殺す、と言つていた十代未満の少女が分別を備え、無闇に戦いに没入する我儘な姫はもう居なくなつたようだ、と。

このところ大人しく過ごしている事も影響しているようだ。

小さなころから見守つていたりヴェリアの目頭が熱くなつてきた。人様の成長はいつ見ても感動する。だが、まだ油断はできない。

女性は丁寧^{ニナジヤ}に外套を折りたたんでから春姫に渡した。

最後によりしくお願ひします、と最後まで丁寧な対応にベルは感心した。

(……あつ。尻尾が二本!?)

尻から覗く尻尾は確かに二本だった。途中から枝分かれしたのではなく、根元から直接生えている。——その辺りを凝視している事に気付かれ、女性がベルから尻を隠すような仕草で逃げ腰になった。

すぐに謝罪して全体を見るようにした。

彼女の尻尾は春姫と同じくフサフサの体毛に覆われていた。

色は髪の毛と一緒。碧玉の戦闘衣バトル・クロスの全体像をしっかりと見るのは今が初めて。

やはり軽戦士フエンサーのようだ。

「どことなく忍者ニンジャのように見えますね」

と、言ったのは極東出身のヤマト・命みことだった。

蒼い狐人ルナールの女性の出で立ちは首から下は完全に肌の露出が無く、持っている武器が小刀であれば命の言うとおりに忍者ニンジャであつたかもしれない。

しかし、彼女の得物は西洋剣。ベルにも馴染みのある一般的な剣で刀身が青白い。

直立不動となり剣を正眼に構える。

「遙か北方より来たりし我が名はアイス・ヴァレンピナ。〔セドナ・ファミア〕に所属

してりましたがわけあって今は引退の憂き目に遭っております。レベル4にして「ファミリア」の団長を務めさせていただきました」

「……そう」

（……アイズさん、軽っ！）

（アイズ殿というのですか。アイズ殿と似ていますね）

（……【セドナ・ファミリア】というのは確か……、【ポセイドン・ファミリア】に連なるものではなかったか？）

「神々より賜りし『二つ名』は【氷姫】……。縁あって【剣姫】様のことを知り、会ってみたくなった次第でございます。……ご想像の通り、似た名前ですよ。私の『二つ名』は十年ほど前に頂いたもの。最近は何故か【剣姫】様と比べられて……」

「……ごめんなさい」

よくない事でも言われたと思ひ、アイズは素直に頭を下げた。

一昔であれば、だから何、と突っぱねているところだ。随分と柔らかくなったものだとリヴェリアは思った。

名前と『二つ名』が似る事はリヴェリアの記憶にも無い。

命名する時は神々が会議して決めるので故意でもない限りは偶然としか言えない。

それとアイズは明らかに成人女性だし、種族も違う。子供のアイズにあやか肖ろうという意

『器用』がアイズに及ばない。

『力』も年下の少女に押し負けている。

レベルの事を知った時から分かつてはいたが、地元にはレベル6が居ない。取れ程の高みなのか確かめる術が今までなかった。

ここまでとは想定できていなかった。

(これでは大人と子供ではないか)

立場が逆になった。それだけは理解できた。

更に数度の合わせにより、お互い距離を取る。

アイズは息を乱していないがアイズは顔の周りが霧に覆われるくらい息を乱していた。

「まだ、やれる?」

「お願いします」

「……ん。なら、本気、見せてあげる」

「ありがとうございます」

身体が温まったアイズは少しだけ瞼を閉じる。アイスも息を整える為に瞼を閉じた。勝敗は気にしないでいい。これはただの手合わせだ。

アイズは引退してから久しく忘れていた闘争心を思い出す。

地表を我が物顔で暴れ回るモンスターとの闘いの日々。それは今も続いている。

冒険者が地下深くのダンジョンで金を稼いでいる間、地表の冒険者達は守るべきものの為に命を懸け、ある者は志半ばで倒れていく。それらをアイスはたくさん見てきた。

だからといって『迷宮都市』に恨みがあるわけではない。それぞれ役割分担というものがあつたことは理解している。

似た名を持つ存在がどんなものなのか、単に知りたかっただけだ。

女神セドナに別れを告げたものの、今となつては後悔している。自分は拙いながらも剣を握つて——と思つたところで思考を放棄した。

それ以上を望んではいけない事に気付いた。自分にはもう後がない。だから、時間を大切にしなければならぬ。

目蓋を開けてアイズの様子を見定める。これが今生、最後の光景となろうとも。

「……行くよ」

「はい」

「【吹き荒れよ】」

「…… 【吹き荒べ】」

アイズは風の付与魔法を纏い、遅れてアイスが雪、冷気の付与魔法を纏う。属性的には水だろうか。

似た魔法を展開したことに周りで見学していた者達が驚く。

冒険者歴で言えばどちらが古いのか、それは分からないがどちらとも相手の真似をしてきたわけではないことは理解した。

(レベル6の方が威力が強い)

(……うん。これは試合ではなく手合わせだ。相手の殺気もほとんど感じない)

冷気の魔法付与には正直驚いたが、世の中には自分と似た能力を持つ者がいると今日知る事が出来た。

まだまだ自分の知らない強者が埋もれている可能性について、アイズは胸の内が熱くなるのを感じた。

「……あなたの武器の銘は何？」

ステイリア
『『氷 剣』』といます」

「綺麗な剣だね」

「ありがとうございます」

一歩進んでから一気に跳躍するアイズの動きが消えた。

だが、気配は感じられた。すぐ目の前に剣を持って行く。すると軽い衝撃が手に伝わった後、後方に押されていく。

両脚に力を込めて踏ん張るものの押し返せない。自分より歳若い少女の『力』に完全

に負けていた。

腕を無理に動かそうとすると劍の腹で打たれた感覚があった。

驚く間もなく一気に身体のあちこちを打ち据えられていく。それは決して強くはないがいつでも斬撃を叩き込めるぞ、という意味に取れた。

結局、アイスは反撃一つできなかつた。白い風のようなものは見えていたのに動きが追いつかない。

小手先の反撃でもおそらく意味がないだろう。であれば完全に敗北だ。

劍を高く上げて――

「降参いたし……ぶっ!」

と、言いかけた【氷姫】^{アイズ}の横つ面を【劍姫】^{アイズ}は何の躊躇^{ためら}いもなく蹴り飛ばした。

周りが沈黙した。アイズ以外、口を半開きにしたまま。

蹴り飛ばされたアイズは何度か地面を跳ねながら転がり、止まった後はそのまま沈黙した。

「……えっ? 何かするのとかと」

「……………」

誰よりも早く我に返つたりヴェリアは無言でアイズの頭に拳骨を落とした。

何か言いたいのが呆れて本当に言葉が出てこなかつた。

ては無下にも出来ない。

それからアイス運び込むと炉が熱せられているのに寒さを感じる。

普段であれば居るだけで滝のように汗を流すのだが今は寒さが勝つて平温まきに近くなっていた。ただ、炉は今も赤く燃えていた。

服を脱がせる都合でヴェルフにこちら側を見ないようにと指示すると機嫌が更に悪くなった。

とりあえず、厚手の手袋を装備し、命は丁寧にアイスの戦闘バトル衣クロスを脱がしに取り掛かる。

まずは肘まで長い手袋から。当初から不自然なまでの厚着に違和感があった。

(……これは義手？ しかも両手。……あいや、両足も、ですか)

アイスの両手両足は義肢だった。

しかも霜が張り付いていて今にも凍り付こうとしていた。

低体温の身体は部屋の炉によって辛うじて保たれている状態に命はどうすればいいのか戸惑った。

春姫たちに湯の用意をさせてもおそらく意味がないだろう、と判断し助けを呼ぶことにした。

こと急ぎの仕事は団長の得意分野だったので即座に依頼した。ヘステイアも訳が分からない状態なのに快く眷族を送り出した。

（厚着していたのは体温を逃がさないため……。であれば服を脱がしたのは悪手？）
 保温効果の高い戦闘衣バトル・クロスと外套と手袋を調べると温かみがあることが分かった。これは戦闘用ではなく彼女にとっての命綱だった。

一体いつからこんな状態だったのか。

冒険者を引退したと言っていた理由がこれかもしれない、と見守っていた団員達が眠れるアイスを気遣った。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

それから「ヘスティア・ファミリア」は大忙しの様相に包まれた。

何処から連れてきたのか、治療師ヒーラーが多数。「フレイヤ・ファミリア」のヘイズ・ベルベツトの姿もあつた。

アミッド・テアサナーレが先頭に立ち、アイス・ヴァレンピナの治療に邁進した。

心配でやってきたミアハも患者の様子を調べる。

「本人が無理なら装備品を用意したらいいんじゃないの？」

「それだと一生脱げなくなるではないか。……実際、そんな生活が続けてきたのだろう」

「マイナススキルに対抗する事はとても難しい。辛いからものを食べさせればいいのか簡単だったらいいのに」

頭部と心臓の温度だけは下げないように気を付けて体温低下を防ぐ手立てを皆で考

えた。

ベルも何かできないか両手を固く握り締めて経過を見守った。

一つの案として炎の付与魔法をどうにかできないか、というものがあつた。自身に付与させる事は出来ても他社に出来るのは耐性を付ける事くらい。

魔道具を使うにしても使用者の魔力がどうしても必要だったりする。

あと、ヘイズの魔法で病気は治せない。——アミツドの魔法ならば。

「あのみ」

と、話し合いが続けられているところに命が手を上げた。

治療師ヒーラーの一人がどうぞ、と告げた。

「まいなすスキルというのは毒なのでしょうか？」

「個人能力の一つであつて毒とは見做みなされておりません。あと『呪詛カース』という側面もあり

ますが、実際には違うみたいです」

「……アルフィアやザルドはマイナススキルに対して特効薬を使っていたな」

リヴェリアが片目を瞑つぶりながら過去を思い出す。

毒ではないかもしれないが治療薬による効果は実際に効果があることが認められている。

マイナススキルは仮に解呪出来たとしてもスキルそのものを消し去るわけではない。

よって再発する可能性がある。

『スキル』を消す『スキル』……」

「そんなものがあれば彼らは苦しまずに済んだだろうし……」

リヴェリアは最愛の友であるアイナの姿を思い出す。彼女もまたその手の不遇に見舞われていた。

結局、命が言いたかつた事は毒のような物であればベルの持つ『白幻』でどうにかなるのではないか、というものだった。

強力な解毒効果があるのは実証されている。だが、スキルそのものに効果があるわけではない筈だ、と。

「いつそ鍛冶師スミスになってしまえばいいんじゃないか？ 常に熱い工房に居られるし」と、誰かの愚痴が聞こえた。

それが一番無難かもしれないが、日常生活の全てが炉の側にならなければならぬ。

アイスは常にマイナススキルに身体を蝕まれている。この表現で言えば『呪詛カース』と言われても仕方がない。

「さすがに全ての生活に炉が必要なわけじゃないだろう。半日くらい外に出てもいいくらいなら鍛冶師スミスを擁する『ファミリア』に改宗コンバージョンすればいい。とつくに冒険者を引退してらんだから」

よ、と……」

「あ、あの〜」

アイスが治療師達ヒールラーに感謝を異を唱えている所で命が手を上げた事で発言が中断してしまつた。

気まずい空気にベルは身体を小さくして団長として謝罪した。

発言を止められたアイスは微笑みを崩さず、命に発現の許可を与えた。

「も、申し訳ございませぬ。……では、端的に……。アイス殿の主神様が天に送還されたら「ステイタス」はどうなるのですか？ まいなすスキルとやらは消えてしまうのですか？」

思つたことを正直に告げると周りに居た冒険者達から物凄い不敬な発言だと罵られた。

これについてミアハは魂に紐づけされた『スキル』などは基本的に消えない、と説明した。

消えるのは羊皮紙に写し取る文字列だけ。それと確かに『レベル』や『アビリティ』は『初期化』される。そうなると弱体化するので間違いでない。

「神が与えた「ステイタス」というのは本人の隠れた才能の前借だ。主神が送還されたからとて完全に消滅するものでもない」

「ありがとうございます」

「一応言っておきますが、私の為にセドナ様を送還させるというのは不敬です。「ファミリア」には他の団員達が今も所属しているのに、彼らを路頭に迷わせることになります」
「……本当に申し訳ございませんぬ」

極東仕込みの『土下座』にて命は今一度深く謝罪した。

団員が一人だけだったら——悪い案でもないけれど。

命の無遠慮な発言の少し後、遠い北方の地にて女神セドナが唐突に己の危機を察知し悪寒に襲われたとか——

「凍傷で手足を失ってから自暴自棄になった事もありますが……。もうしばらく頑張ってみようと思います。……なので今一度、皆さんのお力添えをお願い致します」

集まってくれた全ての者達にアイスは深い感謝の意を表した。

根本的な解決はしていないが穩便に事が済んでヘスティアはとても喜んだ。それと同胞の回復に春姫も我がことのように——

元々寝込んだのはアイズに蹴り飛ばされたから。体温の低下を除けば動き回る事に何の問題も無い。ゆえにその日の内に身支度を整え、宿屋に預けていた荷物を回収してから「ヘファミリス・ファミリア」に向かった。

怒涛の勢いで去っていったアイスにヘスティアは案外元氣じゃないか、と少しだけ憤

慨した。てつきり死にかけかと思つたのに、と。

死にかけていたのは間違ではないのだが、いやに元気に動いていたので疑つてしまった。神の目をもつてしても二尾の蒼い狐人ルドルであるアイスの生命力は分からなかつたようだ。

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

後日、アイス・ヴァレンピナは「ヘファイストス・ファミリア」にて研修を済ませた後、「ゴブニュ・ファミリア」で本格的な仕事を始める事になった。

コンバージョン
改 宗は今しばらく保留にするとか。

側に居るだけで炉の温度を下げそうなマイナススキルについて、意外とそれほど影響がない事が判明。

戦闘でもない限り近くに寄ると確かに肌寒く感じるが接近する状況がそもそも鍛冶場には無い、とのこと。

「アイス何某君はどうやら元気にいるようだよ」

「それは良かった」

「何某と付けるよりアイス君でいいのでは？」

「じゃあそう呼ぶことにするよ」

「探索系を諦める事になつたけれど、いいのかな？」

冒険者そのものを諦めた為に引退を表明したが、今度は鍛冶師スミスの手伝いに転向したと思えば悪い結果とは言えない。

ヴェルフ・クロツゾのように鍛冶と冒険者を両立している者も居る。

人様の事ばかり考えている余裕は「ヘスティア・ファミリア」には無く、ギルドからの新たな「緊急依頼ミッション」が来たらダンジョンに強制的に挑まなくてはならなくなる。それまで英気を養うもよし、資金稼ぎに邁進するもよし。

己を高める修練に励むもよし。

時は巡り、ベル・クラネルとアイズ・ヴァレンシユタインが何度目かの相対に望む。

更なる高みへリユー・リオンも再始動した。アルフィアとメーテリアとザルドは次代の英雄の誕生を心待ちにしながら若者の動向を注視する。——黒竜ニユクスは完全に忘れられていた。

「……君は危険だ。……私の目的の障害になる」

「僕はアイズさんを超えて行きます。それが下界の安寧だというのならばっ！」

デスブレイトヘスティア

細 剣と神のナイフがぶつかり火花を散らす。

実力は拮抗していた。少年の追い上げに対して少女は常に後れを取ってきた。そのツケが今になって響いている。

彼を野放しにすれば自分の死が現実になってしまう。その恐れがある限りアイズは

前に進めない。

「……ベルは『黒竜』を倒す英雄になりたいの？」

「皆がそれを望むのであれば、僕は黒竜を屠ってみせます」

「……でも、黒竜は九体だよ。どれを倒す気？」

「第一目標は『黒竜』です」

「……そう。なら『黒竜』と『黒竜』と『黒竜』は私が貰う」

「……その後で良ければ『黒竜』と『黒竜』……」

「……ほら、私より多く倒そうとしている」

「地上の人々が困っているので我儘はやめてください」

互いに研鑽を積み、人類の反抗作戦まで残り時間も少ない。

終末を告げる九大黒竜の残りは『黒竜』『黒竜』——

たった一体で数多の国を滅ぼす災厄の化身。時代の変遷で九体まで確認されているが現在は『竜の谷』に封じられている。その呪縛も時期に解かれる。

——ここまでが『迷宮都市』で公開されている情報だ。

仮に九体ではなかった場合——十体目以降の存在も想定しなければならない。大手と言われる「ファミリア」は当然、最悪を想定している。

まだ見ぬ十体目の黒竜に与えられし名は『ヴォーティガン』——またの名を『奈落の

黒竜王』という。ただし、实在すれば、の話した。ここでも黒竜ニユクスの存在は出てこない。――ただ、象面の男神ガネーシャだけは覚えてる。

「……【祝福の禍根、生誕の呪い。半身喰らいし我が身の原罪】」

二人が下らない言い争いをしてる事に頭に来た灰髪アルファイ・ストラディの鬼教官が容赦のない魔法の詠唱を口ずさむ。

人類の危機に対して気が抜けているぞ、とこめかみに青筋を立てた。

「わあ！ ゴゴ、ごめんさい、アルファイお母さん」

「……邪魔しないで。これは私とベルの問題……」

「黒竜はお前たち二人だけで倒せるような相手ではない。真つ先に倒れられても困る。

……お前達は人類の希望である自覚が少々足りないようだ」

流れる様な身体さばきで二人の武器を取り上げる。

レベル的には拮抗していても戦闘経験の差で未だアルファイに軍配が上がる。

焦りは禁物。それが例えベル達の敗北が人類の終焉を意味していても。

ダンジョン探索と並行し、過酷な特訓を続けてきたが勝ち筋が未だに見えない。目標たる黒竜の強さは神の領域に匹敵する、というのは実際に相対したザルドとアルファイの弁だ。

「黒竜戦には多くの冒険者が参加します。……そして、多くの犠牲者が出るでしょう。

心を折られたら全てが終わりです」

緑色の外套を纏う金髪の長髪を靡かせるエルフのリュウ・リオンが言った。

絶望的な戦いになる事は必定。一度始まればもう後戻りは出来ない。そして、覚悟があるのが無かろうが人類の命運は次の一戦で決まってしまう。

理不尽と言わなけれ。其は人類の悲願、三大冒険者^{クエスト}依頼の最後を飾る最初で最後の大仕事。

（ダンジョンに出会いを求めて黒竜退治……。ちよつと僕はここに立つために冒険者になつたんだろうか。……なんか違う気がする……）

間違っているだろうか、と尋ねたら『はい』と全員に答えられそうで怖い。

思えば素敵^{奇麗}な女性と出会うために冒険者になつたのか、それとも子供らしく英雄に憧れたのか。

自分^{ペル英雄}がその立場になるなんて一昔前では考えられなかった。

「フフーン。いい感じに温まってきたようね」

新たな人影が不敵に微笑む。

厚顔不遜がよく似合う炎のような赤い髪を靡かせ、背筋を伸ばして胸を張り、自信満々に言うのは自力で下界に舞い戻りし、炎の愛娘^{まなむすめ}。神々すらも驚嘆せしめた異端なる問題児^{エニユオ・ゼノビア}。

そんな彼女に付き従うのは——かつて「アストレア・ファミリア」を壊滅に追いやった迷宮ダンジョンの使徒『破壊者』の成れの果てとも呼ばいいのか——敵を斬る為に生まれてきた刃ドレットノートの化身。

「生まれ変わっても団長のバカは治らなかつた、と後世の歴史家にしつかり書いてもらいましよう」

「……それはそれでとても光栄ね」

「……褒めてないと思いますが、それで良いのですか？ 世間に馬鹿だと認識されるのですよ」

「それこそ大歓迎だわ。私の偉業がどのような形であれ伝われば勝ちよ勝ち。かの大英雄『アルゴノウト』だつて実際は変態糞野郎だったかもしれないじゃない」

（……その変態糞野郎と同列に並べられてもいいのですか？ いいのか、英雄と呼ばれるなら……）

神々の介入なしに復活を果たした彼女の第一声は『よし、勝った』で、白化して滅びた事については『私の魔アガリス・アルヴエンス法にモンスターアガリス・アルヴエンスの身体が耐えられなかつただけじゃない？』とあっさりした解答を述べた。

仲間の死を気にしていたリユーに対しては『お前様はいくつになつても泣き虫でおすなあ』と笑われてしまった。ただ『馬鹿ばあかめ』とは言わなかつた。

「……正義は継承された。だから私は道化で構わない」

「ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？」

「逆にどうやって出会いを求めないでダンジョンを探索するの？ 大勢の冒険者が潜っているのに」

妖精^{リユイ}の唐突な質問に対する問題児の答え。

ダンジョンに居る冒険者を見てベルは憧れを強くした。それは決して間違いではない——そもそも、それこそが間違いの元、とも言えなくもないが。

「出会いを求めない冒険者は悪たくみする悪党くらいでは？」

「そうね。隠れてこそこそする害虫みたいなやつらは大体そうね」

女性陣の言葉にベルは脂汗を流しつつ言葉を無くしていた。

容赦のない解答に希望や憧れが今になって気恥ずかしいものだと感じた。

「モンスターを殺しまくって正義を語るおかしき冒険者が居るくらいだもの。ヘーキヘーキ。しっかり前を向いて歩けるだけマシよ」

赤い髪の女性がベルに顔を向ける。すると側にいたアイスが口を尖らせる。

お喋りな者達にアルフィアは眉間に皺を寄せるが口を挟まなかった。これから相対する強大な敵に対し、常に気を張るよりマシではあるが——次代の英雄たちが若者ばかりというのは彼女にとって心痛い。

しかし、この光景は未来の一つ——あつたかもしれない歴史。

人類の宿願に挑む事になってしまった少年少女達——いや、これこそが【静寂】の見
たかつた夢かもしれない。

これは泡沫うたかたより生まれ出イフェルでし者が夢見た——【偽英雄エレティコスの間奏劇】——

『おしき』